

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

第二分冊

第85集

二〇〇四・三

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊

C区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊

C区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は高知空港再拡張整備事業に伴う高知県南国市田村に所在する田村遺跡群の発掘調査報告書である。本報告書は「田村遺跡群II」の第2分冊である。調査区A区からQ区の中のC区の調査成果報告である。
2. 発掘調査及び整理作業は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局と委託契約を結び、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業を実施したものである。発掘調査は平成8年7月から平成13年12月迄行ない、引き続き平成16年3月まで整理作業を行なった。
3. 本書の編集は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行ない、執筆は小野由香、小島恵子、坂本憲昭、出原恵三、筒井三菜が行ない、本文中に執筆者名を記してある。編集実務は前田光雄が行なった。
4. 調査体制等については第1分冊に記した。また多くの方々、諸機関から協力、ご教授を賜った。ここでは逐一、芳名をあげないが感謝したい。
5. 出土遺物等の資料は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが保管している。また遺物の注記名は西暦の下二桁を頭に冠し、遺跡名略記号NTをつけている。調査は1996年から2001年迄実施しているところから、注記名は「96-9NT」、及び「97-1NT」から「02-1NT」となっている。
6. 本書に添付したCDには、本書のPDF及び遺物観察表等は膨大な量のためデジタルデータを収録した。

本文目次

C区の調査

C1 区の調査

1. C1 区の概要	9
2. C1 区弥生時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	17
(3) 溝跡及び自然流路	73
(4) ピット	80
3. C1 区古代以降の遺構と遺物	82
(1) 土坑	82
(2) 溝跡	84
(3) ピット	85

C2 区の調査

1. C2 区の概要	91
2. C2 区弥生時代の遺構と遺物	92
(1) 竪穴住居跡	92
(2) 土坑・溝状土坑	98

C2 北区の調査

1. C2 北区の概要	119
-------------------	-----

C3 区の調査

1. C3 区の概要	127
2. C3 区弥生時代前期の遺構と遺物	129
(1) 土坑	130
(2) 溝跡	150
3. C3 区弥生時代中期末~後期の遺構と遺物	152
(1) 竪穴住居跡	155
(2) 土坑	162
4. C3 区上面検出の遺構と遺物	163
(1) 溝跡	164
(2) 性格不明遺構	168

C4 区の調査

1. C4 区の概要	177
2. C4 区弥生時代の遺構と遺物	178
(1) 竪穴住居跡	178
(2) 土坑	180
(3) 溝跡	262
3. C4 区中世の遺構と遺物	266
(1) 井戸跡	266
4. C4 区表面採取遺物	269
(1) 古銭	269

C4 北区の調査

1. C4 北区の概要	275
2. C4 北区弥生時代の遺構と遺物	276
(1) 土坑	276
3. C4 北区中世の遺構と遺物	327
(1) 溝跡	327
(2) ピット出土遺物	328
4. C4 北区包含層遺物	328
(1) 古代	328

C5 区の調査

1. C5 区の概要	333
2. C5 区弥生時代の遺構と遺物	334
(1) 掘立柱建物跡	334
(2) 土坑	340
(3) 溝跡	350
(4) ピット及び表採遺物	350

挿図目次

C-1 図 C区全体図

C1 区

C1-1 図 C1 区遺構全体配置図

C1-2 図 C1ST101

C1-3 図 C1ST102・103

C1-4 図 C1ST102

C1-5 図 C1ST103

C1-6 図 C1SK1002(1)

C1-7 図 C1SK1002(2)

C1-8 図 C1SK1004

C1-9 図 C1SK1005

C1-10 図 C1SK1006

C1-11 図 C1SK1007

C1-12 図 C1SK1008(1)

C1-13 図 C1SK1008(2)

C1-14 図 C1SK1009～1012・1014

C1-15 図 C1SK1015・1019～1021

C1-16 図 C1SK1022

C1-17 図 C1SK1026

C1-18 図 C1SK1034

C1-19 図 C1SK1036(1)

C1-20 図 C1SK1036(2)

C1-21 図 C1SK1037

C1-22 図 C1SK1038

C1-23 図 C1SK1039・1040

C1-24 図 C1SK1041・1042

C1-25 図 C1SK1044～1046

C1-26 図 C1SK1047・1058

C1-27 図 C1SK1061

C1-28 図 C1SK1064

C1-29 図 C1SK1067

C1-30 図 C1SK1105(1)

C1-31 図 C1SK1105(2)

C1-32 図 C1SK1107・1108・1153

C1-33 図 C1SK1114(1)

C1-34 図 C1SK1114(2)

C1-35 図 C1SK1114(3)

C1-36 図 C1SK1115

C1-37 図 C1SK1117

C1-38 図 C1SK1142

C1-39 図 C1SK1144

C1-40 図 C1SK1156

C1-41 図 C1SK1167～1169

C1-42 図 C1SK1176

C1-43 図 C1 区土坑出土遺物(1)

C1-44 図 C1 区土坑出土遺物(2)

C1-45 図 C1 区土坑出土遺物(3)

C1-46 図 C1SD101(1)・102(1)

C1-47 図 C1SD101(2)

C1-48 図 C1SD102(2)

C1-49 図 C1SD105

C1-50 図 C1SD106

C1-51 図 C1SD108

C1-52 図 C1SD109(1)

C1-53 図 C1SD109(2)・110

C1-54 図 C1SR101

C1-55 図 C1 区ピット出土遺物

C1-56 図 C1SK1152・1184・P1198

C1-57 図 C1SD103

C1-58 図 C1SD107

C2 区

C2-1 図 C2 区遺構全体配置図

C2-2 図 C2ST201・204(1)

C2-3 図 C2ST201・204(2)

C2-4 図 C2ST202

C2-5 図 C2ST203

C2-6 図 C2SK201

C2-7 図 C2SK202・SD201

C2-8 図 C2SK204

C2-9 図 C2SK206

C2-10 図 C2SK208

C2-11 図 C2SK209

C2-12 図 C2SK212

C2-13 図 C2SK213

C2-14 図 C2SK216

C2-15 図 C2SK220

C2-16 図 C2SK229

C2-17 図 C2SD202

C2-18 図 C2SD203

C2-19 図 C2SD204・SK228(1)

C2-20 図 C2SD204・SK228(2)

C2-21 図 C2SD205・206

C2-22 図 C2SD207

C2 北区	C4-7 図 C4SK4008(3)
C2 北-1 図 C2 北区遺構全体配置図	C4-8 図 C4SK4008(4)
C2 北-2 図 C2 北SK2	C4-9 図 C4SK4021・4022
	C4-10 図 C4SK4024・4025
C3 区	C4-11 図 C4SK4024(1)
C3-1 図 C3 区年度別調査位置図	C4-12 図 C4SK4024(2)
C3-2 図 C3 区弥生時代前期遺構全体配置図	C4-13 図 C4SK4024(3)
C3-3 図 C3-97SK328	C4-14 図 C4SK4024(4)
C3-4 図 C3-97SK339(1)	C4-15 図 C4SK4025(1)
C3-5 図 C3-97SK339(2)	C4-16 図 C4SK4025(2)
C3-6 図 C3-97SK344(1)	C4-17 図 C4SK4025(3)
C3-7 図 C3-97SK344(2)	C4-18 図 C4SK4025(4)
C3-8 図 C3-99SK353・355・356・359・364	C4-19 図 C4SK4025(5)
C3-9 図 C3-99SK356	C4-20 図 C4SK4025(6)
C3-10 図 C3-01A-SK302	C4-21 図 C4SK4026(1)
C3-11 図 C3-01C-SK302	C4-22 図 C4SK4026(2)
C3-12 図 C3-01C-SK303	C4-23 図 C4SK4029(1)
C3-13 図 C3-01C-SK304	C4-24 図 C4SK4029(2)
C3-14 図 C3-01B-SK306	C4-25 図 C4SK4029(3)
C3-15 図 C3-01C-SK312	C4-26 図 C4SK4032・4034
C3-16 図 C3-01D-SK328	C4-27 図 C4SK4034(1)
C3-17 図 C3-01C-SK301・A-SK329	C4-28 図 C4SK4034(2)
C3-18 図 C3-01A・D地点SK出土遺物	C4-29 図 C4SK4034(3)
C3-19 図 C3-01B・C地点SK出土遺物、C3-99SK3014	C4-30 図 C4SK4034(4)
C3-20 図 C3-97SD308	C4-31 図 C4SK4035・4036
C3-21 図 C3-97SD310	C4-32 図 C4SK4040(1)
C3-22 図 C3 区弥生時代中後期遺構全体配置図	C4-33 図 C4SK4040(2)
C3-23 図 C3-97ST301	C4-34 図 C4SK4043
C3-24 図 C3-97ST301・303	C4-35 図 C4SK4047
C3-25 図 C3-97ST302	C4-36 図 C4SK4048(1)
C3-26 図 C3-99ST3001	C4-37 図 C4SK4048(2)
C3-27 図 C3-99ST3002	C4-38 図 C4SK4048(3)
C3-28 図 C3 区中近世遺構全体配置図	C4-39 図 C4SK4048(4)
C3-29 図 C3-01-SD301~303	C4-40 図 C4SK4048(5)
C3-30 図 C3SX301・302	C4-41 図 C4SK4048(6)
C3-31 図 C3-97P3225 出土遺物	C4-42 図 C4SK4048(7)
	C4-43 図 C4SK4050
C4 区	C4-44 図 C4SK4051(1)
C4-1 図 C4 区遺構全体配置図	C4-45 図 C4SK4051(2)
C4-2 図 C4ST401・402	C4-46 図 C4SK4054(1)
C4-3 図 C4SK4003・4004	C4-47 図 C4SK4054(2)
C4-4 図 C4SK4005	C4-48 図 C4SK4061(1)
C4-5 図 C4SK4008(1)	C4-49 図 C4SK4061(2)
C4-6 図 C4SK4008(2)	C4-50 図 C4SK4061(3)

- C4-51 図 C4SK4061(4)
 C4-52 図 C4SK4064・4071・4073
 C4-53 図 C4SK4077
 C4-54 図 C4SK4082
 C4-55 図 C4SK4083
 C4-56 図 C4SK4084
 C4-57 図 C4SK4085
 C4-58 図 C4SK4087・4088
 C4-59 図 C4SK4087
 C4-60 図 C4SK4088
 C4-61 図 C4SK4089(1)
 C4-62 図 C4SK4089(2)
 C4-63 図 C4SK4089(3)
 C4-64 図 C4SK4097
 C4-65 図 C4SK4100
 C4-66 図 C4SK4102
 C4-67 図 C4SK4106
 C4-68 図 C4SK4107・SK4113
 C4-69 図 C4SK4111・SK4112
 C4-70 図 C4SK4117・SK4132
 C4-71 図 C4SD101
 C4-72 図 C4区その他の遺構出土遺物(1)
 C4-73 図 C4区その他の遺構出土遺物(2)
 C4-74 図 C4SE401
 C4-75 図 C4SE401・表採遺物
- C4 北区
 C4 北-1 図 C4 北区遺構全体配置図
 C4 北-2 図 C4 北SK4135・4136
 C4 北-3 図 C4 北SK4139・4141
 C4 北-4 図 C4 北SK4143
 C4 北-5 図 C4 北SK4147(1)
 C4 北-6 図 C4 北SK4147(2)
 C4 北-7 図 C4 北SK4149(1)
 C4 北-8 図 C4 北SK4149(2)
 C4 北-9 図 C4 北SK4149(3)
 C4 北-10 図 C4 北SK4149(4)
 C4 北-11 図 C4 北SK4149(5)
 C4 北-12 図 C4 北SK4152・4156
 C4 北-13 図 C4 北SK4161(1)
 C4 北-14 図 C4 北SK4161(2)
 C4 北-15 図 C4 北SK4161(3)
 C4 北-16 図 C4 北SK4163
 C4 北-17 図 C4 北SK4170(1)
 C4 北-18 図 C4 北SK4170(2)
 C4 北-19 図 C4 北SK4175
 C4 北-20 図 C4 北SK4179(1)
 C4 北-21 図 C4 北SK4179(2)
 C4 北-22 図 C4 北SK4179(3)
 C4 北-23 図 C4 北SK4179(4)
 C4 北-24 図 C4 北SK4180(1)
 C4 北-25 図 C4 北SK4180(2)
 C4 北-26 図 C4 北SK4180(3)
 C4 北-27 図 C4 北SK4188(1)
 C4 北-28 図 C4 北SK4188(2)
 C4 北-29 図 C4 北SK4192(1)
 C4 北-30 図 C4 北SK4192(2)・4193
 C4 北-31 図 C4 北SK4195(1)
 C4 北-32 図 C4 北SK4195(2)
 C4 北-33 図 C4 北SK4199(1)
 C4 北-34 図 C4 北SK4199(2)
 C4 北-35 図 C4 北SK4199(3)
 C4 北-36 図 C4 北SK4199(4)
 C4 北-37 図 C4 北SK4200(1)
 C4 北-38 図 C4 北SK4200(2)
 C4 北-39 図 C4 北SK4200(3)
 C4 北-40 図 C4 北SK4201(1)
 C4 北-41 図 C4 北SK4201(2)
 C4 北-42 図 C4 北SK4201(3)・4204
 C4 北-43 図 C4 北SK4207(1)
 C4 北-44 図 C4 北SK4207(2)
 C4 北-45 図 C4 北区その他の遺構・包含層出土遺物
 C4 北-46 図 C4 北SD401
 C4 北-47 図 C4 北P4328・包含層出土遺物
- C5 区
 C5-1 図 C5 区遺構全体配置図
 C5-2 図 C5SB501~506
 C5-3 図 C5SB508~510
 C5-4 図 C5SK509・512~514・517
 C5-5 図 C5SK510・511
 C5-6 図 C5SK523
 C5-7 図 C5SK524
 C5-8 図 C5SK526・527・529・530
 C5-9 図 C5P5141・表採遺物

表目次

C1 区

- C1-1 表 C1 区竪穴住居跡一覧
- C1-2 表 C1 区弥生時代土坑一覧
- C1-3 表 C1 区弥生時代ピット一覧
- C1-4 表 C1 区近世土坑一覧
- C1-5 表 C1 区近世ピット一覧
- C1-6 表 C1 区弥生土器観察表(CD)
- C1-7 表 C1 区土製品観察表(CD)
- C1-8 表 C1 区石器観察表(CD)
- C1-9 表 C1 区ガラス小玉観察表(CD)
- C1-10 表 C1 区金属器観察表(CD)
- C1-11 表 C1 区中世以降遺物観察表(CD)

C2 区

- C2-1 表 C2 区竪穴住居跡一覧表
- C2-2 表 C2 区土坑・溝状土坑一覧表
- C2-3 表 C2 区弥生土器観察表(CD)
- C2-4 表 C2 区石器観察表(CD)
- C2-5 表 C2 区土製品観察表(CD)

C2 北区

- C2 北-1 表 C2 北区土坑一覧表
- C2 北-2 表 C2 北区ピット一覧表
- C2 北-3 表 C2 北区弥生土器観察表(CD)

C3 区

- C3-1 表 C3 区前期土坑一覧
- C3-2 表 C3 区竪穴住居跡一覧
- C3-3 表 C3 区弥生時代中期土坑一覧
- C3-4 表 C3 区中世土坑一覧
- C3-5 表 C3 区中世ピット一覧
- C3-6 表 C3 区弥生前期土器観察表(CD)
- C3-7 表 C3 区前期土製品観察表(CD)
- C3-8 表 C3 区弥生時代前期石器観察表(CD)
- C3-9 表 C3 区弥生中期土器観察表(CD)
- C3-10 表 C3 区弥生時代中期石器観察表(CD)
- C3-11 表 C3 区中世土器観察表(CD)
- C3-12 表 C3 区中世土製品観察表(CD)
- C3-13 表 C3 区中世木器観察表(CD)

C4 区

- C4-1 表 C4 区土坑一覧表
- C4-2 表 C4 区弥生土器観察表(CD)
- C4-3 表 C4 区石器観察表(CD)
- C4-4 表 C4 区土製品観察表(CD)
- C4-5 表 C4 区中世遺物観察表(CD)

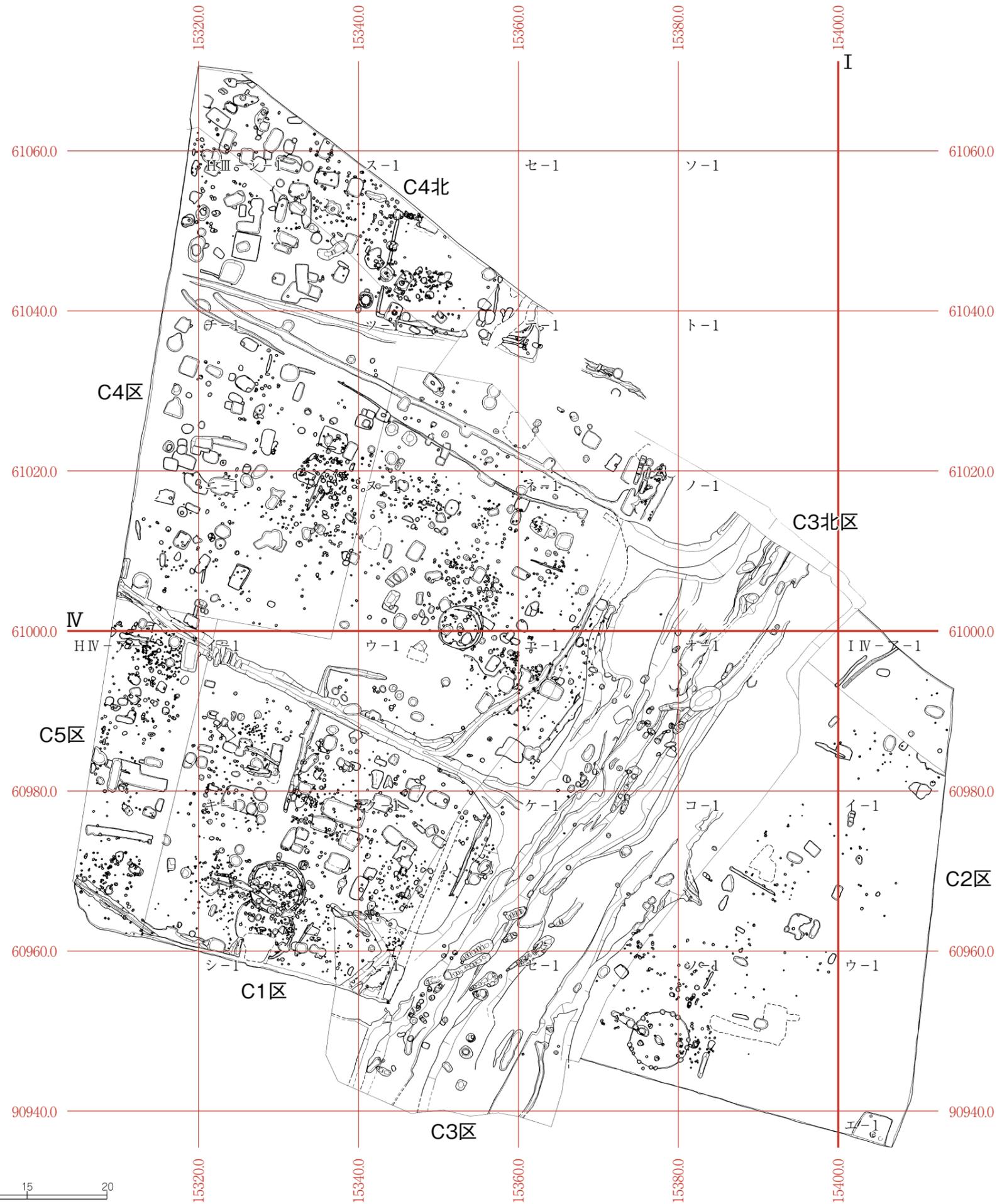
C4 北区

- C4 北-1 表 C4 北区土坑一覧表
- C4 北-2 表 C4 北区弥生土器観察表(CD)
- C4 北-3 表 C4 北区弥生石器観察表(CD)
- C4 北-4 表 C4 北区土製品観察表(CD)
- C4 北-5 表 C4 北区中世遺物観察表(CD)

C5 区

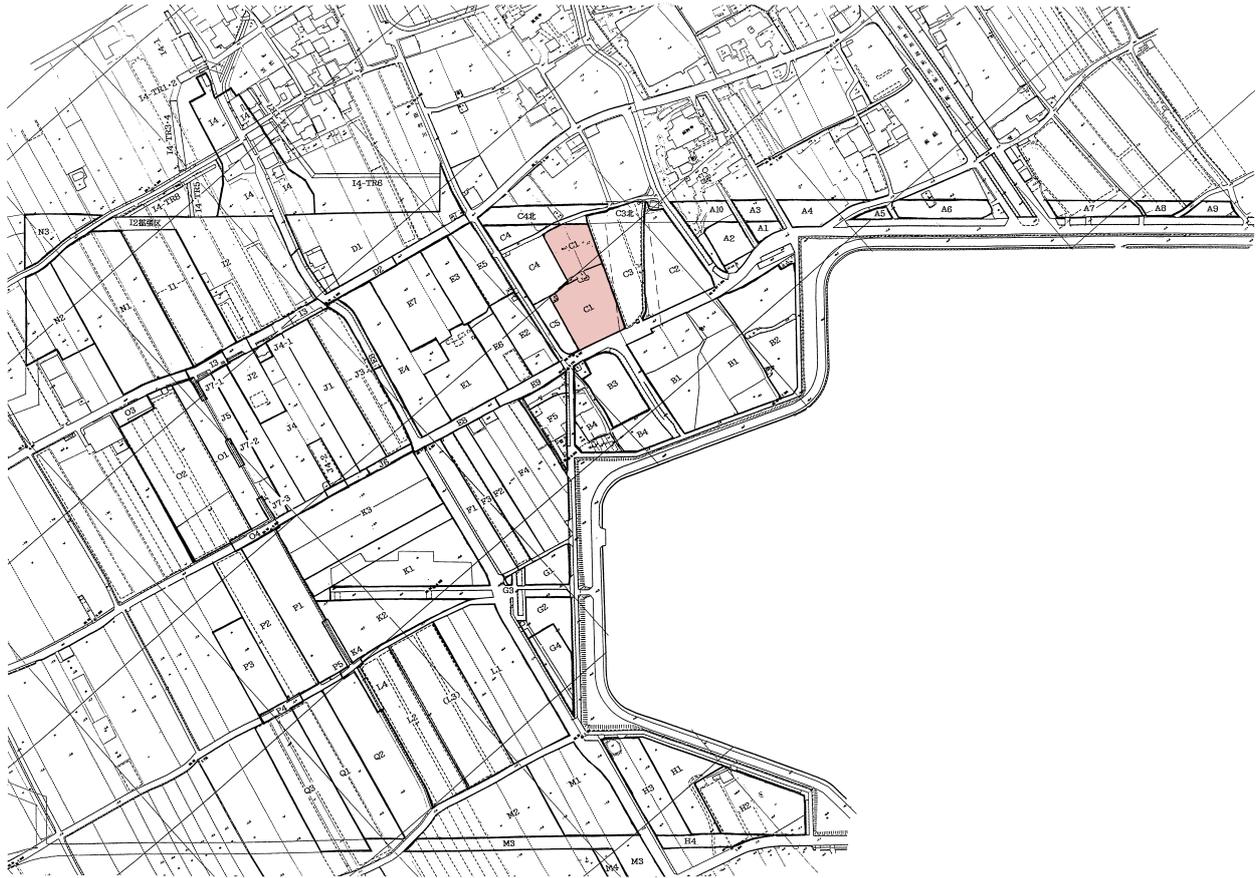
- C5-1 表 C5 区掘立柱建物跡一覧表
- C5-2 表 C5 区土坑一覧表
- C5-3 表 C5 区弥生土器観察表(CD)
- C5-4 表 C5 区石器観察表(CD)
- C5-5 表 C5 区土製品観察表(CD)

C区の調査



C-1 図 C区全体図

C1 区の調査





C1-1 図 遺構全体配置図

1. C1 区の概要

概要

全体調査区の中では東側部分に位置し、以前岡本健児氏によって西見当遺跡として調査が行われ、弥生時代前期の環濠と考えられる溝跡の一部を検出していた部分である。

今次調査でも、弥生時代前期の環濠および集落を検出することが予想され、調査の結果、弥生時代前期の環濠の延長を検出するとともに、同時期の環濠に並行する小溝 2 条と、土坑群を検出した。また、弥生時代中期末~後期の住居跡、土坑も検出している。

当調査区で検出した環濠は内濠と考えられ、当該調査区は環濠内側の集落部分であるが、検出できたのは土坑のみで、住居跡は確認できなかった。土坑は内濠の北側(内側)で多く検出し、内濠と外濠の間とみられる部分では少なくなっている。

環濠に並行した状態で検出した小溝 2 条は、環濠集落とは密接な関係があるものと考えられる。いずれの溝跡も土坑との切り合いがみられ、前期環濠集落の成立を解明する重要な手がかりとなると考えられる。

中期末~後期の遺構は、調査区の南側で切り合った状態で検出した 2 軒の住居跡と約 40m離れた北側で検出した 1 軒を検出しているが、他調査区のように密集した状態ではなく、掘立柱建物跡も確認できなかった。

調査担当者 坂本憲昭、山田和吉

執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成 9 年 6 月 10 日~平成 9 年 9 月 20 日

調査面積 2279m²

時代 弥生時代前期、中期~後期、近現代

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡 3 軒、土坑 196 基、溝 11 条、ピット 526 個

2. C1 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

C1 区では竪穴住居跡は3軒検出している。調査区南端部に2軒と、調査区中央部に1軒である。他の調査区と比較すると住居跡の密集度は少なく、散漫な状態である。3軒とも拡張、建て替えを行っており、同一地点で住居跡を一定期間営む状況は他の調査区の状況と同じ様相である。

検出した住居跡はいずれも、直径約5.5m~約7.5mの円形であった。残存状況は不良で埋土はほとんど残存していない状況であった。床面からは中央ピット、壁溝を検出し、ピットは多数検出している。

検出した住居跡の時期は弥生時代後期前葉~中葉の時期と考えられる。ST102とST103は切り合いがみられ、ST103が先行しているとみられる。

C1区は弥生時代前期の環濠の内側、集落部分にあたとみられるが、環濠集落に伴う住居跡は検出できなかった。

円形住居跡が確認された後期前葉を中心とした時期の遺構では、方形の土坑が確認されており、住居跡の可能性も考えられるが、柱穴を検出しておらず土坑として判断した。

C1-1 表 C1 区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
C1ST101	5.4×5.3 5.6×5.4	0.15 0.15	22.0 23.7	円形	N-32°-W	弥生V期	
C1ST102	6.7×6.7 7.3×7.3	0.1 0.15	35.2 41.8	円形	N-55°-W	弥生V期	
C1ST103	7.5×5.2	0.15	44.1	円形	N-76°-W	弥生V期	

C1ST101 (C1-2 図)

時期：弥生V~ 形状：円形 主軸方向：N-32°-W

規模：5.4m×5.3m 深さ：0.15m 面積：22.0m²

：5.6m×5.4m 深さ：0.15m 面積：23.7m²

埋土：黄灰褐色土

ピット：数30 主柱穴数：9 主柱穴：P3、P7、P10、P11、P17、P18、P20、P28、P29

床面：2面 貼床：1 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 100cm×85cm 深さ 33cm 埋土 明黄褐色粘砂土

壁溝：数1条 幅 40cm 深さ 20cm

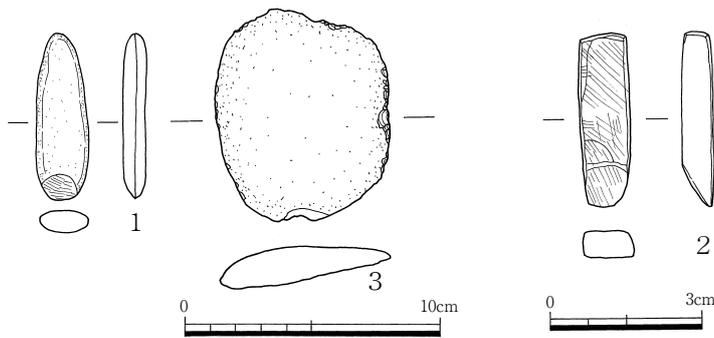
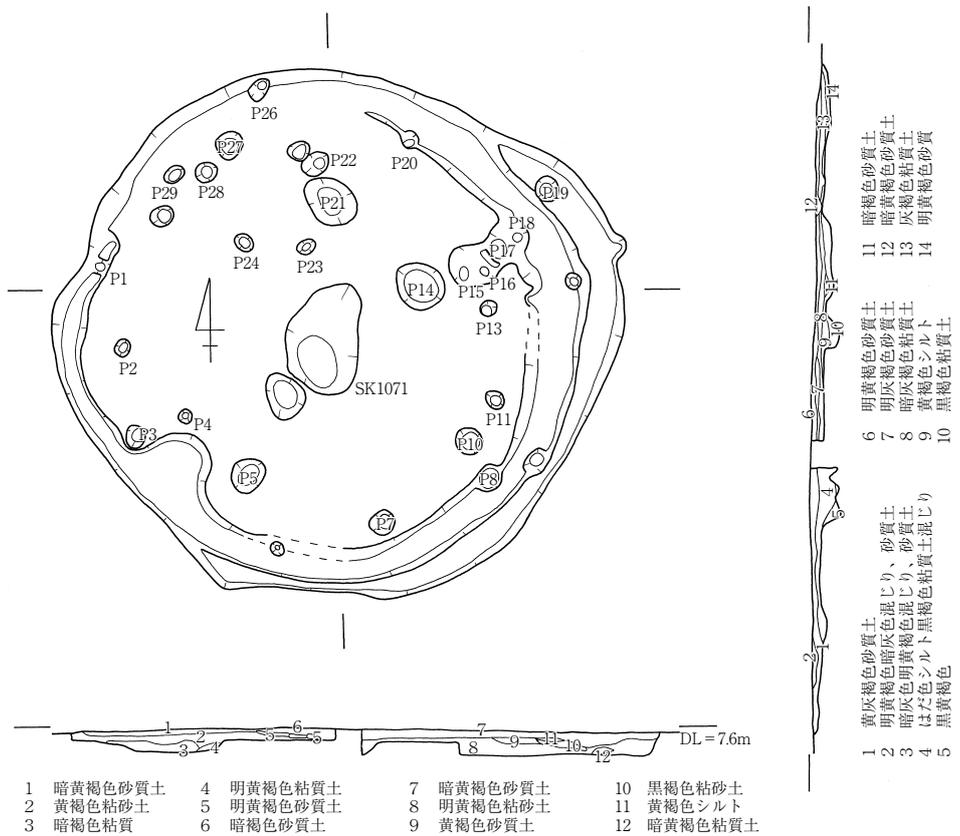
出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、石斧、刃器

所見：調査区中央部、SD105より北側で検出。SK1063と切り合い、SK1070、SK1193を床面から検出している。遺構の残存状況は不良で、南側は近世以降と考えられる整地によって切られていた。

埋土は上層が灰褐色系の土であったが、下層は黄褐色土に灰褐色系の土がブロック状に混じった状態で、貼床になっている可能性が考えられた。上層を掘削した段階で、中央ピットと考えられる

SK1071 とピットを検出したが、壁溝は検出できなかった。

中央ピットは近世以降と考えられる灰色土のピットに一部切られた状態で検出した。埋土は黄褐色土に黒褐色土が混じる土が主体で焼土、炭化物が混じっており、炉として使用されたと考えられる。上面検出ピットはP3、5、8、10、15、16、19、21、24、30の9個を検出しており、いずれも円形で埋土は褐色系と黒褐色系の土であった。床面となっていた黄褐色土に灰褐色土が混じった土を掘削すると、壁溝、ピットを検出することができ、貼床面になっていたことを確認した。検出した壁溝は幅約40cm、深さ約10cmであり、東側部分では壁際から約20cm程度内側を巡っていた。



C1-2 ☒ C1ST101

中央ピットは検出できなかったため、上面で検出した中央ピットと同じ場所であった可能性が高いと考えられる。これらのことから、この住居跡は東側に拡張されたものの、中央ピットは共有したと考えられ、ほぼ時期差はないものと考えられる。

住居跡の埋土中からの遺物出土量は少ないが、弥生土器と石器が出土している。土器はいずれも細片で図示できうるものはなかったが、中央ピットから素口縁状の甕口縁片と貼床から後期前半と考えられる土器が出土している。その他では、前期に属すると考えられる土器片が出土している。石器は刃部のみ磨製の小型石斧1点、頁岩製と考えられる小型の扁平片刃石斧が出土している。また、砂岩の縁辺部のみを調整した刃器と考えられる石器が出土している。これらの石器は前期の土器に伴う可能性も考えられる。

住居跡の時期は前期と考えられる遺物も出土するが、切り合い関係にあるSK1063や床面から検出したSK1070、SK1193が前期の可能性が高いことなどから、これらからの混入と考えられ、後期前半の可能性を考えたい。

C1ST102(C1-3・4 図)

時期：弥生V～ **形状**：円形 **主軸方向**：N-55°-W

規模：6.7m×6.7m **深さ**：0.1m **面積**：35.2㎡

：7.3m×7.3m **深さ**：0.15m **面積**：41.8㎡

埋土：黄灰褐色土

ピット：数 63 **主柱穴数**：19 **主柱穴**：P2、5、11、12、22、23、25、35、37~42、SK5、SK11~14

床面：1面 **貼床**：無 **焼失**：有

中央ピット：**形状** 楕円形 **規模** 80cm×60cm **深さ** 30cm **埋土** 暗灰褐色粘質土

壁溝：数 2 **幅** 40cm **深さ** 5cm

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、石鏃、ガラス小玉

所見：調査区南側でST103、SK1175と切り合った状態で検出した。埋土は灰褐色系の土が主体であった。残存状況は不良で約10cm程度しか残存していなかったが、南部では炭化物がまとまって検出し、一部は屋根材の可能性が考えられる。埋土を除去すると土坑、ピット、壁溝などの遺構が確認できたが、なかにはST102に付属しない遺構と考えられる遺構も検出している。

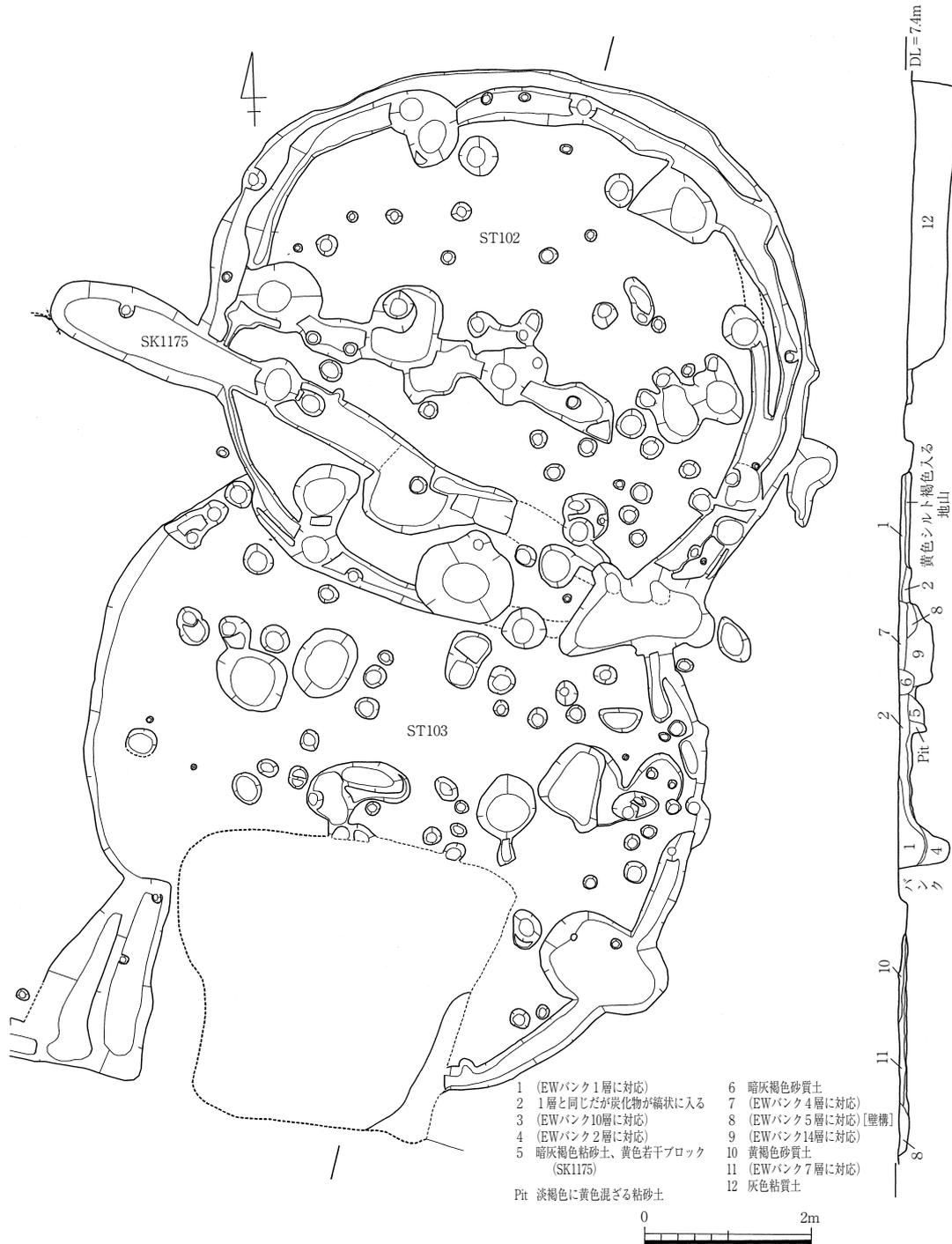
検出した遺構で確実にST102に伴うと考えられる遺構は、ほぼ中央部で溝状遺構と切り合った状態で検出した土坑と、壁溝と考えられる溝である。

中央ピットと考えられるピットは炭化物が帯状に堆積しており、炉跡の可能性が考えられる。壁溝は同心円上に検出しているが、壁に沿わず20~30cm内側を巡っており、東側の一部では2条になっている。

比較的規模の大きな方形土坑状の遺構SK9やSK14は、中央部で溝状土坑が検出していることから、これに伴う掘立柱建物跡の可能性が考えられたが、他で柱穴となりうる遺構が検出していないことや、埋土中から出土した遺物が住居跡に伴う遺物と時期差がないことなどから住居跡に伴う遺構の可能性が考えられる。

この他ではST103 と重複する部分も含めてピットは 63 個(小ピット、土坑状ピット除く)を検出している。住居跡の主柱穴となる可能性のあるピットは、規模によって大きく 2 群に分けることができる。規模が比較的大きく壁際を巡るように検出した一群と、規模が小さく中央ピットの周辺で検出したものであるが、規模の小さなものはさらに 2 つに分かれる可能性がある。柱配置の平面プランはいずれも多角形になるものと考えられる。

以上、ピットが多いことや壁溝などから、ST102 は 2 度または 3 度の拡張、建て替えが行われていたと考えられる。



C1-3 図 C1ST102・103

ST102に伴う遺物は弥生土器、石器が出土している。弥生土器はピット出土も含めてコンテナケース約1箱が出土しているが、まとまった状態で出土しておらず、細片がほとんどであった。6は比較的大きな個体で、P19とSK9から出土した土器が接合したものであるが、香川県からの搬入土器と考えられ、弥生時代後期中葉の時期と考えられる。この他では素口縁の甕、外反する口縁部を持つ高杯が出土している。また、凹線文土器がほとんどみられないことも特徴の一つと考えられる。石器では1点は完形でもう1点は基部が欠損するが、基部がわずかに凹んだ凹基式無茎石鏃と考えられるものが出土している。2点ともサヌカイト製で長さが4cm以上で重量も4g以上の大型であった。また、ガラス小玉2点が出土しており、いずれも淡い空色である。遺物の時期は、後期中葉までの時期と考えられ、あまり時期差がみられない。この住居跡は後期中葉の時期に2度から3度の建て替えが行われたと考えられる。

C1ST103(C1-3・5 図)

時期；弥生V～ **形状**；円形 **主軸方向**；N-76°-W

規模；7.5m×(5.2)m **深さ**；0.15m **面積**；44.1 m²

埋土；暗灰褐色土

ピット；数 60 **主柱穴数**；4 **主柱穴**；P19、20、23、ST102-P9

床面；2面 **貼床**；1 **焼失**；無

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** (110)cm×85cm **深さ** 3cm **埋土** 明黄褐色粘砂土

壁溝；数 1 **幅** 30cm **深さ** 15cm

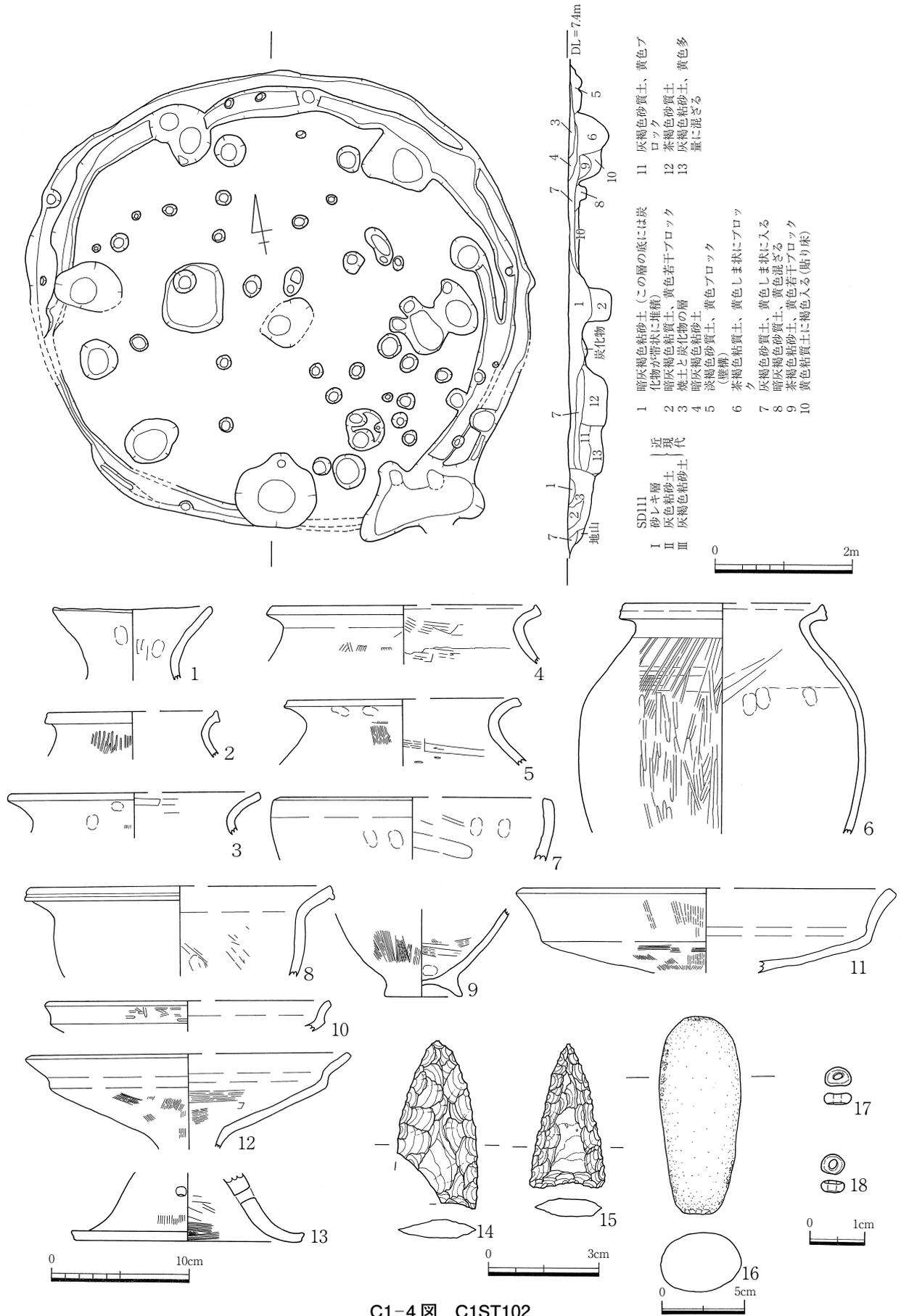
出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)、石器(石鏃、石斧)

所見；調査区南側で検出された。ST102に北側を切られ、南側は近現代と考えられる攪乱坑に切られている。また西側も近世以降の溝によって切られており、輪郭がわずかに残るのみであった。

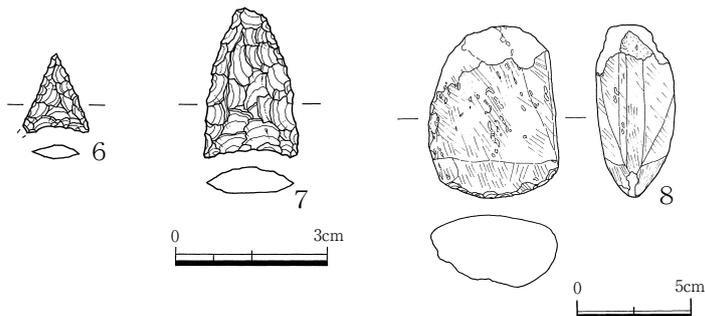
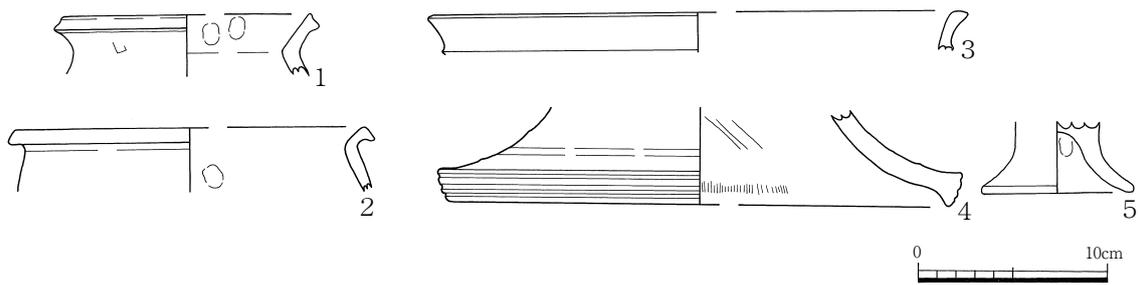
埋土は暗灰褐色土で、ST102の埋土とほとんど差異は認められなかった。埋土の残存状況は不良で、約10cm程度が残存している状況であった。床面からは壁溝、中央ピット、ピットが検出されている。壁溝は東側でのみ確認できた。西側部分は削平が著しいことから検出できなかったが壁際を全周巡っていたと考えられる。中央ピットは長楕円形でピットと切り合っている。ピットはST103と重複するものを除いて60個が確認されている。ピットは中央ピット付近で検出されたものと、壁に沿うように巡っている比較的しっかりしたものに分けることができ、主柱穴は後者と考えられ、柱配置の平面プランは5角形と考えられる。

埋土中から出土した遺物は弥生土器、石器であるが出土量は少ない。弥生土器では、口縁部がわずかに拡張される甕、口縁部が外反する高杯、端部に凹線文が施された脚、小型の脚が図示できた。土器の時期は凹線文ほとんどなく、杯口縁部が外反する高杯の存在から後期前葉と考えられる。石器ではサヌカイト製の石鏃2点と緑色岩製の小型の太型蛤刃石斧が1点出土している。

ST103の時期は後期前葉～中葉のST102に切られ、中期末～後期前葉の可能性が考えられるSK1175を切っていることや遺物の時期から後期前葉の可能性が高いと考えられる。ST102とは切り合いによって前後関係は認められるが期差はほとんどなく、連続していたと考えられる。



C1-4 区 C1ST102



C1-5 ☒ C1ST103

(2) 土坑

C1 区で調査時検出した土坑は 197 基である。C1 区で確認されている土坑のほとんどは弥生時代前期、中期末~後期、近世~近現代の 3 時期に属すると考えられるが、わずかに弥生時代中期とみられる土坑が存在する。土坑は時期ごとに特徴を有するとみられ、以下、時期ごとに土坑を概観してゆく。

弥生時代前期土坑は調査区の中央部のSD105の北側、環濠集落内から多く検出している。また、遺構密度は低くなるが、外濠と内濠の間部分からも土坑を検出しており、調査区全域で検出している。

遺構の平面プランは長方形、円形、楕円形で長軸方向がN-30°-E、または、これに直交するN-60°-Wのものが多い傾向がみられる。平面プラン長方形の土坑では1.2~1.5m×2.0~2.5mの規模のものが多い。

検出時の遺構埋土は一見すると黒色にみえる灰褐色土が中心で粘性を持つ。埋土中には炭化物、土器を多く含む土坑がみられる。

弥生時代中期末~後期の土坑は調査区中央部のST101 から北側ではほとんどみられず、調査区南に集中する。土坑の平面プランでは長方形のものがほとんどで、他の時期では検出例が少ない溝状の土坑も検出している。長方形のプランを持つものは比較的規模が大きなものが目立ち、最も大きなものは5.5×2.4mである。住居跡の可能性も考えられるが、いずれも柱穴、炉跡が確認できなかった。また、前期土坑と同様に長軸方向に規則性が認められ、N-70°-Wに軸方向が向くものも多くみられる。

遺構検出時の埋土は褐灰色土で前期のものが黒色に近いものが多いのに比べ、褐色が強くやや薄い色調で砂質が強いものが多い。また淡褐色砂質土が埋土になっている土坑もみられる。埋土の残存状況は前期土坑と比べてかわらないが、遺物の出土は少なく、完形復元できる土器はほとんど出土していない。

C1-2 表 C1 区弥生時代土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C1SK1002	長方形	箱形	2.3	1.15	20	N-49°-W	灰褐色土	SK1001	I-2、3	壁溝、中央ビット
C1SK1004	楕円形	皿状	[1.6]	1.2	18	N-42°-W	灰黄褐色土	SD101	I-2、3	
C1SK1005	長方形	逆台形	1.6	1.3	42	N-29°-E	黒褐色土	SD101	I-2、3	
C1SK1006	楕円形	逆台形	[1.7]	[1.03]	25	N-61°-W	黒褐色土	SD101	I-2、3	
C1SK1007	円形	箱形	1.6	1.3	42	N-28°-E	灰褐色土		I-2、3	
C1SK1008	円形	U字状	1.9	1.85	70	—	灰褐色土		I-2、3	土器多
C1SK1009	楕円形	皿状	[1.6]	[0.8]	9	N-29°-E	暗灰褐色土	SD102	I-2、3	残存不良
C1SK1010B	長方形	皿状	1.2	1.0	7	N-21°-E	黄灰褐色土	SD102	I-2、3	検出時1基の土坑とみられた
C1SK1011	長方形	皿状	2.0	0.7	20	N-60°-W	黒灰褐色土	SD102	I-2、3	
C1SK1012	円形	皿状	1.1	1.2	12	N-65°-W	黒褐色土	SD102	I-2、3	
C1SK1013	方形	皿状	1.1	7.2	—	N-22°-E	暗灰褐色土	SD102を切る	I-5-II-1	消滅
C1SK1014	円形	箱形	1.5	1.4	40	N-35°-E	褐色土		I-2、3	
C1SK1015	長方形	逆凸状	1.55	0.7	60	N-32°-E	暗灰褐色土		I-2、3	
C1SK1016	方形	—	0.7	0.4	—	N-73°-E	黄褐色土	SK1017を切る		
C1SK1017	方形	—	0.65	0.75	—	N-73°-E	黄褐色土	SK1018を切る		SK1016の一部
C1SK1018	方形	—	[0.7]	0.7	—	N-73°-E	黄褐色土			SK1016の一部
C1SK1019	楕円形	逆台形	1.1	0.9	17	N-39°-E	黒褐色土	SK1020	I-2、3	
C1SK1020	長方形	—	1.85	1.15	—	N-24°-E	黒褐色土			
C1SK1021B	長方形	皿状	[1.5]	1.6	0.2	N-60°-E	褐色土	A、Cと切り合う	I-2、3	
C1SK1021C	楕円形	皿状	1.9	0.7	0.2	N-35°-E	黄褐色土	A、Bと切り合う	I-2、3	

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C1SK1022	方形	逆台形	2.2	2.1	0.2	N-15°-E	灰褐色土		I-2、3	埋土中に大きな礫
C1SK1023	楕円形	箱形	1.6	1.2	20	N-62°-W		両端ビットに切られる	IV-2~V	埋土中に焼土
C1SK1025	長方形	逆台形	[0.7]	0.55	13	N-30°-E	淡褐色土	ビットに切られる	IV-2~V	
C1SK1026	隅丸方形	逆台形	1.95	1.6	0.2	N-32°-E	淡褐色土		I-2、3	ビット有り
C1SK1027	長方形	—	—	—	—	—				消滅 遺物無し
C1SK1028	不整形	皿状	1.15	—	—	N-17°-W	灰褐色土		V	
C1SK1029	楕円形	皿状	1.15	0.7	20	N-68°-W	灰黄褐色土			
C1SK1030	楕円形	皿状	0.71	0.5	10	N-35°-E				深さほとんど無し
C1SK1031	不整形	レンズ状	0.9	0.76	35	N-10°-W	黒褐色土			
C1SK1032	楕円形	—	0.8	0.5	15	—				
C1SK1033	楕円形	レンズ状	1.0	0.85	20	N-26°-E	淡褐色土			
C1SK1034	長方形	逆台形	2.2	1.2	0.15	N-50°-W	暗灰褐色土	P1178		
C1SK1035	長方形	箱形	1.8	0.9	15	N-19°-E				
C1SK1036	長方形	箱形	2.4	1.7	25	N-35°-E	灰褐色土		I-2、3	壁溝、ビット、土器多
C1SK1037	長方形	箱形	1.9	1.3	14	N-30°-E	暗褐色土		I-2、3	ビット
C1SK1038	不整形	—	2.1	1.4	33	N-25°-E	暗灰褐色土		I-2、3	
C1SK1039	方形	箱形	1.2	1.2	—	—	淡褐色土	SK1040の切り合い	IV-2	図面上消滅
C1SK1040	長方形	逆台形	[2.4]	1.4	30	N-47°-E	暗灰褐色土	SK1039に切られる	I-2、3	中央部ビット
C1SK1041	[長方形]	箱形	[0.7]	1.2	33	N-72°-W	黒褐色土	C4区へ続く	I-2、3	
C1SK1042	楕円形	皿状	2.2	1.2	15	N-82°-E	灰褐色土			
C1SK1043	楕円形	箱形	1.6	1.3	5	N-34°-W	淡褐色土			
C1SK1044	楕円形	—	[0.45]	0.5	27	—	灰黄褐色土			
C1SK1045	長方形	皿状	2.0	1.0	5	N-70°-W	淡褐色土			
C1SK1046	長方形	箱形	[2.2]	1.4	0.6	N-30°-E	黒褐色土	SK1045、SK1046		
C1SK1047	長方形	逆台形	1.5	[1.1]	0.3	N-26°-E	灰褐色土	SK1058を切る		
C1SK1048	不整形	レンズ状	1.0	0.7	15	N-0°	灰色土			
C1SK1049	楕円形	レンズ状	1.0	0.7	20	N-21°-E	黒褐色土			
C1SK1050	長方形	レンズ状	1.0	0.7	10	N-21°-E	黒褐色土			
C1SK1051	長方形	—	1.6	1.1	—	N-61°-W		ST101に切られる		深さ無し
C1SK1052	円形	逆台形	0.8	—	30	N-25°-E		ST101を切る		
C1SK1053	円形	皿状	1.0	0.6	20	N-86°-E	黒褐色土			
C1SK1054A	長方形	—	1.3	0.9	4	N-44°-E	淡褐色土			
C1SK1054B	楕円形	—	1.5	1.1	10	N-62°-W	淡褐色土			
C1SK1055	楕円形	皿状	1.25	0.78	10	N-62°-W	暗黄褐色土			近世削平半載される
C1SK1056	—	箱形	2.05	1.25	26	N-35°-E	灰褐色土			
C1SK1057	方形	—	2.1	1.9	20	N-49°-W	黄灰褐色土			近世削平半載される
C1SK1058	方形	—	1.2	[0.65]	25	N-63°-W	淡褐色土			
C1SK1059	楕円形	逆台形	1.0	0.65	25	N-63°-W	淡褐色土	SK1047と切り合う		
C1SK1060	楕円形	二段	0.8	0.5	30	N-8°-E	灰黄褐色土	P1212を切る		底2段になる
C1SK1061	楕円形	皿状	1.7	1.2	0.2	N-73°-E	暗灰褐色土			
C1SK1062	楕円形	U字状	0.9	0.7	—	N-65°-E	灰黄褐色土			
C1SK1063	不整形	皿状	[1.5]	1.6	17	N-37°-W	黄灰褐色土			
C1SK1064	長方形	—	—	—	—	—				
C1SK1065	—	U字状	—	—	—	—	灰色土			消滅
C1SK1066	円形	U字状	0.9	—	30	—				
C1SK1068	円形	—	—	—	—	—				消滅
C1SK1069	方形	—	—	—	—	—				消滅
C1SK1070	方形	箱形	1.4	1.1	30	N-42°-E			I-2、3	
C1SK1071	楕円形	—	1.2	0.8	30	N-21°-W		近世SKに切られる		ST101の中央P
C1SK1072	楕円形	—	0.5	0.5	27	—			IV-2~V	ST101に伴う、2個のビットの切り合い
C1SK1074	長方形	箱形	1.3	0.8	10	N-77°-W				前期の可能性あり
C1SK1075	不整形	逆台形	1.1	1.0	10	N-75°-W	灰黄褐色土			2つの切り合いの可能性
C1SK1076	楕円形	皿状	0.8	0.6	10	N-71°-W	灰黄褐色土			
C1SK1080	長方形	—	2.7	1.8	20	N-31°-W	灰黄褐色土	SK1079に切られる		前期の可能性あり
C1SK1081	長方形	逆台形	1.1	0.7	25	N-28°-E	灰黄褐色土	ビットに切られる	I-2、3	
C1SK1082	長方形	—	—	—	—	—				消滅
C1SK1083	長方形	2段	1.2	0.5	20	N-8°-E	黒褐色土			2つのP可能性
C1SK1084	円形	U字状	0.9	—	50	N-9°-E	灰黄褐色土			
C1SK1085	長方形	箱形	1.9	0.9	10	N-78°-W	灰褐色土		IV-2~Vの可能性	
C1SK1087	不整形	皿状	0.7	0.6	5	N-70°-W	灰褐色土			
C1SK1088	長方形	逆台形	1.3	0.7	20	N-71°-W	灰黄褐色土			
C1SK1090	楕円形	—	1.7	[1.2]	15	N-44°-W	灰色土に褐色土入る	SK1099を切る		
C1SK1091	楕円形	皿状	1.0	0.7	15	N-82°-W	灰褐色砂質土			
C1SK1092	不整形	U字状	0.9	0.9	40	—	灰黄褐色土		IV-2~V	

C1区の調査

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C1SK1093	不整形	一部逆台形	1.8	1.7	20	N-31°-E			IV-2~V	
C1SK1095	長方形	箱型	5.5	2.4	20	N-65°-W			IV-2~V	P床面から検出する
C1SK1098	方形	逆台形	1.2	1.0	20	N-72°-W	灰褐色土	SK1067を切る	IV-2~V	
C1SK1099	長方形	逆台形	[1.5]	[0.4]	25	N-72°-W	暗灰褐色土	SK1100に切られる	IV-2~V	
C1SK1100	溝状	U字状	3.50	1.5	47	N-72°-W	淡褐色土	SK1099、1101を切る	IV-2~V	
C1SK1101	楕円形	皿状	3.0	1.0	36	N-72°-W		SK1100と切り合う	IV-2~V	2つの土坑の切り合いの可能性
C1SK1108	長方形	皿状	1.4	1.0	14	N-73°-W	淡褐色土	SK1107を切る		
C1SK1109	長方形	皿状	1.5	0.9	5	N-46°-E	灰色土に褐色土入る			
C1SK1110	長方形	逆台形	3.16	1.9	26	N-73°-W	灰黄褐色土	床面からピット	IV-2~V	
C1SK1111	—	—	—	—	—	—	—	—	—	消滅
C1SK1116	溝状	箱形	4.9	0.5	15	N-73°-W	淡褐色土に黄褐色土混じる	SK1118に切られる	IV-2~V	
C1SK1118	長方形	U字状	2.3	2.1	28	N-86°-W	黒褐色土	SK1116を切る	IV-2~V	
C1SK1119	不整形	皿状	0.56	0.55	17	N-30°-E	灰黄褐色土		IV-2~V	
C1SK1120	不整形	皿状	2.3	1.5 0.75	10	N-20°-E				
C1SK1121	長方形	箱形	2.1	1.6	25	N-64°-W	灰黄褐色土	SK1122を切る		
C1SK1122	長方形	箱形	2.1	1.6	23	N-64°-W	灰褐色土	SK1121に切られる		
C1SK1123	楕円形	逆台形	2.8	1.1	19	N-46°-E	黒褐色土			
C1SK1124	不整形	—	1.7 [1.0]	0.3 0.6	5 10	N-22°-W N-23°-E				2基の土坑の切り合いか
C1SK1126	溝状	レンズ状	3.1	0.4	—	N-75°-W	灰褐色土	SK1160を切る	IV-2~V	
C1SK1127	楕円形	皿状	[0.4]	0.3	10	N-82°-W	灰褐色土		IV-2~V	P1322を含めた溝状土坑の可能性有
C1SK1128	円形	U字状	1.35	—	41	—	灰黄褐色土			土器はIII 近現代出土せず
C1SK1129	楕円形	—	1.2	1.0	—	—	灰褐色土			不明前期の可能性 消滅 図面欠落
C1SK1130	楕円形	皿状	1.5	0.7	17	N-25°-E	灰褐色土		V~	
C1SK1131	方形	—	0.65	0.65	6	N-22°-E				
C1SK1132	円形(半円形)	皿状	[0.65]	0.64	—	—	灰褐色土	SK1116に切られる		
C1SK1133	楕円形	—	0.85	0.6	13	N-31°-E	灰黄褐色土			両端にピット
C1SK1134	楕円形	—	1.4	0.6	17	N-51°-W	灰褐色土	ピットに切られる		検出時SK1144を切る
C1SK1135	楕円形	皿状	0.6	0.65	4 30	N-31°-E	灰褐色土			P1382の周辺の凹みの可能性 底2段
C1SK1136	方形	箱形	1.5	1.4	14	N-31°-E	灰褐色土		V~	
C1SK1137	楕円形	U字状	1.3	0.9	60	N-40°-E				
C1SK1138	長方形	不整形	1.5	0.95	12	N-0°	灰褐色土に黒褐色土混じる		IV-2	
C1SK1139	溝状	U字状	2.2	0.45	23	N-59°-E	灰褐色土		IV-2~V	
C1SK1140	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番 遺構なし
C1SK1141	長方形	箱形	1.7	1.2	41	N-58°-E	灰黄褐色土	SK1147、1150、P1397と切り合う	IIIの可能性	
C1SK1143	溝状	U字状	0.45	0.2	20	N-25°-E	灰褐色土	SK1146に切られる		
C1SK1144	楕円形	2段	1.7	1.2	5	N-62°-E	淡褐色土に黒褐色土混じる			検出時SK1134に切られる
C1SK1145	長方形	箱形	1.6	1.2	17	N-55°-W				
C1SK1146	長方形	箱形	[1.1]	0.5	37	N-22°-E	灰褐色土	SK1143、SK1196を切る		
C1SK1147	長方形	逆台形	2.5	1.85	12	N-34°-E	黄褐色土	SK1141、1148に切られ、SK1149を切る	IV-2	
C1SK1148	溝状	U字状	[1.5]	0.6	50	N-53°-W	黒褐色土	SK1149、1147を切る	V~	
C1SK1149	長方形	逆台形	2.5	1.9	30	N-47°-W	灰褐色土	SK1148に切られる	I-2、3	
C1SK1150	長方形	皿状	0.9	0.86	8	N-28°-E	黒褐色土		I-2、3可能性	ピット有り
C1SK1153	長方形	逆台形	0.95	1.1	14	N-60°-W			I-2、3	SK1107と同一遺構
C1SK1156	長方形	逆台形	3.0	1.3	32	N-31°-E	黒褐色土 炭化物はある		I-2、3	
C1SK1158	溝状不整形	U字状	6.3	0.75	75	N-51°-W	褐色土		IV-2~V	底面掘りすぎ、自然流路埋土まで掘るか 小型、ピットの可能性
C1SK1159	楕円形	逆台形	0.6	0.45	16	N-57°-W	灰褐色土			
C1SK1160	方形	—	[1.8]	1.7	15	—	灰褐色土		IV-2~V	西側近世削平
C1SK1164	楕円形	逆台形	1.5	1.2	35	N-79°-W	暗灰褐色土		I-3	
C1SK1165	方形	—	1.0	0.6	—	—	—	—	—	深さほとんど無し 消滅
C1SK1166	円形	—	0.2	—	14	—	灰色砂質土	—	—	Pと考える。小規模

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C1SK1167	楕円形	皿状	0.8	0.5	17	N-67°-W	淡褐色土	SK1168 に切られる		前期の口縁、胴部中後期胎土
C1SK1168A	長方形	—	1.9	[1.2]	20	N-30°-E			IV-2~V	2基のSKの切り合い
C1SK1168B	長方形	—	2.3	0.5	8	N-30°-E			IV-2~Vの可能性	2基のSKの切り合い
C1SK1169	方形	皿状	[1.75]	1.4	8	N-65°-W	淡褐色土	SK1168 に切られる		胴部胎土的に前期?
C1SK1170	長方形	逆台形	1.1	0.5	10	N-30°-E	灰褐色土	ピット		
C1SK1171	楕円形	レンズ状	0.5	0.35	20	N-67°-W	灰褐色土			規模小P
C1SK1172	方形	レンズ状	1.6	1.3	27	N-81°-W	灰褐色土		IV-2~V	
C1SK1173	長方形	皿状	1.6	1.0	10	N-77°-W	灰褐色土	SK1183 を切る		
C1SK1174	—	—	—	—	—	—				欠番
C1SK1175	溝状	U字状	[7.3]	0.85	18	N-61°-W	灰褐色土	ST102 に切られる	IV-2~V	ST102 と床面の遺構に切られる
C1SK1176	楕円形	箱形	1.5	1.1	36	N-56°-W	灰褐色土	ST102 に切られる	I-2、3	
C1SK1178	長方形	逆台形	1.4	[0.65]	20	N-30°-E			IV-2~V	図面上SK1177 と一体化
C1SK1180	長方形	箱形	2.75	1.8	19	N-70°-W		床面からピット		
C1SK1181	円形	—	0.65	—	—	—				図面上消滅
C1SK1182	長方形	箱	1.6	0.65	20	N-69°-W	灰黄褐色土	ピットを切る		墓塚に直交
C1SK1183	溝状	レンズ状	3.0	0.3	10	N-35°-E	灰褐色土	SK1175 に切られる		
C1SK1185	楕円形	箱形	0.9	0.6	55 45	N-77°-W	灰褐色土		IV-2~V	底2段、胴部胎土的にIV-2~V
C1SK1187	楕円形	皿状	[0.8]	0.55	25	N-66°-W	灰褐色土		IV-2~V	検出時より小さくなる
C1SK1188	不整長方形	箱形	1.0	0.5	20	N-72°-W				2基のSKの切り合いの可能性
C1SK1189	溝状	レンズ状	2.5	0.35	14	N-21°-E	灰色土に灰黄褐色土混じる	SK1190 を切る	IV-2~V	
C1SK1190	楕円形	箱形	1.45	0.1	32	N-32°-E	褐色土		I-2、3	凹線混入SK1189のものか
C1SK1193	楕円形	箱形	1.6	1.25	24	N-38°-E	灰褐色土	ST101 の床面より		
C1SK1194	—	—	—	—	—	—				消滅
C1SK1196	長方形	逆台形	1.45	0.6	23	N-71°-W		SK1146 と切り合う		

C1SK1002(C1-6・7 図)

時期：弥生I 形状：長方形 主軸方向：N-49°-W

規模：2.3m×1.15m 深さ：0.2m 断面形態：箱形

埋土：灰褐色土(黒色粘質土ブロック混じる)

付属遺構：壁溝、中央ピット 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、石器(石鎌)

所見：調査区北端部で検出した。近世以降の土坑と考えられるSK1002に東側部分を切られている。表土直下で検出し、平面プランは長方形で、灰褐色土主体の埋土で埋土中には炭化物や焼土が含まれていた。遺構は検出面から床面まで約20cmが残存していた。床面では壁際に幅約8cmの狭く浅い壁溝が遺構北側で検出できた。また中央部では浅い65×40cmの楕円形のピットを検出しており、埋土中には炭化物が含まれていた。

埋土中からは比較的まとまって遺物が出土しており、3の壺はほぼ完形で出土した。また、その他の土器では甕が出土しており、如意形口縁下に沈線のないものと複数の沈線が巡っているものが出土している。石器も出土しており、11は緑色岩製の石鎌である。幅が狭く厚みがあり、長さは約20cmでわずかに内湾する形態で、先端は尖らずやや平坦である。刃部は両刃で約13cmを測る。全体に赤みがかっており、被熱した可能性が考えられる。

SK1002 の時期は出土した土器が弥生時代前期の遠賀川式土器盛行期の特徴を持っており、弥生時代前期半ばと考えられる。

SK1002 の性格であるが、中央部でピットを検出し、壁縁辺部から壁溝が検出していることから住居跡の可能性も考えられるが床面積が約 2.6 m²と狭いことから土坑と考えられる。

C1SK1004(C1-8 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-42°-W

規模：(1.6)m×1.2m 深さ：0.18m 断面形態：皿状

埋土：黄灰褐色、灰黄褐色土

付属遺構：ピット 機能：—

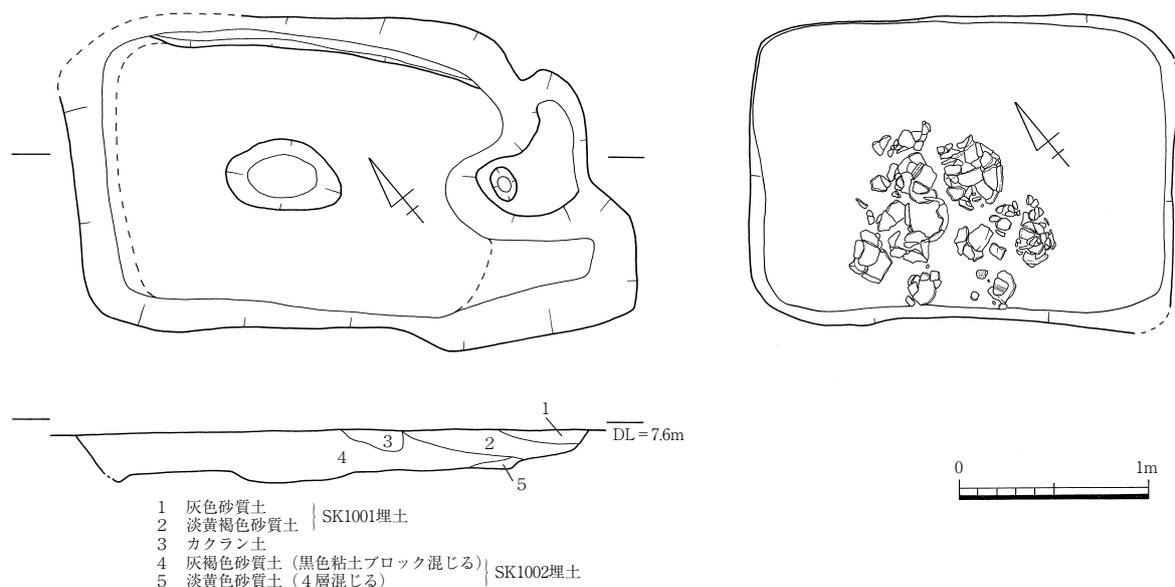
出土遺物：弥生土器(壺、甕)、手捏土製品、石器(石製紡錘車)

所見：調査区北側でSD101 と切り合った状態で検出した。検出埋土は黄灰褐色土で、褐灰色土に地山の黄褐色土が混じったものと考えられる。2層は焼土が混じていた。平面形態は長方形に近い楕円形であった。表土直下で検出したことや、検出面が黄褐色砂質土で調査中の雨によって遺構の肩部の土が流出したため、残存状況は不良で検出面から約 18cmが残るのみであった。

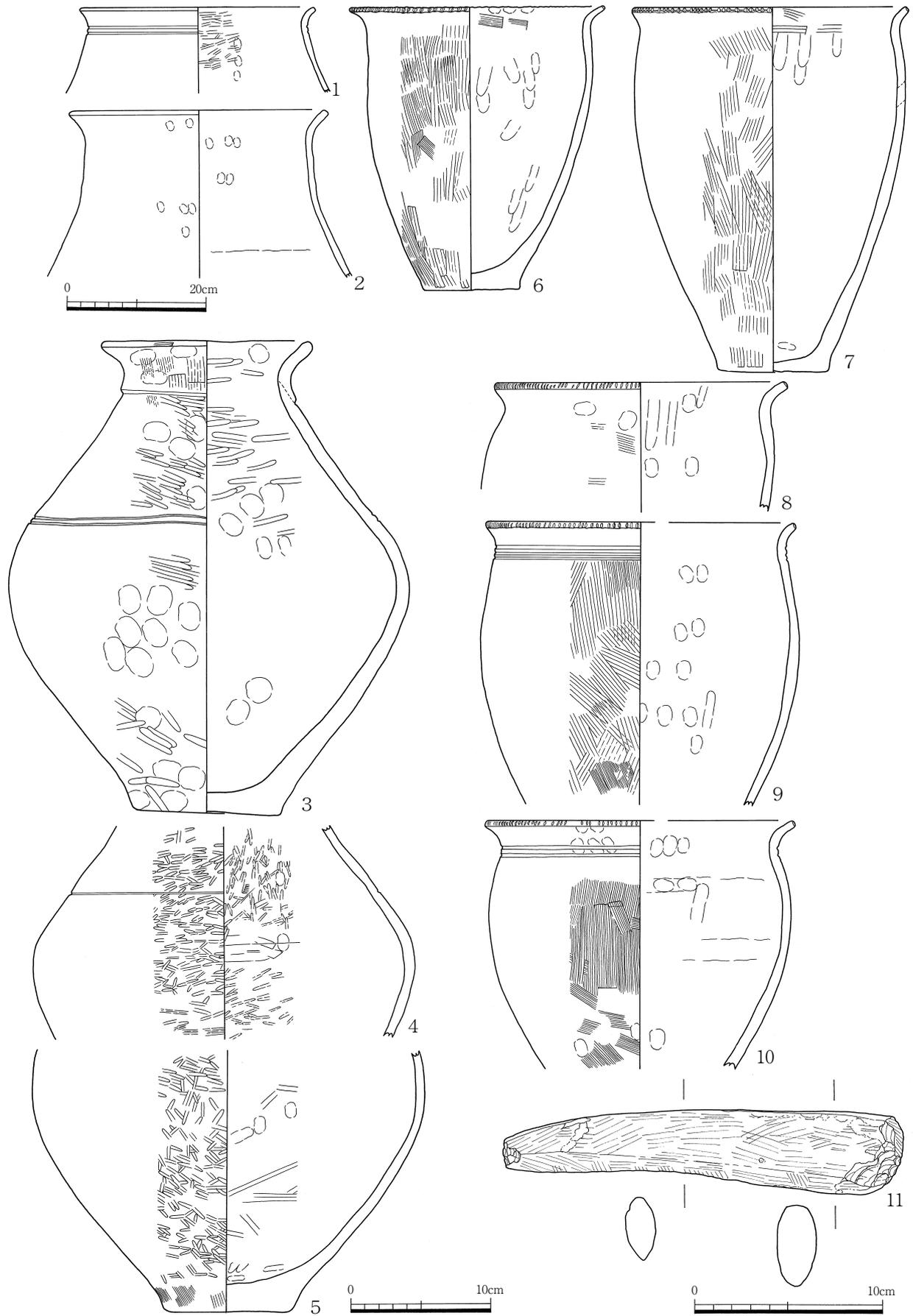
埋土除去後床面はほぼ平坦で、北側の壁から約 20cmのところから直径約 15cmの小ピットを検出している。

埋土中には土器が多く含まれていたが、小片が多い状況であった。上面が削平を受けているため、出土した遺物は下層、床面近くのものと考えられる。

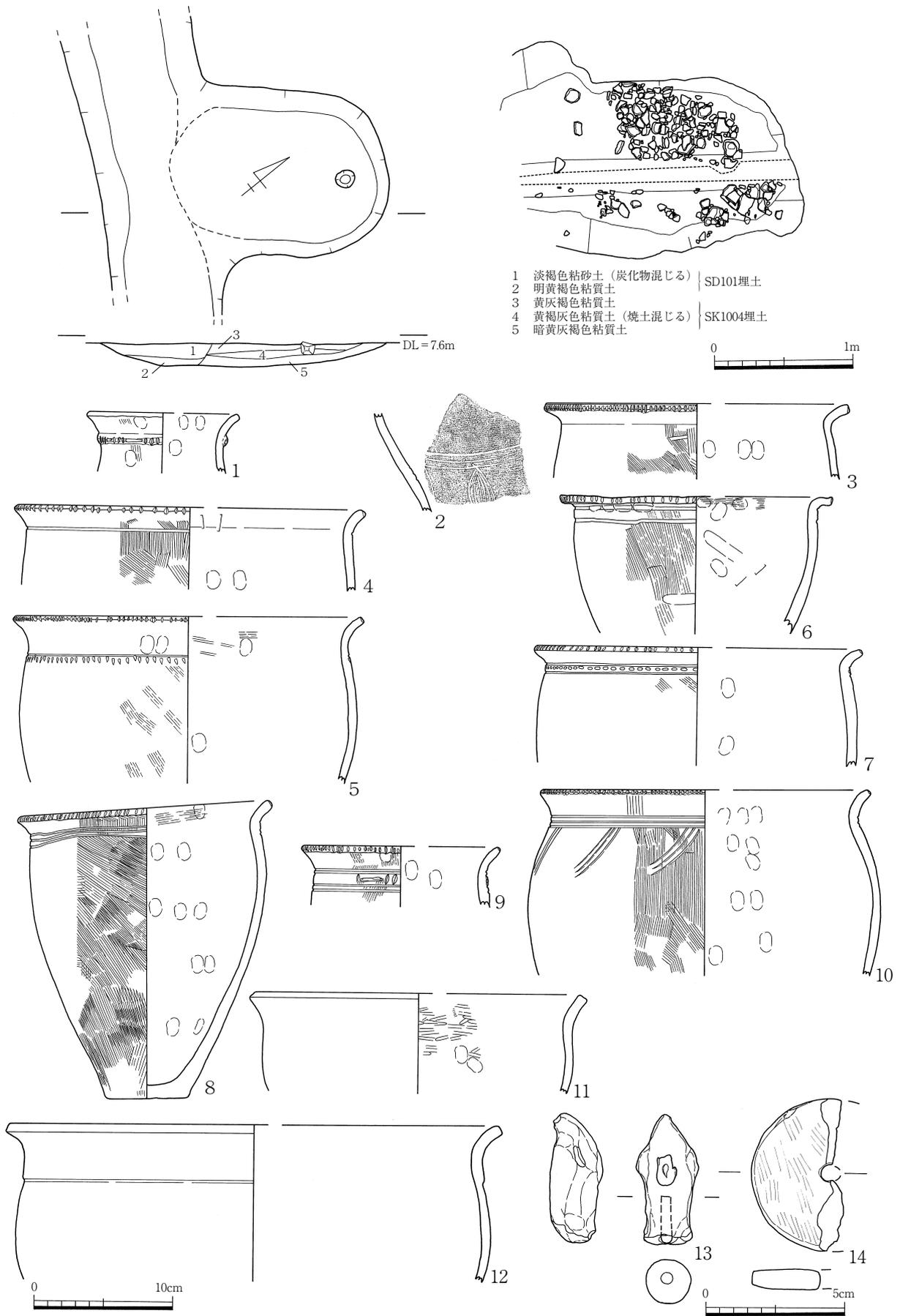
出土遺物は弥生土器、石器であるが、手捏成形で人形の可能性がある土製品が1点出土している。出土した土器はすべて弥生時代前期の土器である。壺では胴部に木葉文を施した2、1は小型の壺で口縁部は肥厚せず口頸間には-//-の文様が施された突帯が巡っている。甕は如意形口縁の甕が



C1-6 図 C1SK1002(1)



C1-7 ☒ C1SK1002(2)



C1-8 図 C1SK1004

出土しており、口縁下部に沈線が巡らないものから3条巡るものまでが出土している。11は上胴部にノの字状の弧状文が施文される。口縁部の屈曲が弱く上胴部が張ることから鉢の可能性が高いと考えられる。12は有段であるが、口径が甕と比べて大きいことから鉢の可能性が高いと考える。手捏成形の土製品13は円筒形で、頂部は後方に引き延ばされ尖り気味、頂部下は両側につまみ出される。下部は両側がつままれ、やや前方に引き出される。底部から直径5mmほどの円孔が中央部近くまで入る。表面には薄い楕円形のドーナツ状粘土が貼り付けられている。人形土製品の可能性も考えられる。

石器では紡錘車が出土している。半分しか残存していないが丁寧な作りである。石材は他の石製紡錘車は黒色頁岩製であるがこの紡錘車は千枚岩と考えられる。また、他の石製紡錘車と比べやや小ぶりで直径は約5.5cmであった。

SD101との先後関係は埋土が類似しており、平面プラン、断面観察でも切り合いの確認は困難であったが、2層の焼土がSD101部分で切れていることから土坑が切られているとみられる。土坑の時期であるが、甕は如意形口縁のみが出土し口頸間に沈線が3本のものがみられることや壺胴部に木葉文が施文されていることから前期中葉と考える。

C1SK1005(C1-9図)

時期：弥生I **形状：**長方形 **主軸方向：**N-29°E

規模：1.6m×1.3m **深さ：**0.42m **断面形態：**逆台形

埋土：黒褐色粘質土

付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器(石鏃)

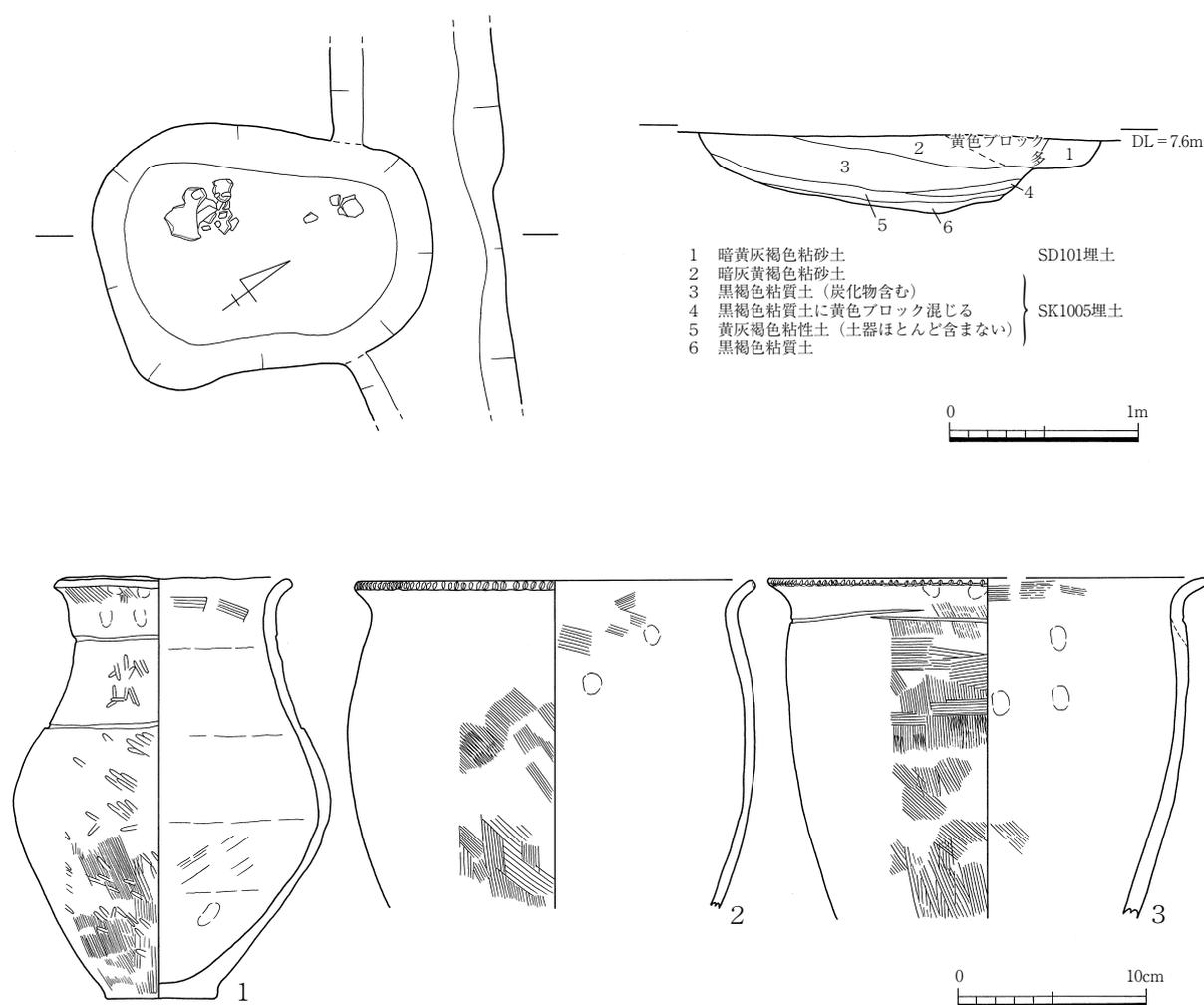
所見：調査区北西で検出した。表土直下で検出し平面プランは長方形で、SD101と切り合っており、黒褐色主体の埋土であった。

遺構埋土は表土直下で検出したが検出面から約40cmが残存していた。埋土には炭化物が混じっている第3層、土器をほとんど含まない第5層がみられる。断面観察ではSD101を切っていると考えられる。埋土除去後、床面はなだらかに北側に傾いており付属遺構は検出できなかった。

埋土中から出土した遺物は弥生時代前期土器と石器である。土器は壺、甕、鉢、蓋が出土しているが、細片が多く図示できたものは3点のみである。1は完形の小型の壺で第5層にのるような状態で出土している。壺の出土数は少ないが比較的残存状況がよく、図示できなかったが1点底部から胴部中央部まで復元できる土器も出土している。また、木葉文の一部と考えられる細片が1点出土している。

甕は多く出土しているが、図示できたものは口頸間に沈線の巡らない2と1条巡っている3である。図示できなかった細片は上胴部まで残存しているものは少ないが、沈線が巡るものは確認できなかった。また口縁部の刻目が無いものが18点、あるものが28点で、全面に刻目があるものが10点、下端のみに刻目があるものが18点出土している。

石器ではサヌカイト製の凹基式打製石鏃が出土している。全長約3cmで比較的大型であるが、



C1-9 図 C1SK1005

重さは 0.9g と軽く薄い。

SD101 との切り合いは平面、断面観察とも埋土に明瞭な差異がなく分けることが困難であったが、SK1005 が SD102 を切っていると思われる。

SK1005 の時期は出土土器がすべて遠賀川式土器であり、前期中葉の時期と考えられ、口縁下部に沈線がみられるものが少ないことなどから、より前葉に近い時期の可能性が高い。

C1SK1006 (C1-10 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-61°-W

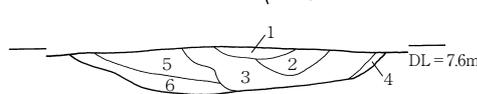
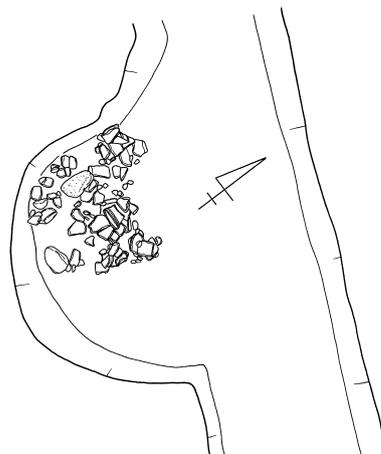
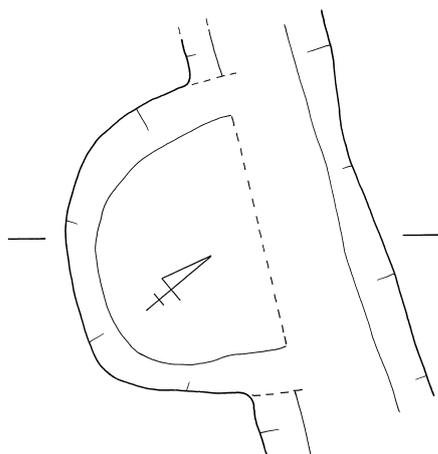
規模：(1.7)m × (1.03)m 深さ：0.25m 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色土

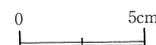
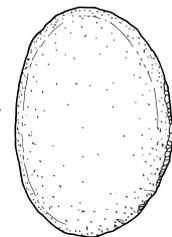
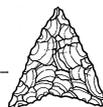
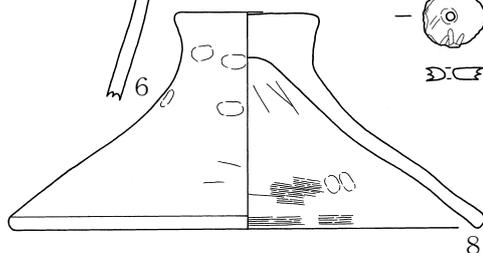
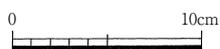
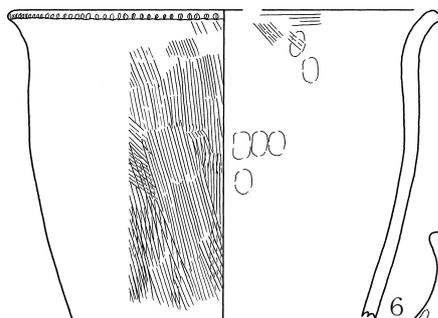
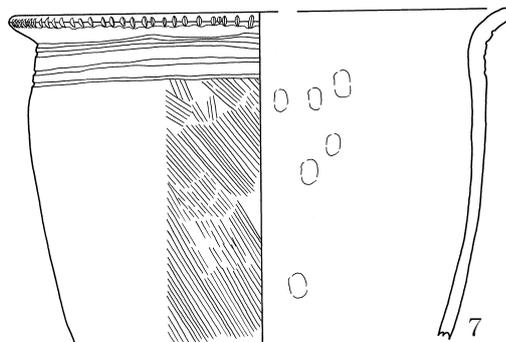
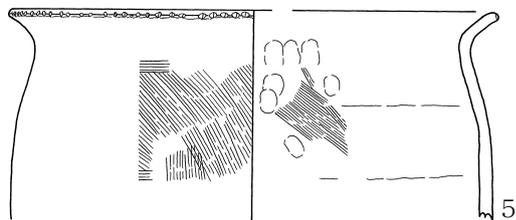
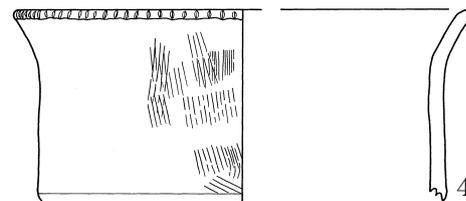
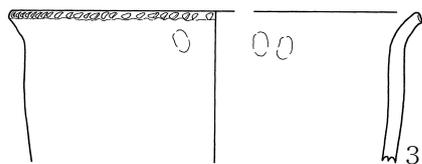
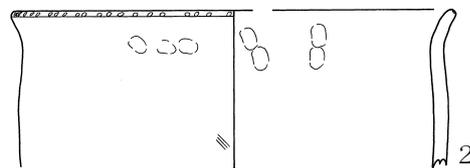
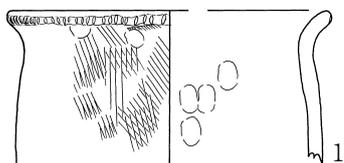
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、土器転用紡錘車、石器(磨石、石鏃)

所見：調査区北側で検出した。検出埋土は黒褐色土でSD101 と切り合った状態で検出し、平面プ



- 1 暗灰色砂質土
 - 2 灰黄褐色砂質土 (炭化物少量含む)
 - 3 黄灰褐色粘質土 (炭化物含む)
 - 4 淡黄褐色砂質土
 - 5 黒褐色砂質土
 - 6 淡黄褐色砂質土に黒褐色砂質土混じる
- SD101埋土
- SK1006埋土



C1-10 ☒ C1SK1006

ランは小判形の約 1/3 が残存している状況であった。

遺構埋土は黒褐色土である。埋土中からは前期の土器が出土しており、壺、甕、蓋が出土するが甕がほとんどで、壺と確認できた口縁部片は 1 点のみである。甕で図示できたものは 6 点である。7 を除いていずれも沈線がみられず、図示できなかった口縁片も口頸間に沈線が巡るものは出土していない。7 は他の甕と時期差が考えられるが、SK1006 の残存している部分の中央部から出土し、土坑埋土である第 6 層にのるような状態で出土しており、土坑に伴う時期のものと考えられ、他の土器とも一括性が高いと考えられる。8 は蓋でほぼ完形品である。内面は端部から約 2cm の幅で煤が付着している。石器は叩石が出土している。

SD101 との切り合いでは平面プラン、断面観察とも SD101 が土坑を切っていることが確認できた。SK1006 の時期は前期中葉と考えられる。

C1SK1007 (C1-11 図)

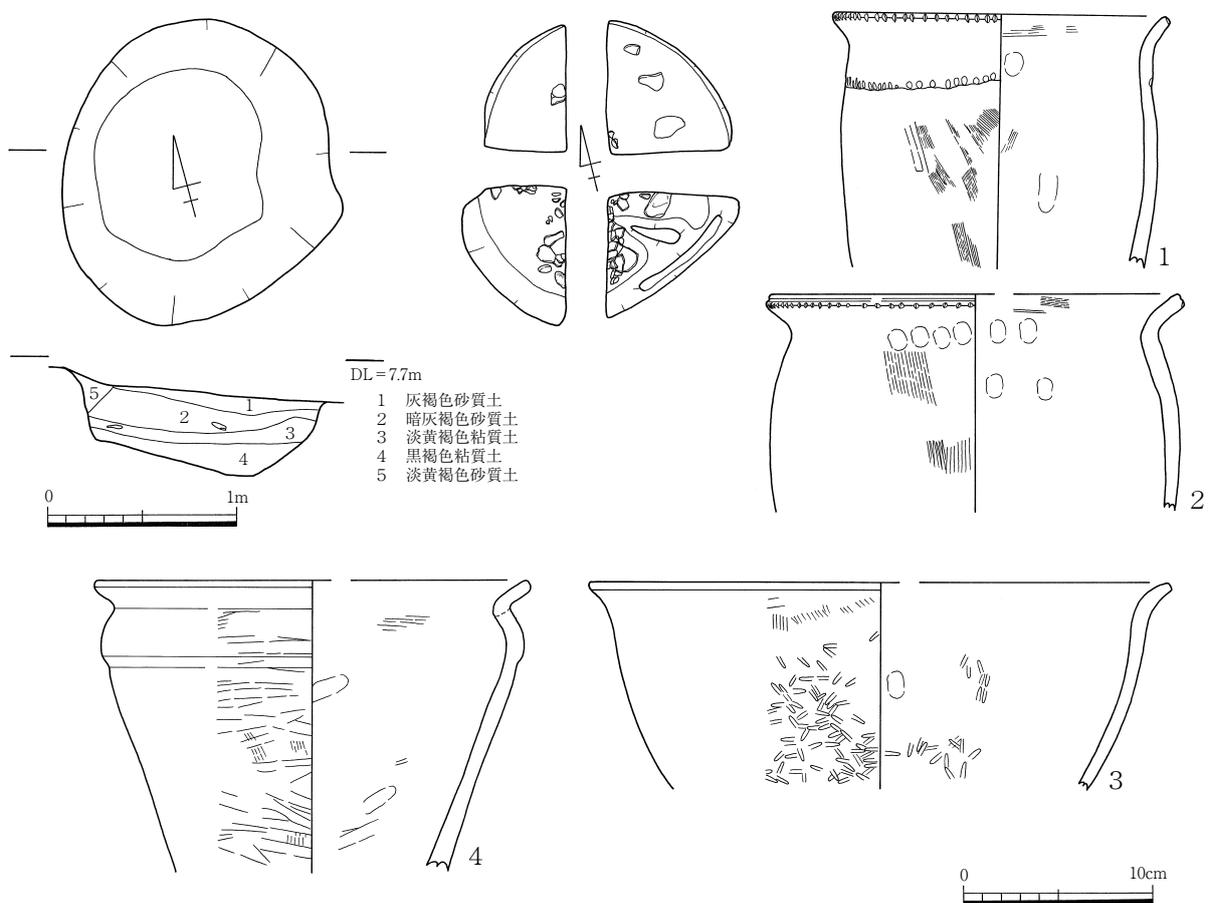
時期：弥生I 形状：円形 主軸方向：N-28°-E

規模：1.6m×1.3m 深さ：0.42m 断面形態：箱形

埋土：灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)



C1-11 図 C1SK1007

所見：調査区北西部SD102のすぐ南、同じ円形プランを持つSK1008とは約1m離れて並んだ状態で検出した。

埋土中からは前期の遺物が出土している。口縁部片は多く出土するが細片が多く図示できるものは少なかった。口縁部細片で器種が確認できたのは壺7点、甕73点、鉢6点、蓋2点である。また、甕で上胴部まで残るものは少なかったが、口頸間に沈線が巡るものは確認できなかった。

SK1007の時期は前期中葉前半と考えられる。

C1SK1008(C1-12・13図)

時期：弥生I **形状**：円形 **主軸方向**：—

規模：1.9m×1.85m **深さ**：0.7m **断面形態**：U字状

埋土：灰褐色土

付属遺構：— **機能**：貯蔵穴

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、粘土塊、石器(叩石、凹石、サヌカイト)

所見：調査区北西部、SD102に隣接しSK1007と並んだ状態で検出。ほぼ円形で、SK1007より直径、深さともに一回り大きい。

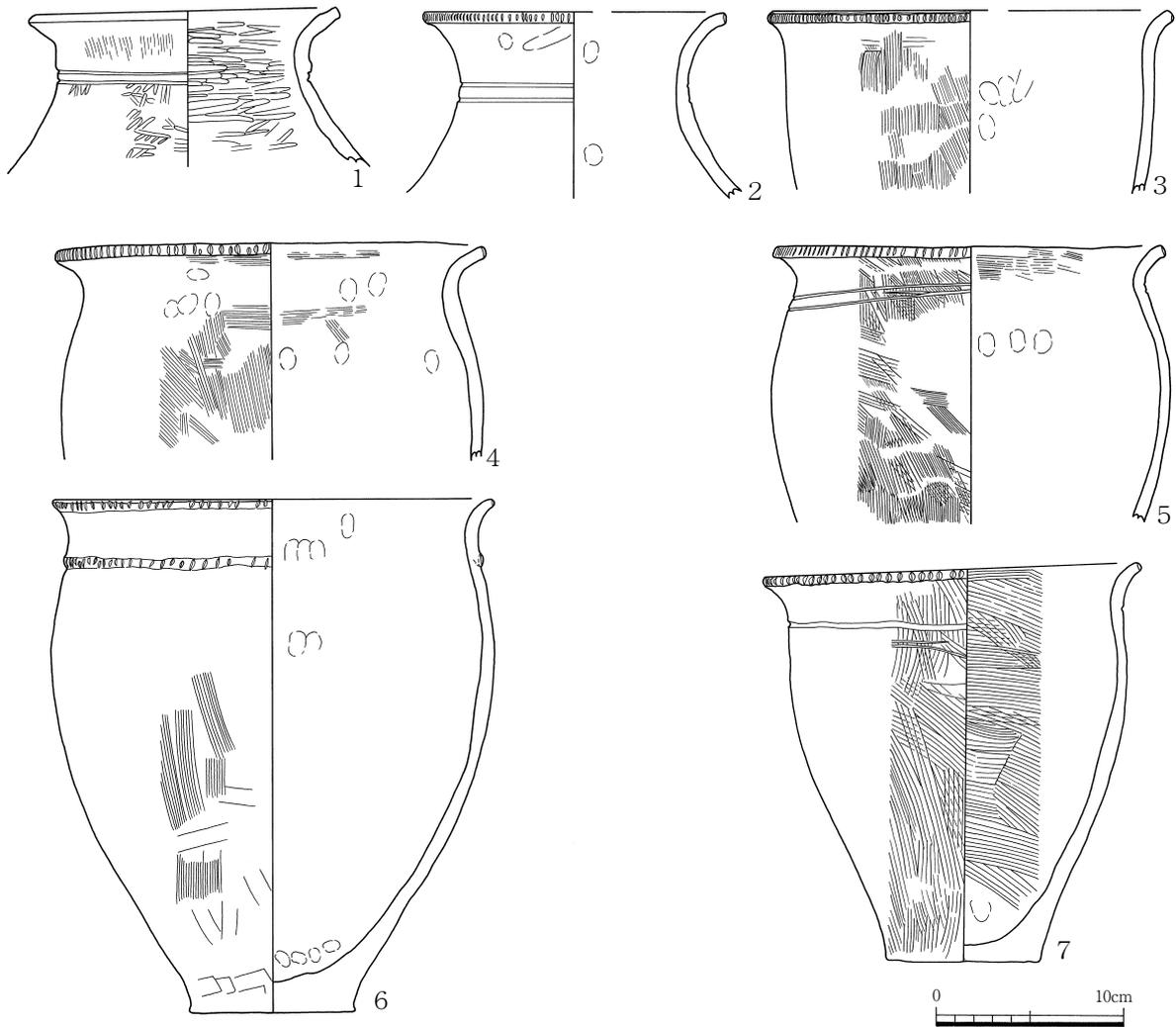
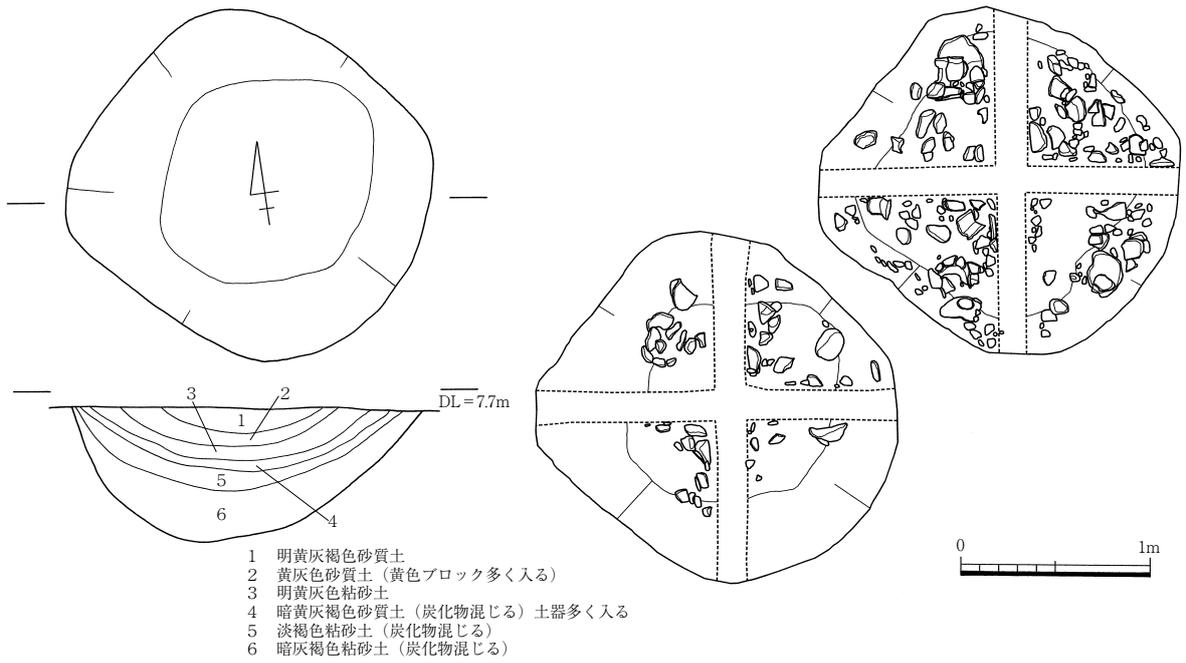
検出面から深さ70cmが残存しており、C1区で検出した弥生時代の土坑では最も深い土坑の一つである。埋土は比較的安定した層位堆積で炭化物、焼土を含んでいるものの、炭化物は流れ込んだ堆積状況で、一面に投げ込まれた状況ではなかった。

埋土中からは遺物が多量に出土しているが、完形復元できるものは少なく、13の壺と6、7の甕のみであった。遺物の出土は中層からの出土がもっとも多く、上層は比較的少ない状況であったが遺物は上層、中層、下層の3回に分け行った。1、2は上層出土で、3、4は中層出土、5、9は下層出土である。また、6は上層と中層で接合、8は上層と下層で接合しており、7は中層と下層で接合している。

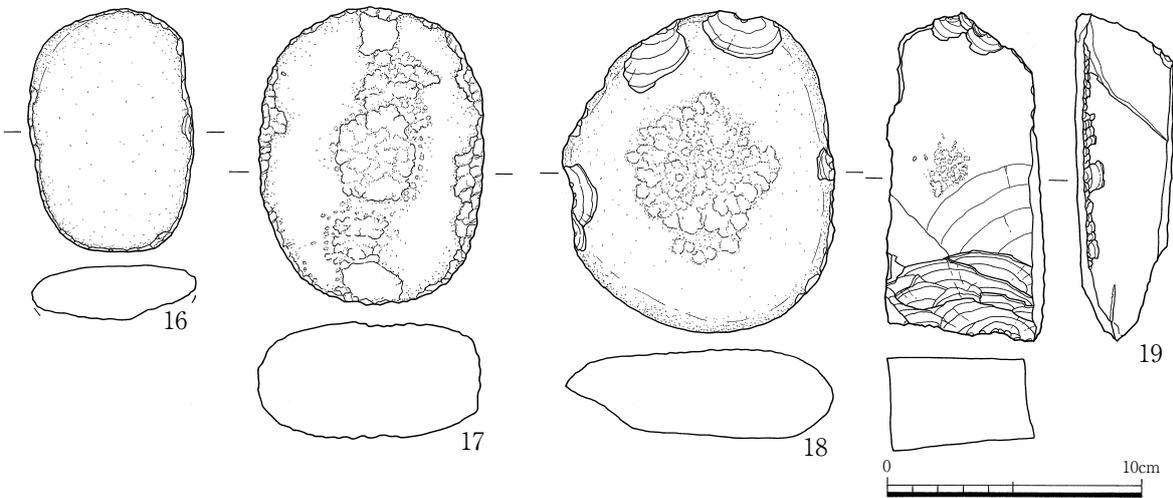
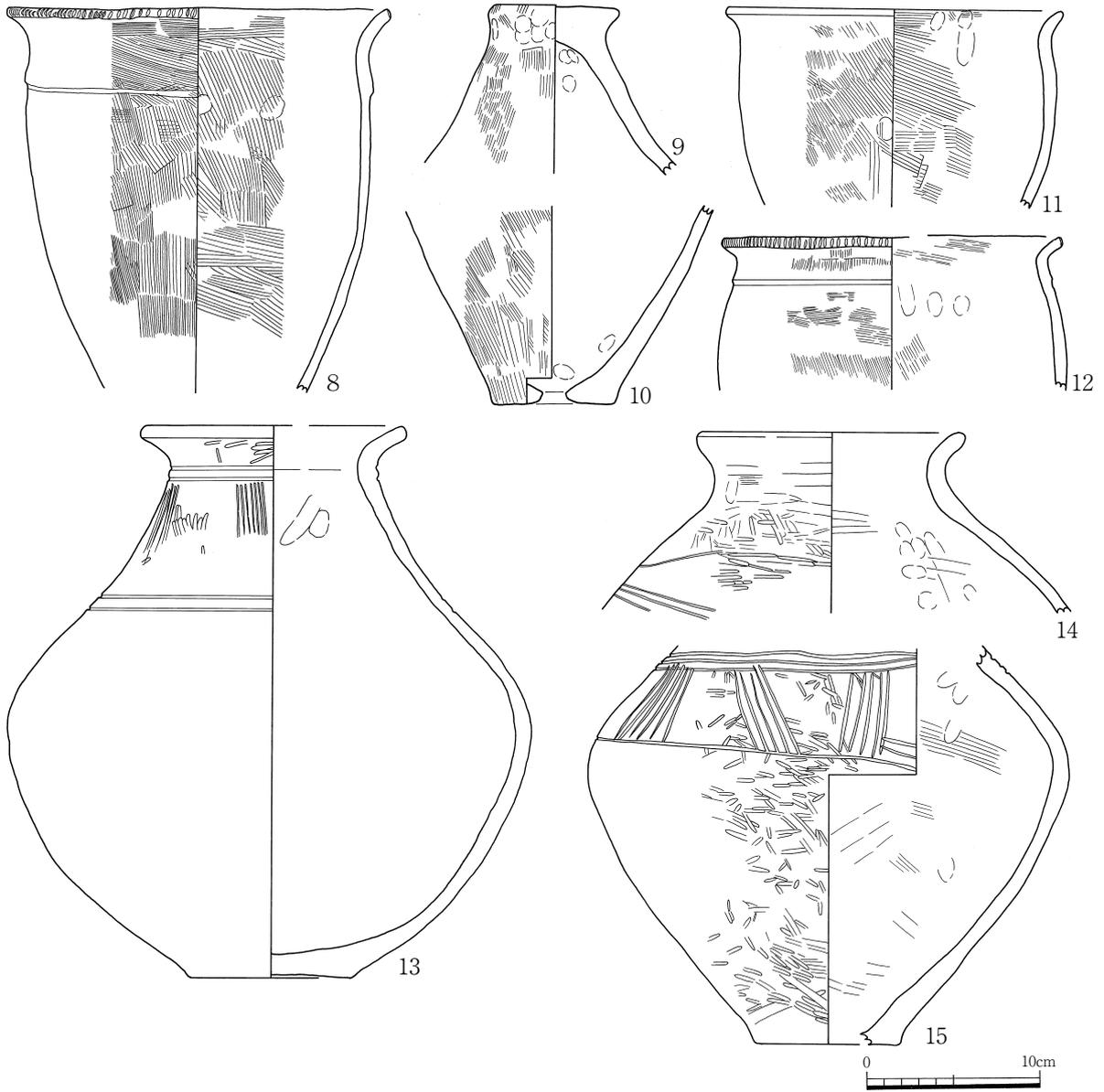
土器でもっとも出土数が多いのは甕で、口縁片で173点が出土している。上胴部まで残存しているものが少なく、2条沈線が巡るものが3点出土しているほかは、有段が4点出土している。壺では16点が出土し、点数は少ないものの比較的大きな破片が多いことが特徴である。13は歪みが大きく不安定な器形を呈している。また、壺の胴部文様では山形文、重弧文、斜格子文が出土している。鉢は11点、蓋が1点出土している。また、混和剤を含まない粘土塊3点が出土している。

石器で注目されるのは19で、サヌカイト原石での搬入形態を考える上で好資料である。

SK1008の時期は埋土中での時期差はみられず一括資料として考えると、前期中葉前半と考えられる。また遺構の性格は床面には平坦面が少なく掘り鉢状であること、他の土坑と比較して深いことなどから貯蔵穴の可能性が考えられる。



C1-12 図 C1SK1008(1)



C1-13 图 C1SK1008(2)

C1SK1009(C1-14 図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-29°-E

規模；(1.6)m×(0.8)m **深さ**；0.09m **断面形態**；皿状

埋土；暗灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北側でSD102 に中央部を横断された状態で検出した。北側部分の削平が著しく、検出時わずかに輪郭が残るのみであった。残存する南側部分の埋土は約 10cmが残存し、出土遺物は如意形口縁 1 点のみであった。SK1009 の時期は平面プラン、断面観察ともSD102 に切られており弥生時代前期中葉と考えられる。

C1SK1010B(C1-14 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-21°-E

規模；1.2m×1.0m **深さ**；0.07m **断面形態**；皿状

埋土；黄灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；前にSK1010Aの埋土である灰色粘砂土がSD102 を切った状態で検出し、約 5cmの埋土を除去すると、SD102 南側でSK1010Bを検出した。SK1010Aからは出土遺物はないが、灰色土が埋土になっていることから中世以降と考えられる。SK1010Bは灰褐色系の埋土で約 7cmが残存しており、如意形口縁 1 点と底部 2 点が出土している。SK1010Bは弥生時代前期中葉の遺構と考えられる。

C1SK1011(C1-14 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-60°-W

規模；2m×0.7m **深さ**；0.2m **断面形態**；皿状

埋土；黒灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区北側でSD102 に長辺が沿うような状態で検出し、北側部分はSD102 に切られる。SD102 の北側では検出できなかった。埋土は黒褐色土で約 10cmが残存する。下層は黄褐色土にわずかに黒褐色土が混じっており、床面の可能性がある。出土遺物は碎片のみであるがいずれも前期の土器で口縁部では甕 6 点、鉢 2 点が確認されており、底部では大型壺とみられるものが 1 点確認されている。SK1011 は前期中葉と考えられる。

C1SK1012(C1-14 図)

時期；弥生I **形状**；円形 **主軸方向**；N-65°-W

規模：1.13m×1.17m 深さ：0.12m 断面形態：皿状

埋土：黒褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)、石器(石匙)

所見：調査区北側でSD102と切り合った状態で検出している。埋土は黒褐色土で円形プランを持つ。残存状況は不良で埋土は約10cmが残存するのみであった。埋土中から出土した土器は細片のみで口縁部は10点で内9点は前期と考えられ、1点は不明である。石器は検出面からサヌカイト製の縦型石匙が出土しており、土器に伴う時期のものと考えられる。SK1012は弥生時代前期中葉と考えられる。

C1SK1014(C1-14 図)

時期：弥生I 形状：円形 主軸方向：N-35°-E

規模：1.5m×1.4m 深さ：0.4m 断面形態：箱形

埋土：褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)

所見：調査区北西部で検出しSK1007、SK1008、SK1015と隣接している。埋土は褐色土系で平面プランは円形である。遺構の埋土は検出面から約40cmが残存しており、調査区の中では残存状況は良好である。埋土中から出土した遺物は土器の細片のみで、図示できるものはなかった。口縁部で器形が判断できるものが24点で、甕が18点、鉢が6点、底部では器形は不明であるが、靱圧痕が残るものが1点出土している。

遺構の性格は不明であるが、隣接するSK1007、SK1008とほぼ同一規模、平面プランを持ち安定した層位堆積がみられるなど埋没状況にも共通性がみられることから、同じ性格を持ち並存していた可能性が考えられる。時期は弥生時代前期中葉前半と考えられる。

C1SK1015(C1-15 図)

時期：弥生I 形状：長方形 主軸方向：N-32°-E

規模：1.55m×0.7m 深さ：0.6m 断面形態：逆凸状

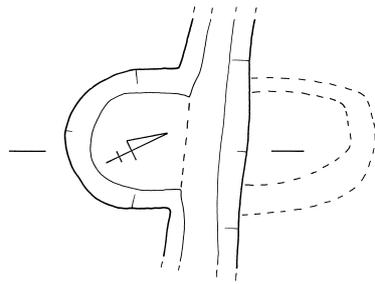
埋土：暗灰褐色土

付属遺構：ピット 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃)

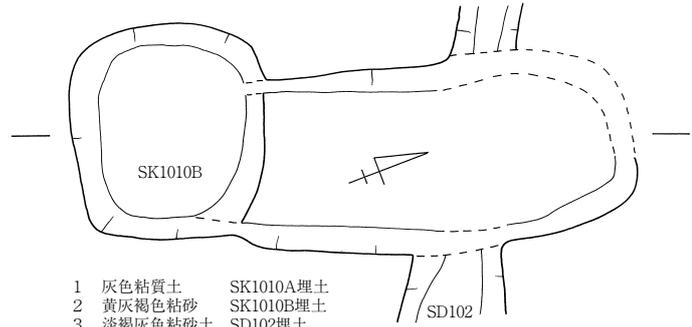
所見：調査区北西部SK1014に隣接して検出した。平面プラン長方形の小型の土坑である。埋土は暗褐灰色土であるが、遺構北側と南側で堆積状況が異なっている。南側は炭化物が多く、3層上面に層状に堆積しており、北側は見られない状況であった。埋土を除去すると、中央部から直径約25cmのピットを検出できた。

埋土中から土器では壺、甕、鉢が出土しており、壺では細片で図示できなかつたが木葉文とみら



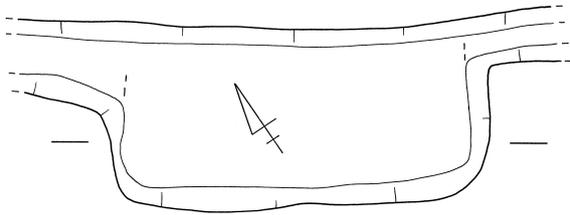
C1SK1009

- 1 暗灰褐色粘砂土
- 2 淡褐灰色砂質土砂まじり (黄色ブロック混じる)



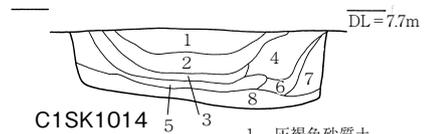
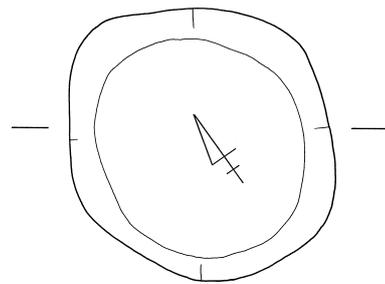
C1SK1010

- 1 灰色粘質土 SK1010A埋土
- 2 黄灰褐色粘砂 SK1010B埋土
- 3 淡褐灰色粘砂土 SD102埋土



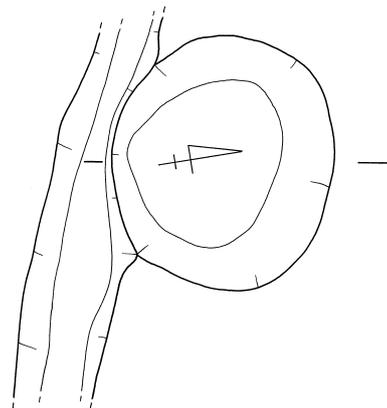
C1SK1011

- 1 黒灰褐色粘砂土
- 2 黄灰色砂質土 (黒褐ブロック混じる)
- 3 灰色粘質土



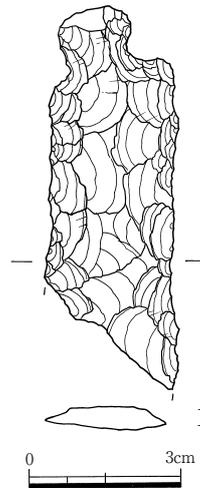
C1SK1014

- 1 灰褐色砂質土
- 2 黒色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄灰色砂質土
- 5 淡黄褐色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 淡褐色砂質土
- 8 黒褐色粘質土



C1SK1012

- 1 淡褐色砂質土
- 2 黒褐色粘質土



C1-14 ☒ C1SK1009~1012・1014

れる文様のものも出土する。甕は有段甕が3点出土し、内1点は口縁部をつまみ出し刻目がみられる。細片が多いが口縁下部に複数条沈線が施されたものは確認できなかった。土器の時期は弥生時代前期中葉前半の時期とみられる。石器はいずれもサヌカイト製打製石鏃で凹基式2点、平基式1点で薄く重量は0.6gから1.4gと非常に軽い。

遺構の性格は規模が小さく、幅が狭い遺構で中央部が掘り窪まれた状況は、他の前期土坑にはない特異な性格を有するものと考えられ、同時期のSK1014に隣接していることからSK1014に付属した柱穴の可能性も考えられる。

C1SK1019(C1-15 図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-39°-E

規模；1.1m×0.9m **深さ**；0.17m **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区北側で検出し、SD102の南側、SK1013と隣接し、SK1020と切り合う。楕円形の平面プランを持ち埋土は黒褐色土である。遺構の残存状況は不良で、出土遺物も細片が出土するのみであったが、壺では木葉文2点、山形文、重弧文など胴部文様のわかる細片4点が出土している。甕は上胴部まで残存するものがないが、甕口縁7点が出土し口縁下端刻目が3点出土している。遺構の性格は不明である。遺物の時期は弥生時代前期中葉と考えられる。

C1SK1020(C1-15 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-33°-E

規模；1.85m×1.1m **深さ**；— **断面形態**；—

埋土；暗灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

所見；調査区北側でSK1019に隣接して検出し、残存状況は不良である。埋土中から出土した遺物は細片のみであった。口縁部で器種が判断できるものが9点出土しており、壺1点、甕6点、鉢1点、蓋1点である。甕では上胴部まで残存するものは少ないが、有段甕1点と口縁下に沈線の施されないうもの2点がみられる。土器の時期は弥生前期中葉と考えられる。遺構の性格については不明である。

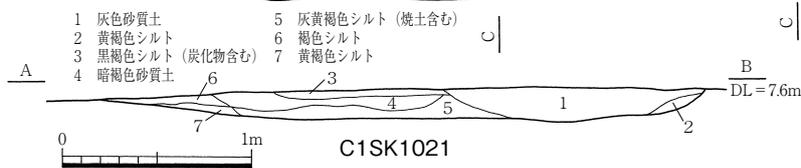
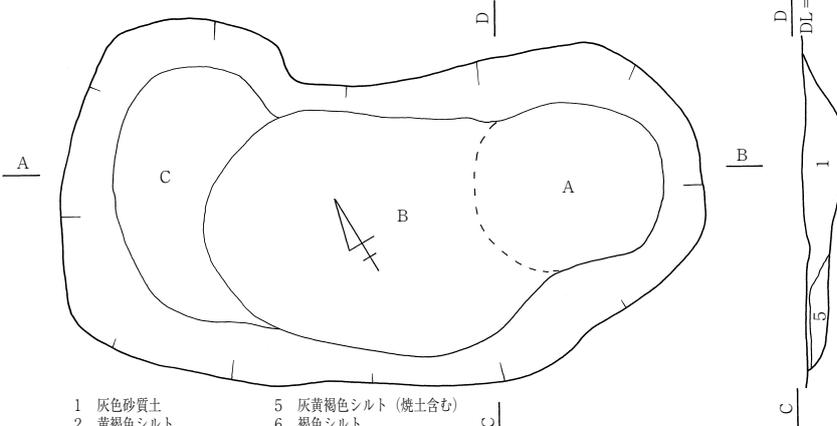
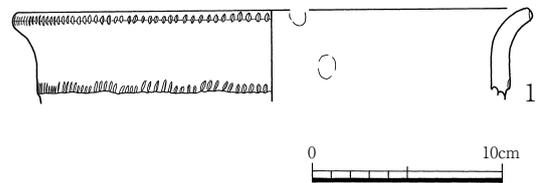
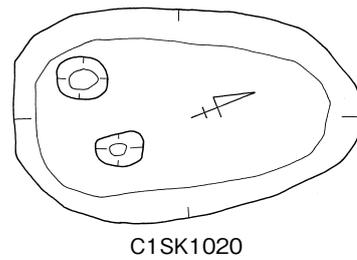
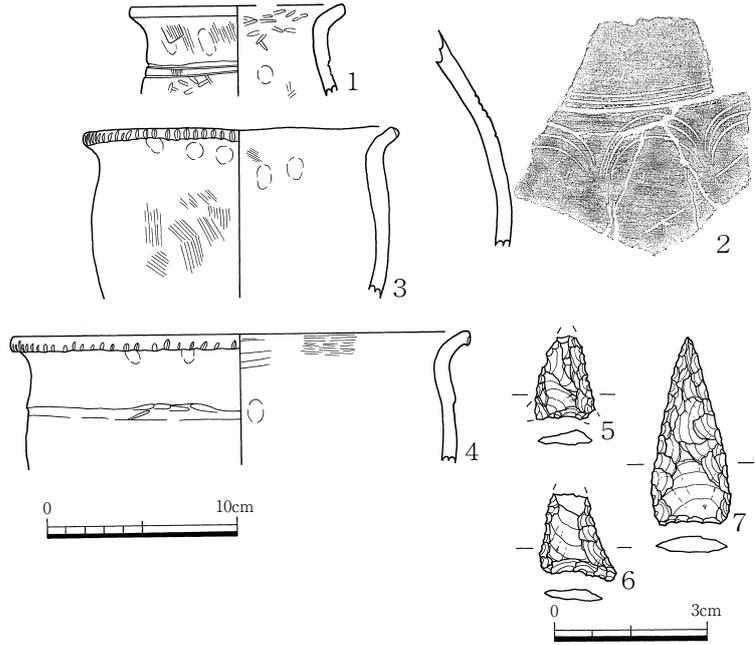
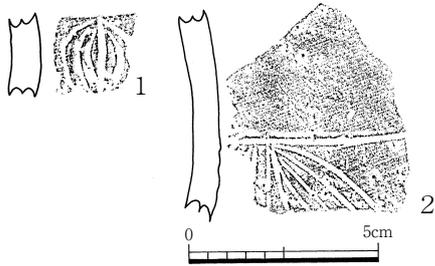
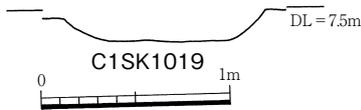
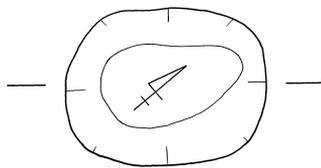
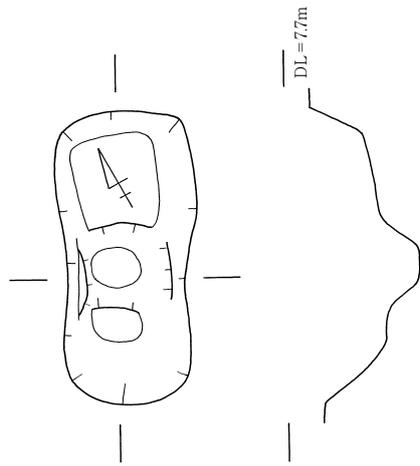
C1SK1021A、B、C(C1-15 図)

時期；A近世以降 B、C弥生I **形状**；A楕円形、B長方形、C楕円形

主軸方向；B N-60°-E C N-35°-E

規模；A 1.5m×1.5m B (1.5)m×1.6m C 1.9m×(0.7)m **深さ**；0.2m

断面形態；皿状 **埋土**；A 灰色砂質土 B 褐色土 C 黄褐色土



C1-15 図 C1SK1015, 1019~1021

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)、石器(石鎌)

所見：調査区北東部で、数基の土坑が切り合ったような埋土の状況で検出した。検出面は黄褐色砂質土で洪積礫層が一部露頭している状況であり、削平が著しく、肩部も流失している状況であった。SK1021Aは埋土が灰色粘砂土でSK1021Bの埋土、黒褐色土を切り込んでおり、中世以降、近現代の可能性が高いと考えられる。

SK1021Bは黒褐色粘質土の埋土に炭化物、焼土を含んでいた。長軸の復元長は約2mで幅約1.6mの長方形の土坑が復元できる。削平のため出土遺物は少なく、細片で図示できる資料はなかった。埋土や遺構の形態、土器細片の胎土などから弥生時代前期の可能性が高い。

SK1021CはSK1021Bに切られた状態で検出したが、埋土による切り合い確認はできなかったが、SK1021Bとみられる部分に炭化物、焼土小塊が多く分布しており、SK1021Bによって切られていたと考えられる。SK1021Bの埋土はほとんど残存していないため出土遺物もない状況であった。SK1021Cの時期は切り合いから弥生時代前期の可能性が高いと考えられる。

C1SK1022(C1-16 図)

時期：弥生I 形状：方形 主軸方向：N-15°-E

規模：2.2m×2.1m 深さ：0.2m 断面形態：逆台形

埋土：灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

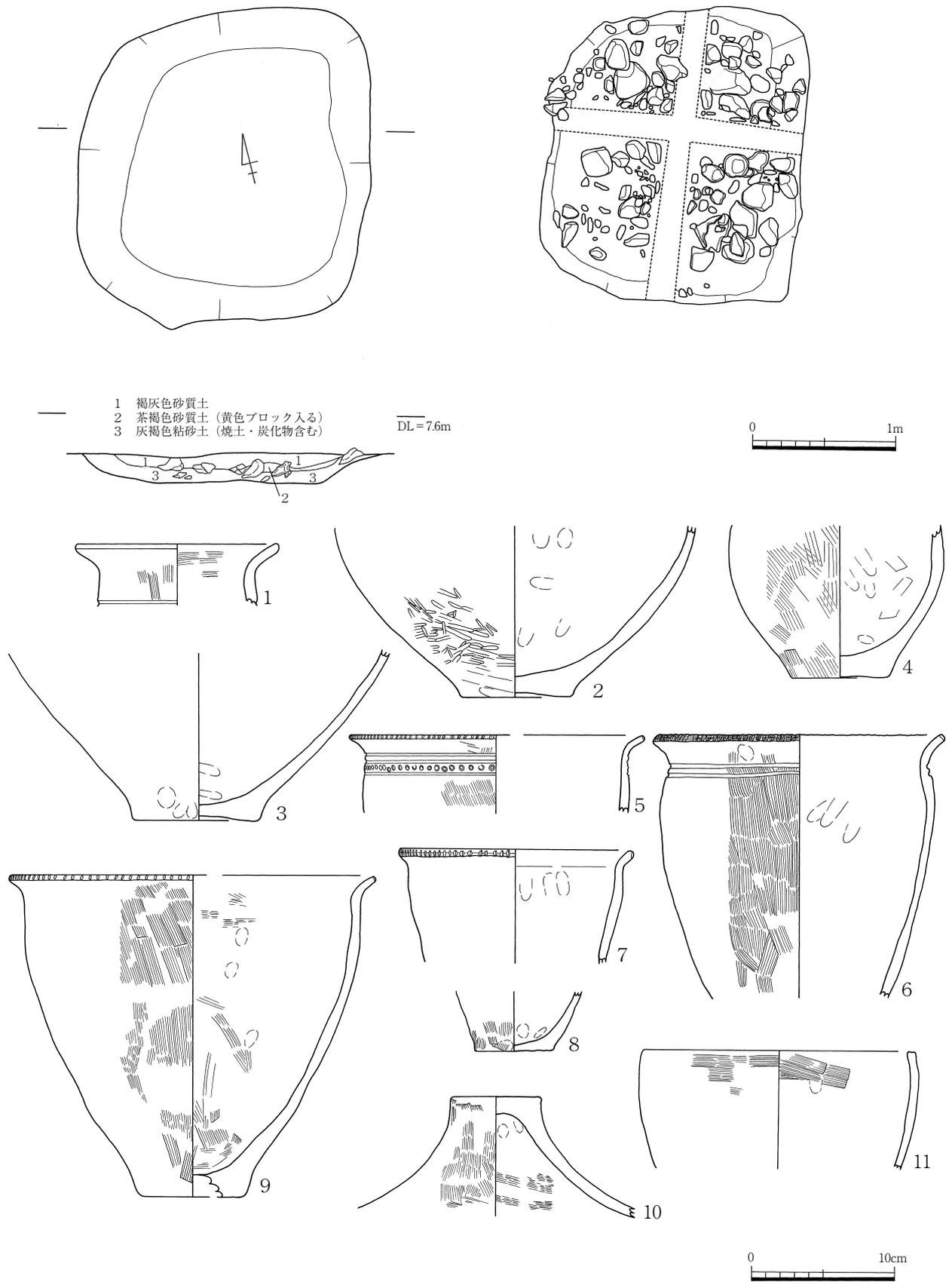
所見：調査区北東部でSK1021に隣接し検出した。平面プランは方形で、埋土は灰褐色土であった。検出面は黄褐色シルトに礫が露出している状態であった。

遺構埋土は約20cmが残存し、埋土中には人頭大の円礫が多く入っており、特に3層上面に多い状況であった。人頭大円礫は床面からも検出しており、この床面から検出した礫は地山礫と考えられる。

埋土中の人頭大礫を除去すると、床面直上の3層からは炭化物、焼土が多く検出し、出土した土器にも被熱によるとみられる赤色化がみられた。しかし、3層上面の円礫には被熱痕跡はみられなかった。

埋土中から出土した遺物は土器のみで、細片が多く、図示し得た土器も残存率は低かった。口縁部、底部から器種が判断できたものは壺5点、甕10点、鉢1点、蓋1点であった。甕は沈線が巡るもの2点、沈線がみられないもの2点を図示できた。土器の時期は弥生時代前期中葉の時期と考えられる。

遺構の性格は不明であるが、出土土器に被熱がみられ、炭化物、焼土を検出しており、その上面には被熱のみられない円礫が入っていた状況は土坑の廃棄が復元できる資料と考えられる。



C1-16 ☒ C1SK1022

C1SK1026(C1-17 図)

時期；弥生I 形状；隅丸方形 主軸方向；N-32°-E

規模；1.95m×1.6m 深さ；0.2m 断面形態；逆台形

埋土；淡褐色土

付属遺構；ピット 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)

所見；調査区北側、SD102 の南側でSK1025、SK1028 と隣接し検出した隅丸方形の土坑。検出埋土は淡褐色土で約 20cmが残存していた。第 2 層は炭化物が含まれており、第 3 層は黄褐色土に暗灰褐色土が混じった状態であったため、除去したが生活面であった可能性が高い。床面中央部からは直径約 20cm、深さ 10cmの小ピットが検出している。

埋土中から出土した遺物は少なく土器細片ばかりで、口縁部で器形が確認できたのは如意形口縁 13 点と、直縁口縁の鉢 3 点と蓋 1 点であった。出土した土器はいずれも弥生時代前期中葉の土器と考えられる。

SK1026 は壁溝を確認できなかったが、SK1008 と規模や中央部からピットが検出される特徴に共通性がみられることから同一の性格を持つ可能性が高いと考えられる。

C1SK1034(C1-18 図)

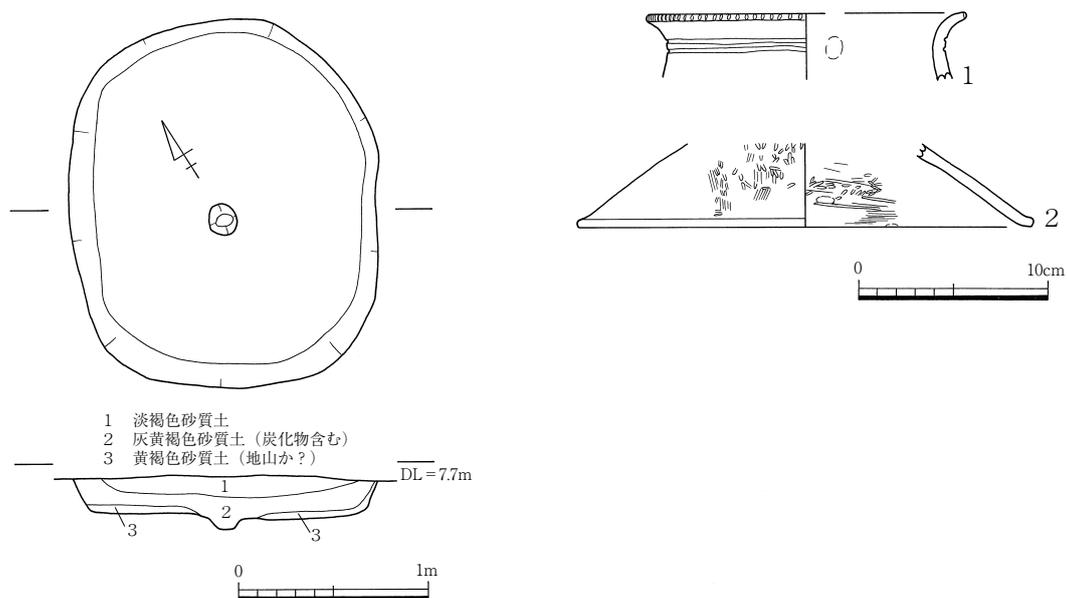
時期；弥生I 形状；長方形 主軸方向；N-50°-W

規模；2.2m×1.2m 深さ；0.15m 断面形態；逆台形

埋土；暗灰褐色土黄色ブロック多く混じる

付属遺構；ピット 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、蓋)、石器(石鏃、石斧)



C1-17 図 C1SK1026

所見：調査区東側、SD105 とSD102 の間部分から、P1178 と切り合った状態で検出した。検出時、埋土は灰褐色土で平面プランは長方形であった。埋土は約 20cm が残存しており、単層であったが灰褐色土に黒褐色、黄褐色ブロックが混じっており、部分によって混じり方にばらつきがみられた。埋土除去後床面から直径約 25cm、深さ約 10cm の小ピットを中央部よりやや偏った部分から検出している。

埋土中から出土した遺物は土器、石器であるが、出土量は少ない。土器は細片のみが出土しており、口縁部で器形が判断できたものは、如意形口縁 8 点と蓋 1 点のみであり、口縁下部まで残存していたのは甕 2 点で、内 1 点は 2 条沈線の上に刺突文が施されていた。石器は 2 点図示でき、サヌカイト製の凹基式打製石鏃は全長 2.3cm で重量は 0.6g と軽く非常に薄く作られる。磨製石斧は緑色岩製のもので大型蛤刃石斧と考えられ、一部欠損しているが基部が刃部に対して小さくなっている。また断面形は長方形になっており、典型的な大型蛤刃石斧とは様相を異にしている。遺物の時期は弥生時代前期中葉の時期と考えられる。

遺構の性格であるが、SK1002 など床面に小ピットを持つ土坑に比べて規模は一回り小さいが、同一の性格を持つ可能性が考えられる。

C1SK1036 (C1-19・20 図)

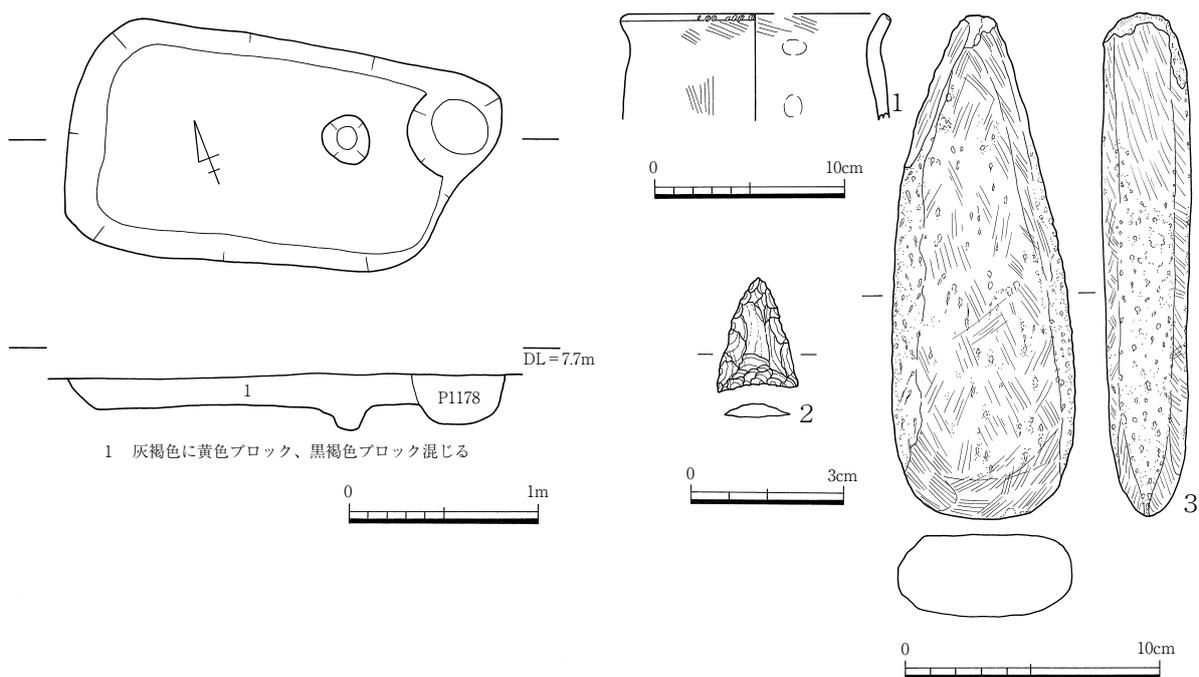
時期：弥生I **形状：**長方形 **主軸方向：**N-31°-E

規模：2.4m×1.7m **深さ：**0.25m **断面形態：**箱型

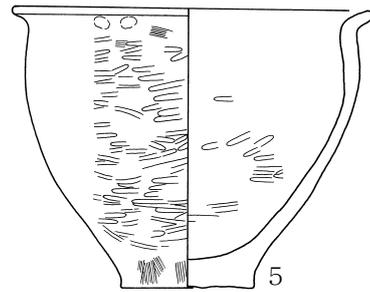
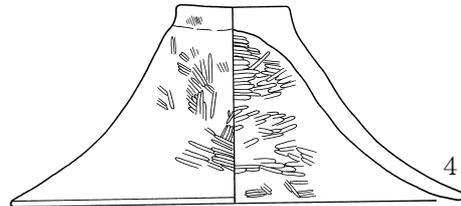
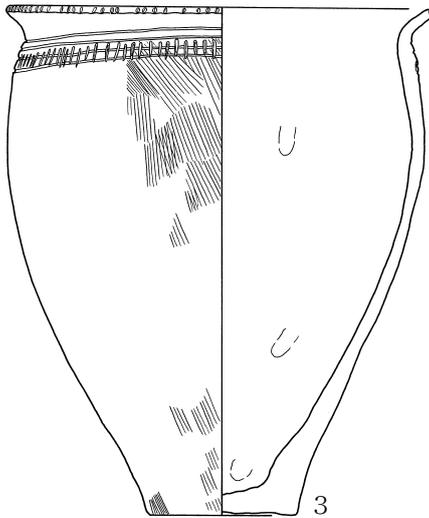
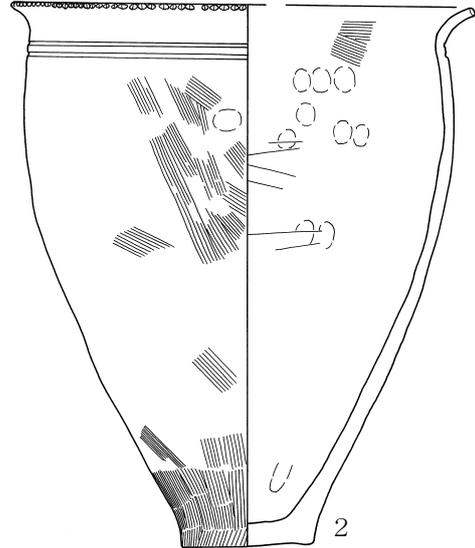
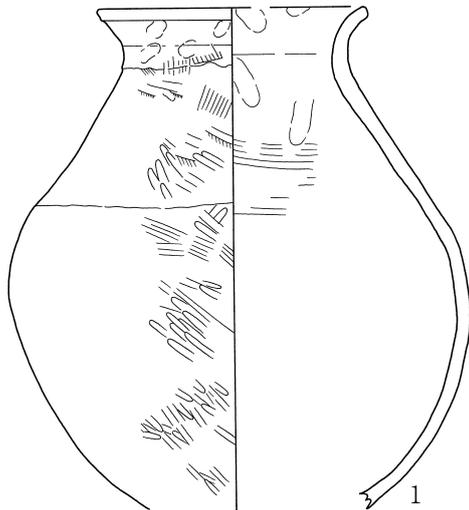
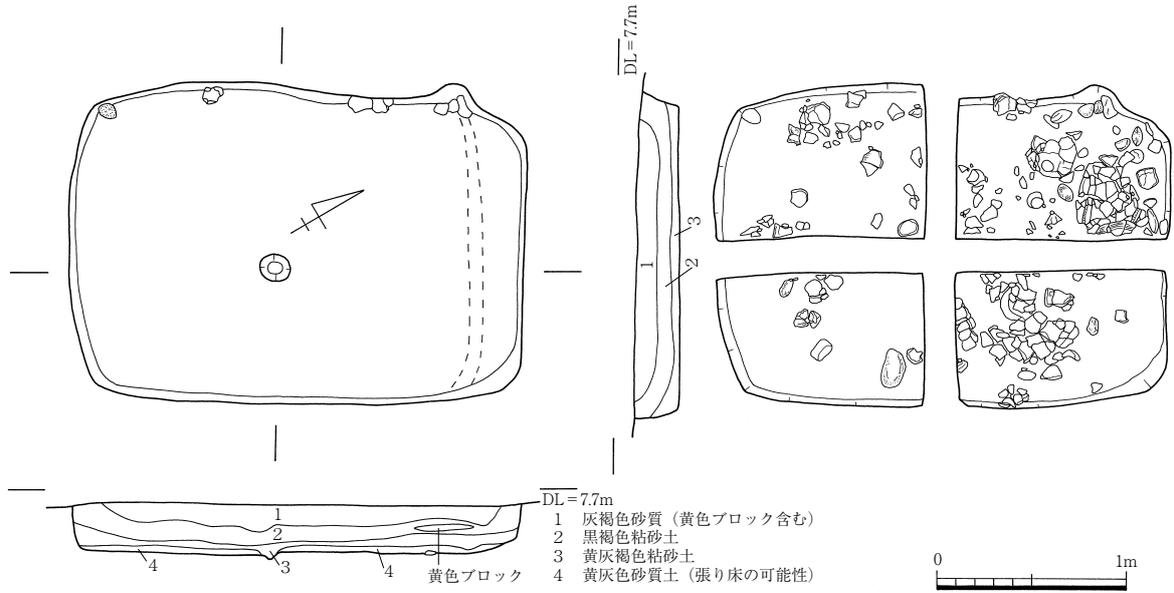
埋土：灰褐色土、黒褐色土

付属遺構：ピット、壁溝 **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器(石鏃)



C1-18 図 C1SK1034

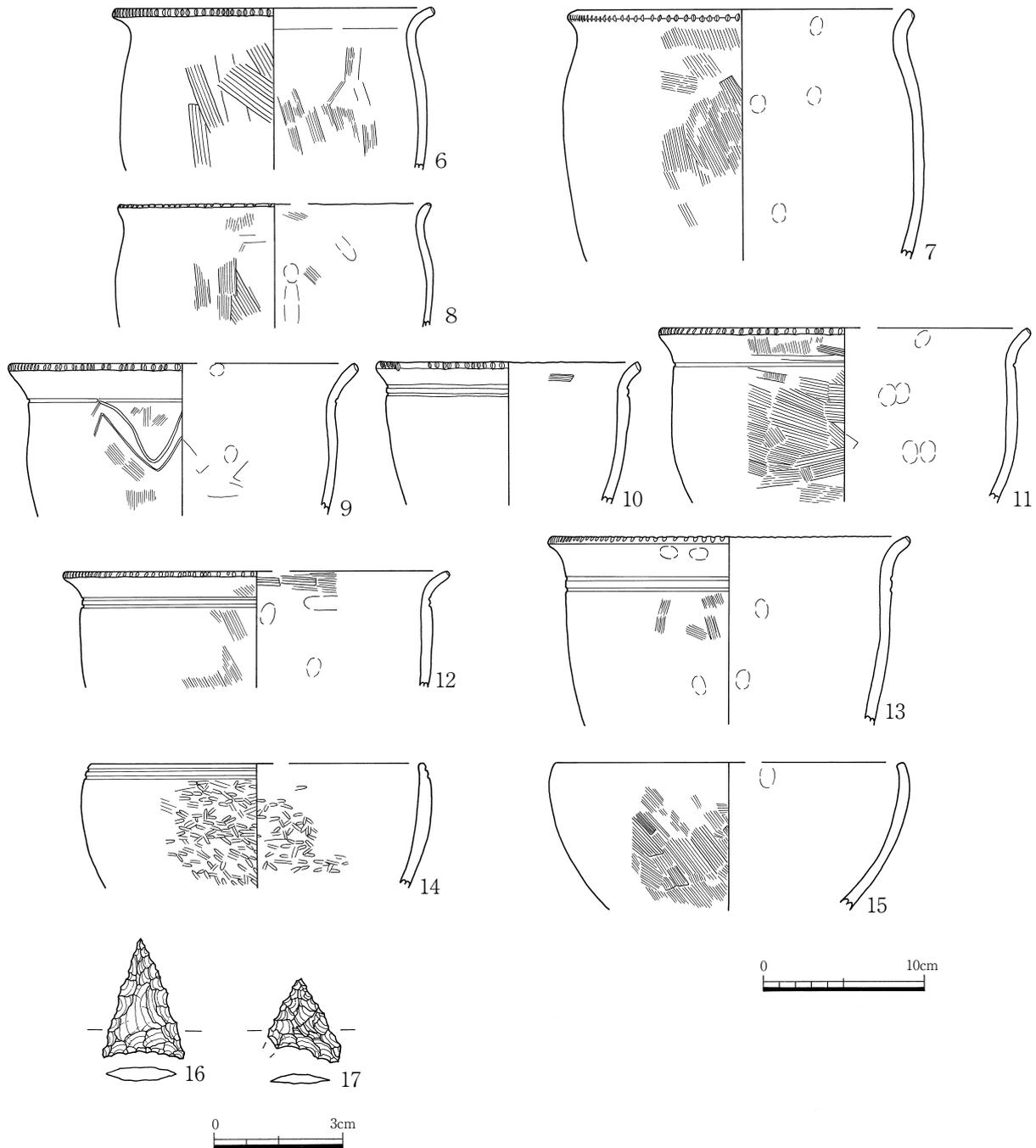


C1-19 図 C1SK1036(1)

所見：調査区北側、SD105 とSD102 の間部分で検出した。検出時のプランは長方形で埋土は灰褐色土であった。埋土除去後、床面中央部から直径約 15cm、深さ約 10cmの小ピットと北側壁際から約 20cm離れ平行に幅約 8cm、深さ 3cmの壁溝と考えられる小溝を検出している。

埋土は約 25cmが残存しており、埋土には最下層の第 4 層を除いて黄褐色土がブロック状に入っている状況であった。他遺構で多くみられるような炭化物、焼土はみられなかった。第 4 層は黄灰色で地山の黄褐色とは異なるが、生活面と考えられ、この面から付属遺構が掘り込まれていた。

埋土中からは多量の土器が出土している。出土状況は北側部分に集中がみられ、つぶれたような



C1-20 図 C1SK1036(2)

状態で完形復元できた土器が4個体出土している。その他でも比較的大きな碎片が多い状況であった。出土した土器では口縁部の形態からして壺3点、如意形口縁(甕、鉢)63点、直縁鉢5点、蓋2点を数えることができた。また、山形文、重弧文、木葉文が施された壺とみられる細片が出土している。甕では口縁下に複数の沈線が巡る甕が出土しており、3は上に1条沈線が巡り下2条沈線には直線的な刻目が施され、2段の格子状になった文様が施されている。その他では、甕の底部とみられる土器から刳圧痕が確認されている。石器では打製石鏃が2点出土しており、いずれも凹基式無茎石鏃で16は全長2.8cm、重さ1.1g、17は全長2.0cm、重さ0.5gで扁平に薄く作られる。遺物は弥生時代前期中葉のものと考えられる。

遺構の性格は不明であるが、中央部にピットがみられ壁溝が巡ることなどからSK1002などと同様の性格が考えられる。ほぼ完形の甕が2個体、蓋が1個体出土しており、壺の出土比率が少ない特徴があり遺構の性格に関わる可能性が考えられる。

C1SK1037(C1-21 図)

時期：弥生I 形状：長方形 主軸方向：N-30°-E

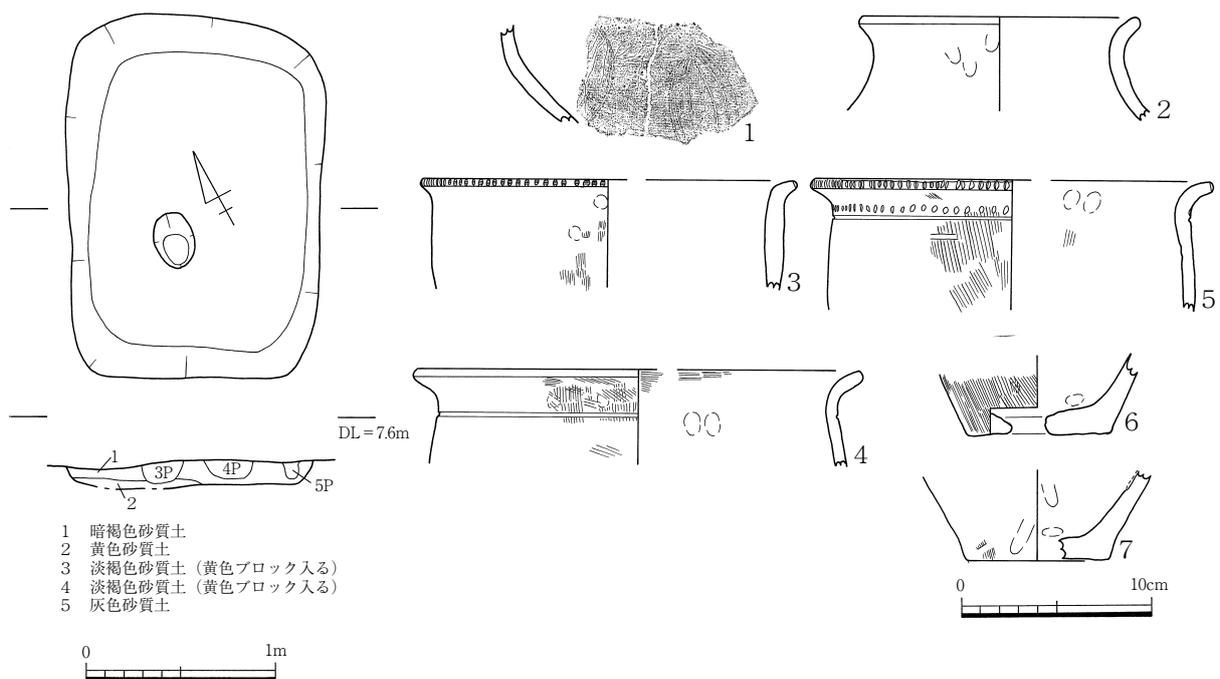
規模：1.9m×1.3m 深さ：0.14m 断面形態：箱形

埋土：暗褐色土

付属遺構：ピット 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)

所見：SD105とSD102の間部分で検出した。周辺はピットを多く検出しており、SK1037を切った



C1-21 図 C1SK1037

状態のピットも検出している。また約4m南では、ST101を検出している。検出したプランは長方形で、埋土は暗褐色土である。床面からは中央部で小ピットを検出している。

遺構の残存状況は不良で埋土は約10cmしか残存していない。セクション図では埋土は2層であるが、第2層は地山で床面とみられ、残存する埋土は暗褐色土単層と考えられる。

埋土中から出土した遺物は残存状況に比して多いが、細片が多い状況であった。口縁部から器種が判断できるものは、壺5点、如意形口縁32点、直縁鉢1点であった。壺では胴部片であるが無軸の木葉文が確認できる1、甕では口縁下部に刺突文と沈線が巡る4、底部では中央部に穿孔したと考えられる孔がみられる6を図示できた。7は粘土が台形状に脱落しており土器成形の手がかりになると考えられる。土器の時期は弥生時代前期中葉と考えられる。

遺構の性格は長方形で中央部にピットを持つ土坑と同じと考えられる。

C1SK1038(C1-22 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-30°-W

規模：2.1m×1.4m 深さ：0.3m 断面形態：皿状

埋土：暗灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃)

所見：調査区西側でSD105とSD102の間部分から検出した。検出時のプランは不整形で遺構の切り合いが想定されたが、埋土は同一の灰褐色土で平面確認では判断できなかった。

断面確認を行ったところ、遺構西側部分では第6層の淡褐色砂質土がみられ、南東部では第1層の灰褐色土、北東部では黒褐色土がそれぞれ優位な堆積状況であり、それぞれが遺構に対応している可能性が考えられたが、遺構掘削の段階で区別して掘削できなかった。

遺構埋土から出土した土器は細片が多く、出土状況では第1層部分からの出土が多く、有茎の磨製石鏃も2層から出土している。出土土器はいずれも弥生時代前期中葉の時期に属すると考えられる。

SK1038は比較的規模の小さな土坑3基が切り合った状態と考えられ、第1層が埋土になっている土坑がもっとも新しいと考えられるが、出土土器は全て弥生時代前期中葉と考えられ、他の土坑も時期差のない弥生時代前期と考えられる。遺構の性格は不明である。

C1SK1040(C1-23 図)

時期：弥生I 形状：長方形 主軸方向：N-47°-E

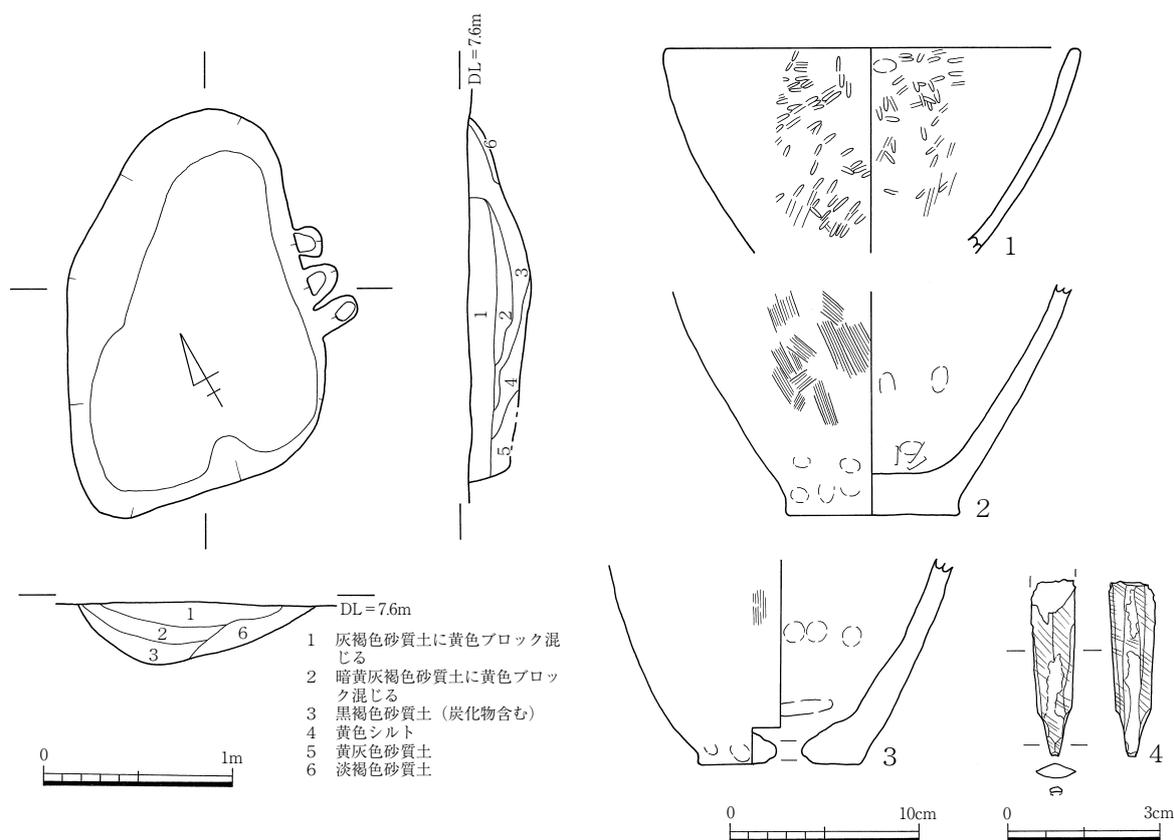
規模：(2.4)m×1.4m 深さ：0.3m 断面形態：逆台形

埋土：暗灰褐色土

付属遺構：中央ピット 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、紡錘車)

所見：調査区西側、SD105とSD102の間部分からSK1039に切られた状態で検出した。SK1039は



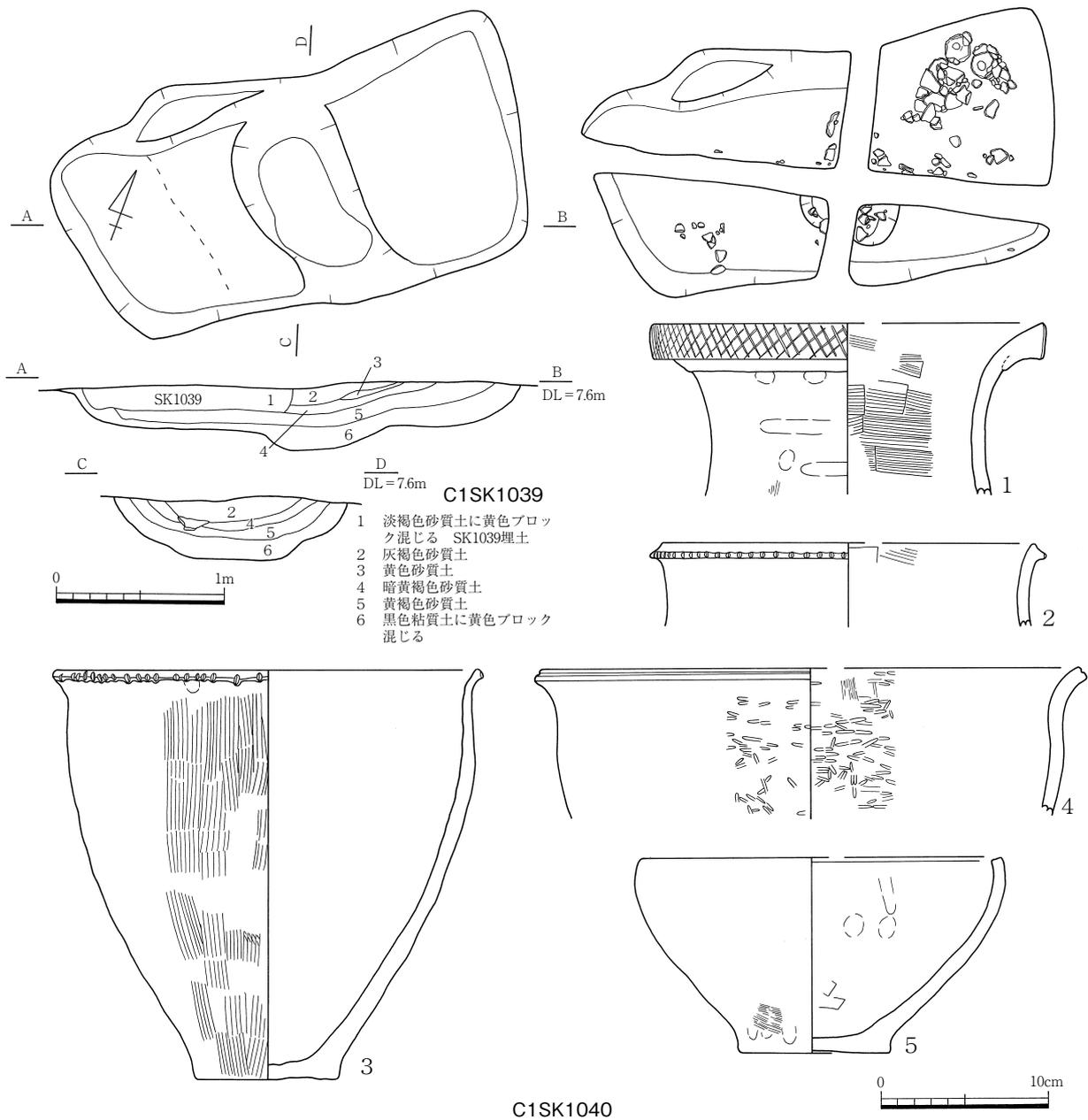
C1-22 図 C1SK1038

ほぼSK1040の中に収まった状態で規模は1.3m×1.3mの正方形で深さは約10cmであった。SK1039からの遺物出土は少ないが1が出土しており、弥生時代中期の可能性が考えられる。床面がSK10410の埋土第5層であるため、SK1040掘削後は消滅した。

SK1040は埋土が約30cm残存しており、残存状況は比較的良好な状態であった。埋土を除去すると、中央部から規模1.0m×0.7m、深さ約10cmの土坑状の深まりを検出した。

埋土中からは弥生前期土器が出土している。出土した遺物は5と3がつぶれたような状態で出土し、完形復元できた以外は細片が多かった。遺物の出土状況は北側に偏った状況が見られた。4の甕は口縁のみの出土であるが、口縁端部を摘み出し、突出させ刻目が施される特徴を持っており、口縁形態も如意形とは相違がみられ、当該調査区で出土した弥生前期中葉の甕とは異なったもので前回調査のI-1期の甕に類似する。図示できなかったが土器転用紡錘車や穿孔されている底部も出土している。

遺構の時期は弥生時代前期中葉以前と考えられるが詳細な時期は不明である。



C1-23 図 C1SK1039・1040

C1SK1041 (C1-24 図)

時期；弥生I 形状；(長方形) 主軸方向；N-72°-W

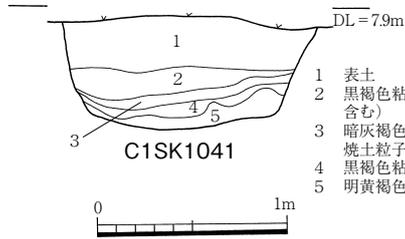
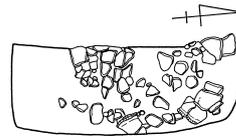
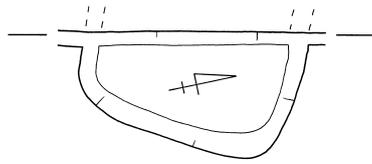
規模；(0.7)m×1.2m 深さ；0.33m 断面形態；箱形

埋土；黒褐色土

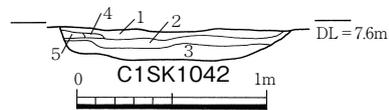
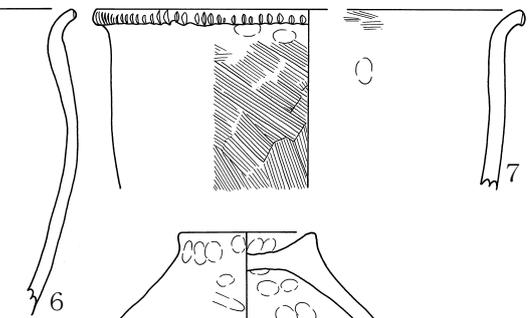
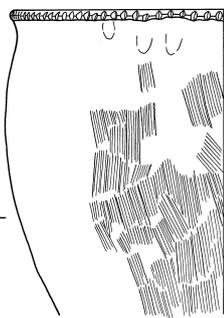
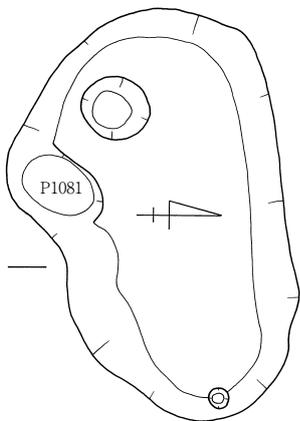
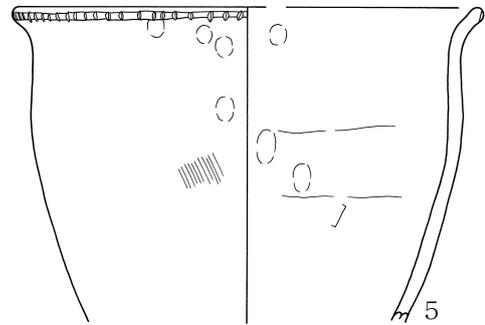
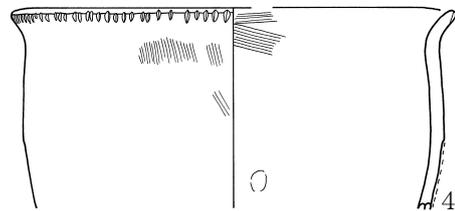
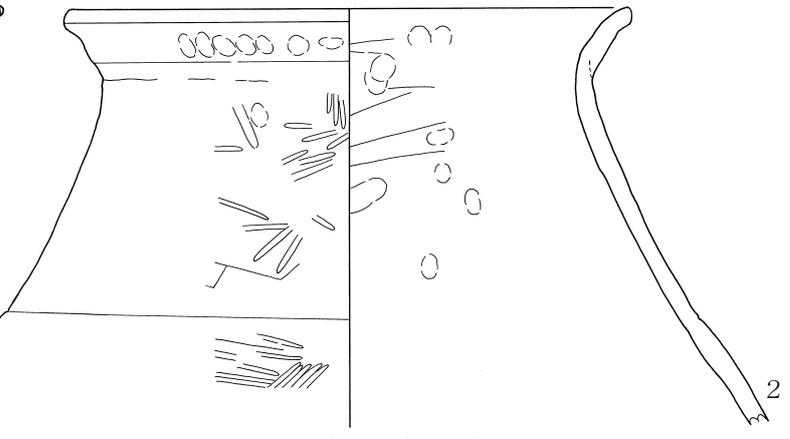
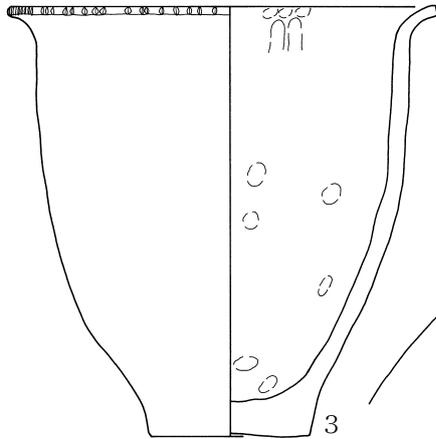
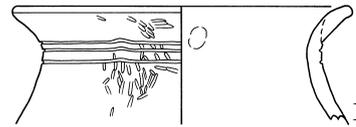
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器未製品

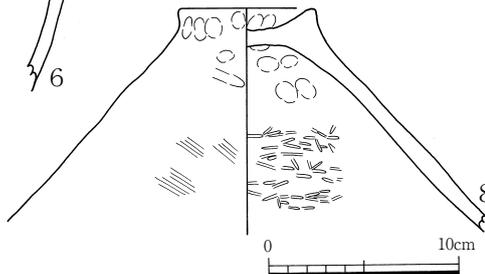
所見；SD105 とSD102 の間部分で検出したが、調査区西端部で検出したため東側部分を調査区によって切られている。



- 1 表土
- 2 黒褐色粘質土 (炭化物含む)
- 3 暗灰褐色シルト (赤色焼土粒子含む)
- 4 黒褐色粘質土
- 5 明黄褐色粘質土



- 1 灰褐色砂質土
- 2 黄褐色シルト
- 3 褐色シルト
- 4 褐色シルト砂質土
- 5 にぶい黄色砂質土



C1-24 図 C1SK1041・1042

検出埋土は黒褐色土であるが、調査区壁で断面確認を行ったため、第1層は表土になっている。埋土第2、3層には炭化物や、焼土と考えられる赤褐色の粒子が入っていた。

遺物出土は遺構の残存が悪かったが比較的多く出土しており、大型壺口縁2や甕3はつぶれたような状態で検出し、3はほぼ完形に復元できた。2は口縁部がほぼ全周復元でき西側調査区で胴部以下の出土が期待されたが出土はなく完形復元できなかった。その他、器種が確認できた土器では壺、甕、蓋が出土している。甕では6点を図示することができたが、図示できなかったものにも口縁下部に沈線がみられないことが確認できた。土器の時期は甕の特徴から前期中葉前半と考えられる。

石器では頁岩と考えられる石材の縁辺部を整え、表裏両面を研磨している石器の未製品と考えられる石が出土している。

遺構の性格は大型壺が出土していることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1042(C1-24 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-87°-E

規模：2.2m×1.2m 深さ：0.15m 断面形態：皿状

埋土：灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：SD105とSD102の間部分のピットを多く検出している部分から検出し、P1081に切られている。埋土除去後床面から直径30cm、深さ15cmのピットを検出している。

遺構の残存状況は不良で、埋土は約15cmが残存するのみであった。埋土は灰褐色土で遺物も多く含まない。出土した遺物は細片で図示できるものはなかったが、如意形口縁が7点出土しており甕と考えられる。出土遺物が少なく遺構の時期確定は困難であるが、埋土、規模、出土した口縁部のほとんどが如意形であることから、弥生時代前期の土坑と考えられる。

C1SK1046(C1-25 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-30°-E

規模：(2.2)m×1.4m 深さ：0.6m 断面形態：箱形

埋土：黒褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃、石斧)

所見：SD105とSD102の間部分でSK1044、SK1045の3基が切り合った状態で検出した。検出時のプランはL字状にSK1045とSK1046が交差しており、その交差部分にSK1044が切り込んだ状態であった。SK1045とSK1046とは直接切り合いはみられず、SK1044が最も新しいと考えられた。

SK1044の検出時のプランは1.0m×0.8mの楕円形で、埋土は暗灰色土であった。埋土中からの遺物の出土量は少なく、時期の確定は困難であった。

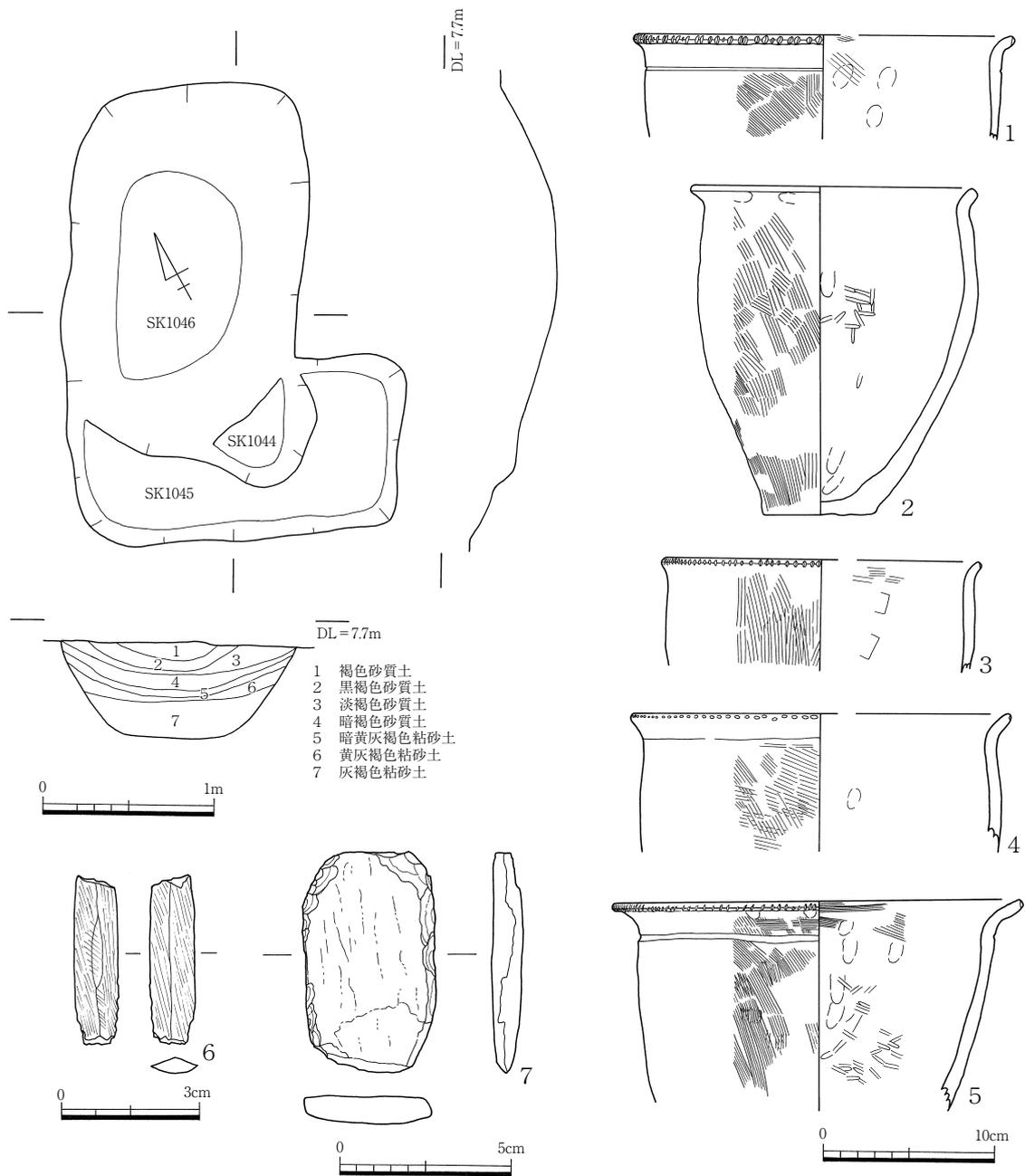
SK1045は長方形で規模は1.9m×1.1m、埋土は褐色土で焼土が混じっていた。残存状況は不良で

埋土はほとんど残存せず、わずかにプランが確認できる状態であった。埋土中よりの遺物出土もほとんどない状態で遺構の時期も確定できなかった。

SK1046 は長方形の土坑で、南側がSK1044 とSK1045 に切られていが、この土坑の床面が最も深いため、完掘時はほぼ完全なプランが確認できた。南側の張り出し部分はSK1045 掘削後検出しており、別遺構の可能性も考えられたがステップ状の部分の可能性が高い。

埋土は黒褐色土を主体としたもので約 55cm が残存していた。埋土の堆積状況は縞状の層位堆積で人頭大の円礫がまばらに入る。

埋土中から出土した遺物は土器、石器であるが、石器は磨製石鏃 1 点のみであった。出土した土器は 2 を除いて細片が多い状態であった。出土した土器の口縁部で器種が判断できるものは壺 6



C1-25 図 C1SK1044~1046

点、如意形口縁40点、直縁鉢2点であった。壺では大型壺の底部が1点出土している。如意形口縁で口縁下部まで残るものでは有段1点、無沈線20点、1条沈線1点、2条沈線1点が出土しており、口縁端部刻目では刻目が無いもの4点、下端刻目24点、全面刻目12点の割合になっている。SK1044出土の土器の時期は弥生時代前期中葉前半の可能性が高いと考えられる。

石器では黒色頁岩製磨製石鏃1点と小型の石斧が出土している。小型石斧は全長6.5cm、全幅3.9cmを測り、方形で中央部の断面形は箱形であるが、弥生時代前期に一般にみられる小型片刃石斧とは異なった特徴を持っており、石材は砂岩系の石で刃部は片刃で研磨されて作り出され、背面は自然面が残りやや丸みを帯びている。側面は敲打によって整えられる。

遺構の時期は弥生時代前期中葉前半で性格は不明であるが、遺構の床面が平らで、深いことから貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1047(C1-26 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-18°-E

規模；1.5m×(1.1)m **深さ**；0.3m **断面形態**；逆台形

埋土；灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋、ミニチュア土器)、石器(石鏃)

所見；SD105とSD102の間部分でSK1058と切り合った状態で検出した。検出時、SK1058との切り合いは平面確認では確認できなかったが、その後の断面観察によってSK1047がSK1058を切っている状態が観察できた。

SK1047の埋土は灰色砂質土に黄褐色土がブロック状に入る第6層が特徴的で、この層でSK1058との切り合いが確認できた。

埋土中から出土した土器の出土状況は、SK1058が比較的まとまった状態であるのに比べ、散漫な状況であり細片が主で出土量はやや少ない程度であった。図示できた遺物は如意形口縁鉢1点と、ミニチュア土器1点であった。その他図示できなかったが、壺1点、如意形口縁12点、蓋1点、直縁鉢1点が出土している。土器の時期は弥生前期中葉と考えられる。

その他、石器では薄く重量1.0gと軽いサヌカイト製凹基式の打製石鏃1点が出土している。

C1SK1058(C1-26 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-18°-E

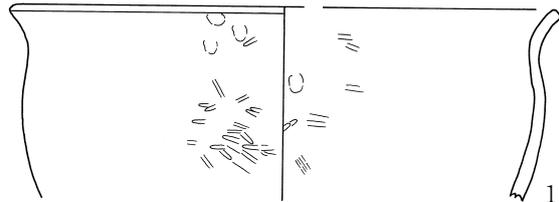
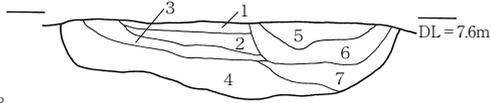
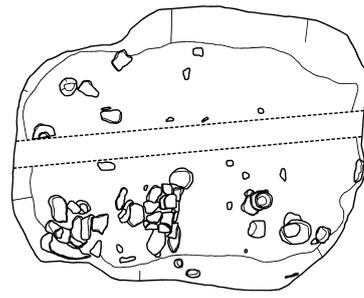
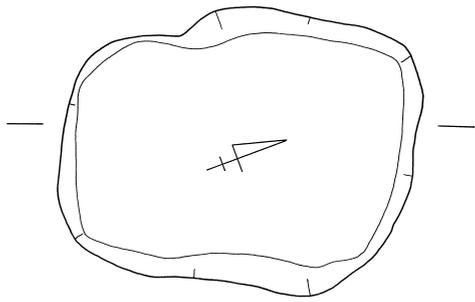
規模；1.9m×1.5m **深さ**；0.4m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、ミニチュア土器、紡錘車)、石器(不明石器)

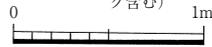
所見；SD105とSD102の間部分でSK1058と切り合った状態で検出した。検出時の埋土はほぼ同一の灰褐色土でプランによる確認はできなかったが、断面観察によってSK1047に切られていること



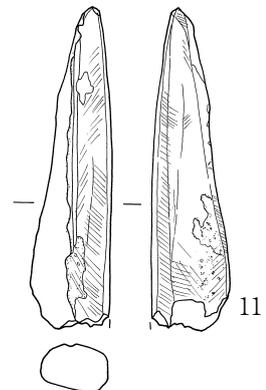
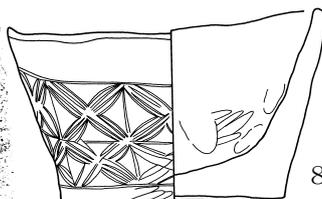
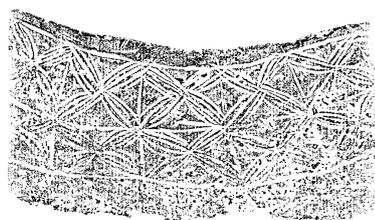
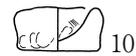
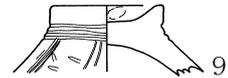
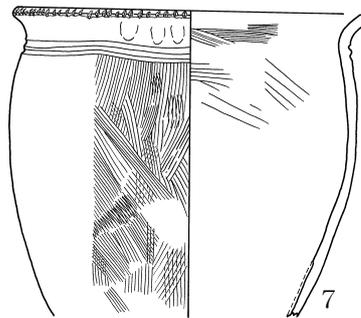
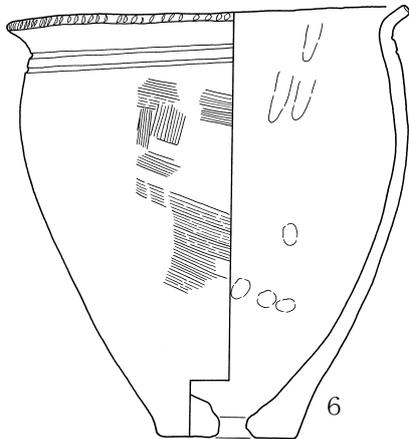
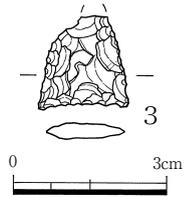
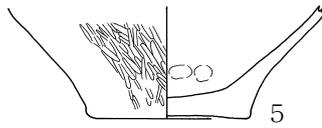
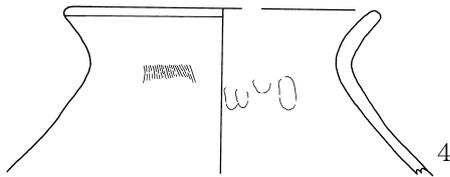
SK1058

- 1 灰褐色砂質土 (黄色ブロック多量に含む)
- 2 灰褐色砂質土 (黄色ブロック含む)
- 3 黒褐色砂質土 (黄色ブロック・炭化物含む)
- 4 褐灰色砂質土

- SK1047
- 5 灰褐色砂質土
- 6 灰色砂質土 (黄色ブロック含む)
- 7 黒褐色粘質土 (黄色ブロック含む)



C1SK1047



C1SK1058

C1-26 図 C1SK1047・1058



が確認できた。

遺構埋土からは比較的まとまった状態で土器が出土しており、6はつぶれた状態で出土し完形復元することができた。8の小型鉢も完形で出土しており、上下二段に区画された中に有軸木葉文が施されている。その他ではミニチュア鉢、外面に垂下する沈線が描かれる蓋などが図示できた。図示できた以外で器種が判断できたものは壺3点、如意形口縁11点、直縁鉢1点、蓋1点、紡錘車1点であった。出土した土器の時期は弥生時代前期中葉の時期と考えられる。石器では黒色頁岩に研磨が施され、樋状の溝が表面にみられる不定形な石器が出土しており、石鎌の可能性が考えられる。

遺構の時期は前期中葉でSK1047とはあまり時期差がないと考えられる。また遺構の性格は不明であるが、貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1061 (C1-27 図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-73°-E

規模；1.7m×1.2m **深さ**；0.2m **断面形態**；皿状

埋土；暗灰褐色土

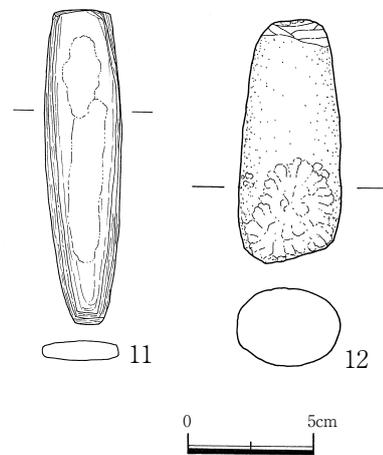
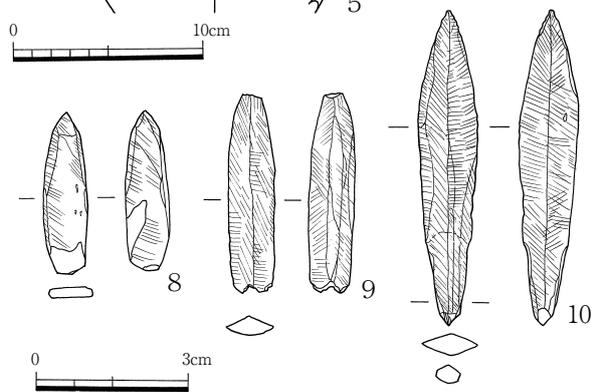
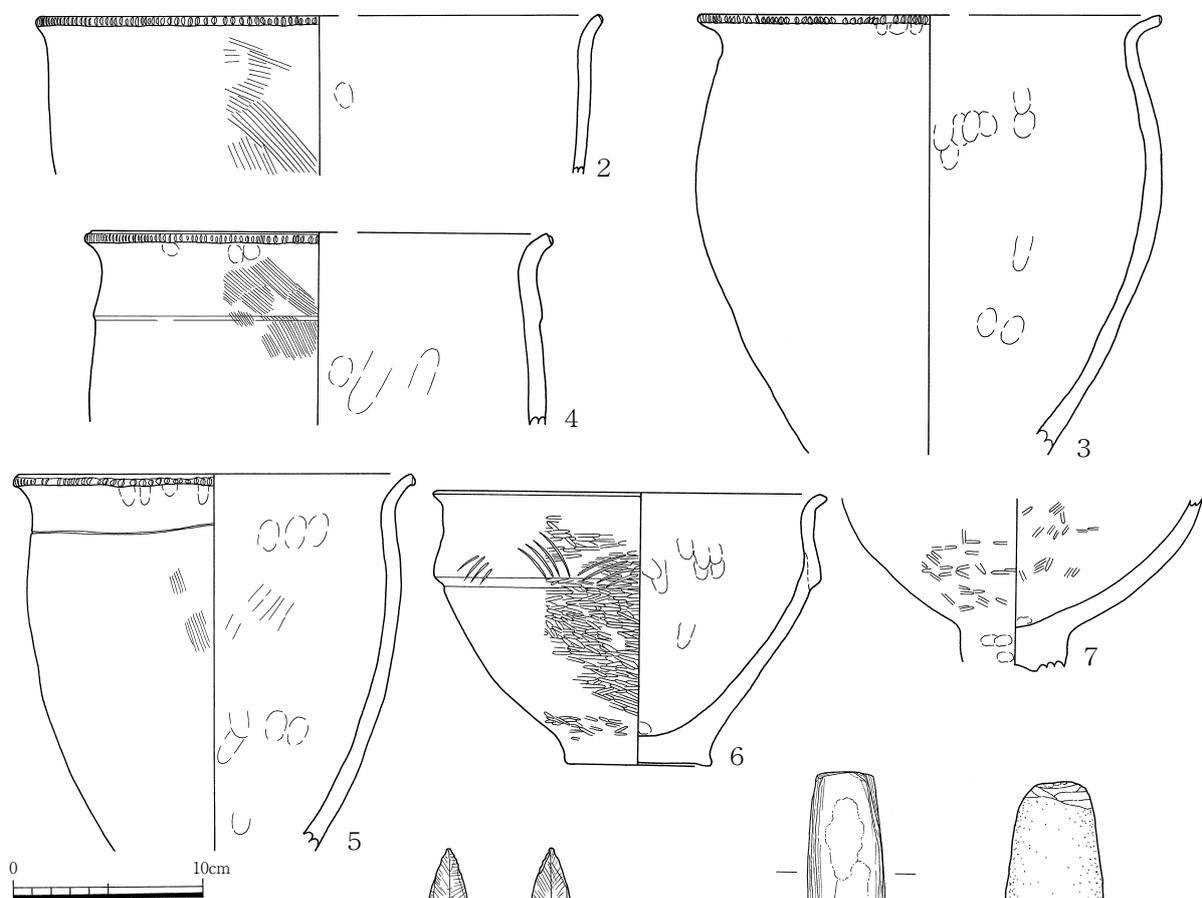
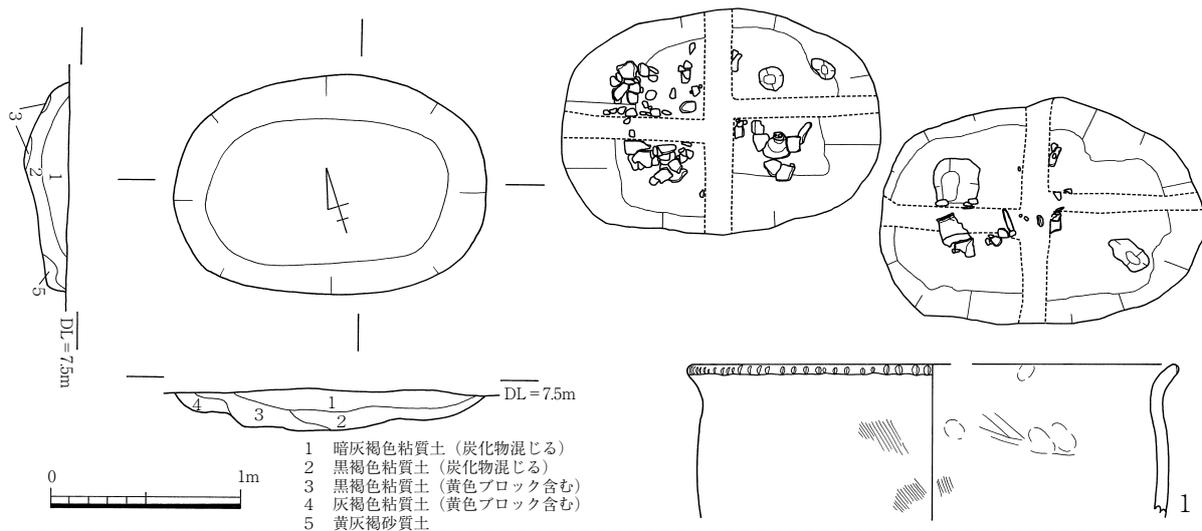
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鎌、石斧、転用石斧)

所見；SD105より北側約2mの部分で検出した小判形の土坑である。検出時の埋土は暗灰色土で炭化物が混じった状態であった。埋土は基本的には2層で、暗灰褐色土と黒褐色土である。

埋土中からは残存状況が不良であったにもかかわらず遺物がまとまって出土しており、特に石器は貴重な資料が出土している。土器では6の鉢が完形復元できた。6は有段の鉢で段部は粘土帯接合部を横方向へのナデによって段部を強調し、器形的には二条突帯の鉢の形態に似る。しかし、口縁部は如意形で口縁下部には重弧文が施文されており、調整方法も弥生土器のものである。図示できた甕では4が有段甕で5は弱い沈線が1条巡っているものであるが、他は口縁下に沈線は施されていない。また7は内湾する体部を持つもので底部下には小さな柱状の部分が存在しており、中央部は生きた面が残るが外側は円周上に剥離面がみられることから脚部であったと考えられる。7は高杯の可能性が高いと考えられるが、現在まで確認されている弥生時代前期の高杯とは異なった特徴を持つものである。図示できたもの以外に口縁部で器種が判断できたものは壺1点、甕25点、鉢1点、蓋1点であった。

石器では黒色頁岩製の磨製石鎌が3点出土している。10はほぼ完形で出土しており、全長6.3cm、茎部の長さは1.6cm、厚さ0.4cm、重さ3.0gを測る。最大幅が先端から約1/3の部分に位置し細長い菱形をしており、断面形も菱形である。また鏑もほぼ直線的に通っており均整のとれた石鎌である。9の鏑は直線的であるが、形態は断面形ともに甘くなっている。11は石斧と考えられるが非常に薄い扁平なもので、片刃の刃部を持つが刃部の幅は1.5cmと狭く、基部の方がやや広くなる形態で基部のやや上部にわずかな抉りが残る。定型的な扁平片刃石斧とは異なる。さらに最も特徴的なことは、白色に風化し縞状に濃緑色の筋が見えることであり、この石材は石剣にみられる例が多い。これらのことから11は転用石斧の可能性が高いと考えられる。これら遺物の時期は弥



C1-27 図 C1SK1061

生時代前期中葉前半の可能性が高い。

遺構の時期も同様に前期中葉前半の可能性が高いと考えられ、当調査区の遺構の中でも古い一群の可能性が考えられる。また遺構の性格は不明であるが、転用石斧、磨製石鎌、高杯、丁寧な作りの鉢が入ることは遺構の性格を知る上で重要な要素になると考えられる。

C1SK1064(C1-28 図)

時期；弥生I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-44°-E

規模；(1.3)m×1.2m **深さ**；0.5m **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

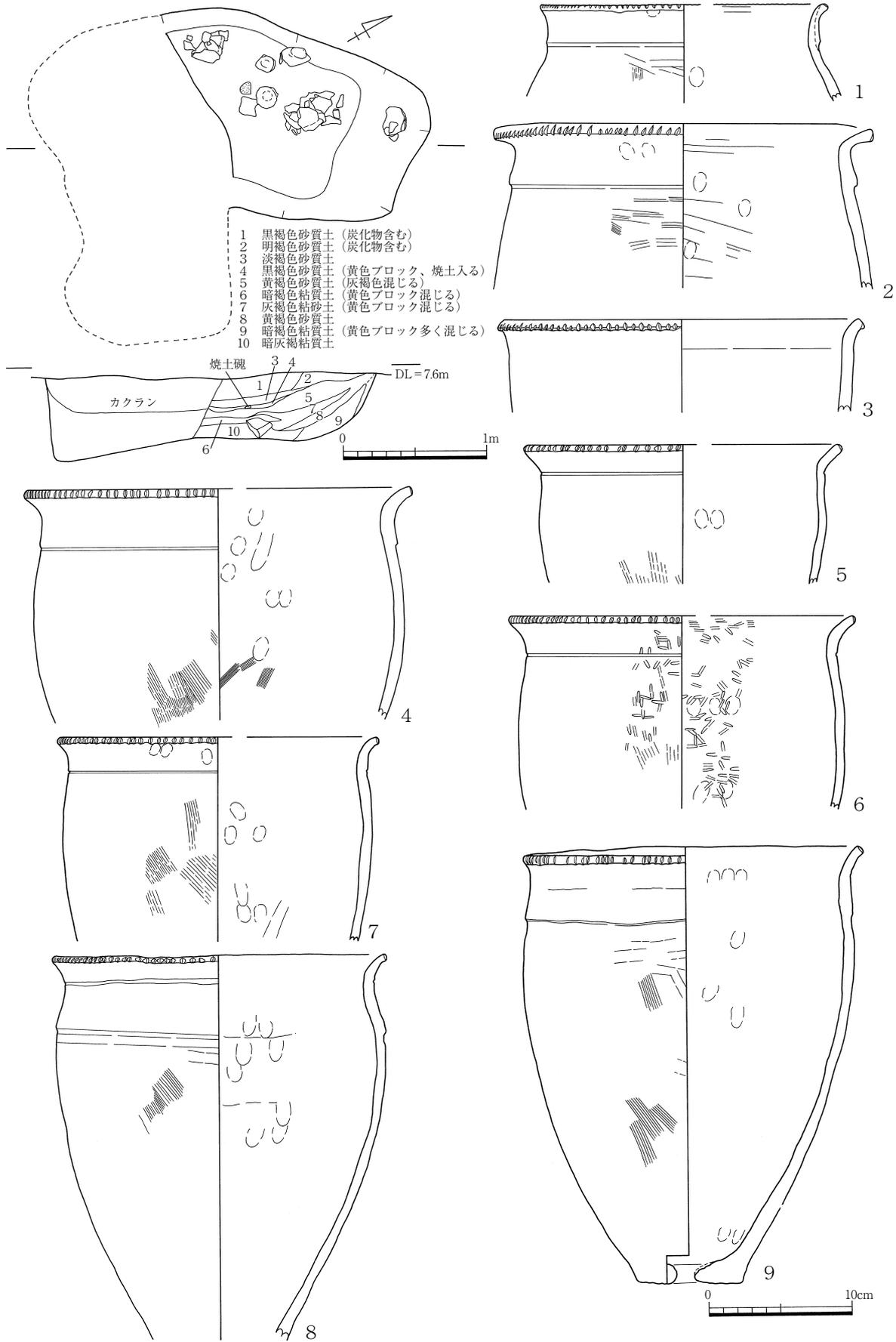
所見；SD105 の北側約 10m で、近世以降の攪乱土坑SK1065 によって南側を切られた状態で検出した土坑である。検出埋土は黒褐色土に炭化物が混じったものであるが、下層は地山とみられる黄褐色土と黒褐色土が互層になりながら北側から南に向かって下がっている堆積状況を示している。また黒褐色土中にも黄褐色ブロックが混じっていた。このような堆積状況からは埋め戻しの可能性が考えられる。埋土中からは土器が多く出土しているが、南側部分上層は攪乱されており遺物の出土はみられない。

出土した土器は床面から出土するものはほとんどなく、完形復元できた 4 も床面から浮いた状態での出土である。土器が多く出土している中層では炭化物、焼土も出土しているが、面をなしている状況ではなかった。

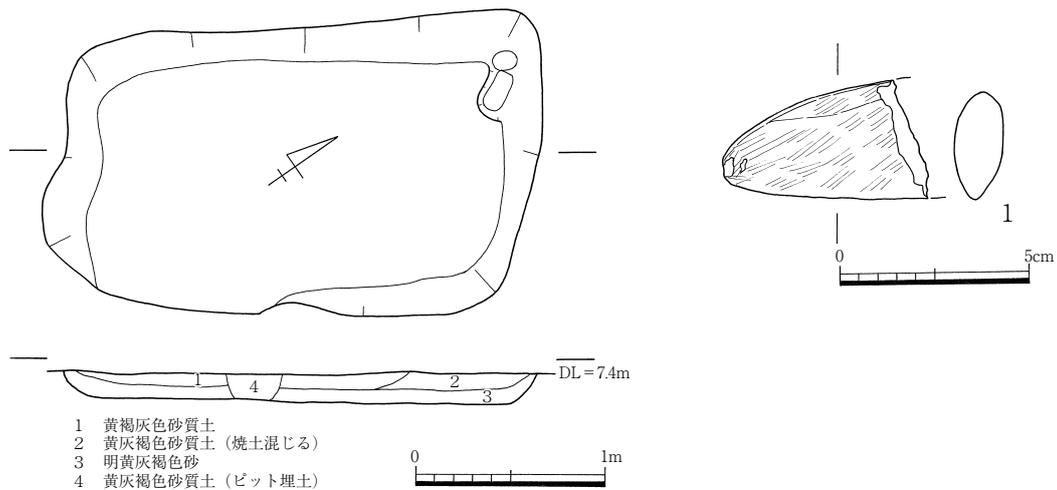
出土した土器で図示できたものは壺 2 点、甕 8 点である。甕ではこの他に上胴部まで残存するものが 11 点出土しており、図示したものも含め、有段甕が 8 点、段部がなく沈線もないもの 4 点、段部がなく 1 条沈線のもの 5 点が出土している。この口縁端部の刻目は下端刻目が 2 点、全面刻目が 13 点であった。口縁のみの細片では如意形口縁が 33 点出土している。壺は底部 6 点と、重弧文が施された胴部が出土しており、大型壺とみられる底部も出土している。鉢では如意形口縁以外のものが 7 点確認できた。また蓋も天井部と裾部が 1 点ずつ出土している。出土した土器の時期は弥生時代前期中葉前半の可能性が高いと考えられる。

SK1065 埋土中からはほとんど遺物は出土せず、攪乱中には人頭大の石が投げ込まれた状態が入っていたが、1 点紅猪口が出土しており近世以降の時期と考えられる。

遺構の性格は確定し得ないが、同様の規模、プランを持つものは比較的検出面から床面までが深いものが多く、土器も多く出土する傾向がみられ、貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。



C1-28 図 C1SK1064



C1-29 図 C1SK1067

C1SK1067(C1-29 図)

時期：弥生I 形状：長方形 主軸方向：N-38°-E

規模：2.6m×1.5m 深さ：0.2m 断面形態：箱形

埋土：黄灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鎌)

所見：環濠と考えられるSD105が分岐して北側に延びる溝に切られた状態で検出した。埋土は約20cmが残存しており、砂質で黄色土と灰色土が均一に混じったものである。SD105西端部の埋土と類似する。

埋土中から出土した遺物は少なく、図示できたのは粘板岩製と考えられる磨製石鎌の先端のみであった。図示できなかったが口縁部で器種が判断できたものは壺4点、有段甕1点、如意形口縁9点であった。遺物の時期は弥生前期と考えられる。

遺構の時期、性格はSK1002などと同様の性格を持つものと考えられるが、埋没状況は洪水などによる一時期に埋没した可能性が考えられる。

C1SK1105(C1-30・31 図)

時期：弥生I 形状：隅丸方形 主軸方向：N-20°-E

規模：1.9m×1.65m 深さ：0.5m 断面形態：箱形

埋土：暗灰褐色土

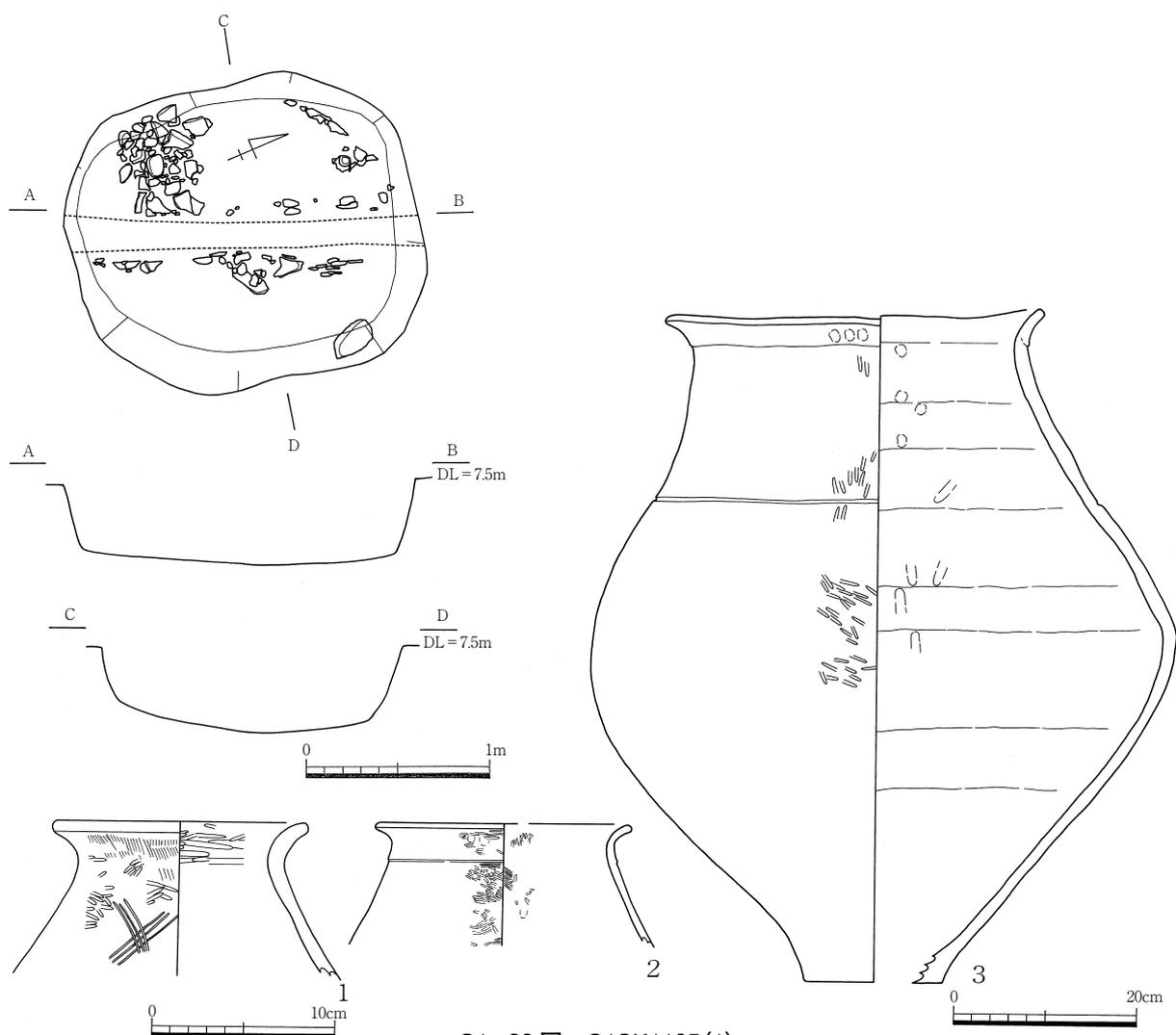
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

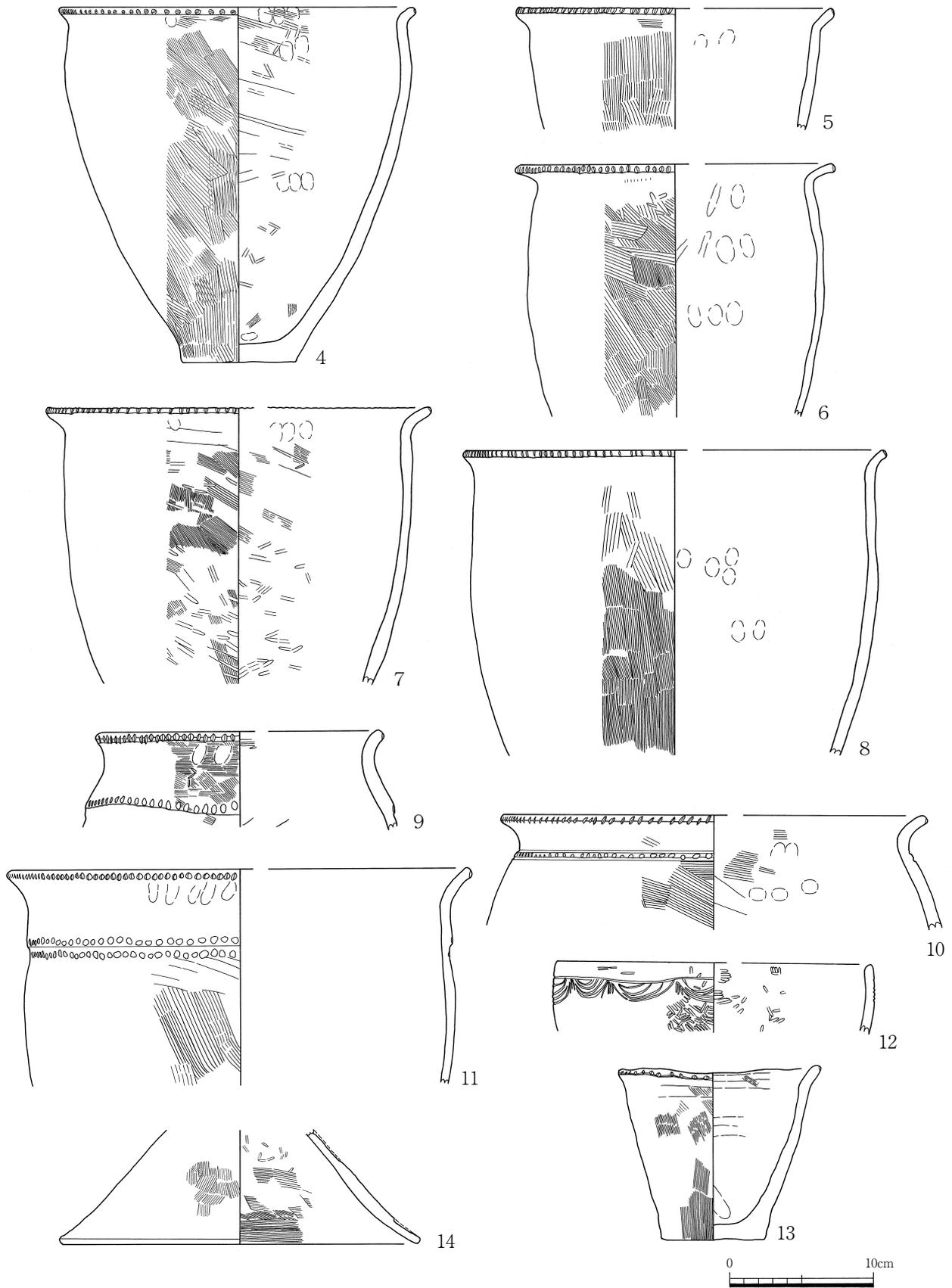
所見：SD105の南側で検出した。近現代の土坑SK1106に南側を切られているが、SK1106が浅いため、完掘時、楕円に近い隅丸方形のプランが確認できた。検出埋土は暗灰褐色土で埋土は約

50cmが残存しており、埋土中からは多くの遺物が出土している。その多くが中層からの出土で床面出土の遺物は少なかった。完形復元できた大型壺は南西隅からまとまった状態で出土している。

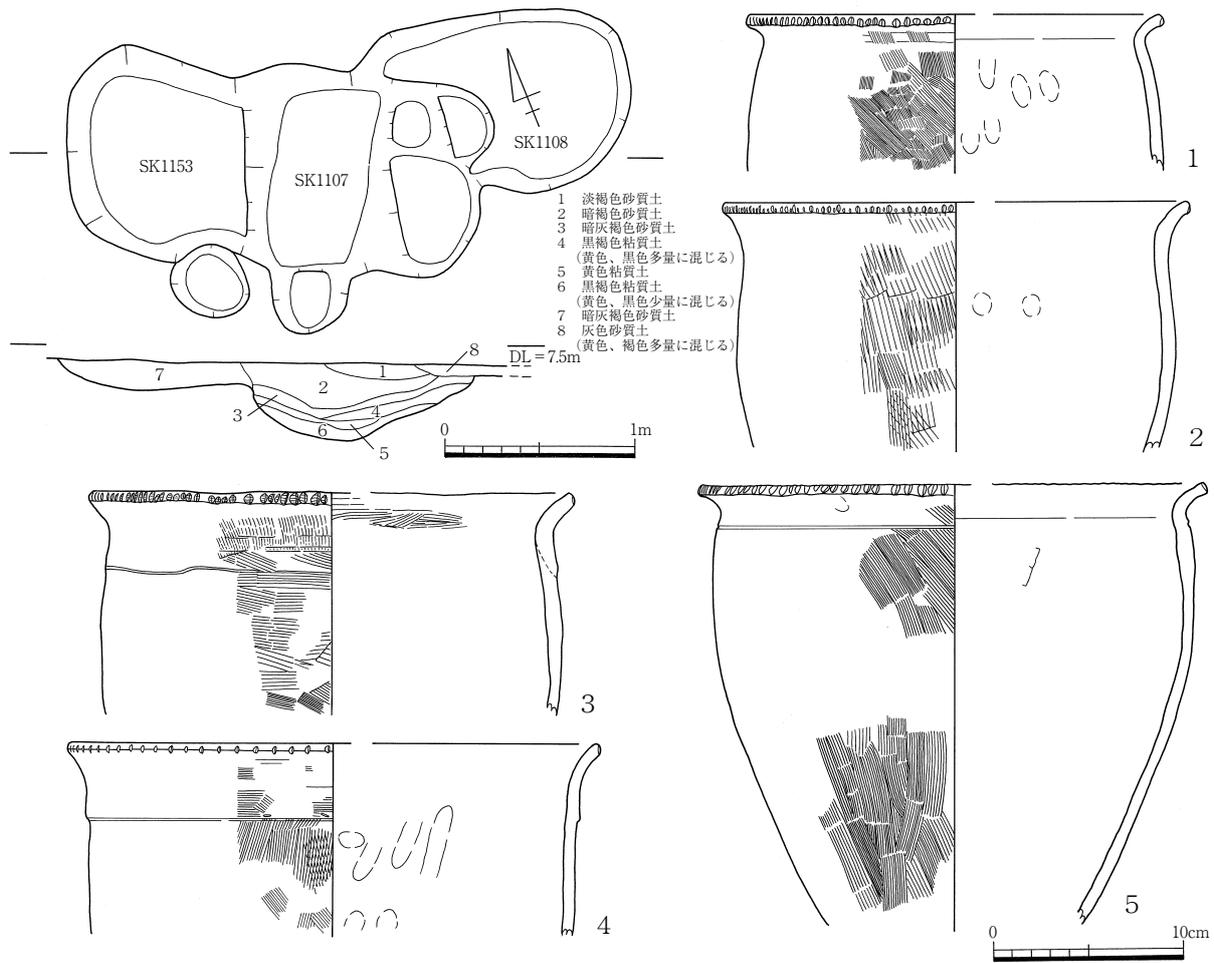
壺では3が口径40cm、器高約75cmを測る大型の壺で、底部が一部欠損している他は欠損部位は少ない。2も大型の壺口縁である。その他図示できなかつたが、口縁部細片が11点確認できている。甕は図示できるものが多く9は上胴部に最大径があり胴が張る器形である。また、10は口縁下に二本条線の間に刺突が施された文様を持つものであるが、9と同様に胴部が張った器形を持つ口径約30cmで大型であるため鉢の可能性も考えられる。図示できたものも含め上胴部まで残存するものが10点出土しており有段甕3点、段部がなく沈線もないものが4点、口縁下に沈線が巡るものが3点の比率になっている。この他、如意形口縁部細片が56点出土している。鉢では直縁口縁で口縁部下に連続した下弦の重弧文と間に垂下する短い3条沈線による文様が施された12が図示できた。13は小型で直線的な体部を持つ小型の鉢と考えられるが、甕の可能性もある。図示できた以外に直縁鉢口縁部細片12点を確認されている。蓋は8点細片が出土している。出土した土器は甕が特徴的で、比較的容量の大きなものが多く、器形的には最大径が上胴部にあるものがみられる。また有段甕の比率が高く、口縁下部の沈線は2条までしか出土していない。土器の時期は



C1-30 図 C1SK1105(1)



C1-31 図 C1SK1105(2)



C1-32 図 C1SK1107・1108・1153

弥生時代前期中葉前半の可能性が高いと考えられる。

遺構の性格は大型壺が出土していること、日用品である甕が多いことなどから貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1107(C1-32 図)

時期：弥生I **形状：**長方形 **主軸方向：**N-60°-E

規模：2.3m×1.1m **深さ：**0.4m **断面形態：**不整形

埋土：暗灰褐色土

付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)

所見：SD105 南側で検出し、SK1108、SK1153 と切り合っており不整形な土坑である。SK1107 は床面が不整形で特に南東部は緩やかな落ちになっており、西側部分とは相違がある。埋土は黒褐色土を中心とするものであるが、第5層は貼床状に黄褐色土が一面を覆う。埋土中からの土器の出土は中層以上に多く、器種が判明したものとして壺5点、甕30点、蓋2点、鉢1点を数えることができる。甕では2条以上沈線が巡るものは確認できない。また、有段甕5点が出土し、段のないものは6点で有段甕の比率が高くなっている。出土土器の時期は弥生前期中葉前半の時期の可能性が考えられる。

SK1153 は床面が検出面から10cm残っており、埋土中からはSK1107 とほぼ同時期の土器が出土している。調査時、床面の状況から別遺構としていたが、SK1040 も中央部が深くなっており、SK1107 の一部の可能性が高いと考えられる。

SK1108 はSK1107 を切った状態で検出し、やや軸方向も異なるため別遺構と考えられる(1.4)m×0.9mの楕円形の土坑である。埋土はほとんど残存しておらず、わずかに5cmが残るのみであった。前期の可能性が考えられる。

C1SK1114(C1-33~35 図)

時期：弥生I **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-77°-E

規模：(2.2)m×(1.5)m **深さ：**0.6m **断面形態：**箱形

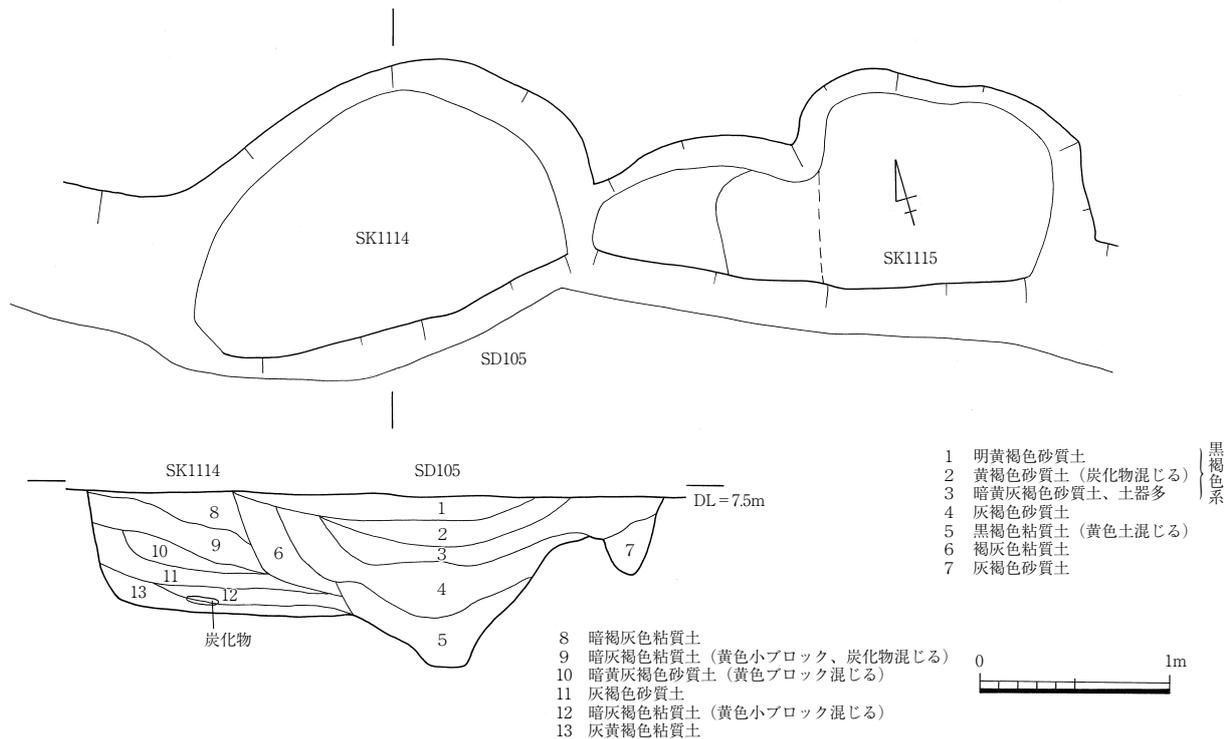
埋土：暗灰褐色土

付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、土製紡錘車)、石器(凹石)

所見：環濠と考えられるSD105 の北側でSD105 と切り合った状態で検出し、同じくSD105 と切り合いのある土坑SK1115 と隣接する。埋土は灰褐色土を中心としたもので、黄色土の小ブロックがわずかに入る。第13層上面には炭化物がみられる。遺構の残存は良好で、検出面から約65cmが残存している。埋土中には土器が多く含まれており、中層と床面上から多く出土している。出土した遺物で器種が判明できたものは壺9点、如意形口縁16点、鉢4点、蓋3点、土製紡錘車1点である。

壺では口縁部が肥厚するものは出土しておらず、胴部文様では木葉文6点、重弧文3点が確認さ



C1-33 図 C1SK1114(1)

れている。底部では大型壺底部が1点出土している。甕と考えられる如意形口縁では、有段が2点、段がなく、沈線もないものが6点、1条沈線のもので1点出土している。この他の遺物では両面中央部が窪み、周縁部が激しく使用された凹石が出土している。遺物の時期は弥生時代前期中葉と考えられる。

遺構の時期は弥生時代前期中葉の時期と考えられる。SK1114は検出時にSD105と切り合った状態で検出したが、平面確認では埋土が同じ暗灰褐色系であったため先後関係が確認できなかった。断面確認ではわずかに黄色土ブロックの混じり方の相違でSK1114が切られていることを確認できた。しかし、暗灰褐色土を中心とし非常に類似する埋土であり、SD105とは時期差はほとんどないものと考えられる。

遺構の性格は長方形のプランを持ち、比較的床面までが深く残存している他の土坑と同様に貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1115(C1-36 図)

時期：弥生I 形状：(長方形) 主軸方向：N-63°-W

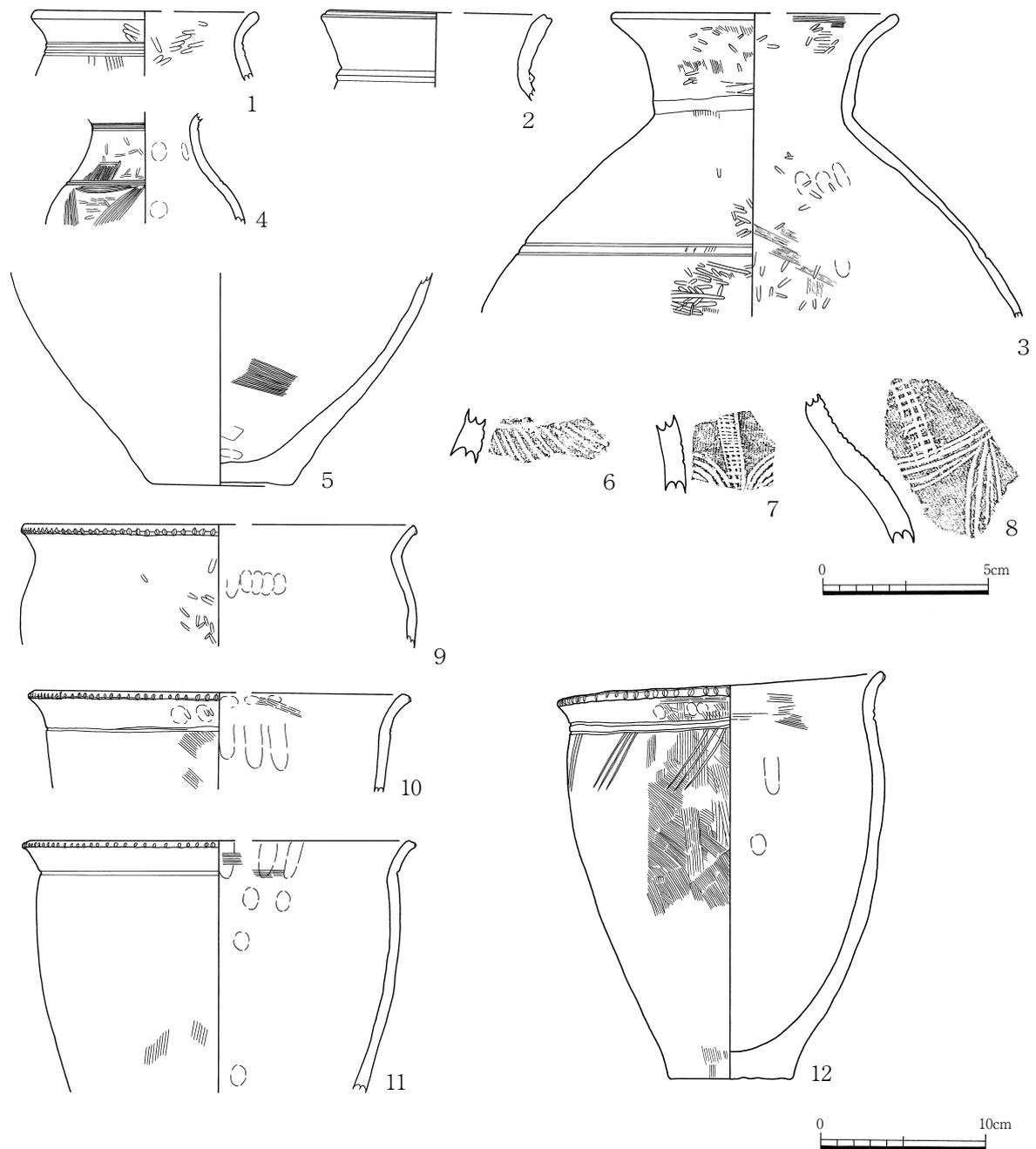
規模：(1.1)m×1.5m 深さ：0.35m 断面形態：箱形

埋土：暗灰褐色土

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃、サヌカイト剥片)

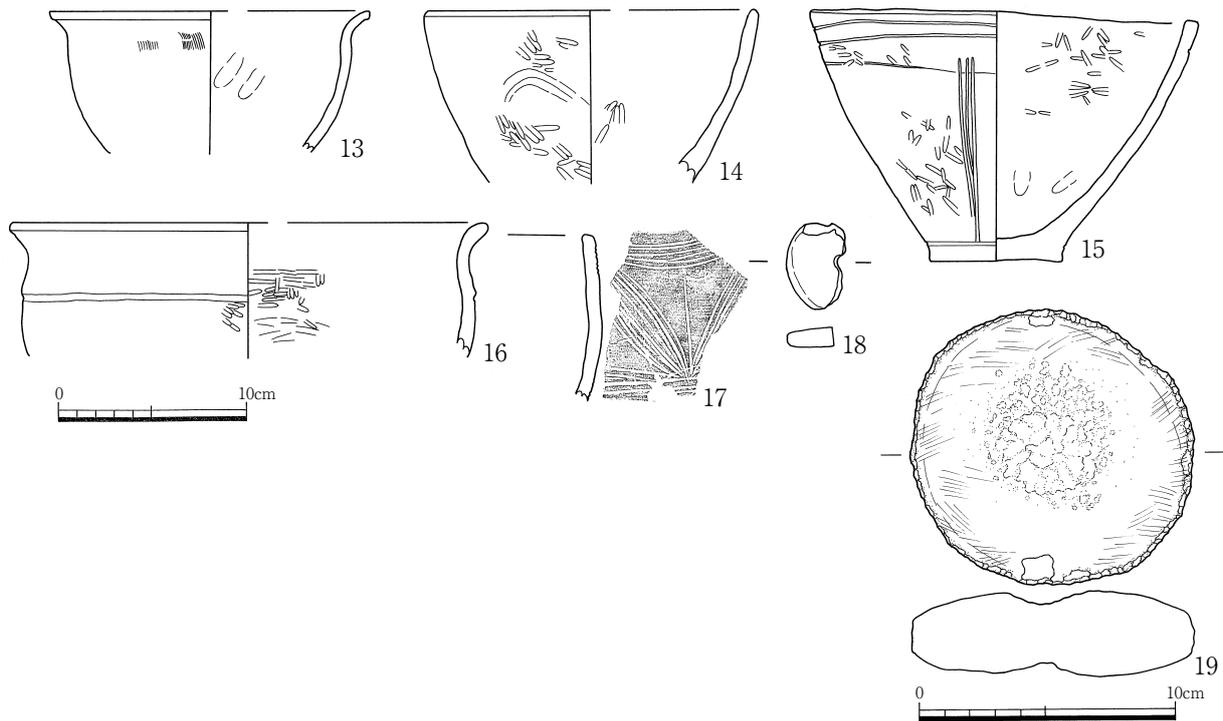
所見：環濠と考えられるSD105と切り合った状態で検出した。検出時、プランでは切り合いの前



C1-34 図 C1SK1114(2)

後が確認できなかった。断面観察によるとSK1115が切られた状態であった。埋土は検出面から約35cmが残存しており、褐灰色土を中心とするもので、層位堆積がみられ最下層は黄褐色土が多く混じっていた。埋土には炭化物が含まれていた。

埋土中から出土した土器には、中期と考えられる遺物1、2が混じっていたが、上層からのみ出土し出土量もほとんどないため、混入または別遺構が切っていた可能性が考えられ、SD105上面で弥生時代中期と考えられるピットが確認されていることから、別遺構に属する遺物の可能性が高



C1-35 図 C1SK1114(3)

いと考えられる。土坑床面からは5、7、8がつぶれたような状況で出土しており、土坑の時期はこれらの土器の時期と考えられ弥生時代前期中葉前半の可能性が高い。

遺構の性格はほぼ同時期で隣接するSK1114は貯蔵穴の可能性が考えられるが、SK1115は床面までが浅く、床面から約70gと多くのサヌカイト剥片とサヌカイト製打製石鏃が4点出土しており、やや様相が異なっている。作業用の小竪穴の可能性が考えられる。

C1SK1117(C1-37 図)

時期：弥生I **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-31°-E

規模：1.2m×1.2m **深さ：**0.5m **断面形態：**階段状

埋土：暗灰褐色土

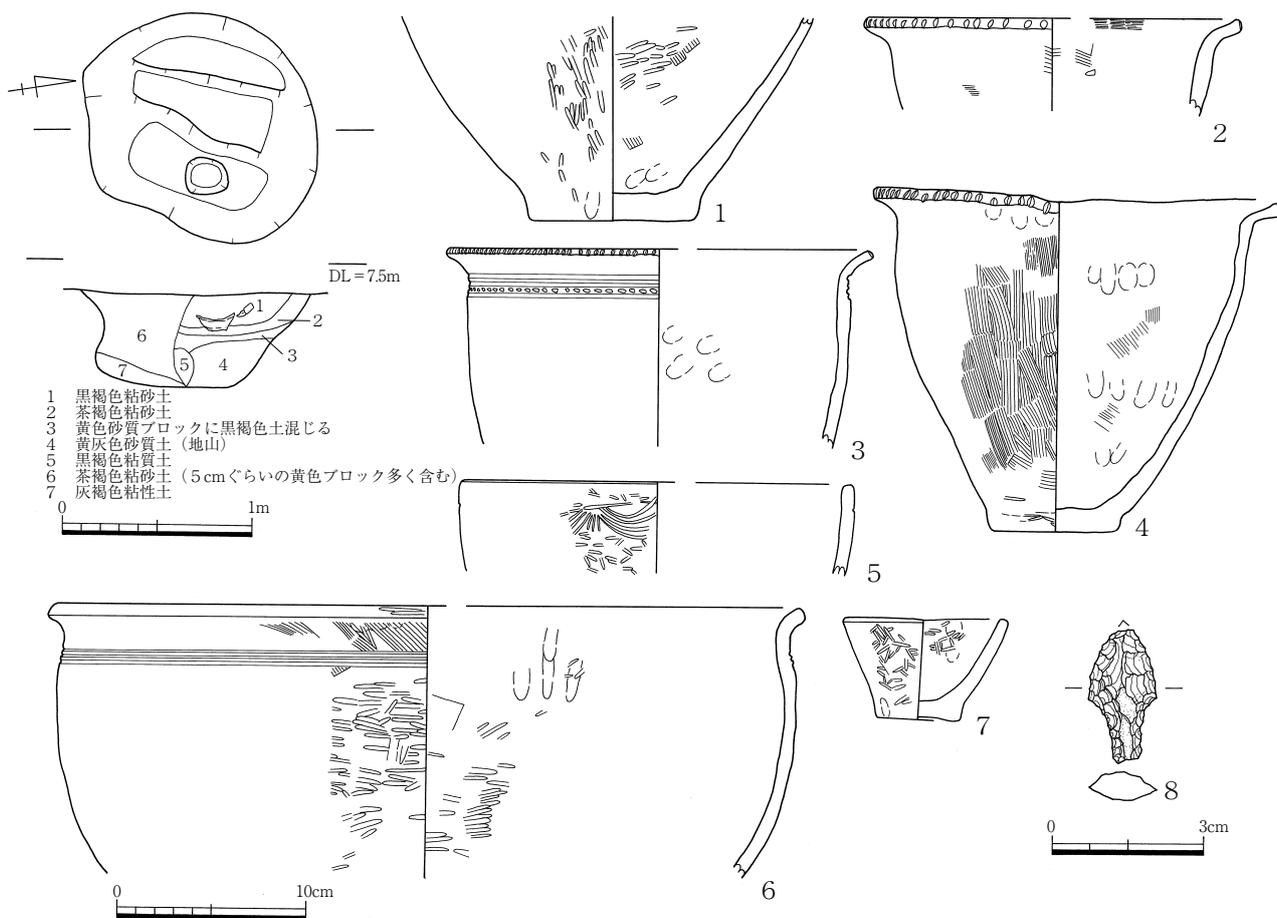
付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃)

所見：SD105の南側で検出した不整円形の土坑。底面も不整形で、西側は階段状になっており、最深部で直径約20cmのピットを検出した。

埋土は北側では層位堆積がみられるが、南側は層位堆積に切り込んだように黒褐色土に黄色土が5cm大のブロック状に入り斑状になった第6層が入る。第6層は埋め戻しによる埋土の可能性も考えられる。

埋土中からは規模に比べて多くの遺物が出土している。遺物の多くは第3層以上の部分からの出



C1-37 図 C1SK1117

土であった。5の鉢はSK1105と同一個体と考えられるが、胴部片が1点出土するのみである。出土した土器はいずれも弥生時代前期中葉の時期と考えられる。

石器では、サヌカイト製有茎石鏃が1点出土している。

不整形な土坑であるため、土坑とピットが切り合っている可能性も考えられるが、不明である。

C1SK1142(C1-38 図)

時期；弥生I 形状；長方形 主軸方向；N-56°-E

規模；(1.5)m×1.2m 深さ；0.25m 断面形態；レンズ状

埋土；暗灰褐色土

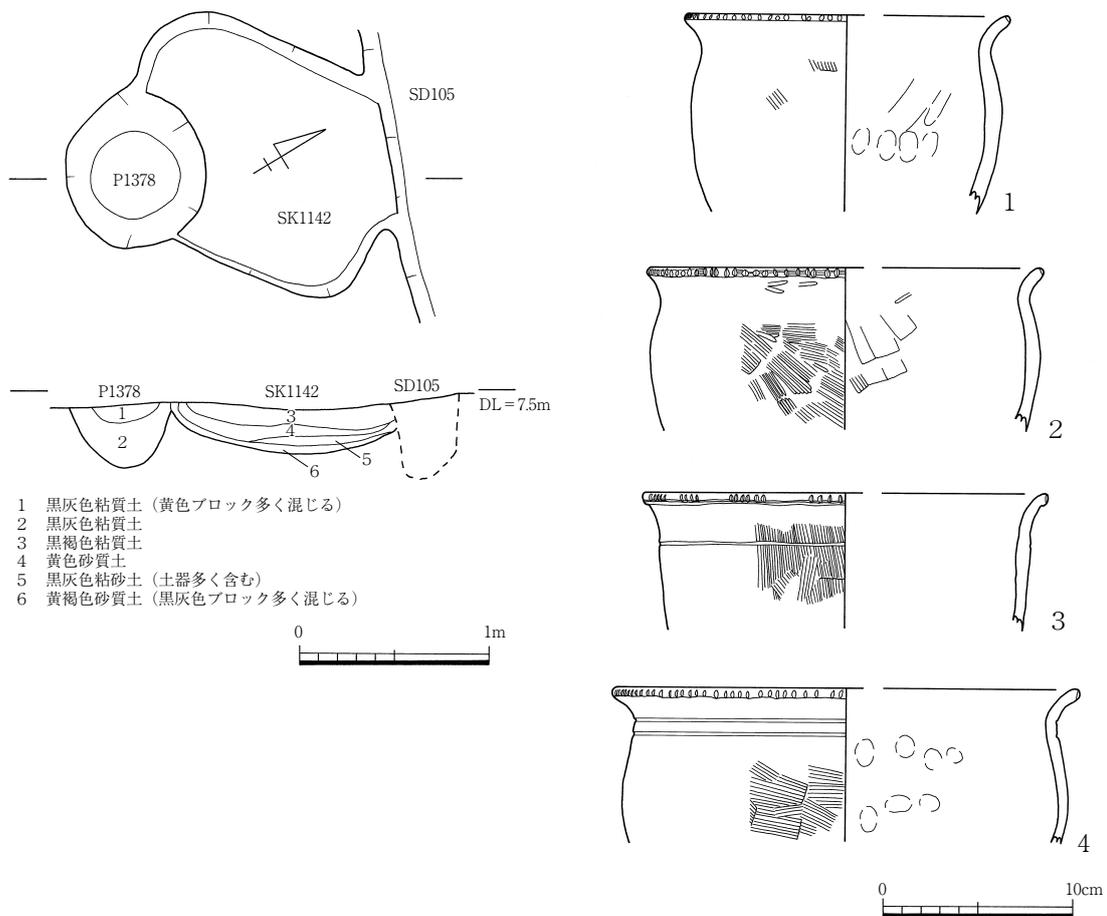
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；環濠と考えられるSD105の南側で、SD105とP1378に切られた状態で検出した規模の小さな長方形の土坑。埋土は上層が黒褐色土であるが、間には黄褐色の地山状の土が堆積しており土器は入らない。最下層は黒灰色土に黄色土が混じった土で土器は多くみられる。

埋土中から出土した土器は、上層出土では壺が1点出土し胴部には複数条の重弧文が施されていた。如意形口縁では上胴部まで残存し、甕と確認できたものが1点で口縁下部に2条沈線が施されていた。直縁鉢1点も出土する。

下層では壺は胴部のみが出土し、如意形口縁は8点出土しており上胴部まで残存しているものは4点で内2点には沈線がなく、残り2点は1条沈線であった。土器は弥生時代前期中葉前半のものと考えられる。石器は出土していないが、わずかにサヌカイト剥片が出土している。



C1-38 図 C1SK1142

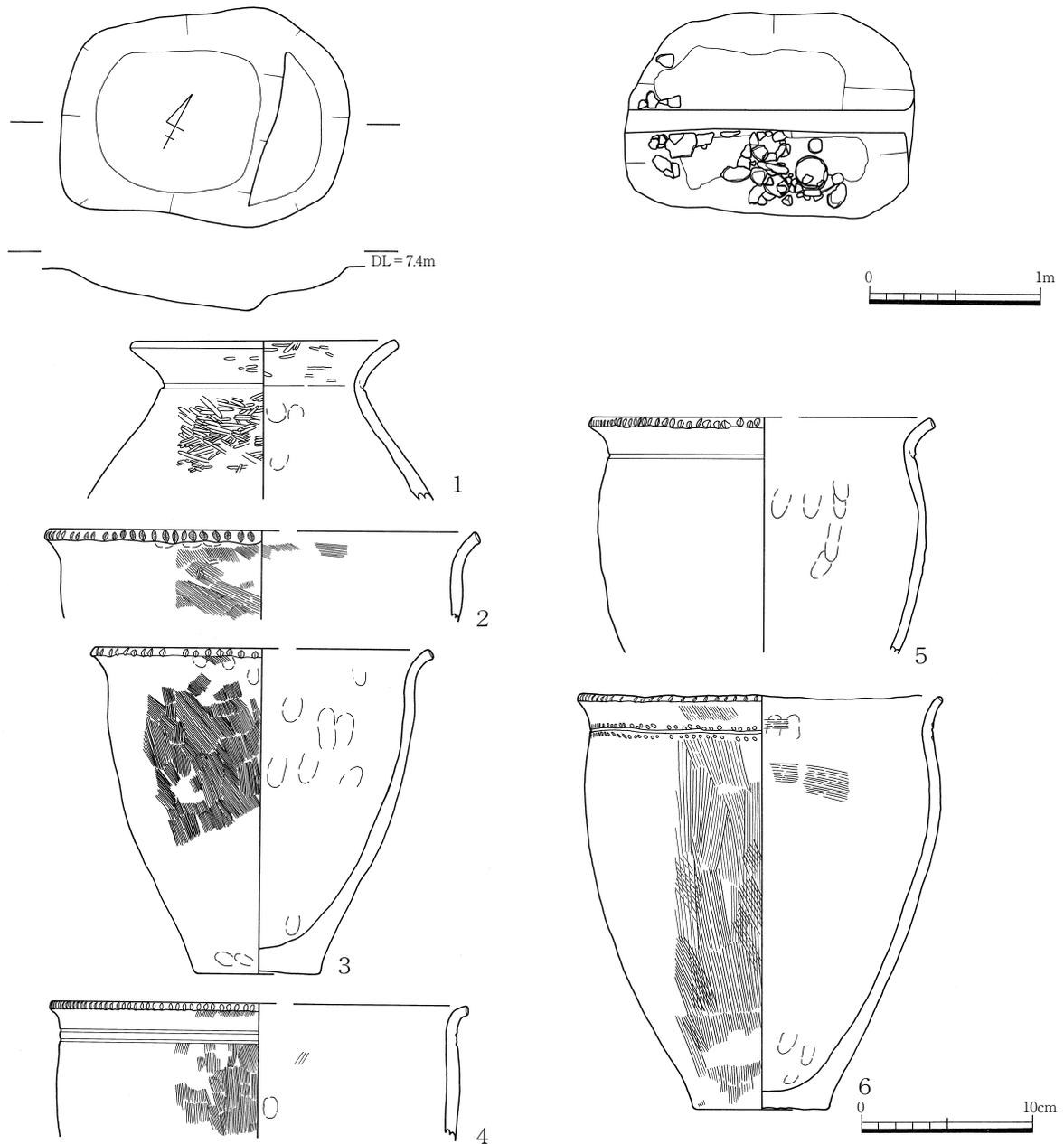
SD105、P1378 との関係は、SK1142 が先行すると考えられるが、埋土が類似しており、ほとんど時期差はないものと考えられる。長方形のプランを持ち比較的浅い特徴を持つが規模が小さく、SK1002 などのように作業用堅穴の可能性は低いとみられ、遺構の性格は不明である。

C1SK1144 (C1-39 図)

時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-62°-E

規模：1.7m×1.2m 深さ：0.25m 断面形態：不整形テラス状部分有り

埋土：暗灰褐色土



C1-39 図 C1SK1144

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)

所見：SD105 南側の調査区東部で、SK1134 に南西隅を切られた状態で検出した。埋土は暗灰褐色から黒褐色土で、下層にはわずかに炭化物がみられた。約 25cm が残存しており、埋土を除去すると床面は東側がテラス状になっていた。埋土中からは遺構の南側を中心に遺物が出土しており、完形復元できた甕も 2 個体出土している。

出土した遺物は土器のみでいずれも弥生時代前期と考えられる。図示できた以外に大型壺胴部が出土しており、上胴部まで残存し、甕と考えられる口縁部では 2 条沈線のものが 2 点確認されている。土坑の性格は不明である。

C1SK1156(C1-40 図)

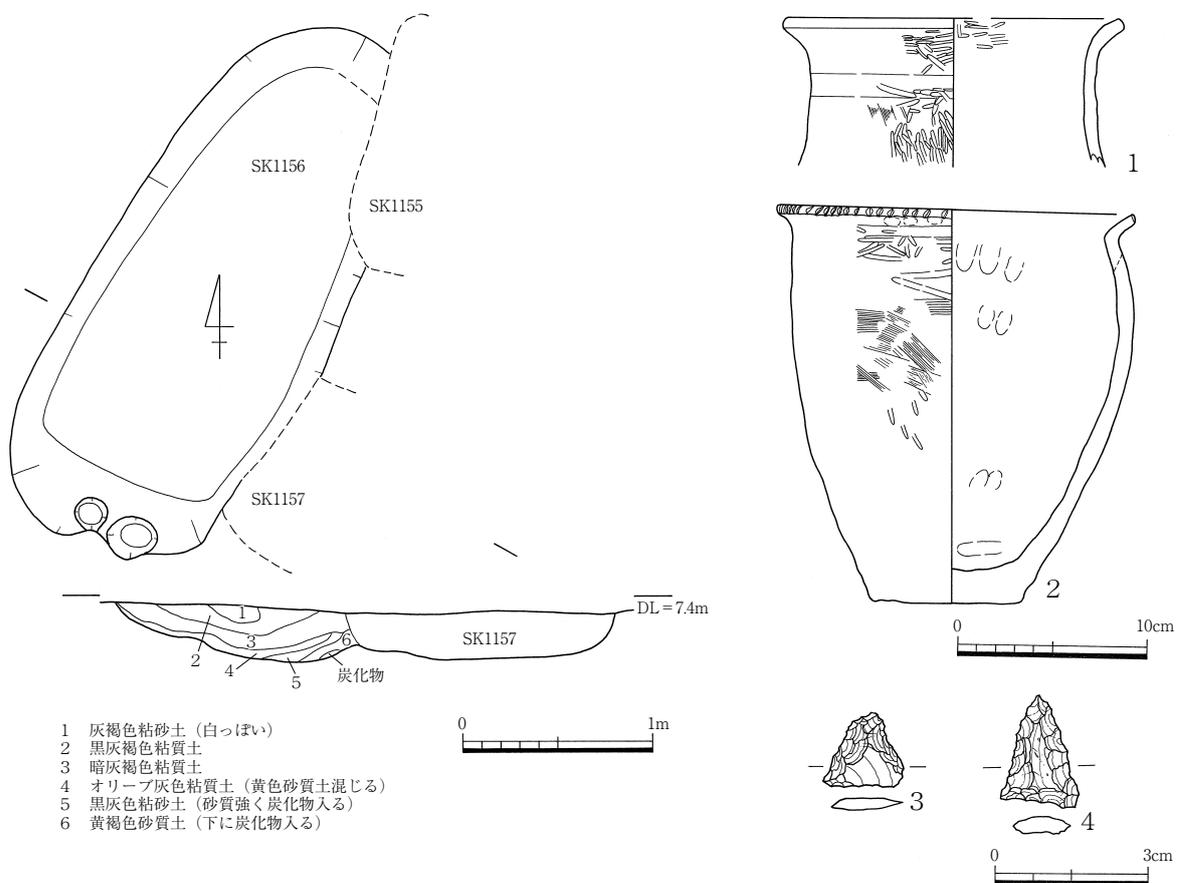
時期：弥生I 形状：楕円形 主軸方向：N-30°-E

規模：3.0m×1.4m 深さ：0.3m 断面形態：レンズ状

埋土：灰褐色土

付属遺構：ピット 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃)



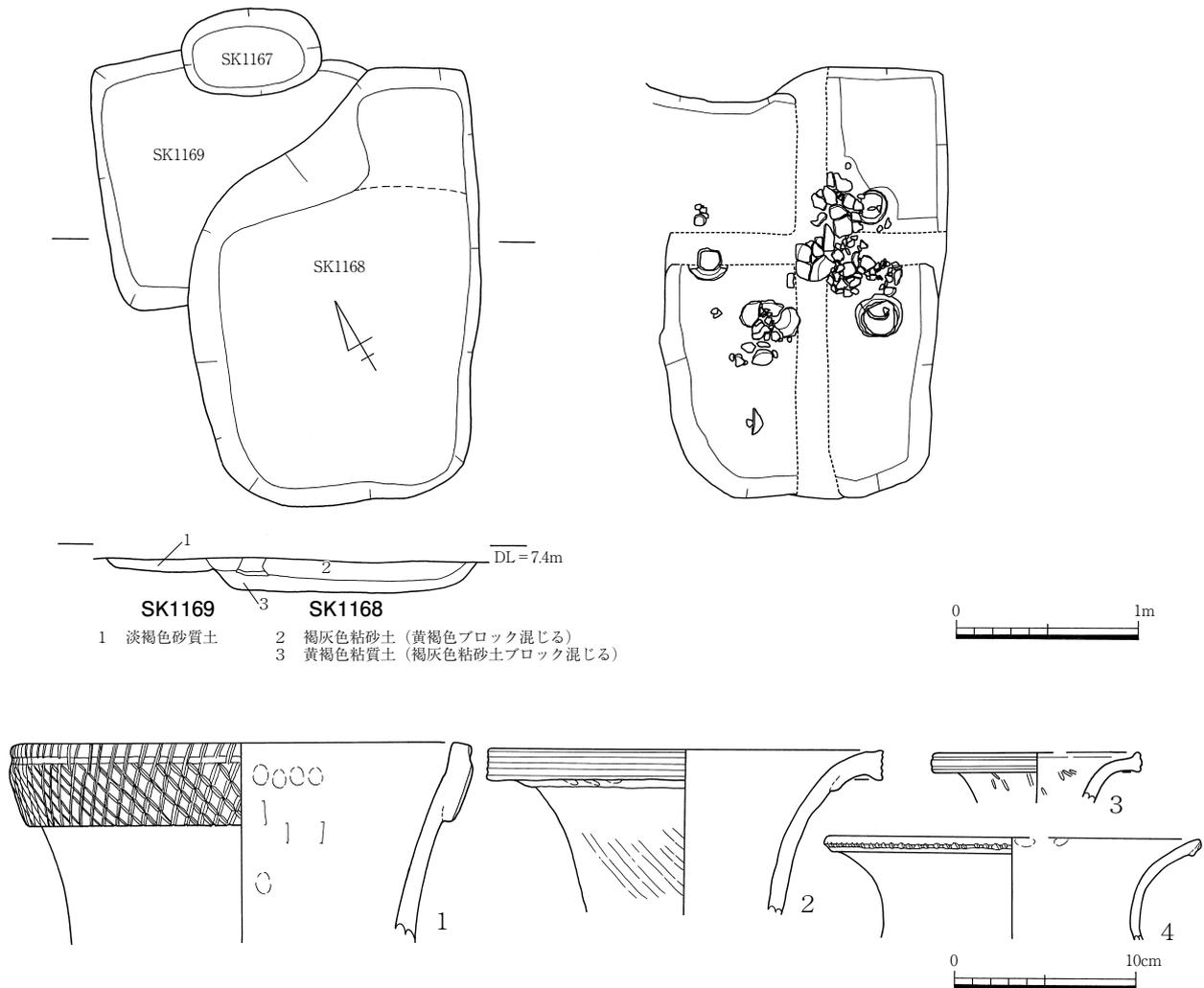
C1-40 図 C1SK1156

所見：SD105 南側でSK1155、SK1157 に切られた状態で検出した。埋土は黒褐色土で下層には炭化物が混じる。上層の灰褐色土は別のピット状遺構の可能性が考えられる。南端部で検出したピットは土坑に伴う可能性が考えられる。

埋土中から出土した遺物は土器、石鏃である。土器は1点完形復元できた甕が出土したが、細片がほとんどで、口縁部は27点が出土している。弥生時代前期中葉と考えられる遺物は23点出土し、4点は前期以降で時期は不明である。この時期不明土器は上層の灰褐色土に属しており、混入または別遺構に属する可能性が考えられる。弥生時代前期の口縁部23点の器種は壺2点、如意形口縁20点、蓋1点である。

石器ではサヌカイト製平基式無茎石鏃が2点出土しており、小さく薄い作りで重量は0.9gと0.6gである。

遺構の時期は弥生時代前期中葉と考えられるが、遺構の性格は不明である。



C1-41 図 C1SK1167~1169

C1SK1168 (C1-41 図)

時期；弥生IV～ 形状；長方形 主軸方向；N-30°-E

規模；2.0m×1.6m 深さ；0.18m 断面形態；箱形

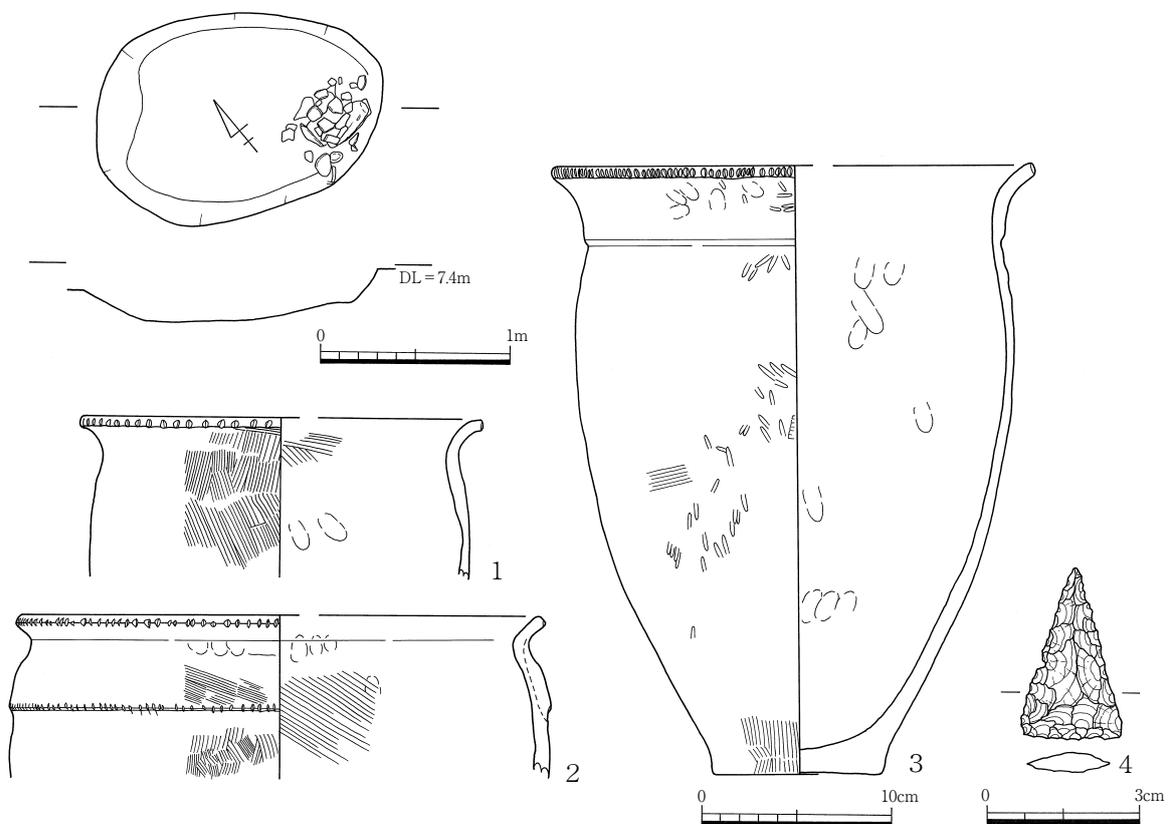
埋土；暗灰褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；SD105 の南側で、SK1167、SK1169 と切り合った状態で検出した。埋土は褐灰色土で黄色土が混じる。遺物は、遺構の中央部付近の2層から土器が集中して出土しており、やや偏った出土状況を呈する。出土した土器は口縁部が21点出土しており、前期の可能性があるもの2点、薄手式土器2点、貼付口縁6点、凹線文土器1点、素口縁1点、不明が9点となっている。1、2は口縁のほぼ全周が残存していた。胴部では大型壺の胴部が残存しているが復元はできなかった。土坑出土の土器はこの大型壺の碎片がほとんどを占めており、その他が1~2個体程度入っていると考えられる。出土土器の時期は弥生時代中期末~後期初頭の可能性が考えられる。

他遺構との関係では、楕円形のSK1167は暗褐色の埋土で如意形口縁が1点出土しており、SK1169に切られた状態であった。SK1169は平面確認ではSK1168に切られており、埋土の残存も不良で、床面もSK1167に切られていた。SK1167が最も古く前期の可能性が考えられ、SK1169は時期不明であるがSK1168より古い。SK1168は弥生時代中期末から後期初頭と考えられる。また、



C1-42 図 C1SK1176

SK1168の北東隅は不整形で、新しい円形の土坑に切られていた可能性がある。遺構の性格は中期末にみられる小型方形土坑と考えられ、大型壺の存在から貯蔵穴の可能性が考えられる。

C1SK1176(C1-42 図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-50°-W

規模；1.5m×1.0m **深さ**；0.3m **断面形態**；レンズ状

埋土；黒灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

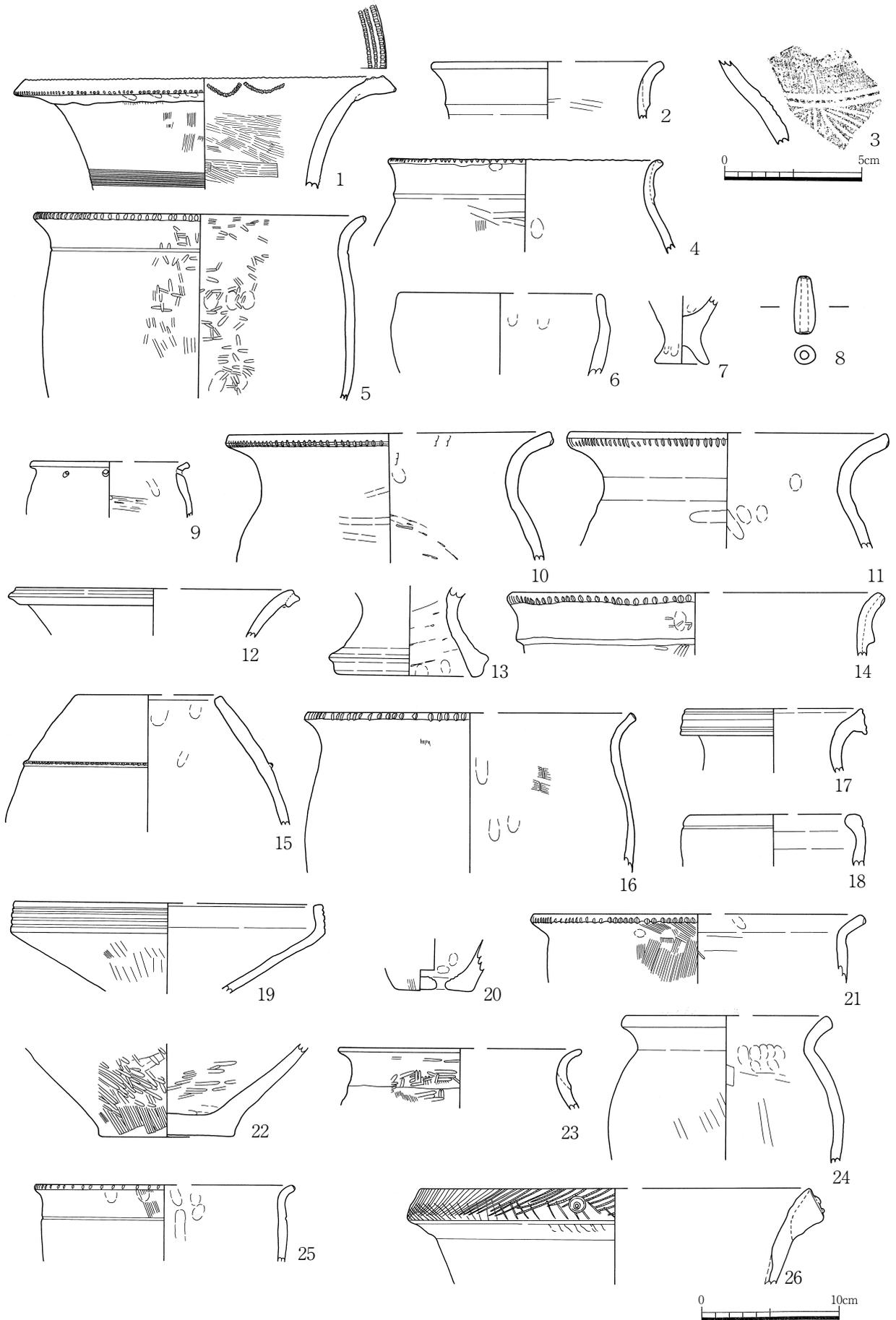
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃)

所見；SD105の南側で検出し、ST103に西側を切られた状態で検出した。埋土は黒灰色土でわずかに炭化物が混じていた。ST103床面より土坑の床面が深く、完掘時楕円形のプラン確認ができた。

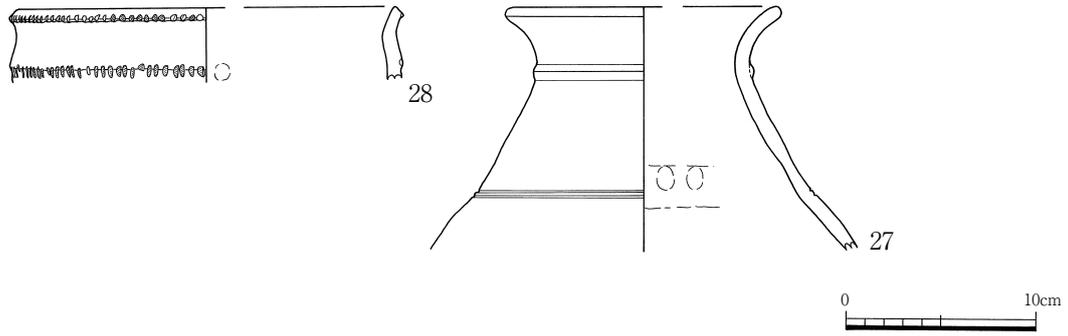
埋土中からの遺物の出土は遺構の残存に比べて多く、東側肩部からは甕1個体がつぶれたような状態で出土し完形復元できた。出土した土器は口縁部が23点で、壺が2点、如意形口縁が21点である。如意形口縁で上胴部まで残存し甕と考えられるものでは、有段甕が4点、段がないもの4点でいずれも沈線は施されていない。

石器ではサヌカイト製平基式無茎石鏃が出土している。やや大型で全長3.4cm、重量2.1gとやや大型である。

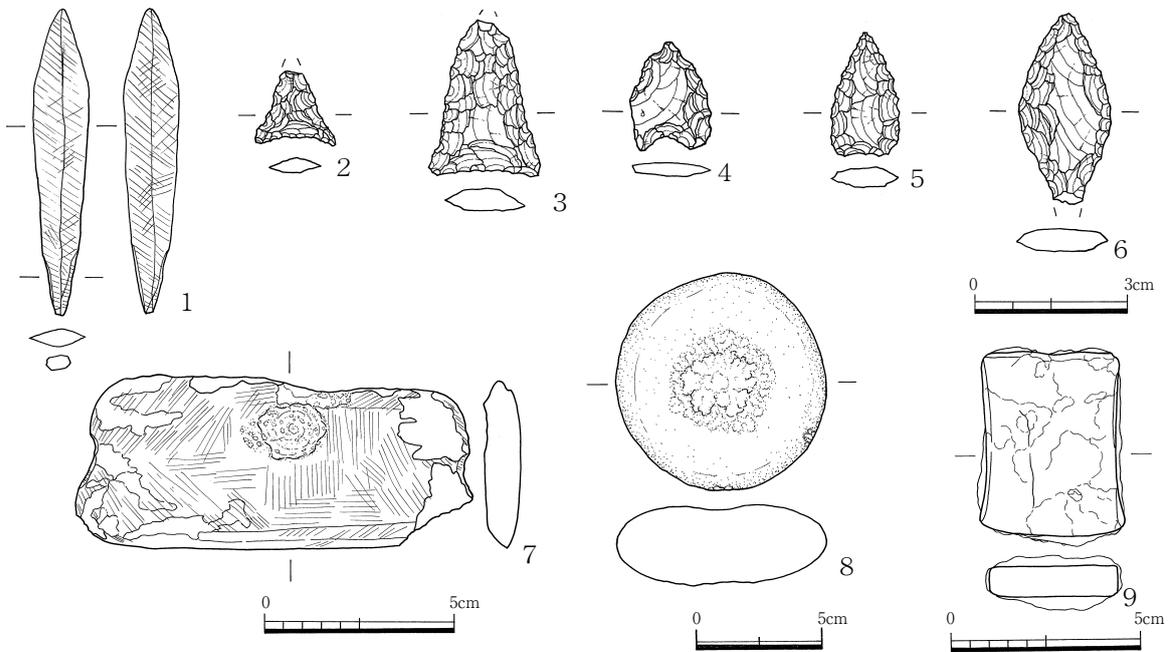
遺構の時期は弥生時代前期中葉前半の可能性が高く、遺構の性格は不明である。



C1-43 図 C1 区土坑出土遺物 (1)



C1-44 图 C1 区土坑出土遗物(2)



C1-45 图 C1 区土坑出土遗物(3)

(3) 溝跡及び自然流路

溝跡は10条検出しており、弥生時代と考えられるものは7条である。この内SD101、102、105、は調査区を東西に横切り他調査区へ続いている。特にSD105は検出時の上端幅約2.5m、深さ約90cmを測り、U字状のしっかりした断面形を持っている。延長は約38m検出しており更に延びている。埋土中からは弥生時代前期の遺物が中層から多量に出土しており、SD105は弥生前期の環濠集落の環濠と考えられる。SD101、102はSD105と並行し調査区を東西に貫き、埋土中からは前期中葉の遺物が出土する。環濠集落に伴う区画溝の可能性が考えられる。また前期と考えられるSD108を調査区南端部で検出している。わずかししか検出できなかったが延長方向、埋土からSD105の外側を巡る環濠の一部と考えられる。

弥生時代では前期中葉以外に前期末と考えられるSD109、中期末~後期と考えられるSD106、SR101を検出している。

C1SD101 (C1-46・47 図)

時期：弥生I 方向：N-62°-W

規模：1.0m×27m 深さ：0.2m 断面形態：U字状、一部箱形

埋土：灰褐色土

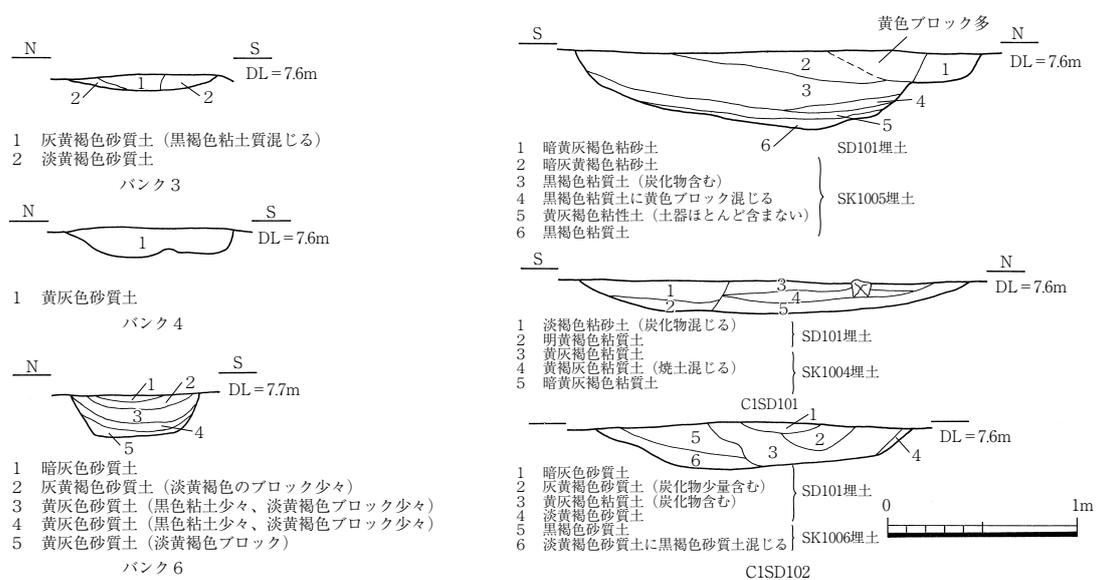
床面標高：西側 7.35m、東側 7.3m

接続：西側C4区へ、東側C3区へ

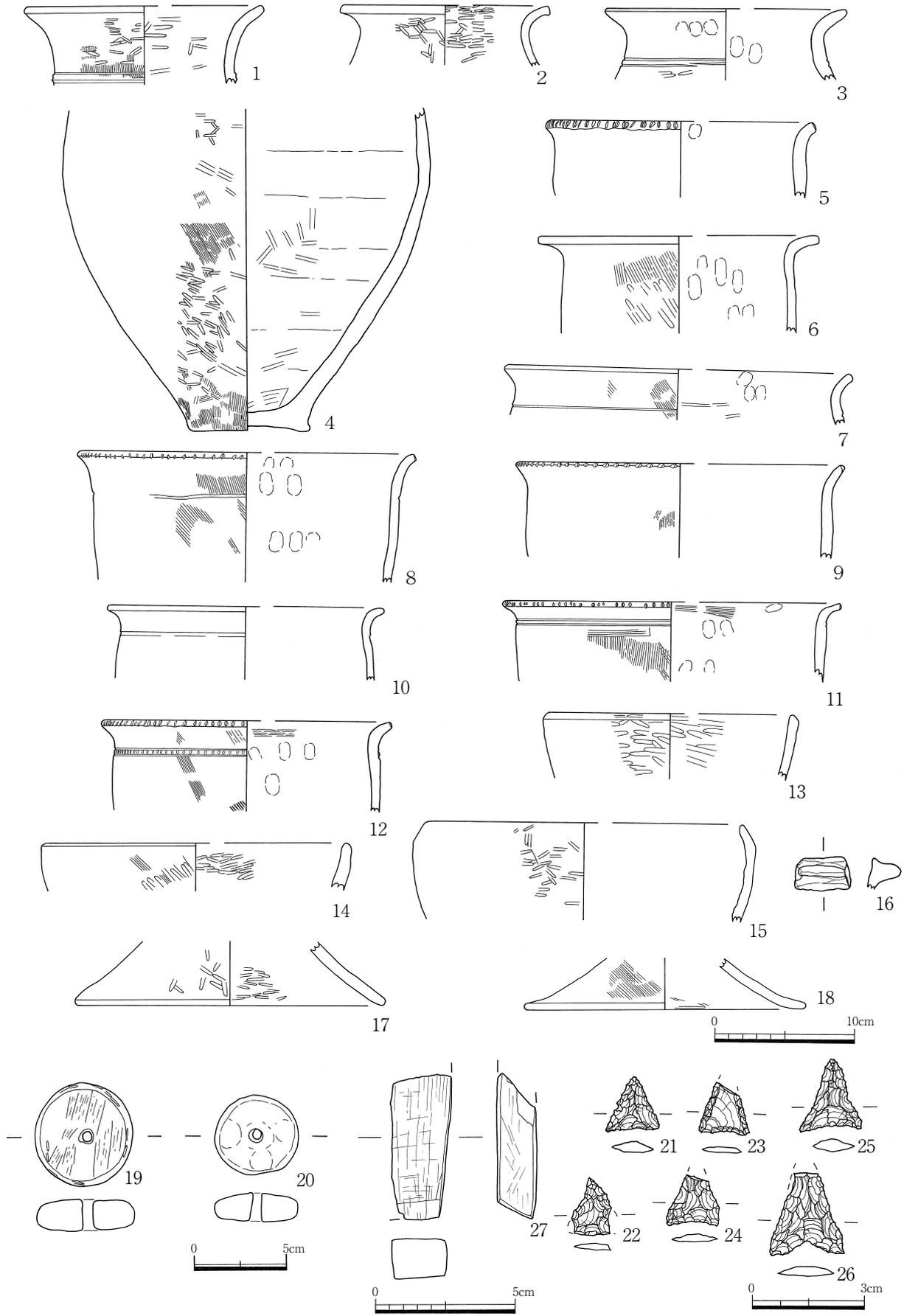
出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋、紡錘車)、石器(石鏃)

所見：環濠と考えられるSD105から約39m北側でほぼ並行した状態で検出し、SK1004、SK1005、SK1006と切り合う。

埋土は灰褐色土で炭化物、黄色土ブロックが混じる。埋土中からの遺物出土は細片が多く、完形復元できたものはなかった。出土した遺物で器種が判明したものは壺6点、如意形口縁85点、鉢



C1-46 図 C1SD101 (1)・102 (1)



C1-47 ☒ C1SD101 (2)

9点、蓋3点、土製紡錘車2点であった。この内、甕では3条以上の沈線が施されたものはみられない。土器の時期は弥生前期中葉の可能性が考えられる。

石器はサヌカイト製打製石鎌が6点出土しており凹基式1点を除いて平基式で、いずれも薄く重量は最も重いもので約1gと軽い。

土坑との切り合いでは、平面確認では埋土が類似しており前後関係は不明であったが、断面観察でSK1005はSD101を切り、SK1004とSK1006はSD101に切られている可能性が考えられた。出土遺物はいずれも弥生時代前期中葉と考えられており、時期差はほとんどないものと考えられる。また、内濠と考えられるSD105とは同時期と考えられ、規模もしっかりしていることから、集落内を区画する溝の可能性が考えられる。

C1SD102(C1-48 図)

時期；弥生I 方向；N-63°-W

規模；27.5m×0.3m 深さ；0.15m 断面形態；U字状

埋土；暗灰褐色土

床面標高；西側 7.35m、東側 7.4m

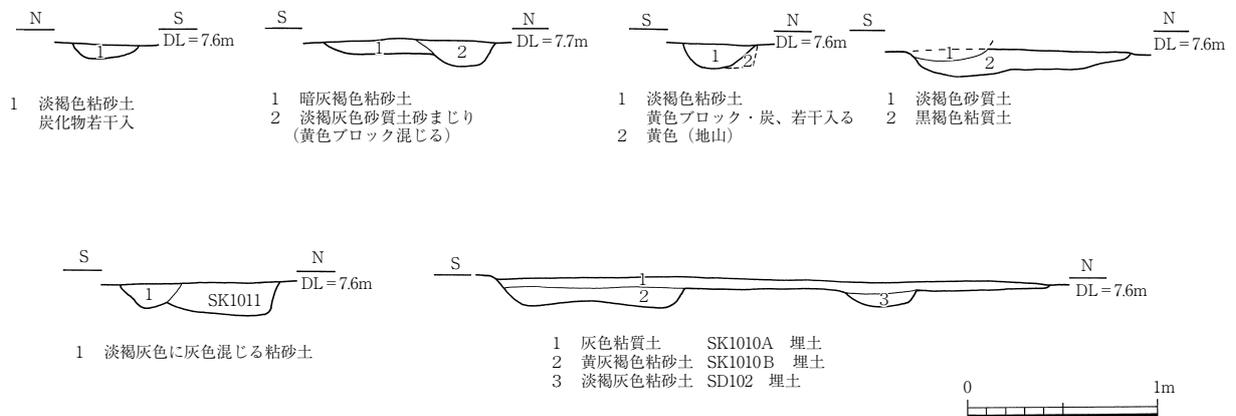
接続；西側C4区へ、東側C3区へ

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；SD101とSD105の間から検出しSK1009、1010、1011、1012と切り合っている。SD101は北側に約4m、SD105は南側に約35m離れており、ほぼ同一方向で並行した状態であるが、SD102は東側でやや向きを北側に変えている。規模は幅約40cm、深さ約15cmでSD101、SD105と比較して小さく、埋土の残存も不良で断面形は甘いU字状であった。

埋土中からの遺物出土は少なく土器のみで、細片であったため図示できる遺物はなかった。口縁部で器種が判断できたものは壺5点、甕9点でいずれも弥生前期中葉の土器であった。

他遺構との切り合いによる前後関係では、SK1009、1012をSD101が切り、SK1010、1011にSD101が切られていたとみられるが、埋土、出土遺物も類似しており時期差はほとんどないものと考えられ、いずれの遺構も前期中葉の時期と考えられる。また、SD101、SD105についても時期



C1-48 図 C1SD102(2)

差はほとんどないと考えられるが、同時並存については不明である。

C1SD105(C1-49 図)

時期：弥生I 方向：N-62°-W

規模：37.5m×1.9~2.5m 深さ：0.8m 断面形態：U字状

埋土：暗灰褐色土

床面標高：6.65~6.78m

接続：西側C4区へ、東側C3区へ

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯、蓋、紡錘車)、石器(石鏃、石包丁、石斧、紡錘車)

所見：弥生前期中葉の環濠と考えられる溝跡で、岡本健児氏が西見当遺跡で確認した環濠は調査区西端から約11mの地点の当遺構の一部である。当調査区では溝跡がほぼ直線的に東西方向に約37.5m延びるが、東端部から約9.5mの地点で北側に分岐している。直進する方はC3区で検出した大きな流路に開口している。分岐地点では分岐した溝跡は2条になっており、検出した環濠と考えられる溝跡は計3条であった。これらは同時並存していたのではなく、直線部分が最も古く、次に南側の順で最も北側のものが新しいと考えられる。

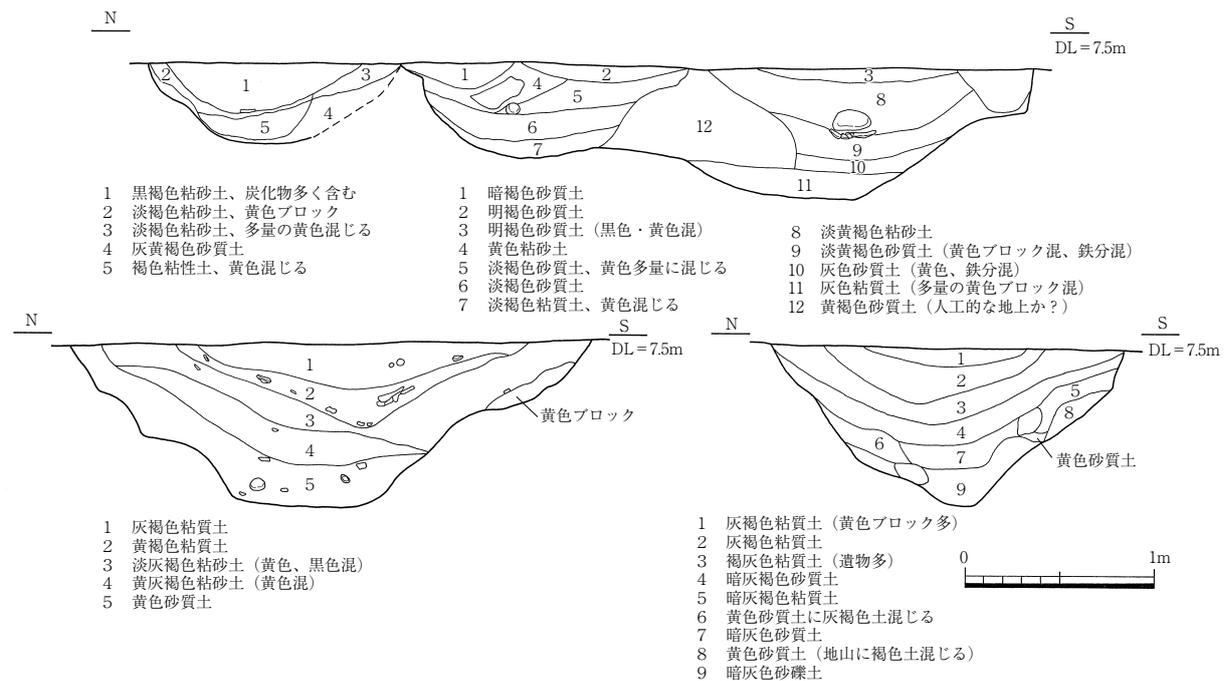
出土遺物等の詳細は別分冊で前期溝2として後述する。

C1SD106(C1-50 図)

時期：弥生IV~V 方向：N-60°-W

規模：4.7m×0.5m 深さ：0.6m 断面形態：U字状

埋土：褐色土



C1-49 図 C1SD105

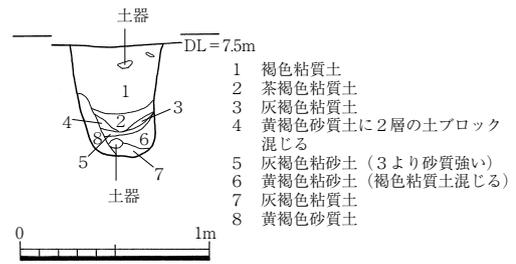
床面標高；7.1m~6.75m

接続；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；検出時、延長は長いとみられたが、全長 4.7m で終わる。溝状土坑の土坑と考えられる。埋土は褐色土で床面は西側に向かって低くなっている。深さは約 60cm が残存しているが、遺物の出土は少なく図示できる遺物はなかった。出土した土器では、凹線文が施された壺 1 点、高杯 1 点が確認され、貼付口縁も 1 点出土している。また、刳圧痕が残る底部も 1 点出土している。遺物は弥生時代中期末~後期初頭と考えられる。

遺構も同時期と考えられ、溝状土坑には掘立柱建物跡が伴う例が多いが、掘立柱建物跡は検出できなかった。



C1-50 図 C1SD106

C1SD108 (C1-51 図)

時期；弥生I 方向；N-57°-W

規模；0.9m×0.25m 深さ；0.3m 断面形態；V字状

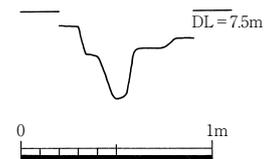
埋土；黒褐色土

床面標高；6.95m

接続；西側C5区、東側一次調査Loc.35

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；SD107 埋土除去後床面から検出し、調査区内でわずかに 0.9m しか検出できなかった。埋土は黒褐色土で遺物は弥生土器底部片が出土したのみであった。埋土除去後、遺構の断面形はV字状であった。わずかししか検出できなかったが、埋土、方向、断面形からこの溝跡は弥生時代前期の外濠の一部と考えられる。外濠についての詳細は環濠3で後述する。



C1-51 図 C1SD108

C1SD109 (C1-52・53 図)

時期；弥生I-5期 方向；N-52°-W

規模；3.6m×0.7m 深さ；0.6m

断面形態；U字状

埋土；褐色土

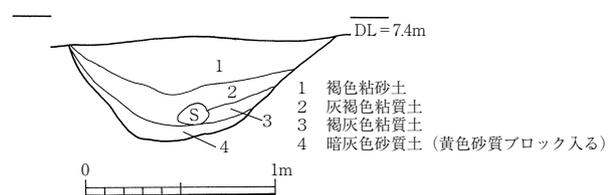
床面標高；6.5m~6.7m

接続；南側一次調査Loc.39

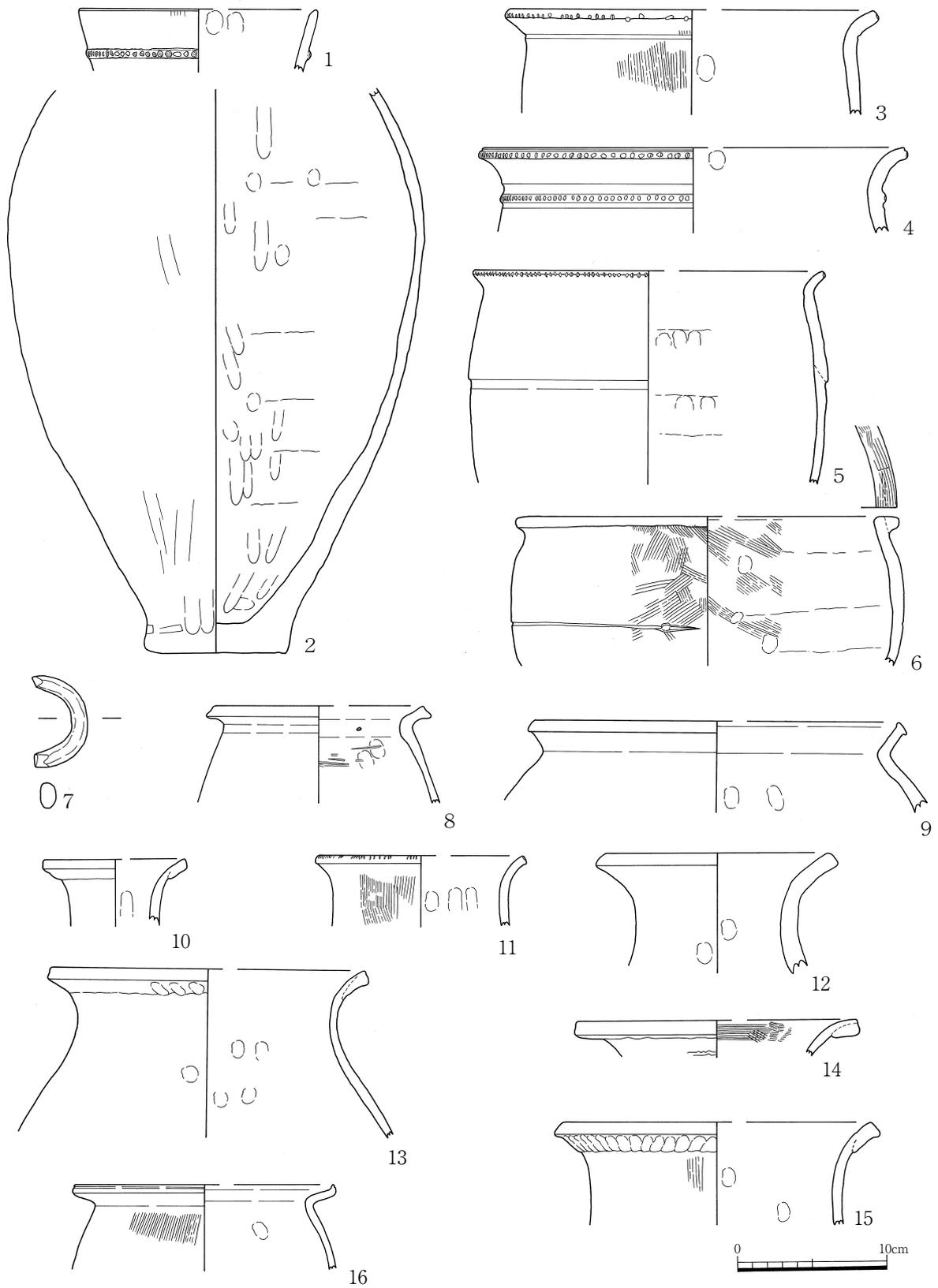
出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区南東隅で検出し、SD110と切り合う。埋土は上層が褐色土で中下層は灰褐色土である。遺構の断面形はしっかりしたU字状で約 65cm が残存していた。

掘削時、SD110と同時に掘削を行い、SD109単独で遺物の取り上げは行わなかったため、時期



C1-52 図 C1SD109(1)



C1-53 ☒ C1SD109(2) · 110

確定は困難であるが、SD109 とSD110 を連名で取り上げた遺物には弥生時代前期土器が入るが、SD110 単独で取り上げた遺物は前期の土器は入らないため、前期土器はSD109 に属する可能性が高いと考えられる。出土した前期土器には、逆L状口縁が含まれていた。

SD109 はしっかりした断面形を持ち、方向も内濠の北側へ分岐した部分と同じであり、外濠の延長の可能性も考えられたが、検出埋土が前期中葉の遺構のものと異なり、逆L状口縁が入っていることから、外濠の延長ではないと考えられる。SD109 の埋没時期は弥生時代前期末と考えられる。

C1SD110(C1-53 図)

時期：弥生IV **方向**：N-36°-W

規模：6.5m×6.2m **深さ**：0.2m **断面形態**：箱形

埋土：褐色土

床面標高：6.8m~7.1m

接続：C3 区

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区南東部で、調査区東端部に向かって開口するプランを検出。埋土は淡褐色土で砂質の強いものであった。埋土中からは多くの土器が出土しており、弥生前期から中期末、後期前半の土器が出土している。

床面は緩やかに東方向に向かって下がっており、南北方向の立ち上がりは緩やかなものであった。調査区南端部は断面確認では急激に地山が落ち込んでいることが確認されており、東側調査区C3 区では、自然流路が確認されている。これらから、SD110 は流路に向かって開口してゆく自然の落ち口と考えられ、中期末~後期前半に埋没したと考えられる。

C1SR101(C1-54 図)

時期：弥生I~V **方向**：—

規模：— **深さ**：— **断面形態**：U字状

埋土：暗褐灰色土

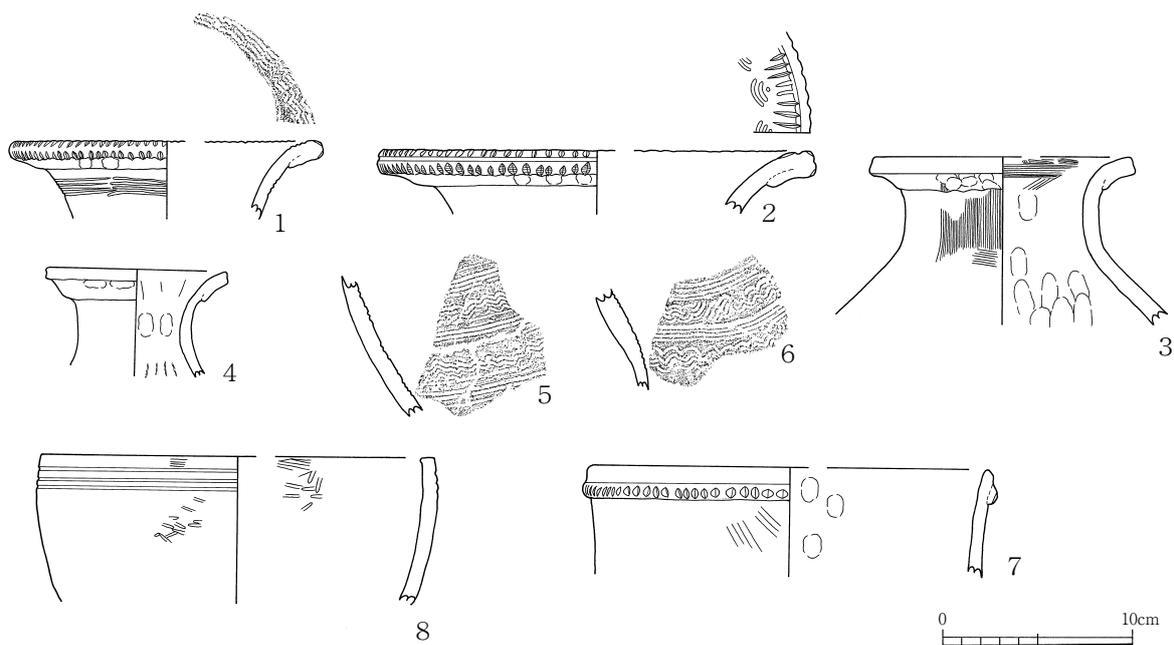
床面標高：—

接続：C3 区

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区南西部に設定したトレンチによって確認した。当調査区ではトレンチ部分のみで検出したが、東に隣接するC3 区で延長部分が確認されている。

埋土には多くの遺物が含まれているが、出土した土器は全て弥生時代のもので、時期は前期から後期と考えられる土器まで出土している。詳細はC3 区で述べたい。



C1-54 図 C1SR101

(4) ピット (C1-46 図)

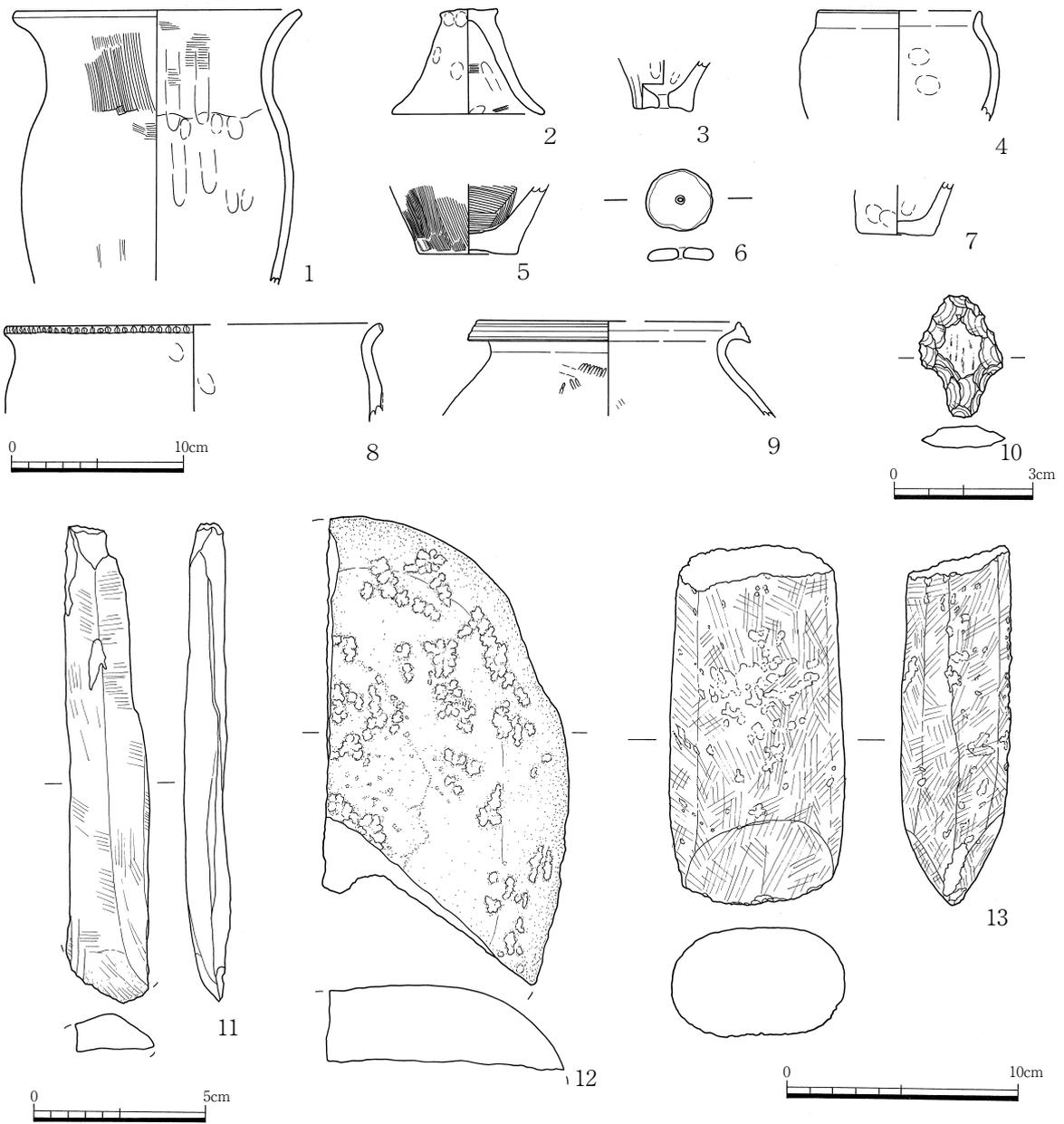
C1 区で検出したピットは約 530 個で、直径約 20cm 程度の小規模なピットが大部分である。埋土は黒褐色土、褐色土、灰色土が混じったものに大別できる。灰色土が埋土になっている近世以降と考えられるピットを除いたほとんどのピット埋土中からは弥生土器片が出土しており、黒褐色土、褐色土が埋土のピットは弥生時代のものと考えられる。

検出した弥生時代のピットは、ほとんどが柱穴と考えられるが、掘立柱建物跡等の建物に復元できたものはなく、削平によって柱穴のみが残存する住居跡が存在する可能性も考えられたが復元、確認することができなかった。

なお、ピット計測一覧については、実測遺物のあるもののみをあげた。

C1-3 表 C1 区弥生時代ピット一覧

遺構番号	柱穴形	直径(cm)	深さ(cm)	埋土・概要	柱根/ 有・無	出土遺物 (点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
C1P1010	円形	25	13				土佐型甕	弥生IV-2~	
C1P1014	楕円形	55×43	12				サヌカイト製有茎石鏃	弥生	
C1P1082	楕円形	80×70	20				小型蓋	弥生	
C1P1150	円形	29	14				台石	弥生	
C1P1164	円形	25	10				底部穿孔土器	弥生	
C1P1216	円形	38	24				小型鉢	弥生	
C1P1225	円形	31	16				底部	弥生	近現代混入
C1P1283	円形	37	30				土器転用紡錘車	弥生	
C1P1342	楕円形	73×54	10				小型土器	弥生	
C1P1378	円形	80	20				弥生前期土器多	弥生I-2、3	SK1142 と切り合う
C1P1413	円形	33	23				大型蛤刃石斧	弥生	
C1P1444	円形	53	21				凹線文甕	弥生IV-2~	
C1P1456	楕円形	103×[51]	22				不定形石器	弥生	ST103 と切り合う



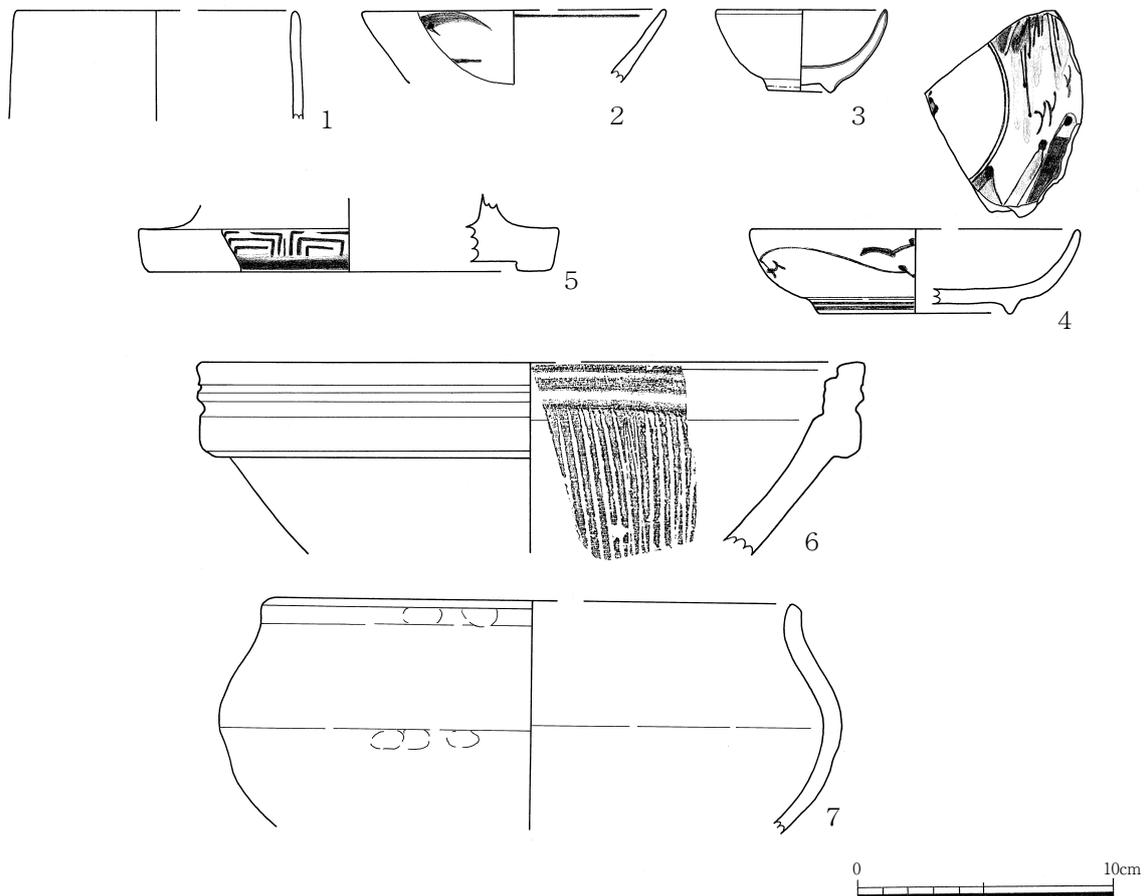
C1-55 図 C1 区ピット出土遺物

3. C1 区古代以降の遺構と遺物

(1) 土坑

弥生時代以外の土坑で時期が判明しているのは近世以降と考えられる土坑のみである。近世以降の土坑は墓壙と耕作に利用されたものの2種類に大別できる。墓壙はSD105の西端部でまとまって検出しており、旧地割りの境に沿った状態で検出した。墓壙のプランは長方形がほとんどであるが、わずかに円形のものも検出している。墓壙の時期は長方形のものは近現代とみられるが、円形プランのものは近世までさかのぼると考えられる。

耕作に伴うと考えられる土坑は、直径1.0m～1.3mの円形土坑で断面がU字状で深く、漏水防止の赤土が残るものもみられる。いずれも近現代と考えられる。



C1-56 図 C1SK1152・1184・P1198

C1-4 表 C1 区近世土坑計測表

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋 土	切合関係	時期	備 考
C1SK1001	不整形	—	0.85	[0.36]	15	—	灰色土	SK1002 を切る	近世以降	
C1SK1003	円形	—	1.8	—	—	—	灰色土に黒褐色		近現代	
C1SK1021A	楕円形	皿状	[1.5]	1.6	0.2	—	灰色土	最も新しいB、 Cと切り合う	近現代	
C1SK1024	円形	箱形	1.6	—	—	—	暗灰褐色土		近現代	調査区で半截
C1SK1073	不整形円形	U字状	0.48	0.43	17	—		ST101	近現代	
C1SK1077	長方形	皿状	1.8	1.1	10	N-71°-W	灰色土		近現代	
C1SK1078	長方形	皿状	1.75	1.2	20	N-78°-W	灰褐色土		近現代	
C1SK1079	長方形	皿状	1.65	1.2	10	N-69°-W	灰色砂質土		近現代	
C1SK1086	円形	U字状	1.5	—	40	N-9°-E	灰黄褐色土		近現代	
C1SK1089	円形	U字状	1.6	—	50	—	灰黄褐色に灰色入る		近世	近世墓
C1SK1094	不整形方形	2段	2.2	1.6	40	N-25°-E	灰黄褐色土		近現代	耕作に伴う
C1SK1096	方形	逆台形	[2.0]	1.4	20	N-68°-W	灰黄褐色土に灰色土 はいる		近世以降	
C1SK1097	楕円形	—	1.9	1.5	2	N-21°-E	灰褐色土に黄褐色土 混じる	SK1066、1068 切り合う	近世以降	残存不良 地形の窪みの可能性
C1SK1102	円形	U字状	1.2	—	40	—			近現代	
C1SK1103	長方形	皿状	4.75	2.9	3	N-70°-W	灰褐色土	床面から近現代 SK1112、1113 検出	近現代	
C1SK1104	長方形	—	—	—	—	—			近現代	消滅 SK1103 と同一か
C1SK1106	長方形	皿状	1.3	0.7	10	N-72°-W	灰色土に黄褐色土入 る		近現代	
C1SK1112	円形	U字状	1.3	—	25	—	灰色土	SK1103 の床面 から検出	近現代	
C1SK1113	円形	U字状	1.4	—	25	—	灰色土	SK1103 の床面 から検出	近現代	
C1SK1125	円形	U字状	1.3	—	40	—		ピットと切り合 う	近現代	
C1SK1151	長方形	—	3.0	1.7	7	N-27°-E	灰褐色土			近現代に伴う浅い土 坑か
C1SK1152	楕円形	U字状	1.3	0.95	63	N-22°-E	灰褐色土		近現代	墓壇の可能性
C1SK1154	楕円形	U字状	0.87	0.75	5	N-65°-W	灰褐色土		近現代の 可能性	墓壇の可能性
C1SK1155	長方形	箱形	1.5	1.4	27	N-70°-W	灰褐色土	SK1156 を切る	近現代	
C1SK1157	長方形	箱形	1.4	1.0	29	N-70°-W	SK1156 を切る		近現代	
C1SK1161	円形	U字状	1.0	—	35	—	灰褐色土に灰色土多 くはいる		近現代	同形ものが2基並び 切り合う
C1SK1162	円形	U字状	1.2	—	45	—	灰褐色土に灰色土多 くはいる		近現代	
C1SK1163	円形	U字状	1.6	1.4	43	N-61°-W	灰褐色土に灰色土多 くはいる		近現代	
C1SK1177	長方形	—	1.4	[0.5]	20	—			近現代	図面上SK1178 と一 体化、消滅
C1SK1179	溝状	—	—	—	—	—			近現代	図面上消滅、近現代 の畦畔の可能性
C1SK1184	円形	U字状	1.2	—	—	N-53°-W		調査区に切られ る	近現代	
C1SK1191	不整形方形	箱形	3.0	2.4	33	—			近現代	3基のSKの切り合い の可能性
C1SK1192	円形	U字状	1.1	—	50	—			近世以降	近世墓
C1SK1195	長方形	箱形	1.45	[0.4]	21	N-72°-W		SD107 と切り合 う	近現代の 可能性	
C1SK1197	円形	U字状	1.7	—	—	—	灰色土に灰黄褐色土 混じる		近現代の 可能性	
C1SK1198	円形	U字状	1.2	—	96	—	灰色土に灰黄褐色土 混じる			近世墓

(2) 溝跡

弥生時代以外の溝跡では須恵器が出土したSD107を調査区南端部で検出したが調査区に切られており詳細は不明であった。SD103、104、111があげられる。SD103はL字状で屋敷地を区画する小溝の可能性が考えられる。SD104、111は規模が小さく完掘時消滅した。

C1SD103(C1-57 図)

時期：近世 形態：L字状方向

規模：東西方向 7.2m×0.85m 深さ：0.35m 南北方向 19.0m×0.75m 深さ：0.3m

断面形態：U字状

埋土：灰色土

床面標高：7.2m

接続：—

出土遺物：近世陶磁器(備前焼き播鉢、焙烙、碗、瓦)

所見：L字状の溝で埋土は灰色土である。SD105など弥生時代の遺構を全て切った状態で検出した。埋土中から出土した遺物は近世の土器、陶磁器、焙烙、備前焼き播鉢、碗、瓦が出土している。SD103東西方向の東側端部で検出した円形土坑は墓壇と考えられ、SD103に伴う可能性があり、SD103は屋敷の区画溝の可能性が高いと考えられる。

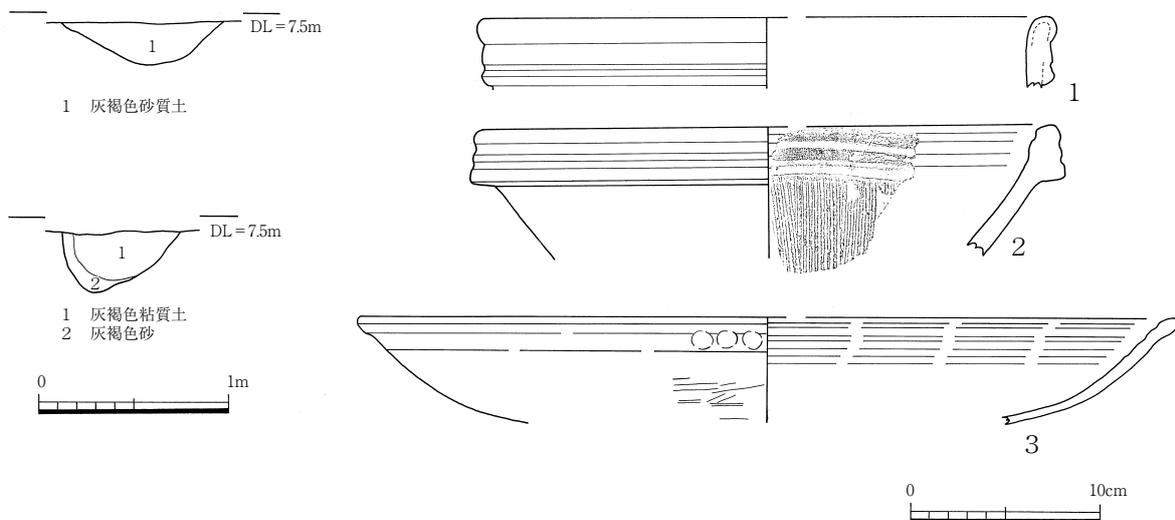
C1SD107(C1-58 図)

時期：古代 方向：N-74°-W

規模：3.5m×0.5m 深さ：0.35m 断面形態：箱形

埋土：黄褐色土

床面標高：7.1m

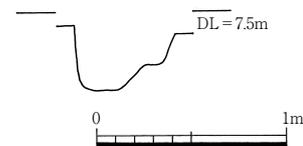


C1-57 図 C1SD103

接続：東側C5 区

出土遺物：須恵器、土師器

所見：調査区南端部から検出し、調査区にはほぼ沿うが現況地割りからわずかに南方向に向く。埋土は黄褐色土で、遺物は少なく図示できるものはないが、須恵器、輪高台碗が出土している。SD107 は古代の溝跡と考えられ、12 世紀代の可能性が考えられる。



C1-58 図 C1SD107

(3) ピット

ピットは約 530 個検出した。埋土は黒褐色土、褐色土、灰色土に大別され、黒褐色土、褐色土は弥生時代と考えられる。灰色のものは近世以降のピットと考えられるが、P1198 からは 15 世紀代と考えられる土師器鍋が出土しており中世の遺構が存在する可能性をうかがわせる。

建物跡に復元できるものはなかった。

C1-5 表 C1 区近世ピット一覧

遺構番号	柱穴形	規模(cm)	規模(cm)	埋土・概要	柱根/有・無	出土遺物(点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
C1P1198	円形	24	12				土師器鍋 15 C 前半	中世	

C2区の調査





C2-1 図 C2 区遺構全体配置図(S=1/250)

1. C2 区の概要

概要

C2 区は調査対象区の北東部に当り、標高 7.7~8.0 mを測る。西はC3 区、南はB1 区と接する。C 区とした調査区は弥生時代前期の環濠集落が広がるが、C3 区の自然流路によって集落は画されており、本調査区は環濠集落の外縁部に当たるとみられる。C2 区で検出された遺構の主体は弥生時代前期前葉から中葉とみられる。出土遺物から環濠内の遺構とほぼ同時期とみられるが、前期の竪穴住居跡が検出されるなど、遺構のあり方など環濠の内と外では相違点が認められる。

C2 区で検出された遺構は、一部近世の攪乱の影響を受けるものの全体的に切り合いが少なく、隣接する調査区に比べ遺構密度は疎である。また竪穴住居跡を含む遺構は、調査区南に集中し北部に少ない。これらの遺構は後世の削平のため残存状態の悪いものが多い。竪穴住居跡のうち 1 軒は、弥生時代前期中葉の松菊里型竪穴住居である。

また本調査区の遺構埋土には全体的に灰黄褐色~にぶい黄褐色の砂質シルト層がみられるのが一つの特徴である。これは遺構の埋土上層・下層などに認められ、洪水によって氾濫した土砂が遺構内に堆積したものと考えられる。遺構の新旧関係を考える上での鍵層として捉えることができるだろう。

調査担当者 坂本裕一、小野由香

執筆担当者 小野由香

調査期間 平成 9 年 10 月 6 日~平成 9 年 11 月 21 日

調査面積 1,757m²

時代 弥生時代前期~後期、近世

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡 4 軒、土坑 36 基(うち 7 基が溝状土坑でSD表記)、性格不明遺構 4 基、ピット約 170 個

2. C2 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

C2 区では竪穴住居跡は 4 軒検出している。これらは調査区の南半部に集中し、うち 2 軒には切合関係が認められる。住居の残存状態は非常に悪く、平面プランが確認できるものは円形 1 軒、方形 1 軒である。残りの 2 軒に関しては、床面まで削平されており平面プランは不明瞭である。ただし支柱穴が多角形配置であり、時期的にも平面形は円形であったとみられる。また平地住居の可能性もある。

本調査区で検出した竪穴住居跡は弥生時代前期のもの 2 軒、中期 2 軒がみられる。そのうち最大のもので C2ST201 で、直径約 7.45m を測る。C2ST201 には炉跡である中央ピットと隣接した双ピット、C2ST203・ST204 からは中央ピットが検出された。中・後期の竪穴住居跡にみられる壁溝は、いずれの住居跡からも未検出である。

C2-1 表 C2 区竪穴住居一覧表

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
C2ST201	7.45	0.29	43.6	円形	—	弥生I-2	松菊里型住居
C2ST202	4.19×(3.73)	0.21	(15.6)	方形	—	弥生I-2	
C2ST203	(2.68)	不明	(5.6)	円形	—	弥生III~IV	
C2ST204	(4.24)	不明	(14.1)	円形	—	弥生IV	

C2ST201 (C2-2・3 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；7.45m **深さ**；0.29m **面積**；43.6m²

埋土；黒褐色シルト質粘土主体。上層ににぶい黄褐色砂質シルト層が堆積。

ピット；数 38 **支柱穴数**；5 **支柱穴**；P1~5

床面；1 面

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 112×88cm **深さ** 43cm

埋土 にぶい黄褐色シルト主体。基底面に炭化物層あり。

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(甕、鉢)、土製紡錘車 1、石鏃 4、石槍 1、柱状石斧 1、砥石 5、叩石 6、投弾 1 点、チャート剥片類

所見；調査区南端に位置し、C2ST204 に切られる。中央ピットの両端に双ピット(P6・7)を持つ松菊里型竪穴住居で、住居の平面プランに沿って直径約 30~50cm のピットが 14 個めぐり。これら周縁部のピットは 2 ないし 3 個のセットでめぐりようであるが、用途は不明である。壁溝は確認されていない。住居埋土上層には洪水砂とみられる、にぶい黄褐色砂質シルト層が認められる。遺物は下層の黒褐色シルト層から、比較的多量に出土した。しかし出土土器のほとんどは胴部片で口縁部

は僅少であることから、住居廃棄後に捨てられたものの可能性が高い。住居の床面からは叩石、頁岩製の柱状石斧の未製品が出土している。土層の堆積及び遺物の出土状態から、C2ST201 は住居廃棄後しばらく経ってから、洪水に遭ったと考えられる。

住居跡の中央部では、中央ピットと双ピットが検出された。双ピットは中央ピットから約 10cm 離れて掘られている。双ピットからは遺物は出土していない。一方中央ピットの基底面では炭化物層を検出しており、炉跡として使用されたことが窺える。また、炭化物の上面で砥石 1 点と、チャート円礫が投げ込まれたような状態で検出された。その他弥生土器片、砥石 4 点、叩石 3 点、打製石鏃 2 点、磨製石鏃未製品 2 点、石槍 1 点、チャート及び頁岩剥片、チップなどが出土した。叩石の中には扁平な砂岩円礫を打ち欠き、それによってできた鋭利な側縁部を使用したとみられるものがある。これらの叩石の側縁部には刻み状の敲打痕が多く残る。住居跡北側床面からは頁岩とみられる剥片が多く出土した。

C2ST201 は床面及び中央ピットから比較的多くの石器類が出土しているのが特徴である。特にチャート円礫、チャート及び頁岩の剥片・チップ、未製品の磨製石鏃、砥石、叩石などは、住居内で石器製作が行われていた可能性を示唆する貴重な資料と考えられる。

住居内出土遺物のうち図示できたものは 6 点である。1~4 は前期の甕である。全て口縁下端部を刻み、胴部の膨らみもほとんどないものが多い。5 は鉢の底部である。6 は土製紡錘車である。7~11 は頁岩又は粘板岩製の磨製石鏃である。7 は先端から茎まで鏑が通っている。

C2ST202(C2-4 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；方形 **主軸方向**；—

規模；4.19m×(3.73)m **深さ**；0.21m **面積**；(15.6)m²

埋土；暗褐色シルト主体。にぶい黄褐色シルト混じる。

ピット；数 3 **主柱穴数**；不明 **主柱穴**；不明

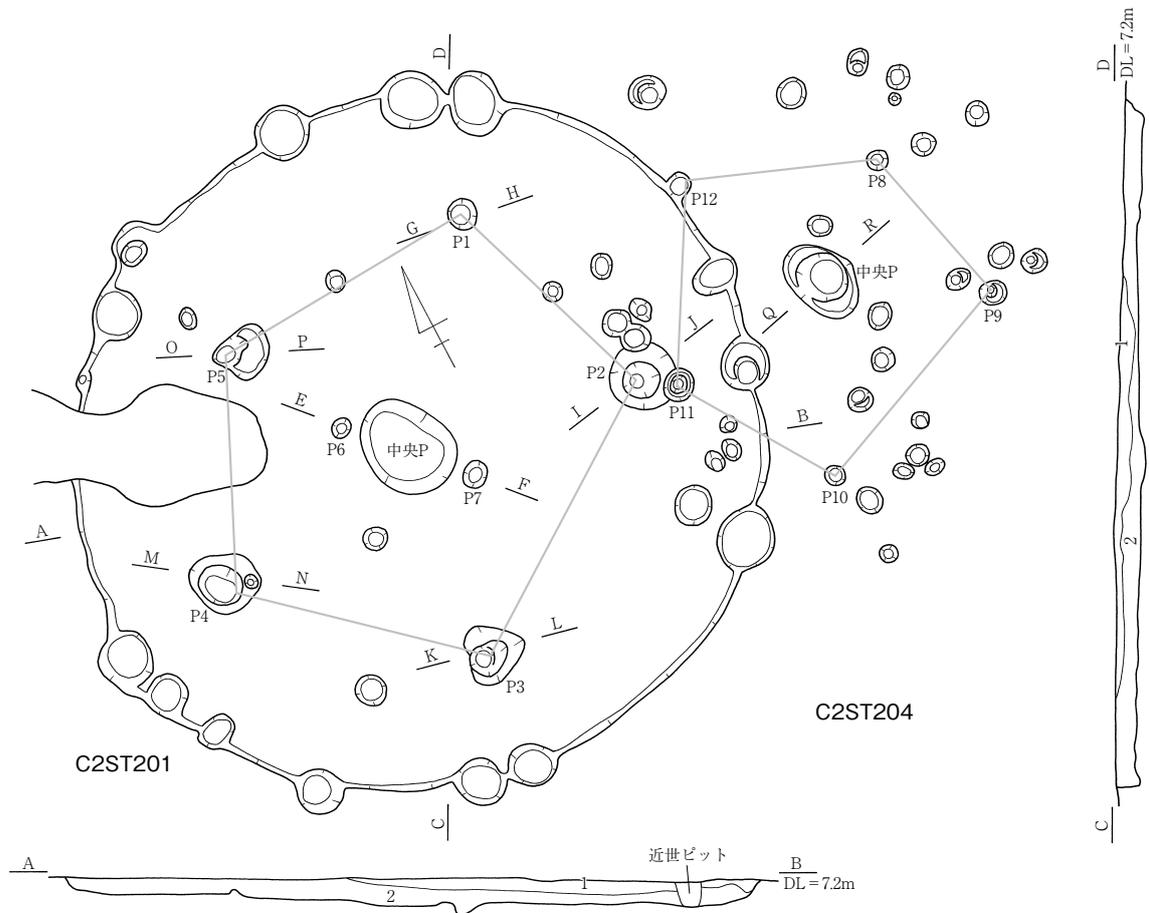
床面；1 面

中央ピット；— **壁溝**；—

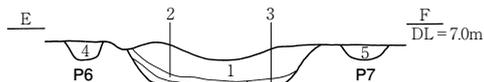
出土遺物；弥生土器(甕、壺、鉢、高杯)、台石 1 点

所見；調査区東南端部に位置し、住居跡の南は調査範囲外に当たる。平面プランはやや不整形気味の方形を呈する。壁溝は存在しない。前回の田村遺跡群の発掘調査で検出された前期の方形住居跡と類似しており、出土遺物からみても C2ST201 と同時期の遺構の可能性が高い。洪水砂とみられる、にぶい黄褐色砂質シルトの層は検出されていない。住居埋土は土層観察から、主体となる暗褐色シルトの下に、黒褐色ブロックを含む褐色シルトの薄い堆積が確認された。この褐色シルト層は P1 の東でしか検出されておらず、貼床の可能性もあるが不明である。床面からは 3 個のピットが検出されたが、いずれのピットも埋土に炭化物を伴わず、炉跡としての中央ピットは未検出である。出土遺物は量的には少なめで、P1 の周辺で多く検出された。土器の他に砂岩製の台石が出土している。

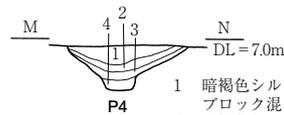
出土遺物のうち、図示できたのは 1、2 の甕 2 点である。いずれも煮炊きに使用されたとみられ、剥落が著しい。1 は胴部外面にススの付着がみられる。



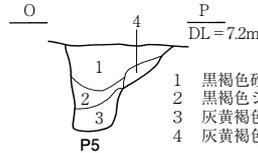
- 1 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/3)
- 2 黒褐色粘土質シルト (10YR3/2) 北側に黄褐色シルトブロック入る



- ST201-中央ビット
- 1 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) に黒褐色シルト混じる
 - 2 褐色シルト (10YR4/4)
 - 3 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2) に黄褐色シルトブロック混じる
- ST201-P6
ST201-P7
- 4 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) に黒褐色シルト混じる
 - 5



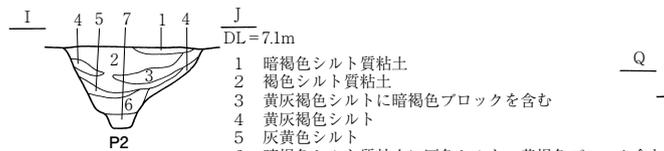
- 1 暗褐色シルト (10YR3/3) 黄色シルトブロック混じる
- 2 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/2)
- 3 黒褐色シルト質粘土 (10YR4/2)
- 4 黒褐色シルト質粘土 (7.5YR3/1)



- 1 黒褐色砂質シルト (10YR2/3)
- 2 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2)
- 3 灰黄褐色シルト質粘土 (10YR5/2)
- 4 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2)



- 1 黒褐色砂質シルト (10YR3/2)
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2)
- 3 褐色シルト (10YR4/4)
- 4 黒褐色シルト質粘土 (10YR2/3)



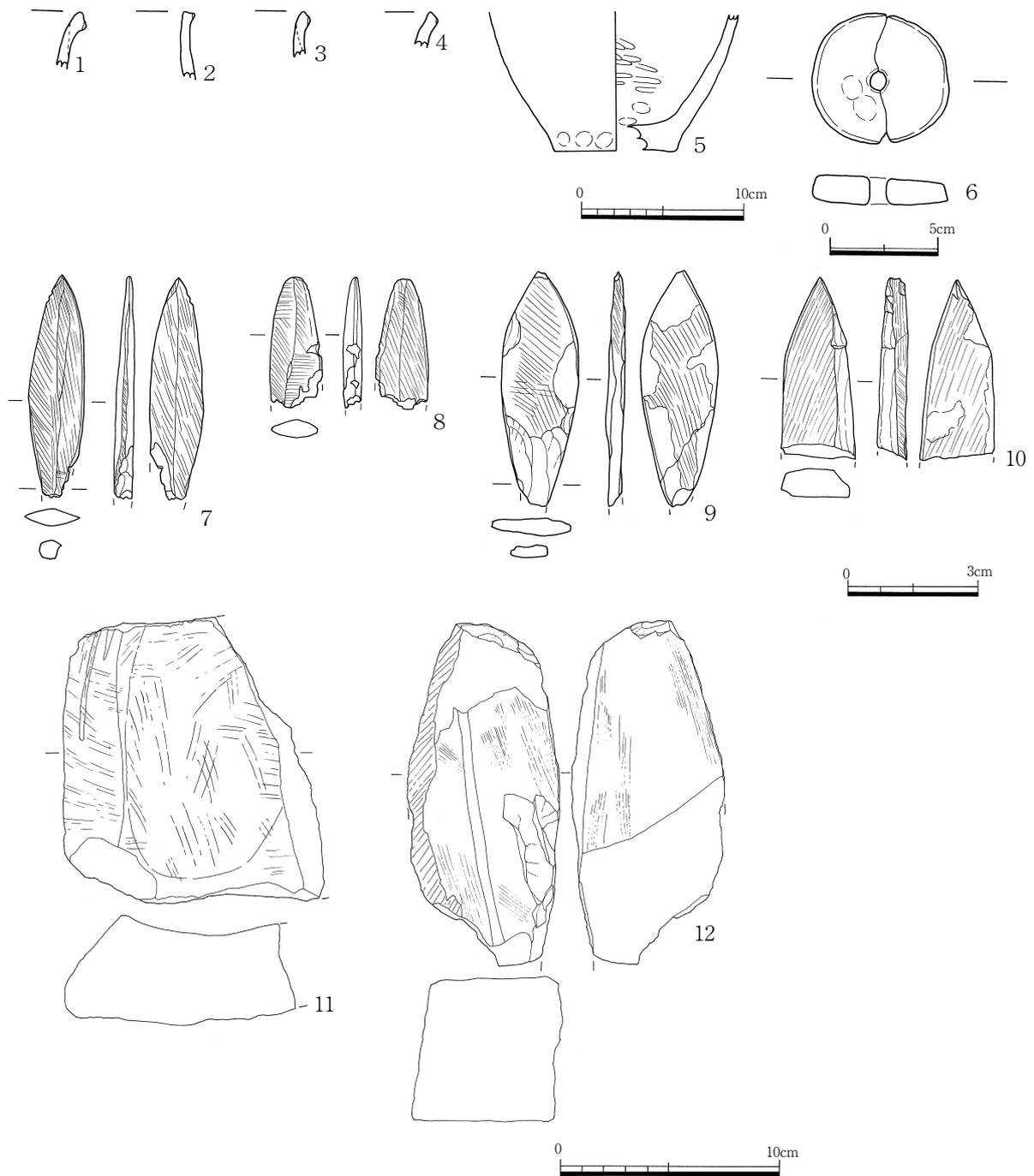
- 1 暗褐色シルト質粘土
- 2 褐色シルト質粘土
- 3 黄灰褐色シルトに暗褐色ブロックを含む
- 4 黄灰褐色シルト
- 5 灰黄色シルト
- 6 暗褐色シルト質粘土に灰色シルト、黄褐色ブロック含む



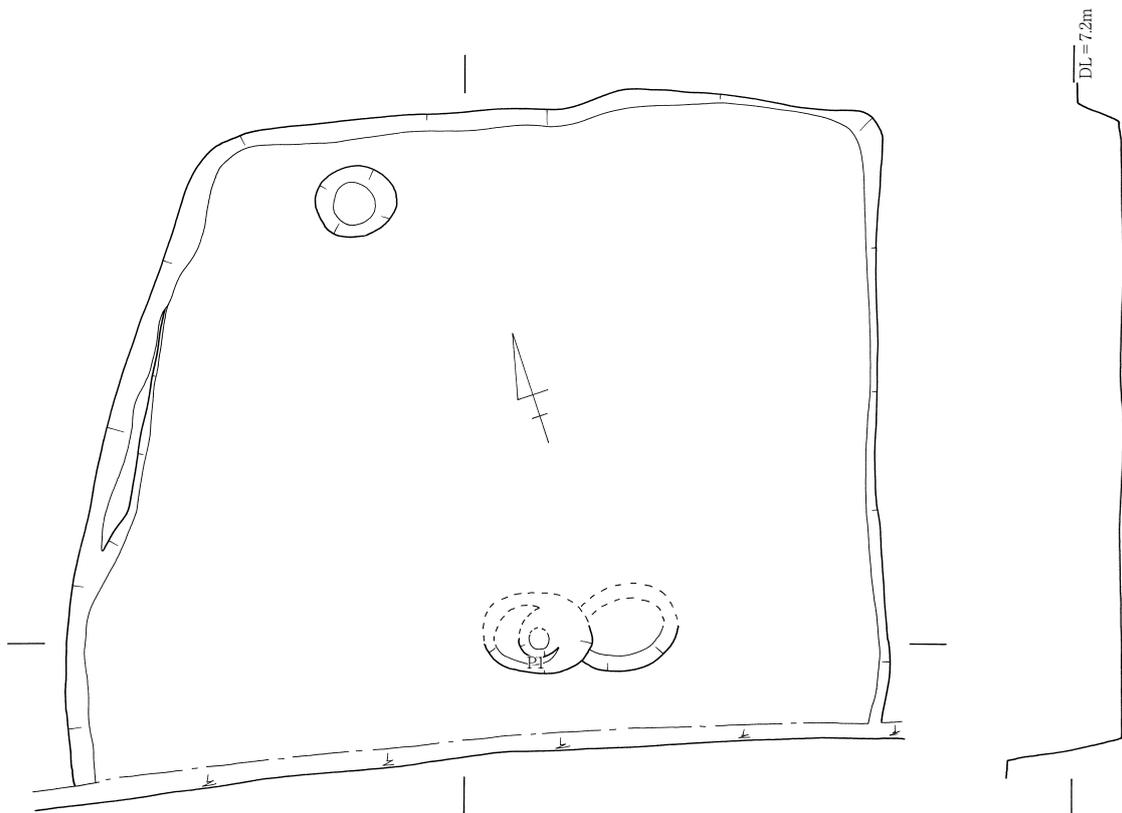
- C2ST204 中央P
- 1 褐色シルト (7.5YR4/4)
 - 2 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
 - 3 黒色シルト質粘土 (10YR2/1) 炭化物・1-6cmの黄褐色ブロックがまだらに入る
 - 4 暗褐色シルト質粘土 (10YR3/4) 細砂粒わずかに入る



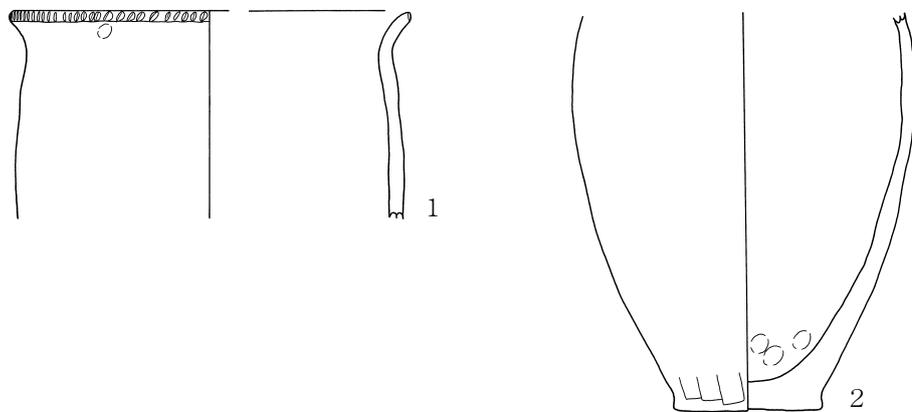
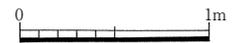
C2-2 図 C2ST201・204(1)



C2-3 図 G2ST201・204(2)



- 1 暗褐色シルト (10YR3/4) におい黄褐色シルトが混じる。ピット
下部にかけて黄褐色ブロックがまばらに入る
- 2 褐色シルト (10YR4/4) 3cm以下の黒褐色ブロックが大量に入る
- 3 褐色シルト (10YR4/4) 黒褐色ブロックがスジ状に全体に入る



C2-4 ☒ C2ST202

C2ST203(C2-5 図)

時期；弥生中期？ **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；(2.68)m **深さ**；— **面積**；(5.6)m²

埋土；不明

ピット；数 25 **主柱穴数**；5 **主柱穴**；P1~P5

床面；—

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 71×65cm **深さ** 20cm **埋土** 暗褐色粘土質シルト

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)

所見；調査区南部、西端で検出した。SD205 の南に位置する。主柱穴の残存状況が他の竪穴住居跡に比べ悪く、既に平面プランが削平されたものとみられる。または平地住居の可能性もある。住居の平面プランは主柱穴の配置から、円形になるとみられる。壁溝は確認されていない。中央ピットからは炭化物、焼土などは未検出である。

遺物は主柱穴などのピット出土のみで、非常に僅少である。時期決定のできる遺物は出土しておらず、土器胎土から中期の住居跡の可能性が高い。報告書に図示できるものはなかった。

C2ST204(C2-2・3 図)

時期；弥生IV **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；(4.24)m **深さ**；— **面積**；(14.1)m²

埋土；不明

ピット；数 26 **主柱穴数**；5 **主柱穴**；P8~P12

床面；—

中央ピット；**形状** 楕円形 **規模** 89×77cm **深さ** 36cm **埋土** 黒色シルト質粘土主体。

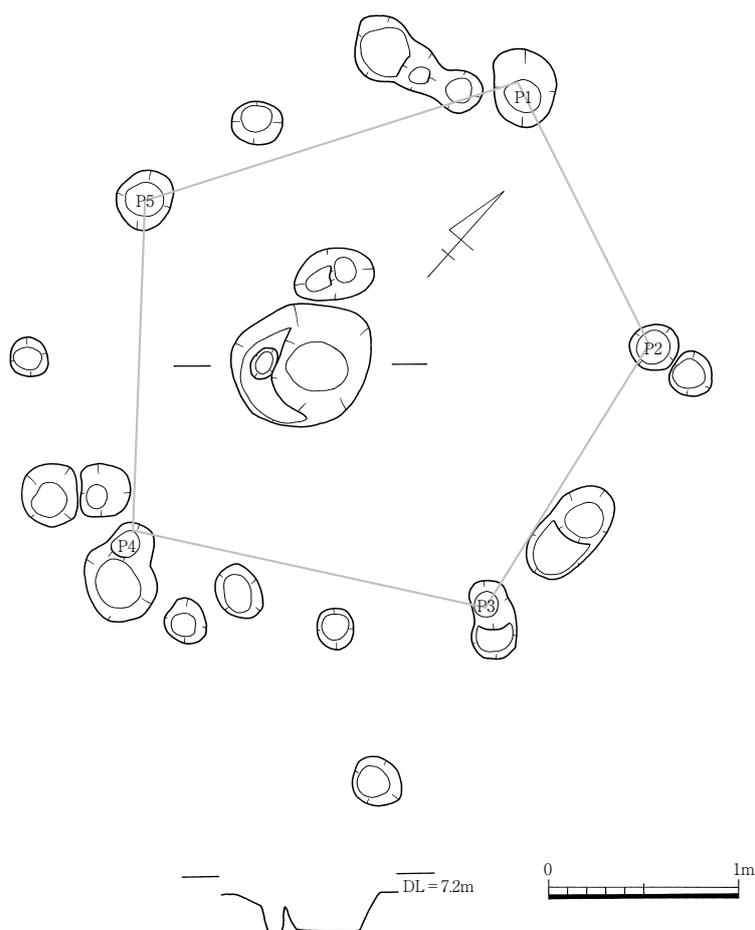
壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区南端部に位置し、C2ST201 を切る。住居の平面プランは平地住居、あるいは後世の削平のため確認できないが、主柱穴の配置から円形プランとみられる。壁溝は未検出である。

中央ピットは比較的残存状態が良く、埋土の中位に炭化物層が確認された。

遺物は中央ピット・主柱穴から出土したが、細片が多く弥生時代前期の遺物もみられた。ただし中央ピットからIV様式とみられる胎土の土器が出土したため、C2ST204 の廃絶時期をこの時期とした。報告書に図示できる遺物はなかった。



C2-5 図 C2ST203

(2) 土坑・溝状土坑

調査区で検出された土坑は溝状土坑を含めて 36 基である。土坑は調査区中央部に比較的集中する傾向があるが、遺構の切り合いもほとんど認められず、密度は非常に低い。遺構の残存状態は全体的に非常に悪く、最も深いもので 63cm、浅いもので 5cm を測る。平面プランは楕円形が主である。土坑の主軸方向に明確な規則性は認められないが、軸方向が N-50°~70°-W の範疇に収まるものが多い。

遺物の出土量は少なく、一つの土坑から遺物が大量に出土する例はみられない。出土状態は床面付近ではほぼ完形で潰れた状態で検出されたもの、土坑廃棄後に投棄されたとみられる例があり、前者は貯蔵穴と考えられる。ただしほとんどの土坑は機能が不明である。

検出された土坑の時期は弥生時代前期中葉が主体を占めるが、中・後期とみられるものも若干検出している。土坑の埋土には、にぶい黄褐色シルトの堆積するものが多くみられる。これらは洪水砂が堆積したものと考えられる。

SD 表記の溝状土坑は 7 基を数える。調査区の南半部を中心に検出され、主軸方向は N-57°~63°-

Wの範疇に収まるものが多い。これらの土坑からは弥生時代IV~V様式のものと思われる遺物が出土しており、同時期または近時代に機能したと考えられる。また、C2SD205はC2ST204の北で検出されており、住居に付属する土坑の可能性もある。

またC2区で検出した近世とみられる土坑については、別章は設けずに土坑・溝状土坑一覧表での報告に留める。

C2-2表 C2区土坑・溝状土坑一覧表

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋 土	切合関係	時 期	備 考
C2SK201	隅丸方形	U字状	1.50	0.64	38.5	N-42°-E	暗褐色シルト		弥生前期?	
C2SK202	方形	逆台形	2.17	1.54	21	N-70°-W	褐色シルト	SD201に切られる	弥生I-2~3	
C2SK203	楕円形	皿状	0.73	0.57	5	N-57°-E	にぶい黄褐色シルト		弥生	
C2SK204	楕円形	逆台形	2.00	0.69	62.5	N-7°-E	にぶい黄褐色シルト		弥生I-2~3	
C2SK205	方形	箱形	1.90	1.28	19.5	N-50°-W	にぶい黄褐色シルト		弥生前期?	
C2SK206	隅丸方形	U字状	1.98	1.07	44.5	N-71°-W	にぶい黄褐色シルト		弥生I-2~3	
C2SK208	楕円形	U字状	2.03	1.52	44	N-5°-E	褐色シルト		弥生I-2~3	
C2SK209	隅丸方形	逆台形	1.74	0.94	37.5	N-27°-E	褐色シルト		弥生I-2~3	
C2SK210	楕円形	皿状	1.09	1.05	5	N-25°-E	褐色シルト		弥生前期?	
C2SK211	隅丸方形	箱形	1.22	0.51	16.4	N-59°-W	褐色シルト		弥生前期?	
C2SK212	楕円形	逆台形	2.14	1.45	39	N-14°-E	灰黄褐色砂質シルト		弥生I-2~3	
C2SK213	隅丸方形	逆台形	2.03	0.77	30.5	N-28°-E	にぶい黄褐色砂質シルト		弥生I-2~3	
C2SK214	楕円形	逆台形	(2.11)	0.95	25	N-19°-E	暗褐色シルト質粘土	P2010に切られる	弥生中期	
C2SK215	楕円形	皿状	1.51	0.72	8.5	N-27°-E	褐色シルト		弥生前期	
C2SK216	楕円形	U字状	1.88	0.85	30	N-68°-W	褐色シルト		弥生I-2~3	
C2SK220	楕円形	U字状	1.63	1.32	32.5	N-69°-W	灰黄褐色砂質シルト		弥生I-2~3	
C2SK222	楕円形	逆台形	1.07	0.54	13	N-52°-W	暗褐色砂混じりシルト質粘土		弥生V	
C2SK223	方形	箱形	1.69	1.35	30	N-39°-W	にぶい黄褐色砂質シルト		弥生	
C2SK227	溝状	U字状	(3.33)	0.99	28	N-51°-W	暗褐色シルト	P2012に切られる	弥生	
C2SK228	楕円形	逆台形	(1.74)	1.00	46	N-59°-W	黒褐色シルト質粘土	ST201を切る SD204との切り 合いは不明	弥生中期	
C2SK229	楕円形	逆台形	1.4	0.72	27	N-62°-W	にぶい黄褐色シルト		弥生V	
C2SK207	不定形	逆台形	2.28	1.87	14.7	N-53°-W	攪乱土		近世	
C2SK217	不定形	不定形	—	—	14~20	N-24°-E	攪乱土		近世	SK217・218・ 219・221は同一 の可能性が高い
C2SK218	不定形	不定形	—	—	14~20	N-24°-E	攪乱土		近世	SK217・218・ 219・221は同一 の可能性が高い
C2SK219	不定形	不定形	—	—	14~20	N-24°-E	攪乱土		近世	SK217・218・ 219・221は同一 の可能性が高い
C2SK221	不定形	不定形	—	—	14~20	N-24°-E	攪乱土		近世	SK217・218・ 219・221は同一 の可能性が高い
C2SK226	楕円形	U字状	1.19	0.89	22	N-13°-E	攪乱土	P2055を切る	近世	
C2SD201	溝状土坑	箱型	4.28	0.64	47	N-63°-W	暗褐色シルト主体。	SK202を切る	弥生V-2~3	
C2SD202	溝状土坑	U字状	6.74	0.50	23	N-59°-W	暗褐色シルト	P2008に切られる	弥生IV	
C2SD203	溝状土坑	皿型	2.33	0.24	6	N-27°-E	黒褐色シルト		弥生V?	
C2SD204	溝状土坑	U字状	(4.19)	1.08	40	N-57°-W	灰黄褐色砂質シルト主 体。埋土1に炭化物入る。	ST201を切る。 SK228を切る?	弥生IV~V	
C2SD205	溝状土坑	U字状	5.23	0.43	42	N-61°-W	暗褐色シルト質粘土	SD206に切られる	弥生	
C2SD206	溝状土坑	皿型	1.64	0.41	9	N-45°-E	にぶい黄褐色シルト	SD205を切る	弥生IV~V	
C2SD207	溝状土坑	U字状	3.40	0.69	50	N-17°-E	黒褐色シルト主体。	P2057に切られる	弥生I-2~3	

C2SK201 (C2-6 図)

時期；弥生I-2 形状；隅丸方形 主軸方向；N-42°-E
規模；1.50m×0.64m 深さ；39cm 断面形態；U字状
埋土；暗褐色シルト主体。焼土・炭化物入る。

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の北端部で検出した土坑で、隅丸方形の平面プランを呈する。比較的残存状態は良いが、出土遺物は少量にとどまった。

出土遺物のうち図示できたのは甕2点、壺1点である。1は前期前葉の甕で、口縁下端部を刻む。胴部は無文でハケ調整を施す。2は壺、3は甕の底部である。

C2SK202 (C2-7 図)

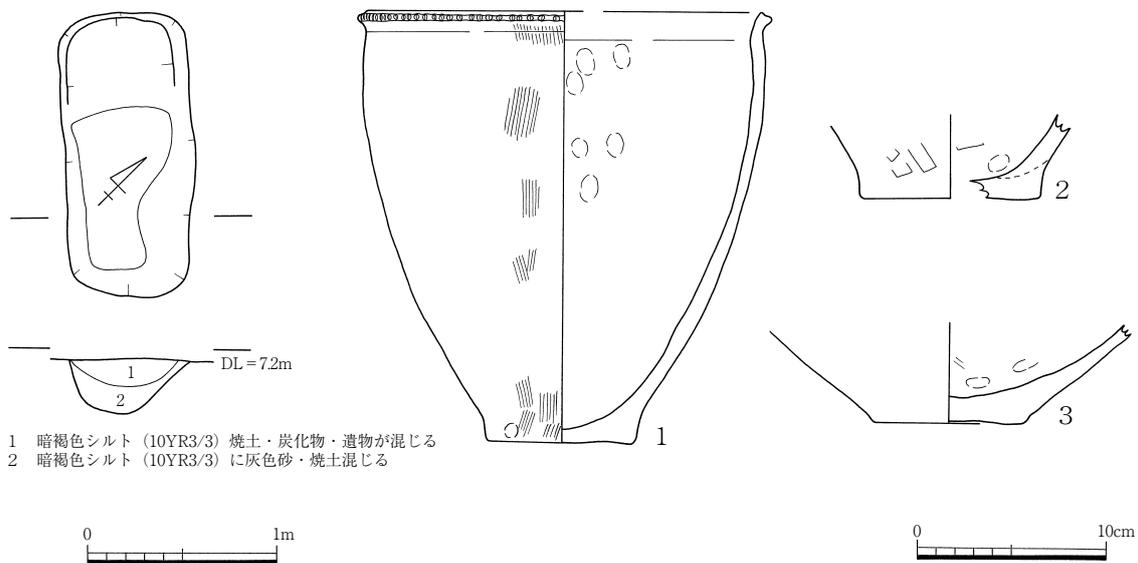
時期；弥生I-3 形状；方形 主軸方向；N-70°-W
規模；2.17m×1.54 m 深さ；21cm 断面形態；逆台形
埋土；褐色シルト主体。埋土中層に灰黄褐色砂質シルト層堆積。

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)

所見；調査区北端部に所在し、SD201 に切られる。比較的残存状態は良いが、遺物は少量にとどまる。埋土中層には灰黄褐色砂質シルト層が認められ、これは洪水による土砂の堆積層の可能性が考えられる。

出土遺物のうち図示できたのは4点である。1、2は壺である。1は口頸部境に2条の篋描沈線をめぐらす。2は口縁部無段で緩やかに外反する。1、2の壺は前期中葉の時期のもとみられる。3は壺底部、4は蓋である。



1 暗褐色シルト (10YR3/3) 焼土・炭化物・遺物が混じる
2 暗褐色シルト (10YR3/3) に灰色砂・焼土混じる

C2-6 図 C2SK201

C2SK204 (C2-8 図)

時期；弥生I-2~3 形状；楕円形 主軸方向；N-7°-E

規模；2.0m×0.69m 深さ；63cm 断面形態；逆台形

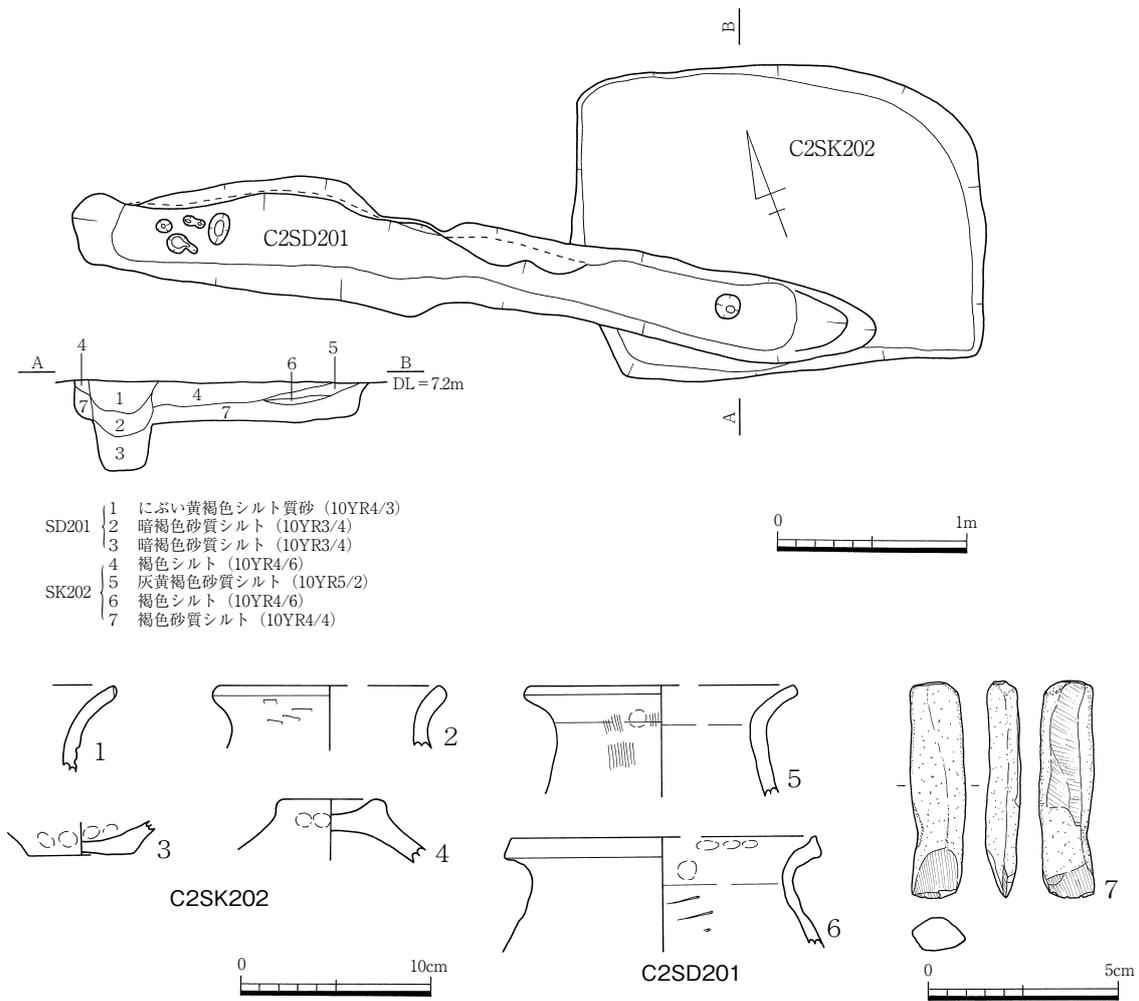
埋土；にぶい黄褐色シルト主体。埋土上層にはにぶい黄褐色砂質シルト層堆積。

付属遺構；— 機能；貯蔵穴

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区中央北寄りで検出した土坑である。基底面にテラスがあることから断面観察では確認できなかったが、複数の遺構の切合の可能性もある。土坑の埋土上層には洪水砂とみられるにぶい黄褐色砂質シルト層が認められる。下層には地山土とみられる黄褐色シルトが15cm大のブロック状に入っており、壁面が剥がれ落ちた可能性が考えられる。遺物は埋土2の上面、北側に集中して出土した。遺物出土量は多くないが、ほぼ完形に復元することができた。

出土遺物のうち図示できたものは2点である。1は前期の甕で口縁下端部を刻み、胴部外面に1条の篋描沈線を巡らせる。2は甌として使用されている。1は胴部外面に煤が、2は内面に食物残渣あるいは煤とみられるものが付着している。



C2-7 図 C2SK202・SD201

C2SK206 (C2-9 図)

時期；弥生I-2~3 形状；隅丸方形 主軸方向；N-71°-W

規模；1.98m×1.07m 深さ；45cm 断面形態；逆台形

埋土；にぶい黄褐色シルト主体。上・下層に砂質シルト層堆積。

付属遺構；— 機能；貯蔵穴

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、磨製石鏃1、叩石1点

所見；調査区中央部で検出した土坑で、切り合いはない。平面プランはやや崩れているが隅丸方形を呈し、比較的残存状態も良い。土層観察により土坑の下層から基底面にはにぶい黄褐色砂質シルト層が、その上面には炭化物の堆積が認められた。上層には灰黄褐色砂が堆積している。これらの砂を含む層は洪水砂の可能性が考えられる。また基底面東側では完形の甕(5)が横に倒れて潰れた状態で出土しており、洪水により貯蔵穴内の遺物がそのまま埋没したとみられる。遺物の出土量は比較的多めである。

出土遺物のうち復元図示できたものは9点である。1、2、8は壺、3~7は甕である。1、2は頸胴部に列点文、または刻みを施文、8は口縁部篋描沈線をめぐらし、有段風に仕上げる。甕も同様に上胴部に列点文をめぐらせるもの、1条の篋描沈線をめぐらすものがみられる。9は磨製石鏃である。柳葉形で先端から茎端まで鏑が通る。断面はやや扁平であるが菱形を呈する。

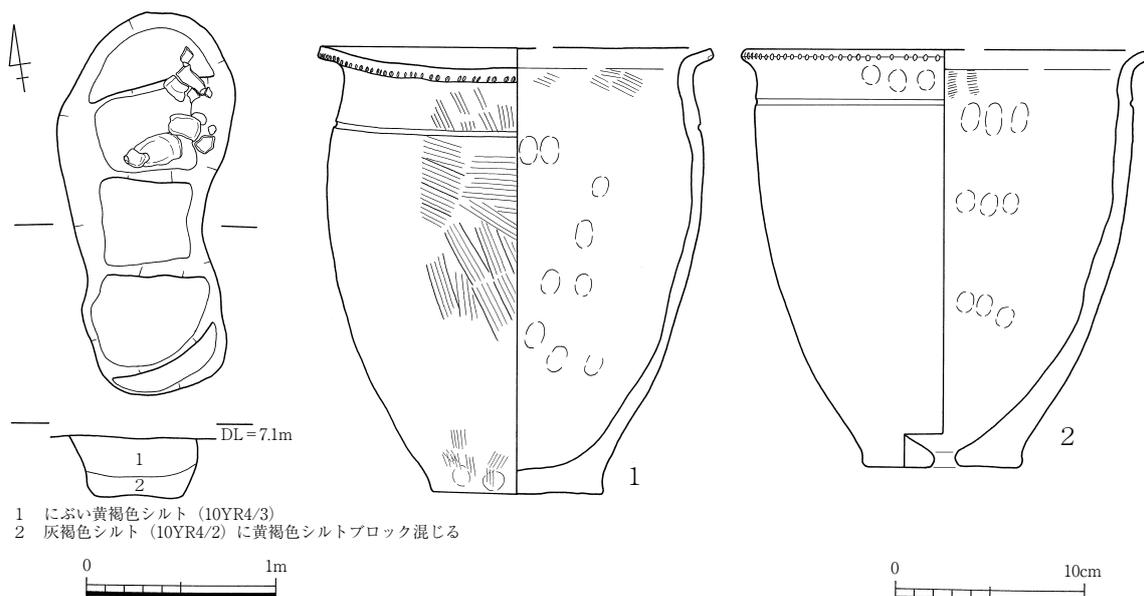
C2SK208 (C2-10 図)

時期；弥生I-3 形状；楕円形 主軸方向；N-5°-E

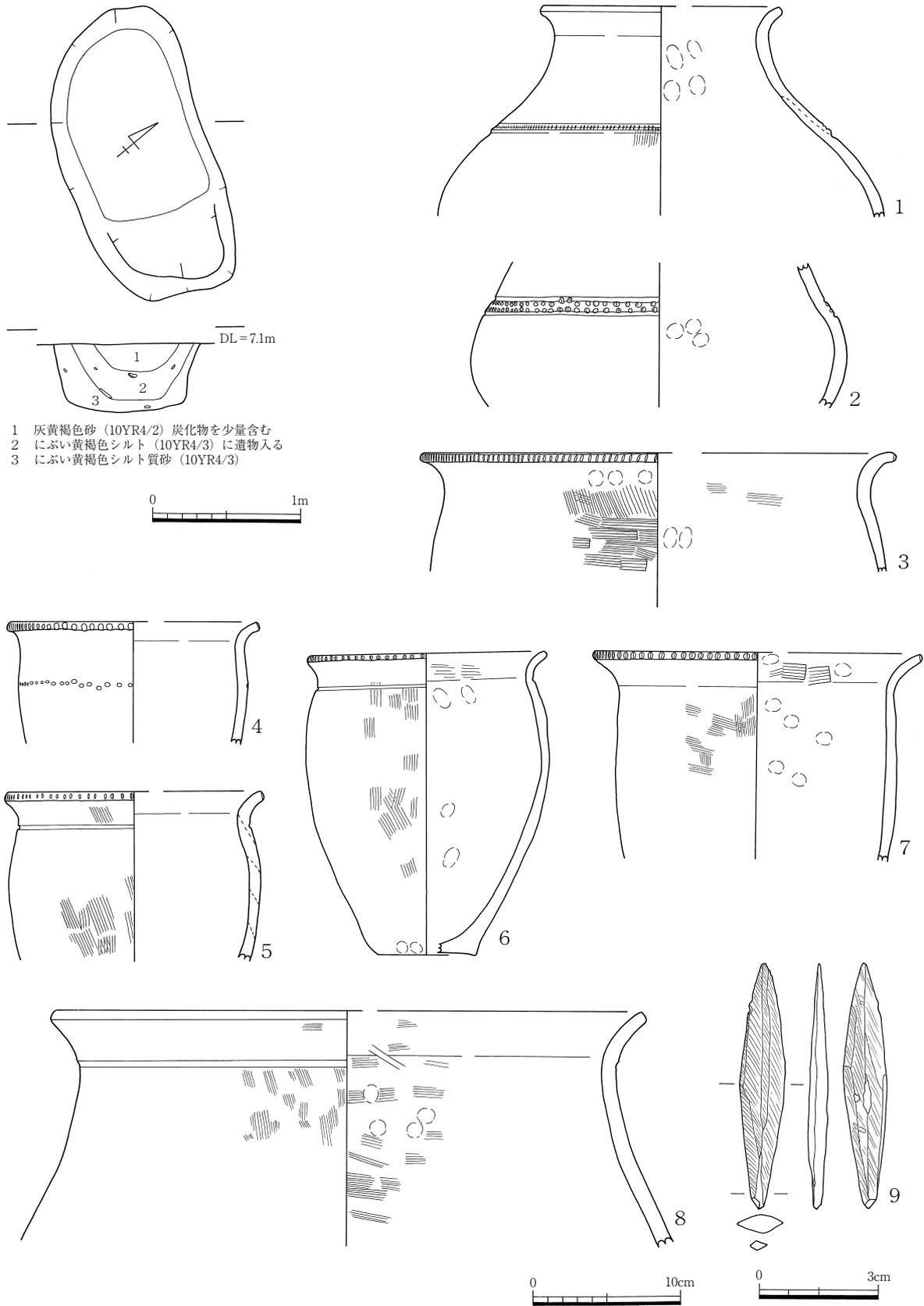
規模；2.03m×1.52m 深さ；44cm 断面形態；U字状

埋土；褐色シルト主体。炭化物、焼土含む。

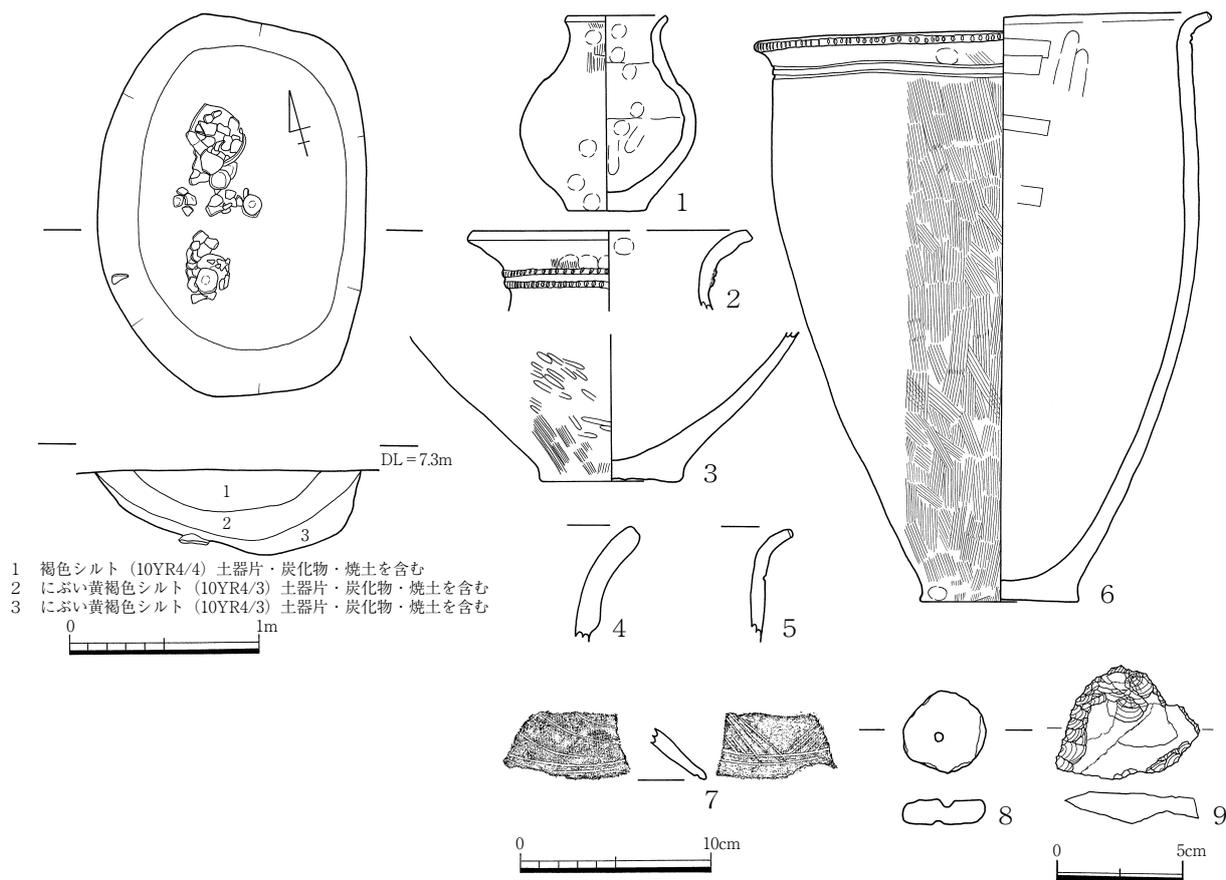
付属遺構；— 機能；—



C2-8 図 C2SK204



C2-9 ☒ C2SK206



C2-10 図 C2SK208

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)、スクレイパー？1点

所見；調査区北端部で検出した土坑で平面プランは楕円形を呈する。比較的残存状態は良く、埋土には炭化物、焼土が含まれる。遺物の多くは埋土2~3で出土した。

出土遺物のうち、復元図示できたのは8点である。1~4は壺である。1のように口縁部に段を有するものもあるが、口頸部境に突帯を貼付し刻みをめぐらす2のようなタイプもみられる。5、6は甕である。5は口縁端部全面を刻み、上胴部に1条の篋描沈線をめぐらす。6は口縁部下端を刻み、2条の沈線をめぐらす。7は壺の蓋である。内外面に篋描による文様を施す。8は有孔円盤の未製品とみられる。穿孔の途中で廃棄されている。9はチャート製のスクレイパーである。

C2SK209(C2-11 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-27°-E

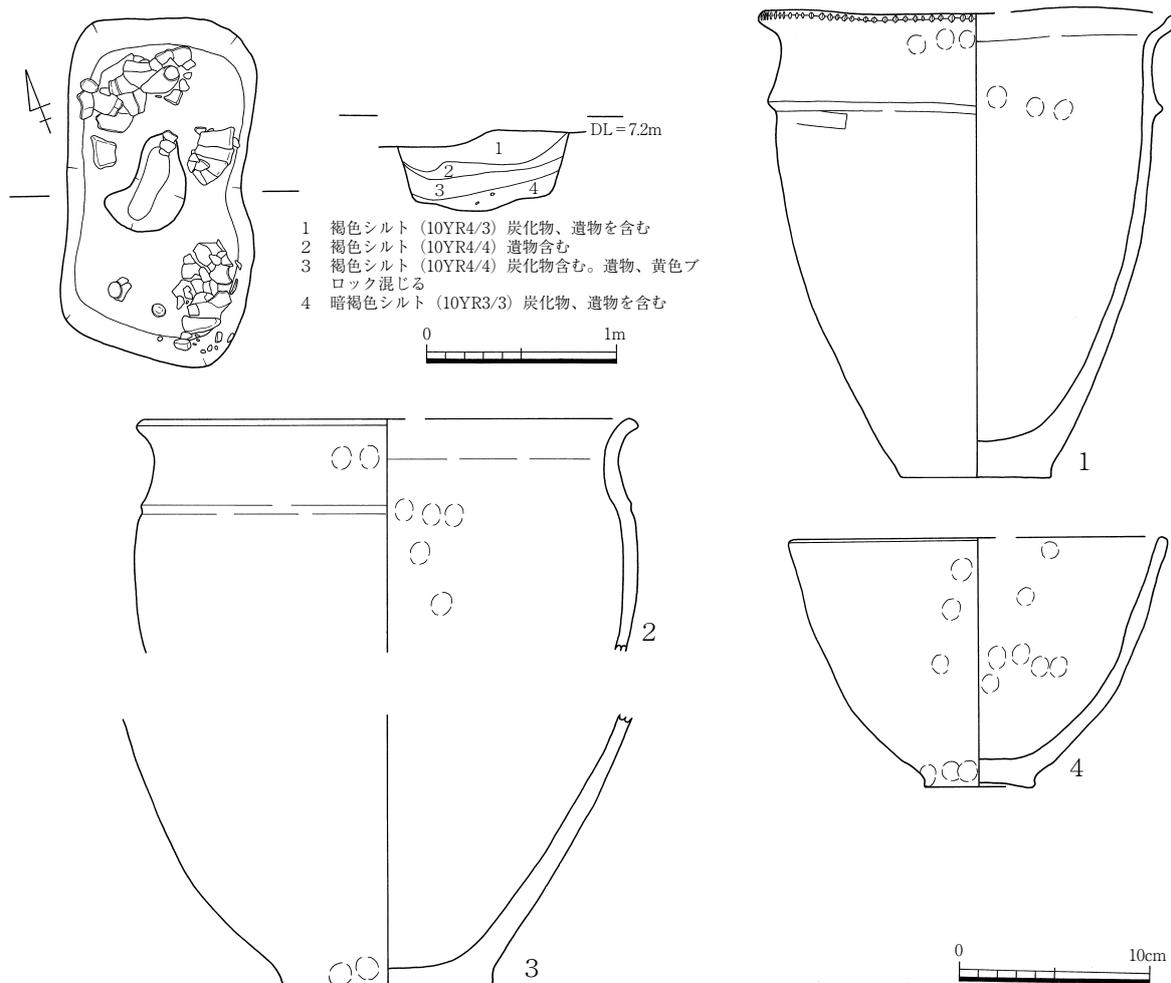
規模；1.74m×0.94m **深さ**；38cm **断面形態**；逆台形

埋土；褐色シルト主体。埋土1、3、4に炭化物入る。

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、叩石1点

所見；調査区中央部で検出した土坑で、平面隅丸方形を呈する。比較的残存状態は良く、基底面より若干上の埋土3~4で多くの遺物が出土した。遺物は細片もみられるが、遺物出土状況図にみら



C2-11 図 C2SK209

れるように一個体がその場で潰れた状態で検出されたものもある。またSK209からは砂岩の円礫を打ち欠きによって鋭利にし、縁辺部を叩石に使用したものが1点みられる。叩石の縁辺部には刻み状の敲打痕が認められる。

出土遺物のうち、復元図示できたのは4点である。1、2は有段甕である。1は口縁端部全面を刻み、段部付近は強いナデ調整を施す。2は口縁端部無刻みで、胴部境に緩い段を有する。1、2は前期の中でも、比較的古い様相を持つ甕とみられる。3は壺の底部だが、内外面に煤が認められ、特に内面は膜状に煤が付着している。4は鉢である。

C2SK212(C2-12 図)

時期：弥生I-2~3 形状：不整形 主軸方向：N-14°-E

規模：2.14m×1.45m 深さ：39cm 断面形態：逆台形

埋土：灰黄褐色砂質シルト主体。下層に黒褐色砂質シルト。

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器素材1点

所見：調査区中央部で検出した土坑である。平面プランは不整形で、残存状態は比較的良い。土層観察により埋土上層に灰黄褐色砂質シルト層が、下層に黒褐色砂質シルト層の堆積が認められた。土坑廃棄後しばらく時間が経ってから、洪水砂が堆積したものとみられる。遺物の多くは埋土2から出土した。また埋土中からは土器の他、石鎌あるいは石剣の素材とみられる、表面に敲打痕の残る頁岩も出土している。

出土遺物のうち、復元図示できたのは6点である。1~3は壺である。1は小形壺で、外面には篋描きによる文様を施す。1にみられる文様は、共伴する甕にも認められる。5の甕は1と同様に上胴部に垂下する沈線を4条1単位で施文する。4は前期中葉の甕で口縁下端部を刻み、上胴部に1条の篋描沈線をめぐらす。7は甕の蓋である。裾部内面にはリング状に煤が付着する。6は鉢である。比較的小形の鉢で内面及び断面に水銀朱が付着している。断面にも水銀朱が認められることから長期間貯蔵に用いられた可能性も考えられる。

C2SK213(C2-13 図)

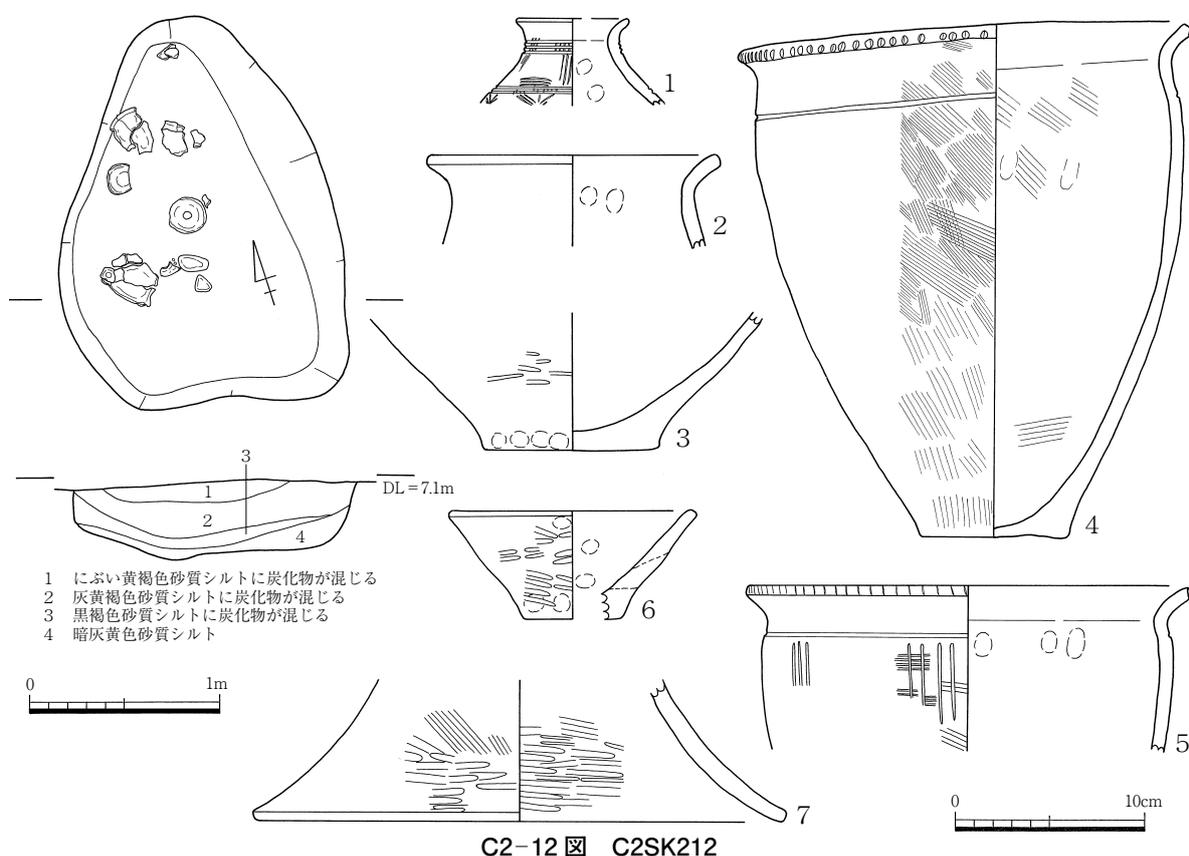
時期：弥生I-2~3 **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-28°-E

規模：2.03m×0.77m **深さ：**31cm **断面形態：**逆台形

埋土：灰黄褐色砂質シルト主体。

付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石斧1、叩石2点



所見：調査区中央部で検出した土坑で、比較的残存状態は良い。土坑の南は緩いテラス状に落ち込む。埋土上~中層に洪水砂とみられる砂質シルトの堆積がみられる。遺物は埋土2~3層出土が多く、完形復元できるような大きなものはみられない。

出土遺物のうち復元図示できたのは7点である。1~3は甕である。甕は1のように胴部に3条の篋描沈線をめぐらせるもの、3のように有段のものがある。いずれも口縁端部は全面刻みである。6は有段の鉢である。口縁端部は無刻みで、外面にミガキがみられる。7は緑色片岩製の小型方柱状片刃石斧である。基部は欠損し、刃部のみ残る。非常に丁寧な成形である。また図示できなかったが、砂岩製の叩石も2点出土している。叩石はいずれも砂岩の円礫縁を打ち欠きによって鋭利にし、鋭利な側縁部を使用したものである。側縁部には刻み状の敲打痕がみられる。

C2SK216(C2-14 図)

時期：弥生I-2~3 **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-68°-W

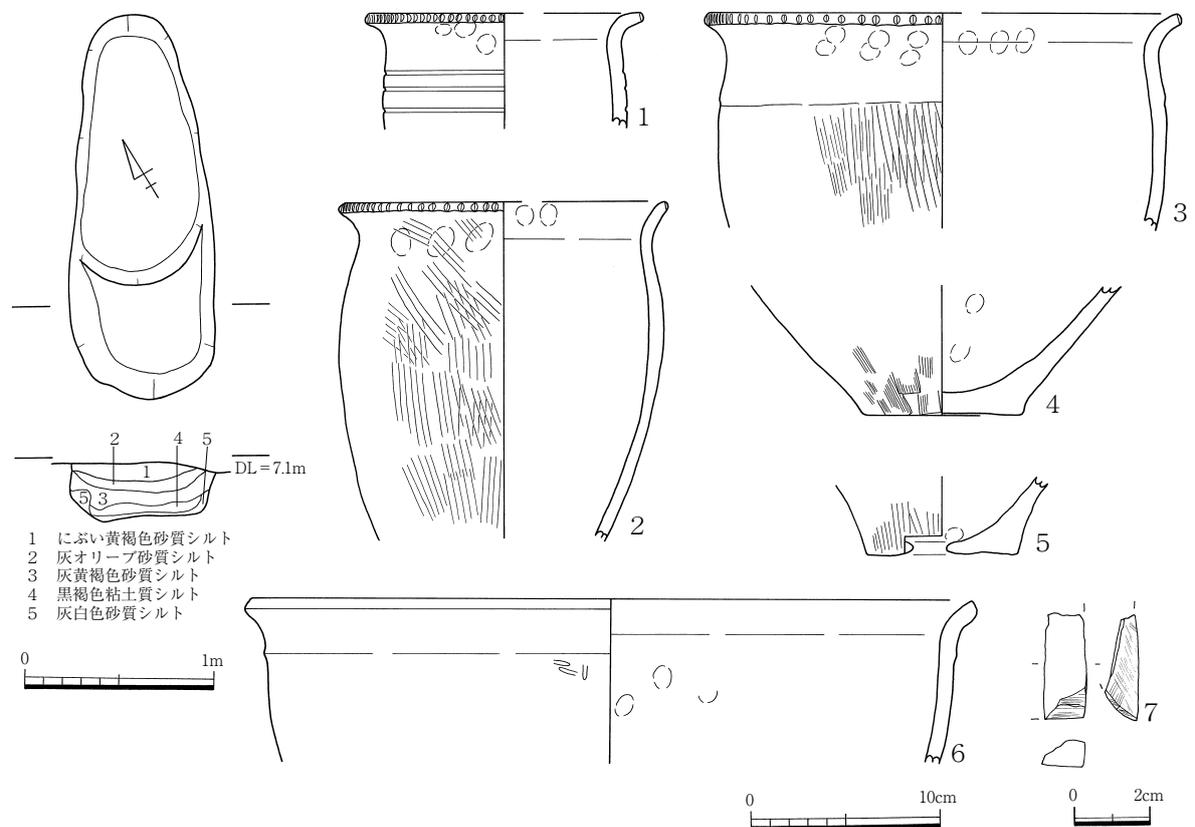
規模：1.88m×0.85m **深さ：**30cm **断面形態：**逆台形

埋土：褐色シルト主体。

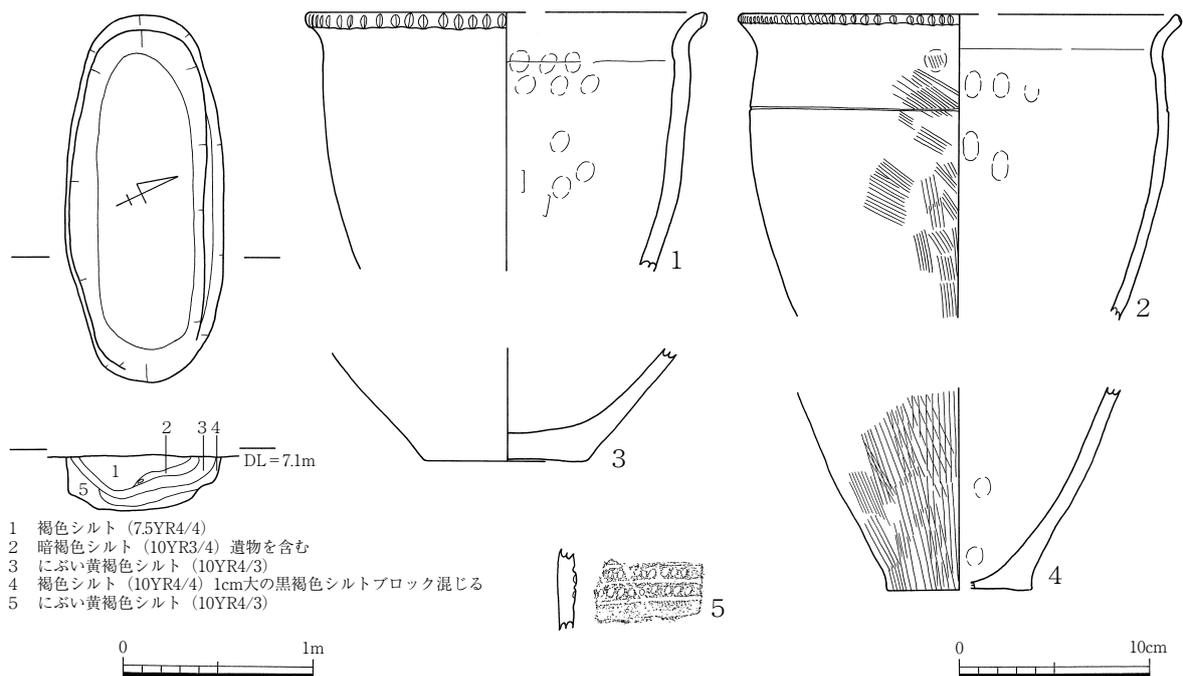
付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区中央部で検出した土坑で比較的残存状態が良く切り合いはみられない。遺物の多くは埋土2から出土した。



C2-13 図 C2SK213



C2-14 図 C2SK216

出土遺物のうち、復元図示できたのは6点である。1、2は甕の口縁部、5は胴部、4は底部である。5は胴部の文様構成がI-3様式段階で多くみられるものである。またC2SK216出土の甕は胴部の張りが弱く、上胴部に沈線を施すものは1点のみである。3は壺の底部である。

C2SK220 (C2-15 図)

時期：弥生I-2 形状：隅丸方形 主軸方向：N-69°-W

規模：1.63m×1.32m 深さ：33cm 断面形態：逆台形

埋土：灰黄褐色砂質シルト主体。上層は褐色シルトに黒褐色シルトブロック混じる。

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区南部で検出した土坑で、比較的残存状態が良い。埋土中層には灰黄褐色砂質シルト層が認められ、遺物はこの層から多く出土している。ただし土器は胴部片が多く、復元図示できたのは4点にとどまる。

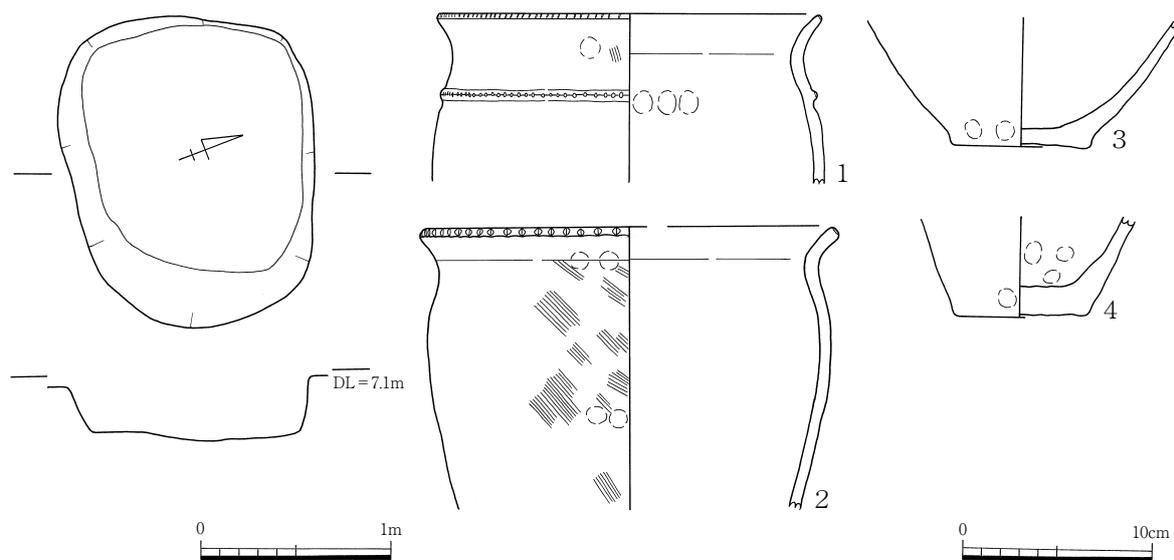
1、2、4は甕とみられる。1は上胴部に段を持ち、段部を刻む。2は上胴部がやや膨らむ器形である。甕の形態からI-2様式とみられる。3は壺の底部である。

C2SK228 (C2-19 図)

時期：弥生Ⅲ後半~Ⅳ 形状：楕円形 主軸方向：N-59°-W

規模：(1.74)m×1.0m 深さ：46cm 断面形態：逆台形

埋土：暗オリーブ褐色シルト



C2-15 図 C2SK220

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；前期のC2ST201を切る。C2SD204との切り合い関係は土層観察では確認できなかったが、遺物出土状態からSD204に切られるとみられる。遺構の残存状態は比較的良好であるが、遺物出土量は少量にとどまる。出土遺物で復元図示できるものはなかった。

C2SK229 (C2-16 図)

時期；弥生V 形状；楕円形 主軸方向；N-62°-W

規模；1.40m×0.66m 深さ；27cm 断面形態；逆台形

埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕)、打製石鏃1、叩石1点

所見；調査区中央の西端部で検出した土坑である。切り合いはなく、遺物は埋土上層を中心に出土した。埋土の色調から洪水砂の可能性もあるが、不明である。

出土遺物のうち復元図示できたのは3点である。1、2は甕である。いずれも口縁部が「く」の字に外反する器形であり、2は上胴部に列点文を配する。3はサヌカイト製の打製石鏃である。大型の有茎式鏃で、茎は非常に丁寧に剥離調整している。先端部は欠損している。

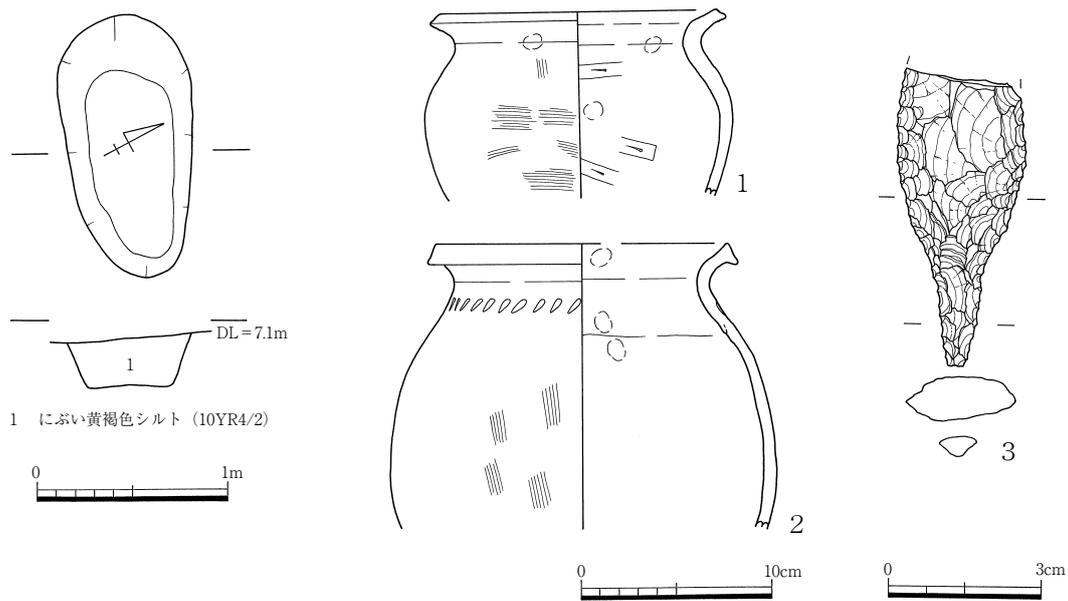
C2SD201 (C2-7 図)

時期；弥生V 方向；N-63°-W

規模；4.28m×0.64m 深さ；47cm 断面形態；箱形。一部フラスコ状。

埋土；暗褐色砂質シルト

付属遺構；ピット6 機能；—



C2-16 図 C2SK229

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、石斧 1 点

所見；調査区北端部に位置し、C2SK202 を切る。SD表記であるが、溝状土坑である。基底面から 6 個のピットを検出した。これらのピットは遺構の両端付近にあり、柱穴として利用された可能性も考えられる。断面は箱形に近いが遺構の北側は下場が抉れてフラスコ状を呈している。

出土遺物は少なく、図示できたのは 2 点である。5 は前期の壺、6 は甕で V 様式前半と考えられる。7 は砂岩製の小型石斧である。細長の砂岩円礫の先端部を研磨し、刃部を作り出したものである。基部付近にも調整がみられる。

C2SD202(C2-17 図)

時期；弥生中期 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-59°-W

規模；6.74m×0.50m **深さ**；23cm **断面形態**；U字または逆台形

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(甕)

所見；調査区中央部で検出した溝状土坑で、東西方向に延びる。検出長は 6.74m と比較的長い。後世の削平のためか残存状態は悪い。遺物の出土は少量にとどまる。口縁部片が僅少なため不明瞭ではあるが、弥生時代中期とみられる。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C2SD203(C2-18 図)

時期；弥生 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-27°-E

規模；2.33m×0.24m **深さ**；6cm **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト。炭化物混じる。

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部で検出した溝状土坑で、南北方向に延びる。遺存状態は極めて悪く、断面形も本来はU字状であったとみられる。遺物の出土量は非常に少ない。口縁部が出土していないため明確な時期は不明だが、土器の胎土からV様式の可能性が考えられる。出土遺物のうち復元図示できるものはなかった。

C2SD204(C2-19・20 図)

時期：弥生IV~V 形状：溝状 主軸方向：N-57°-W

規模：(4.19)m×1.08m 深さ：40cm 断面形態：U字状(段状)

埋土：灰黄褐色砂質シルト主体。埋土1に炭化物混じる。

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見：調査区南端部で検出した溝状土坑でC2ST201を切り、東西方向に延びる。C2SK228との切り合いは遺物の出土状態からみて、C2SK228を切っているとみられる。比較的残りが良く、土層の観察からSD204は南から埋まっていったことが看取できる。遺物は遺構の東半部、埋土中層から多く出土した。遺物の出土量は本調査区内では比較的多い。またC2SD204は基底面がテラス状に落ち込んでおり、複数遺構が切り合っていた可能性もあるため、時期はやや不明瞭である。

出土遺物のうち復元図示できたのは14点である。1~4は壺、5~7は甕、11は鉢、12~14は高杯である。壺(4)・甕(5)には凹線文が、高杯には貼付口縁を持つものがみられる。また11の鉢は2孔一対の穿孔がある。

C2SD205(C2-21 図)

時期：弥生 形状：溝状 主軸方向：N-61°-W

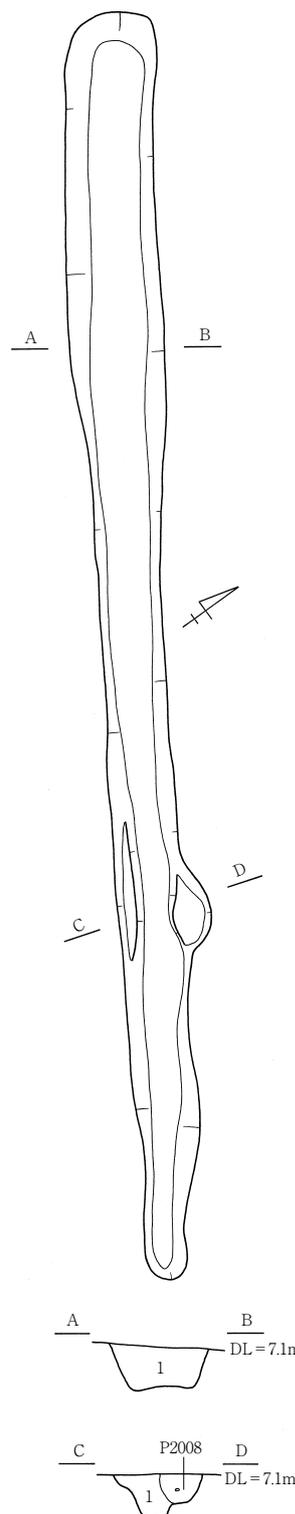
規模：5.23m×0.43m 深さ：42cm 断面形態：U字状

埋土：暗褐色シルト主体。

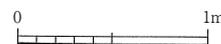
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺)

所見：調査区南西部で検出した溝状土坑で、C2SD206に切られる。比較的遺構の残りが良く、土層の堆積から遺構が南側から埋まっていったことが看取できる。出土遺物は僅少で、明確



1 暗褐色シルト質粘土 (10YR4/3) にわずかに砂混じる



C2-17 図 C2SD202

な時期特定は難しい。貼付口縁壺が1点出土しており、混入でないとするとIV~V様式とみられる。出土遺物で復元図示できるものはなかった。

C2SD206(C2-21 図)

時期；弥生IV~V **形状**；溝状 **主軸方向**；N-45°-E

規模；1.64m×0.41m **深さ**；9cm **断面形態**；皿状

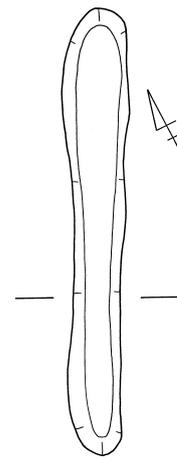
埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甑)

所見；調査区南西部で検出した溝状土坑で、C2SD205 を切る。後世の削平のためか非常に遺構の残りが悪く、本来はU字状の断面形であったとみられる。遺物は比較的多く出土しており、ほとんどが弥生時代前期の土器である。しかし若干ではあるが長頸壺片なども出土していることから、時期的にはIV~V様式とみられる。

出土遺物のうち、復元図示できたのは2点である。1は壺である。口頸部・頸胴部の境を1条の匏描沈線で区画し、頸部に垂下する沈線文を施文する。2は甑である。



1 黒褐色シルト (10YR3/2) 炭化物をわずかに含む



C2-18 図 C2SD203

C2SD207(C2-22 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-17°-E

規模；3.40m×0.69m **深さ**；50cm **断面形態**；U字状

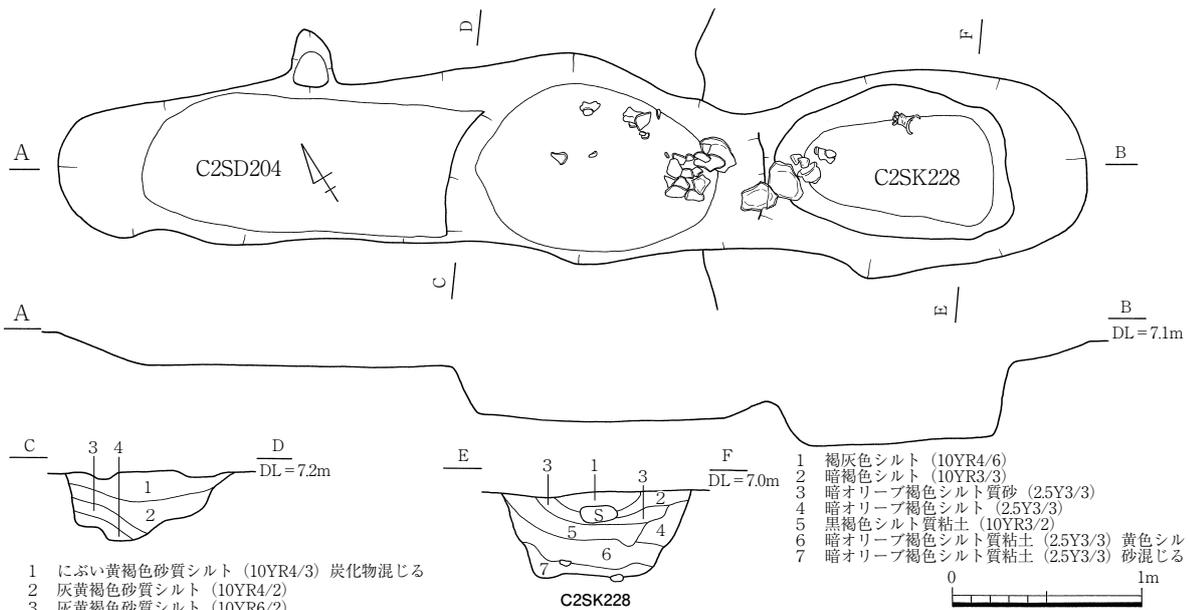
埋土；黒褐色シルト主体。

付属遺構；— **機能**；—

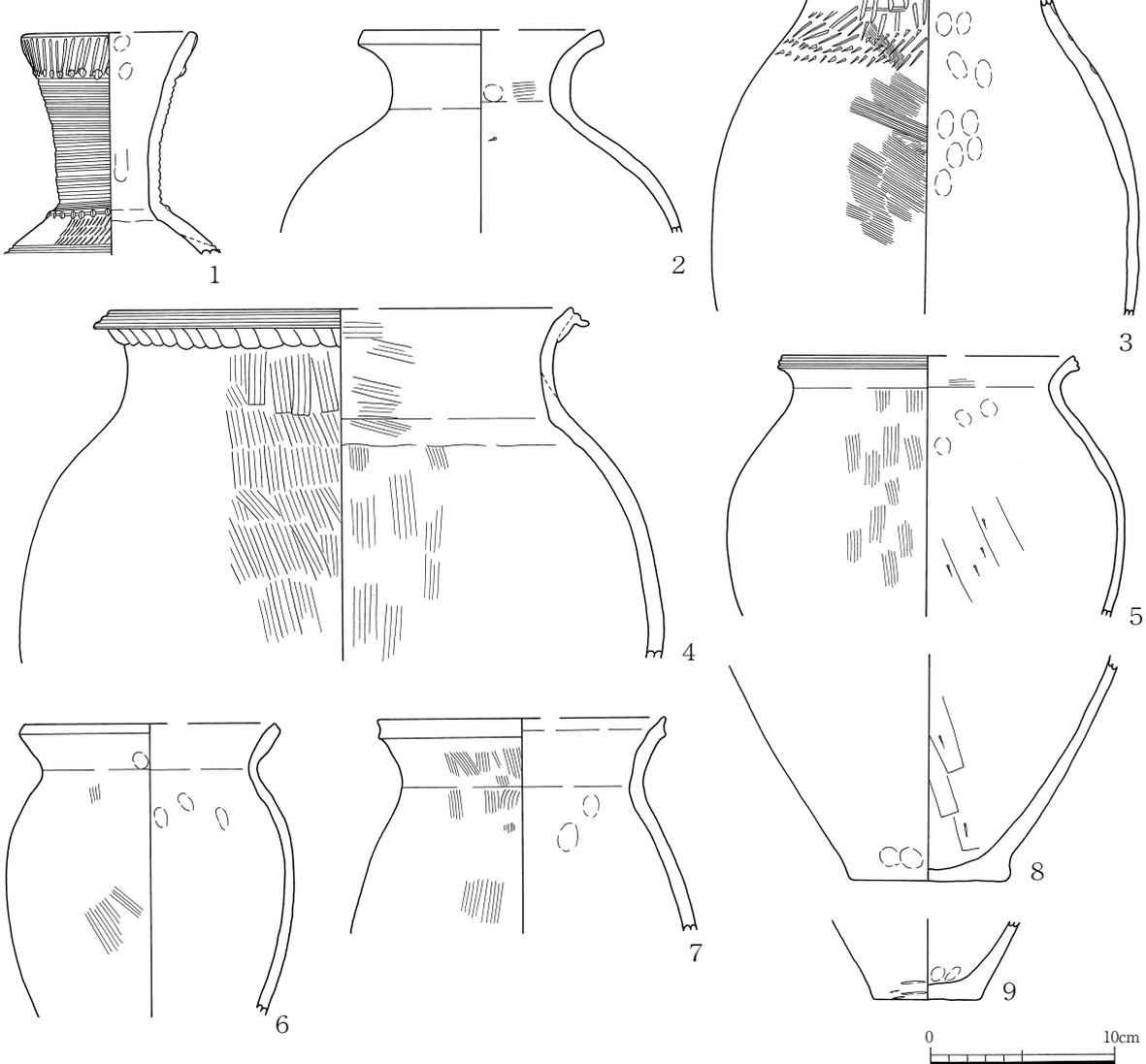
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区南端部で検出された溝状土坑で、C2ST201 の約2m東に位置し、C2P2057 に切られる。C2ST201 とは時期的にも同じことから、竪穴住居に付随するものであった可能性もある。土坑の残りは非常に良く、土層の堆積から西側から土砂が落ち込んでいるのが看取できる。遺物の量は少なめである。

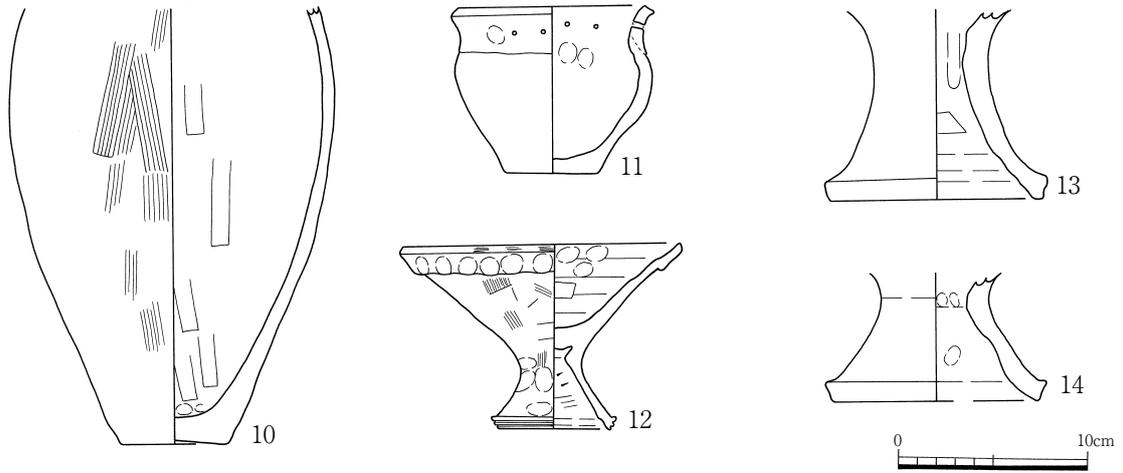
出土遺物のうち復元図示できたのは4点である。1~3は甕である。1、2とも口縁下端部を刻み、胴部の張りはほとんどない。4は鉢で、外面はミガキを施す。



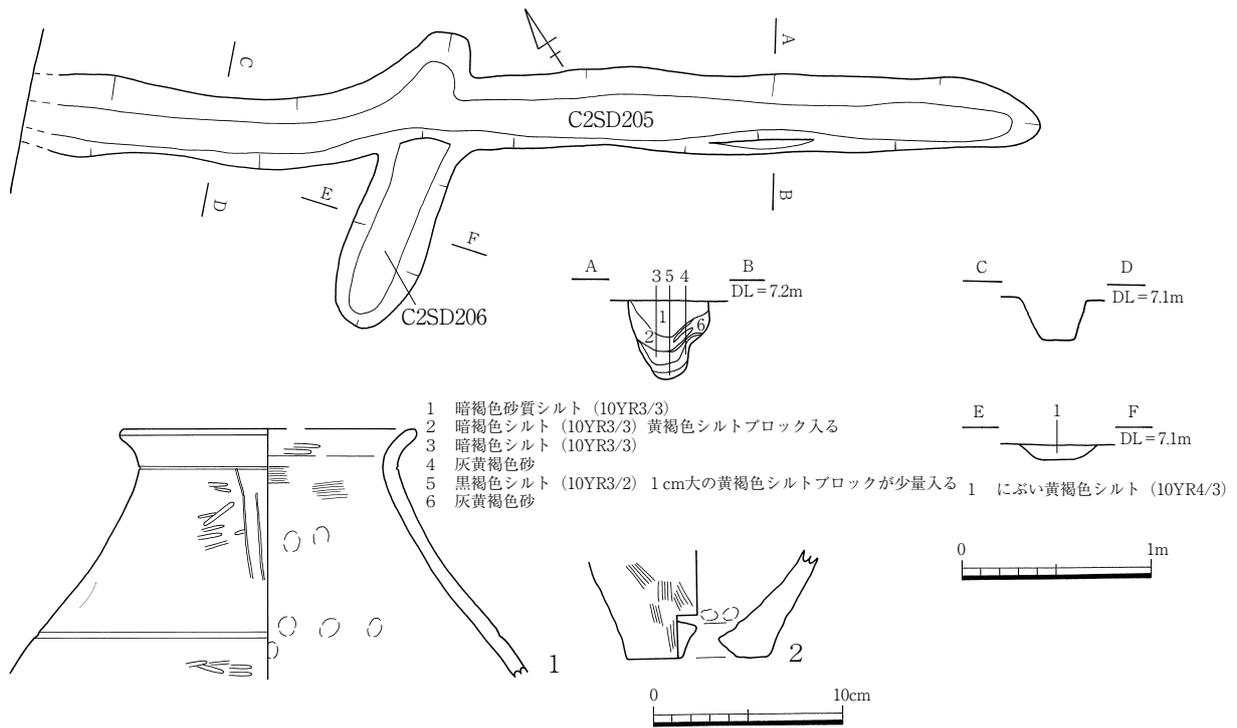
- 1 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR4/3) 炭化物混じる
 2 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2)
 3 灰黄褐色砂質シルト (10YR6/2)
 4 黒褐色シルト質粘土 (10YR3/2)
C2SD204



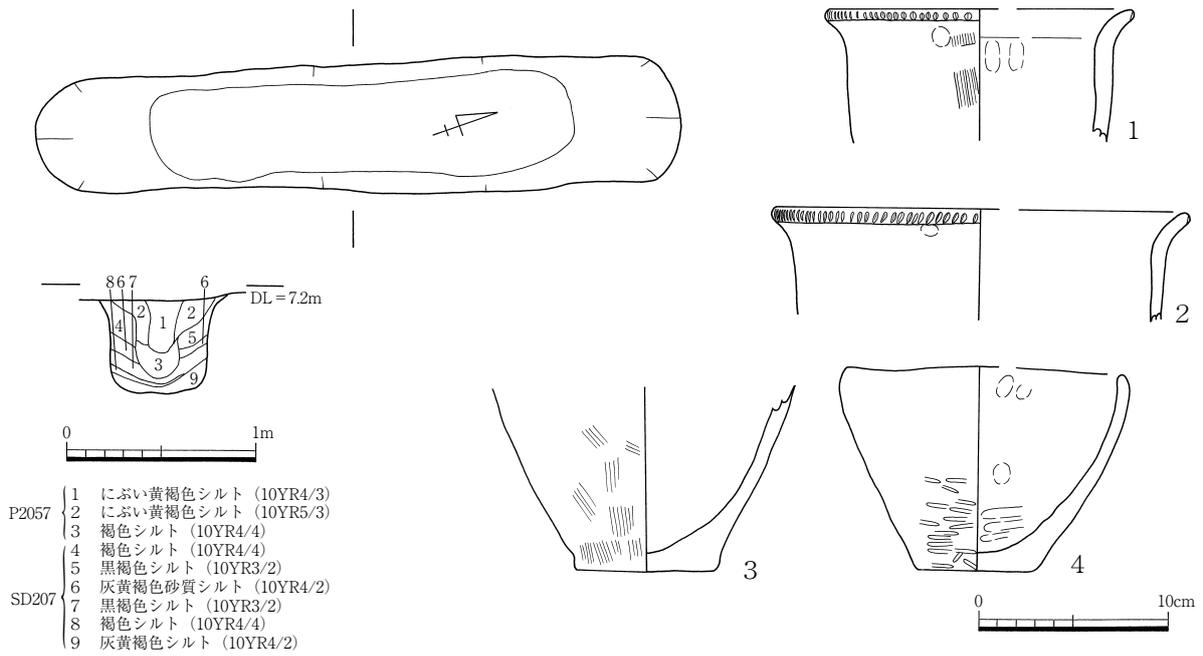
C2-19 ☒ C2SD204・SK228



C2-20 図 C2SD204



C2-21 図 C2SD205・206



C2-22 図 C2SD207

C2 北区の調査



1. C2 北区の概要

概要

C2 北区は、平成 9 年度に調査が行われた C2 区の北側にあたる。調査面積は約 150m²と小さな調査区で、検出した遺構も少ない。検出した遺構は土坑 3 基、ピット約 6 個、溝状遺構 2 条であった。

SK2 はしっかりした小判形の平面形を持つもので、埋土は黒褐色土で、遺物も比較的多く入っていた。時期は弥生時代前期と考えられる。その他の土坑は残存が不良であったが、弥生土器が出土しており弥生時代の遺構と考えられる。

ピットは埋土から弥生時代の可能性が高いが、掘立柱建物跡を構成するものとは考えられない。溝状遺構は表土である灰色粘土が埋土となっており、近現代のものと考えられる。また、西側に隣接する C3 区から大きな流路跡が確認されており、その東側落ち口を検出することが期待されたが検出することができなかった。

調査担当者 坂本憲昭

執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成 12 年 3 月 2 日～平成 12 年 3 月 4 日

調査面積 150m²

時代 弥生時代前期、近現代

検出遺構 弥生前期土坑 3 基、ピット約 6 個、近現代溝状遺構 2 条

C2 北-1 表 C2 北区土坑一覧表

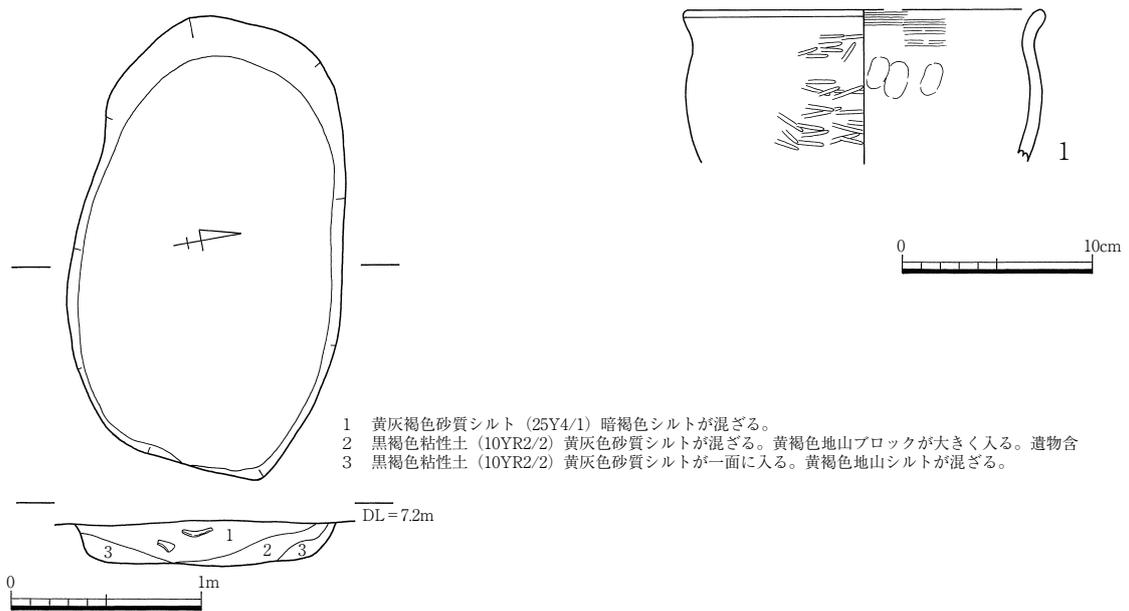
遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C2 北SK1	円形	レンズ状	0.7	—	14	—	暗灰色土		弥生	
C2 北SK2	楕円形	箱形	2.35	1.4	25	N-68°-W	暗灰褐色土		弥生前期	
C2 北SK3	楕円形	皿状	1.65	1.0	4	N-83°-W	暗褐色土		弥生	

C2 北-2 表 C2 北区ピット一覧表

遺構番号	柱穴形	直径(cm)	深さ(cm)	埋土	柱根/有・無	出土遺物(点数)	遺物内容 出土状況	時期	特記事項
C2 北P1001	円形	20	21	暗灰色砂質土	無				
C2 北P1002	円形	20	1	暗灰色砂質土	無				
C2 北P1004	円形	15	7	暗灰色砂質土	無				
C2 北P1005	楕円形	25×20	36	暗灰色砂質土	無				
C2 北P1006	円形	20	27	暗灰色砂質土	無				



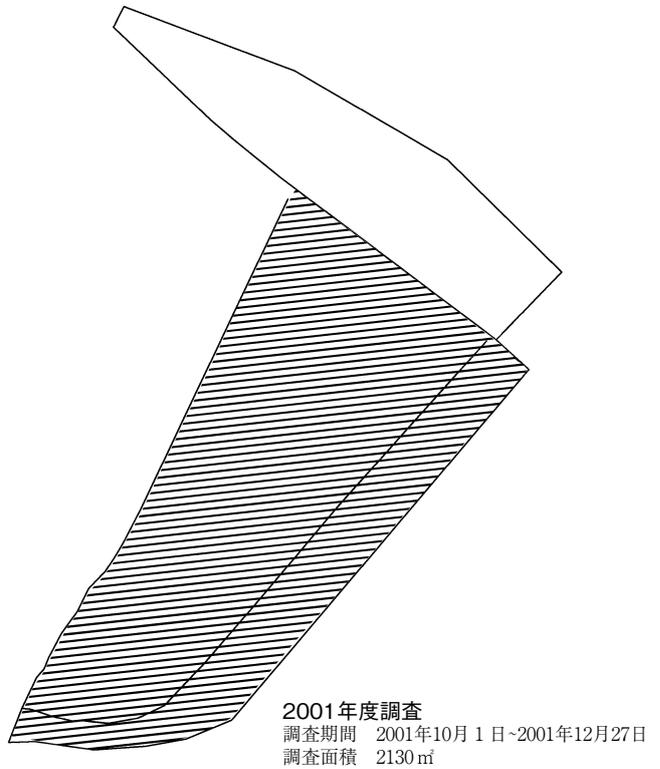
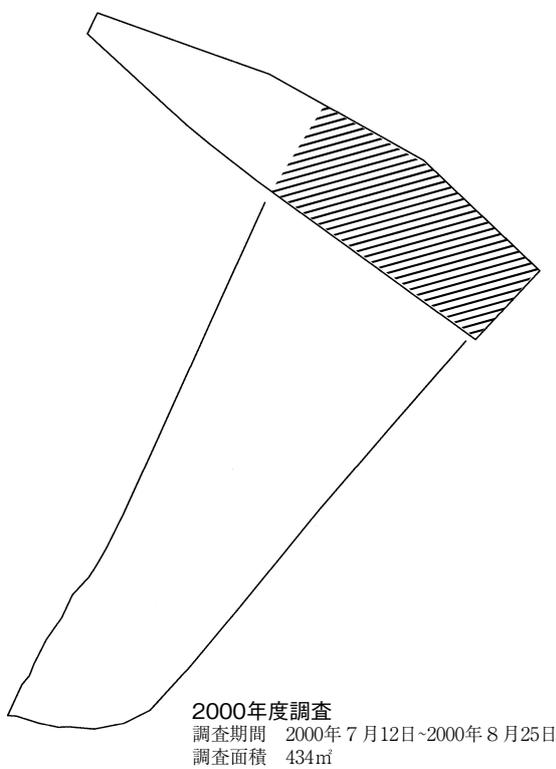
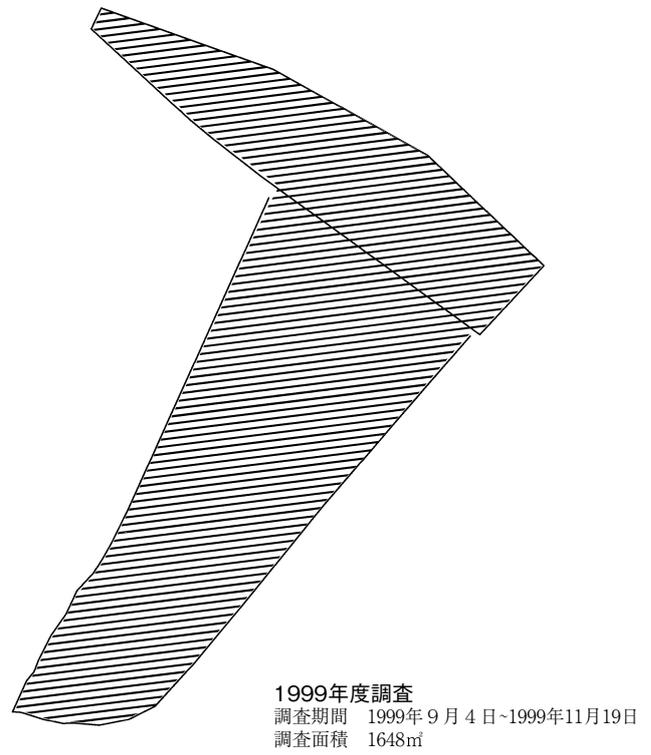
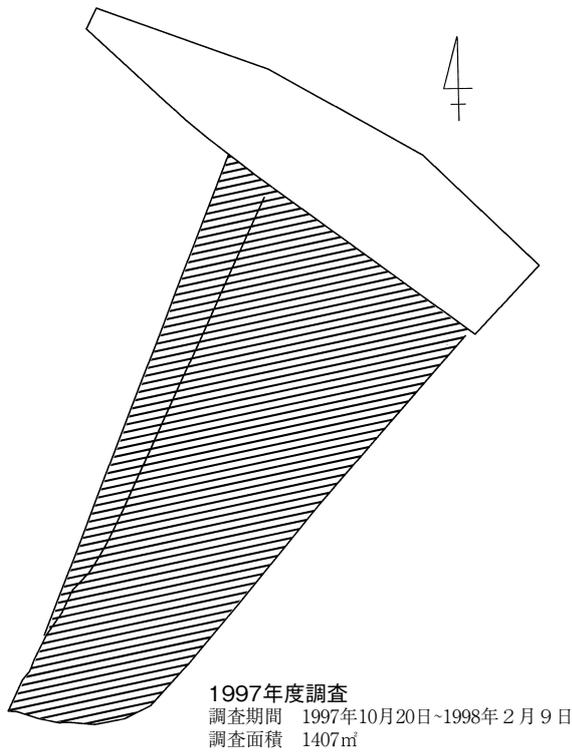
C2 北-1 図 C2 北区遺構全体配置図 (S= 1/250)



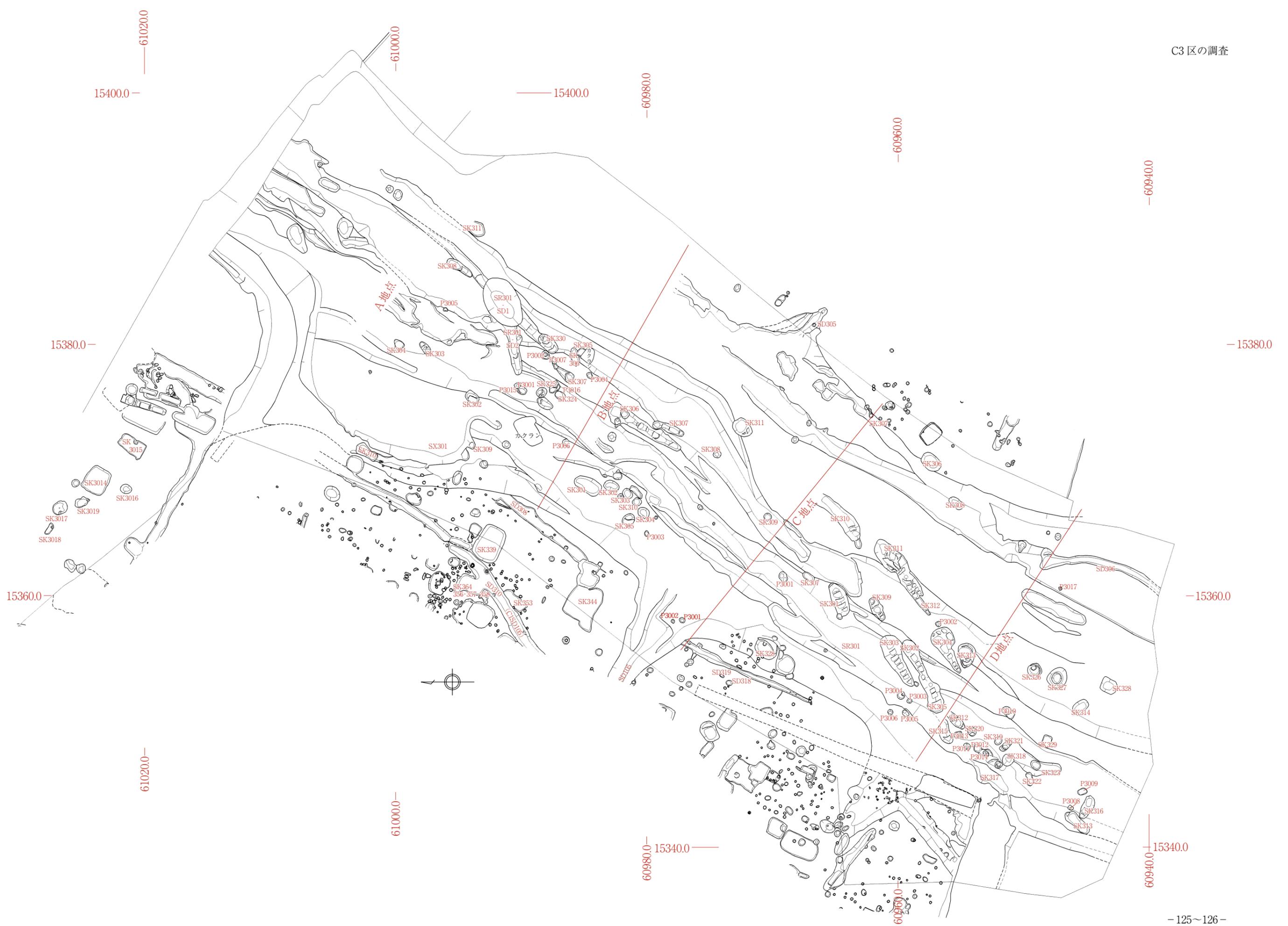
C2 北-2 図 C2 北SK2

C3区の調査





C3-1 図 C3 区年度別調査位置図



C3-2図 C3区弥生時代前期遺構全体配置図(S= 1/250)

1. C3 区の概要

概要

全体調査区の中では東側部分に位置し、C1 区の東隣に位置する。調査は遺構の検出面が複数存在したことや、検出した流路跡の規模が大きかったこと、さらに水路付け替え等の事情が重なったことにより 1997、1999~2001 年度の 4 次に分け行った。

97 年度は空港本体工事部分の調査を行った。調査では表土直下から遺構を検出したが、遺構検出面に弥生時代の遺物が多量に含まれており、弥生時代の流路跡の上に遺構が存在することを確認した。このため、最上面で確認した遺構を調査した後、この遺構検出面となっている流路跡埋土の掘削を調査区全域にわたって行った。

検出した遺構は中世~近現代のピット、土坑、弥生時代後期の住居跡、ピット、土坑、弥生時代前期の土坑、環濠の一部であった。流路跡の西側落ち口から検出した弥生時代前期の遺構を除いて、いずれも流路跡埋土から検出した。

流路跡は深さ約 1.5~2.0m、幅約 20m で延長は南北方向で調査区全域にわたる。

埋土中には弥生時代の遺物が多量に含まれており、調査区北側では遺物集中出土地点も検出され弥生時代に埋没した可能性が高いことが確認された。97 年度の調査では、上面遺構と流路跡の埋土上層の掘削が行われたのみで、流路跡部分の完掘には至らなかった。

99 年度は 97 年度調査区北側にあたる空港本体部分北側場周道路部分を中心に調査を行ない、若干空港本体部分の調査も行った。

調査結果は場周道路部分では、黄褐色地山面で内濠から続く溝跡の延長部分と流路跡西側落ち口を確認し、流路跡埋土上からは弥生時代の住居跡、土坑を確認することができた。調査区東側部分では須恵器、中世の遺物の出土が見られ、古代以降の流路跡の存在を推定したがプランは確認できなかった。しかし、調査区東端部で中世の溝跡に関係すると考えられる人頭大以上の砂岩質の丸石の集石遺構を確認することができた。この他では近世墓を確認した。

本体工事部分では、表面の再検出作業を行い、中央部で近世墓、南端部で弥生時代の住居跡を検出した。

99 年度調査では場周道路部分、空港本体部分とも流路跡の埋土掘削までには至らなかった。

2000 年度は場周部分の流路跡埋土掘削を行い流路跡を完掘した。99 年度調査で遺物のみが出土し遺構が検出できなかった中世の遺構も溝跡の床面を検出することができた。弥生時代の流路跡からは前期、前期末~中期の土器だけでなく、後期中葉の土器も出土した。この結果、97 年度調査当初より流路跡の埋没は、弥生時代中期前半までに終了したと考えていたが、最終埋没は弥生時代後期まで下ることが明らかとなった。

2001 年度は本体工事部分の流路跡完掘作業を行い、C3 区の調査を全て完了した。

調査では流路跡の他、土坑を検出し、流路跡床面から弥生時代中期以前と考えられる階段状に降りてゆく構造の土坑などを検出した。また、弥生時代以降の遺構も検出し、調査区東側部分で古代~中世の溝跡および溝跡に関連すると見られる集石遺構を検出した。

1997年度調査

調査期間 1997年10月20日~1998年2月9日

調査面積 1407㎡

調査担当 坂本憲昭、山田和吉

1999年度調査

調査期間 1999年9月4日~1999年11月19日

調査面積 1648㎡

調査担当 坂本憲昭、堅田至

2000年度調査

調査期間 2000年7月12日~2000年8月25日

調査面積 434㎡

調査担当 坂本憲昭、名木郁

2001年度調査

調査期間 2001年10月1日~2001年12月27日

調査面積 2130㎡

調査担当 坂本憲昭、吉成承三

執筆担当 坂本憲昭

2. C3 区弥生時代前期の遺構と遺物

概要

C3 区の遺構の時期は概ね、弥生前期~中期、弥生後期、古代~近世の 3 時期に分かれる。

弥生前期~中期中葉の遺構は、土坑と溝跡を検出しており、すべて黄褐色粘質土が遺構検出面となっており安定した地盤を掘り込み作られている。

遺構は、その分布から、流路跡の床面で検出した遺構と流路跡の西側落ち口より上側の部分で検出した遺構に分けることができる。

流路跡の西側落ち口より上の部分で検出した遺構は、土坑と溝跡、ピットである。2001 年度の調査 B 地点の SK301~305、SK310 を除いていずれも 97 年度の調査で検出した。土坑、溝跡ともに埋土中からは、弥生時代前期中葉の土器が出土しており、同時期の遺構と考えられる。C3 区の西側調査区である C1 区からは弥生時代前期中葉の環濠集落を検出しており、これらの遺構は環濠集落に伴うものと考えられる。

流路跡の床面と考えられる部分から検出した遺構は土坑とピットで 2001 年度の調査で検出した。床面検出の土坑はその形態、構造から、深さ 1m 以上で階段状に降りて行く構造の土坑、平面プランが方形や円形で深さが 1m 程度で箱形の断面を持つ土坑、不整形な楕円形の土坑の 3 種類に分けることができる。

階段状の土坑は、調査 C 地点を中心に 8 基を検出している。階段状に降りて行く構造とともに、最も深い部分からは清水が湧水している土坑がみられること、最深部からミニチュア土器が出土している土坑があることなどから水に関係した遺構と考えられる。埋土からは B 地点 SK306 を除いて I-5~II 期の土器が出土しており、II 期に埋没したと考えられる。

方形や円形の土坑は調査 D 地点から検出した。埋土中からは I-2~3 期の土器が出土しており、同時期の遺構と考えられる。前期環濠集落の一部と考えられるが、環濠集落の他の遺構と検出面の比高差が約 1.9m あることや深さが深いことから特殊な用途に使われた可能性が考えられる。

その他の土坑は平面形が不整形で時期不明のものが多く、III 期以降の時期の可能性が考えられる土器が出土している。

検出遺構 弥生土坑 59 基 溝跡 2 条

(1) 土坑

C3-97SK328 (C3-3 図)

時期；弥生 I-2~3 形状；楕円形 主軸方向；N-31°-E

規模；1.9m×1.1m 深さ；0.38m 断面形態；逆台形

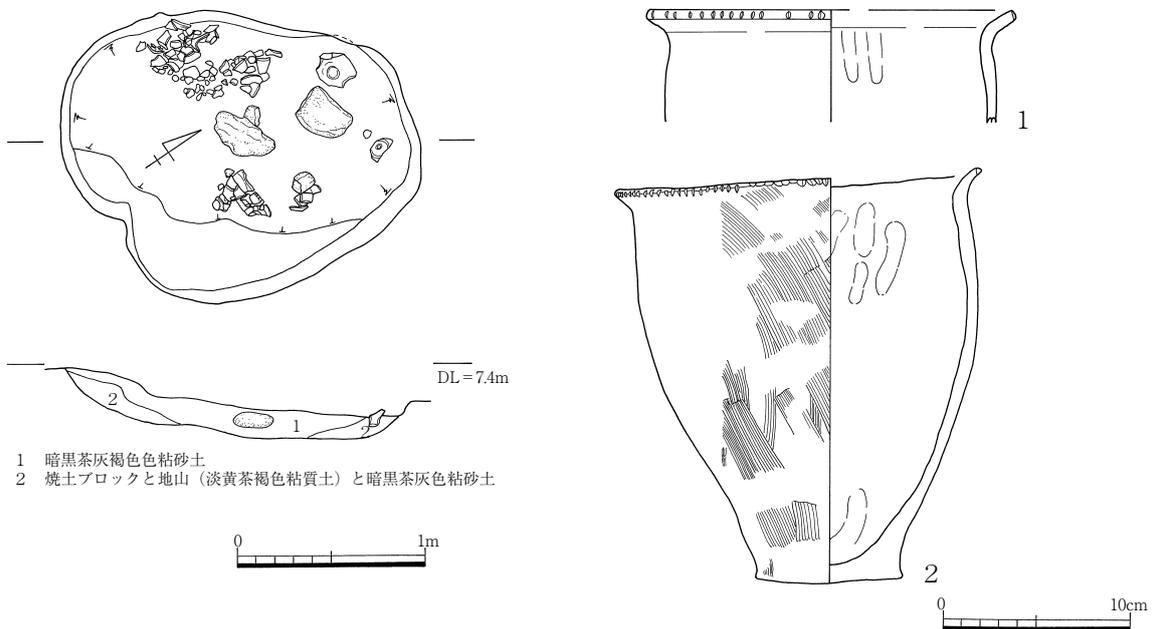
埋土；黒灰褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；1997 年度調査で検出した土坑で調査区南側の西端部に位置する。流路跡に向かって黄褐色地山が落ちて行く斜面から検出した。安定した地山である黄褐色土を掘り込み作られている。平面形は楕円形で 1.9m×1.1m の規模を測るが、東側は斜面により崩れたと考えられる。検出時の埋土は黒灰褐色土で、埋土中には炭化物も含まれるが焼土は検出されなかった。遺物は土器が多く出土し、つぶれたような状態で検出し、完形復元できた 2 などがみられる。図示できなかった細片では、甕は口縁下部に沈線が施されたものはなく、口縁端部の刻目は下端刻目のものがほとんどであった。

この土坑は弥生時代前期中葉の時期が考えられ、西側調査区で検出された弥生時代前期の集落に属する遺構と考えられる。遺構の性格は不明であるが SK339・341 と隣接するが規模、検出状況が異なることから性格に差異があると考えられる。



C3-3 図 C3-97SK328

C3-1 表 C3 区前期土坑一覧

遺構番号	年度	調査地点名	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C3SK328	97		楕円形	逆台形	1.9	1.1	38	N-31°-E	黒灰褐色土		I-2~3期	流路跡の肩口
C3SK339	97		長方形	箱形	2.8	2.0	0.3	N-63°-W	黒灰色土		I-2~3期	
C3SK344	97		長方形	箱形	2.9	2.4	0.2	N-63°-W	暗灰褐色土	攪乱に切られる	I-2~3期	
C3SK353	97		長方形	皿状	[1.2]	0.9	25	N-41°-E	暗灰褐色土	SK339、SD310に切られる	I-2~3期	
C3SK356	97		長方形	箱形	2.2	1.25	0.5	N-23°-E	暗灰褐色土	SD310、SK357、SK358、SK364と切り合う	I-2~3期	SK357は同一遺構
C3SK3014	99		長方形	箱形	2.15	1.9	14	N-59°-W	黒褐色土		I-2~3期	近現代混入
C3SK3015	99		長方形	箱形	2.15	1.2	10	N-40°-E	黒褐色土	ビットが切る	I-2~3期	
C3SK3016	99		楕円形	—	0.95	0.75	11	N-0°-E	暗褐色土			
C3SK3017	99		楕円形	—	1.2	0.95	12	N-28°-W	灰褐色砂		中世の可能性	
C3SK3018			長方形	—	1.0	0.4	4	N-56°-W	灰褐色砂			
C3SK3019	99		不整楕円形	—	1.2	0.65	11	N-22°-W	灰黄褐色土			
C3SK301	01	A	—	—	—	—	—	—				欠番
C3SK302	01	A	楕円形	箱形	1.15	0.85	0.6	N-40°-E				
C3SK303	01	A	楕円形	段状	1.5	0.6	30	N-56°-E			I-5~II-1期	
C3SK304	01	A	不整形	—	0.9	0.75	29	N-34°-E			I-5期	
C3SK305	01	A	長方形	皿状	[0.5]	0.7	69	—		SK306、攪乱に切られる		
C3SK306	01	A	楕円形	箱形	1.5	0.7	35	N-81°-E		SK305を切り、流路跡に切られる		
C3SK307	01	A	不整形	2段	[1.8]	0.8	62	N-40°-E		P3007と切り合う	II期~	
C3SK308	01	A	溝状楕円形	2段	2.3	0.8	76	N-30°-E			II期~	
C3SK309	01	A	方形	—	[0.5]	0.6	26	—		流路跡の肩と切り合う		
C3SK310	01	A	不整楕円形	—	1.9	0.6	29	N-40°-E				
C3SK311	01	A	[楕円形]	逆台形	[1.3]	1.15	18	N-41°-E			IV期~	調査区に切られる
C3SK312	01	D	楕円形	逆凸状	[1.55]	0.7	83	N-46°-E				トレンチに切られる
C3SK313	01	D	不整長方形	二等辺三角形状	2.4	0.75	68	N-47°-E			III期	
C3SK314	01	D	楕円形	箱形	1.45	0.85	59	N-47°-W				
C3SK315	01	D	楕円形	段状	[1.45]	0.85	78	N-83°-E				
C3SK316	01	D	楕円形	階段状	1.9	0.9	57	N-67°-W			II期~	
C3SK317	01	D	楕円形	2段	0.6	0.55	44	N-57°-W			II期~	
C3SK318	01	D	楕円形	箱形	0.95	0.9	92	N-51°-W			I-5~II-1期	
C3SK319	01	D	楕円形	箱形	0.7	0.6	38	N-67°-W			II-III期	
C3SK320	01	D	楕円形	2段	0.8	0.65	40	N-75°-E				
C3SK321	01	D	溝状楕円	逆凸状	1.2	0.5	65	N-49°-W			I-5~II-1期	中央部にビット
C3SK322	01	D	楕円形	箱形	1.05	0.45	66	N-80°-E				
C3SK323	01	D	不整溝状	—	—	—	—	—			II期~	開口し流路跡の一部
C3SK324	01	D	楕円形	二等辺三角形状	0.85	0.65	26	N-36°-E				
C3SK325	01	D	不整楕円形	2段	1.1	0.74	54	N-67°-W				
C3SK326	01	D	円形	箱形	1.15	—	—	—			I期	
C3SK327	01	D	楕円形	箱形	1.65	1.50	88	—			I期	
C3SK328	01	D	方形	箱形	1.15	1.15	0.86	N-22°-E	黒褐色粘質土		I期	
C3SK329	01	D	長方形	箱形	1.0	0.7	1.57	N-72°-W			V期~	
C3SK330	01		溝状	階段状	1.85	1.0	1.173	N-46°-E				
C3SK301	01	B	溝状	U字状	2.2	1.25	17	N-64°-E			I期	トレンチに切られる
C3SK302	01	B	楕円形	箱形	1.2	0.8	47	N-15°-E			I期	
C3SK303	01	B	楕円形	箱形	0.9	0.7	38	N-48°-E				

遺構番号	年度	調査地点名	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C3SK304	01	B	楕円形	箱形	1.0	0.8	37	N-46°-E				
C3SK305	01	B	楕円形	U字状	1.05	0.9	20	N-45°-W				
C3SK306	01	B	溝状	階段状	6.45	0.55~1.2	1.30	N-31°-E	灰褐色砂		II~III期	
C3SK307	01	B	溝状	箱形	0.9	0.7	73	N-23°-W				
C3SK308	01	B	円形	—	0.65	0.55	43	—			II期	
C3SK309	01	B	円形	—	0.65	—	11	—				
C3SK310	01	B	楕円形	箱形	0.75	0.65	12	N-44°-E				人頭大円礫入る
C3SK311	01	B	隅丸長方形	箱形	1.6	1.25	1.18	N-46°-E			I期	
C3SK301	01	C	溝状	階段状	2.8	1.25	1.12	N-73°-E	灰褐色砂			
C3SK302	01	C	溝状	階段状	4.1	0.55~1.1	1.30	N-64°-E	灰褐色砂		I-5~II-1期	
303C3SK	01	C	溝状	階段状	4.5	0.7~1.6	1.6	N-64°-E	灰褐色砂		I-5~II-1期	
C3SK304	01	C	溝状	階段状	3.9	0.5~1.8	1.2	N-61°-E	灰褐色砂		I-5~II-1期	
C3SK305	01	C	溝状楕円形	不整形	[3.4]	0.7~1.3	1.20	N-64°-E		SK302と切り合う		
C3SK306	01	C	楕円形	—	1.75	1.9	11	N-50°-E				
C3SK307	01	C	楕円形	—	1.0	0.55	6	N-42°-E			II期~	
C3SK308	01	C	楕円形	—	1.3	0.7	9	N-33°-E				
C3SK309	01	C	溝状	逆凸状	2.0	1.0	70	N-62°-E			I-5~II-1期	中央にビット状
C3SK310	01	C	溝状	箱形	[5.3]	1.2	61	—			II~III期	
C3SK311	01	C	溝状	不整形	[2.6]	1.5	1.74	N-49°-E		SK312と切り合う		
C3SK312	01	C	溝状が並列	階段状	[3.8] [2.3]	0.5~ [1.1] 0.5~ [1.1]	0.87	N-53°-E	灰褐色砂	SK311と切り合う		
C3SK313	01	C	楕円形	段状	2.0	1.4	1.02	N-83°-E	灰褐色砂		I期	

C3-97SK339(C3-4・5 図)

時期；弥生 I-2~3 形状；長方形 主軸方向；N-63°-W

規模；2.8m×2.0m 深さ；0.3m 断面形態；箱形

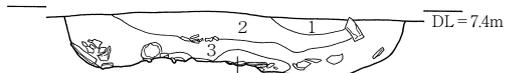
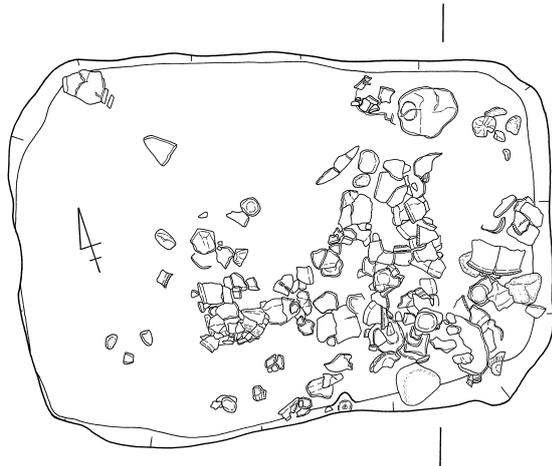
埋土；黒灰色土

付属遺構；— 機能；—

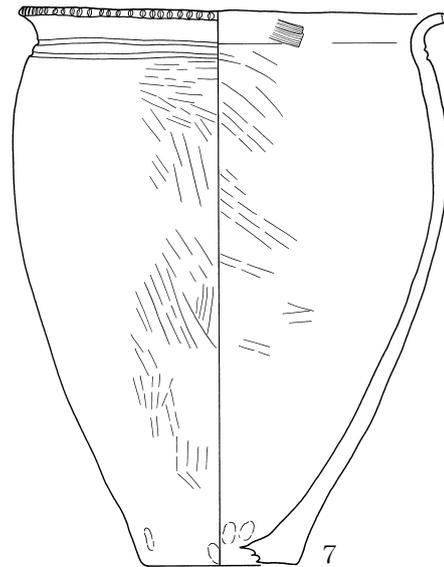
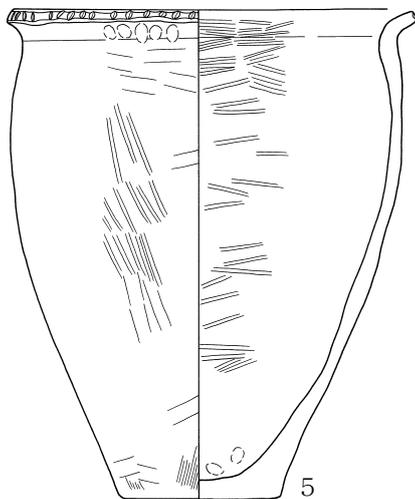
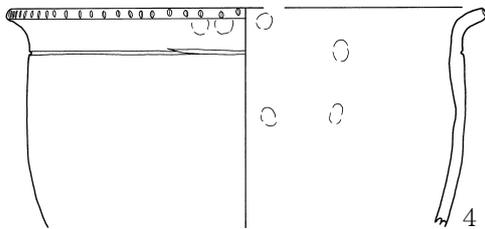
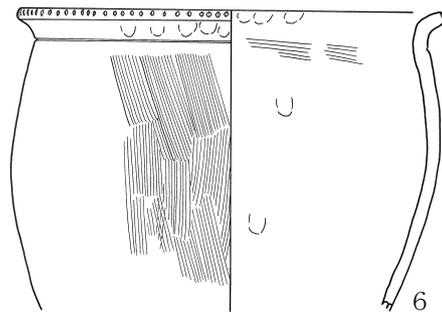
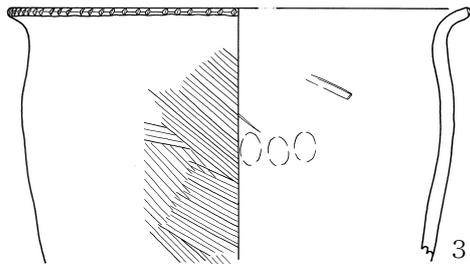
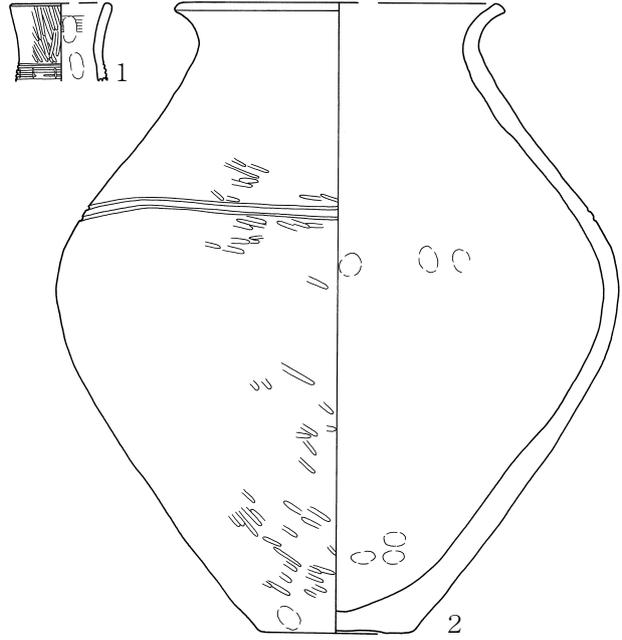
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石器(叩石)

所見；調査区中央部の東端に位置し、安定した黄褐色の地山を掘り込み作られる。長方形の平面形を持ち規模は2.8m×2.0mを測る。検出時の埋土は黒灰色土で、埋土中には多量の炭化物と焼土を含んでいる。埋土からは多量の土器が出土しており、いずれも出土状況は床面に貼り付くような状況で、完形復元できた土器は7点を数える。埋土中から出土した遺物は土器以外は叩石1点のみで、土器に偏った状況を示している。

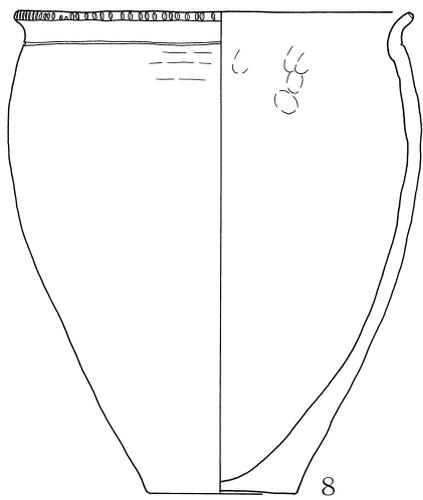
出土土器が10を除いていずれも弥生前期中葉の時期であるところから調査区東側C1区で検出された弥生前期の集落に属していると考えられる。遺構の性格は集落の最も東側のSD310と流路跡に挟まれた集落の最も東側部分に位置していることや、規模が他の前期土坑に比べ大きいこと、多量に土器を有する一方、土器以外の遺物を含まず焼土、炭化物が多量に床面上から検出されることなどから、土器焼成に関わる可能性が考えられる。



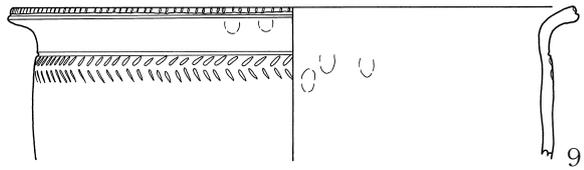
- 1 黒灰色粘質土
- 2 黄色砂質土 (地山と同じ色)
- 3 褐灰色粘砂土 (炭化物・焼土入り・土器多い)
- 4 灰褐色に黄色入る、砂質土



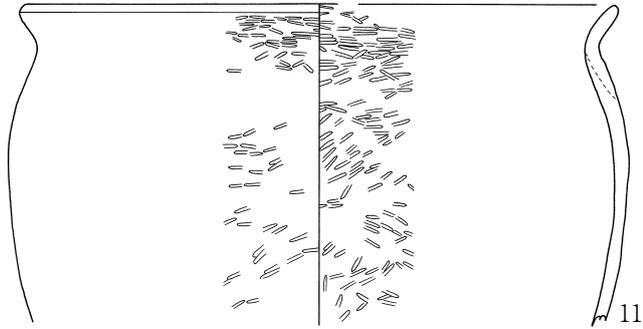
C3-4 図 C3-97SK339(1)



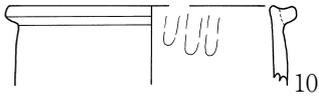
8



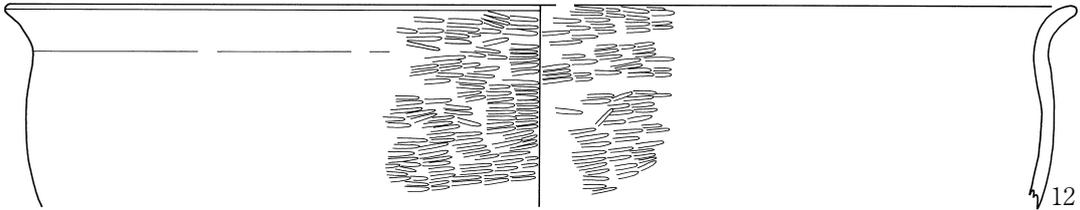
9



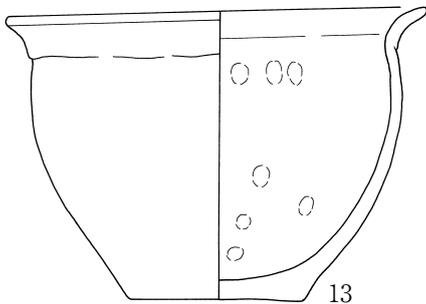
11



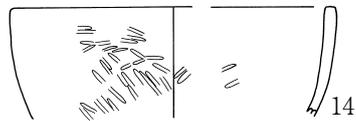
10



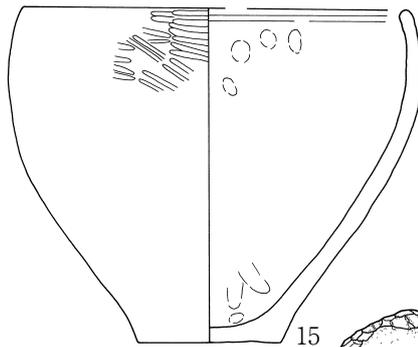
12



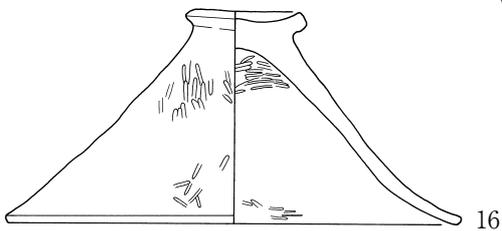
13



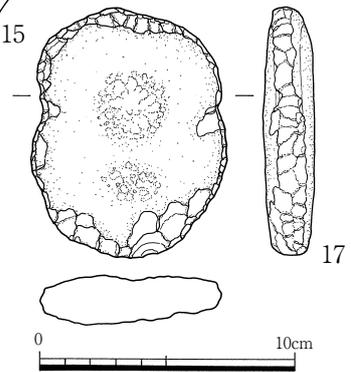
14



15

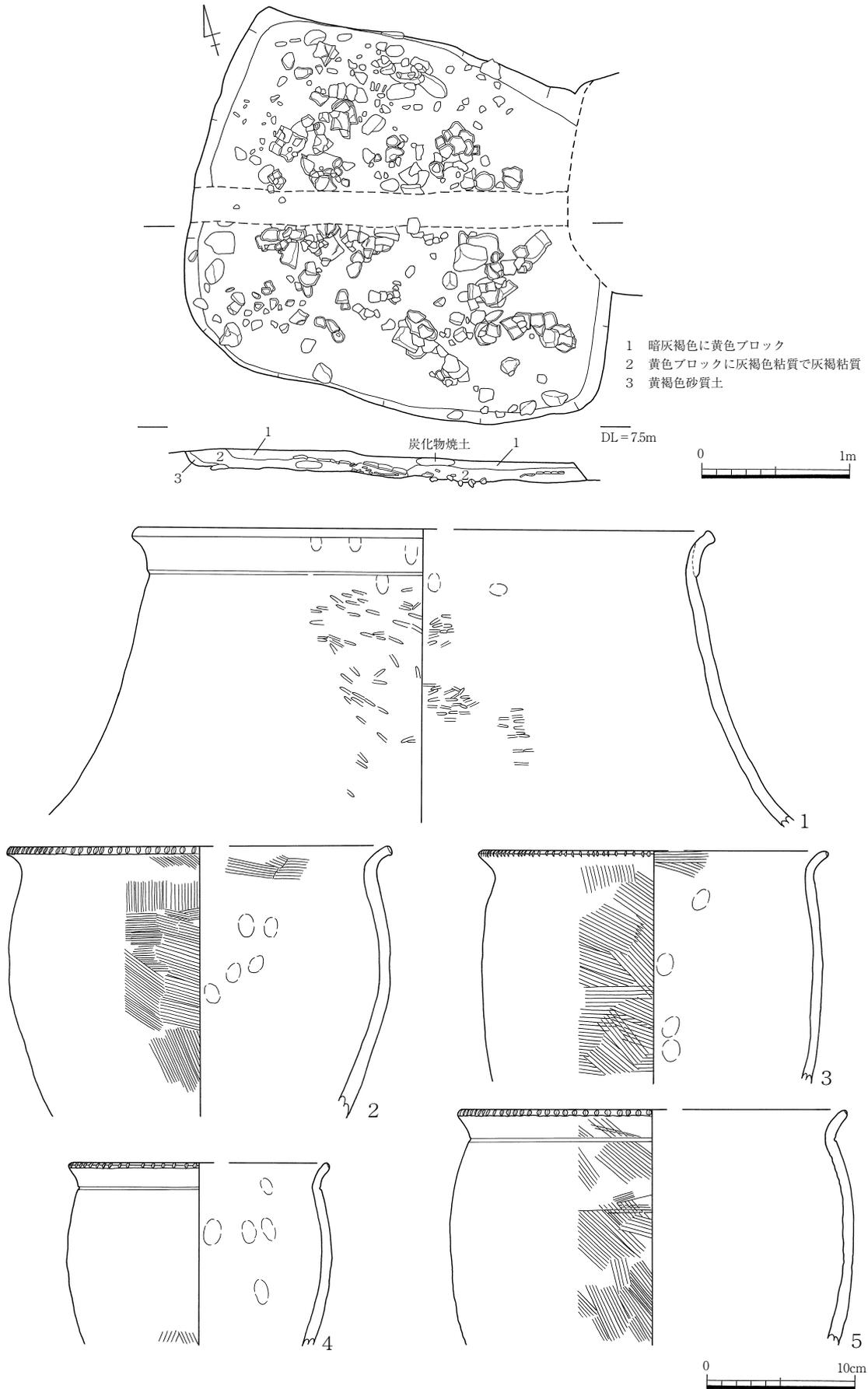


16



17

C3-5 ☒ C3-97SK339(2)



C3-6 図 C3-97SK344(1)

C3-97SK344 (C3-6・7 図)

時期；弥生 I-2~3 形状；長方形 主軸方向；N-63°-W

規模；2.9m×2.4m 深さ；0.2m 断面形態；箱形

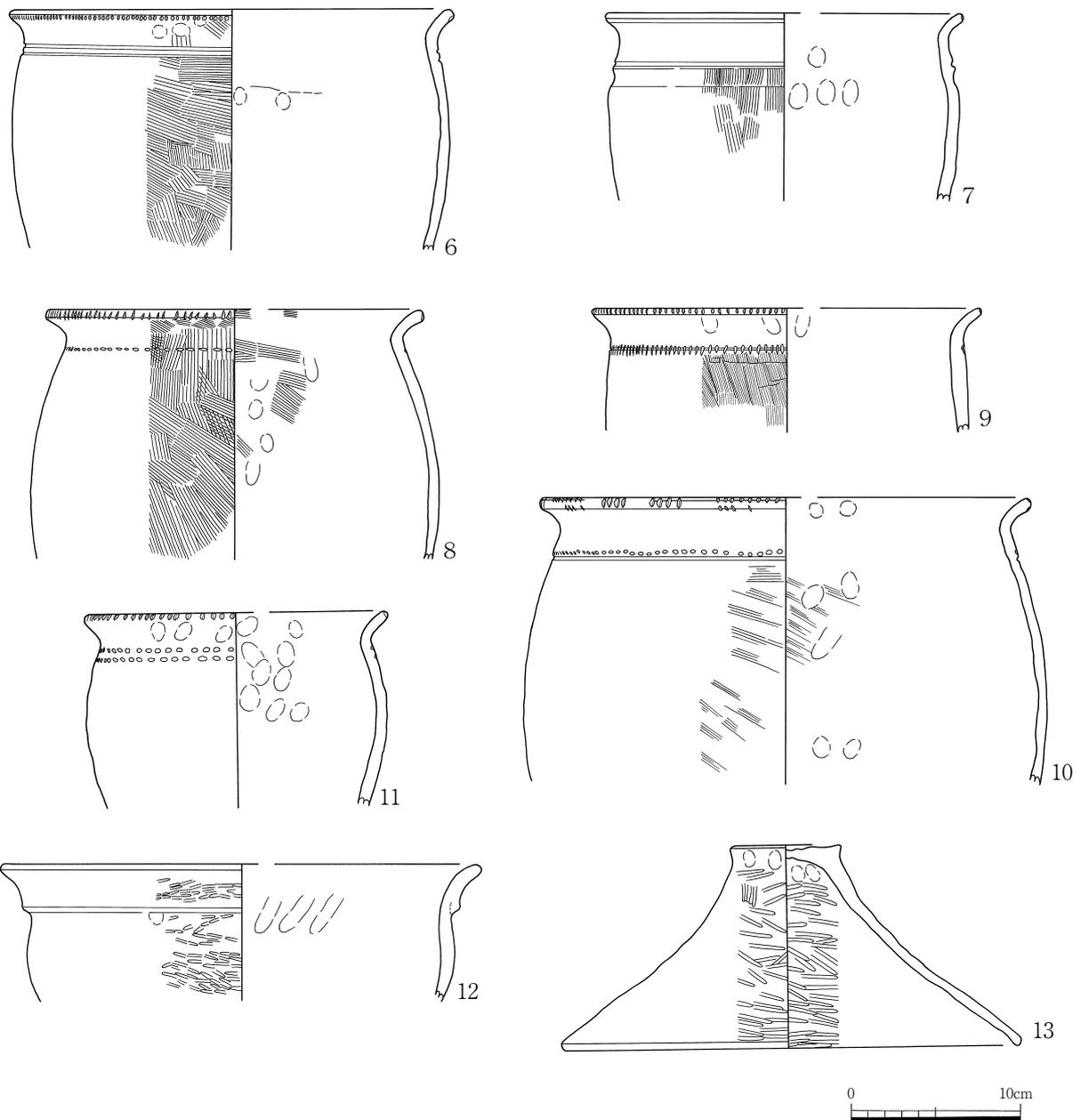
埋土；暗灰褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区中央部の東端、流路斜面部落ち口から西側へ3m離れた黄褐色地山から検出した。長方形の平面形を持ち規模は2.9m×2.4mを測るが、西端部は近現代の攪乱坑によって壊される。

埋土は暗灰褐色土で炭化物、焼土が含まれる。床面までの残存は約20cmで、床面からは石が多量に出土しているものの多くは地山礫と考えられる。遺物は土器のみが多量に出土している。壺で



C3-7 図 C3-97SK344 (2)

は口縁部に段を持つもの、ないもの、突帯が巡るもの、沈線のものなどが出土している。また、甕では有段甕の他、1点のみであるが3条沈線のものも出土している。土器は弥生時代前期中葉の時期と考えられる。SK344は弥生前期集落の一部と考えられる。約10m離れ隣接するSK339と共通点が多くみられ、同じ性格を有する可能性が高く土器焼成土坑の可能性が考えられる。

C3-97SK353(C3-8 図)

時期；弥生 I-2~3 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-41°-E

規模；(1.2)×0.9m **深さ**；0.25m **断面形態**；皿状

埋土；暗灰褐色土

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区中央部西端の黄褐色地山を掘り込む。検出時の平面形は長方形でSK339・SD310に切られた状態で検出した。

検出時の埋土は暗灰褐色土で、上層には炭化物が混じるが少量で焼土は伴わない。遺物の出土量は多いものの細片が多く、図示できたものは2点のみであった。図示できなかったもので器種が判明しているものは壺1、直縁鉢1、如意形口縁甕または鉢9点が出土しており、口縁下の沈線は2条のものが2点出土している。土器以外の遺物は出土しなかった。

出土した土器はいずれも弥生時代前期中葉の時期のもので、SK353は弥生時代前期集落に属すると考えられる。

C3-97SK356(C3-8・9 図)

時期；弥生 I **形状**；長方形 **主軸方向**；N-23°-E

規模；2.2m×1.25m **深さ**；0.5m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰褐色土

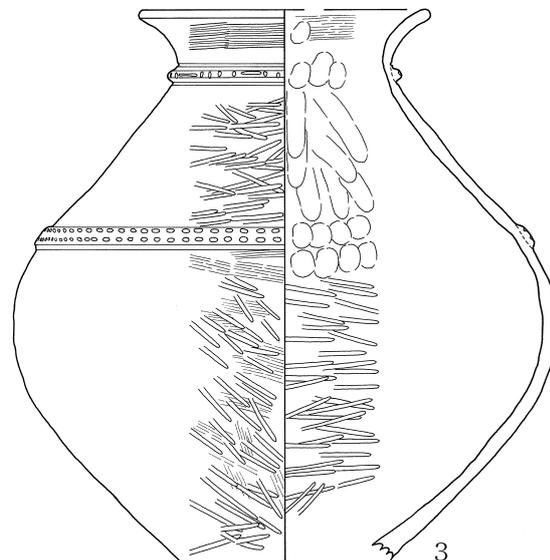
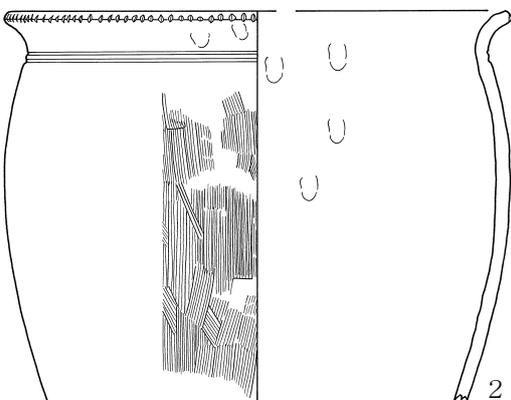
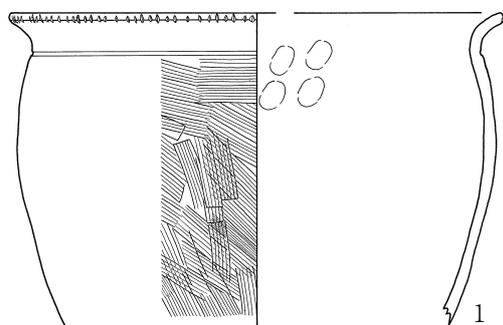
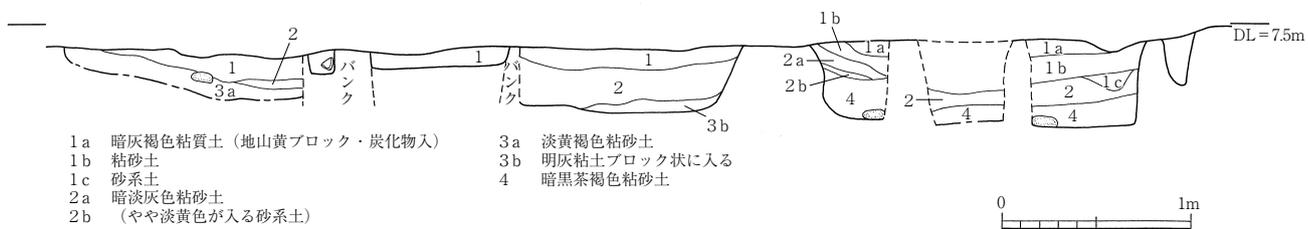
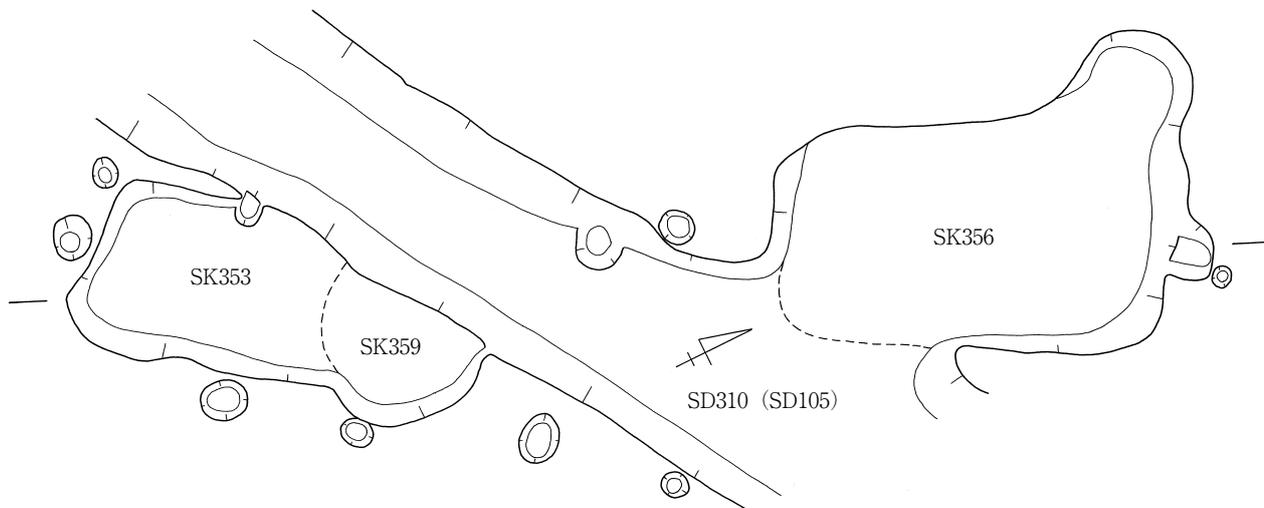
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石器(刃器)

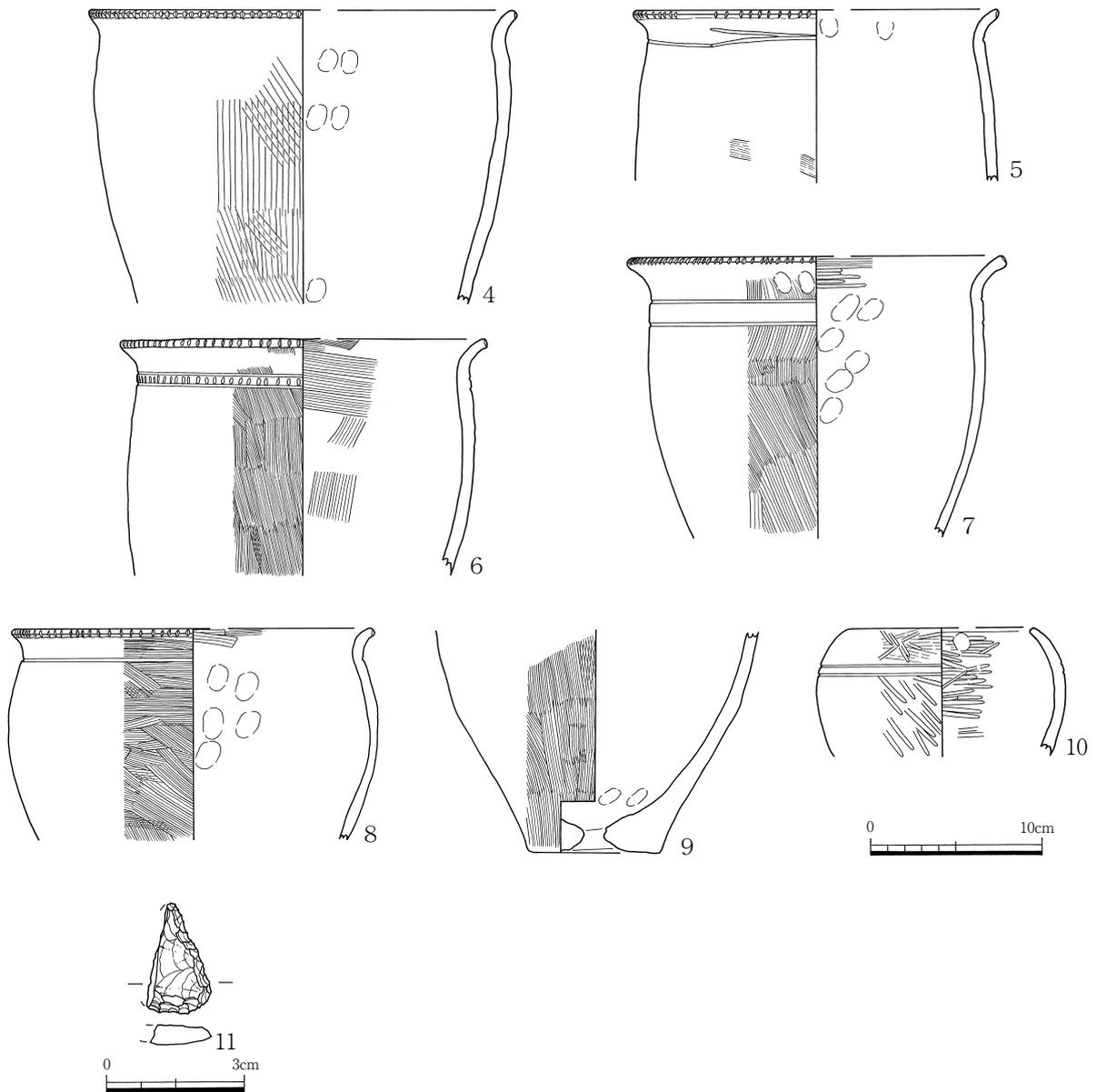
所見；調査区中央西端部の黄褐色地山面で検出した。検出時はSD310・SK357・SK358・SK364と切り合った状態で確認し、それぞれ遺構番号を付け掘削確認作業を行ったところ、SK357とは差異が確認できず、同一土坑と判明した。

埋土は暗灰褐色土を中心としたもので、わずかに炭化物が含まれるが焼土は含まれない。遺物出土状況は中層からの出土が多く下層、床面からの出土は少ない状況であった。出土した遺物は弥生時代前期中葉の土器で、壺では口頸間、頸胴間に断面幅広の長方形の貼付突帯を施し、さらにその上下をヘラによって強調しているものが出土している。また、如意形口縁の土器では口縁下2条沈線のものが出土している。

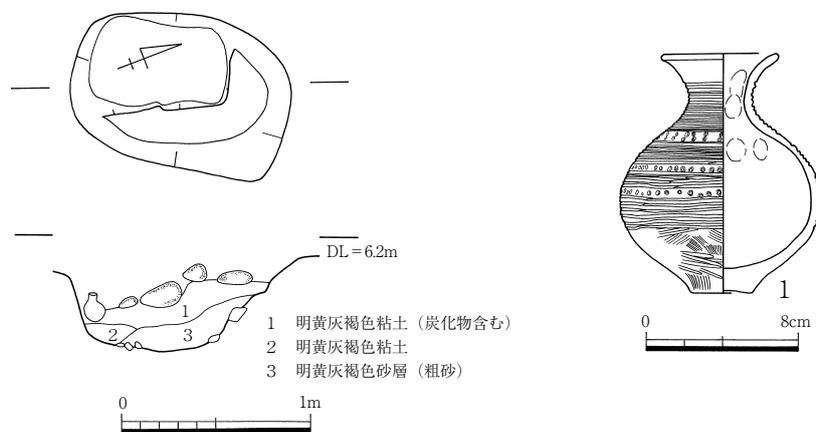
SK356はC1区で確認された弥生前期の集落に属するものと考えられる。弥生前期の環濠の一部と考えられるSD310と切り合い関係にあり、検出時はSK356がSD310を切っている状態であった。



C3-8 図 C3-97SK353・355・356・359・364



C3-9 図 C3-97SK356



C3-10 図 C3-01A-SK302

C3-01ASK302(C3-10 図)

時期；弥生 I-5~II-1 形状；楕円形 主軸方向；N-40°-E

規模；1.15m×0.85m 深さ；0.6m 断面形態；箱形

埋土；黄灰褐色土

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区北側 A 地点で検出した。検出地点は黄褐色地山が緩やかに流路跡に向かって落ちテラス状になっている部分からやや急な斜面に変化する場所で、検出標高は 6.0m である。

埋土は黄灰褐色土で、下層は粗砂になっていた。埋土中からは前期末~中期初頭と考えられる完形の小型壺が出土している。SK302 は前期末~中期初頭の時期と考えられ、下層は流水堆積の可能性が考えられる。

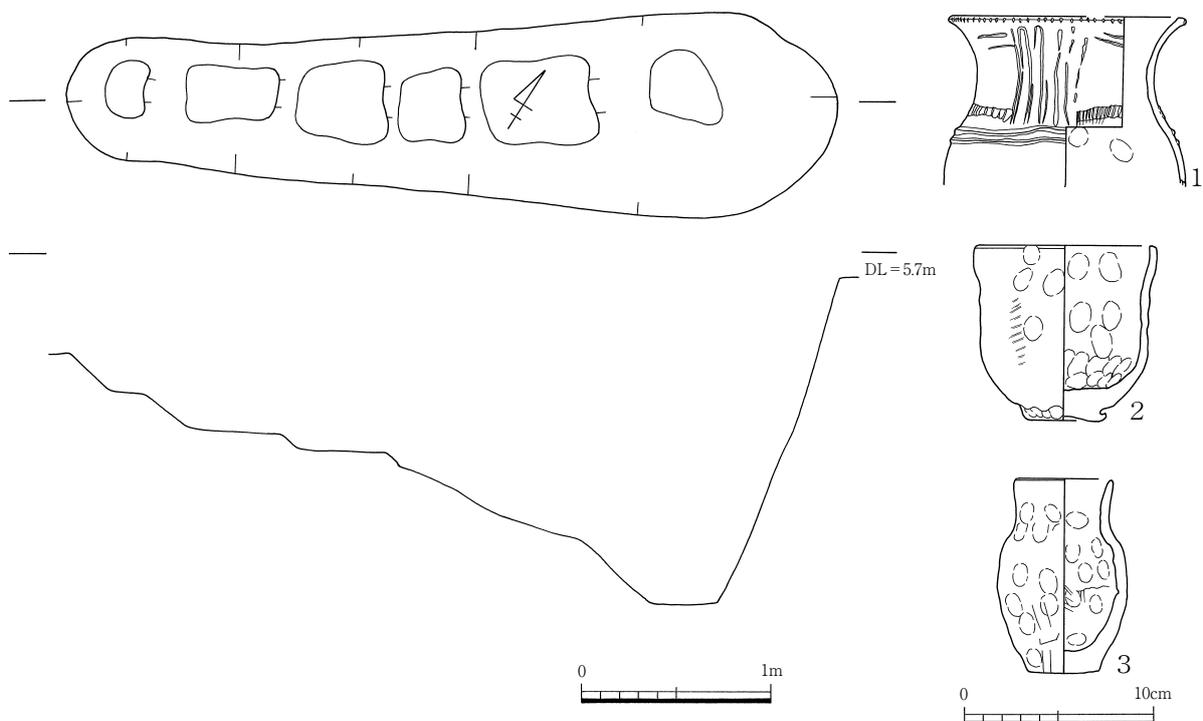
C3-01CSK302(C3-11 図)

時期；弥生 I-5~II-1 形状；溝状の楕円形 主軸方向；N-64°-E

規模；4.1m×0.55m~1.1m 深さ；1.3m 断面形態；階段状

埋土；灰褐色土色砂と砂利の互層

付属遺構；— 機能；—



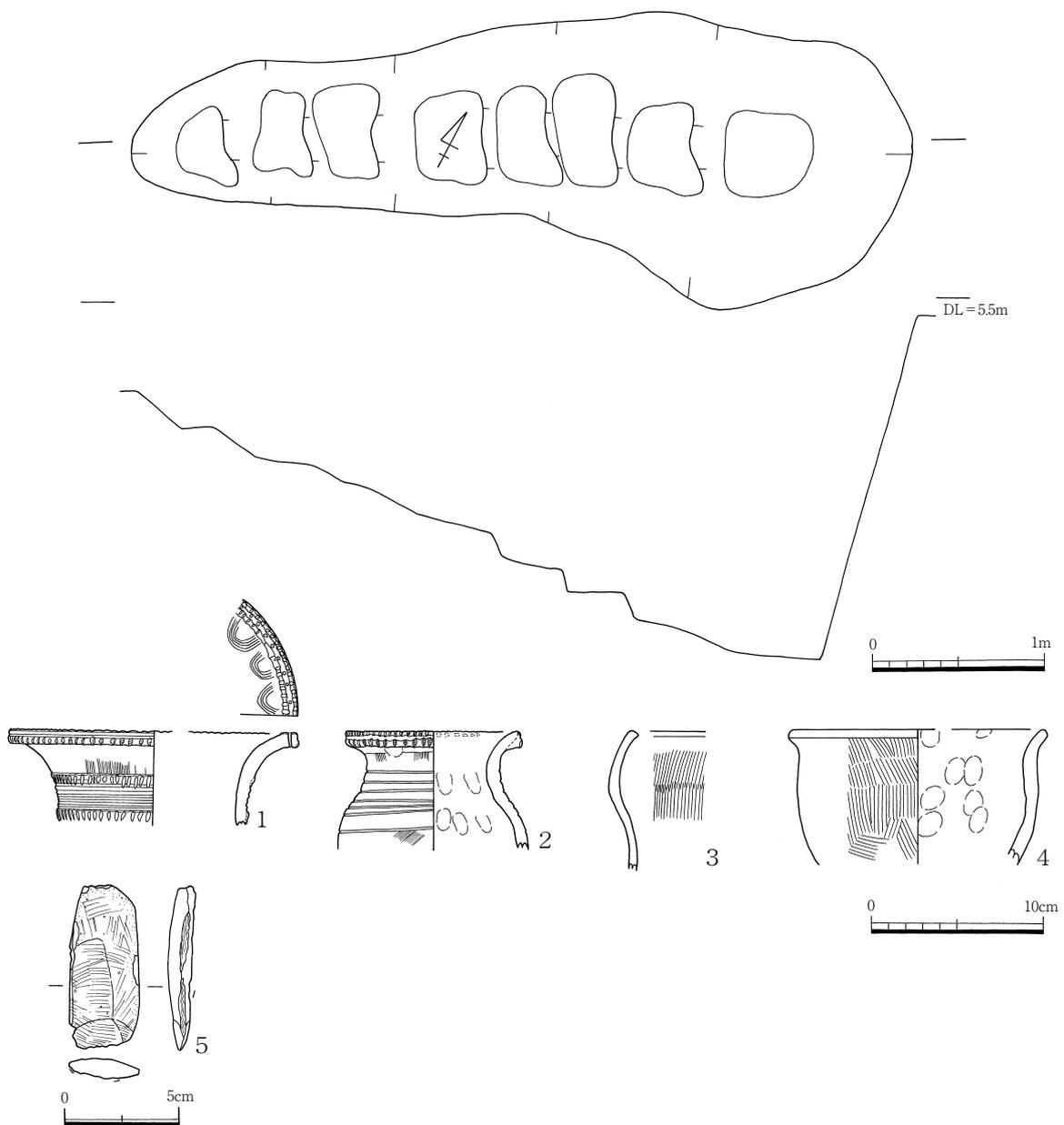
C3-11 図 C3-01C-SK302

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、小型土器)

所見：調査C地点に位置し、流路跡西側斜面下から3m程離れた流路跡床面で検出した。SK303とは並行し、SK305とは降り口を共有した状態で向かい合っている。検出標高は約5.2mである。平面形は溝状の長楕円で端部階段状の断面形をもつ。規模は長さ4.1m、幅は降り口約0.55m、深さは最深部で1.1mを測る。

埋土は灰褐色砂と砂利の互層で下層は粘性を帯びている。埋土中からは図示できた以外に口縁端部が歯車状に刻まれるⅢ期の可能性のある土器が下層から出土しており、埋没時期を考える手がかりになると考えられる。また、最深部からは手捏ね成形の小型土器2、3が完形で出土している。

土坑の最深部は標高約3.8mで、清水が湧水している状況であった。この湧水地点まで降りて行



C3-12 図 C3-01C-SK303

くための階段状構造を持つ施設と考えられ、手捏ね土器は湧水施設に関わる祭祀が行われた可能性をうかがわせる。

C3-01CSK303(C3-12 図)

時期；弥生 I-5~II-1 **形状**；溝状の楕円形 **主軸方向**；N-64°-E

規模；4.5m×0.7~1.6m **深さ**；1.6m **断面形態**；階段状

埋土；灰褐色土色砂と砂利の互層

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査B地点に位置し、流路斜面下から 2m程離れた流路跡床面から検出した。SK302 と並行した状態で検出したが、検出面はSK302 より低く、検出標高は約 4.9mであった。平面形は溝状の長楕円で階段状の断面形をもつ。規模は長さ 4.5m、降り口幅約 0.7m、深さは 1.6mを測る。

埋土は灰褐色砂と砂利の互層で下層は粘性を帯びている。埋土中からは逆L状口縁や、口縁端部上下刻みなど弥生時代I期末~II期の特徴を持つ土器が出土している。検出面、出土土器からSK303に先行すると考えられる。

土坑の最深部は標高約 3.4mで、清水が湧水している状況であった。この湧水地点まで降りて行くための階段状構造を持つ施設と考えられる。

C3-01CSK304(C3-13 図)

時期；弥生 I-5~II-1 **形状**；溝状の楕円形に円形が接続 **主軸方向**；N-61°-E

規模；3.9m×0.5m~1.8m **深さ**；1.2m **断面形態**；階段状

埋土；灰褐色土色砂と砂利の互層

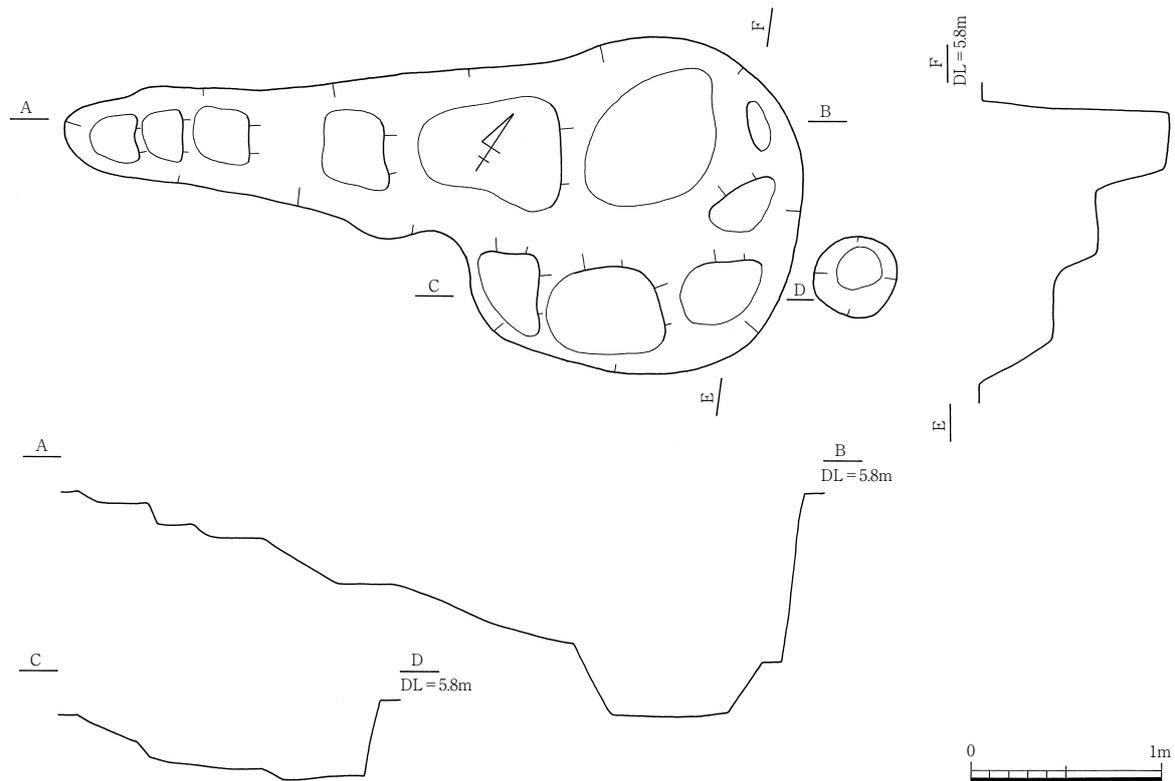
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査C地点に位置し、流路跡床面のほぼ中央部から検出した。検出標高は約 5.6mである。平面形は溝状の長楕円に円形土坑が接続した形態を持つ。溝状部分は階段状の断面形を持ち最深部に至る。円形部分は螺旋階段状の構造を有し、溝状部分と最深部を共有している。溝状部分の規模は長さ 3.9m、幅は降り口約 0.5m、深さは 1.2mを測る。円形部分は直径約 1.6mで、幅約 0.5mの 5段の階段を有し深さ約 1.1mを下り、最深部に至る。

埋土は灰褐色砂と砂利で下層は粘性を帯びている。埋土中には比較的多くの土器が入るが、細片が多く図示できるものはなかった。口縁部では貼付口縁が 10 点出土している。また、口縁端部上下刻みがあり、口縁内面に貼付突帯が巡る土器や、口縁上端に刻みが入り、大きく開く口縁部の内面にXの沈線文様が入る土器が出土しており、土器は弥生時代III期の可能性が考えられる。

土坑の最深部は標高約 4.5mで、SK302 などとは異なり湧水はみられず、降り口が 2ヶ所みられるなどの相違点はみられるものの、長軸方向、階段状に降りて行く構造に共通点がみられることから、遺構の性格も同様のものと考えられる。



C3-13 図 C3-01C-SK304

C3-01BSK306(C3-14 図)

時期；弥生Ⅱ～Ⅲ 形状；溝状 主軸方向；N-31°-E

規模；6.45m×0.55~1.2m 深さ；1.3m 断面形態；階段状

埋土；灰褐色砂、砂利の互層

付属遺構；— 機能；—

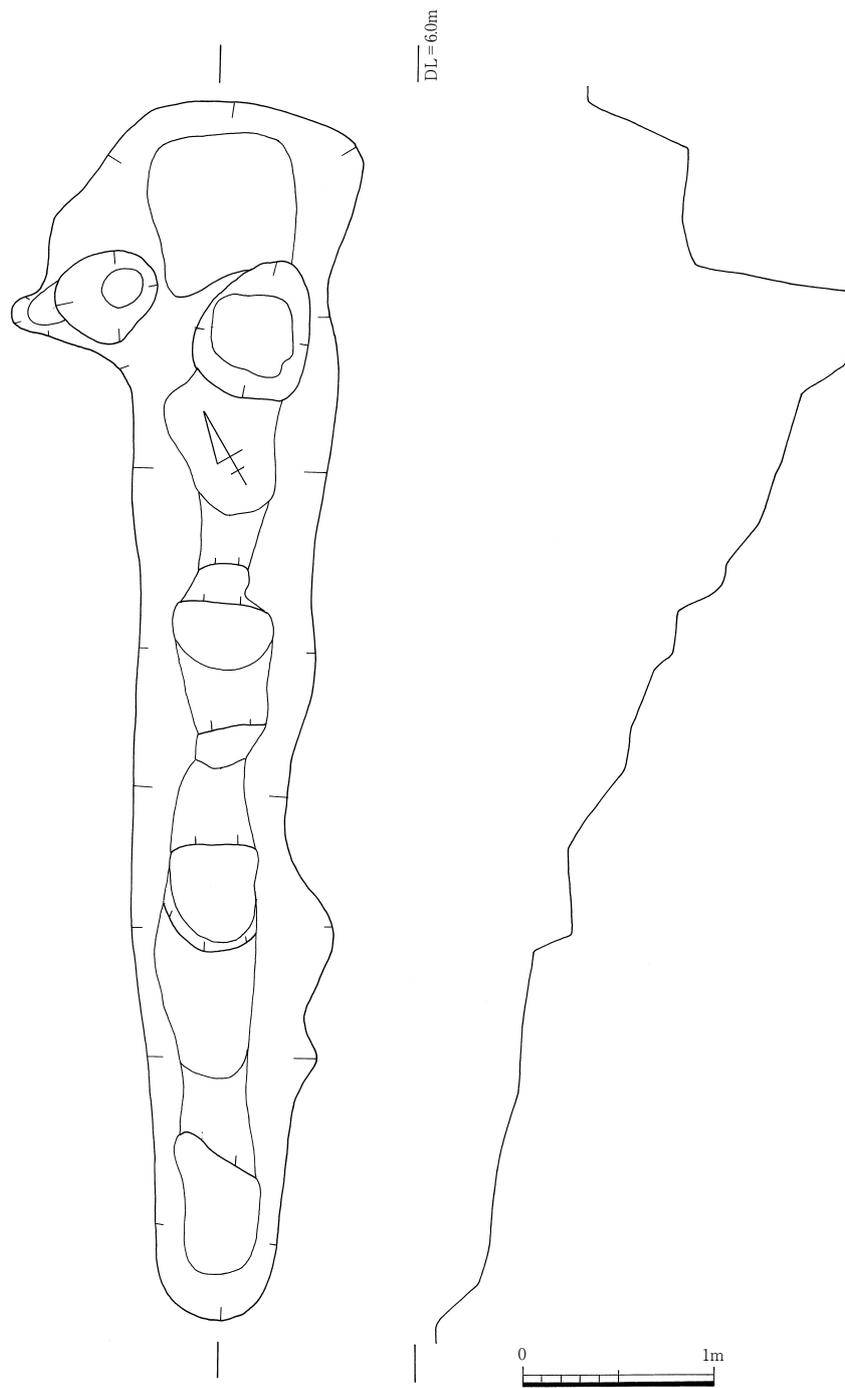
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査B地点に位置する。流路跡床面の黄褐色土から検出した。検出時は流路跡の深まり部分と考えられたが、しっかりした長楕円の平面形を持つこと、床面が階段状になっていることなどから流路跡床面に人為的に掘り込まれた土坑と確認した。

土坑の規模は長さ約 6.5mで幅約 0.6m、深さ約 1.3mであった。最深部は土坑状を呈していた。

埋土は灰褐色砂と砂利の互層で下層には粘性を帯びた土が堆積していた。また、最深部である土坑状部分には細かな砂粒が堆積し、湧水がみられる状況であった。埋土中から出土した土器は細片のみで図示できなかった。弥生時代Ⅱ期と考えられる遺物が多く出土しているが、弥生時代Ⅲ期の口縁部内面に波状文が施された土器や口縁端部に斜格子文が施された土器も出土している。弥生時代Ⅲ期に埋没したと考えられる。

遺構の性格は階段状の構造を持ち、最深部では清水が湧水していることから、水に関係した遺構の可能性が考えられる。



C3-14 図 C3-01B-SK306

C3-01CSK312(C3-15 図)

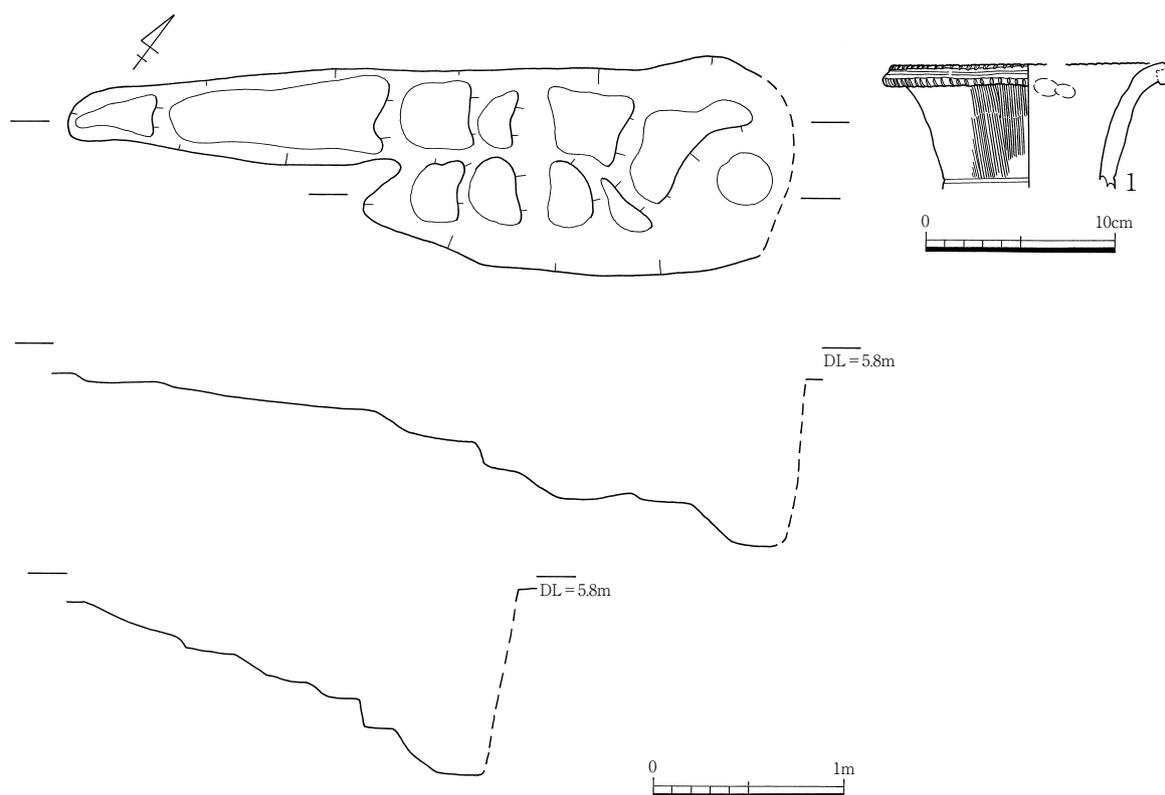
時期：弥生Ⅱ **形状**：溝状が2つ並列 **主軸方向**：N-53°-E

規模：(3.8)m×0.5~(1.1)m (2.3)m×0.5~(1.1)m **深さ**：0.87m

断面形態：階段状

埋土：灰褐色砂、砂利の互層

付属遺構：— **機能**：—



C3-15 図 C3-01C-SK312

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査C地点に位置し、流路跡床面と考えられる黄褐色土でSK311と切り合った状態で検出した。検出標高は5.65mである。平面形は溝状の土坑が2つ並行に連結した形態である。断面形はそれぞれ階段状で、A部は最深部まで6段の階段を有し、B部は最深部まで5段の階段を持つ。B部の5段目はA部の6段を共有し、最深部に到る。

埋土は灰褐色砂と砂利が混じるもので、下層には粘性を帯びた土が堆積していた。出土した遺物は細片が多く、図示できたものは1のみである。1は口縁端部上下に刻目がみられるものでⅡ期の可能性が高いと考えられる。SK311との前後関係は不明である。

遺構の性格は他の階段状の構造を持つ土坑と近接し、軸方向もほぼ同じことから、同様の性格を持つものと考えられる。

C3-01DSK328(C3-16 図)

時期；弥生Ⅰ **形状**；方形 **主軸方向**；N-22°-E

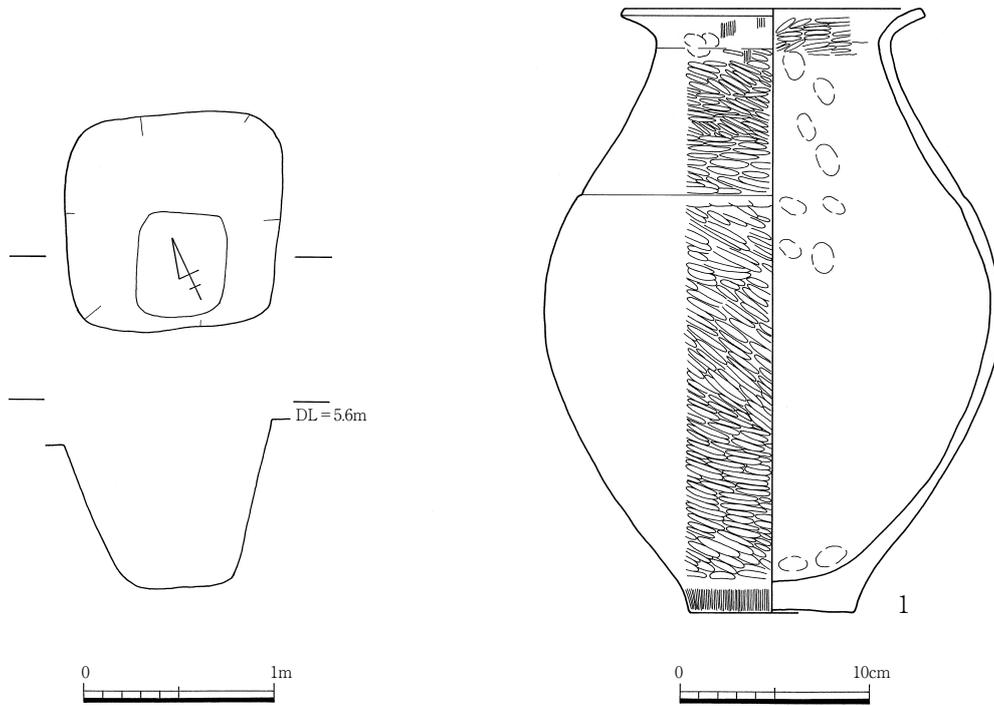
規模；1.15m×1.15m **深さ**；0.86m **断面形態**；箱状

埋土；黒褐色粘土

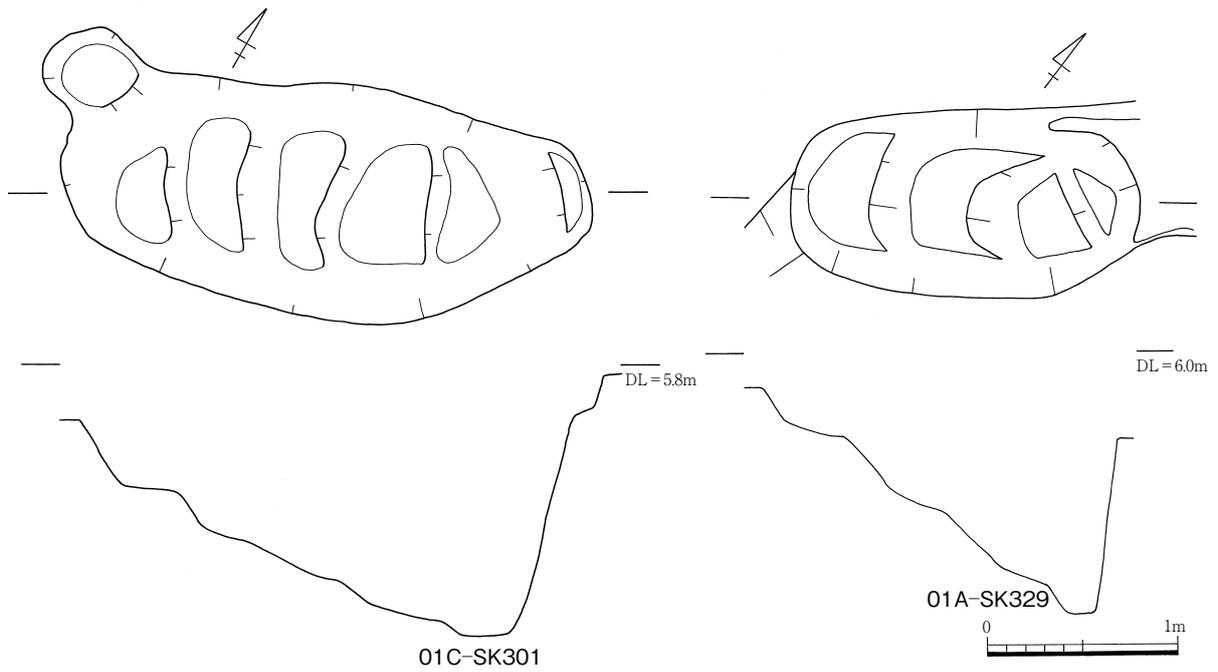
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見：調査D地点の調査区南端部に位置し、流路跡床面と考えられる黄褐色土で検出した。検出標高は約 5.6mである。平面形は一辺 1.15mの方形で深さは 86cmを測り、断面形は箱形である。埋土は黒褐色土で粘性を持ち埋土中からは、弥生前期と考えられる土器が出土しており、完形復元できた壺が 1 点出土している。

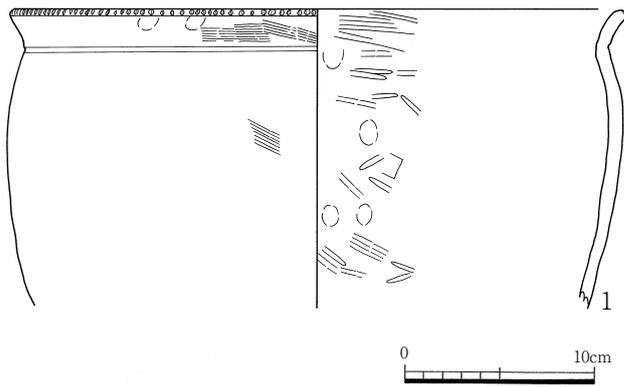


C3-16 図 C3-01D-SK328

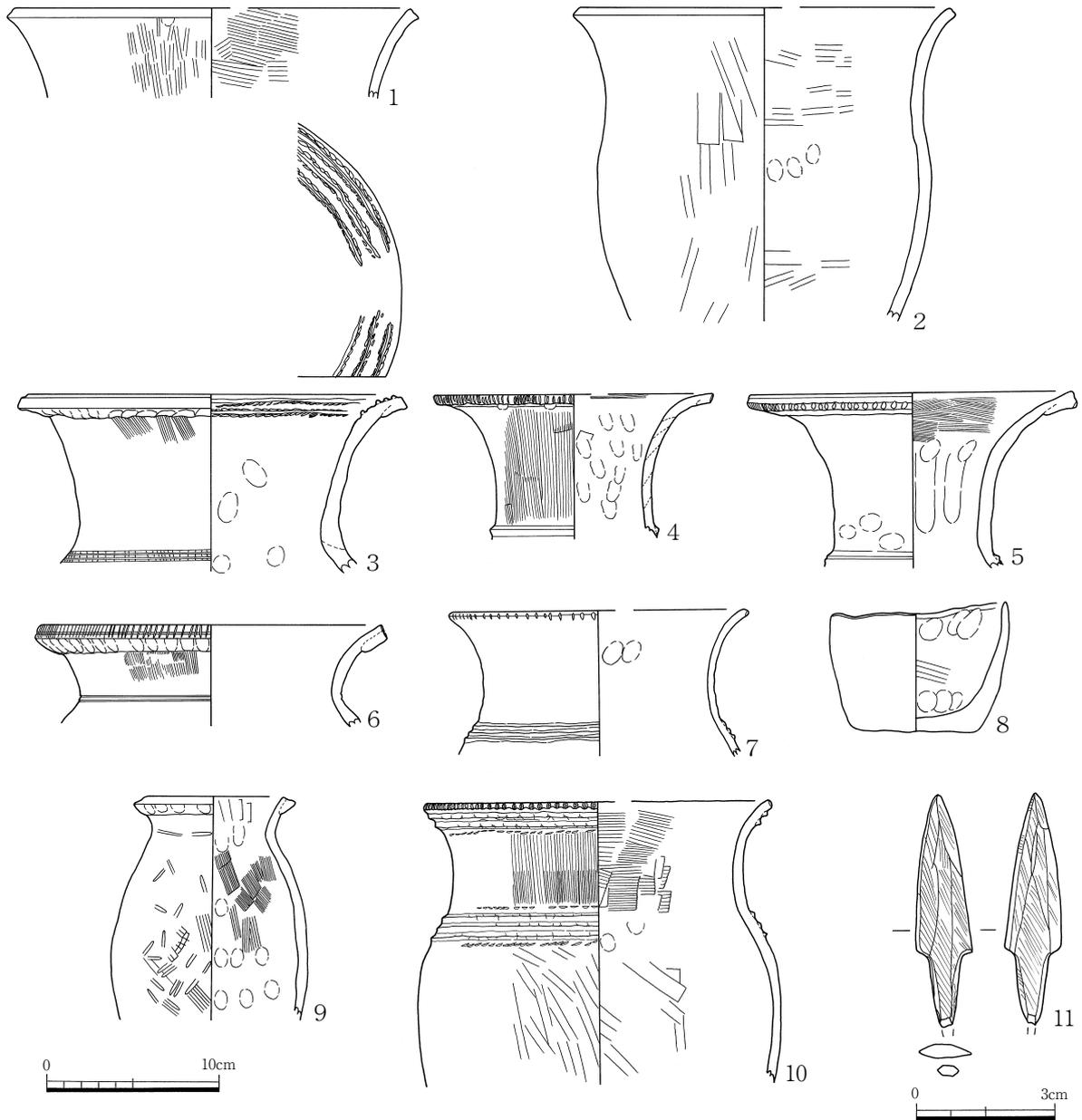


01C-SK301

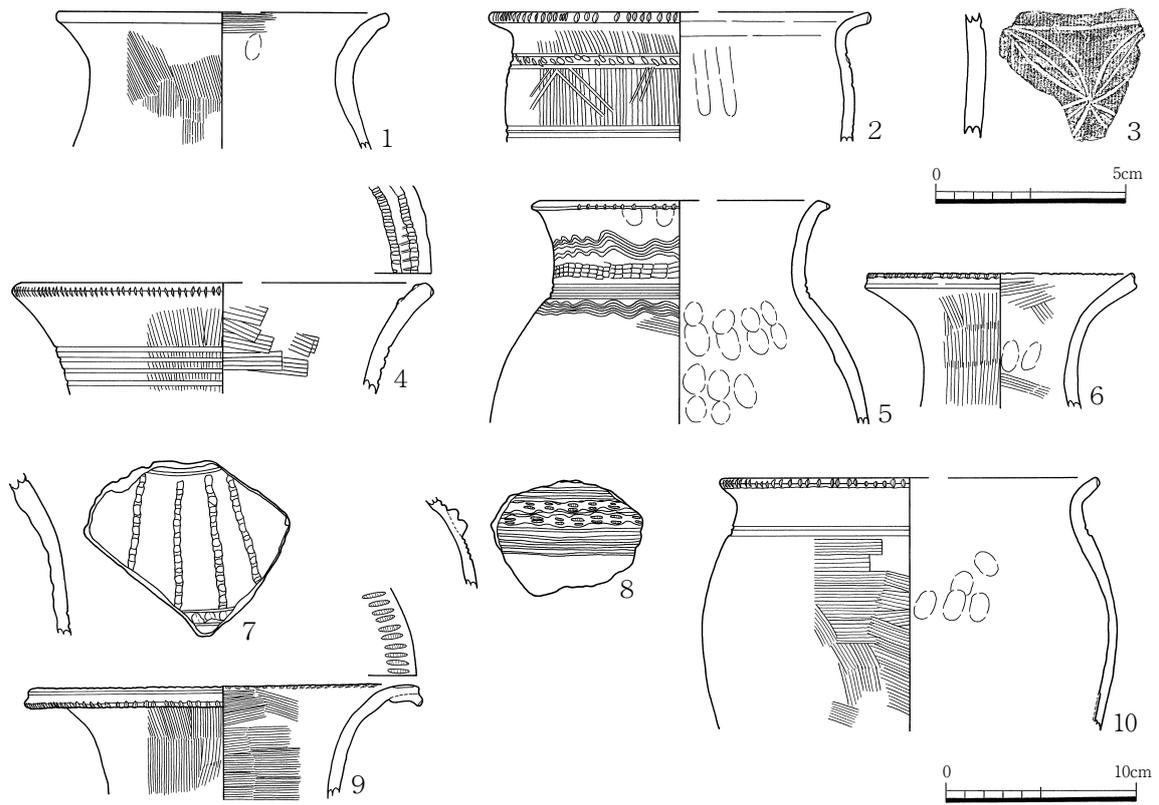
01A-SK329



C3-17 ☒ C3-01C-SK301・A-SK329



C3-18 图 C3-01A · D地点SK出土遺物



C3-19 図 C3-01B・C地点SK出土遺物、C3-99SK3014

(2) 溝跡

C3-97SD308(C3-20 図)

時期；弥生I 方向；N-32°-E

規模；SD105 より北 8.5m×0.8m 深さ；6cm 断面形態；箱形

SD105 より南 (IHSD319) 2.7m×0.8m 深さ；15cm 断面形態；箱形

埋土；灰褐色土

床面標高；7.3m

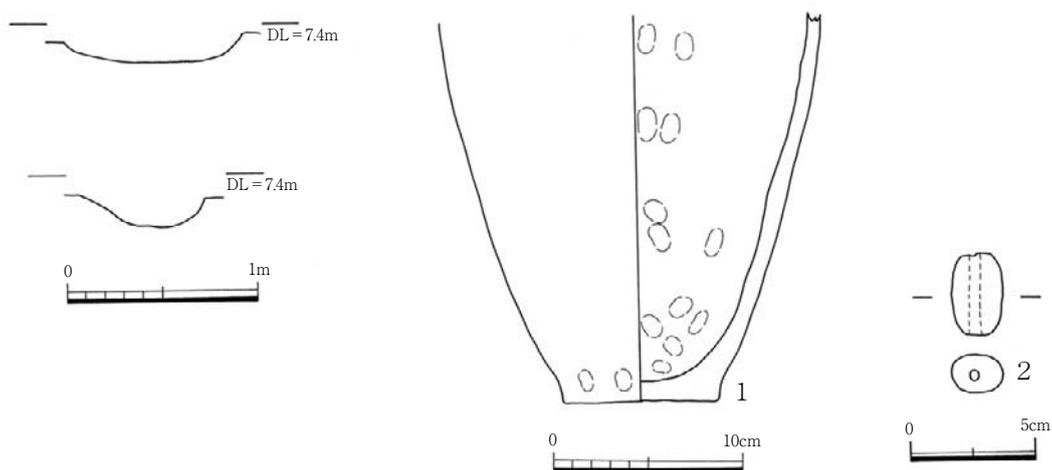
接続；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、土錘)

所見；調査区西端部、流路跡落ち口直上の黄褐色土地山から検出した。検出標高は7.3mである。SD308 検出、掘削後、調査区を東側に拡張し調査を行ったところ、SD105 の開口部を挟んだ南側で溝跡を検出しSD319 としたが規模、方向などからSD308 の延長部分と考えられ、報告ではSD308 に統一する。

SD308 の埋土は灰褐色粘質土であった。残存状況は不良で5cm程しか残存していない部分もみられた。出土遺物は細片が多く出土したが、図示できた遺物は2点のみであった。土器の口縁部は20点出土し、その内18点が弥生時代前期の如意形口縁であった。近世陶磁器も出土しているが、近世以降の溝跡SD318 に切られていたため混入したと考えられる。

SD308 はSD105 の開口部を挟んで南北両側で検出しており、切り合い関係にあるが、検出時の平面確認では切り合いを確認することができなかった。SD105 との関係は不明であるが、前期であまり時期差のない遺構と考えられる。



C3-20 図 C3-97SD308

C3-97SD310(C3-21 図)

時期；弥生I 方向；N-33°-E

規模；19.6m×1.0m 深さ；0.12~0.25m 断面形態；箱形

埋土；黄灰色土

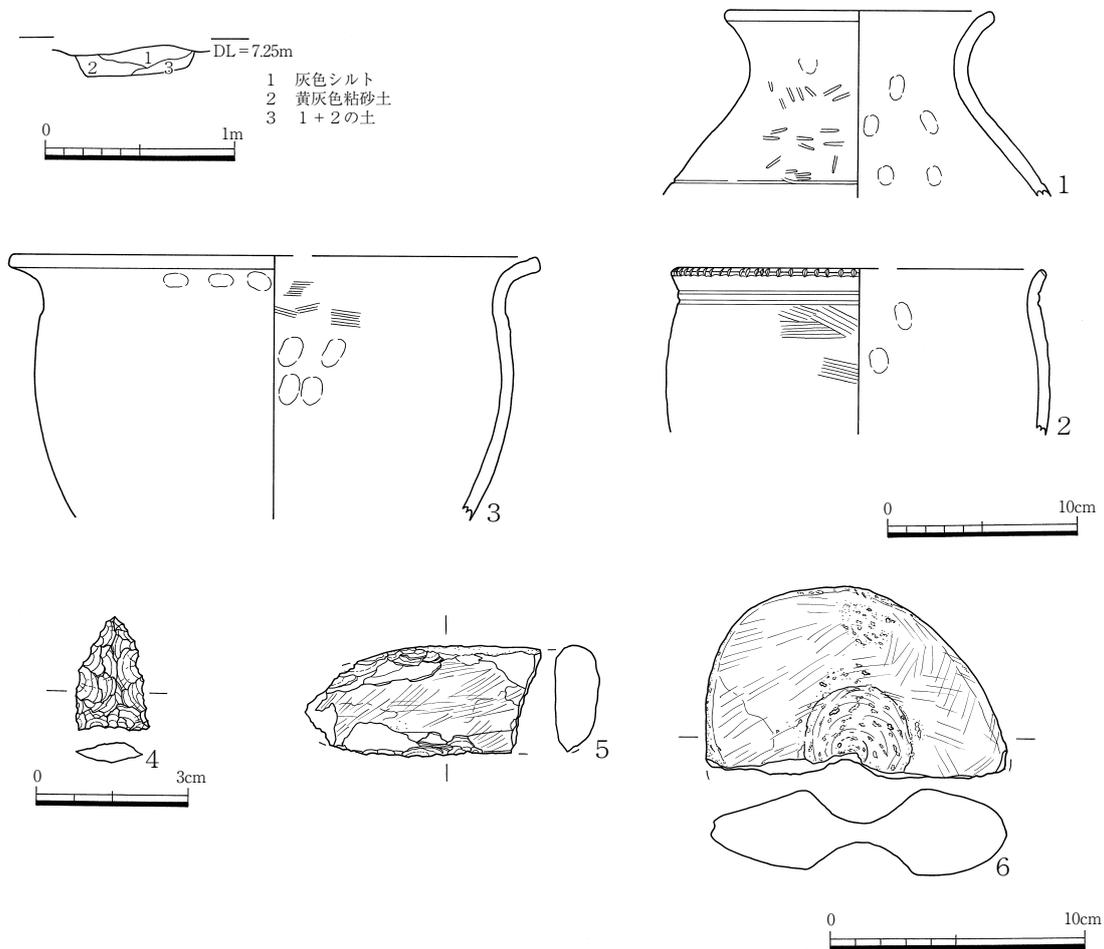
床面標高；7.1m~7.2m

接続；C1SD105

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、石器(石鏃、石鎌、環状石斧)

所見；調査区西端部、流路跡落ち口より上の黄褐色土から検出した。検出標高は7.3mである。

SD310 はC1 区で検出したSD105 の北側へ延びる部分の延長であり、規模、埋土、出土土器の時期も同一でI-2~3 期の環濠の一部である。北側に延びるが、流路が最も西側に入り込み浅瀬状になる部分で一度開口し、再度、黄褐色地山が現れた部分から更に北側に延びている。



C3-21 図 C3-97SD310

3. C3 区弥生時代中期末～後期の遺構と遺物

概要

C3 区の遺構の時期は概ね、弥生前期～中期、弥生中期末～後期、古代～近世の 3 時期に分かれる。弥生中期末～後期の遺構は前期の遺構が黄褐色地山を遺構検出面として検出されているのに対して、流路跡埋土である灰褐色土から検出した。検出した遺構は住居跡と土坑、ピット、溝跡である。

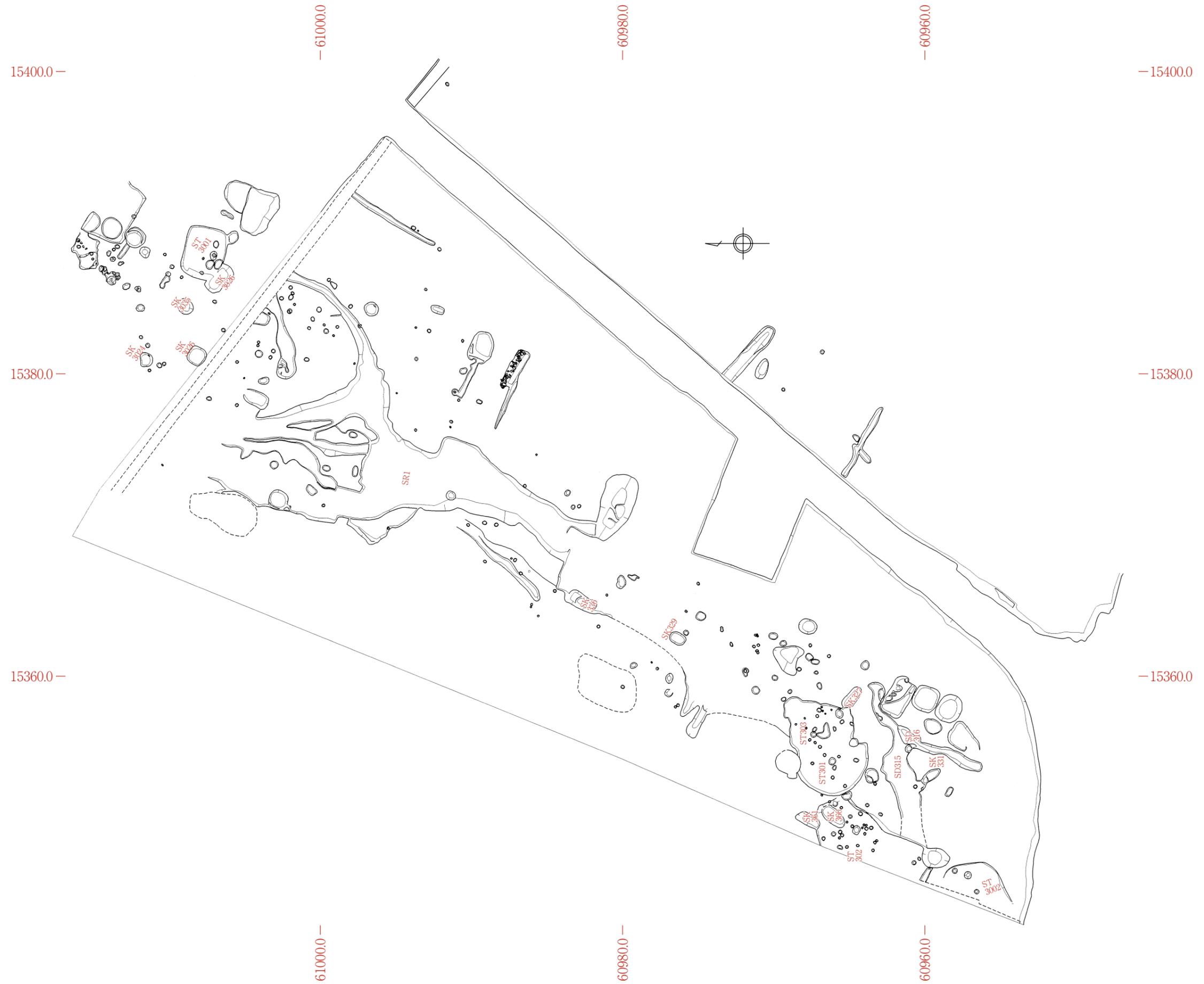
遺構の埋土は褐色土でやや粘性を帯びたものが多く、遺構検出面になっている流路跡埋土の灰褐色土と大きな差異はなかった。このため、検出、掘削作業は困難で遺構の平面形は不整形で輪郭の弱いものが多かった。

住居跡は 5 軒を検出した。いずれも流路跡埋土部分から検出したが、ST3001 を除いて黄褐色地山が存在する落ち口付近に位置しており、調査区南側からの検出である。遺構の残存状況は不良で出土遺物は少ないが、凹線文やくの字で素口縁の甕口縁が出土しており、住居跡は中期末から後期の可能性が高いと考えられる。

土坑は検出時可能性が考えられたものは多かったが、ほとんど不整形なシミ状のものであった。最終的に 35 基を土坑として確認したが性格が判明できるものはほとんどない。

溝跡、流路跡は調査区南側の SD315、316 と調査区北側の流路跡 SR1 を検出した。SD315・316・SR1 とも自然の流路跡と考えられ、平面形、断面形ともに安定しない。南部の SD315、316 の埋土は流路跡埋土よりやや粘性を帯びたもので、埋土中から出土する土器の時期幅は広いが、素口縁でくの字に屈曲する甕口縁が出土しており、後期に最終埋没したものと考えられる。SR1 は、黒褐色の埋土で、Ⅱ期を中心とした遺物が多量に入っており、1 個体がつぶれたような状態の出土状況を示すものも多く、流路跡が埋没し低地状になっていた可能性が考えられる。不整形な溝跡は低い水たまりから流れた痕跡の可能性が考えられる。

検出遺構 住居跡 5 軒 土坑 35 基 自然流路 3 条



C3-22 図 C3区弥生時代中後期遺構全体配置図(S=1/250)

(1) 竪穴住居跡

住居跡は5軒を検出した。ST301~303は1997年度調査で検出した。調査区南側の黄褐色地山の落ち口近くの流路跡埋土部分から一部は黄褐色地山を掘り込む状態で検出した。遺構の残存状況は流路跡SR1埋土部分では不良であった。出土遺物は少なく凹線文、くの字で素口縁の甕口縁細片が出土している。

ST3001・3002は1999年度調査で確認した住居跡である。ST3001は他の住居跡と異なり、調査区北側の流路跡中央部の埋土上から検出した。平面形は小型の方形である。ST3001は検出場所の状況、規模、平面形ともに他の住居跡とは異なっている。

C3-2表 C3区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
C3ST301	4.5 × [3.2]	0.15	[15.9]	円形	N-61°-W	弥生IV-2~V-1	
C3ST302	5.8 × [5.8]	—	[26.4]	円形	N-71°-W	弥生V	
C3ST303	4.2 × [2.8]	0.15	[11.7]	円形	N-9°-E	弥生IV-2~V-1	
C3ST3001	3.5 × 2.7	0.2	[11.7]	長方形	N-75°-W	弥生V~	
C3ST3002	[4.5] × [3.4]	0.05	—	円形	—	弥生V~	

C3-97ST301 (C3-23・24図)

時期：弥生IV-2~V-1 形状：円形 主軸方向：N-61°-W

規模：4.5m × (3.2)m 深さ：0.15m 面積：(15.9)m²

埋土：暗茶褐色土

ピット：数8 主柱穴数：3 主柱穴：P15、16、17

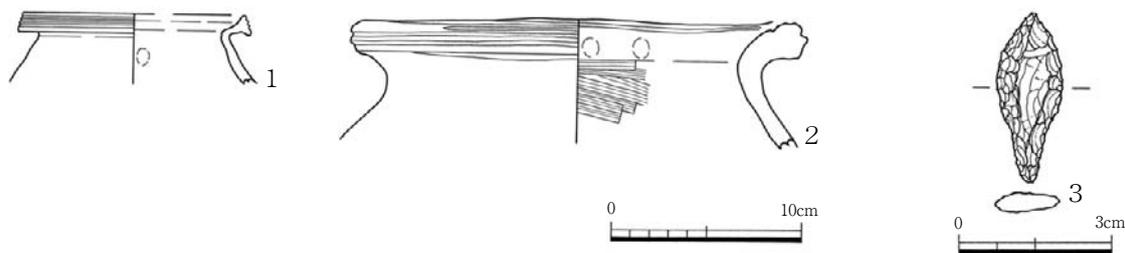
床面：1面 貼床：無 焼失：無

中央ピット：形状 楕円形 規模 50cm × 40cm 深さ 15cm 埋土 褐灰色粘質土

壁溝：無

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、石器(石鏃)

所見：調査区南部西側で検出し、検出標高は7.0mである。遺構は暗灰褐色土の流路跡埋土と考えられる面から検出した。最初の平面確認では輪郭がはっきりせず、不整形なシミ状で遺構の確認が行えなかった。その後、調査区西端部を拡張したため、西側壁が黄褐色地山を弧状に切り込んでいることが判明し住居跡と確認できた。東側は不整形で別遺構と切り合っていると考えられたが判然



C3-23図 C3-97ST301



- 1 暗茶褐色粘土質土 ST3001部分
- 2 暗(黒)褐色粘質土 ST3003部分
- 3 暗(黒+灰)褐色粘砂質土
- 4 暗灰色粘砂質土
- 5 黄(茶)褐色粘質土(地山)

- 1 暗(黒)褐色粘質土
- 2 暗灰褐色粘砂質土



C3-24 ☒ C3-97ST301・303

としなかった。しかし、断面観察と埋土掘削により、東側部分に平面形が長方形のST303が存在することを確認した。

埋土は流路埋土と考えられる暗灰褐色土より茶色がかり粘性が強いものであった。埋土掘削後、床面から確認できた遺構は、中央ピットとピット8個であった。埋土は褐灰色土である。支柱穴はP15~17の可能性が高く4本柱の構造が考えられる。

出土遺物は掘削、取り上げ時、ST303部分の分離が行えなかったため、ST303の遺物が混在している。出土土器は図示できる遺物は少なく、残存も不良であるが凹線文が施された土器が2点出土している。また図示できなかったが、高杯で杯口縁端部が内湾するものが出土している。土器の時期はIV末~V期前半と考えられる。

切り合い関係では断面観察からST301は東側のST303を切っている可能性が高く、ST303がIV期末~V期初頭に営まれ、引き続いてST301が営まれたと考えられる。また西側はST302と切り合っているが前後関係は不明である。

C3-97ST302(C3-25 図)

時期：弥生V-1 **形状**：(円形) **主軸方向**：N-71°-W

規模：5.8m **深さ**：0.2m **面積**：(26.4)m²

埋土：暗褐色土

ピット：数 25 **支柱穴数**：19 **支柱穴**：—

床面：1面 **貼床**：無 **焼失**：無

中央ピット：**形状** 楕円形 **規模** 60cm×45cm **深さ** 25cm **埋土** 暗褐色土

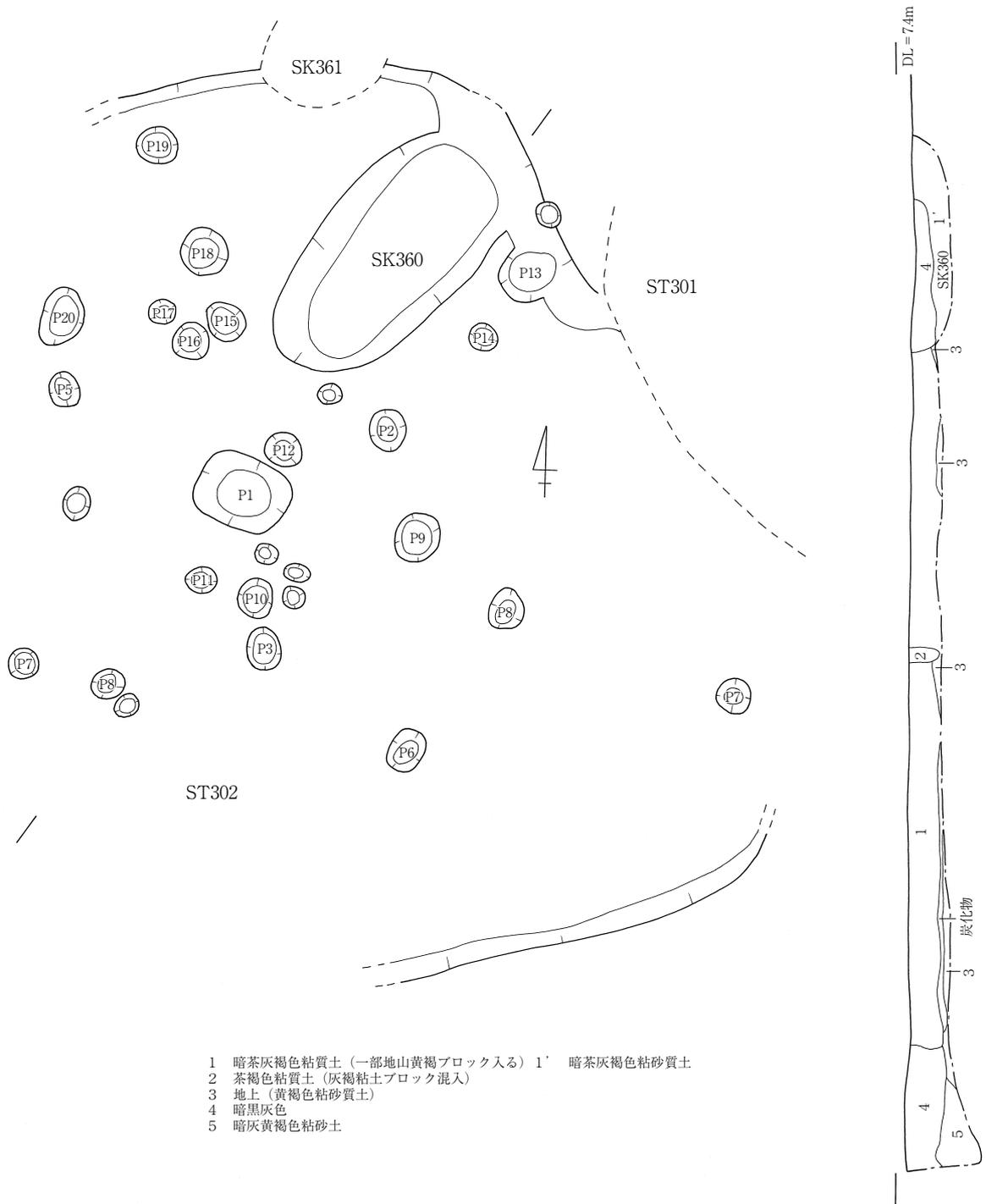
壁溝：無

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区南部西側の現況水路跡部分でC3区空港本体部分掘削後、拡張部分として調査した部分から検出したため、両側はすでに掘削されており、残存は不良であった。黄褐色地山を弧状に掘り込んだ部分がわずかに残存しており住居跡と確認できた。遺構東側の流路跡埋土を掘り込み作られている部分は埋土の差異が確認できず流路跡埋土として掘削されていた。検出標高は7.0mである。

埋土は残存不良で一部をのぞいて埋土掘削を行わずに床面遺構検出ができる状態であった。床面と考えられる部分から検出できた遺構は中央ピットと考えられるP1とピット25個である。埋土は暗褐色粘質土である。住居跡と考えられる範囲から検出した支柱穴となりうるピットは19個で、柱の構造を復元することはできなかった。

埋土中から出土した遺物は少なく図示できる遺物もなかった。わずかに出土した土器は、時期幅が広く流路跡埋土のものも含まれるが、口縁端部に凹線文が施されたものや凹面のものがみられる。これらがST302に属するものと考えられ、ST302は後期初頭の住居跡の可能性が高いと考えられる。ST301とST302は遺構の推定範囲が重複し、切り合い関係にあるが、埋土の残存が不良であるため直接先後関係を判断することはできない。しかし、出土土器やST303との関係からST302



- 1 暗茶灰褐色粘質土（一部地山黄褐ブロック入る）1' 暗茶灰褐色粘砂質土
- 2 茶褐色粘質土（灰褐粘土ブロック混入）
- 3 地上（黄褐色粘砂質土）
- 4 暗黒灰色
- 5 暗灰黄褐色粘砂土



C3-25 ☒ C3-97ST302

が先行する可能性が考えられる。

他の遺構との関係ではSK361、SK360 はいずれも土器出土は少なく時期確定が困難であるが埋土の状況ではST302 を切っている可能性が高く、ST302 が先行する可能性がある。

C3-97ST303 (C3-24 図)

時期；弥生IV-2~ **形状**；長方形 **主軸方向**；N-9°-E

規模；4.2m×(2.8)m **深さ**；0.15m **面積**；(11.7)m²

埋土；暗褐色土

ピット；数 18 **主柱穴数**；18 **主柱穴**；—

床面；1面 **貼床**；無 **焼失**；無

中央ピット；**形状** 不整形 **規模** 100cm×100cm **深さ** 15cm **埋土** 暗褐灰色土

壁溝；無

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)

所見；調査区南部西側で検出し、検出標高は7.0mである。遺構は暗灰褐色土の流路埋土と考えられる面から検出した。最初の平面確認では不整形でST301の一部と考えられたが、断面観察と埋土掘削により、別遺構と確認できST302とした。

埋土は流路埋土と考えられる暗灰褐色土より茶色がかり粘性が強いものであった。埋土掘削後床面から確認できた遺構は、中央ピットとみられるP13と杭状の小ピットを含むピットが18個である。杭状の小ピットを除く9個のピットが主柱穴と考えられるが柱構造は不明である。

出土遺物は掘削、取り上げ時、ST303部分の分離が行えなかったため、ST301の遺物が混在している。出土土器では図示できる遺物は少なく、残存も不良であるが凹線文が施された土器が2点出土している。また図示できなかったが、高杯で杯口縁端部が内湾するものが出土している。土器の時期はIV末~V期前半と考えられる。

切り合い関係は断面観察からST303はST301に切られている可能性が高く、ST303がIV期末~V期初頭に営まれ、引き続いてST301が営まれたと考えられる。

C3-99ST3001 (C3-26 図)

時期；弥生V~ **形状**；長方形 **主軸方向**；N-75°-W

規模；3.5m×2.7m **深さ**；0.2m **面積**；(11.7)m²

埋土；黒褐色土

ピット；数 4 **主柱穴数**；1 **主柱穴**；P1

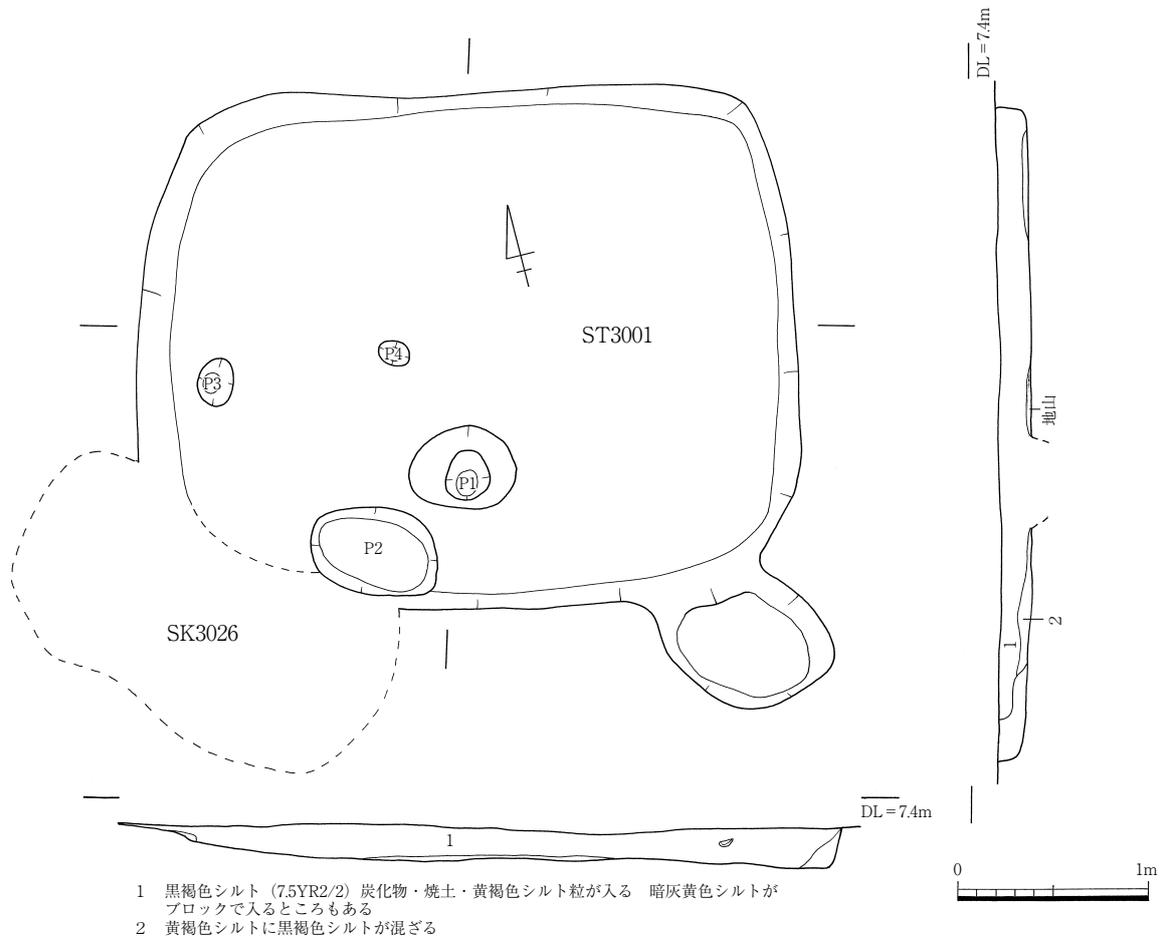
床面；1面 **貼床**；無 **焼失**；無

中央ピット；無

壁溝；無

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；1999年度調査部分で検出した。ST3001はC3区北側中央部の流路跡埋土を検出面として、



C3-26 図 C3-99ST3001

SK3026 と切り合った状態で検出した。平面形は 3.5m×2.7mの小型長方形である。検出標高は約 7.3mであった。

遺構埋土は黒褐色土で炭化物、焼土、黄褐色土が混じったものであった。床面からは杭状の小ピットを含めて 4 個のピットが確認されており、P2 は炭化物が周辺で検出している。

埋土中から出土した遺物は土器細片のみで、量も少なく図示できるものはなかった。出土した土器では素口縁とみられる口縁細片が 10 点出土したほか、如意形口縁、逆L状口縁の細片、口縁内面に扁平な貼付突帯がみられる壺口縁細片など前期末~中期前半の土器が出土している。

ST3001 の時期は出土土器は前期末~中期前半の土器が占める割合が高いものの、流路跡埋土中からも多量に同時期の土器が出土しているため、ST3002 の時期を反映している可能性は低いと考えられ、素口縁の時期がST3002 の時期の可能性が高いと考えられる。

規模から土坑の可能性も考えられるが、しっかりしたピットを検出し、床面から炭化物も検出しているため住居跡もしくは作業用の小竪穴の可能性が考えられる。

C3-99ST3002 (C3-27 図)

時期：弥生V~ 形状：不整形円形 主軸方向：—

規模：(4.5) × (3.4)m 深さ：0.05m 面積：
(16)m²

埋土：黒褐色土

ピット：数3 主柱穴数：2 主柱穴：—

床面：1面 貼床：— 焼失：—

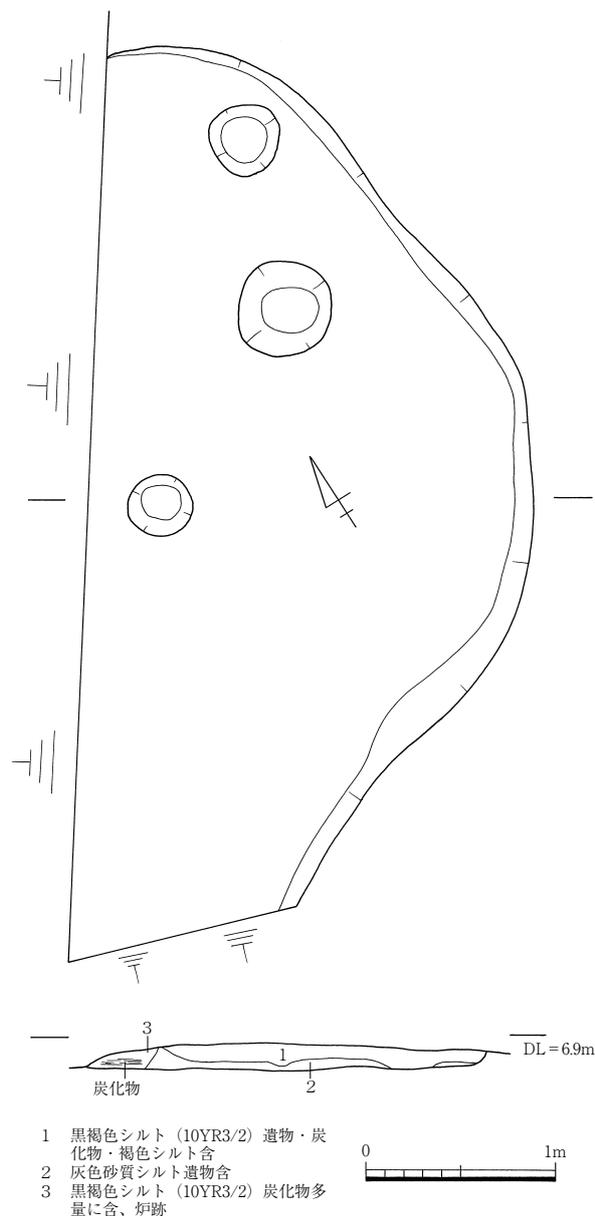
中央ピット：1 形状 円形 規模 35cm ×
35cm 深さ 10cm 埋土 黒褐色土炭化物多
く含む

壁溝：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：99年度調査で検出した。検出した部分
は1997年度も調査が行われた部分である
が、南端部に相当し十分な精査が行われて
いなかったため、99年度再度検出作業を行
い確認した。明瞭な平面プランは確認できな
かったが、炭化物を含んだ部分がみられ、そ
の中央部に炭化物が集中するピットが検出で
きたため、住居跡と確認した。検出面は流路
跡埋土である暗褐色土で、検出標高は約6.8m
である。検出時の平面形は西半分を調査区に
よって切られており半円形で、残存する東側
も不明瞭で不整形であった。

埋土の残存は不良で、約5cmしか残存し
ていなかった。埋土下から検出した遺構は
ピット2個と炭化物を多く含む中央ピットで
ある。埋土中から出土した遺物は少量の土器
のみで、図示できるものはなかった。出土し
た土器では、凹線文がみられる口縁部、凹面
状の口縁部の細片が出土している。また、貼
付口縁4点が出土している。ST3002の時期
は凹面状の口縁の時期の可能性が高く、後期
前半の可能性が考えられる。残存は不良であ
るが、C3区南側では1997年度調査で住居跡
が確認されており、一連の住居跡と考えられ
る。



C3-27 図 C3-99ST3002

(2) 土坑

土坑は検出時可能性が考えられたものは多かったが、ほとんど不整形なシミ状のものであった。最終的に 35 基を土坑として確認したが性格が判明できるものはほとんどなく、土坑一覧表を掲載する。

C3-3 表 C3 弥生時代中期土坑一覧

遺構番号	年度	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋 土	切 合 関 係	時 期	備 考
C3SK327	97	楕円形	U字状	1.65	0.75	33	N-55°-W				
C3SK329	97	楕円形	直角三角 形状	1.1	0.75	24	N-55°-E				
C3SK331	97	楕円形	逆台形	1.45	0.65	20	N-37°-W		SD315 と切り合う		SD315 の一 部の可能性
C3SK336	97	長方形	2 段	2.0	0.9	37	N-24°-E			V期~	
C3SK347	97	—	—	—	—	—	—				シミ状消滅
C3SK348	97	[円形]	逆台形	0.7	[0.4]	12	N-74°-E		ST301、302		
C3SK350	97	—	—	—	—	—	—				シミ状消滅
C3SK360	97	楕円形	箱形	2.0	0.9	12	N-40°-E	暗黒灰色	ST302 を切る	V期~	
C3SK361	97	楕円形	箱形	1.6	0.75	34	N-40°-E		ST302 と切り合う	V期~	
C3SK3024	99	不整円形	箱形	0.95	0.8	25	N-90°-E	黒褐色埴土			
C3SK3026	99	長方形	箱形	2.1	1.2	25	N-90°-E	黒褐色埴土 に黄褐色土 混じる	ST3001 を切る	中世	
C3SK3035	99	方形	箱形	1.1	0.95	25	N-56°-W			II期の可能性	
C3SK3036	99	楕円形	箱形	1.15	1.15	15	N-31°-W	黒褐色土		II期の可能性	

4. C3 区上面検出の遺構と遺物

概要

C3 区上面では古代以降、近世の遺構を中心に確認しており、弥生時代の遺構も混じっている。検出した遺構は土坑、ピット、溝跡、集石遺構である。遺構は黄褐色地山部分と流路跡埋土部分で偏りはみられない。

土坑は 30 基を確認している。土坑埋土からはいずれも弥生土器が出土しており、中世、近世の土器が混じるものがみられる。調査区北部で検出した土坑は遺構の掘り込み面から古代以降の遺物が出土しており近世の可能性が高く、南部で検出した土坑は不整形なものを除き弥生時代の可能性が考えられる。

ピットは 5 種類の埋土を確認している。弥生時代の流路跡の埋土が遺構掘り込み面になっているため、ほとんどのピットからは弥生時代の土器が出土しており、埋土の色調の差違によって時期を確定することは困難であった。ピットの分布は調査区北部と南部に偏在しており、中央部には少ない状況であった。調査区は現況の耕作地以前は南北 2 区画の屋地であったことがわかっている。また、古代に属する遺物は非常に少なく、細片のみであった。中世の遺物は煮炊具細片は一定量出土しているが供膳具である杯はほとんど出土してない。このことから、古代、中世の建物跡の存在の可能性は低いと考えられ、検出したピットは弥生時代と近世の可能性が考えられる。検出面から近世屋地に関係したものの可能性が高いと考えられる。

溝跡では調査区東側で調査区を南北に縦断する SD301~303 を検出した。SD301~303 お互いに肩を切り合い並行した状態で検出した。調査区東端部では現在使われている用排水路があり、検出した溝跡と並行している。溝跡はもっとも西側で検出した SD303 が古代、続いて SD302 は中世、SD301 は中世後期、現況水路は近世以降と時期が新しくなるに伴い東側へ移動している。SD301~303 の方向は、田村地域の区画方区とは異なるもので、屋敷などの区画を意図したものでなく自然地形を利用した用排水用の溝の可能性が考えられる。

その他、溝跡に沿うように人頭大の円礫が集中する部分を 2ヶ所検出している。性格が不明の SX301・302 として報告しているが、水辺の施設の可能性が高いと考えられる。

検出遺構 土坑 30 基 溝跡 3 条 集石遺構 2 基

(1) 溝跡

C3-01SD301(C3-29 図)

時期；中世～ **方向**；N-50°-E

規模；12.0m×2.2m **深さ**；0.4m **断面形態**；U字状

埋土；灰色粘土

床面標高；6.1~6.3m

接続；—

出土遺物；陶磁器(備前焼、播磨型鍋、瓦器羽釜)、木器(黒漆塗り下駄)

所見；調査区東部の現況水路に沿って検出した。一部は現況水路と重なって南北方向に延びる溝跡である。北側ではSD302を切った状態であった。検出標高は約6.5mである。

埋土は濁った灰色粘土で、埋土中からは近世とみられる陶磁器も出土するが、多くは中世の土器であり、播磨型鍋の口縁部や備前焼播鉢が出土している。黒漆の下駄が出土しており田村城館との関係が注目される。SD301は中世の溝跡の可能性が高いと考えられ、同じく中世と考えられるSD302とはあまり時期差はないものと考えられる。

北側2ヶ所で検出した集石遺構はSD301と隣接しておりSD301に関係する遺構の可能性が考えられる。SD301は田村城館の堀跡とは方向が違ふことや、現在も用排水路が同じ場所で同一方向に流れることから、用排水路として使用されたものと考えられる。

C3-01SD302(C3-29 図)

時期；中世～ **方向**；N-50°-E

規模；45m×1.0m **深さ**；0.3m **断面形態**；—

埋土；灰色粘土

床面標高；6.0~6.3m

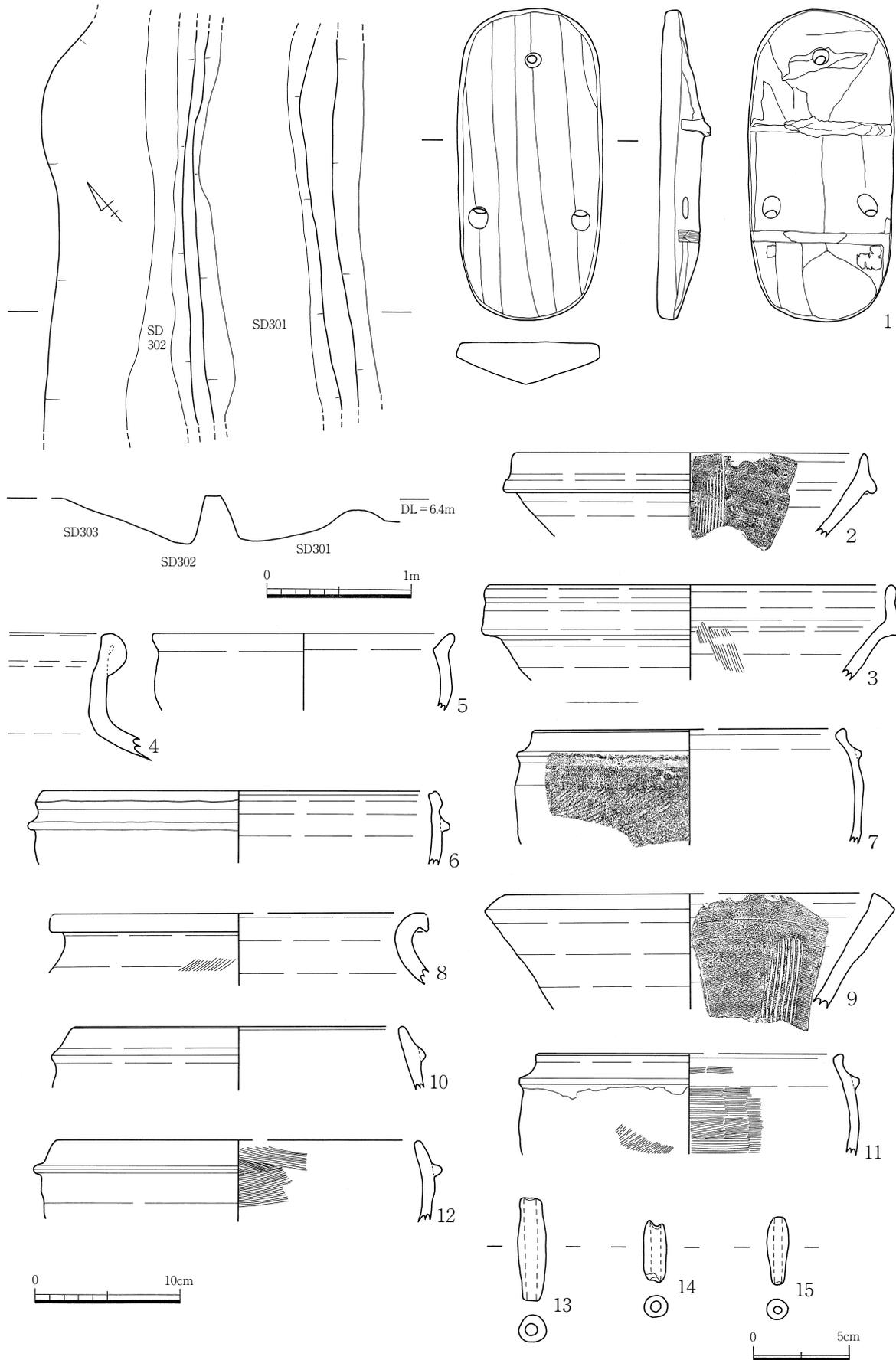
接続；—

出土遺物；陶磁器(備前焼、播磨型鍋、瓦器羽釜)

所見；調査区東側でSD301と並行し重複した状態で検出し、東側肩はSD301に切られる。調査区北側では集石遺構SX302に切られている。検出規模は延長45m、幅約1.0mで、深さ約30cmである。

埋土は灰色粘土で、下層は砂が堆積している状態であった。埋土中からは瓦質の羽釜、播磨型の土師質鍋、備前焼播鉢など中世の遺物が出土しており15世紀代が考えられる。

SD302の性格は、前回の1次調査で確認された田村城館濠跡とは方向、規模が異なっており、田村城館やそれに伴う屋敷の区画溝の可能性は低いと考えられる。SD302とほぼ同一方向に延びる現況水路が存在することからSD302も用排水路として利用された可能性が考えられる。



C3-29 図 C3-01-SD301~303

C3-01SD303(C3-29 図)

時期：古代末 方向：N-50°-E

規模：45m×1.0m 深さ：0.3m 断面形態：U字状

埋土：灰色粘土

床面標高：6.0~6.3m

接続：—

出土遺物：須恵器、青磁

所見：調査区東側でSD302 とほぼ重複した状態で検出し、床面、東側肩とも切られ、確認できたのは西側肩のみであった。検出延長は 55mであるが、調査区を縦断していたと考えられる。

埋土は明灰褐色土で、下層は灰色砂礫土になっていた。埋土中からの遺物の出土は少なく細片のみである。青磁、須恵器が出土しており平安末~鎌倉時代と考えられる。

遺構の性格は、残存する西側肩部も検出時不明瞭で、断面形も安定していないことから自然地形を利用した水路の可能性が高いと考えられる。

(2) 性格不明遺構

C3SX301(C3-30 図)

時期：中世~ 方向：N-30°-W

規模：4.5m×1.5m 深さ：— 断面形態：—

埋土：灰色粘土

標高：6.8~6.9m

出土遺物：青磁

所見：1999 年度調査で調査区北東隅から検出した。東側は現在の水路に切られている状態であった。平面形は直角三角形状で、直線部分からほぼ直角に曲がる角部が残存する。検出した集石は粗密がみられ、角部付近に密集がみられるが、ほとんど石が検出されない部分が存在している。検出した石は約 20cm~30cmの円礫が中心で 80cm×36cmの大きな板状の石も検出している。石が密集する部分では、人頭大の石の間には小さい石が入り安定した状態であったが、石は積まれた状態でなく、多い部分でも 3 個が重なる程度であった。東側際の直線的に石が並んでいる部分でも杭等はみられなかった。護岸などを意識した石積みの構造物の可能性は低いと考えられる。

集石中から出土した遺物はほとんどないが、青磁で獣面が施されたと思われる把手または脚の一部とみられる 1 が出土している。SX301 の時期は須恵器が含まれる黄灰色土から掘り込まれていること、SD301 に伴う可能性が高いと考えられることから中世以降とみられる。

C3SX302(C3-30 図)

時期：中世~ 方向：N-72°-E

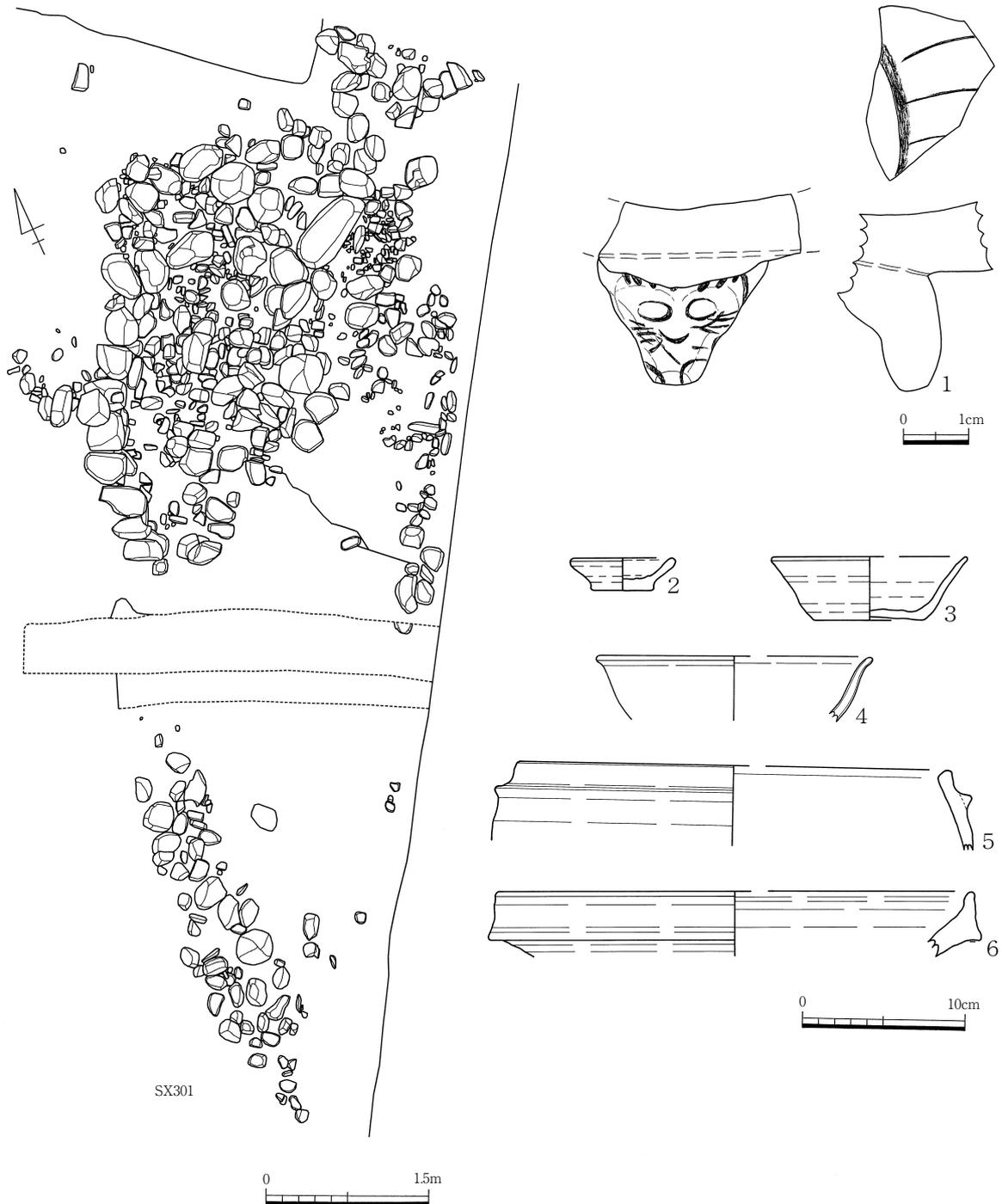
規模：6m×2.5m 深さ：— 断面形態：—

埋土：灰色粘土

床面標高：6.0~6.3m

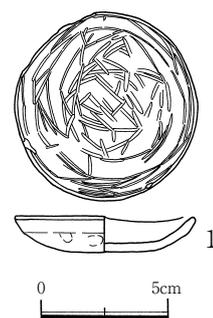
出土遺物：白磁、青磁、土師質土器、瓦質羽釜

所見：SD301 に隣接して張り出すように人頭大の円礫が集中して出土し、SD302、SD303 を切り込んでいる。円礫の範囲は 6m×2.5m で平面形は不整形な楕円形であった。礫は隙間なく密着した状態で約 20cm 大の円礫が入るが、積み上げられたものでなく黄灰褐色土の比較的安定した上に 2 層から一部 3 層にのる状態であった。集石に伴う杭等はみられなかった。



C3-30 図 C3SX301・302

集石中からは白磁IV類や青磁などの古代末~中世初頭の遺物が出土するが、15世紀代以降の播磨型鍋や土師質杯C類なども出土している。古代末~中世初頭の遺物は集石が切り込んだSD302、SD303に属する可能性が考えられ、集石は15世紀代以降、SD301に付属する可能性が高いと考えられる。



C3-31 図 C3-97P3225

C3-4 表 C3 区中世土坑一覧

遺構番号	年度	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C3SK301	97	楕円形	—	0.6	—	17	N-18°-W	褐灰色土		不明	
C3SK302	97	楕円形	—	0.75	—	5	N-0°-E	褐灰色土		不明	
C3SK303	97	楕円形	—	0.95	—	10	N-51°-E	褐灰色土		不明	
C3SK304	97	楕円形	—	0.75	—	10	N-67°-W	褐灰色土		弥生IV~	
C3SK305	97	長方形	—	0.5	—	0.8	N-53°-W	褐灰色土			弥生細片
C3SK306	97	円形	—	1.15	—	5	—	褐灰色土			弥生口縁有り
C3SK307	97	不整形	—	3.6	1.25	—	N-64°-W			中世の可能性	完掘時消滅 細蓮弁青磁、土師器、備前甕
C3SK308	97	長方形	—	1.15	0.7	33	N-74°-W				
C3SK309	97	楕円形	—	0.8	0.4	—	—				消滅 弥生底部
C3SK310	97	長方形	—	[0.8]	0.5	—	—		SD301 に切られる	弥生IV~ 中世の可能性も	消滅 凹線文鉢、凹線文高坏脚、瓦器
C3SK311	97	不整形	—	4.6	2.2	67	N-64°-W			中世の可能性	人頭大石投げ込み
C3SK312	97	不整形長方形	—	1.0	0.6	10	N-25°-E	明灰褐色土			弥生口縁 2
C3SK313	97	楕円形	—	2.3	0.9	15	N-64°-W	灰褐色土			弥生細片
C3SK314	97	楕円形	—	0.95	0.85	18	N-0°-E	灰褐色土		弥生V~	弥生甕口縁、蓋
C3SK315	97	長方形	—	1.6	0.95	17	N-14°-W	褐灰色土	P3149 と切り合う		弥生細片
C3SK316	97	不整形	—	1.6	1.4	10	N-5°-W	灰褐色土			貼付口縁 2、素口縁 1
C3SK317	97	長方形	—	1.5	0.9	7	N-67°-W	灰褐色土	ピットと切り合う	弥生V~	貼付口縁 2、上下拡張
C3SK318	97	不整形長方形	—	1.5	0.75	8	N-34°-E	灰褐色土		弥生V~	弥生口縁有り、上下に拡張気味
C3SK319	97	楕円形	—	1.35	1.2	30	N-85°-E	褐灰色土			弥生口縁有り、素口縁
C3SK320	97	不整形	—	—	—	—	—				前期環濠の開口部の可能性
C3SK321	97	—	—	—	—	—	—				欠番
C3SK322	97	円形	—	1.7	1.6	—	44	褐灰色土	ピットと切り合う		砥石、播磨鉢
C3SK323	97	不整形	—	—	—	—	—	灰褐色土	SDと切り合う	19世紀中心	近世陶磁
C3SK324	97	不整形	—	3.4	0.6	9	—				SDの落ち口の可能性
C3SK325	97	長方形	—	0.95	0.65	19	N-43°-E				
C3SK326	97	楕円形	—	—	—	—	—				消滅
C3SK327	97	楕円形	—	—	—	—	—				流路跡の一部と考える。消滅

C3-5表 C3区中世ピット一覧

遺構番号	柱穴形	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土	柱根/ 有・無	出土遺物 (点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
C3P3009	長方形	45×40	21				弥生細片		
C3P3010	円形	25	5	灰色土			弥生細片		
C3P3011	楕円形	35×30	5、12	灰色土			弥生細片		底面2段
C3P3012	円形	25	10	灰色土			弥生細片		
C3P3014	円形	25	14	灰色土					
C3P3015	円形	20	10				弥生時代II期		
C3P3018	円形	25	11				弥生細片		
C3P3019	円形	20	16				弥生細片		
C3P3020	楕円形	30×20	4	灰色土			弥生細片		
C3P3031	円形	25		淡灰黄色土			弥生細片		
C3P3032	円形	30	4	褐灰色土			弥生時代II期 タタキ石		P、SDと切り合う
C3P3033	円形	20	4	褐灰色土					小P
C3P3034	円形	25	12	褐灰色土			弥生細片		
C3P3035	楕円形	40×35	9				弥生細片		P3040、57と一緒に なる
C3P3036	円形	20	7				弥生土器胴部 1/2 残		3104 とだぶる
C3P3037	円形	30	13	褐灰色土					
C3P3039	円形	30	12	褐灰色土			弥生細片		
C3P3040	楕円形	30×15	3	褐灰色土			弥生細片		
C3P3041	円形	20	11				弥生細片 薄手土器 弥生時代II期		
C3P3042	円形	20	6	褐灰色土			青磁	中世	
C3P3043	楕円形	45×30	17	褐灰色土			須恵器または瓦器	古代・中世	
C3P3044	円形	25	16	褐灰色土					
C3P3045	楕円形	20×15	16	褐灰色土			弥生細片		不整形Pと切り合う
C3P3047	不整形	20	7	淡灰黄色土			弥生細片		
C3P3048	円形	48	7	褐灰色土			弥生細片		
C3P3049	楕円形	25×20	6				弥生細片		
C3P3050	円形	15	10	褐灰色土			弥生細片		
C3P3051	不整形	25×20	24				弥生細片		
C3P3052	円形	45	10	褐灰色土			弥生細片 26		底面2段
C3P3053	円形	25	3	褐灰色土			土師器	古代・中世	
C3P3054	円形	30	17	褐灰色土			土師器片	古代・中世	柱痕状有り
C3P3055	楕円形	35×30	4	褐灰色土			弥生細片		
C3P3056	楕円形	20×15	20	褐灰色土			弥生細片		
C3P3058	円形	25	5	褐灰色土					
C3P3060	円形	30	8	褐灰色土			弥生細片		
C3P3064	長方形	40×25	8	褐灰色土			弥生細片 薄手土器		
C3P3065	円形	30	10	褐灰色土			弥生細片		
C3P3066	円形	30	9	褐灰色土			弥生細片 薄手土器		
C3P3067	円形	25	4	褐灰色土			弥生細片 土器多		
C3P3068	長方形	40×20	3	褐灰色土			弥生細片 弥生時代II期		
C3P3069	円形	40	15						
C3P3070	円形	20	8	褐灰色土			弥生細片		P3035、57と一緒に なる
C3P3071	楕円形	25×20	1	褐灰色土			弥生細片		3094 とだぶる
C3P3072	楕円形	60×55	33	褐灰色土			弥生時代II期		
C3P3073	円形	20	9	淡灰黄色土			弥生細片		小ピットに切られる
C3P3076	円形	20	12				弥生細片		
C3P3077	円形	30	30	褐灰色土			弥生細片		P3078 を切る
C3P3078	円形	30	40	褐灰色土			弥生細片		P3077 に切られる
C3P3079	円形	20	6	褐灰色土			弥生細片		
C3P3079	円形	20	5	褐灰色土			弥生細片		
C3P3080	円形	25	7	褐灰色土			弥生細片		P3107 と切り合う
C3P3083	不整形	50	17				弥生細片		

遺構番号	柱穴形	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土	柱根/ 有・無	出土遺物 (点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
C3P3090	楕円形	30×25	24						SDと切り合う
C3P3091	円形	25	28				弥生細片		
C3P3092	円形	30	8						
C3P3097	円形	15	20				弥生細片		
C3P3098	不整形	25	32				弥生細片 貼付口縁 III期		
C3P3099	円形	20					弥生細片		3098 と同じ？
C3P3101	不整形	20	12				弥生細片 小型台付き鉢		
C3P3102	円形	20	7				弥生細片		
C3P3103	楕円形	25×20	7				弥生土器口縁 V期-		
C3P3107	円形	30	16						
C3P3108	円形	20	25				土師器？		
C3P3112	不整形	25	30				弥生細片		
C3P3112	円形	35	26				弥生細片		P3126 とだぶる
C3P3113	円形	25	16	褐灰色土			須恵器	古代	
C3P3114	楕円形	60×50	44	明灰褐色土			弥生細片 土師器	中世？	
C3P3115	円形	30	13	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3116	円形	20	3	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3117	円形	55	42	明灰褐色土			弥生細片多		
C3P3118	円形	30	32	明灰褐色土			弥生細片		SK316 を切る
C3P3119	楕円形	70×55	30	灰褐色土			弥生細片		
C3P3120	円形	50	34	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3121	円形	35	26	褐灰色土			弥生細片		
C3P3122	円形	30	18	灰褐色土			弥生細片		
C3P3123	楕円形	45×40	23	褐灰色土			弥生細片 弥生時代II期		
C3P3124	円形	55	17	褐灰色土			土師器皿 瓦器	中世 15世紀 前半	
C3P3125	楕円形	30×20	20	褐灰色土			弥生細片		
C3P3126	円形	40		灰褐色土					
C3P3127	楕円形	40×20 (15)	38				弥生細片		
C3P3128	楕円形	25×15	13	灰褐色土			弥生細片 弥生時代II期		
C3P3130	楕円形	40×30	32	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3131	円形	25	16	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3133	円形	50	26	明灰褐色土			弥生細片多 凹線文有り		
C3P3134	円形	50	10	灰褐色土			弥生土器口縁2		
C3P3135	円形	25	19	明灰褐色土			弥生細片 内面ケズリ 弥生IV~		
C3P3136	円形	20	11	灰褐色土			弥生細片		
C3P3138	円形	85	29	灰褐色土			弥生細片多		
C3P3139	円形	20	13	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3140	円形	15	10				弥生細片		
C3P3142	円形	35(13)	25	褐灰色土			近現代		柱痕
C3P3143	円形	30	10	褐灰色土			弥生細片		
C3P3145	円形	30	18	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3147	円形	45	24	灰褐色土			弥生細片		
C3P3148	円形	20	16	明灰褐色土			弥生細片		
C3P3149	円形	35	30	明灰褐色土			弥生細片		SK315 を切る
C3P3150	円形	30	24	褐灰色土			弥生細片		
C3P3151	円形	40	18	褐灰色土			弥生細片 播磨鍋 青磁	中世	
C3P3153	楕円形	30×25	13	灰褐色土			口縁端部上下キザミ		
C3P3154	楕円形	40×35	26	明灰褐色土			口縁端部上下キザミ 甕		
C3P3157	円形	30	20	褐灰色土			弥生細片		
C3P3160	不整形	50×35	49						
C3P3162	円形	25	12				弥生細片		
C3P3163	楕円形	35×20					弥生土器素口縁V期- 弥生細片		

C4区の調査



1. C4 区の概要

概要

本調査区は田村遺跡群の北部に位置し、環濠内に弥生時代前期の土坑群が広がる調査区である。環濠が2重に巡らされ、内濠は調査区の東部に流れる自然流路から分岐し西へ流れ、やがて西に隣接する調査区で北に向かって弧を描き緩やかにカーブする。本調査区は内濠の内側の中心部に当たり、弥生時代前期の土坑 132 基・環濠・溝 3 条・住居跡 2 軒、中世井戸 1・中世溝 1 条・ピット 200 個が検出されている。

弥生時代前期の土坑は2つのタイプに分かれる。一つは隅丸方形を呈し、深度を保つもの、もう一方は楕円形で比較的浅いものである。大壺一個体が床面から出土する土坑や完形の甕が4個体出土する土坑があり、一括性の高い良好な資料を出土している。石器についても、磨製石鏃や石鎌など、弥生時代前期を特徴付ける貴重な資料が出土している。

調査担当者 小野由香、小島恵子

執筆担当者 小島恵子が主に執筆し、出原恵三、筒井三菜が補助を行なった。

調査期間 平成 10 年 5 月 11 日~平成 10 年 7 月 31 日

調査面積 1,524m²

時代 弥生時代前期、中~後期・中世

検出遺構 竪穴住居跡 2 軒、土坑 132 基、溝 7 条、中世井戸 1、中世溝 1、ピット 200 個

2. C4 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本調査区では2軒の竪穴住居跡を確認している。

C4ST401(C4-2 図)

時期；弥生I-4~II 形状；方形 主軸方向；N-20°-E

規模；3.44m×2.64m 深さ；10cm 面積；9㎡

埋土；1層 黒褐色シルトに黄褐色シルトが入る 2層 黒褐色シルト

ピット；数12個 主柱穴数；不明 主柱穴；不明

床面；1面 貼床；無 焼失；無

中央ピット；不明

壁溝；—

出土遺物；弥生土器(壺)、磨製石鏃、チャート剥片

所見；調査区の中央部に位置する。上面が削平を受け浅い。中央ピット・主柱穴は不明で、南部に多数のピットが集中する遺構群が隣接し、ピットを性格付けることは困難である。遺物は前期壺底部(1)と磨製石鏃(2)が出土している。遺物はI-2~3期の土器が多く見られるが、明らかに前期末~中期前葉の破片も認められる。小型であり竪穴住居であるかどうか疑わしい。

C4ST402(C4-2 図)

時期；弥生I-4~II 形状；方形 主軸方向；N-25°-W

規模；3.1m×1.94m 深さ；18cm 面積；6㎡

埋土；1層 灰褐色シルト 2層 黒褐色シルト

床面；1面 貼床；無 焼失；無

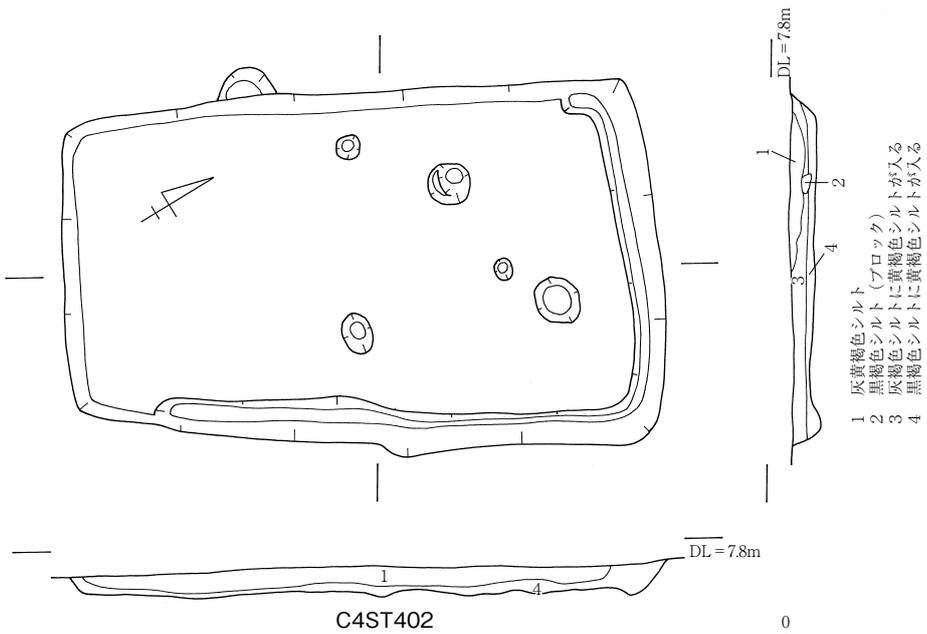
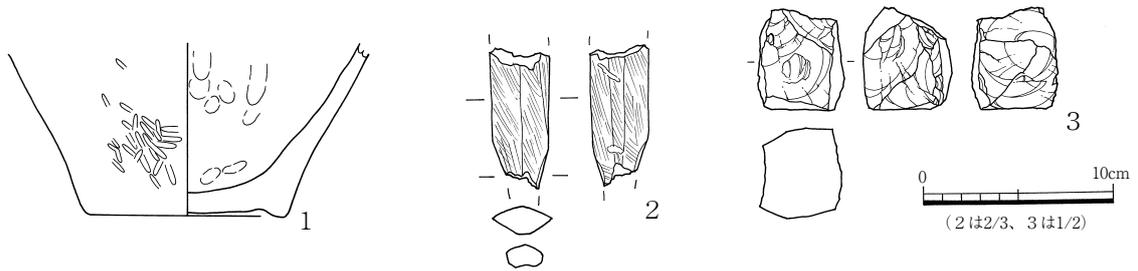
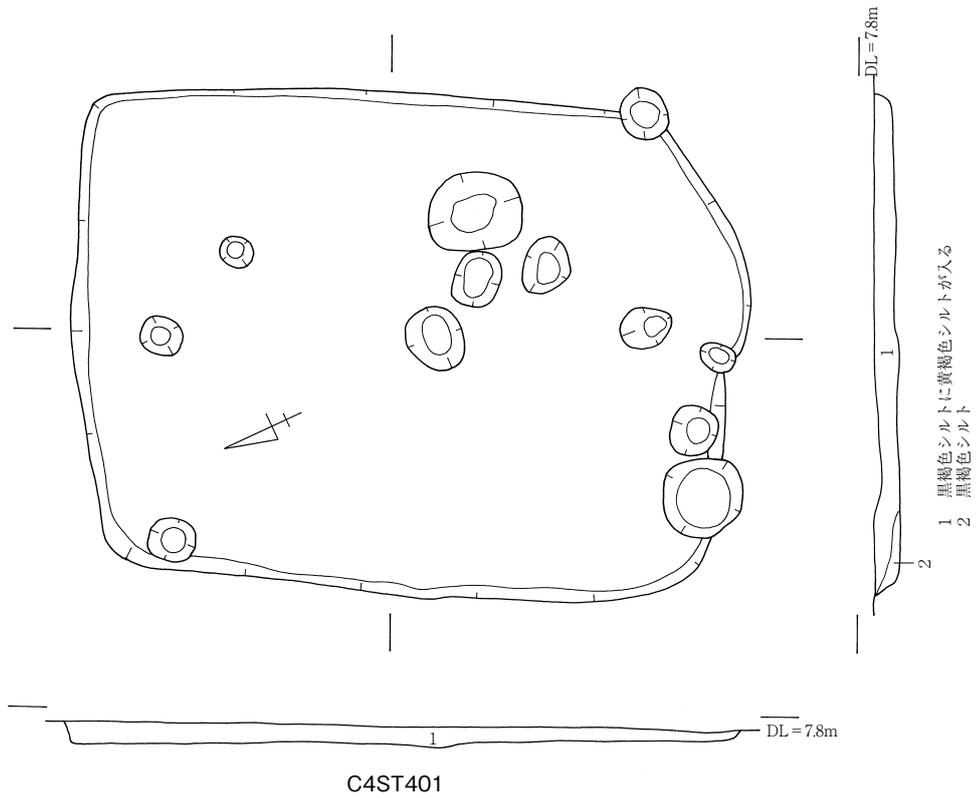
ピット；数5個 主柱穴数；不明

中央ピット；—

壁溝；数1 幅；10cm前後 深さ；5cm

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の南部に位置する。北・東壁に幅10cm前後、深さ5cmの壁溝が巡る。床面は凹凸があり、小ピットが5個見られるが主柱穴等は不明である。規模が著しく小さく竪穴住居かどうか疑わしい。出土土器はI-3期のものが多いが、ST401と同じように前期末~中期前葉の土器も認められる。



C4-2 ☒ C4ST401・402(ST401 : 1・2、ST402 : 3)

(2) 土坑

土坑は132基を数える。弥生時代前期の環濠内に位置し、弥生時代前期の土坑が105基・中期(弥生IV)が1基である。この中から44基の土坑について述べる。前期土坑の中には、I-2、I-3期の良好な一括遺物を蔵するものが多く、土器編年を編む上で基準資料となる。また大陸系磨製石器も多く含まれている。これらの資料は質・量ともに他地域に例を見ない充実した内容を有しており、高知平野のみならず、西日本における弥生文化の成立を明らかにする上で極めて重要な位置付けがなされるものである。

C4-1表 C4区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C4SK4001	円形	箱形	1.68	1.68	56	N-16°-W	暗灰黄色シルト	SK4002		
C4SK4002	楕円形	箱形	1.7	1.14	52.55	N-4°-W	暗灰黄色シルト	SK4001		
C4SK4003	隅丸方形	箱形	1.74	1.41	27	N-63°-W	黄褐色シルト・黒褐色シルト			
C4SK4004	楕円形	U字状	1.98	1.64	47	N-40°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4005	楕円形	皿形	1.65	1.4	33	N-12°-E	黒褐色・黄褐色シルト		I-3	
C4SK4006	円形	箱形	1.08	1.05	45.7	N-27°-W	黒褐色・灰褐色シルト			
C4SK4007	楕円形	不定形	1.07	0.78	14.3	N-82°-E	暗灰褐色・黒褐色シルト			
C4SK4008	隅丸方形	箱形	2.66	1.4	62.3	N-68°-E	暗灰色・黄褐色・黒褐色シルト	SK4009. SK4010	I-3	
C4SK4010	—	皿形	0.34	—	14.9	—	黒褐色・暗灰黄色シルト	SK4008		
C4SK4011	隅丸方形	箱形	1.54	0.84	25.5	N-2°-E	暗灰色・灰黄褐色・黄褐色シルト			
C4SK4012	楕円形	U字状	0.92	0.54	32.7	N-85°-W	にぶい褐色シルト			
C4SK4013	—	—	0.8	—	46.1	—	暗灰黄色・黒褐色シルト	SK4125		
C4SK4014	方形	箱形	3.3	3.23	11.35	N-10°-W	暗灰黄色シルト	SK4040		
C4SK4015	隅丸方形	皿形	1.47	0.97	12.5	N-48°-W	黒褐色シルト・灰黄褐色シルト			
C4SK4016	隅丸方形	—	2.91	2.72	44.95	N-23°-E	褐色シルト			
C4SK4017	—	—	—	—	25.7	—	浅黄色・黄灰色・黒褐色シルト	SK4018		
C4SK4018	隅丸方形	箱形	3.45	1.34	86	N-13°-E	黒褐色・黄褐色シルト	SK4017	I-2~3	
C4SK4019	楕円形	皿形	0.89	0.62	10.95	N-83°-E	黒褐色シルト			
C4SK4020	不明	皿形	0.84	—	13.85	—	暗灰黄色シルト	SK4021		
C4SK4021	不明	舟底形	2.19	—	40.3	N-50°-W	黒褐色・黄褐色シルト	SK4020	I-2~3	
C4SK4022	楕円形	逆台形	1.29	1.04	62	N-72°-W	黒褐色・黄褐色シルト	SK4020	I-3	
C4SK4023	隅丸方形	皿形	1.38	1.32	25.1	N-34°-E	暗褐色・黒褐色・黄褐色シルト			
C4SK4024	隅丸方形	逆台形	2.2	0.89	69.65	N-69°-W	黒褐色・黄褐色シルト	SK4025	I-2	
C4SK4025	隅丸方形	逆台形	2.9	1.4	70	N-62°-W	黒褐色・暗灰黄色・褐色シルト	SK4024	I-2	
C4SK4026	長方形	箱形	2.6	1.6	68	N-0°	黒褐色・黄褐色・褐色シルト	SK4027. SK4037. SK4054	I-2	
C4SK4027	楕円形	—	0.86	0.8	36.7	N-70°-W		SK4037.SK4054		
C4SK4028	隅丸方形	不定形	1.08	0.92	20.2	N-5°-E	褐色シルト			
C4SK4029	不整形	箱形	2.0	1.62	90	N-60°-E	黒褐色・黄褐色・褐色シルト	SK4030. SK4060. SD405	I-2	
C4SK4031	楕円形	不定形	1.48	0.6	12.65	N-53°-W	黒褐色・黄褐色シルト	SK4032		
C4SK4032	隅丸方形	箱形	2.03	1.66	32.75	N-29°-E	黒褐色・黄褐色シルト	SK4031	I	
C4SK4033	不定形	—	1.09	0.8	34	N-7°-W				
C4SK4034	隅丸方形	逆台形	2.45	1.84	43.35	N-27°-E	黒褐色シルト	SD403	I-3	
C4SK4035	隅丸方形	逆台形	1.42	0.73	24.55	N-59°-W	黒褐色シルトを基調		I-3	
C4SK4036	隅丸方形	皿状	1.2	1.15	21	N-21°-E	黒褐色シルト	SD403	I-3	
C4SK4037	不整形	—	—	1.45	43.9	—	褐色シルト	SK4026. SK4028		
C4SK4038	円形	箱形	1.29	—	39	—	暗灰黄色・黄褐色シルト			

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋 土	切合関係	時期	備 考
C4SK4039	円形	不定形	1.45	—	54	—	暗灰黄色・黄褐色シルト	SK4038		
C4SK4040	楕円形	皿状	1.65	1.29	32.05	N-75°-E	黒褐色シルト	SK4014	I-2	
C4SK4041	楕円形	皿状	0.95	0.62	9.8	N-56°-W	黒褐色・灰黄褐色シルト	SK4042		
C4SK4042	隅丸方形	皿状	1.74	1.65	23.6	N-27°-E	黒褐色シルト・灰黄褐色 砂質シルト	SK4041		
C4SK4043	楕円形	皿状	1.26	0.95	21.5	N-11°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4044	円形	皿状	1.85	2.0	17.8	—	暗灰黄色・黄褐色シルト	SK4058		
C4SK4045	隅丸方形	箱形	2.39	2.19	31.3	N-22°-E	黒褐色シルト・灰黄褐色 砂質シルト			
C4SK4046	楕円形	皿状	—	0.83	11	—	暗灰黄色・黒褐色シルト	SK4048		
C4SK4047	長楕円形	—	2.7	—	24.9	N-3°-W	黒褐色シルト	SK4090	I-3	
C4SK4048	隅丸方形	箱形	2.18	1.23	92.7	N-62°-W	黒褐色シルト	SK4046	I-2	
C4SK4049	隅丸方形	皿状	2.16	1.35	17.65	N-61°-W	暗黄褐色・褐灰色シルト			
C4SK4050	隅丸方形	箱形	2.4	1.2	27	N-58°-W	黒褐色シルト	SK4067	I-3	
C4SK4051	隅丸方形	袋状	2.3	1.6	82	N-87°-E	黒褐色シルト	SD404	I-3	
C4SK4052	楕円形	皿状	0.7	0.53	3.95	N-25°-E	黒褐色シルト			
C4SK4053	隅丸方形	皿状	0.97	0.84	6.2	N-17°-E	黒褐色シルト			
C4SK4054	隅丸方形	箱形	2.5	1.5	40	N-69°-W	黒褐色シルト	SK4026. SK4086. SK4027	I-3	
C4SK4055	隅丸方形	皿形	1.58	1.45	9.4	N-80°-W	黒褐色シルト			
C4SK4056	円形	皿形	0.76	0.65	9.55	—	黒褐色シルト	SK4057		
C4SK4057	不整形	箱形	0.6	—	—	—	黒褐色シルト	SK4056		
C4SK4058	楕円形	—	1.37	0.99	10.4	N-24°-E	暗灰褐色・黒褐色シルト	SK4044		
C4SK4059	隅丸方形	—	1.53	1.14	61.9	N-3°-E	暗灰黄色シルト		近世	
C4SK4060	楕円形	不定形	2.09	1.39	91.5	N-72°-W	暗灰黄色・黒褐色・黄褐色 シルト	SK4029		
C4SK4061	隅丸長方形	U字状	2.5	1.0	62	N-20°-E	黒褐色シルト		I-2	
C4SK4062	—	U字状	1.35	1.09	36.2	N-21°-E	暗灰黄褐色・黄褐色シル ト			
C4SK4063	楕円形	皿状	—	—	16	—	黒褐色シルト	SK4062		
C4SK4064	円形	U字状	1.1	推 1.03	40	N-23°-E	黒褐色シルト		V-1	
C4SK4065	不定形	U字状?	2.46	2.4	36.4	N-15°-E	褐灰色シルト			
C4SK4066	楕円形	箱形	1.5	1.21	9.5	N-85°-E	灰色・黒褐色シルト			
C4SK4067	不定形	皿状	0.75	0.64	24.75	N-60°-W	黒褐色シルト			
C4SK4068	隅丸方形	皿状	—	0.96	12.7	—	暗灰黄色シルト	SK4069. SK4070		
C4SK4069	楕円形	皿状	1.37	1.09	10.5	N-62°-W	黄褐色・黒褐色シルト	SK4068. SK4070		
C4SK4070	隅丸方形	箱形	1.42	1.5	26.4	N-11°-E	褐色シルト	SK4068		
C4SK4071	不定形	逆台形	1.42	1.1	20	N-32°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4073	不定形	逆台形	8.5	推 0.74	40	—	黒褐色・黄褐色シルト		I-3	
C4SK4074	円形	不定形	0.95	0.8	26.65	N-83°-W	黄褐色・黒褐色シルト			
C4SK4075	楕円形	不定形	1.08	0.87	39.85	N-59°-E	黒褐色シルト			
C4SK4076	不定形	皿状	3.22	1.6	9.55	N-6°-E	黄灰褐色・黒褐色・黄褐色 シルト	SK4078		
C4SK4077	隅丸長方形	箱形	2.25	1.37	38	N-30°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4078	楕円形	—	1.27	0.55	10.15	N-35°-E	黒褐色シルト	SK4076		
C4SK4080	楕円形	箱形	1.45	1.37	78.3	N-10°-E	黒褐色シルト			
C4SK4081	隅丸方形	皿形	1.9	1.58	14.9	N-77°-W	暗灰黄色シルト			
C4SK4082	隅丸方形	箱形	3.0	1.7	12	—	黒褐色シルト	SK4081. SK4119	I-3	
C4SK4083	楕円形	皿形	2.0	1.55	20	N-70°-W	灰褐色シルト・黒褐色シ ルト			
C4SK4084	隅丸方形	逆台形	0.84	0.75	31	N-20°-E	黒褐色シルト	SK4117	I-2	
C4SK4085	長方形	箱形	2.2	1.6	20~45	N-60°-W	黒褐色シルト		I-2	
C4SK4086	隅丸方形	皿形	2.29	1.57	10.65	N-77°-W	褐灰色シルト	SK4054		
C4SK4087	楕円形	逆台形	1.2	1.0	32	N-20°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4088	楕円形	皿形	1.8	1.4	38	N-33°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4089	楕円形	U字状	2.2	1.4	30	N-50°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4090	不定形	逆台形	3.58	2.2	43.15	N-79°-W	褐灰色粘性シルト	SK4047		

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C4SK4092	不定形	皿形	1.37	1.72	4.75	N-81°-W	黒褐色シルト			
C4SK4093	楕円形	皿形	1.38	1.19	2.55	N-27°-W	黄褐色シルト	SK4094		
C4SK4094	隅丸方形	箱形	1.33	0.84	19.75	N-65°-W	褐灰色シルト・黒褐色シルト	SK4093		
C4SK4095	隅丸方形	箱形	2.34	1.65	63.9	N-36°-E				昭和51年調査の埋め戻し土坑
C4SK4096	不整形	—	1.39	1.12	39.15	N-48°-W				昭和51年調査の埋め戻し土坑
C4SK4097	楕円形	箱形	1.3	0.7	25~40	N-55°-W	黒褐色・黄褐色シルト		I-2~3	
C4SK4098	不整形	不定形	1.16	0.82	16.2	N-88°-W	黒褐色シルト			
C4SK4099	不整形	逆台形	5.58	—	13.6	—	黒褐色シルト			
C4SK4100	隅丸方形	箱形	2.12	1.87	32.5	N-32°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4101	楕円形	皿形	1.16	0.76	20.55	N-17°-E	黒褐色シルト			
C4SK4102	楕円形	逆台形	2.03	1.6	56.5	N-56°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4103	楕円形	皿形	1.43	1.32	18.2	N-53°-E	暗灰黄色シルト・黒褐色シルト			
C4SK4105	楕円形	—	1.2	0.9	14.9	N-48°-E				
C4SK4106	楕円形	U字状	1.55	1.05	65.9	N-66°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4107	不整形	皿形	2.0	1.3	20	N-38°-E	黒褐色シルト	SK4113. SD406	I-3	
C4SK4108	不定形	—	—	—	—	—				昭和51年調査の埋め戻し土坑
C4SK4109	楕円形	皿形	—	—	31.1	—	黒褐色シルト	SK4132		
C4SK4110	楕円形	—	1.08	0.77	19.6	N-21°-W	暗褐色・褐灰色シルト			
C4SK4111	長楕円形	舟底形	1.72	0.72	20~25	N-0°	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4112	溝状	皿形	2.45	0.65	20.9	N-7°-W	暗褐色シルト		I	
C4SK4113	楕円形	皿形	1.1	1.0	30	N-26°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4SK4114	楕円形	皿形	0.95	0.74	5.9	N-66°-W	黒褐色シルト			
C4SK4115	不整形	不定形	0.95	0.78	36.35	N-53°-E	黒褐色シルト			
C4SK4116	楕円形	箱形	2.41	1.46	8.7	N-65°-W	黒褐色シルト			
C4SK4117	隅丸方形	皿形	1.2	1.1	30	N-65°-W	灰褐色シルト		I-2	
C4SK4118	隅丸方形	不定形	0.72	1.19	26.05	—	灰色シルト	SK4119		
C4SK4119	楕円形	箱形	1.32	1.2	45.35	N-84°-E	灰色シルト基調	SK4118		
C4SK4121	隅丸方形	箱形	0.65	—	20	—	暗灰黄色シルト基調	SK4122		
C4SK4122	方形	箱形	1.29	—	52.75	—	暗灰黄色シルト	SK4121		
C4SK4124	隅丸方形	—	1.74	1.51	—	N-55°-W				
C4SK4125	—	不定形	0.51	—	26.9	—	暗灰黄色シルト	SK4013		
C4SK4127	楕円形	—	1.65	1.31	19.2	N-37°-E				
C4SK4128	隅丸方形	—	3.0	1.38	28.1	N-83°-W	灰黄褐色シルト	SK4129		
C4SK4129	隅丸方形	—	—	1.48	16.95	—	にぶい黄褐色シルト	SK4128. SK4130		
C4SK4130	楕円形	—	1.35	1.17	18.05	N-89°-W	灰黄褐色シルト	SK4129. SK4131		
C4SK4131	楕円形	—	1.67	1.0	16.6	N-83°-W	灰黄褐色シルト			
C4SK4132	楕円形	皿形	0.9	0.94	25.2	—	黒褐色シルト	SK4109	I	

C4SK4003(C4-3 図)

時期；弥生I-3 形状；隅丸方形 主軸方向；N-63°-W

規模；1.74m×1.41m 深さ；27cm 断面形態；箱形

埋土；黄褐色シルト・黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区の北部に位置する。埋土は黄褐色シルトに黒褐色シルトが混じる単一層である。遺物は細片が多く図示できるものはない。

C4SK4004(C4-3 図)

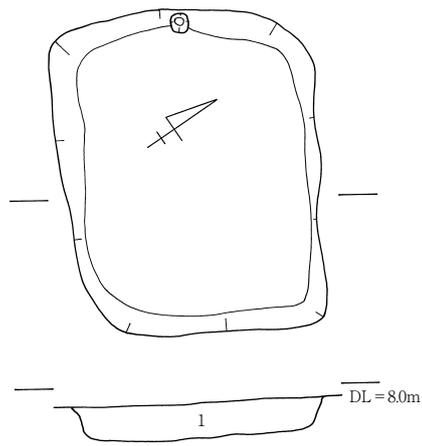
時期；弥生I-3 形状；楕円形 主軸方向；N-40°-E

規模；1.98m×1.64m 深さ；47cm 断面形態；U字状

埋土；黒褐色シルト

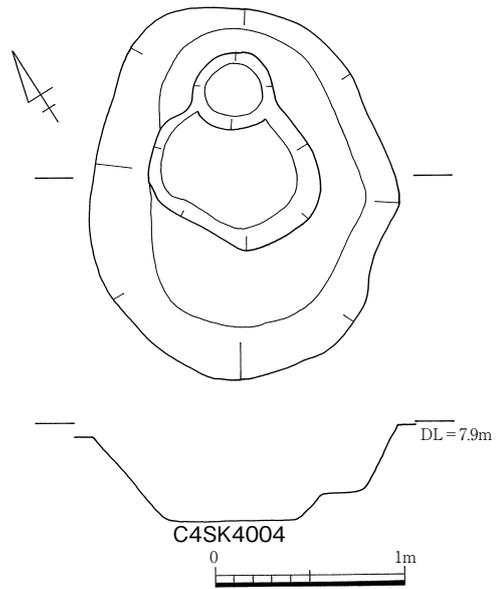
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、チャート剥片類

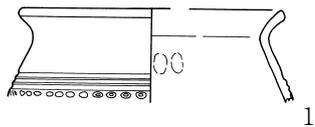


1 黄褐色シルト (25YR5/6) に黒褐色が入る

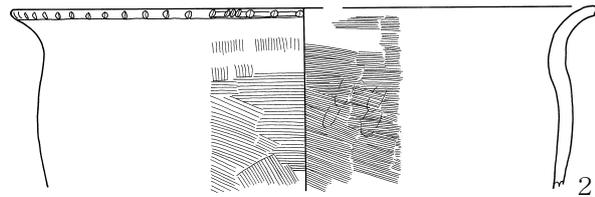
C4SK4003



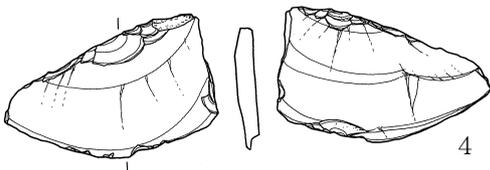
C4SK4004



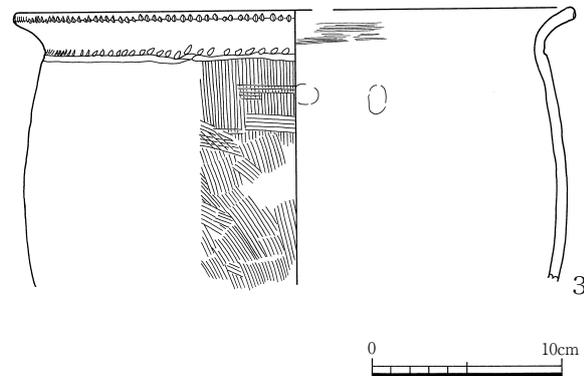
1



2



4



3



(4は1/2)

C4-3 図 C4SK4003・4004

所見：調査区の北部に位置する土坑である。埋土は黒褐色シルト・黄褐色シルトを基調とする。段状に掘り込まれている。

出土遺物は細片が多いが、壺(1)、甕(2・3)は床面から出土している。この他にチャートのチップ・剥片が多数入る。

C4SK4005 (C4-4 図)

時期：弥生 I-3 **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-12°-E

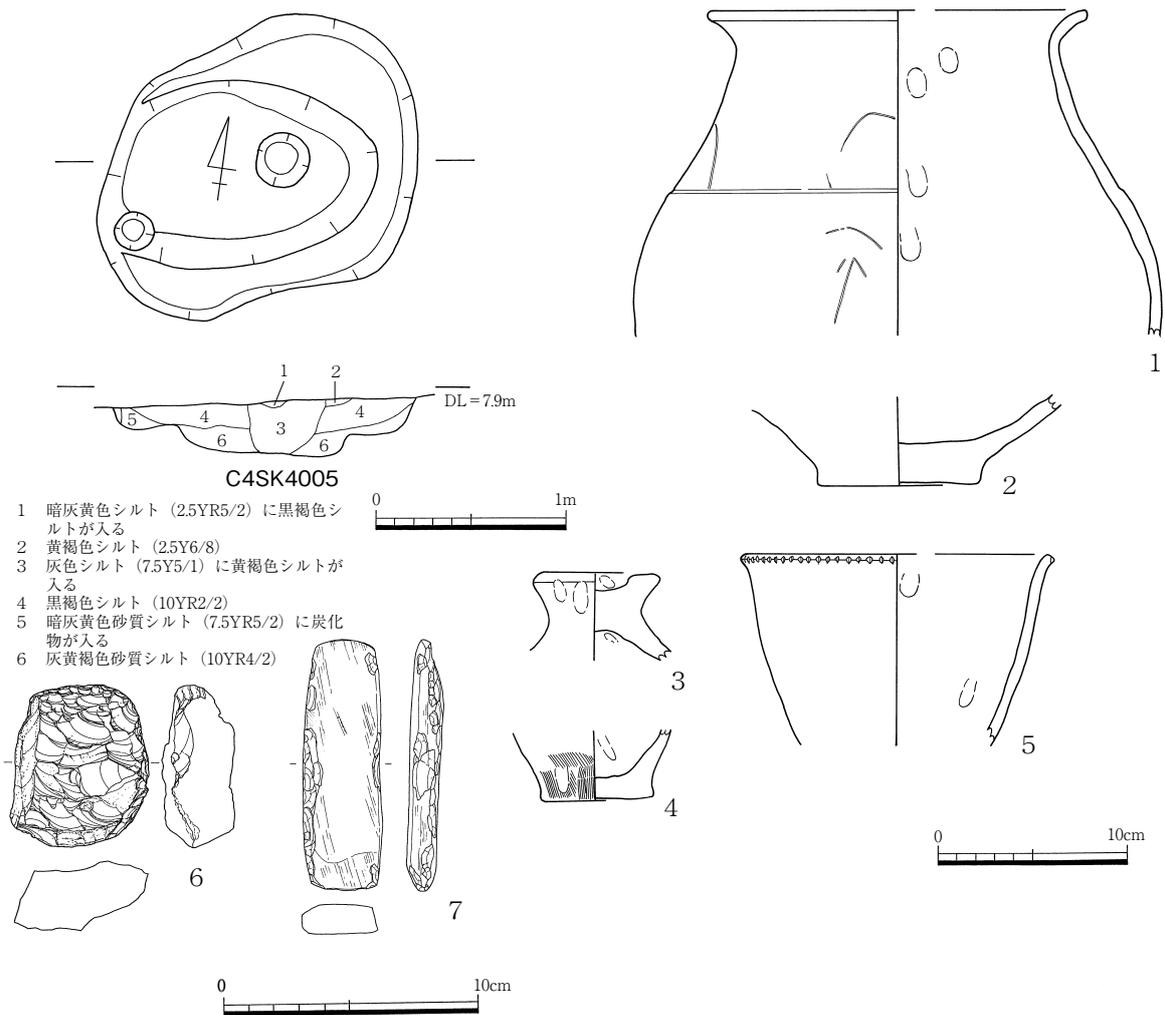
規模：1.65m×1.4m **深さ：**33cm **断面形態：**皿状

埋土：シルトを基調とする

付属遺構：— **機能：**—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器(石斧他)

所見：調査区の北西に位置する。段状に掘り込まれており、埋土は黒褐色・黄褐色シルトを基調とする。出土遺物のうち土器は壺(1・2)、甕(5・4)、蓋(3)を図示し得た。壺(1)は1条沈線による弧文・山形文を有する。石器は楔形石器(6)と磨製のノミ状石斧(7)が見られる。



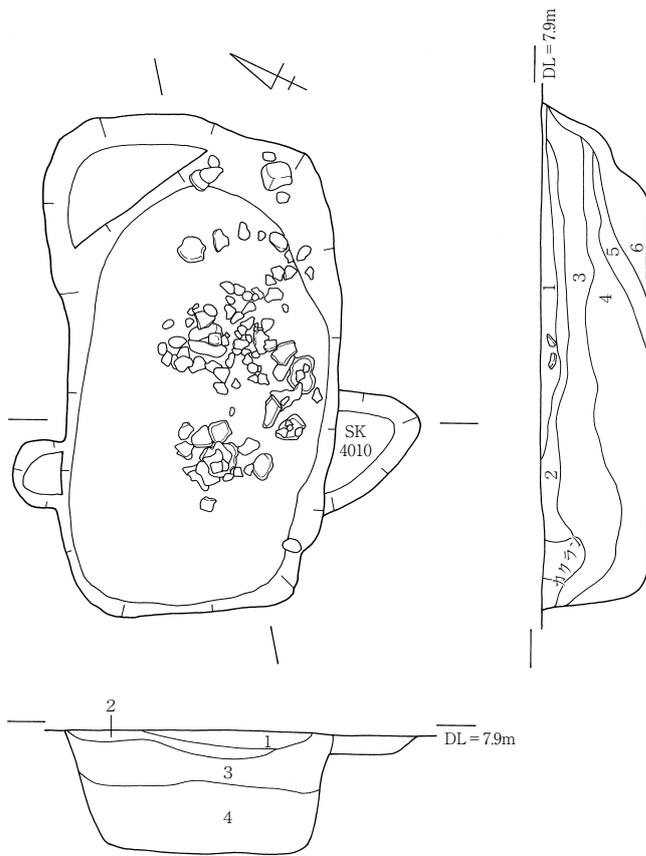
C4-4 図 C4SK4005

C4SK4008(C4-5・6 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-68°-E**規模**；2.66m×1.4m **深さ**；62.3cm **断面形態**；箱形**埋土**；暗灰黄色・黄褐色・黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋、手捏)、石器(石鏃、磨製石斧、磨製石鏃未製品)**所見**；調査区の北部に位置しSK4010を切っている。埋土は暗灰黄色・黄褐色・黒褐色を基調とする4層で、遺物は検出面直下から多く出土している。

出土遺物は土器では壺(1・6・8・11)・甕(7・12・13)・蓋(10)・手捏(9)が見られる。壺は口縁部に段を有するもの(4・6)や頸部に少条の沈線を持つもの(1)や削り出し突帯を持つもの(2)、小型壺(3・8)などが見られ、3は外面に赤彩が施されている。甕は3例とも口唇部全面に刻目を施し、13は1条のヘラ描沈線を12は沈線間に列点文を施している。石器は打製石鏃(14・15)、磨製石鏃未製品(16)、磨製石斧基部細片(17)が見られる。この他、白色化した鳥類や哺乳類の骨片が出土している。

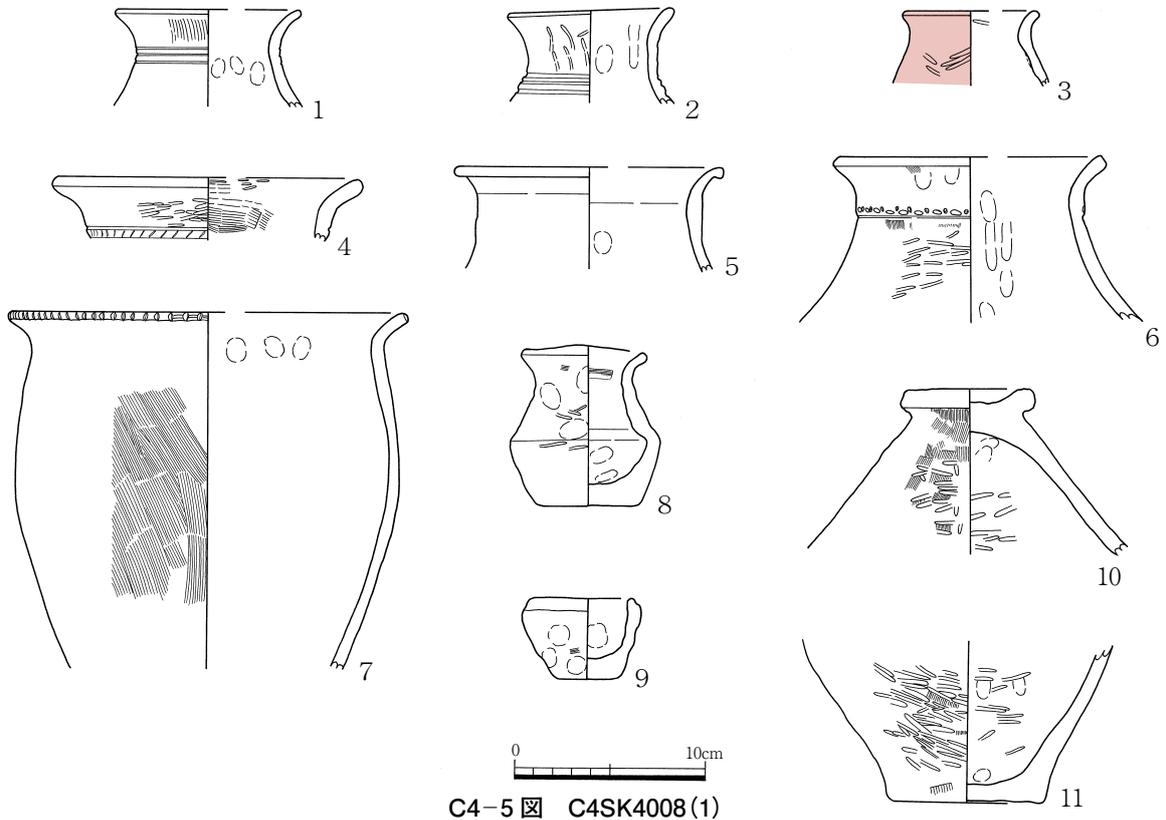
C4SK4018(C4-7・8 図)**時期**；弥生 I-2~3 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-13°-E**規模**；3.45m×1.34m **深さ**；86cm **断面形態**；箱形**埋土**；黒褐色・黄褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、甑)、石錐、楔形石器、磨製石鏃、台石、チャート剥片、骨片**所見**；調査区の北部に位置する。埋土は黒褐色に黄褐色が混じるシルト層で、1層から4層までは互層に堆積する。1層目にはチャート片が多く入り、石錐や楔形石器・磨製石鏃・骨片が出土している。中層埋土には炭化物が微量入る。最下の5層目は黒褐色シルトのみで基底面には板状の植物遺物と二枚貝・台石・土器が出土している。

出土土器は、壺(1・8)、甕(2~7)を図示することができた。7は完形品である。2~4は段部を有する。6の底部は焼成後に穿孔している。石器は打製石鏃(9・10)、磨製石鏃(11)、小型石錐(12~18)、楔形石器(19~21)が見られる。小型石錐は図示したもの以外に68点、楔形石器は23点が出土している。打製石鏃はサヌカイト、小型石錐と楔形石器はチャート、磨製石鏃は粘板岩である。この他、チャートの大小剥片が2,400g出土している。また、白色化した骨片が多く出土している。鳥類、哺乳類、魚類で硬骨魚類のニシン亜目の椎骨が多く確認されている。

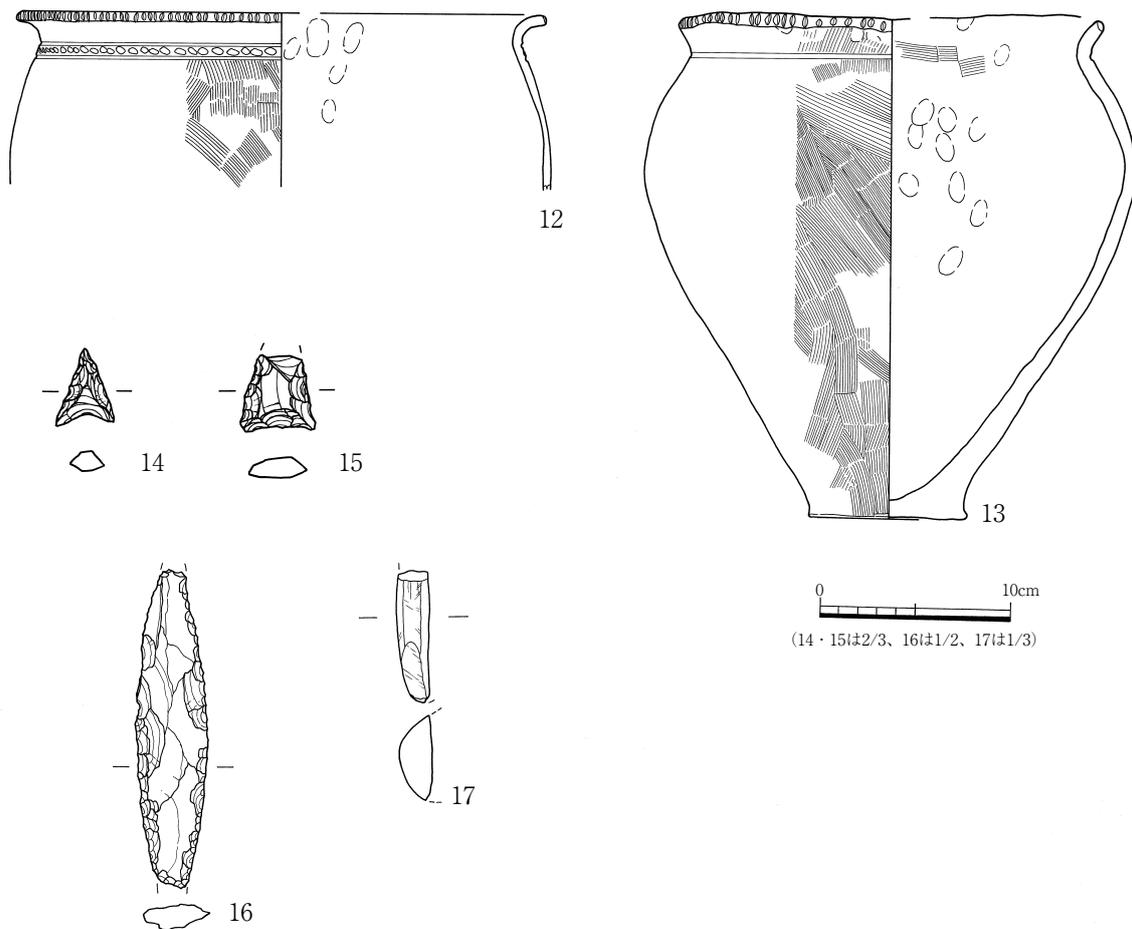


- 1 暗灰黄色シルトに黒褐色シルト、黄褐色シルトが入る
- 2 暗灰黄色シルトに黄褐色シルトのアロックが入る
- 3 黒褐色シルトに黄褐色シルトのアロックが入る
- 4 灰色シルトに黄褐色シルトが入る
- 5 黄褐色シルトに灰色シルトが入る
- 6 暗灰褐色シルトに黒褐色シルトと黄褐色シルトのアロックが入る

C4SK4008



C4-5 図 C4SK4008(1)



C4-6 図 C4SK4008(2)

C4SK4021 (C4-9 図)

時期；弥生 I-2~3 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-50°-W

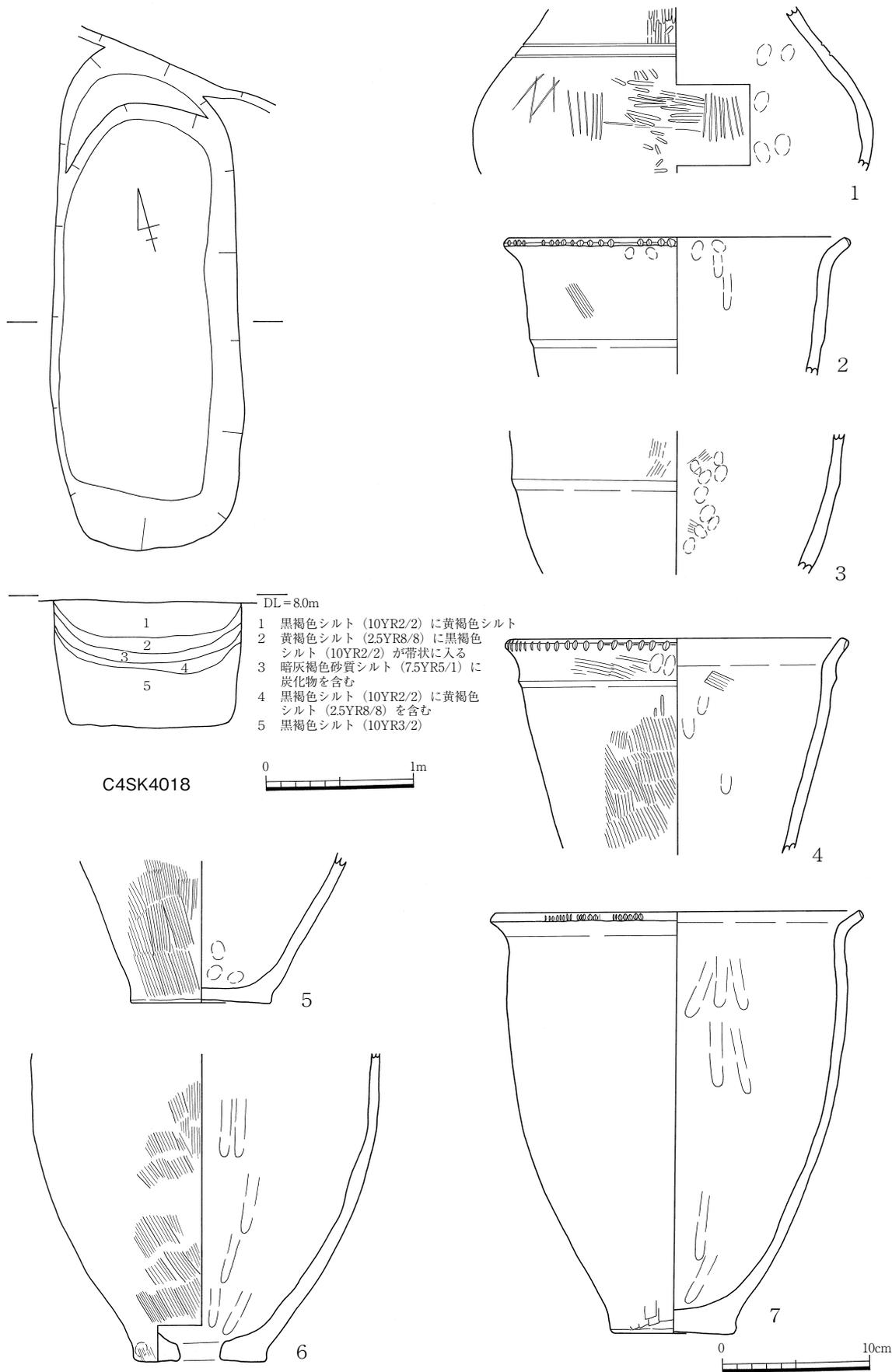
規模；2.1m×0.95m以上 **深さ**；40cm **断面形態**；船底形

埋土；黒褐色・黄褐色シルト

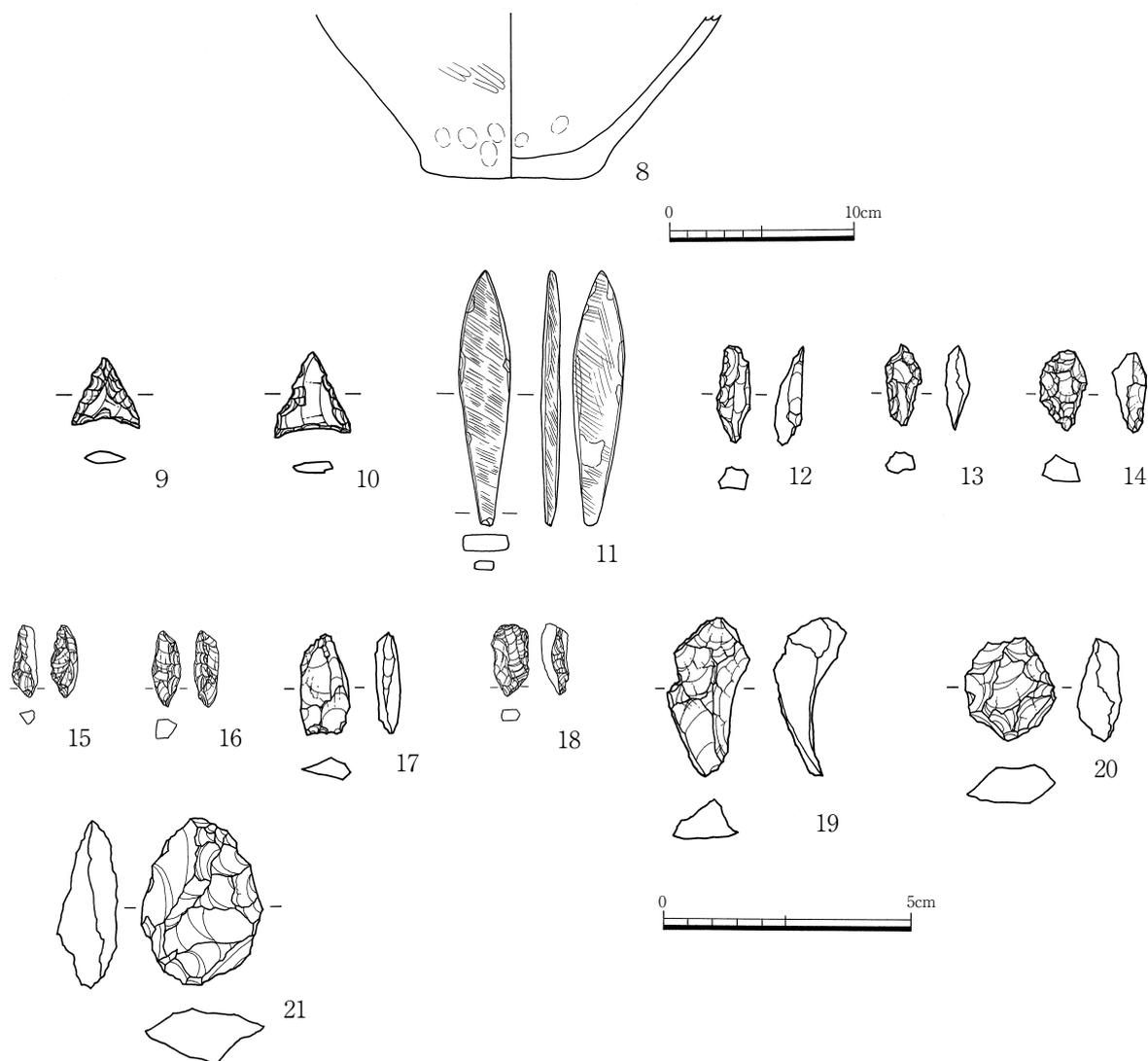
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(甕)

所見；調査区の北部に位置し、SK4020 を切っている。埋土はシルトを基調とする。遺物は少なく、甕(1)を図示しえたのみである。1 は口唇部下端に刻目を有ししっかりした段を持つ。



C4-7 図 C4SK4018(1)



C4-8 図 C4SK4018(2)

C4SK4022(C4-9 図)

時期：弥生I-3 形状：楕円形 主軸方向：N-72°-W

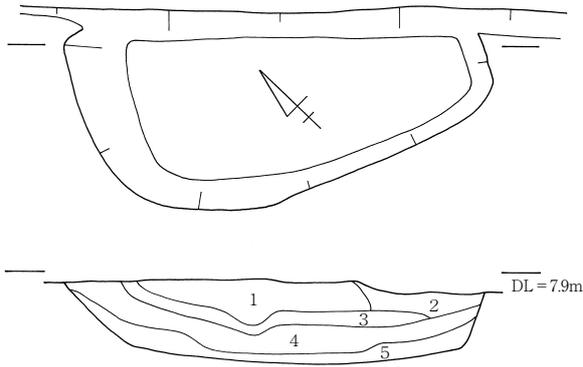
規模：1.24m×1.04m 深さ：62cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色・黄褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

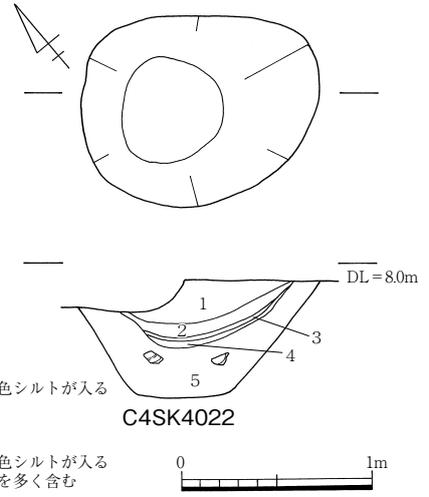
出土遺物：弥生土器(壺、甕)、石器(扁平片刃石斧)

所見：調査区の北部に位置し、土坑SK4020に切られる。遺構の北部が調査区外に延びる。埋土は黒褐色に黄褐色が入るシルト層の5層で、2~4層はレンズ状に堆積する。遺物は5層から多く出土している。出土遺物は壺(3・5・6)、甕(2・4)、扁平片刃石斧(7)を図示した。6は口縁径40cm前後の大型壺、3は胴部最大径に3条のヘラ描沈線と重弧文を配している。7は基部を欠損している。千枚岩製である。



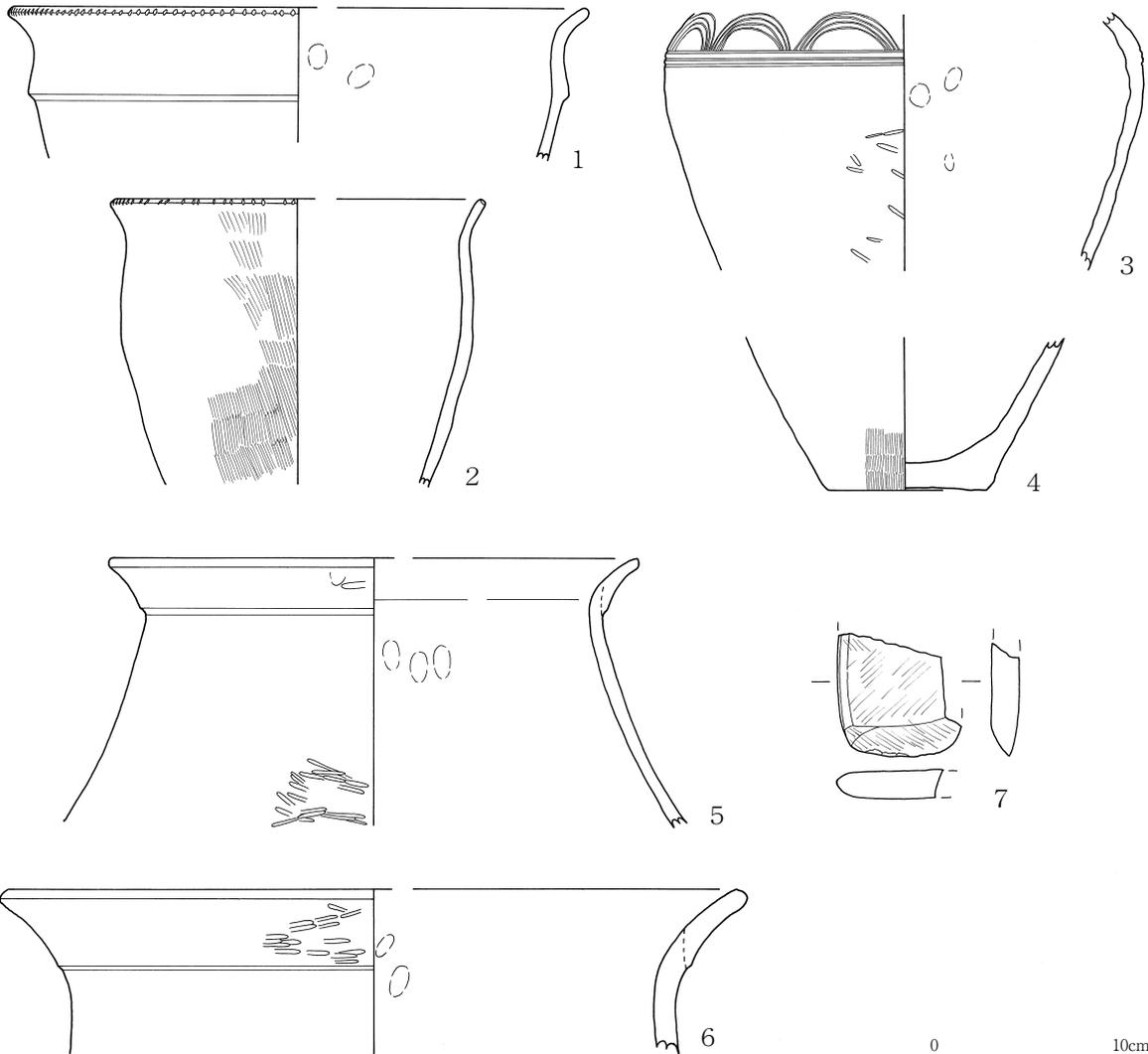
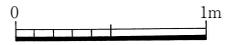
- 1 黒褐色シルトに焼土が入る
- 2 灰黄褐色シルト
- 3 明黄褐色シルトに黒褐色シルトが入る
- 4 黄灰色シルト
- 5 黄褐色砂質シルト

C4SK4021



- 1 黒褐色シルトに黄褐色シルトが入る
(炭化物を含む)
- 2 黄褐色シルト
- 3 黒褐色シルト
- 4 黒褐色シルトに黄褐色シルトが入る
- 5 黒褐色シルトで土器を多く含む

C4SK4022



(7は1/2)

C4-9 図 C4SK4021・4022 (SK4021 : 1、SK4022 : 2~7)

C4SK4024(C4-10~14 図)

時期；弥生 I-2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-69°-W

規模；2.2m×0.89m **深さ**；70cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色・黄褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石器(刃器、楔形石器、両極石器)

所見；調査区の北部に位置し、SK4025 と近接している。SK4025 との間に他の遺構の床面と考えられる平場が認められるが、先後関係は明らかにできない。ただSK4025 は他の遺構埋土を切っていることから、SK4024 はSK4025 に先行する可能性がある。検出面直下(上層)と下層・床面直上から多くの土器が出土している。下層・床面出土の土器には完形品や復元完形品も多く見られ一括性の高い出土状況を示している。

壺(1)は外面にヘラ磨きが施されているが、形態的に縄文晩期に系譜を求めることができる。5 は口縁部に段部を有し、2・6・7 は細い原体による少条の沈線や複線山形文(2)や重弧文(6)を配している。4 は外面に赤彩が施されている。1 は上層、4~9 は下層・床面出土である。甕は段部を有するもの(10・17・20・23・24)と有しないものがある。14 は一見沈線のように見えるが削り出し状の弱い段部である。19・20 を除いて口唇部に刻目を施すが総じて下半に配するものが多い。外面の調整は縦方向を基調とするハケ調整を施し、その上をナデ消すものも多く見られる。32 は焼成後に底部穿孔している。16・17・20・23~27 は下層・床面出土で、24 は下層と上層との接合資料である。鉢は平縁(36)と波状口縁(37)が見られる。後者は明らかに縄文晩期系譜である。36 は下層、37 は下層・上層の接合資料である。38~41 は蓋である。頂部の見られる 38 と 41 はともに平坦面をなしている。40 は下層、41 は上層出土である。

石器は剥片を利用した大型直縁刃石器(43・44)、楔形石器(42)が見られる。前者は粘板岩、後者はチャートである。43 は表裏とも刃部付近を磨いている。44 は表裏ともに部分的に磨いているが、刃部は鋸歯状をなす。表面には使用による著しい光沢が認められる。

C4SK4025(C4-10、15~20 図)

時期；弥生 I-2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-62°-W

規模；2.9m×1.4m **深さ**；70cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色・暗灰黄色・褐灰色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、磨製石鏃、楔形石器、骨片

所見；調査区の北部に位置し、土坑SK4024 が南に並接する。埋土は1~7層で、6層までは焼土や炭化物が多く入っている。当土坑も一括性の高い多量の遺物が出土している。壺・甕・鉢・蓋形土器・小型土器など良好な一括資料となるものである。遺物は上層・中層・下層・床で取り上げている。検出面直下の上層は図示したように遺構の全面から遺物が出土しているが、中・下層においては西部に集中して認められる。西壁側から投げ込まれた状況を示している。

土器は壺(45~59・93)、甕(60~81)、鉢(82~86)、蓋(87~92)を図示した。45~51は中型壺である。頸部に少条のヘラ描沈線を巡らすもの(45・46・48・50)が目立つ。50は胴部に重弧文を配している。52・53・93は大型壺で、52・93は頸部に刻目突帯を、53はしっかりした段部を有する。93は床面出土、48~50は中層と下層の接合資料、51・53は中層出土である。甕は63・66・81が段部を有し、73は削り出し突帯に列点文を配している。口唇部の刻目は下半に施されるものが多い。外面の調整は縦方向を基調とするハケ調整を施すが、その上をナデ消すものも多く見られる。底部の79は焼成後に穿孔している。復元完形または完形に近いものは中・下層出土のものが多く、73と80は下層と中層、67と75は中層と上層の接合資料である。鉢は小型(82)、中型(83・84)、大型(85・86)がある。蓋は頂部の平坦なもの(87・91・92)と高台状のもの(90)がある。口縁部内面は例外なくドーナツ状に煤けている。

石器は磨製石鏃(95)、刃部を有するサヌカイト剥片(96~98)、楔形石器(99)などが見られる。97は打製石包丁の可能性があり、94・95は頁岩、99はチャートである。94は磨製石鏃の未製品の転用品の可能性があり、この他に白色化した骨片が多く出土している。鳥類(ガン・カモ類)、哺乳類(イノシシ・ニホンジカ)、軟骨魚類(サメ類)である。

SK4025出土の土器は、段部を持つものが少ないことやSK4024に見られた縄文晩期系のもが見られないなどSK4024に較べて新しい要素が認められる。しかし甕に少条のヘラ描沈線が一般化する以前の段階であることからI-2期とする。今後、前期土器編年を組む上での基準資料となろう。

C4SK4026(C4-21・22図)

時期；弥生I-2 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-0°

規模；2.6m×1.6m **深さ**；68cm **断面形態**；箱形

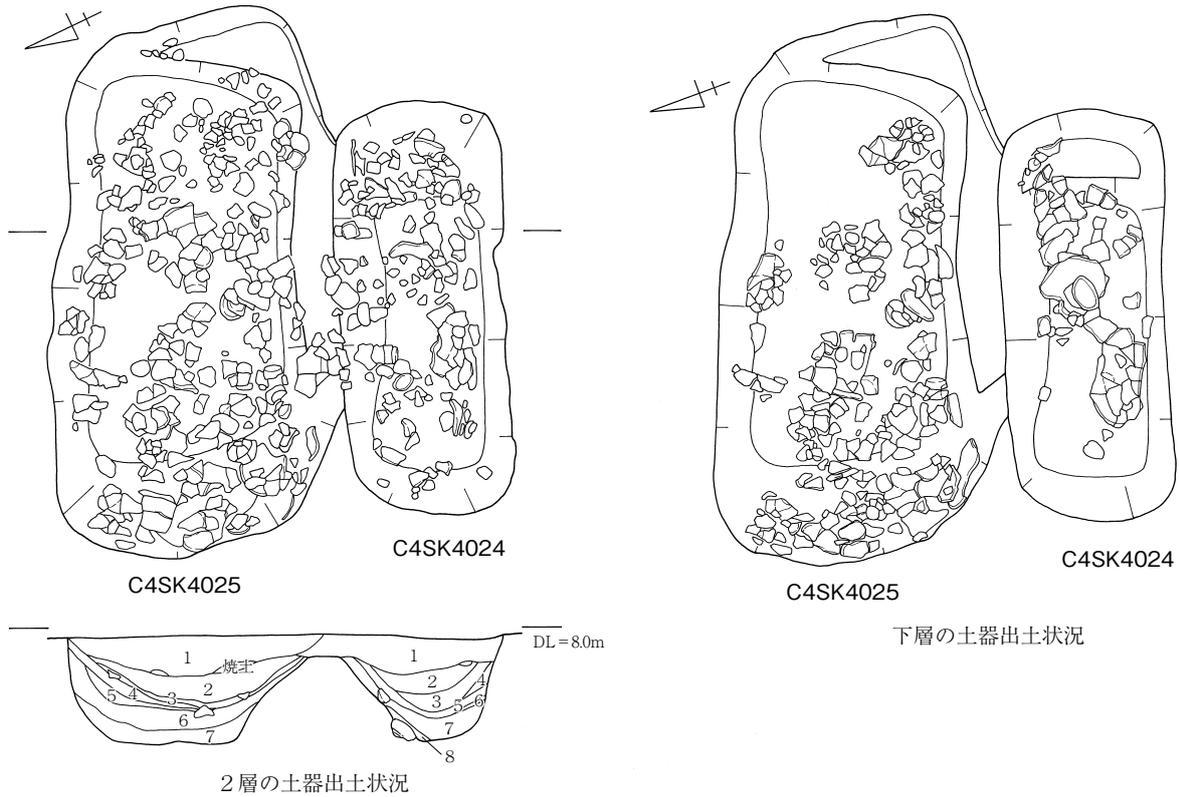
埋土；黒褐色・黄褐色・褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、ミニチュアなど)、磨製石鏃、石斧、骨片

所見；調査区の北部に位置し、SK4037を切り、SK4027・4054に切られている。東・西・北の壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁は緩やかに上がっている。埋土は黒褐色・黄褐色・褐色シルトが混じり、レンズ状に堆積し、8・9層には焼土・炭化物が多く入っている。遺物の多くは8・9層からの出土である。

土器は壺(1~7)、甕(8~18・24)、鉢(19・20)、ミニチュア(21~23)、土製円板(25)を図示した。壺はすべて中型品で5は口縁部と頸胴部間に段部を有する。甕は9・10・15・16・18に段部が見られる。上胴部に沈線を持つものは見られず、口唇部の刻目は下半に施されるものが多い。17は深鉢状を呈し口縁部に把手を持っている。26は細身の両刃石斧で、基部から刃部に向かって幅が減っている。結晶片岩製で全面丁寧な研磨が施されている。27は磨製石鏃である。茎端部が欠損しているが刃部は鋭く、しっかりした稜線が走る。茎断面は丸味を帯びている。この他に白色化したイノシシ或いはニホンジカの骨片、褐色変化したウサギの尺骨が出土している。I-2期の一括性の高い遺物として捉えることができる。

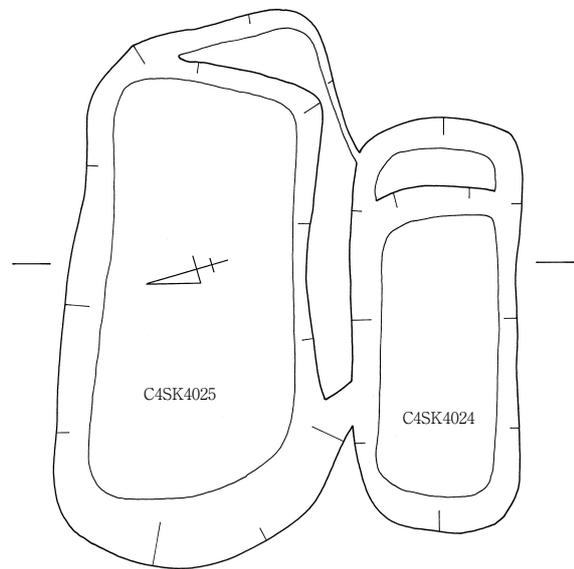


C4SK4024

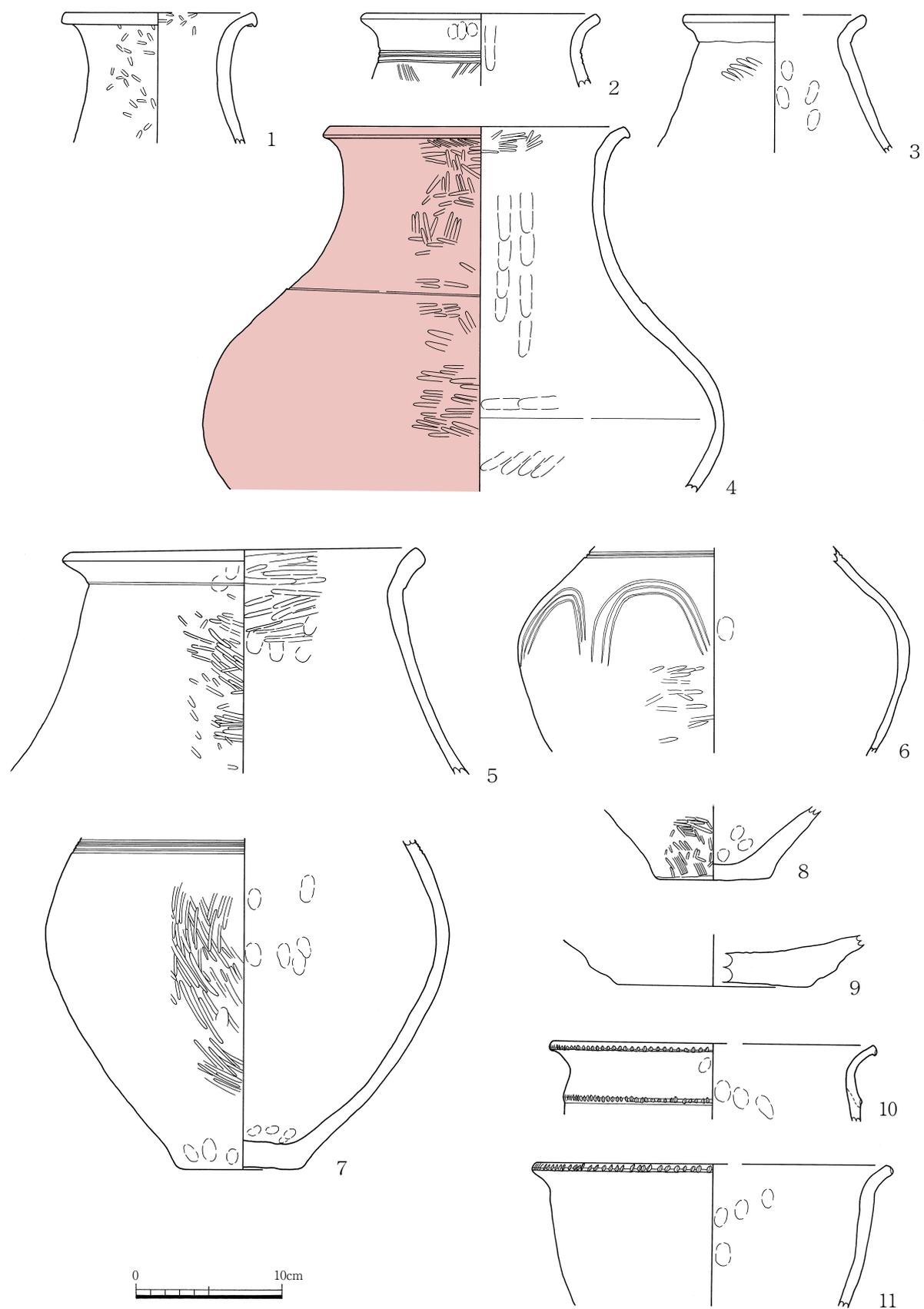
- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) に焼土が入る
- 2 淡灰色粘性シルト (10YR4/1)
- 3 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
- 4 灰黄褐色シルトに地山がブロック状に入る
- 5 黒褐色シルト (10YR3/1)
- 6 黒灰色シルト
- 7 褐灰粘性シルト (10YR4/1)
- 8 黒褐色粘性シルト (10YR2/3)

C4SK4025

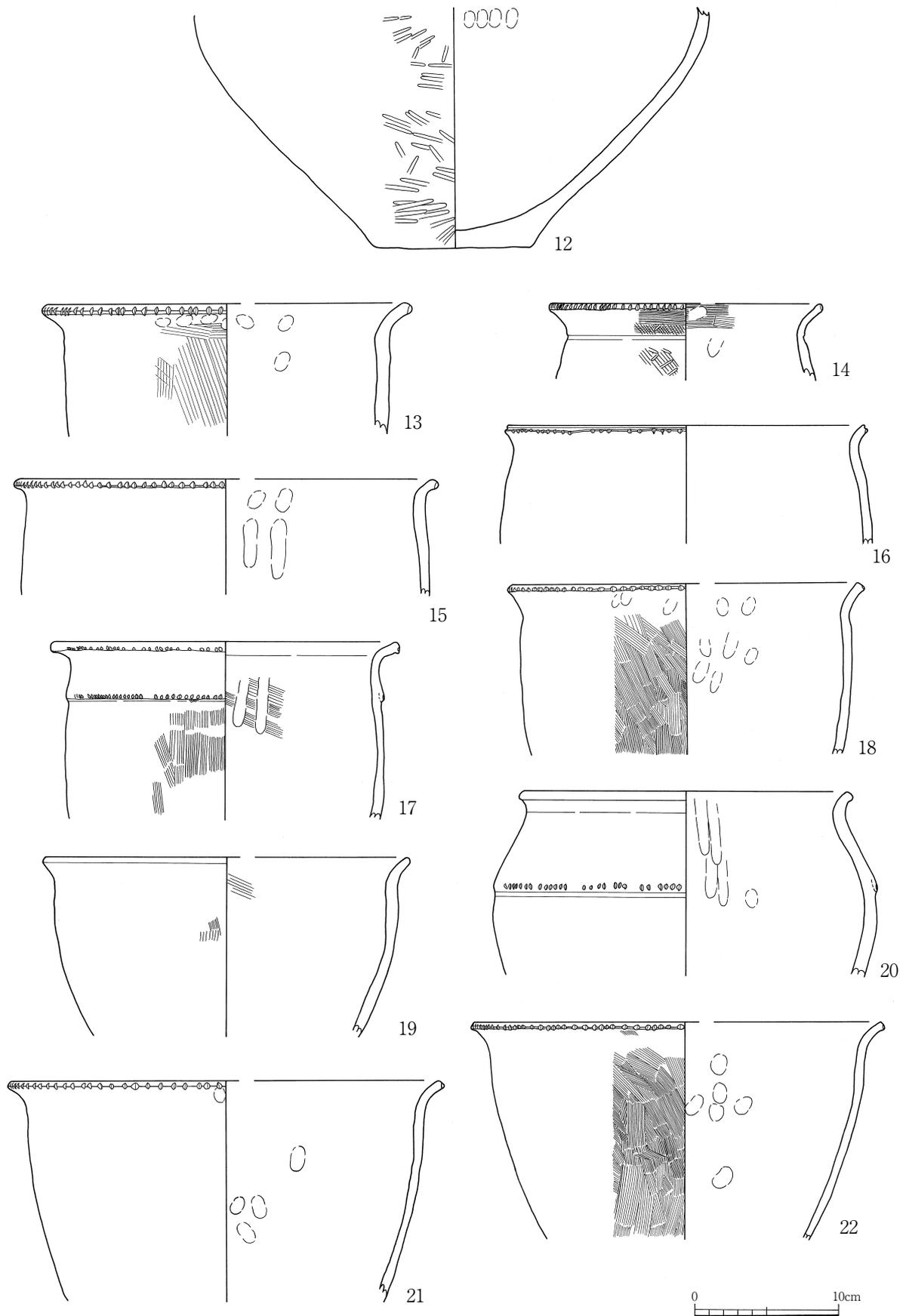
- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) に焼土・炭化物が入る
- 2 暗灰色シルト (2.5YR4/2) に焼土・炭化物が入る
- 3 暗灰黄色シルトに炭化物・焼土が入る
- 4 褐灰色シルト
- 5 暗灰色シルト
- 6 黒褐色シルト (10YR3/2) に炭化物が入る
- 7 黒褐色シルト



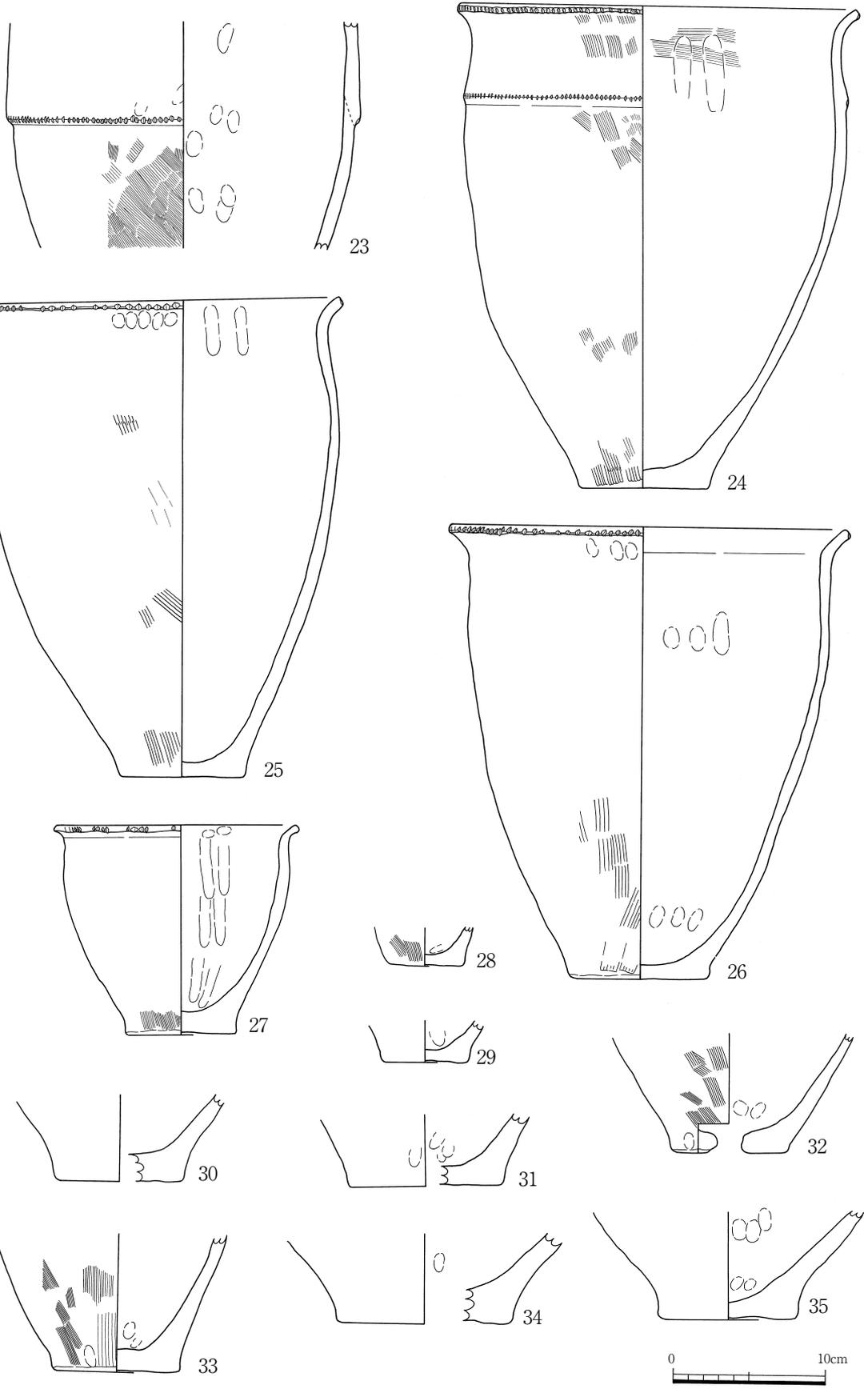
C4-10 図 C4SK4024・4025



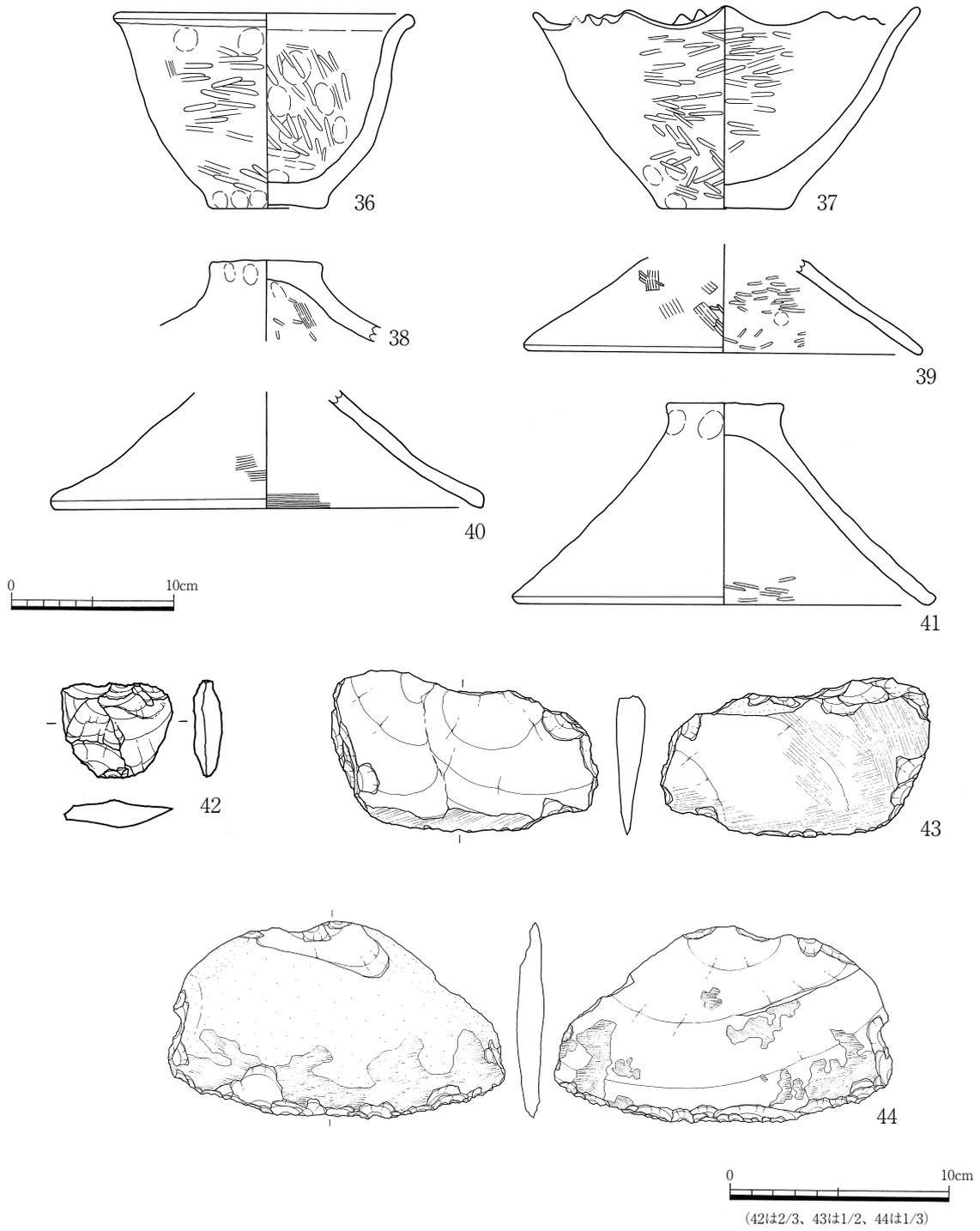
C4-11 ☒ C4SK4024 (1)



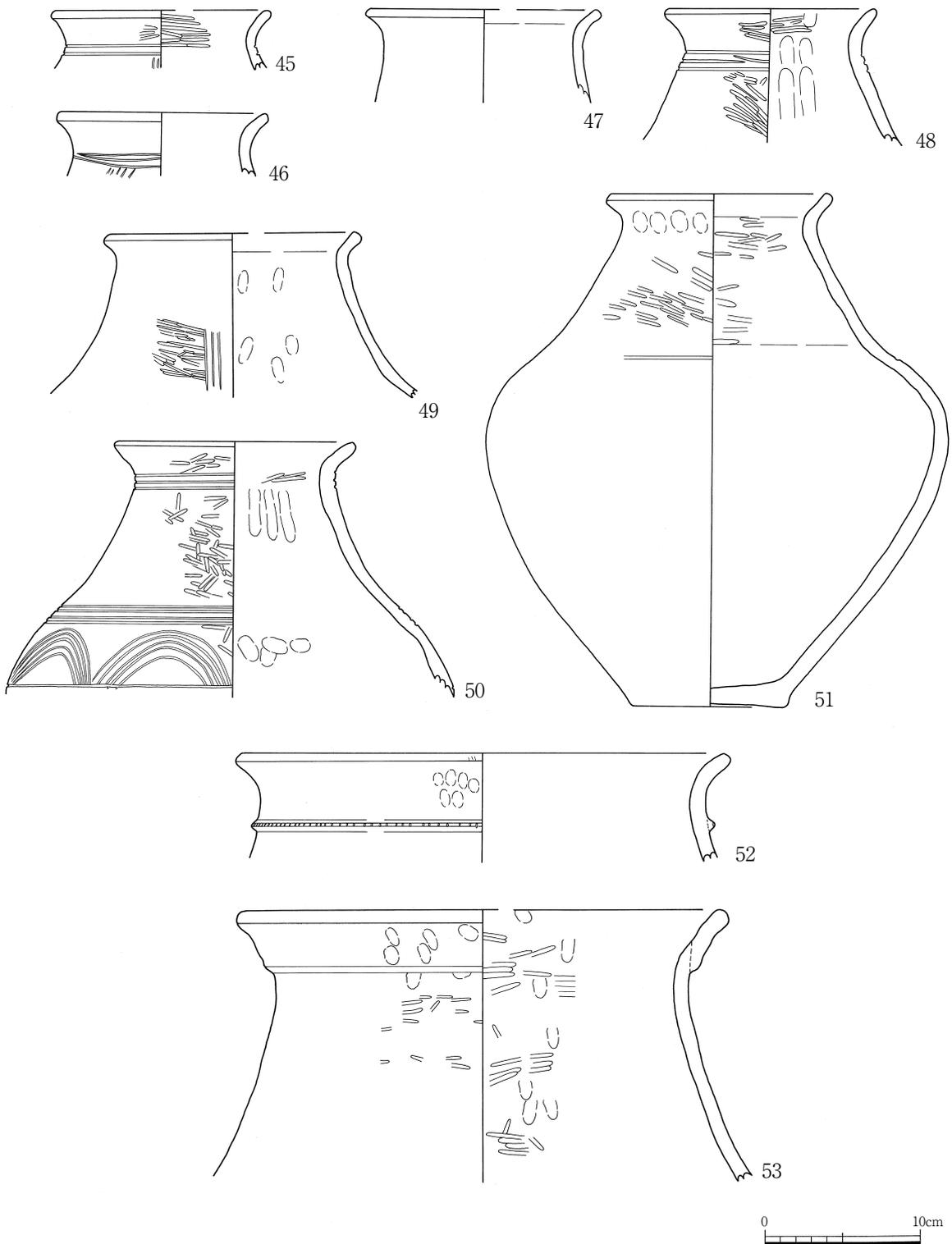
C4-12 図 C4SK4024 (2)



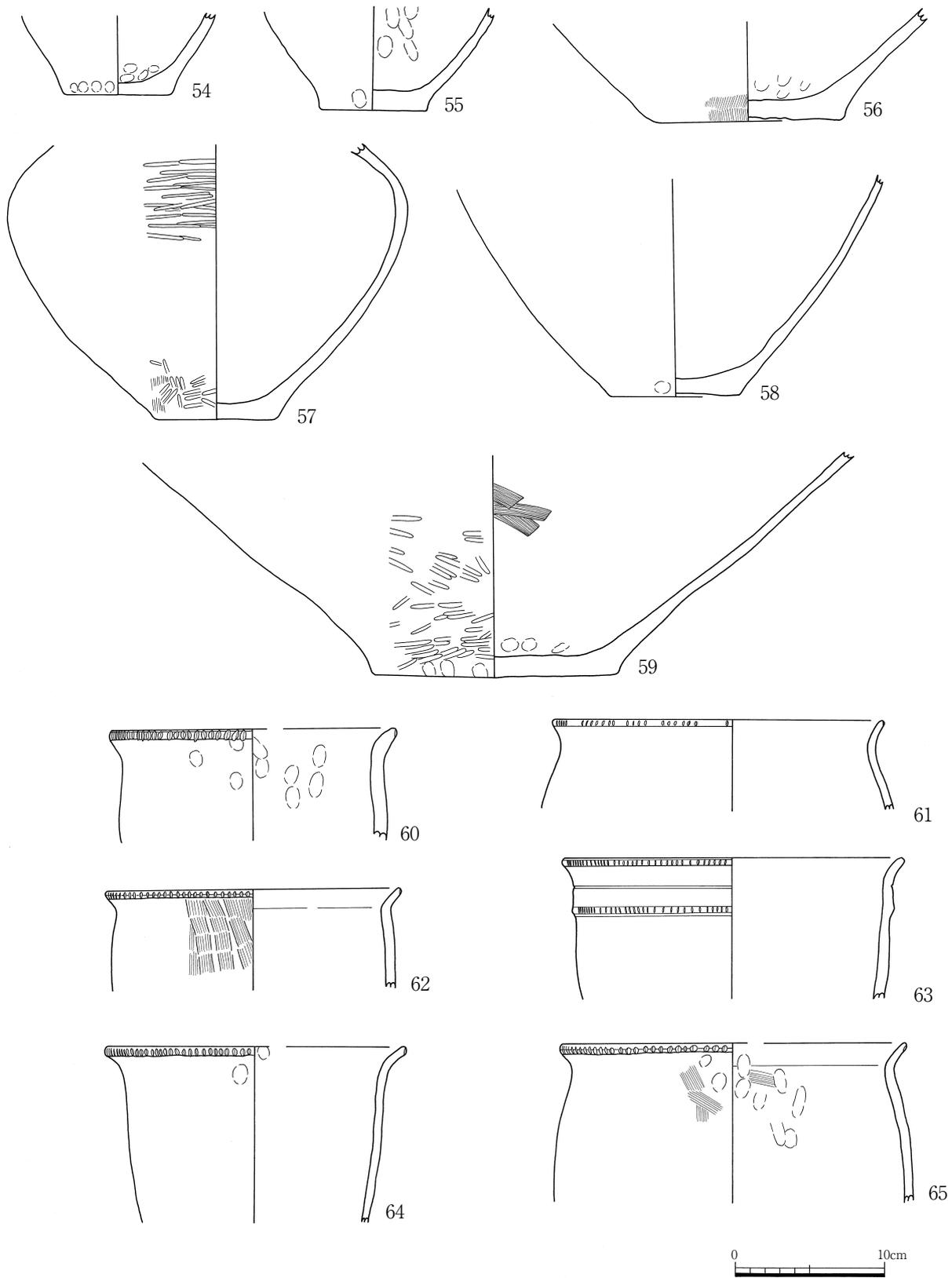
C4-13 图 C4SK4024 (3)



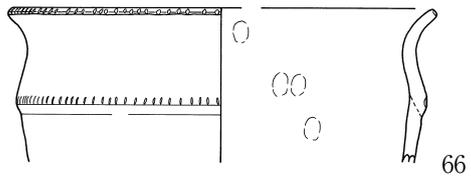
C4-14 ☒ C4SK4024(4)



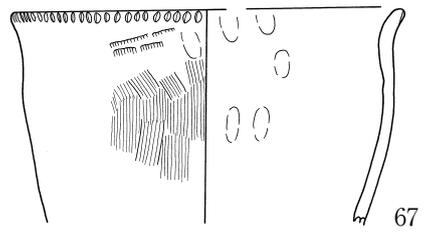
C4-15 图 C4SK4025(1)



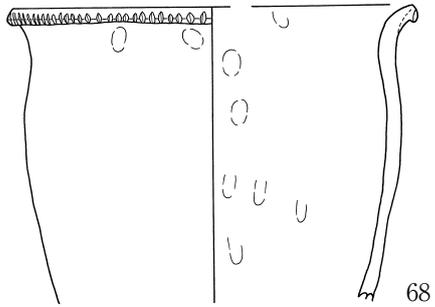
C4-16 図 C4SK4025 (2)



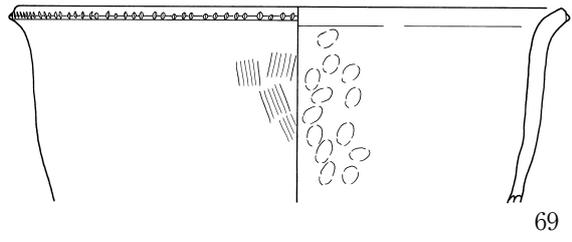
66



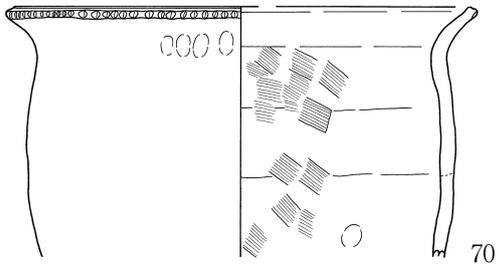
67



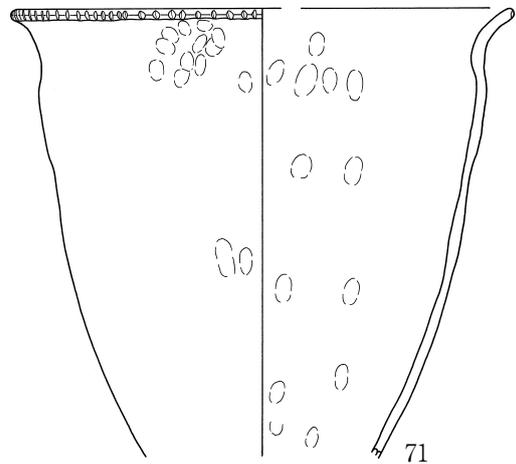
68



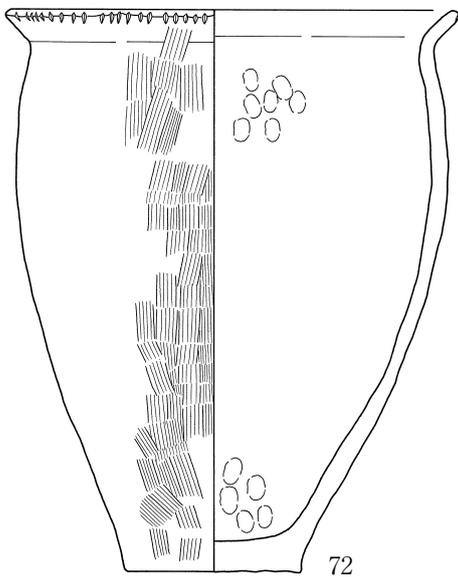
69



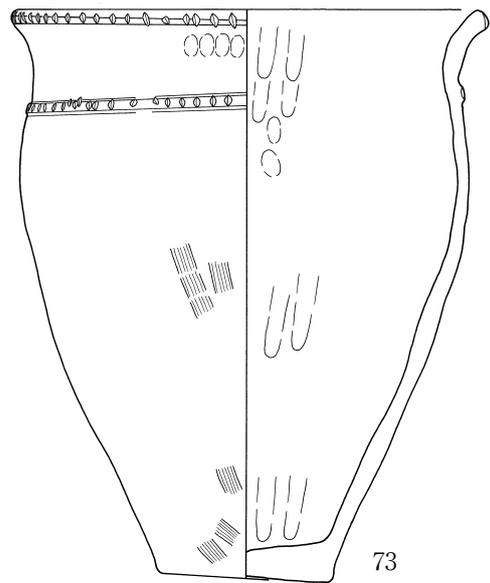
70



71



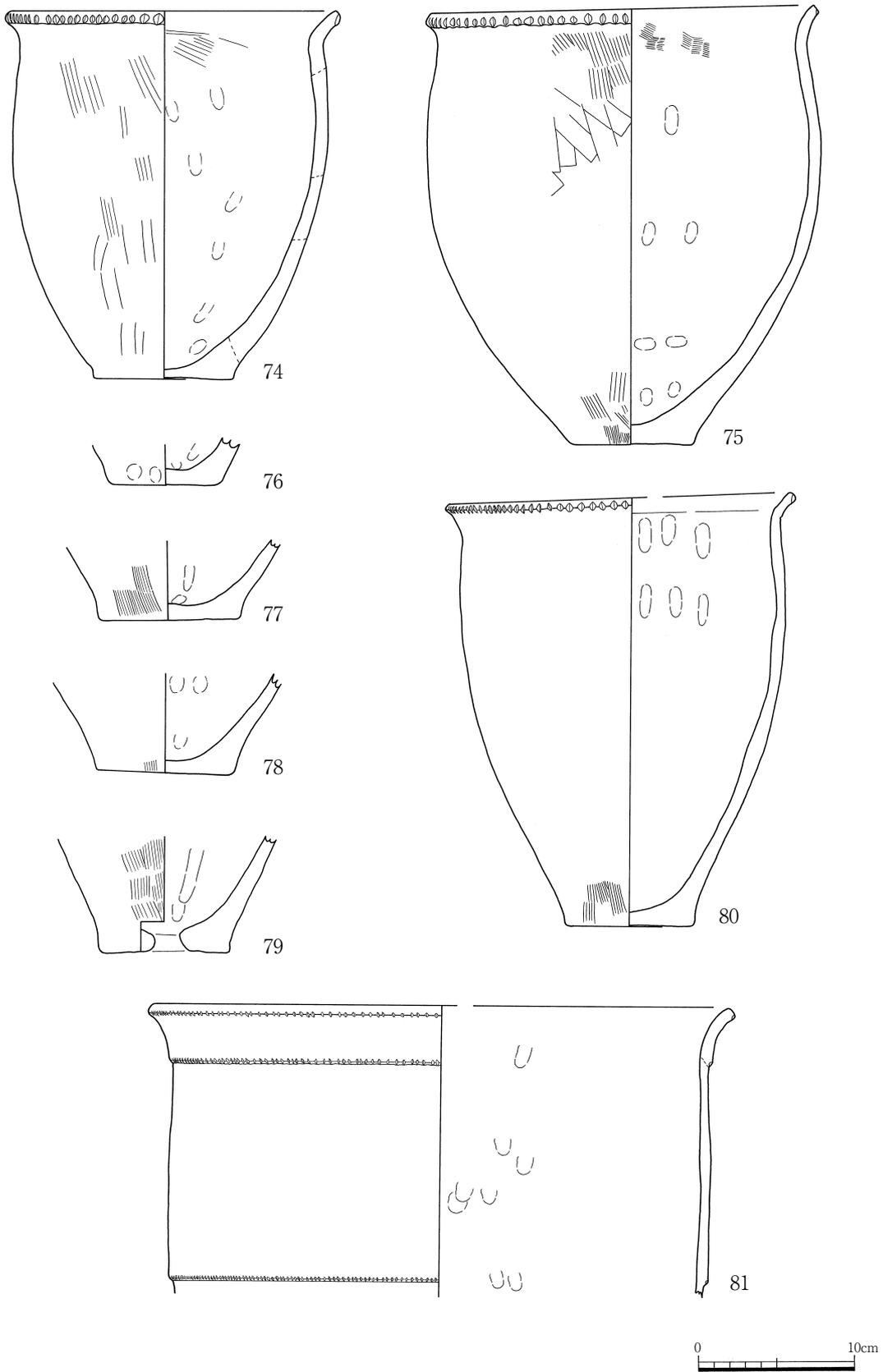
72



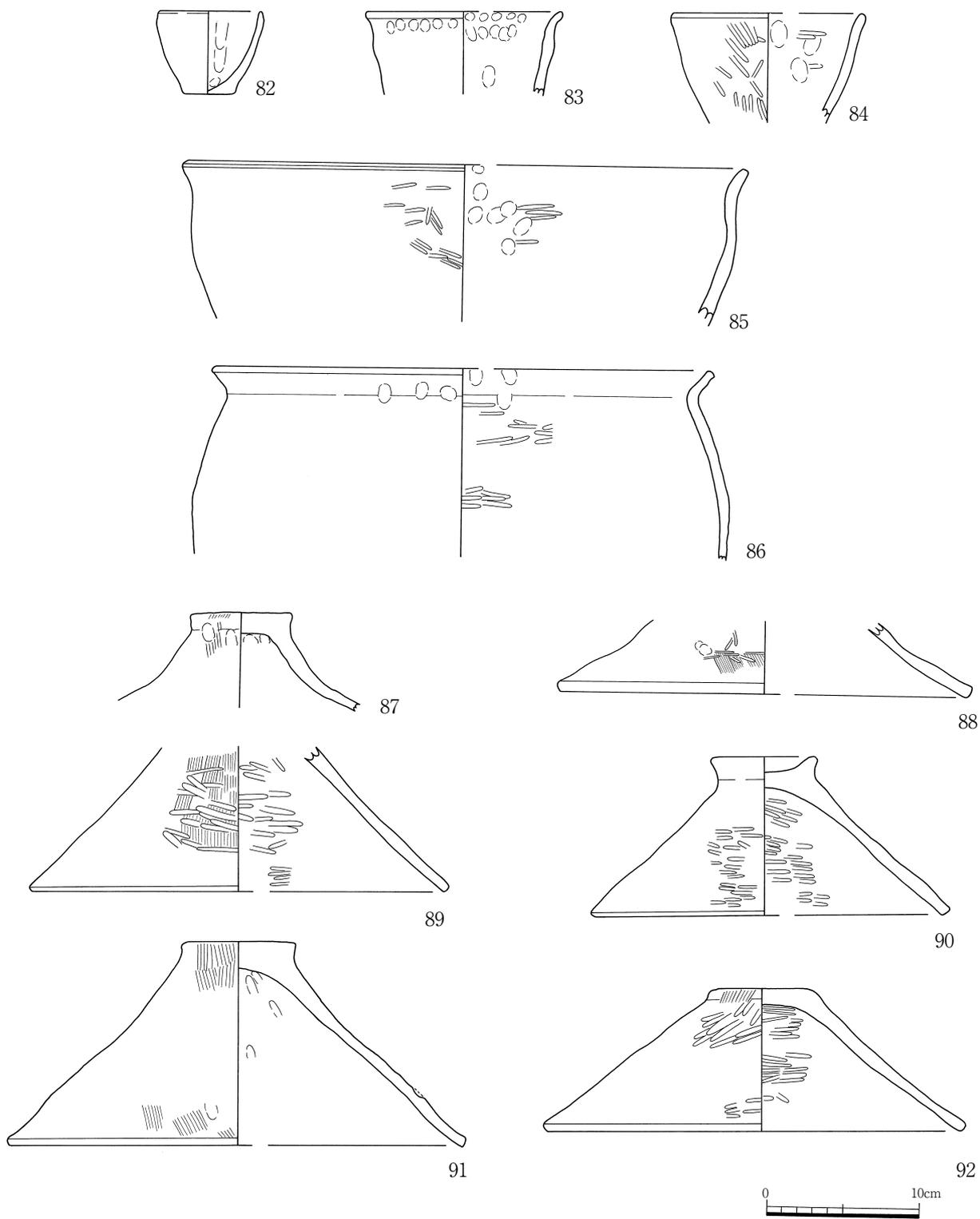
73



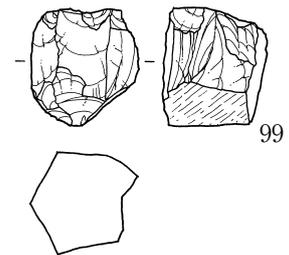
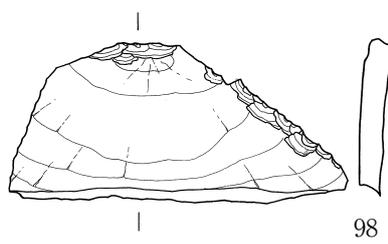
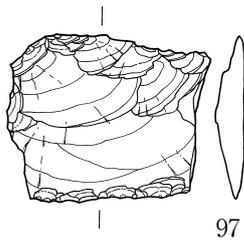
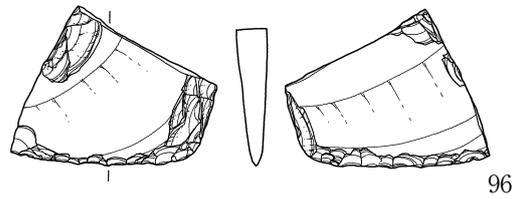
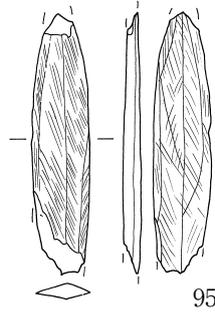
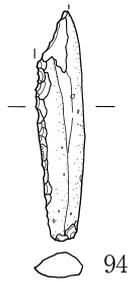
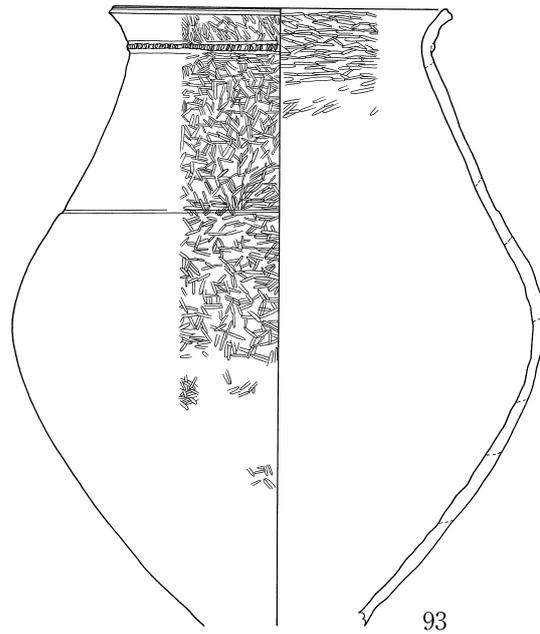
C4-17 图 C4SK4025(3)



C4-18 図 C4SK4025(4)

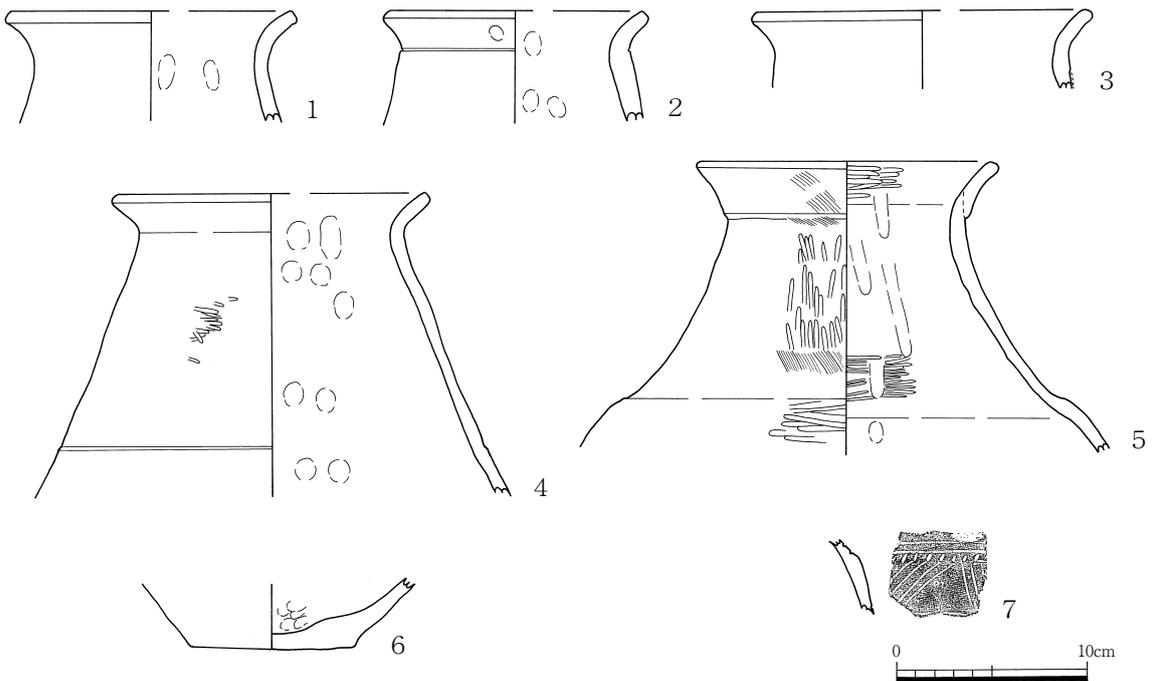
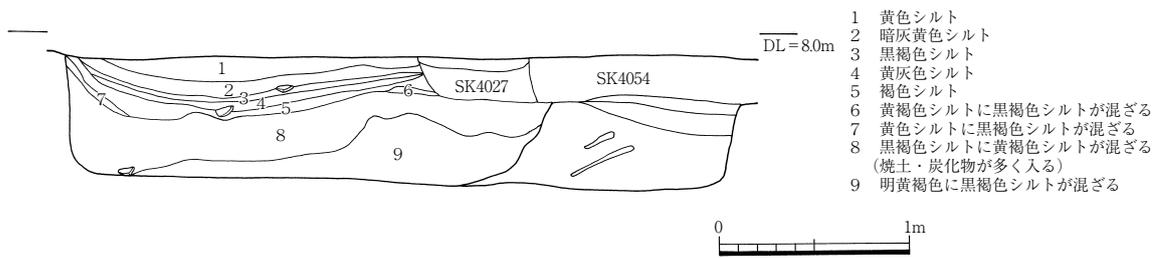
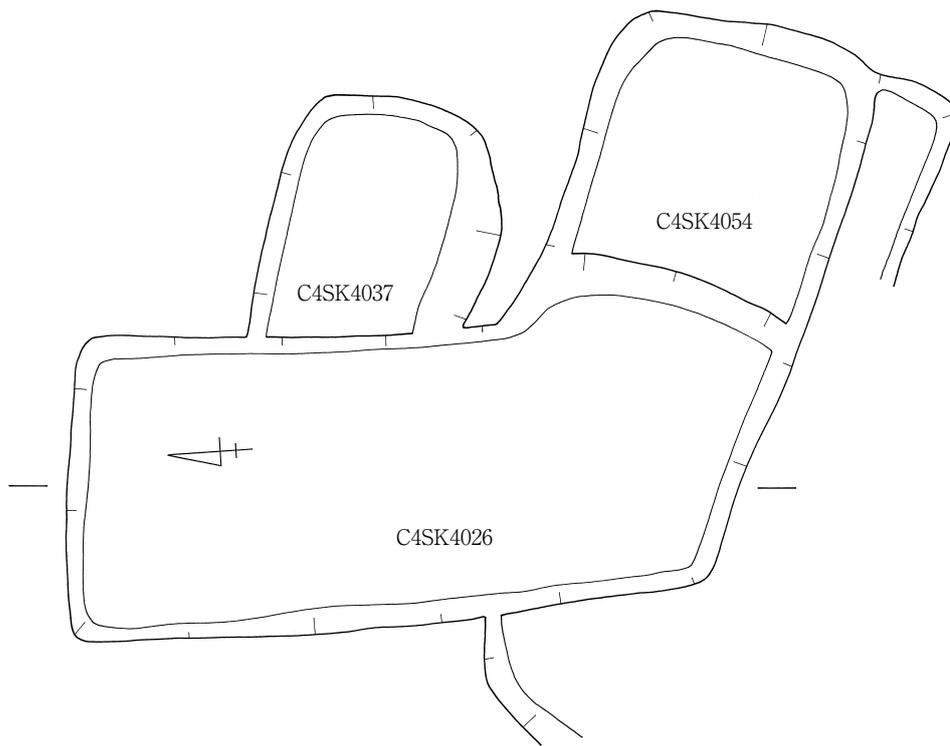


C4-19 图 C4SK4025(5)

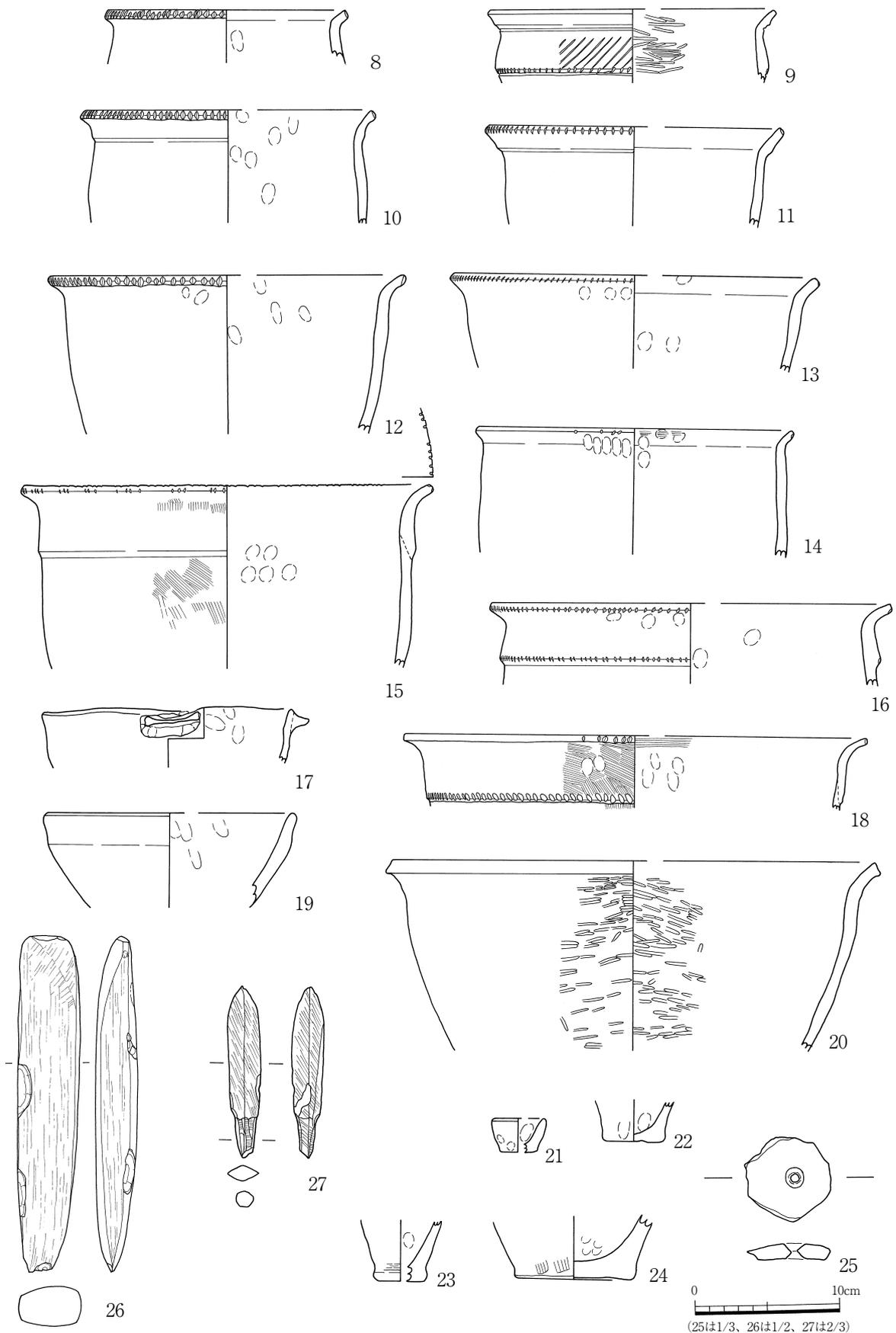


(95と99は2/3)

C4-20 図 C4SK4025 (6)



C4-21 図 C4SK4026(1)



C4-22 ☒ C4SK4026(2)

C4SK4029(C4-23~25 図)

時期；弥生I-2 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-60°-E

規模；4m×1.16m **深さ**；90cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色、黄褐色等のシルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、石斧、磨製石鏃、楔形石器など

所見；調査区の北部に位置し、SK4060 とSD405 に切られる。平面形や床面の状況から見て2基の土坑の切り合いとすべきであるが、精査をしたにも関わらず先後関係を掴むことはできなかった。従って遺物も分けて取り上げることはできなかった。

出土遺物は壺(2~8)、甕(9~27)、鉢(1・28)、蓋(29)を図示した。壺は5が小型、7・8が大型、他は中型である。4・8は口縁部に段、5の口頸部間にはヘラ描沈線が見られる。甕は13・14・18・22・27の5点に段部が見られる。沈線を施すものは認められない。口唇部刻目は下半に施すものが多い。27は焼成後に1.5~2.0cmの孔を穿つ。石器は、磨製石鏃(30)、扁平片刃石斧(31)、楔形石器(32・33)が見られる。30は刃部が短く非対称の稜線が一方の面にのみ作られ、他面は平坦な面をなす。粘板岩製である。31は結晶片岩、32・33はチャートである。土器を見る限りでは、I-2期のまとまりのある資料として捉えることができる。

C4SK4032(C4-26 図)

時期；弥生I **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-29°-E

規模；2m×1.62m **深さ**；28cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色、黄褐色等のシルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；石製紡錘車

所見；調査区の北部に位置し、SK4031を切っている。床面に2個のピットが認められる。遺物は石製紡錘車片(1)のみ図示することができた。著しく被熱赤変している。埋土からI-2~3に属するものと考えられる。

C4SK4034(C4-26~30 図)

時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-27°-E

規模；2.45m×1.84m **深さ**；50cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；工房の可能性

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石包丁、打製石鏃、石錐、楔形石器、チャート剥片、骨片

所見；調査区の北方に位置し、SD403に切られる。遺構の床面中央に径70cmの柱穴と考えられるピットがあり、南北の壁際にも対応関係を持つと考えられる小ピットが存在する。主な埋土は1・

2層で、図示したように1層中から多くの遺物が出土している。2層が埋まった段階で一気に捨てられたものである。土器は、壺(1・4・6)、甕(5・7~26)、鉢(27~30)が見られる。出土土器の組成として甕が圧倒的に多い。壺は1・3のように口縁部の発達したものが見られる。中型に属し大型壺は見られない。甕は上胴部に少条のヘラ描沈線や列点文をもつものが多く見られる(7~10・11~18・20)。口唇部の刻目は全面に施されるものも多く、外面のハケ調整もナデ消さないものが多い。鉢は口縁部が内湾するタイプ(27)と外反(28~30)が見られる。内外面ともにハケ調整が施される。この他紡錘車(31)が出土している。磨製石包丁 32 は流紋岩質岩製で搬入品である。両端を欠損しているが三角形の外湾刃、両刃である。両面から2孔を穿っている。33~35は磨製石鏃である。断面形は34が平行四辺形、35は長方形でかなり退化した形状を示している。36~41は打製石鏃、石材はすべてサヌカイトである。42~45は石錐、46・47・49は楔形石器、石材はともにチャートである。48はサヌカイト製刃器である。またチャートの石錐174点と楔形石器が110点余、チャート剥片が5, 550g出土している。この他に、白色化した骨片が多く出土している。哺乳類(ニホンジカの角)、鳥類(ガン・カモ類)、硬骨魚類(ニシン亜目の椎骨)などである。SK4043はI-3期の良好な一括資料である。

C4SK4035(C4-31 図)

時期：弥生I-3 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-59°-W

規模：1.42m×0.73m **深さ**：24.55 cm **断面形態**：逆台形

埋土：黒褐色シルトを基調とする

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区の北方に位置する土坑である。2層の下層に炭化物を含んでいる。図示できた遺物は甕1点(3)のみである。

C4SK4036(C4-31 図)

時期：弥生I-3 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-21°-E

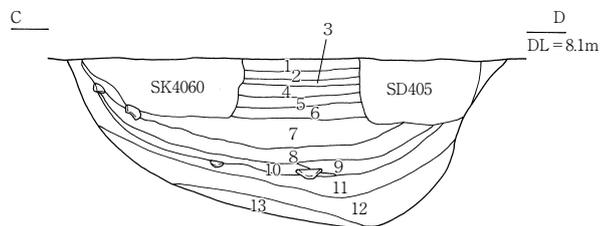
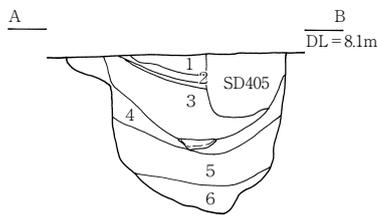
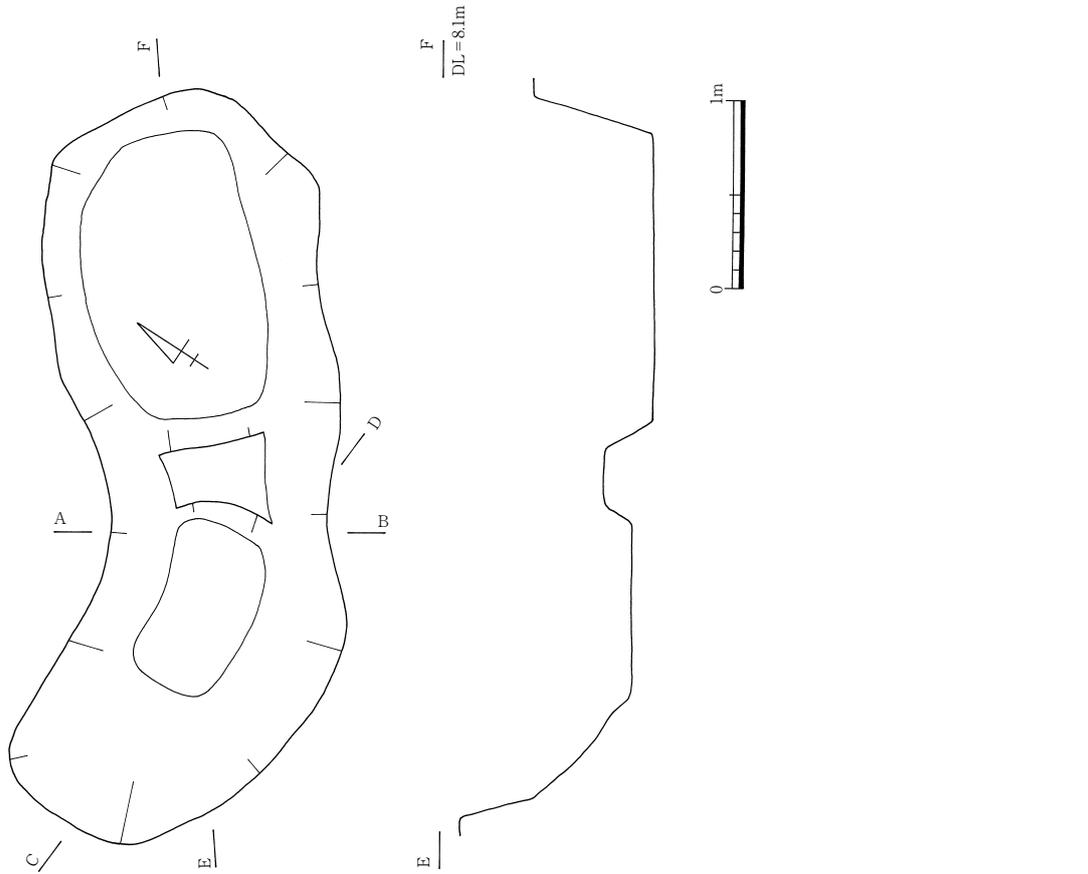
規模：1.2m×1.15m **深さ**：21cm **断面形態**：皿状

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— **機能**：—

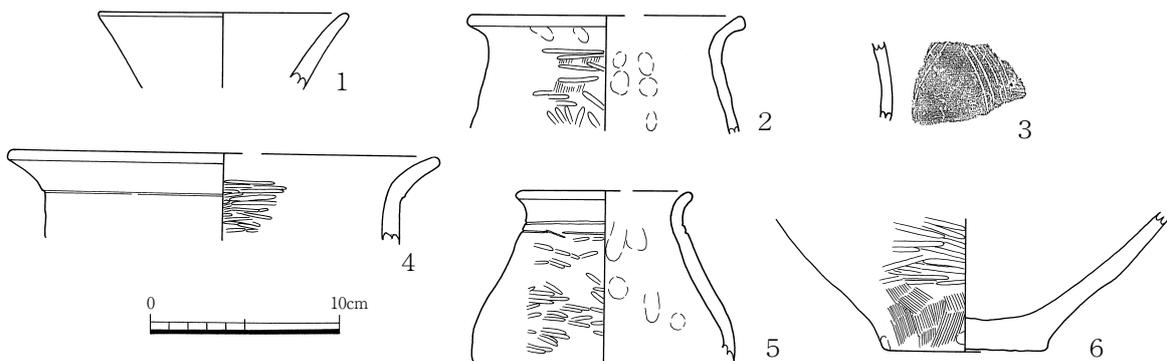
出土遺物：弥生土器(甕、鉢)

所見：調査区の北部に位置し、SD403に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする7層でレンズ状に堆積する。中層に炭化物が混じる。出土遺物は甕(1)と鉢(2)が見られる。1は弱い段を有する。

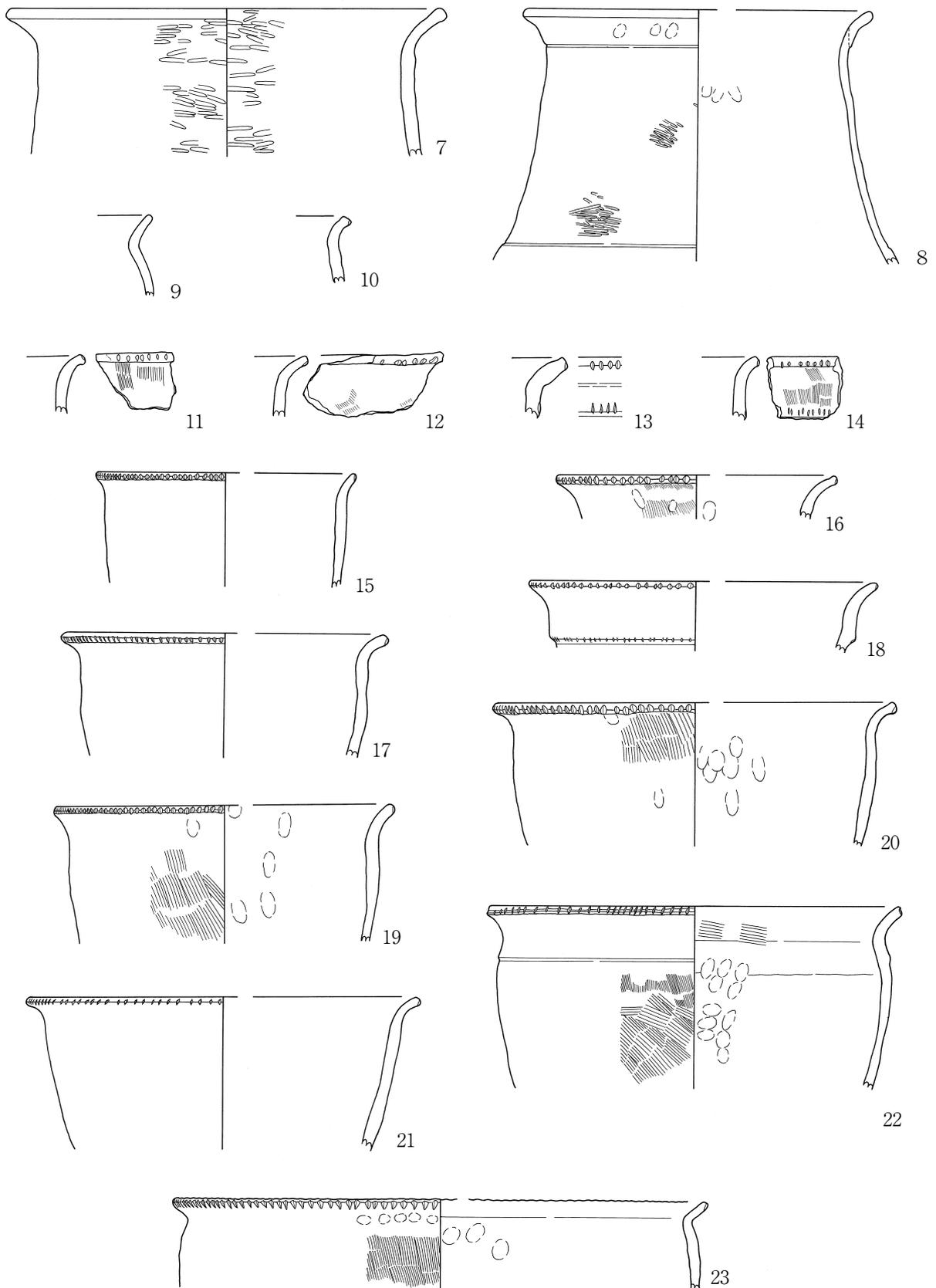


- 1 黄褐色シルト
- 2 暗黄灰色シルト
- 3 C-Dの8層に対応
- 4 C-Dの9層に対応
- 5 C-Dの11層に対応
- 6 C-Dの12層に対応

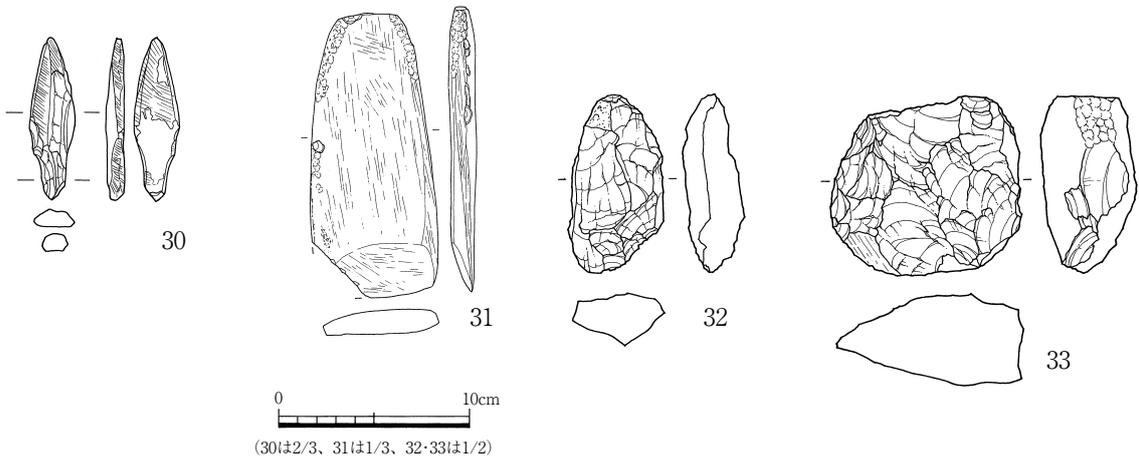
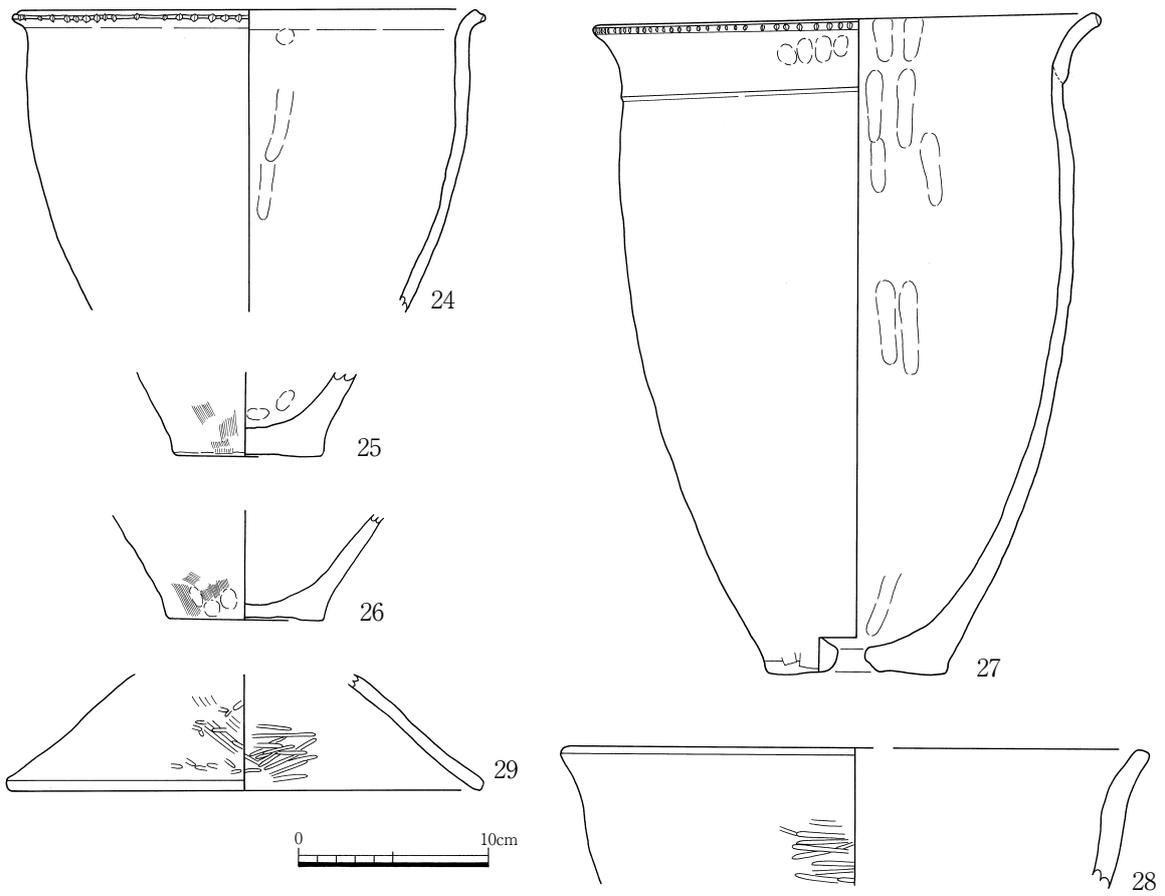
- 1 暗黄灰色シルトに黒褐色シルトと黄褐色シルトが入る
- 2 黄色シルト
- 3 黄褐色シルト
- 4 暗黄灰色シルト
- 5 黒褐色シルト
- 6 黄灰色シルト
- 7 黒褐色シルト
- 8 暗黄灰色シルト
- 9 黄灰色シルト
- 10 黒褐色シルト
- 11 暗灰色粘性シルト
- 12 黄灰色粘性シルト
- 13 暗灰色粘性シルト



C4-23 図 C4SK4029 (1)

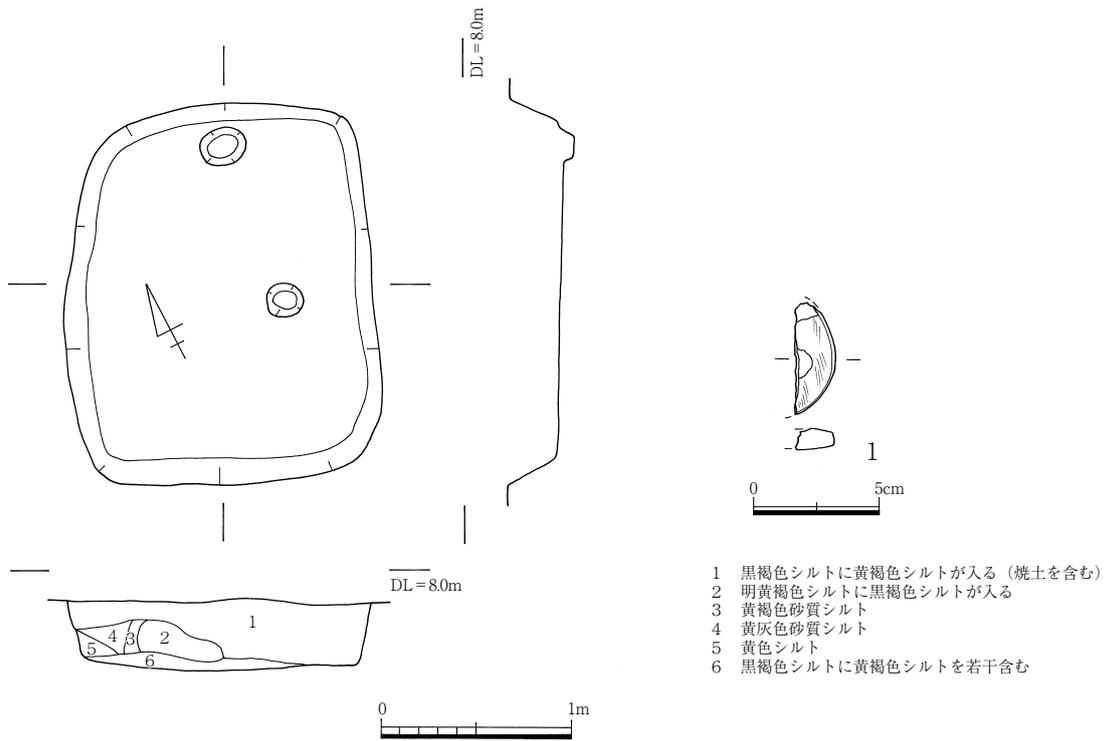


C4-24 図 C4SK4029 (2)

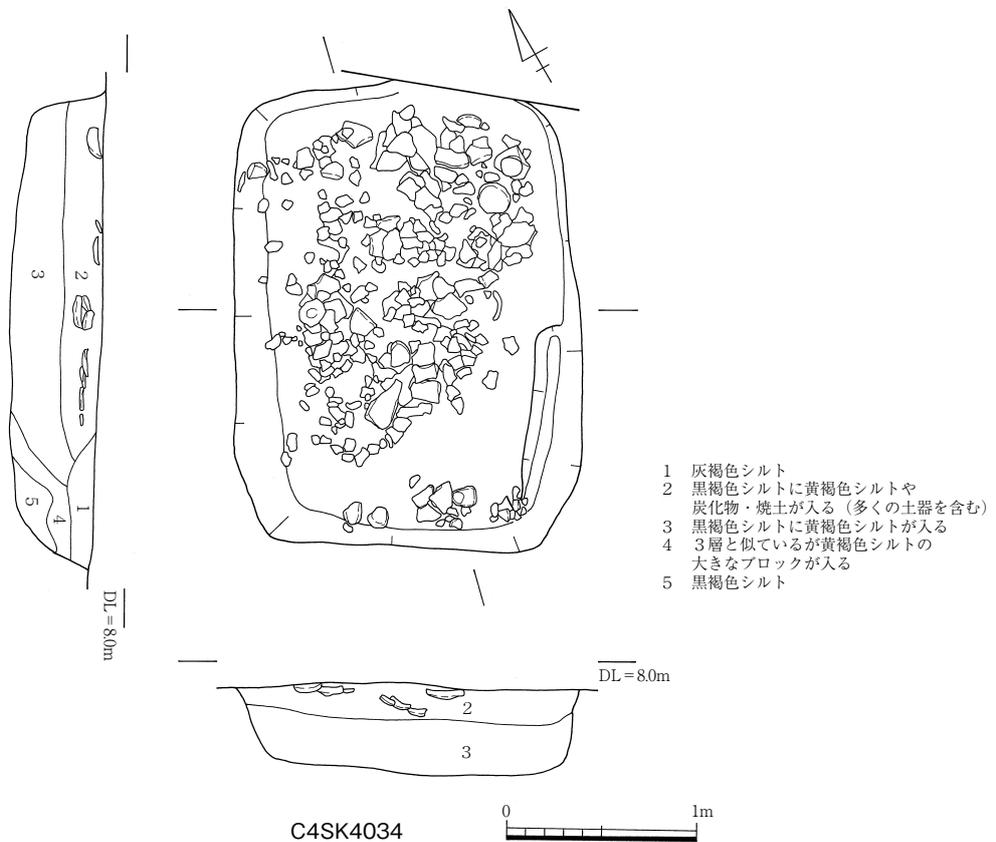


(30)±2/3、31)±1/3、32-33)±1/2)

C4-25 ☒ C4SK4029(3)

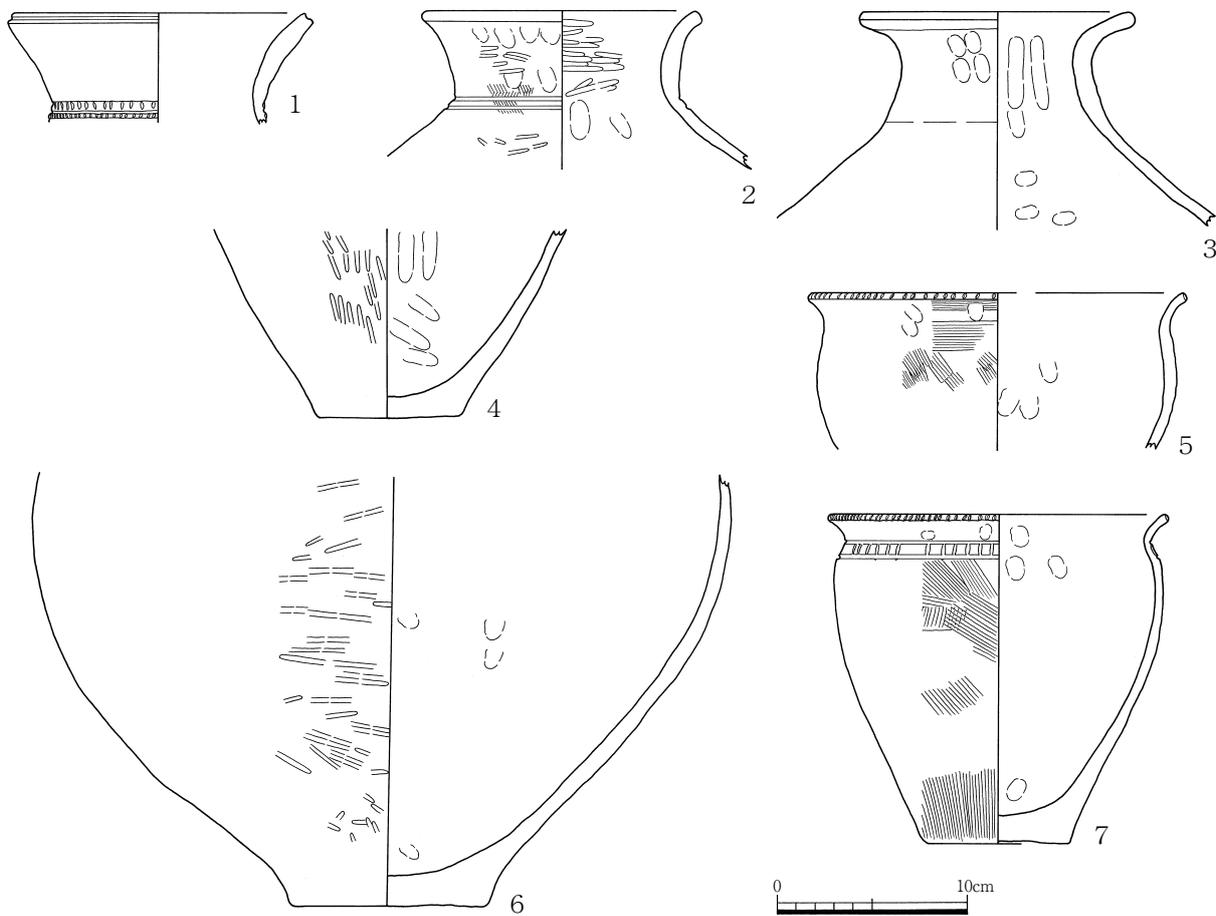
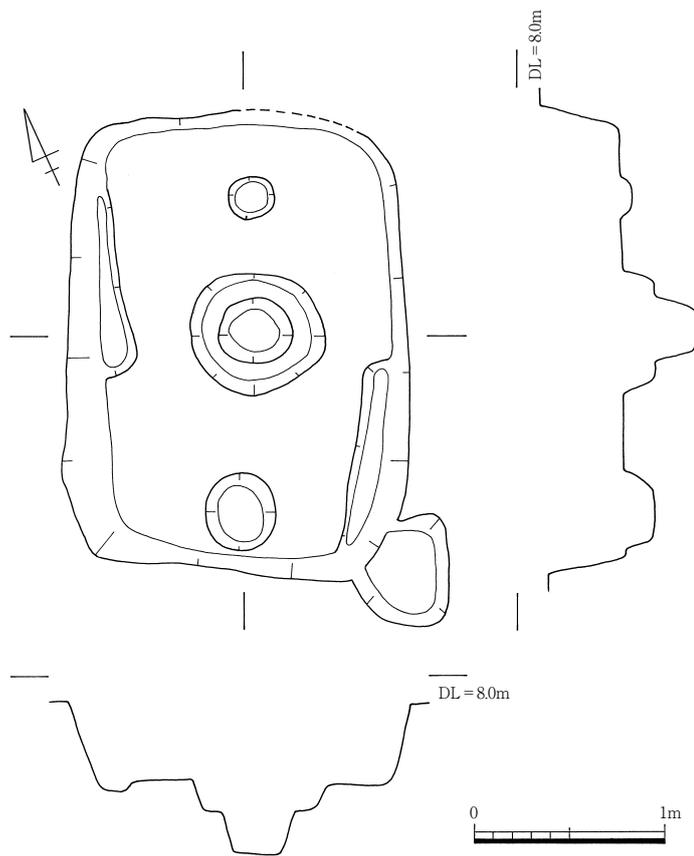


C4SK4032

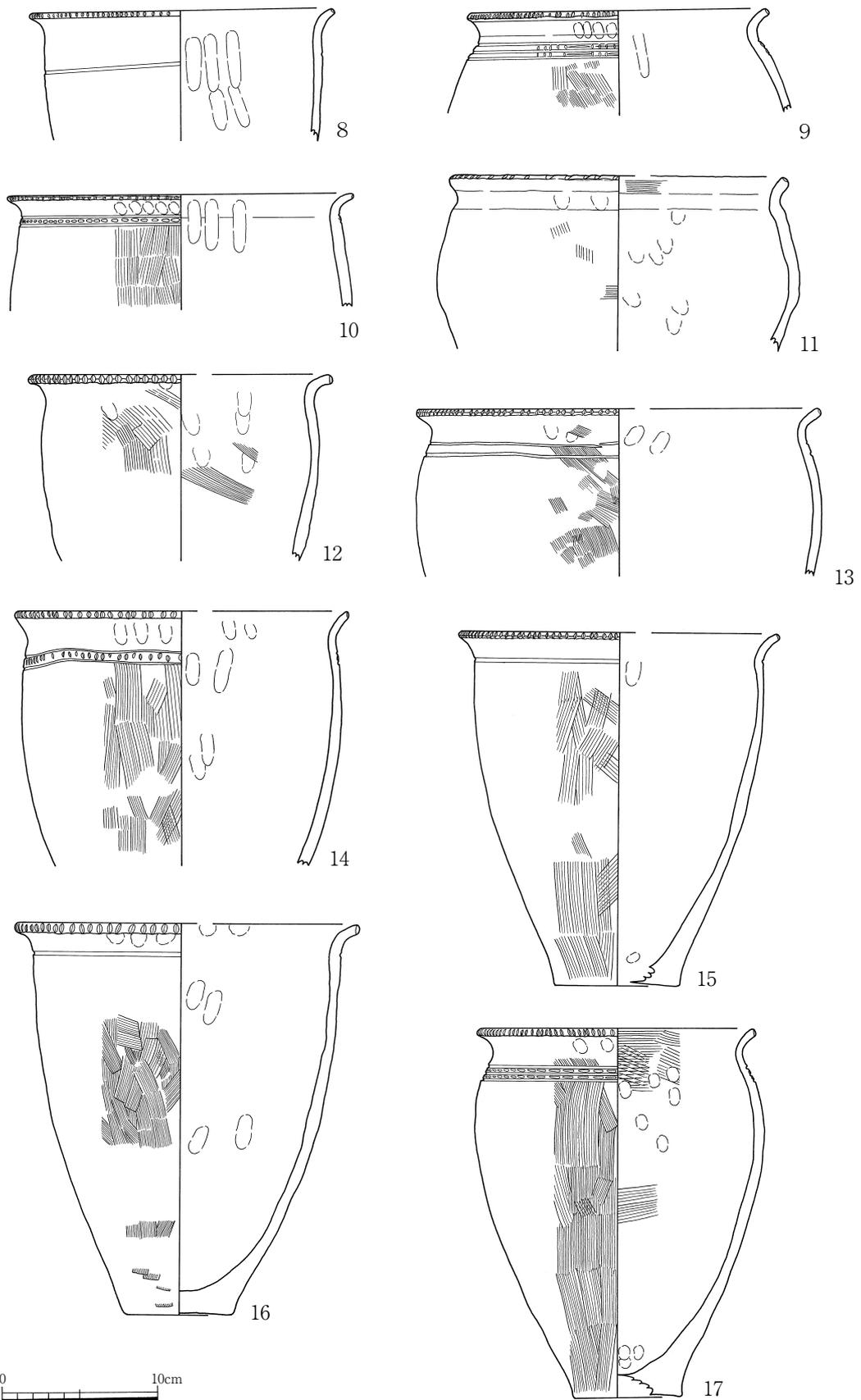


C4SK4034

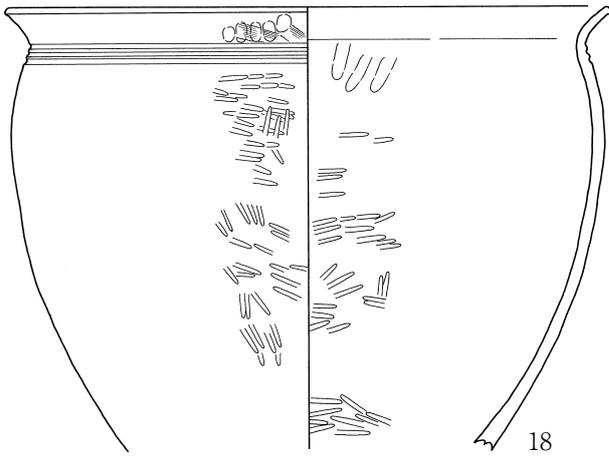
C4-26 図 C4SK4032・4034



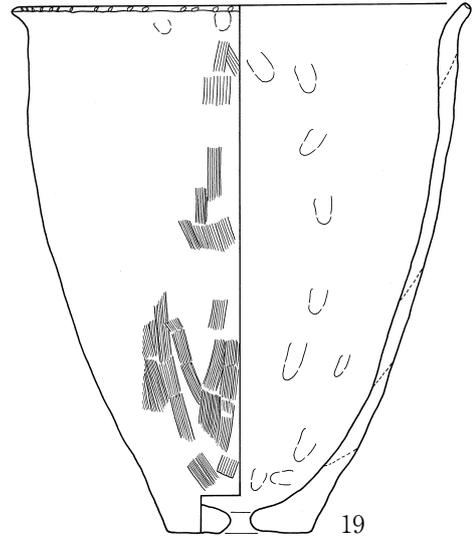
C4-27 ☒ C4SK4034 (1)



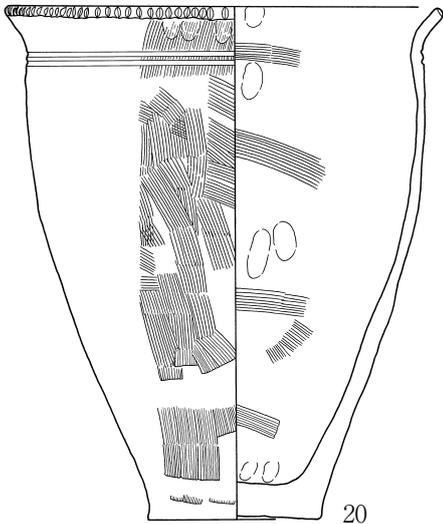
C4-28 図 C4SK4034 (2)



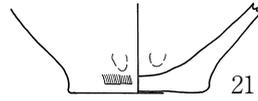
18



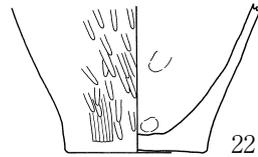
19



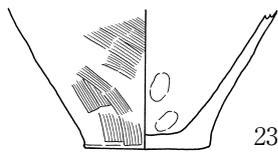
20



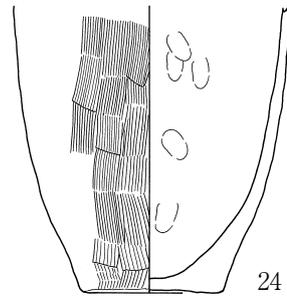
21



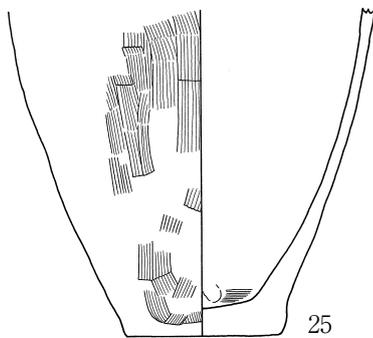
22



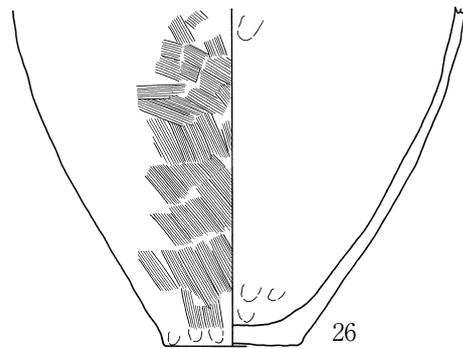
23



24



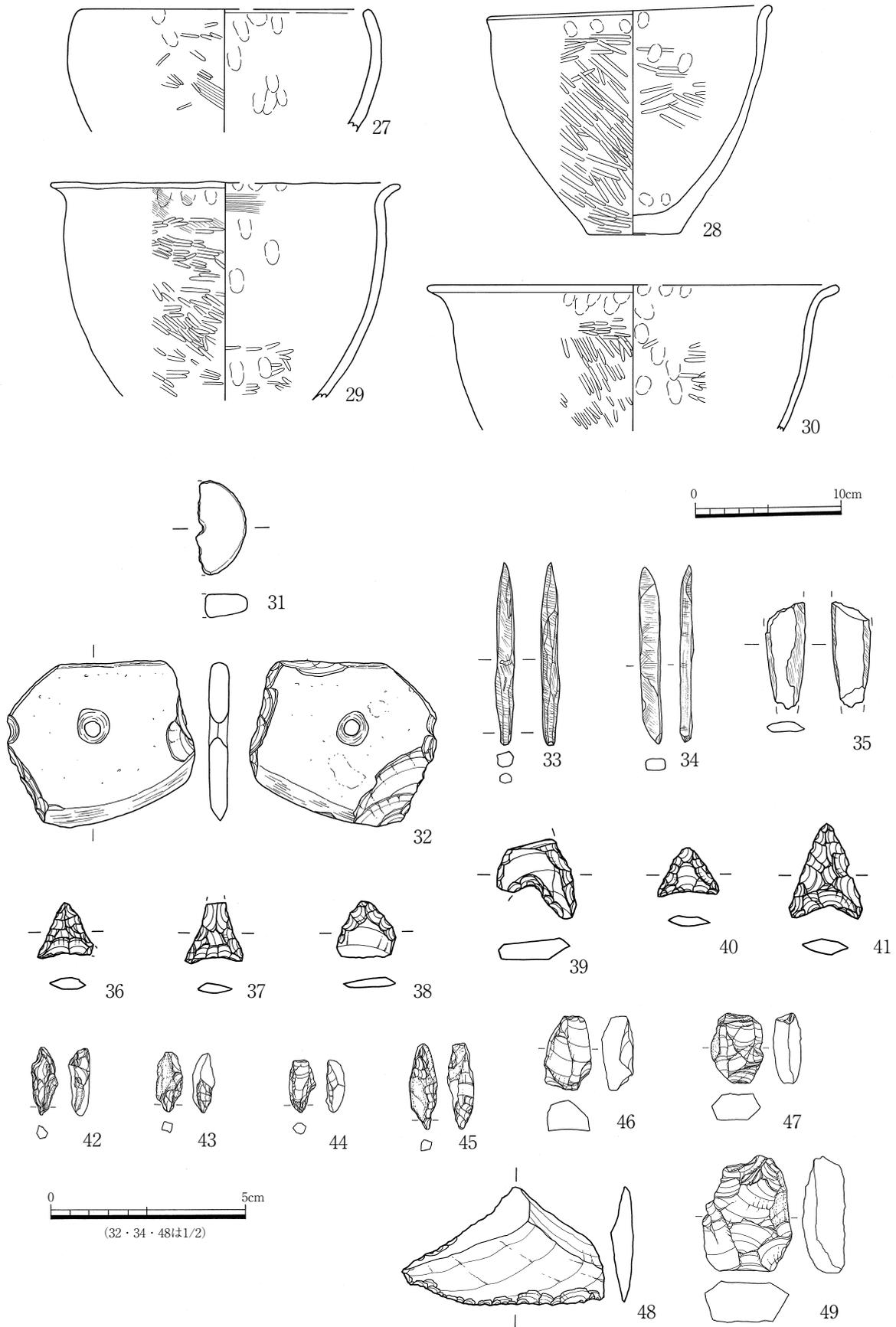
25



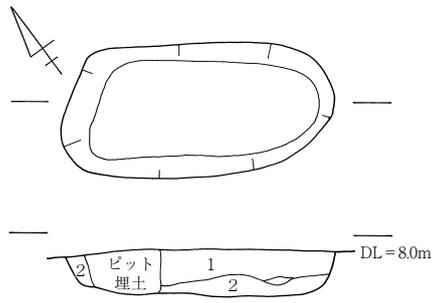
26



C4-29 图 C4SK4034 (3)

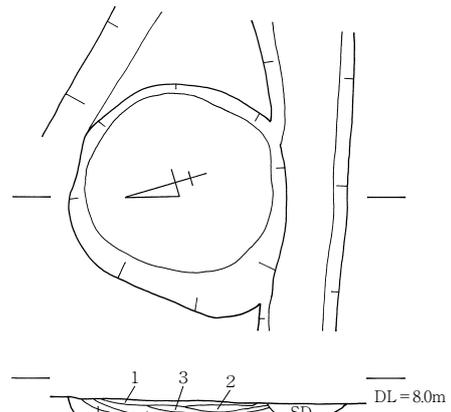


C4-30 図 C4SK4034 (4)



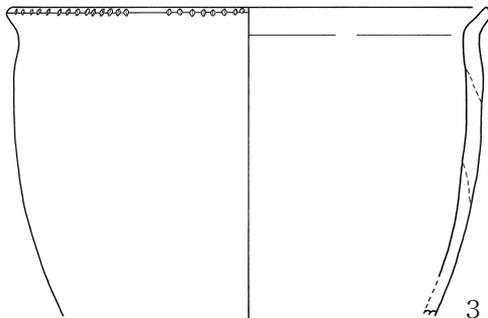
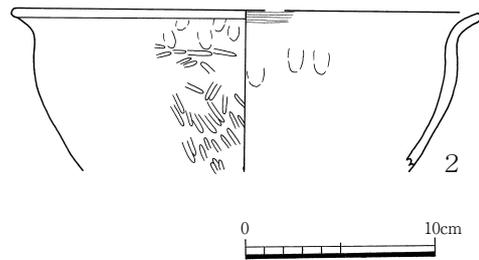
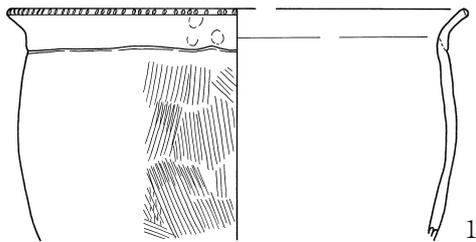
- 1 黒褐色シルト
- 2 黒褐色シルトに灰黄褐色シルト・炭化物

C4SK4035



- 1 灰褐色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 黒褐色シルト (7.5YR3/2)
- 4 黒褐色シルト (7.5YR2/2)
- 5 灰褐色シルト 炭化物を含む
- 6 褐色シルト
- 7 褐色シルトに地山の黄色シルトのブロックを含む

C4SK4036



C4-31 図 C4SK4035・4036(SK4035 : 3、SK4036 : 1・2)

C4SK4040(C4-32・33 図)

時期；弥生I-2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-75°-E

規模；1.65m×1.29m **深さ**；32.05cm **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、紡錘車、磨製石鏃

所見；調査区の北部に位置し、土坑(SK4014)に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層である。上層に炭化物が入り、最下層は黒褐色の粘性土である。遺物は1・2層に集中する。

出土遺物は壺(1~3・7)、甕(4~6・8)、鉢(9)、蓋(10)、紡錘車(11)、磨製石鏃(12)である。壺2・3は口頸間に段を持ち、2は頸部に複線山形文を有する。甕4はしっかりした段部を持つ。11は上面に多数の刺突が施される。12の刃部断面は扁平な六角形、茎部は四角形である。

C4SK4043(C4-34 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-11°-E

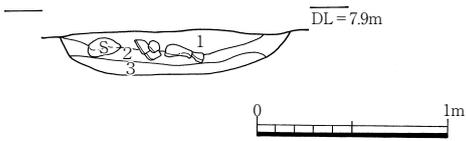
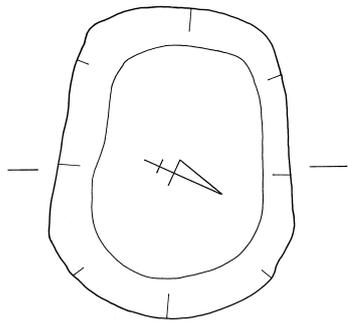
規模；1.26m×0.95m **深さ**；21.5cm **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト

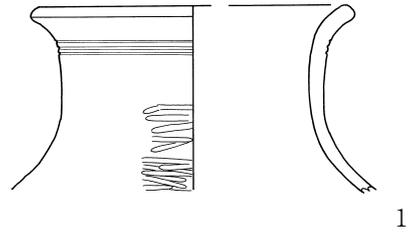
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、磨製石鏃、石錐、楔形石器、チャート剥片、獣骨

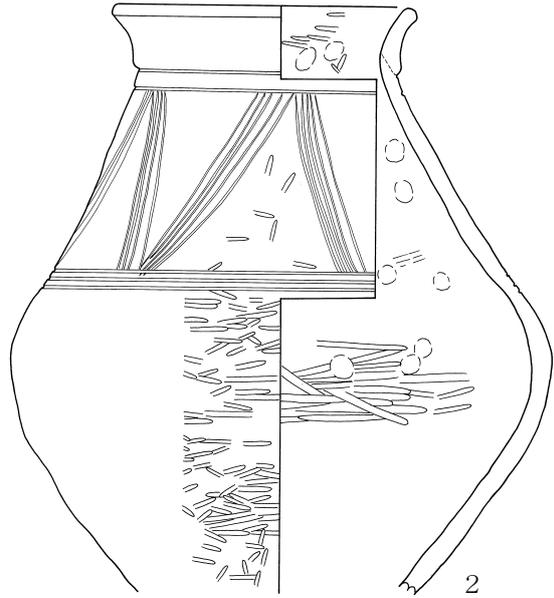
所見；調査区の西方に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調に黄褐色シルトが混じり、埋土中に多量のチャートの剥片が入る。出土遺物は壺(1)、甕(2~7)、磨製石鏃(8・9)、石錐(10・11)、楔形石器(12・13)である。壺(1)は口頸間に2条、頸胴間に4条のヘラ描沈線を巡らし前者は沈線間に刻目を配し、外面は赤彩が施されている。甕は少条の沈線を有し、口唇部の刻目は全面に施す。磨製石鏃は2点とも基部を欠損している。8は非対称の稜線を有するが、9は断面扁平な六角形で中央の稜線はない。ともに粘板岩である。楔形石器と石錐の石材はチャートである。図示できなかった楔形石器が23点、石錐が65点ある。この他チャートの剥片が800g出土している。更に、動物遺体として白色化した硬骨魚類(ニシン亜目)の椎骨が8点確認されている。I-3期の良好な一括資料である。



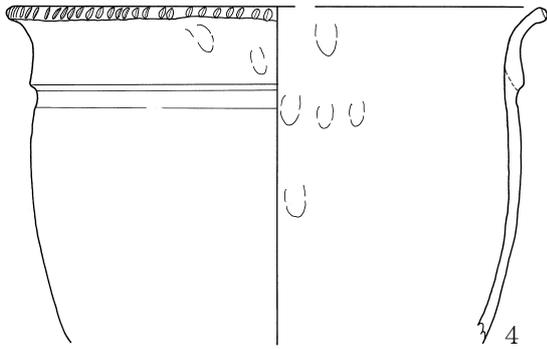
- 1 黒褐色シルトに暗灰黄色シルト・炭化物を含む
- 2 黒褐色シルトに暗灰黄色シルト
- 3 黒褐色粘土質シルト



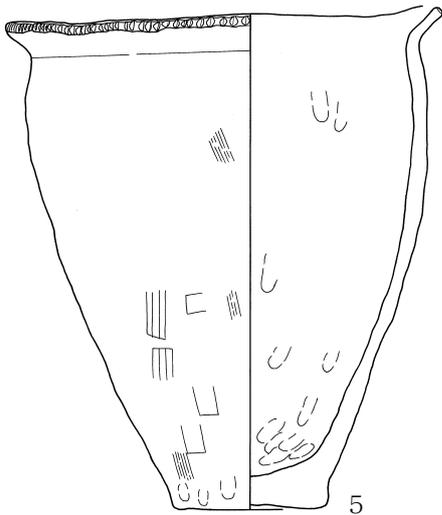
1



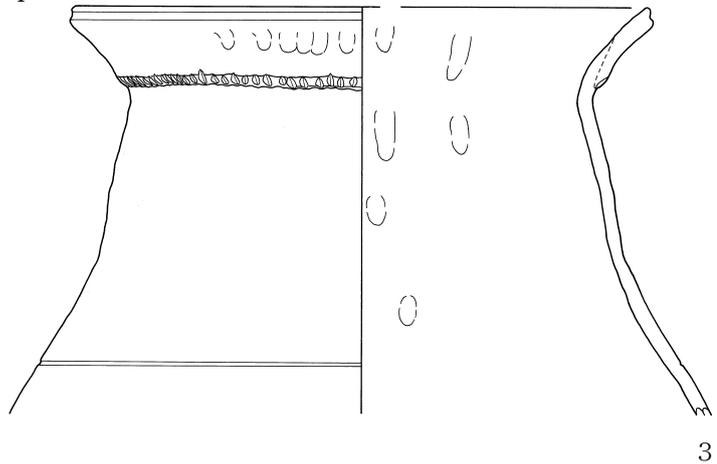
2



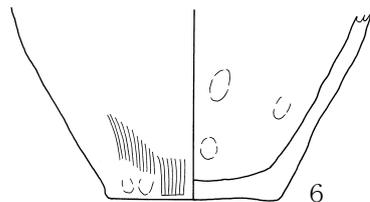
4



5

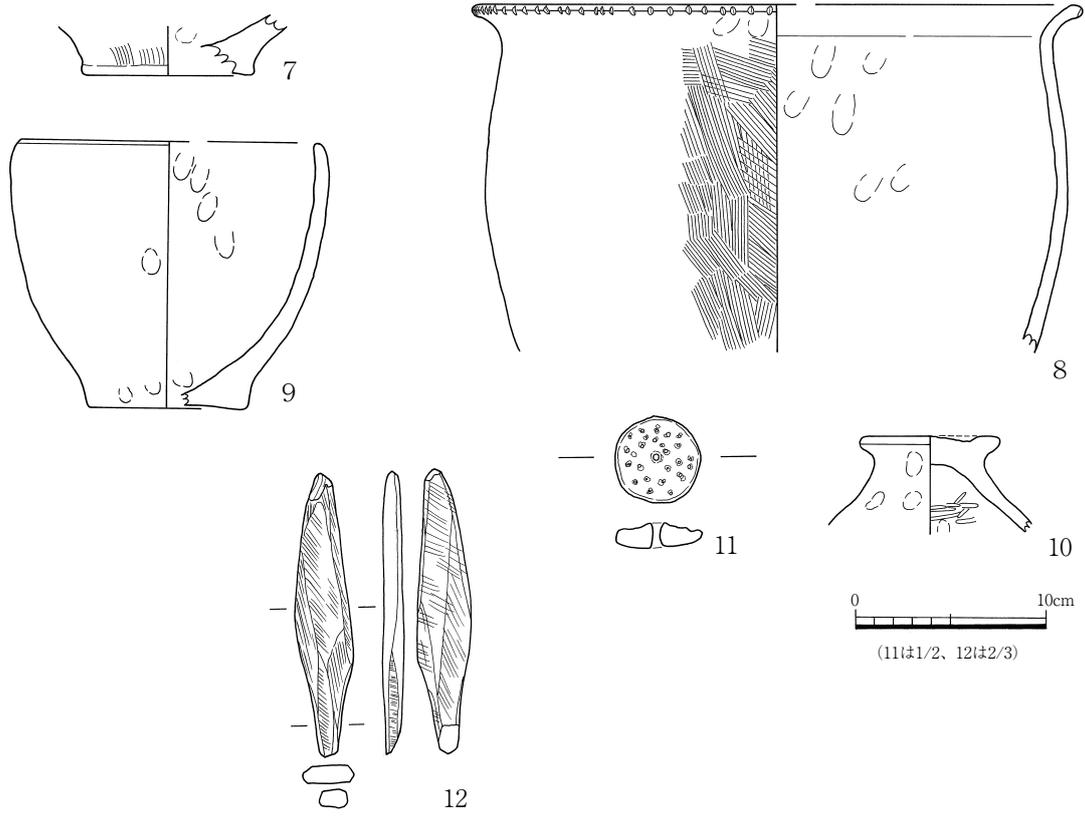


3

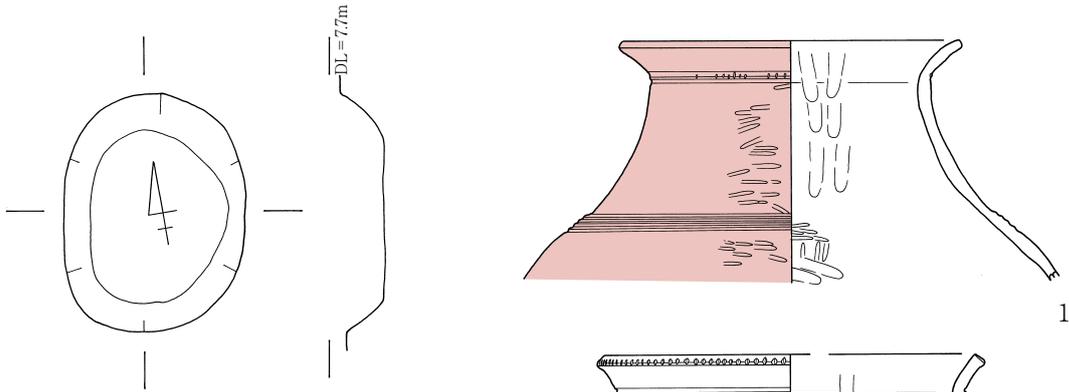


6

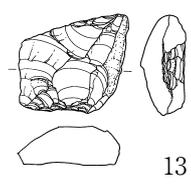
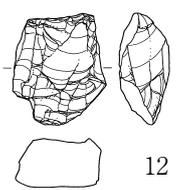
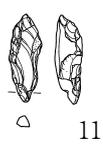
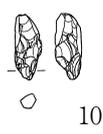
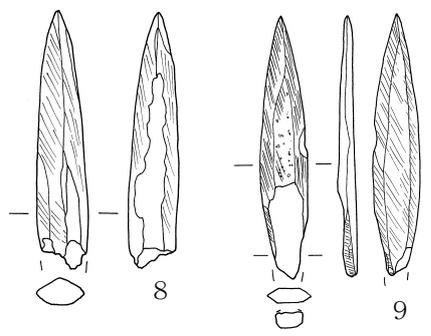
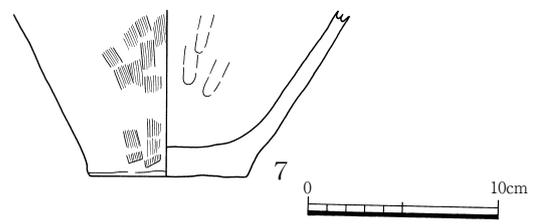
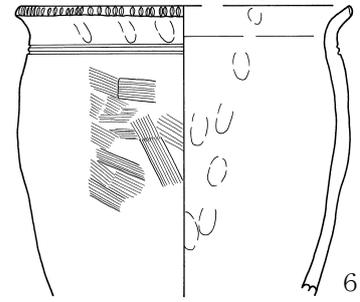
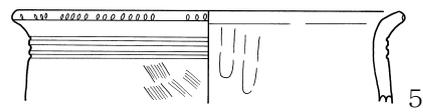
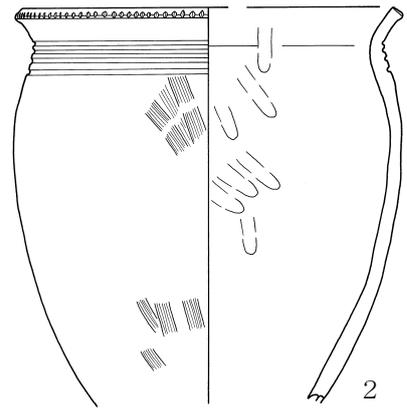
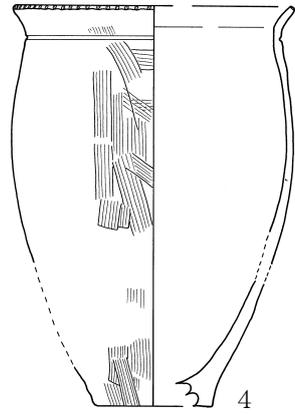
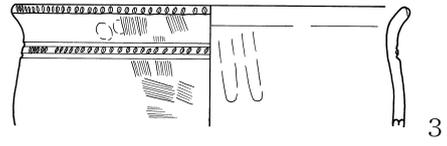
C4-32 図 C4SK4040(1)



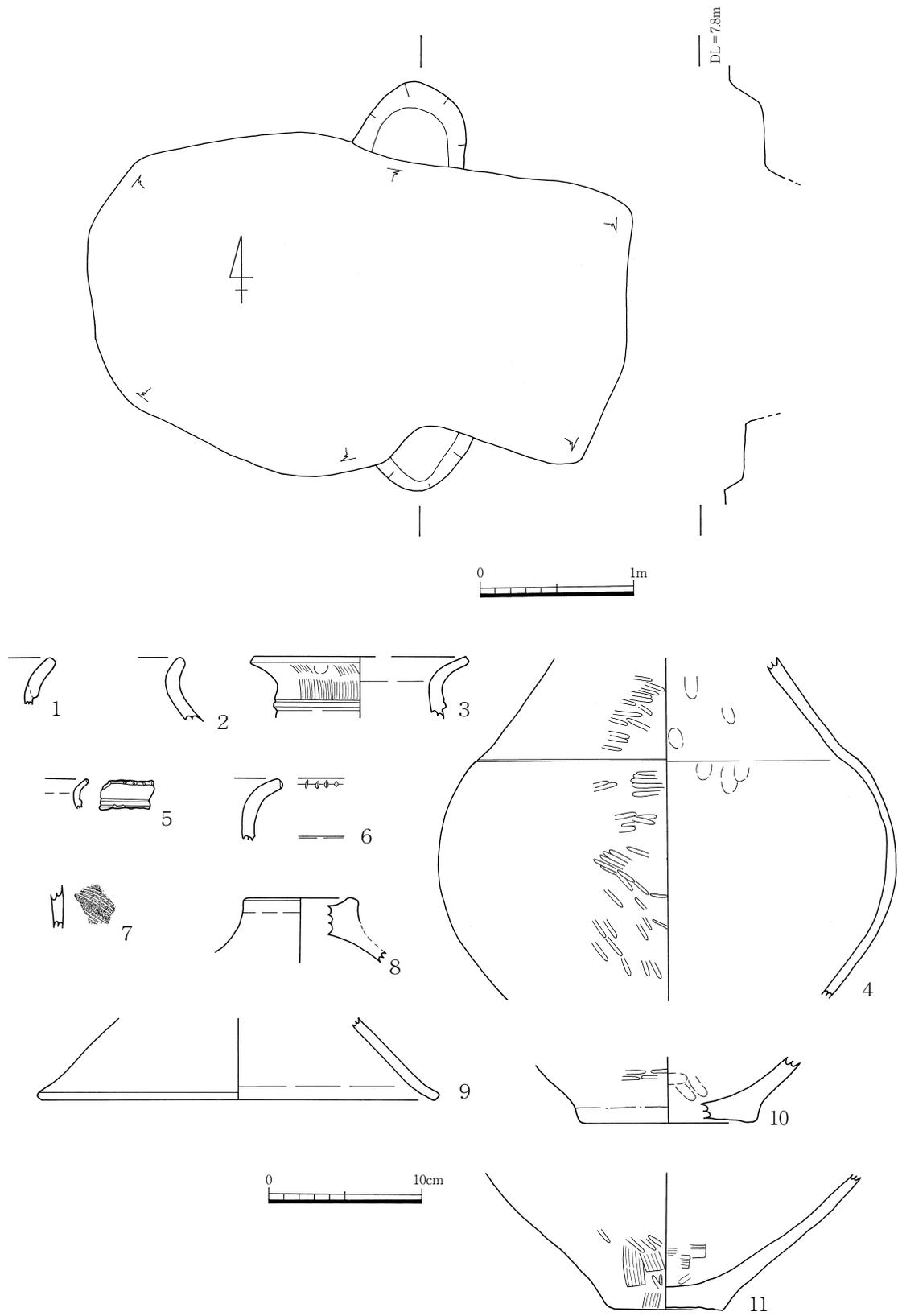
C4-33 図 C4SK4040(2)



- 1 黄灰褐色シルト
- 2 黒灰色シルトに黄褐色シルトが入る
- 3 黒褐色シルト
- 4 黒褐色シルトに地山の黄色シルトのブロックが入る



C4-34 ☒ C4SK4043



C4-35 図 C4SK4047

C4SK4047(C4-35 図)

時期；弥生I-3 **形状**；長楕円形 **主軸方向**；N-3°-W

規模；2.7m×不明 **深さ**；24.9cm **断面形態**；不明

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)

所見；調査区の中央部に位置する。攪乱土坑SK4090に切られる。遺構の北の部分が残りに、黒褐色シルトの埋土が確認できたが、層位などは不明である。遺物は細片が多い。壺(1・4・7・10・11)、甕(5・6)、蓋(8・9)を図示し得た。壺1・3と甕6に段部を有し、5は頸部に沈線文を配する。

C4SK4048(C4-36~42 図)

時期；弥生I-2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-62°-W

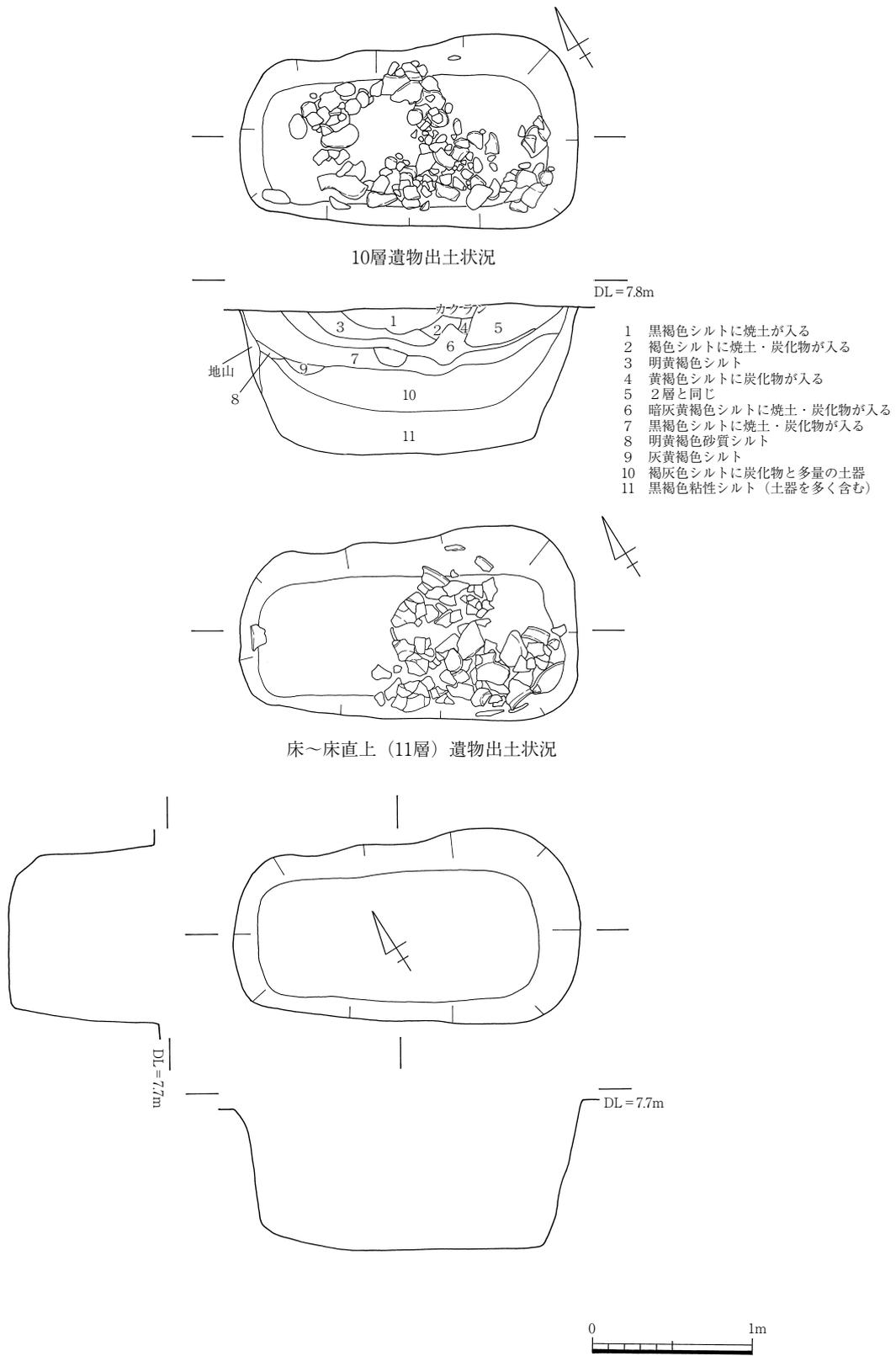
規模；2.18m×1.23m **深さ**；92.7cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色シルト

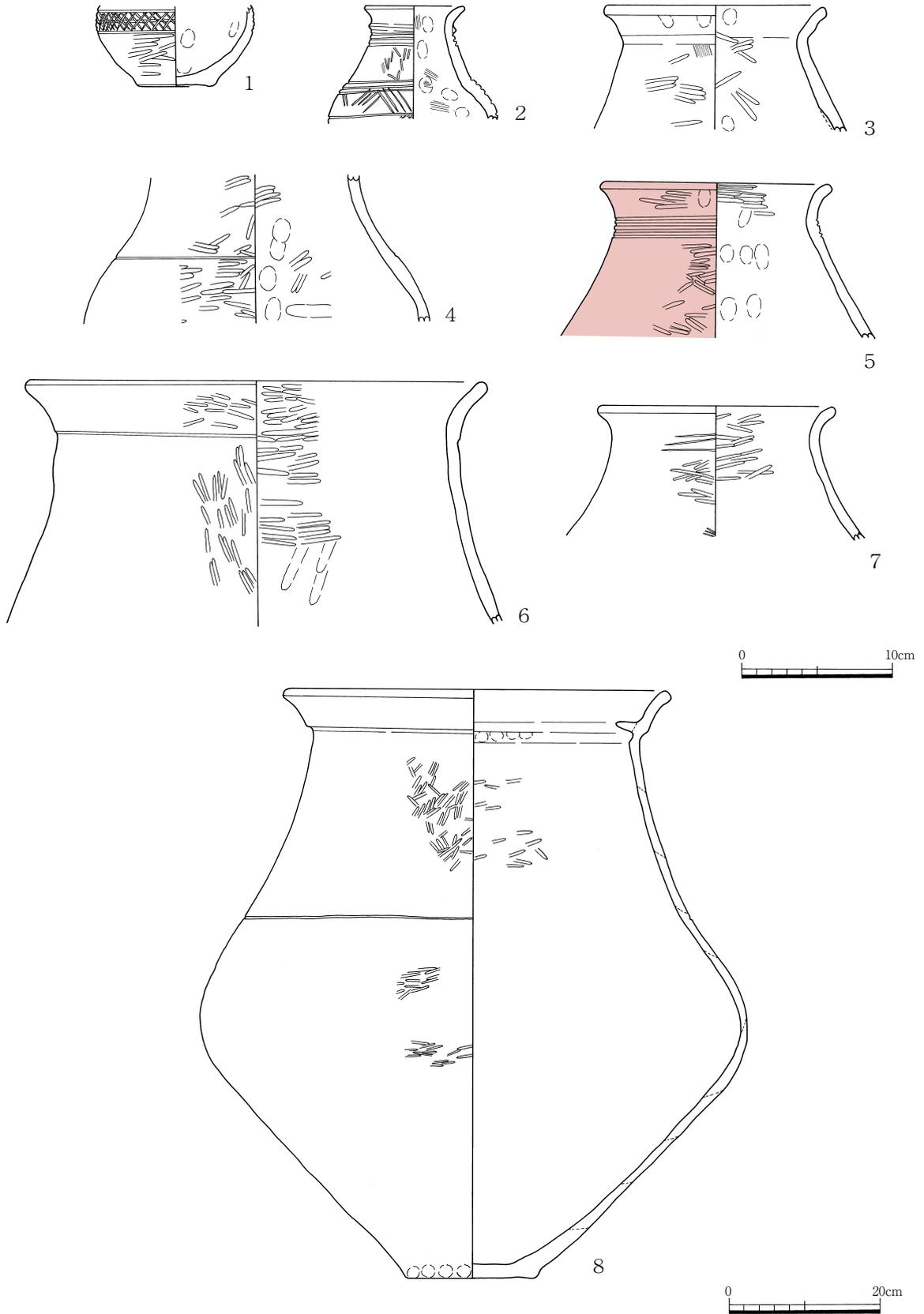
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋、高杯)、磨製石鏃、獣骨

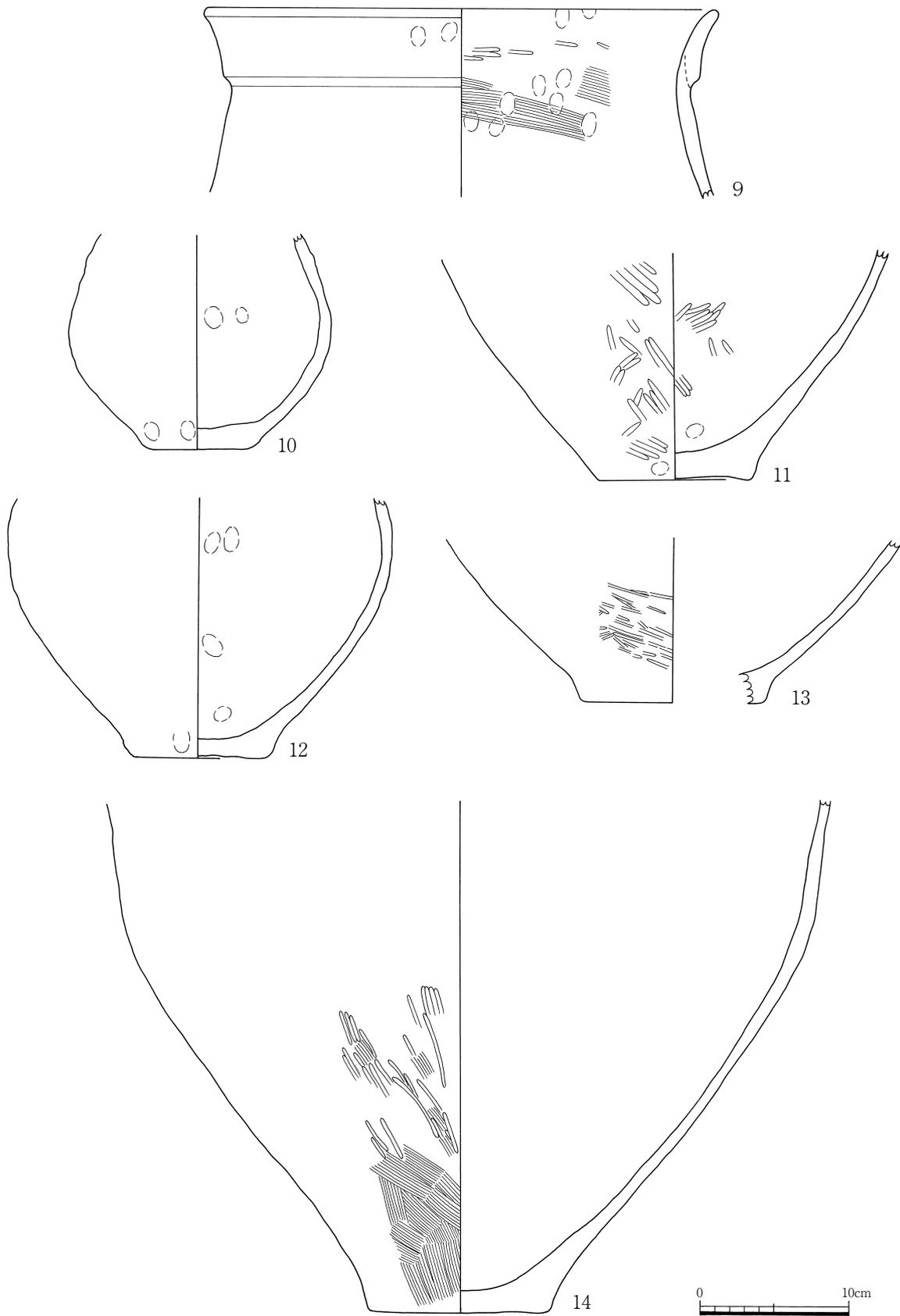
所見；環濠内中心部に位置する土坑である。大量の遺物が焼土・炭化物とともに出土している。埋土は黒褐色シルトを基調とする13層で上層部に黄褐色シルトがブロック状に入る。1層目から焼土が混ざり、最下層まで大量の土器が炭化物とともに出土する。遺物は上層・中層・下層・最下層と大きく4段階に分けて取り上げた。壺は小型(1・2)、中型(3・5・7・10~13・16~18)、大型(6・8・9・14)、無頸壺(15)が見られる。大型壺は口縁部に段部を持ち、8は内面に鋭い突帯が籬状に巡る。5は外面に赤彩が施されている。1・12は上層、3・4・7・10・11は中層、2は下層、6・7は最下層出土である。甕は段部を持つものが2点(27・28)、他は段を持たないが沈線文も見られない。22は口縁部がほとんど外反せず、特異な刻目を施している。26・29・32~34は焼成後に1~2cmの円孔を穿っている。26・37は中層、19・21・22・24・27・29・30・32・34・35は下層、33は上・下・最下層、31は上・中層の接合資料である。38は中型、39・40は大型鉢で38と39は最下層出土である。蓋43は内外面ともに激しく煤けている。高杯は41・42ともに漏斗状を呈し42には断面三角形の突帯を貼付している。41は最下層、42は下層出土である。他に埋土中からミニチュアが5点(44~48)出土している。この他、図示し得なかった甕の口縁部が29点、壺の口縁部が15点ある。甕は段部をもつものが2点見られるが沈線を施すものは見られない。壺は7点に口縁部の段部が見られる。石器は少なく石鏃1点(49)、石錐3点(50~52)が見られるのみである。石材は前者がサヌカイト、後者はチャートである。SK4048もI-1期の良好な一括資料である。



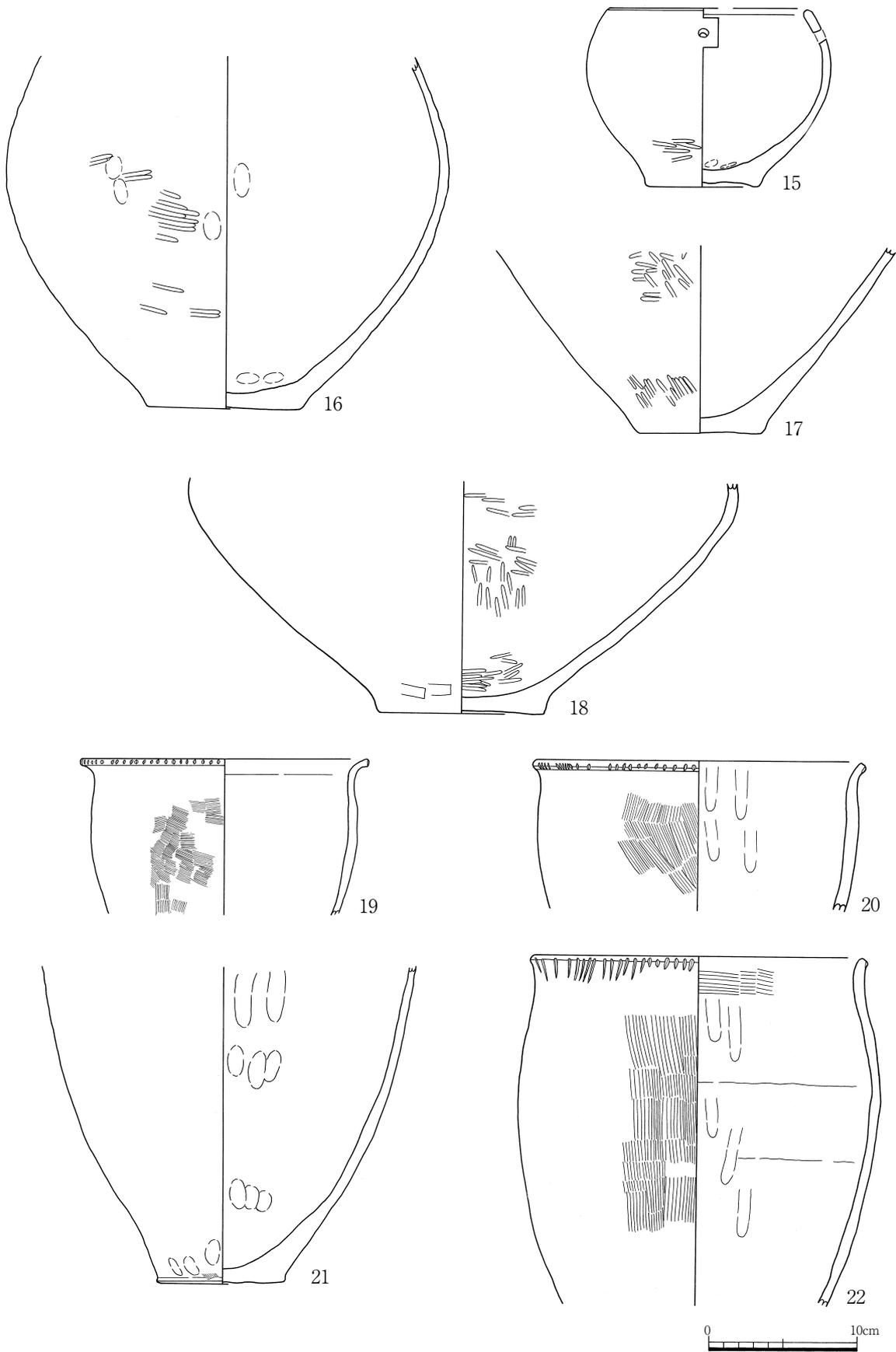
C4-36 図 C4SK4048(1)



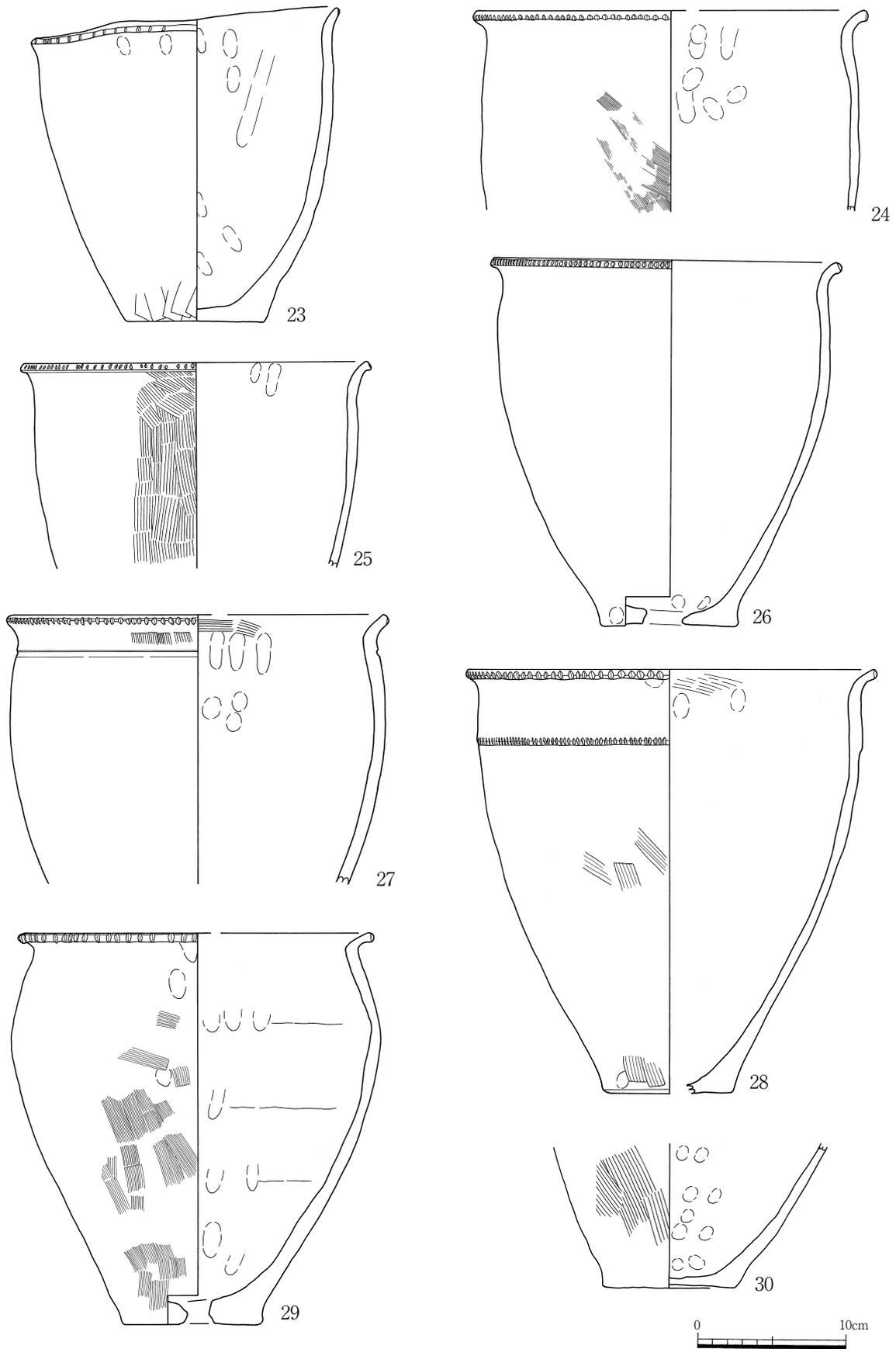
C4-37 图 C4SK4048(2)



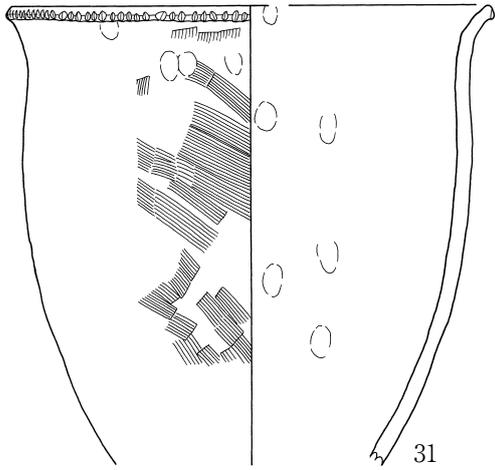
C4-38 図 C4SK4048(3)



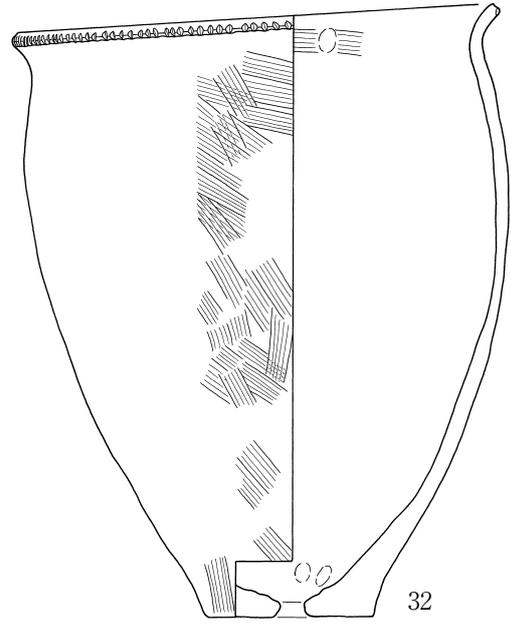
C4-39 图 C4SK4048(4)



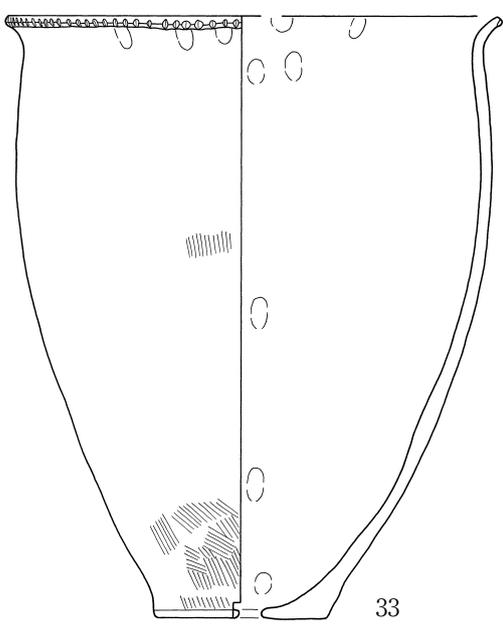
C4-40 図 C4SK4048(5)



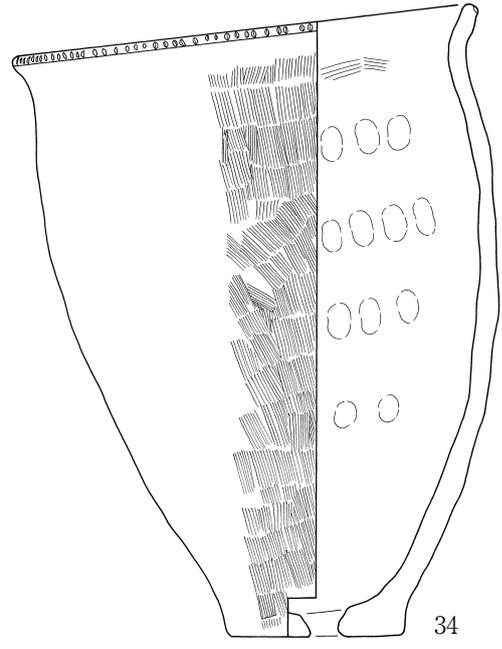
31



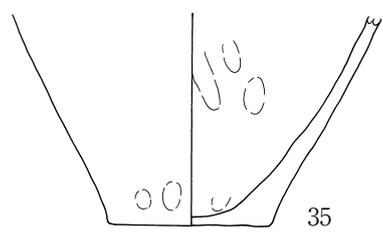
32



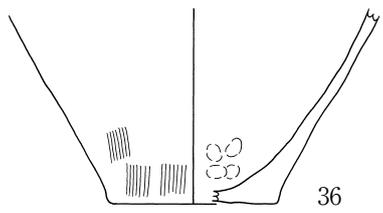
33



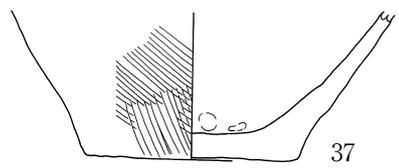
34



35



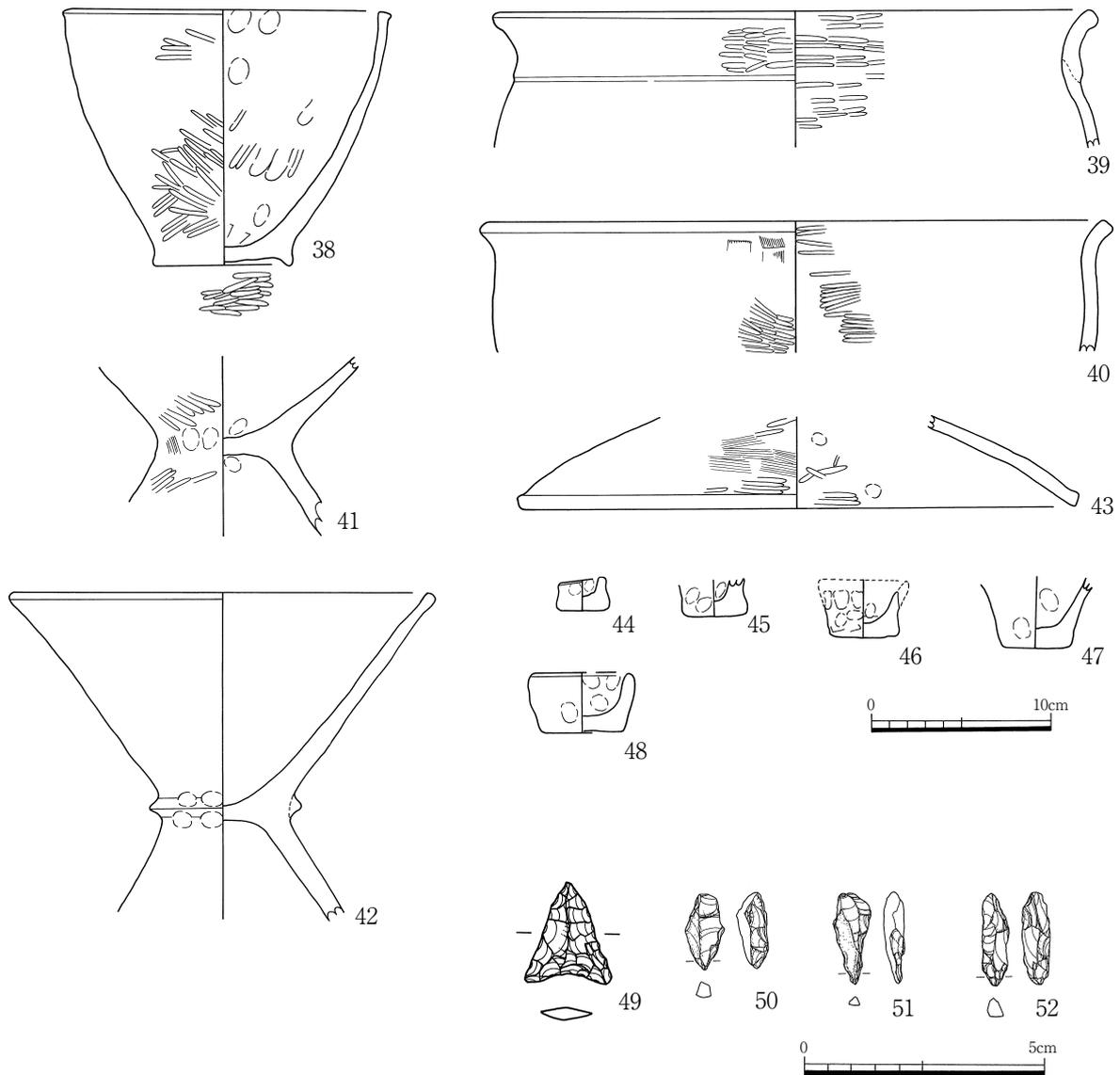
36



37



C4-41 ☒ C4SK4048(6)



C4-42 図 C4SK4048(7)

C4SK4050 (C4-43 図)

時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-58°-W

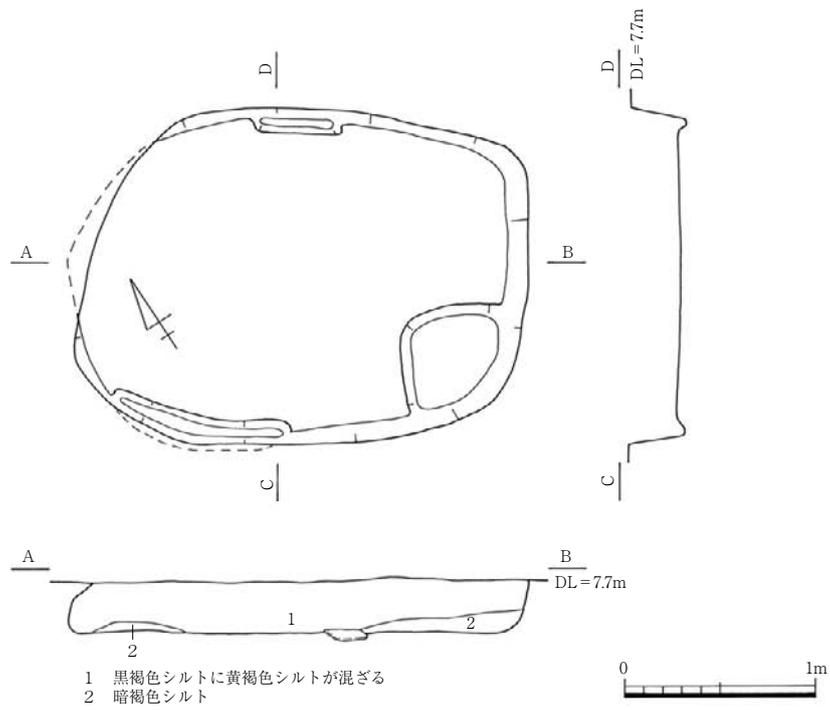
規模；2.4m×1.2m **深さ**；27cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色シルト

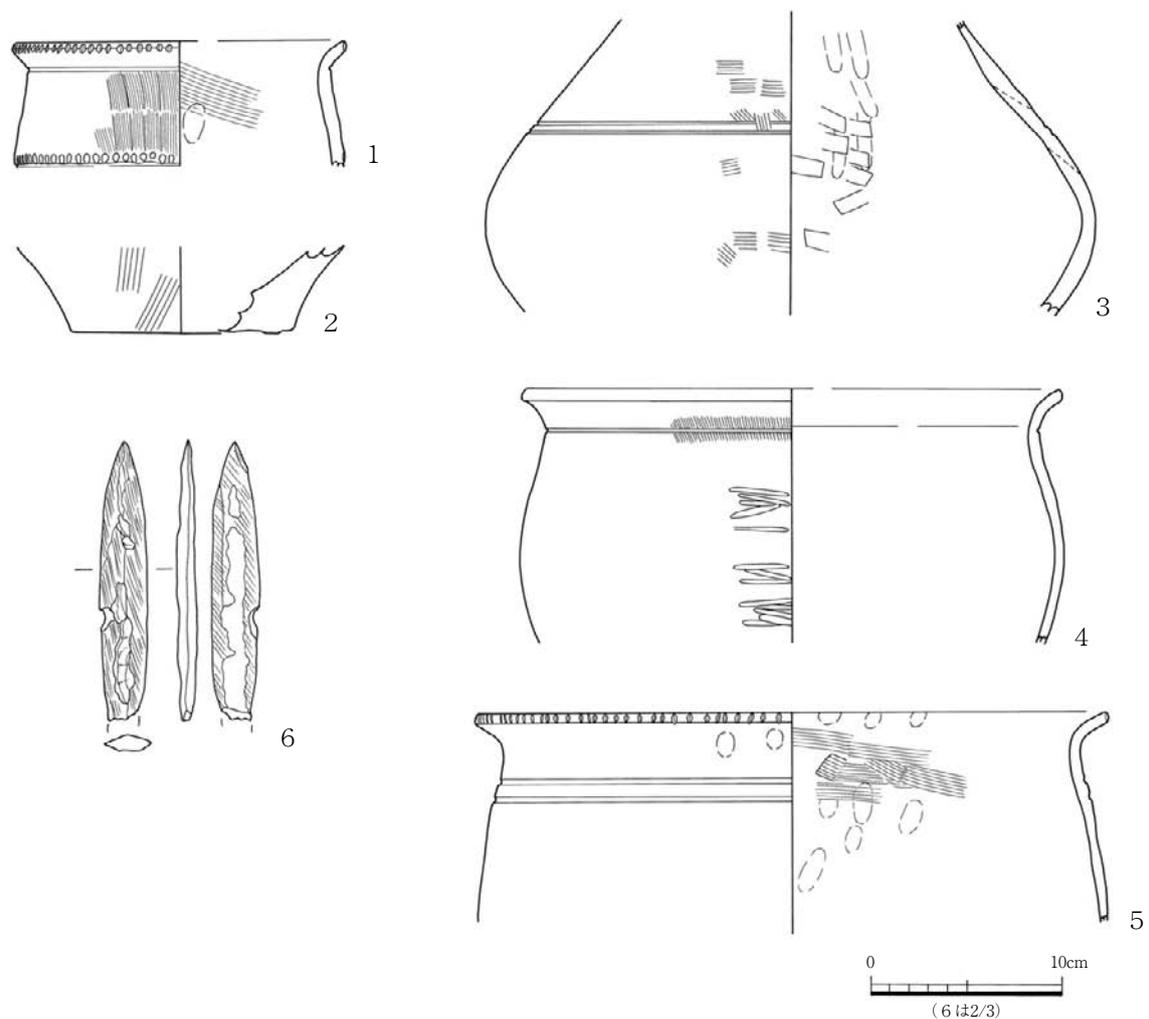
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、磨製石鏃

所見；調査区の中央部に位置する。埋土1層には焼土・炭化物を多く含み、遺物は1層から出土している。床面中央部に扁平な河原石が見られる。床面は平坦で二個所に壁溝が見られる。遺物は壺(3)、甕(1・2・5)、鉢(4)、磨製石鏃(6)である。各器種ともに少条の沈線を有する。磨製石鏃は刃部が断面五角形で一方の面に僅かに稜線を認める。

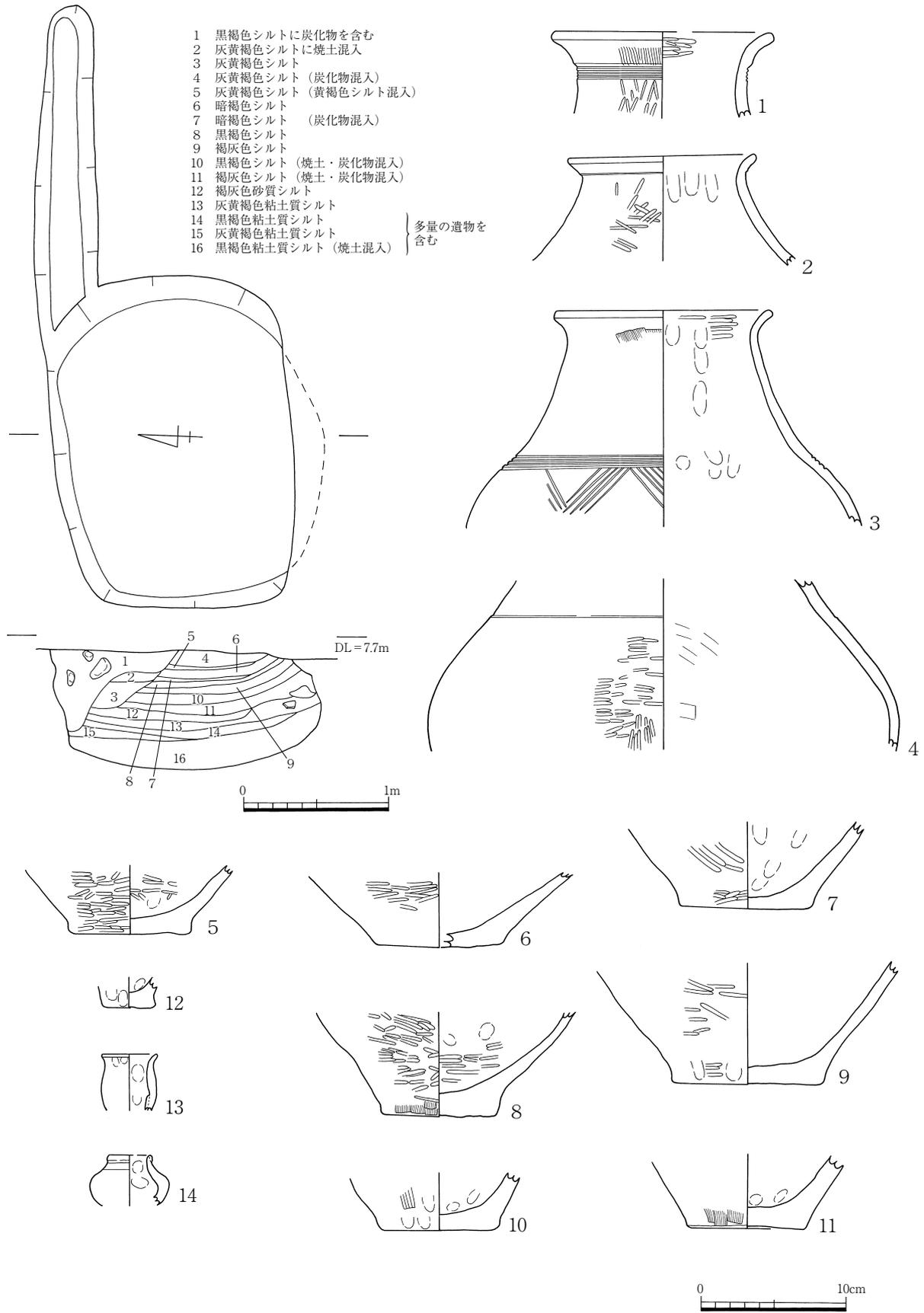


- 1 黒褐色シルトに黄褐色シルトが混ざる
- 2 暗褐色シルト

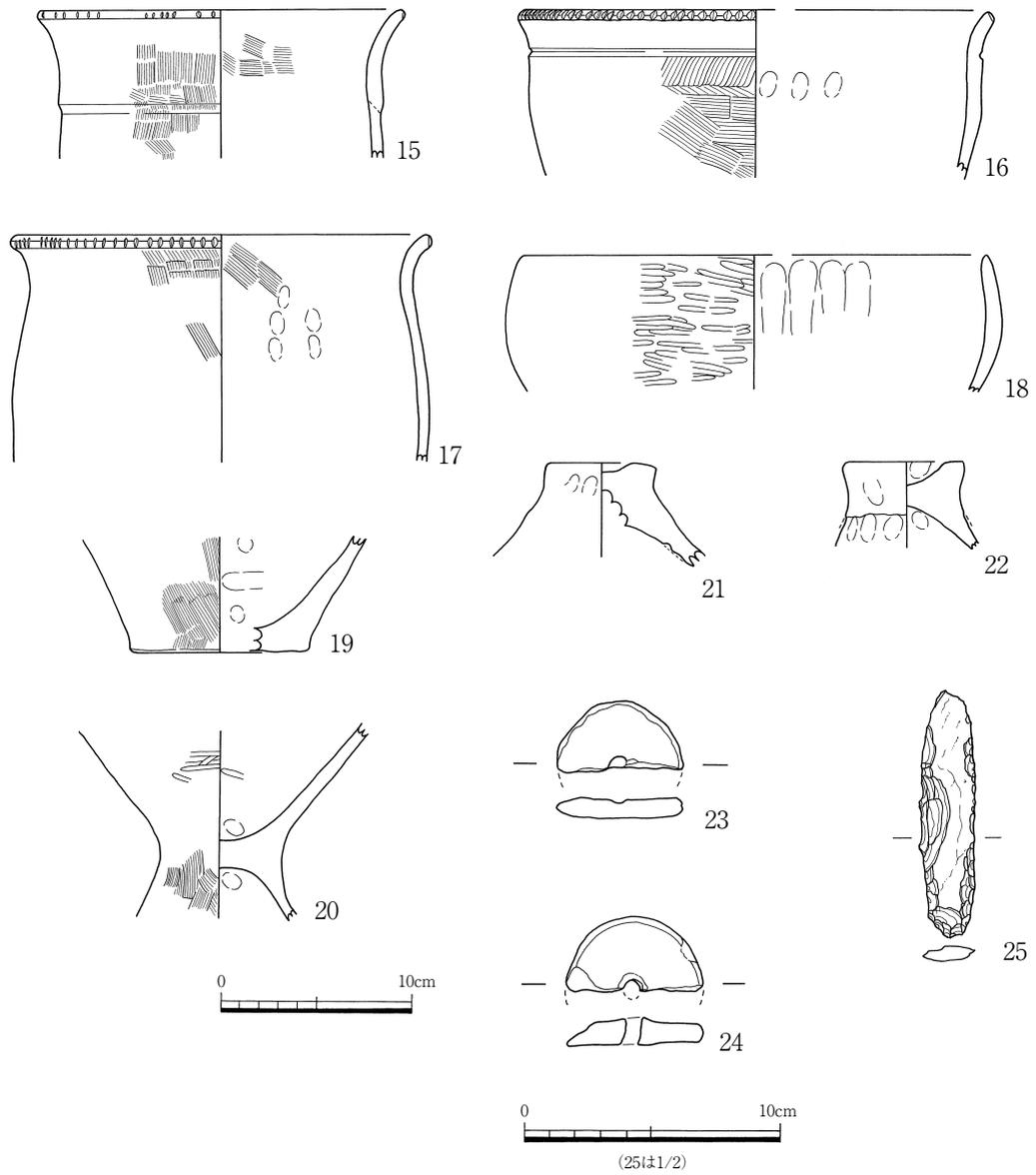


C4-43 ☒ C4SK4050

(6は2/3)



C4-44 図 C4SK4051 (1)



C4-45 図 C4SK4051 (2)

C4SK4051 (C4-44・45 図)

時期；弥生I-3 形状；隅丸方形 主軸方向；N-87°-E

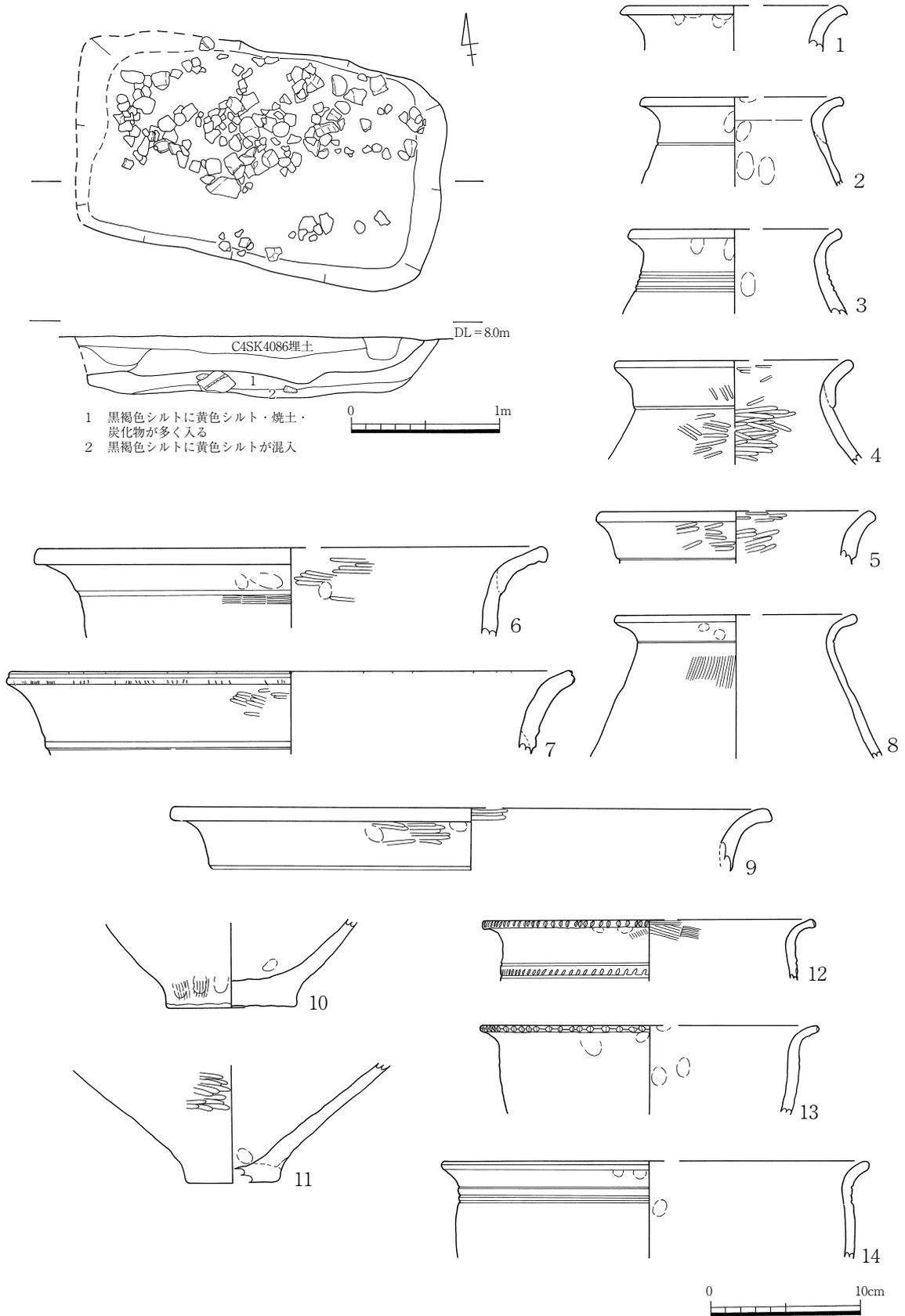
規模；2.3m×1.6m 深さ；82cm 断面形態；袋状

埋土；黒褐色シルト

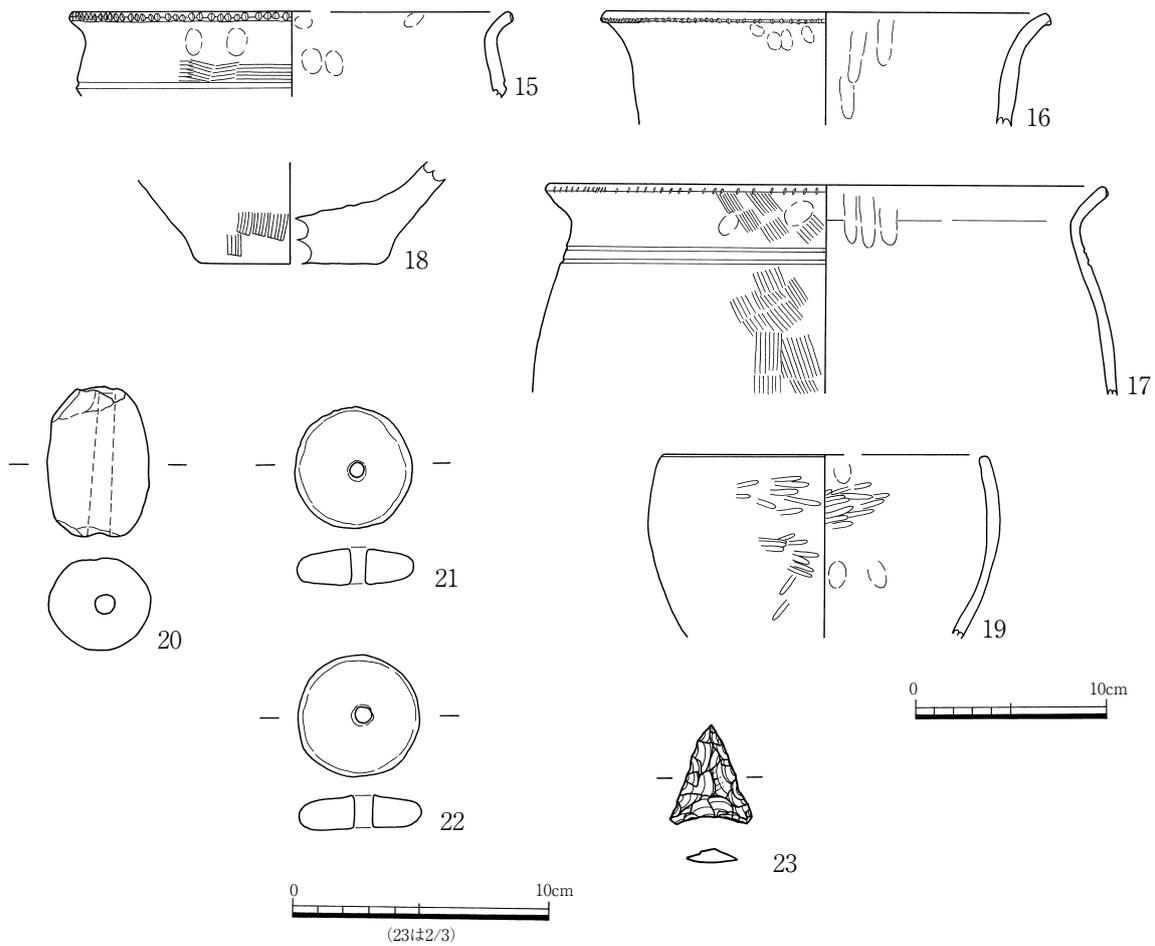
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋、高杯など)、紡錘車、磨製石鏃未製品

所見；調査区の中央部に位置し、SD404 に切られる。断面がやや袋状を呈する土坑である。埋土は1~3層がSD404埋土、4~16層がSK4051の埋土である。黒褐色シルトを基調とし、7層から下には焼土・炭化物を多く含む。遺物は13~16層に集中する。壺はすべて中型壺(1~9)である。甕は段を持つもの(15)と1条のヘラ描沈線を持つもの(16)が見られる。21・22は蓋の頂部でともに断



C4-46 図 C4SK4054 (1)



C4-47 図 C4SK4054 (2)

面凹状を呈する。20 は高杯、12~14 はミニチュア、23・24 は紡錘車、25 は磨製石鍬の未製品と考えられる。石材は頁岩である。

C4SK4054 (C4-46・47 図)

時期：弥生I-3 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-69°-W

規模：2.5m×1.5m **深さ**：40cm **断面形態**：箱形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢など)、紡錘車、土錘、打製石鍬

所見：調査区の北部に位置する。SK4086 に大きく切られているが、図示したように下層からは多くの遺物が出土している。埋土には焼土・炭化物が多量に入っている。出土遺物は壺(1~11)、甕(12~17)、鉢(19)、土錘(20)、紡錘車(21・22)、打製石鍬(23)である。壺は6・7・9が大型、他は中型壺である。口縁部に段部を持つもの(4~7・9)と沈線を持つもの(2・3)が見られる。甕は少条のヘラ描沈線や列点文を持つものが多い(12・14・15・17)。土錘(20)は93gである。打製石鍬の石

材はサヌカイトである。SK4054 出土の遺物はI-3 期の良好な一括資料である。

C4SK4061 (C4-48~51 図)

時期；弥生I-2 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-20°-E

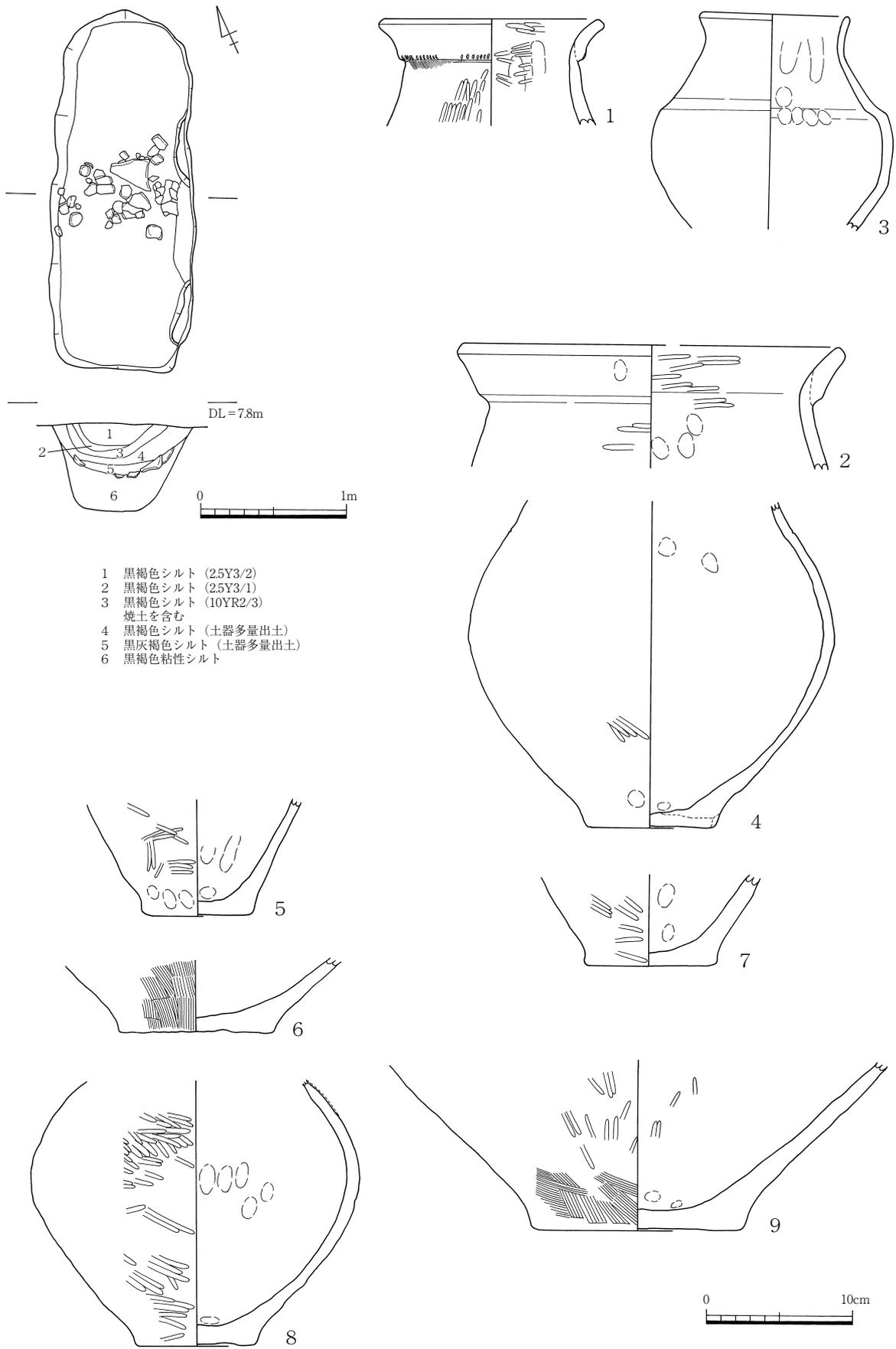
規模；2.5m×1.0m **深さ**；62cm **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

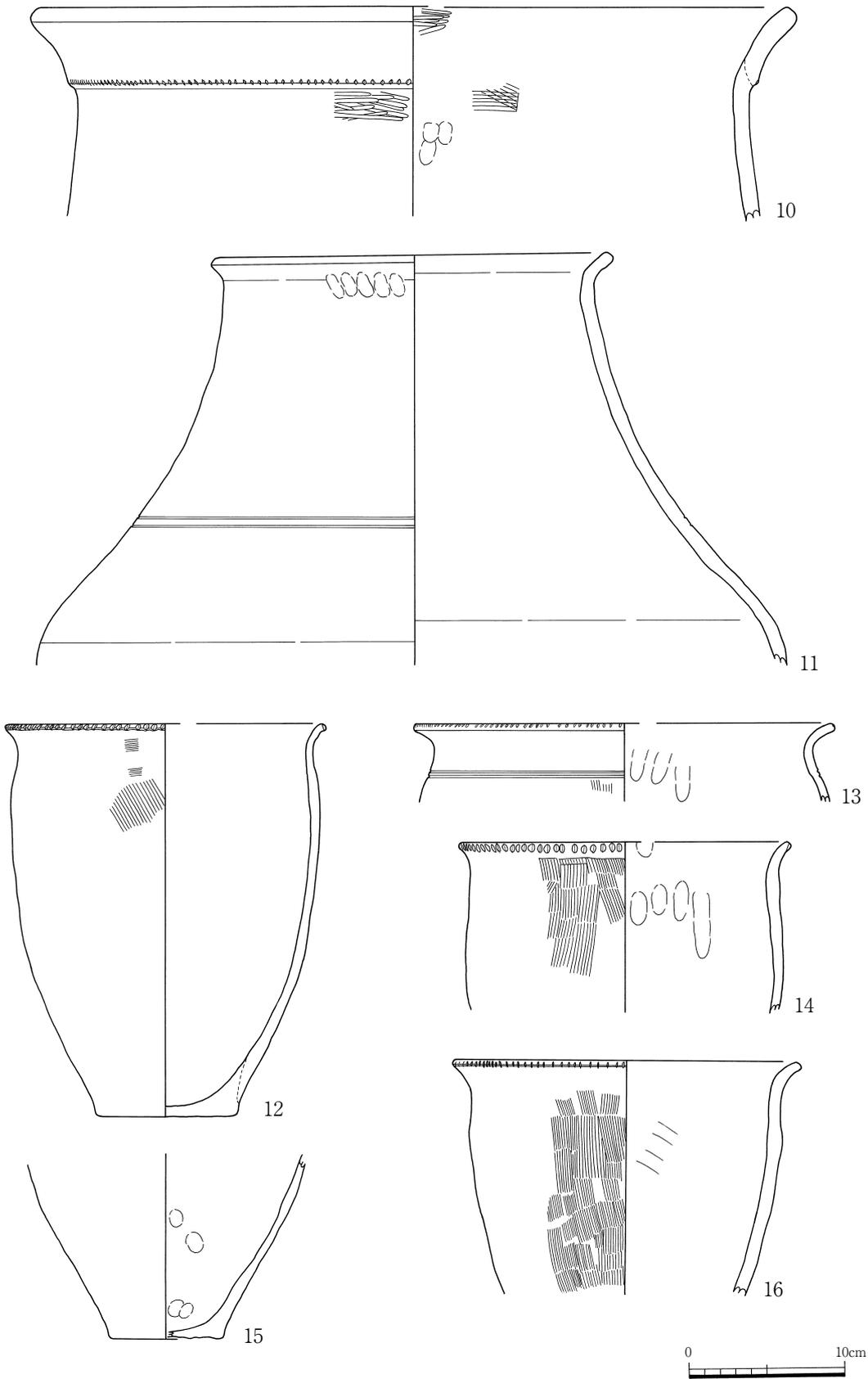
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、土錘、石包丁、打製石鏃、楔形石器、チャート剥片

所見；調査区の中央部に位置する土坑である。黒褐色シルトを基調とする6層で、1~3層は遺物をほとんど含まず、4層は焼土が見られ、5・6層から多量の遺物が出土している。遺物は5・6層上層と床面直上とに大きく分けて取り上げ、後者の出土状況については図示している。土器は壺(1~11)、甕(12~22)、鉢(24・25)、蓋(26)、土錘(27)である。9・10は大型壺、他は中型である。1・2・10の口縁部にはしっかりした段を有する。1と11が床直上、2~7・9・10は5・6層上層出土、8は両者の接合資料である。甕は段部を持つものは見られない。12・14・15・20は5・6層上層、19は床直上、16~18・21は両者の接合資料である。鉢は24が5・6層上層、25が床直上出土である。土錘は5・6層出土で87gを測る。石器は打製石鏃(29・30)、磨製石包丁(28)、楔形石器(31・34)、刃器(32)である。石包丁は三角形の外湾刃両刃で、両面から叩打による穿孔がなされている。打製石鏃、刃器はサヌカイト、楔形石器はチャート、石包丁は粘板岩である。図示できなかったものとして石鏃が9点、楔形石器が13点ある。この他にチャートの剥片が650g出土している。SK4061の遺物も出土状況から見て一括性の高いものである。甕に段部を有するものがなく細片であるが少条沈線(13)が認められるなどI-2期の中では新しい様相を示している。

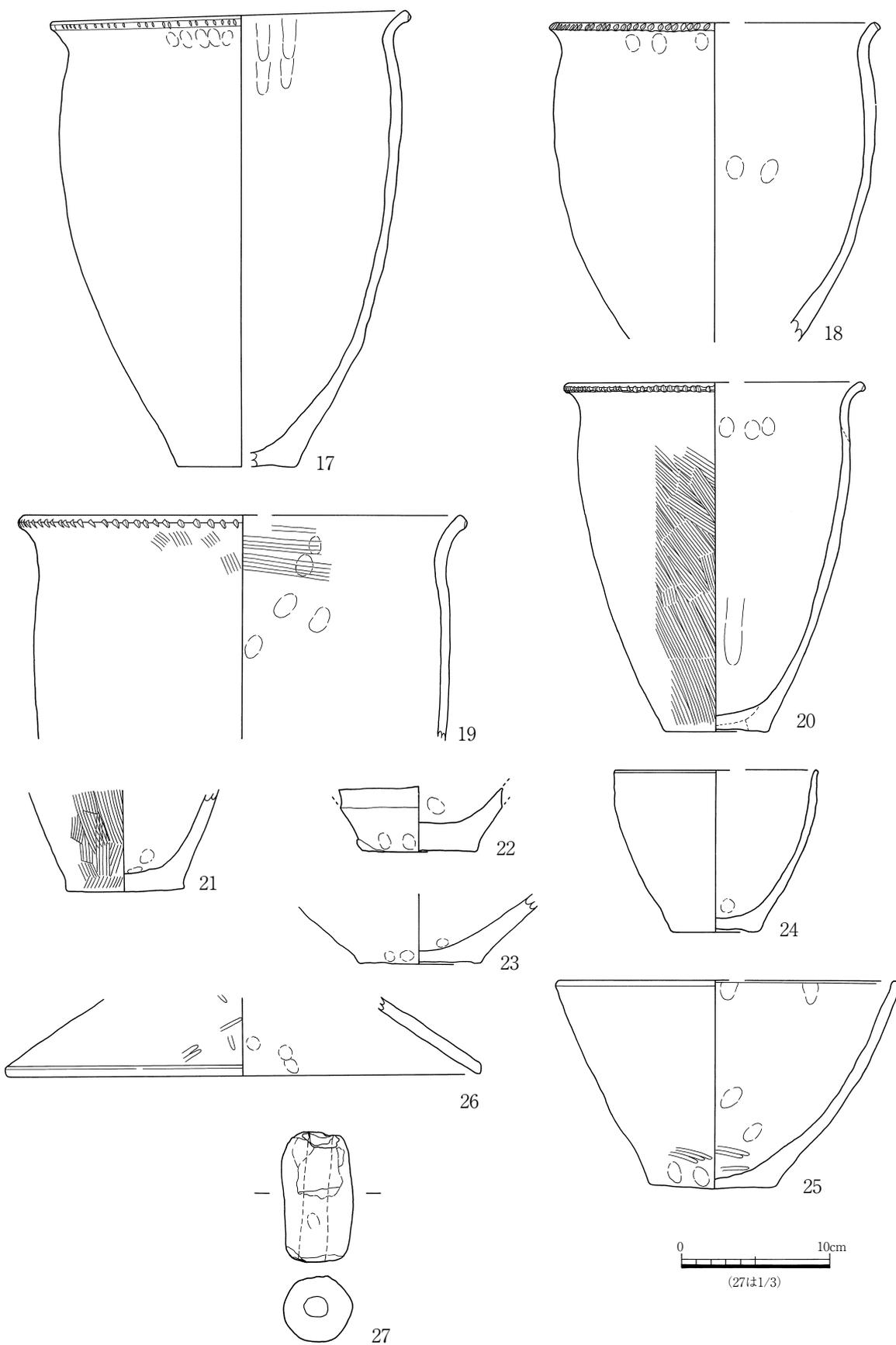


- 1 黒褐色シルト (25Y3/2)
- 2 黒褐色シルト (25Y3/1)
- 3 黒褐色シルト (10YR2/3)
焼土を含む
- 4 黒褐色シルト (土器多量出土)
- 5 黒灰褐色シルト (土器多量出土)
- 6 黒褐色粘性シルト

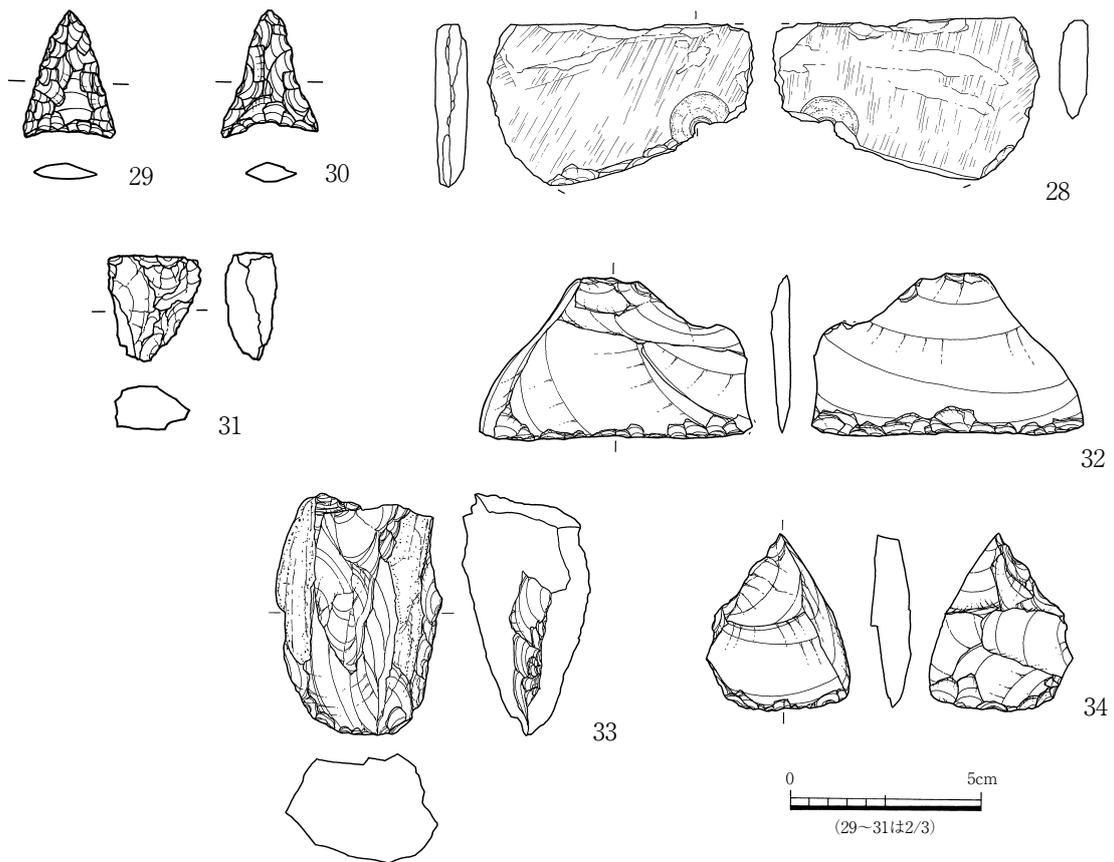
C4-48 図 C4SK4061 (1)



C4-49 図 C4SK4061 (2)



C4-50 图 C4SK4061 (3)



C4-51 図 C4SK4061 (4)

C4SK4064 (C4-52 図)

時期；弥生V-1 形状；円形 主軸方向；N-23°-E

規模；径 1.1m 深さ；40cm 断面形態；U字状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、高杯)、石錐、剥片

所見；調査区やや北方に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で2層から3層にかけて遺物が入る。出土遺物は壺(1・3・4)や高杯脚部(2)、石錐(5~7)である。2・3は口縁部に凹線文が施され、3・4の内面にはヘラ削りが認められる。石錐は混入遺物と考えられる。

C4SK4071 (C4-52 図)

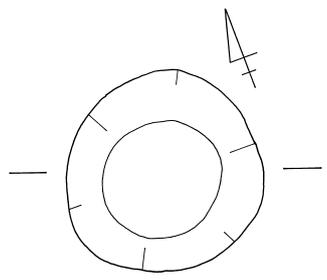
時期；弥生I-3 形状；不定形 主軸方向；N-32°-E

規模；1.42m×1.1m 深さ；20cm 断面形態；逆台形

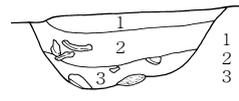
埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器細片

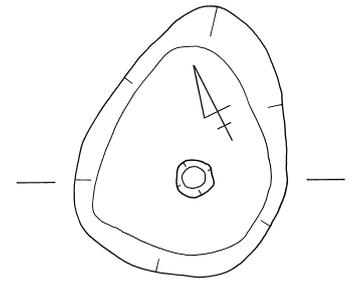


DL=7.8m



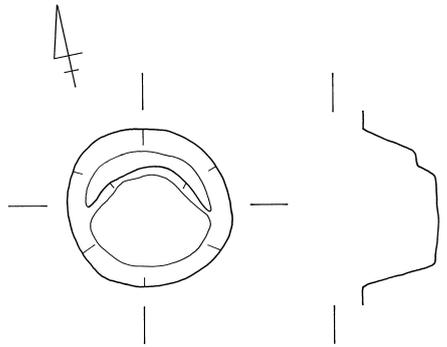
- 1 灰黄褐色シルト
- 2 黒褐色シルトに焼土・炭化物を含む
- 3 黒褐色シルトに焼土を含む

C4SK4064

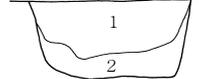


DL=7.7m

C4SK4071

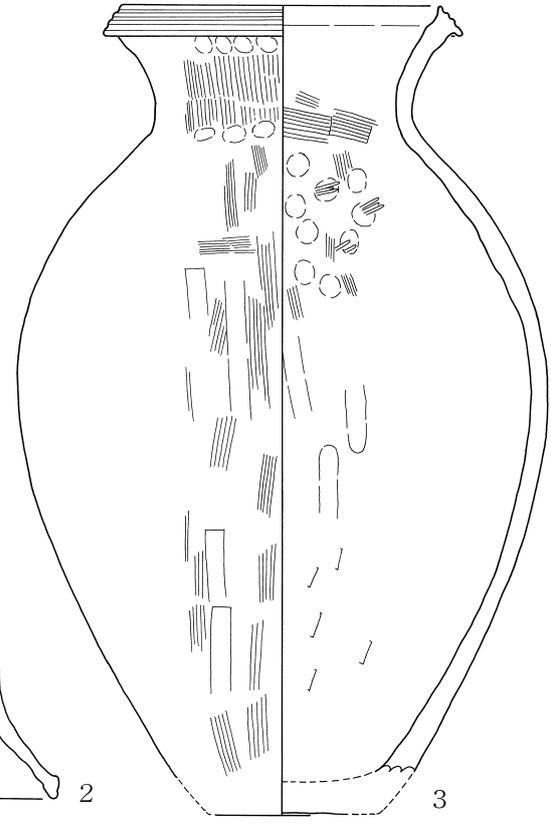
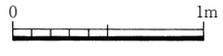


DL=7.8m



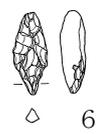
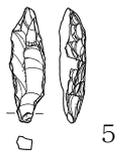
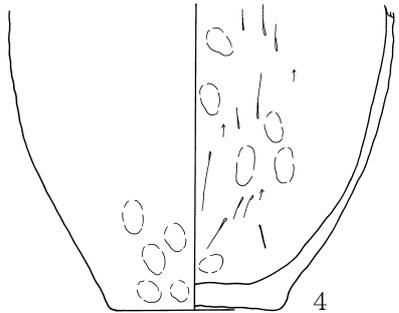
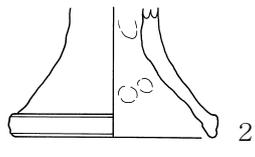
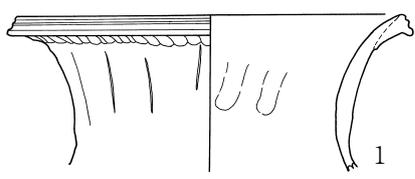
- 1 黒褐色シルト
- 2 明黄褐色シルト

C4SK4073



0 10cm

(5~7は2/3)



C4-52 図 C4SK4064・4071・4073 (SK4064: 1~7)

所見：調査区の中央部に位置し、遺構の南部が一部攪乱を受けている。床面中央部に小ピットが見られる。出土遺物は頸部に少条の沈線を有する壺等の細片が出土している。図示できるものはない。

C4SK4073(C4-52 図)

時期：弥生I-3 形状：不定形 主軸方向：—

規模：径 8.5m 深さ：40cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト、黄褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器細片

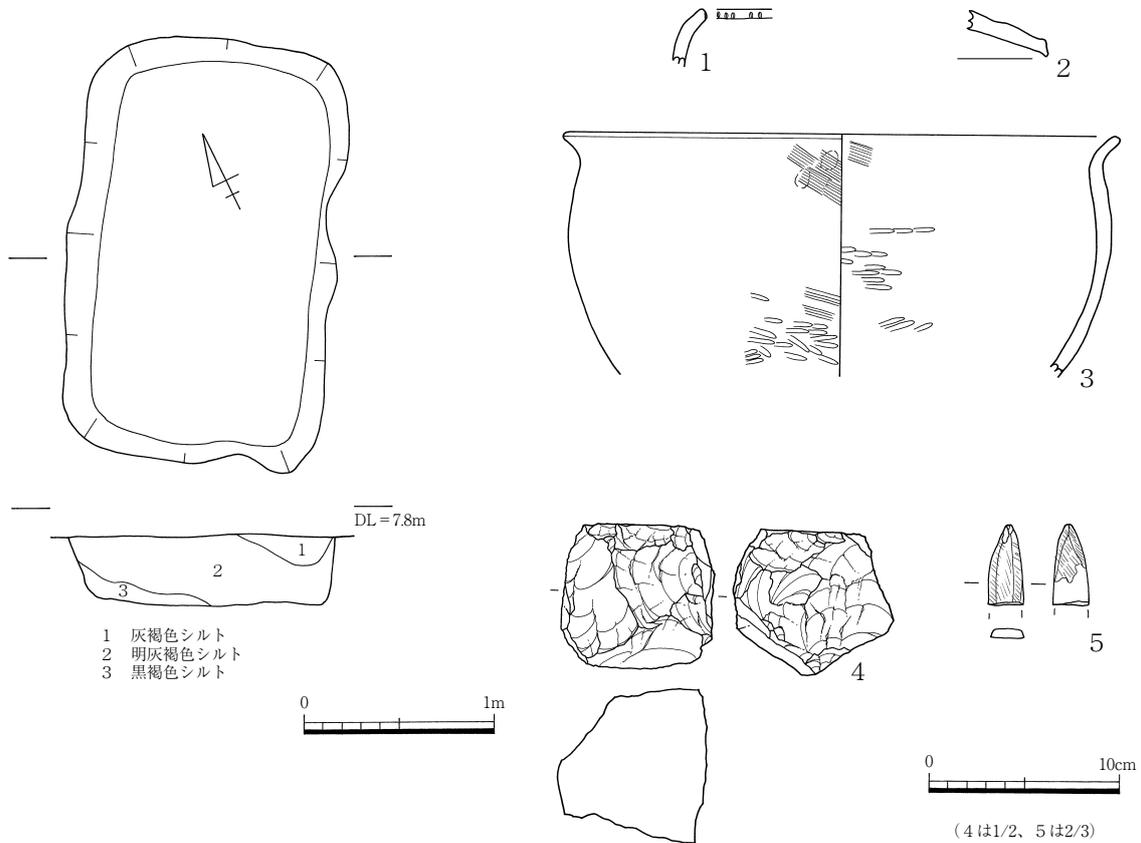
所見：調査区の中央部に位置する。床面北側が二段に掘り込まれている。出土遺物は壺、甕の口縁部や底部の細片が出土している。図示できるものはない。

C4SK4077(C4-53 図)

時期：弥生I-3 形状：隅丸長方形 主軸方向：N-30°-E

規模：2.25m×1.37m 深さ：38cm 断面形態：箱形

埋土：黒褐色シルト



C4-53 図 C4SK4077

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(甕、蓋)、磨製石鏃、楔形石器、チャート剥片

所見：調査区中央部の東に位置する。埋土は褐色シルトを基調とする3層で、最下層では焼土がわずかに検出された。出土遺物は甕(1)、鉢(3)、蓋(2)、磨製石鏃(5)、楔形石器(4)を図示できた。この他チャートの剥片が多く125g出土している。

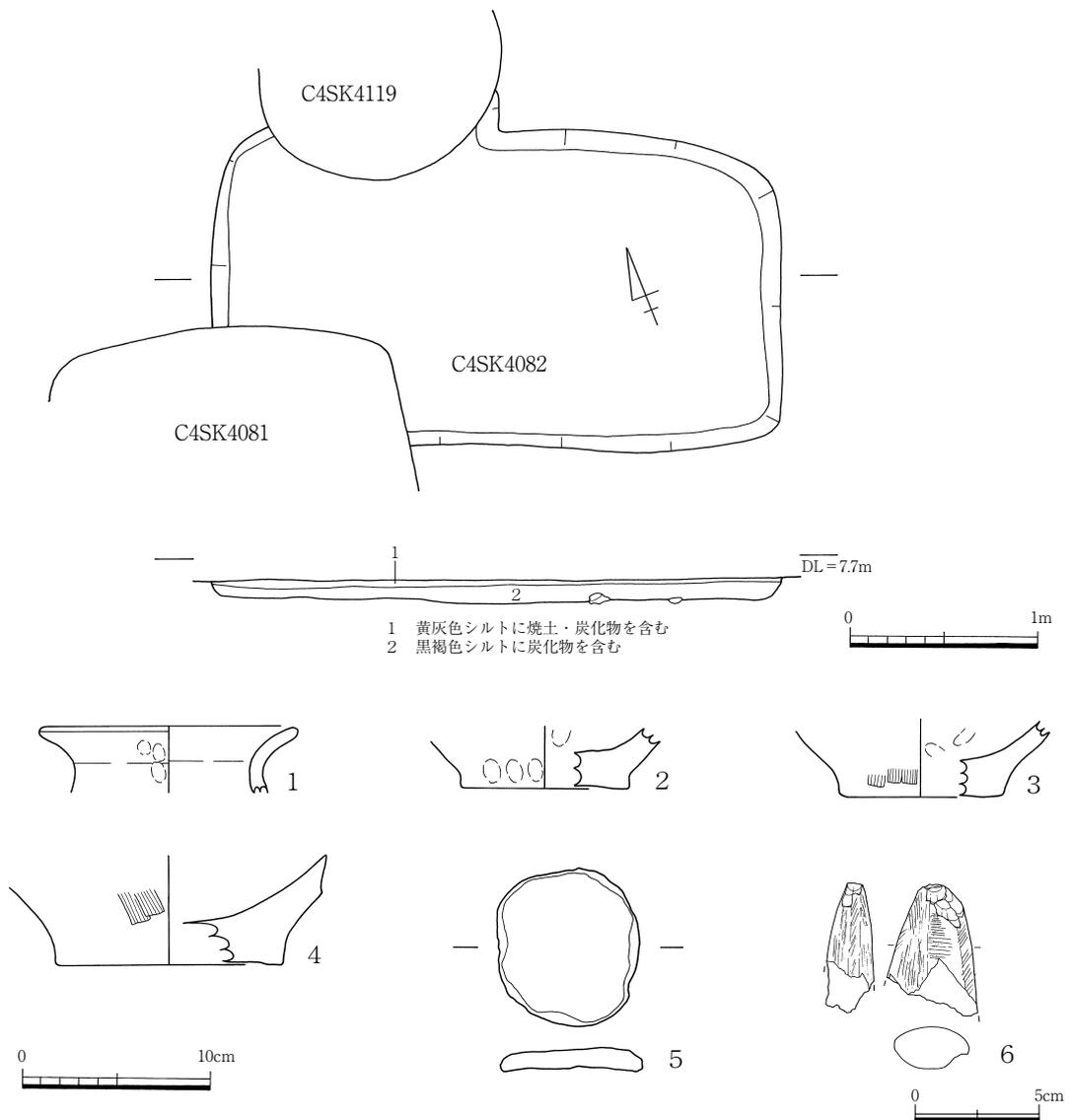
C4SK4082(C4-54 図)

時期：弥生I-3 形状：隅丸方形 主軸方向：—

規模：3m×1.7m 深さ：12cm 断面形態：箱形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—



C4-54 図 C4SK4082

出土遺物：弥生土器(壺)、土製円板、ガラス滓、磨製石斧

所見：調査区の西方に位置し、近世の土坑SK4081・4119に切られる。埋土は上層が攪乱されているため浅く2層である。上層は黄灰色シルトで焼土・炭化物を含む。床面に遺物・焼土・炭化物が入る。出土遺物は細片が多い。壺(1)、底部(2~4)、土製円板(5)、磨製石斧(6)を図示し得た。この他少量のガラス滓が床面から出土している。6は伐採斧の基部で、石材は結晶片岩である。

C4SK4083 (C4-55 図)

時期：弥生I-3 **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-70°-W

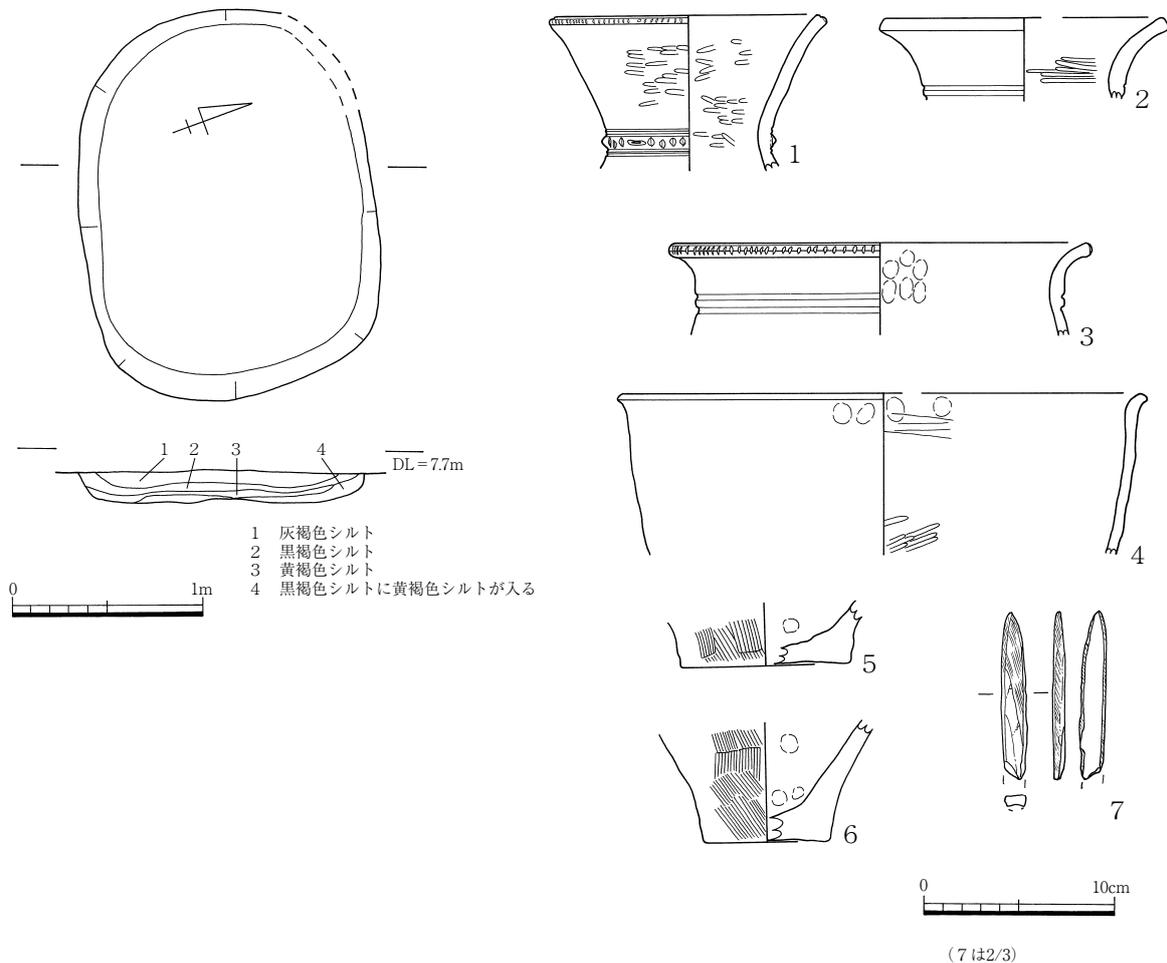
規模：2m×1.55m **深さ**：20cm **断面形態**：皿状

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、磨製石鏃

所見：調査区中央部の西方に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層である。2層目に炭化物が入る。出土遺物は細片が多い。図示し得たのは壺(1・2)、甕(3・5・6)、鉢(4)、磨製石鏃(7)である。磨製石鏃は著しく幅が狭く断面扁平である。



C4-55 図 C4SK4083

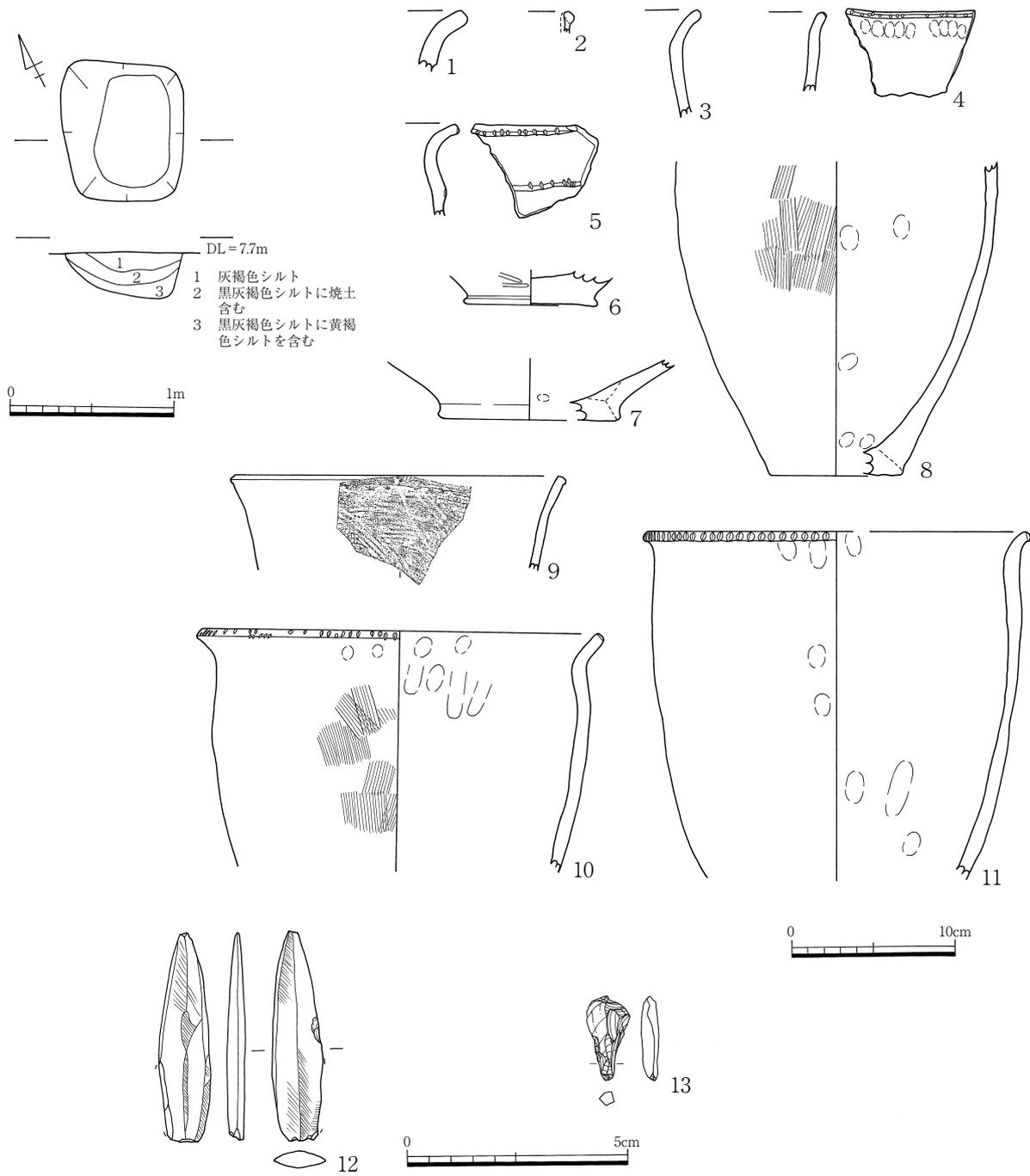
C4SK4084 (C4-56 図)

時期：弥生I-2 形状：隅丸方形 主軸方向：N-20°-E

規模：0.84m×0.75m 深さ：31cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—



C4-56 図 C4SK4084

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢)、磨製石鏃、石錐

所見：調査区の東方に位置し、SK4085 とSK4117 を切っている。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で、中層に焼土が入る。出土遺物は壺(1・3・6・7)、甕(2・4・5・8~11)、磨製石鏃(12)、石錐(13)を図示し得た。9は縄文晩期の深鉢状を呈し外面には条痕が認められる。磨製石鏃は基部を欠損しているが柳葉形で中央に稜線が見られ断面菱形を呈する。石材は頁岩である。石錐の石材はチャートである。

C4SK4085 (C4-57 図)

時期：弥生I-2 **形状**：長方形 **主軸方向**：N-60°-W

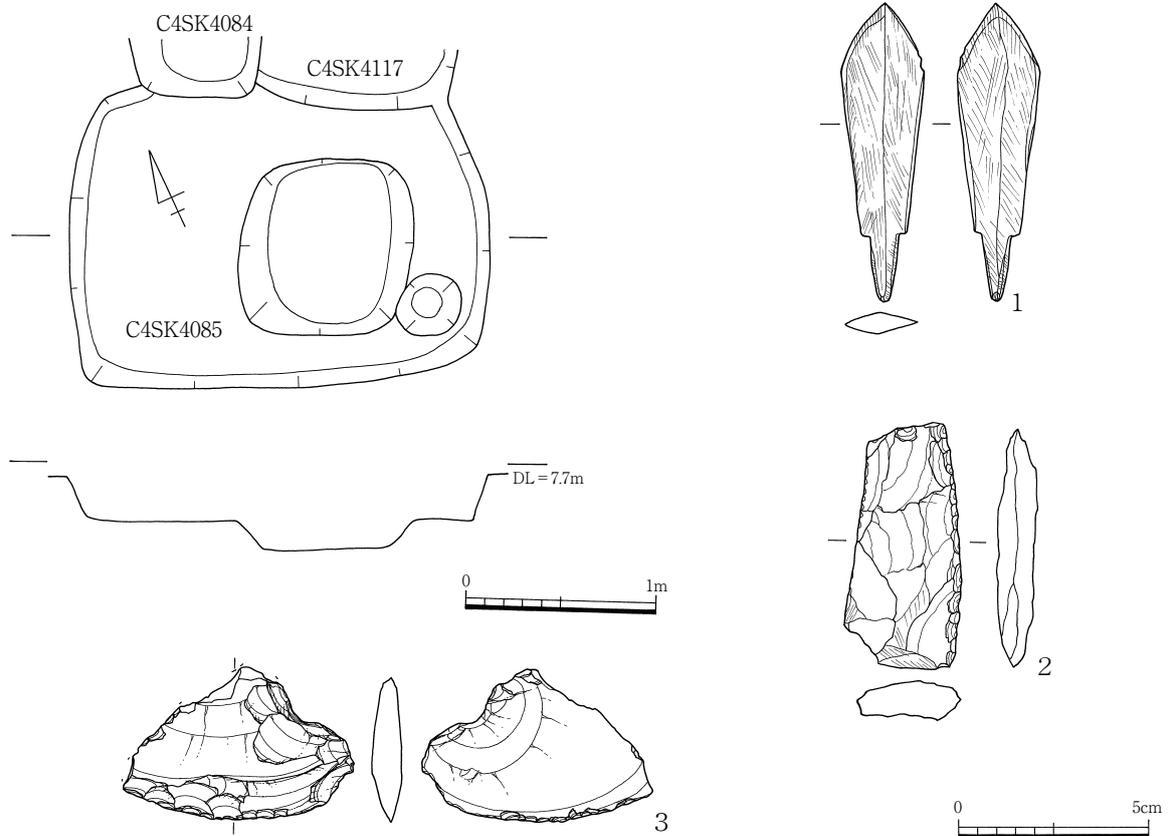
規模：2.2m×1.6m **深さ**：20~45cm **断面形態**：箱形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：磨製石鏃、石斧、削器

所見：調査区の北部に位置し、土坑(SK4084)に切られる。遺構の東部の床面に落ち込みを確認するが遺構の性格は不明である。磨製石鏃(1)は完形品で床面出土である。刃部先端に最大幅を有し、関もしっかり作り出されている。両面ともに鏃の稜線が先端から茎部に延びる。断面形は刃部が菱



C4-57 図 C4SK4085

形、基部は六角形である。2は両刃の小型石斧である。3は削器である。石材は1・2が頁岩、3はサヌカイトである。土器は細片が多く図示できるものはないがI-2期に属するものである。

C4SK4087(C4-58・59 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-20°-E

規模；1.2m×1.0m **深さ**；32cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の中央部に位置する。上面が削平されているため浅く、床面は凹凸が見られる。黒褐色シルトを基調とする4層である。1層と3層目に炭化物が含まれている。遺物は検出面から床面まで詰っており、一括性が高い。遺物は壺(1~5)、甕(6~16・19・20)、底部(17・18)を図示した。5は大型壺で削り出し突帯を有する。1と4は口縁部に段を有する。後者は刺突文、ヘラ描沈線文、重弧文で加飾している。2の胴部外面の一部には赤彩が認められる。甕は段部を持つもの(6)も見られるが、少条の沈線を巡らすもの(7~10・13~16)が多い。口唇部の刻目はほとんど全面に施される。

C4SK4088(C4-58・60 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-33°-W

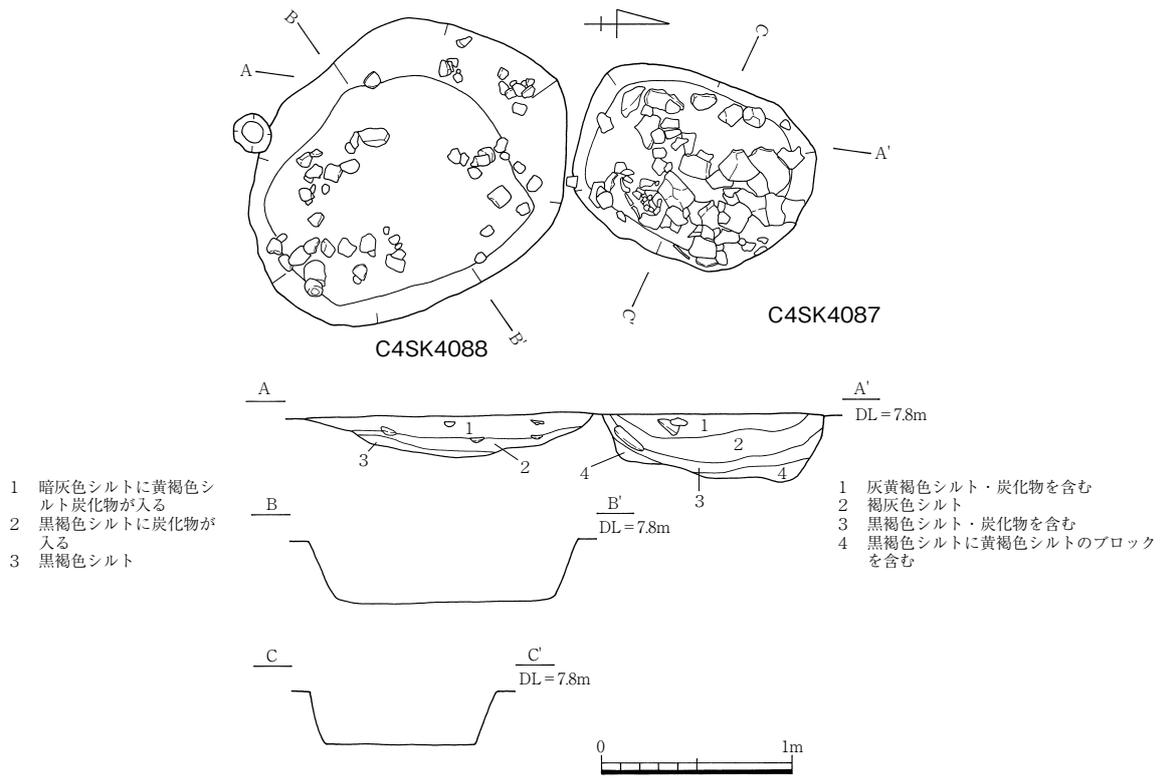
規模；1.8m×1.4m **深さ**；38cm **断面形態**；皿形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

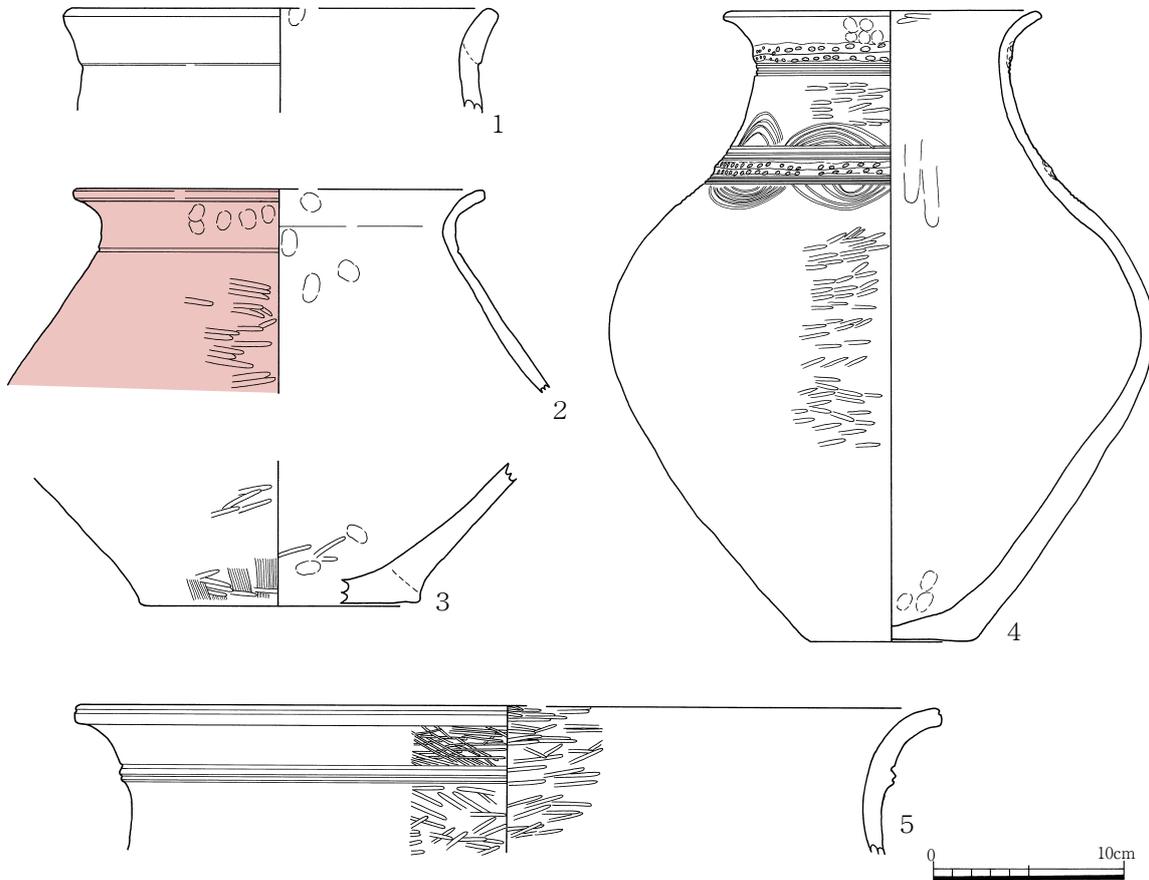
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、磨製石鏃、打製石鏃

所見；調査区の中央部に位置する。上面が削平されているため浅く、埋土は黒褐色シルトを基調とする4層である。土器は細片が多く、壺(21・22)、甕(23・24・29)、鉢(25~28)、蓋(30・31)を図示した。甕には段を持つもの(23)も見られるが、図示できなかった土器のなかには少条の沈線を有するものも見られる。石器は打製石鏃(32~34)、磨製石鏃(35)が出土している。35は一方の面に稜線が茎部にまで走る。断面形は刃部がやや扁平な菱形、茎部は六角形である。石材は打製石鏃がサヌカイト、磨製石鏃は頁岩である。

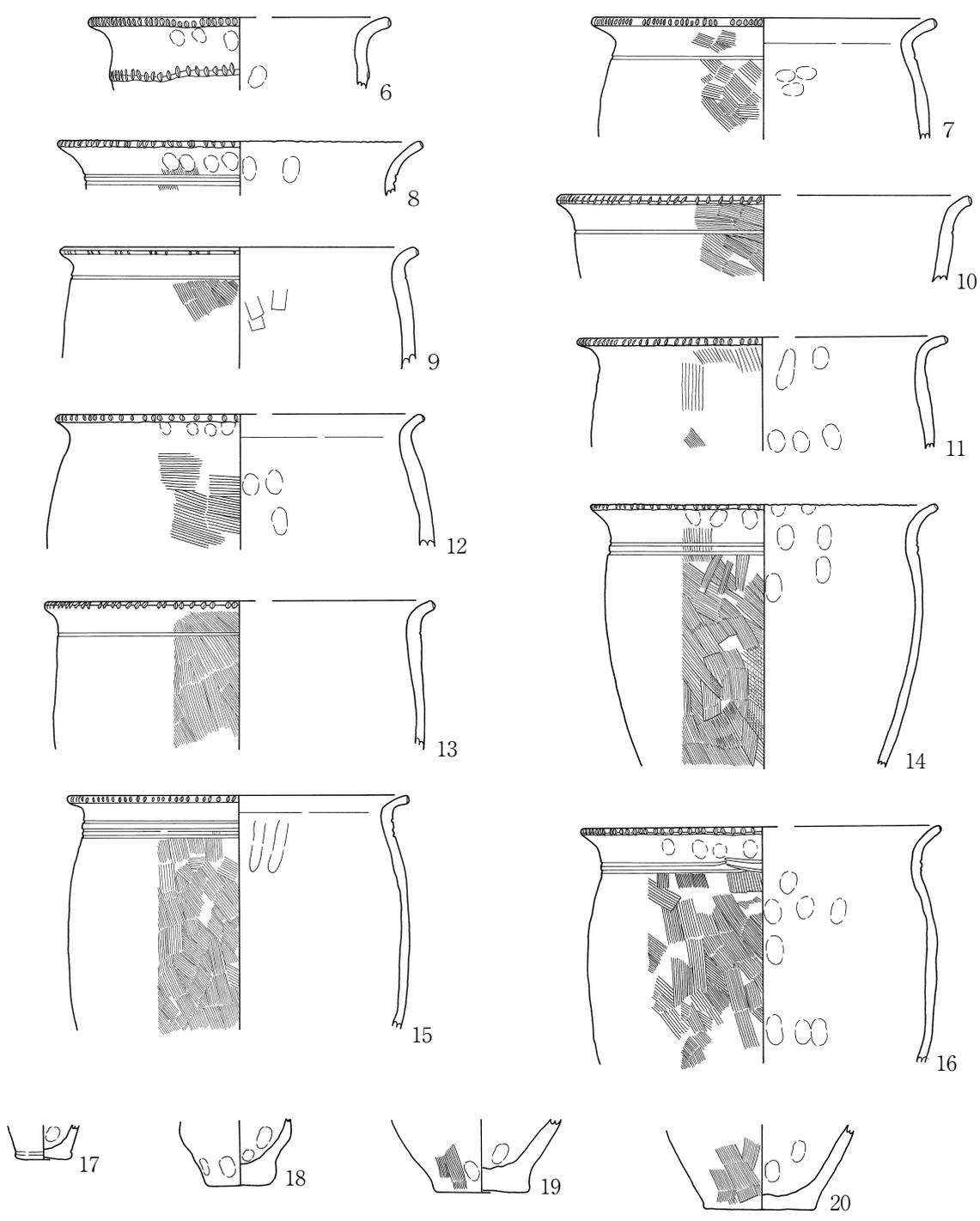


- 1 暗灰色シルトに黄褐色シルト炭化物が入る
- 2 黒褐色シルトに炭化物が入る
- 3 黒褐色シルト

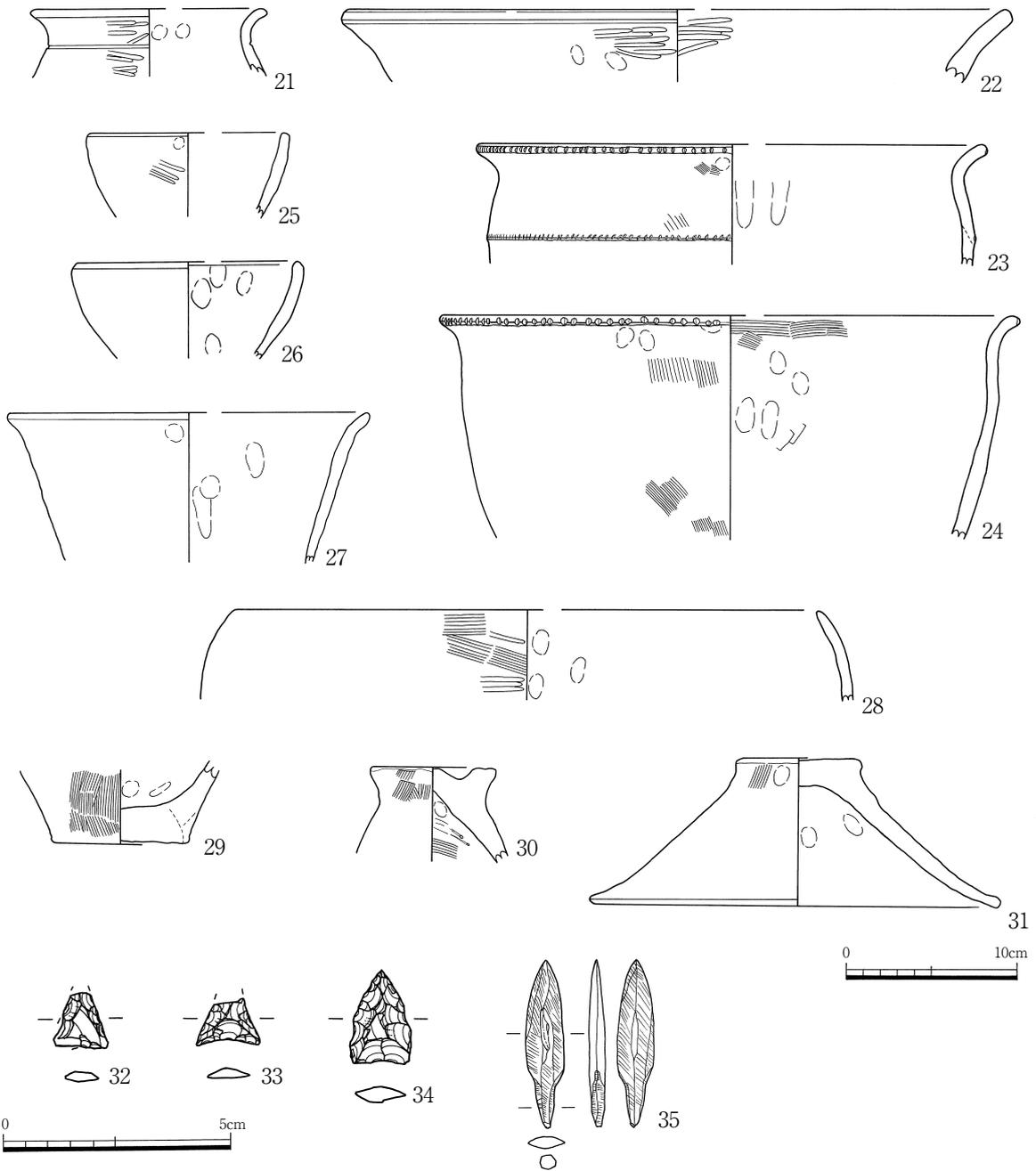
- 1 灰黄褐色シルト・炭化物を含む
- 2 褐灰色シルト
- 3 黒褐色シルト・炭化物を含む
- 4 黒褐色シルトに黄褐色シルトのブロックを含む



C4-58 図 C4SK4087・4088



C4-59 ☒ C4SK4087



C4-60 図 C4SK4088

C4SK4089(C4-61~63 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-50°-E

規模；2.2m×1.4m **深さ**；30cm **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、石棒、磨製石斧

所見；調査区の中央部に位置し、3基の土坑(SK4087・4088・4089)が隣接する内の1基である。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で、1・2層と床面に遺物が多く、3層は焼土・炭化物が層を成している。遺物は上層・中層・床面と大きく3つに分けて取り上げた。土器は壺(1~6・9・16・20~22)、甕(10~15)、鉢(17)、高杯(18)を図示した。6は口縁部にしっかりした段部を持つ大型壺である。4は胴部の区画沈線内に4・5条からなる弧線を配し、3は格子目文と複線山形文を描いている。9は区画内に木葉文状の文様を施している。16は無頸壺と考えられる。9は上・中・床面出土の接合資料である。1~3・5・6は上層出土である。甕は口縁部に刻目突帯を持つもの(10)、しっかりした段を持つもの(12・13)、少条のヘラ描沈線を持つもの(8・11・15)などが見られる。11・12・14は上層出土である。17は段部を持つ大型鉢で上層出土である。石器は石棒(23)と磨製伐採斧(24)がともに上層から出土している。前者は長さ34cm、断面径7cm、重さ2,350gである。両端及び器面は磨耗が見られ、一方の先端部にはベンガラが付着が認められる。結晶片岩製である。後者は刃部が欠損しているが全面丁寧な研磨が施されている。石材は結晶片岩である。SK4089出土の遺物は新旧混在しており一括性には乏しい。甕10はI-1期、同じく12・13はI-2期に属するものである。

C4SK4097(C4-64 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-55°-W

規模；1.3m×0.7m **深さ**；25~40cm **断面形態**；箱形

埋土；褐色シルト

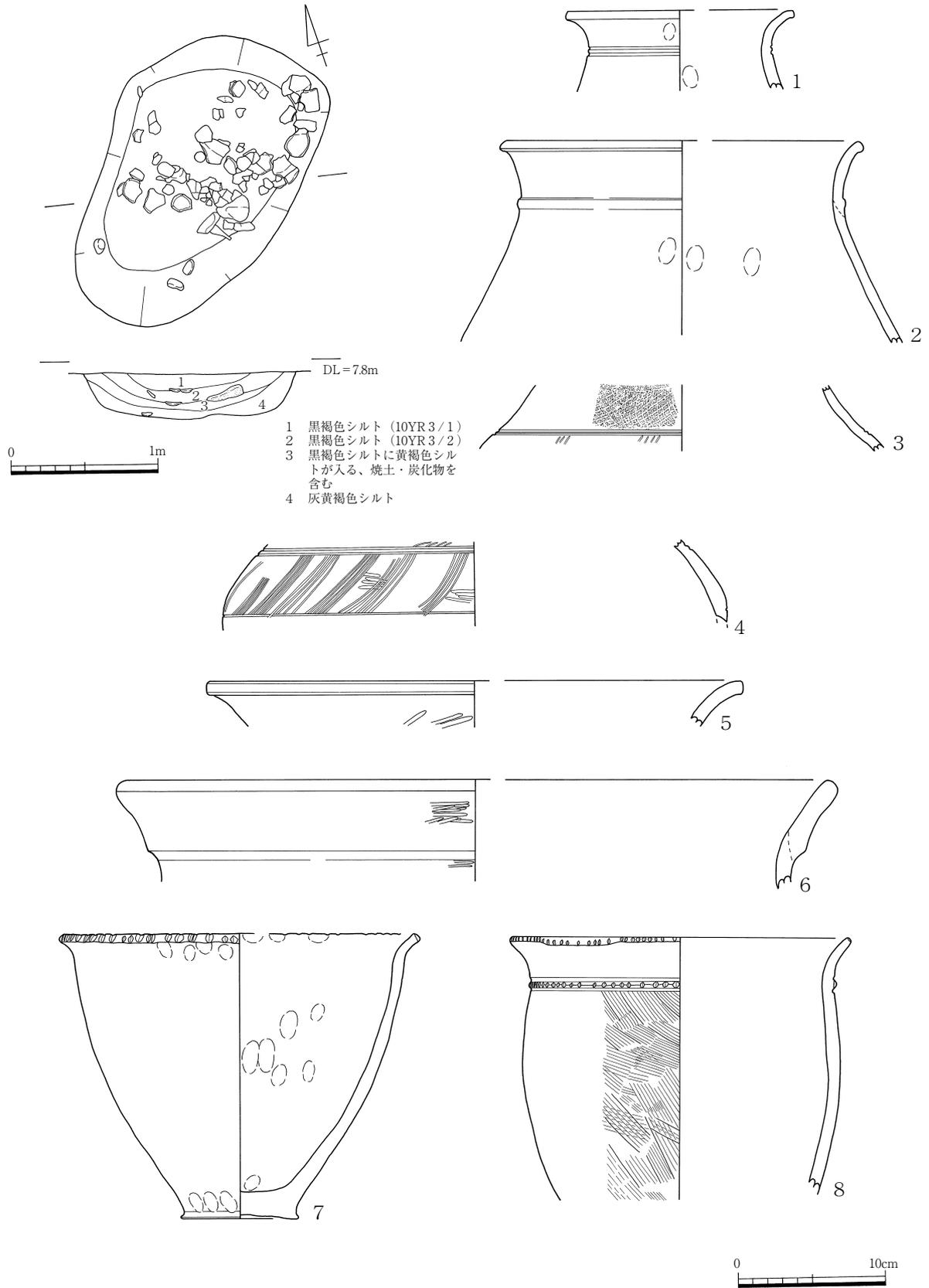
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、磨製石鏃、管玉

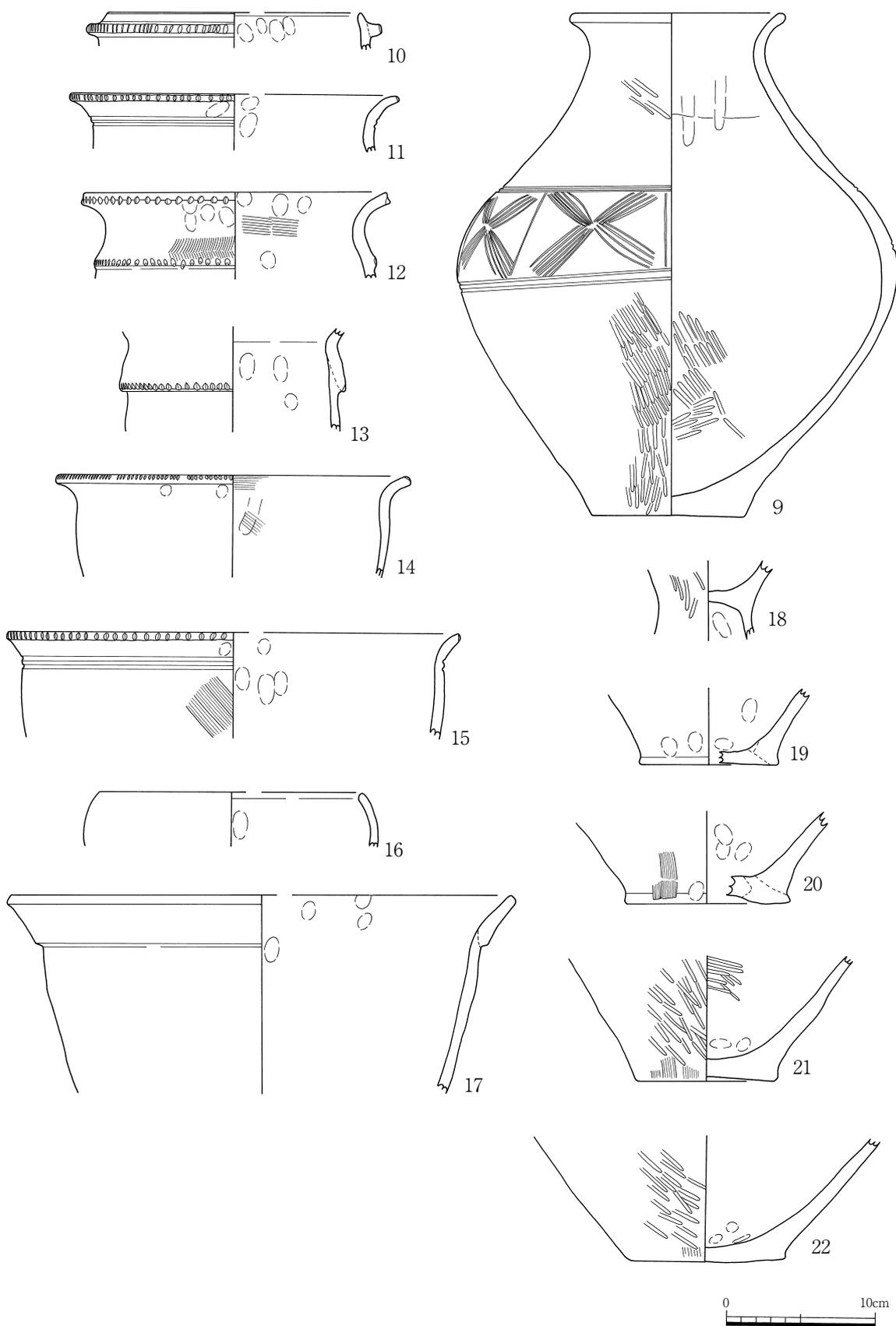
所見；調査区の東部にある。床面は二段に掘り込まれており、プランから見ても2つの土坑の重複の可能性が考えられる。埋土は褐色シルトを基調とする3層で黒褐色や黄褐色シルトが混じる。

出土遺物は壺(1~5・13・15)、甕(6・8・9・11・12・14)、鉢(7・10)、磨製石鏃(16)、管玉(17・18)である。2~4は大型壺で2・3にはしっかりした段部が見られる。1は口頸間に3条のヘラ描沈線を施す。5は無頸壺である。甕は段を持つもの(11)と持たないもの(6・8・9)が見られ、沈線を施すものはない。16は磨製石鏃の先端部である。断面は扁平な菱形で、僅かに鏑の稜線が見られる。石材は頁岩である。管玉は2点出土しており17は半分が欠損、18は完形で長さ1.0cm、径0.4cm、孔径は0.2cmである。石材は碧玉である。

SK4097はI-2期の土器を多く含むものの壺(1)のようにI-3期のものも見られる。一括性に乏し



C4-61 図 C4SK4089(1)



C4-62 图 C4SK4089(2)

い。I-2期とI-3期の土坑の切り合い関係を想定しなければならない。

C4SK4100(C4-65 図)

時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；
N-32°-E

規模；2.12m×1.87m **深さ**；32.5cm **断面形態**；箱形

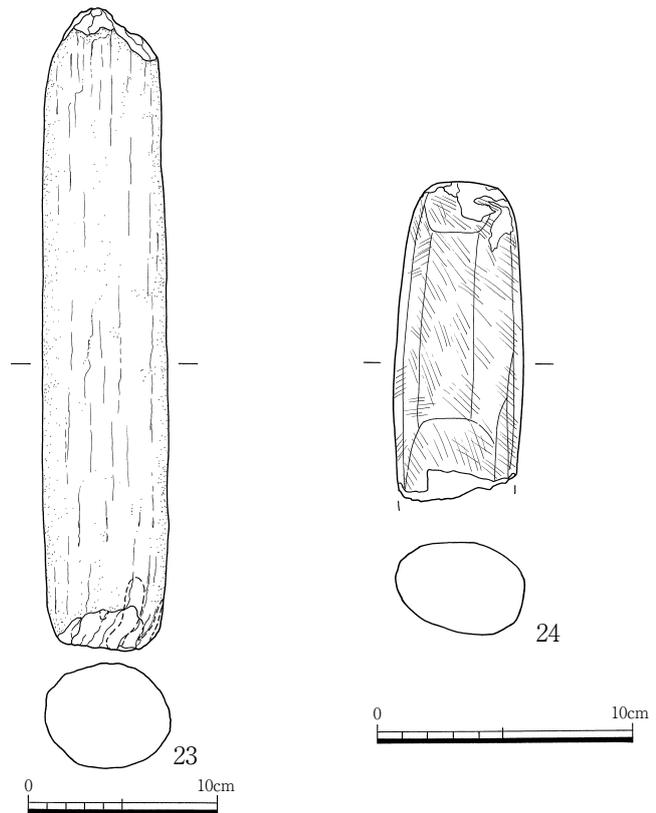
埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、石鎌、石錐、楔形石器、粘土塊

所見；調査区の南部に位置し、方形を呈する土坑である。遺構の北部と東部の一部に壁溝を確認できる。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層で下層は黄褐色シルトがブロック状に入り、焼土・炭化物が若干入る。土器は壺底部(4・5)、甕(1~3)を図示し得た。この他に粘土塊が5点出土している。石器は石鎌(6)、石錐(7)、楔形石器(8・9)が見

られる。6の石鎌は刃部を大きく欠損しているが、欠損面は平坦に磨かれている。柄端部も鋭く切断され面をなしている。全面激しく熱を受け赤変している。石材は頁岩系統のものと考えられる。



C4-63 図 C4SK4089 (3)

C4SK4102(C4-66 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-56°-W

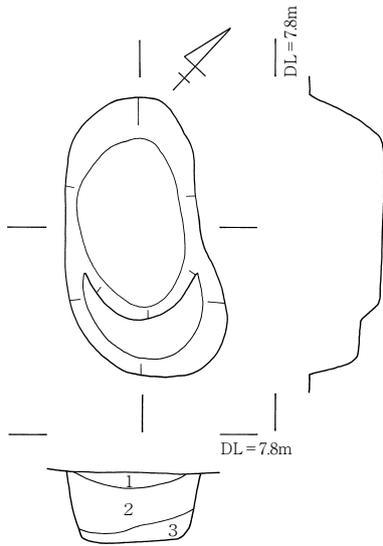
規模；2.03m×1.6m **深さ**；56.5cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色シルト

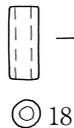
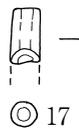
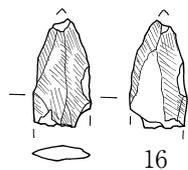
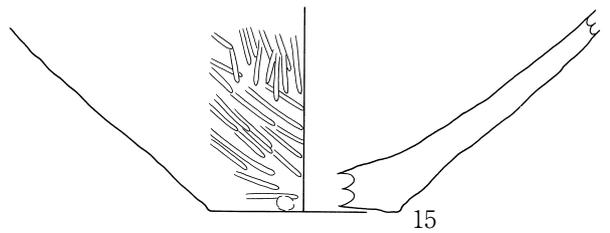
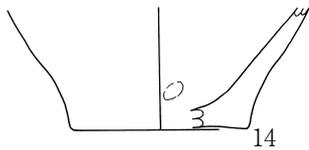
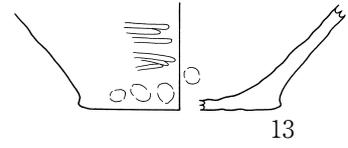
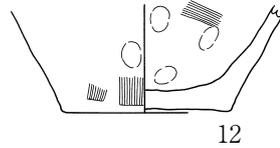
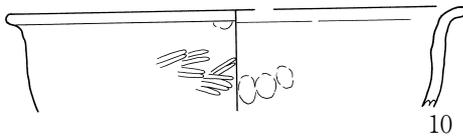
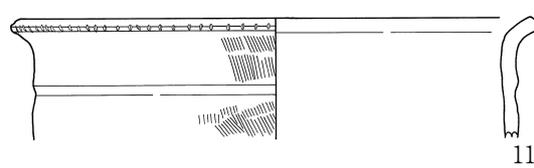
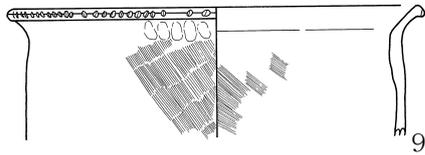
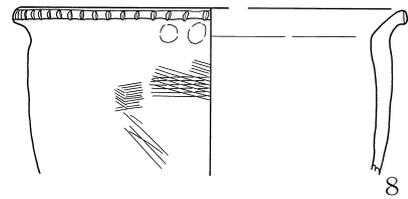
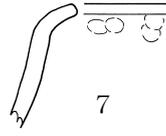
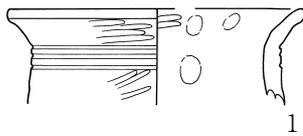
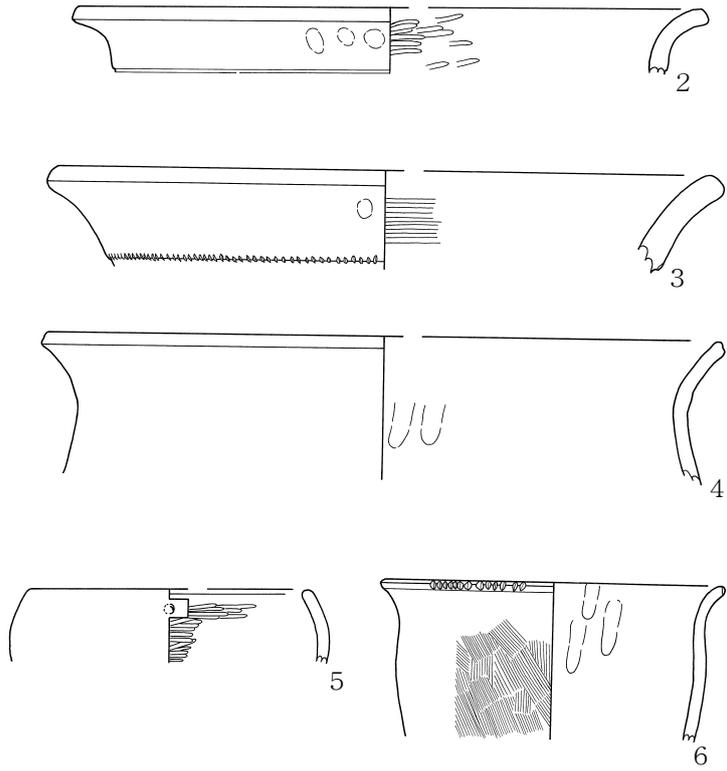
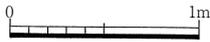
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、紡錘車

所見；調査区の南部に位置し、上面が削平され浅い遺構の中で比較的残りが良い土坑である。埋土は黒褐色シルトを基調とする。2層には焼土・炭化物が入り、4層はやや粘土質で焼土が混じる。遺物は4層に集中する。出土遺物は壺(1・2)、甕(3~5・7~10)、鉢(6)、紡錘車(11)である。I-3期の一括資料として捉えることができる。

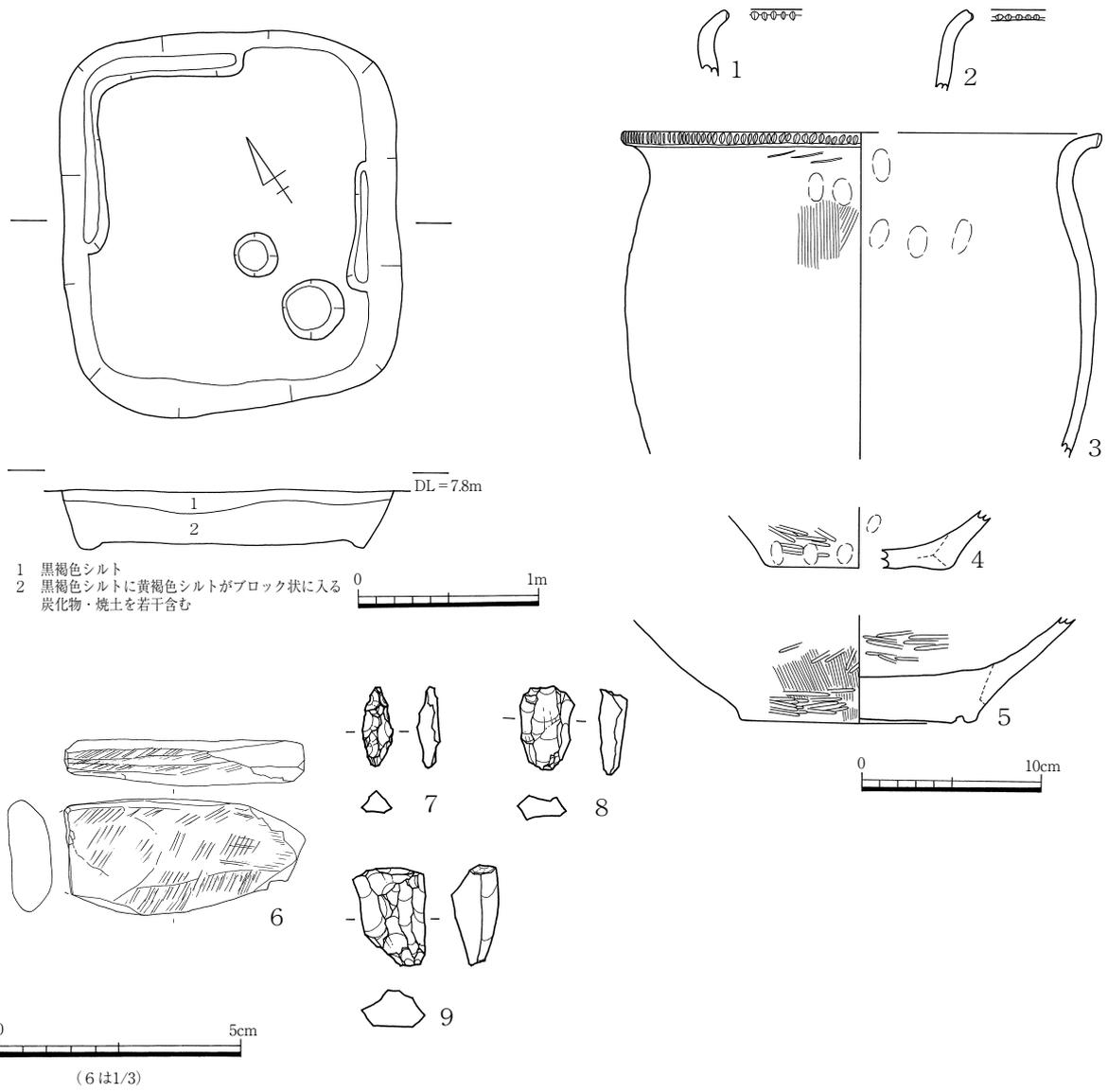


- 1 黒褐色シルトに黄褐色シルトが混入
- 2 灰黄褐色シルトに黄褐色シルトが混入
- 3 褐灰色シルトに黄褐色シルトが混入

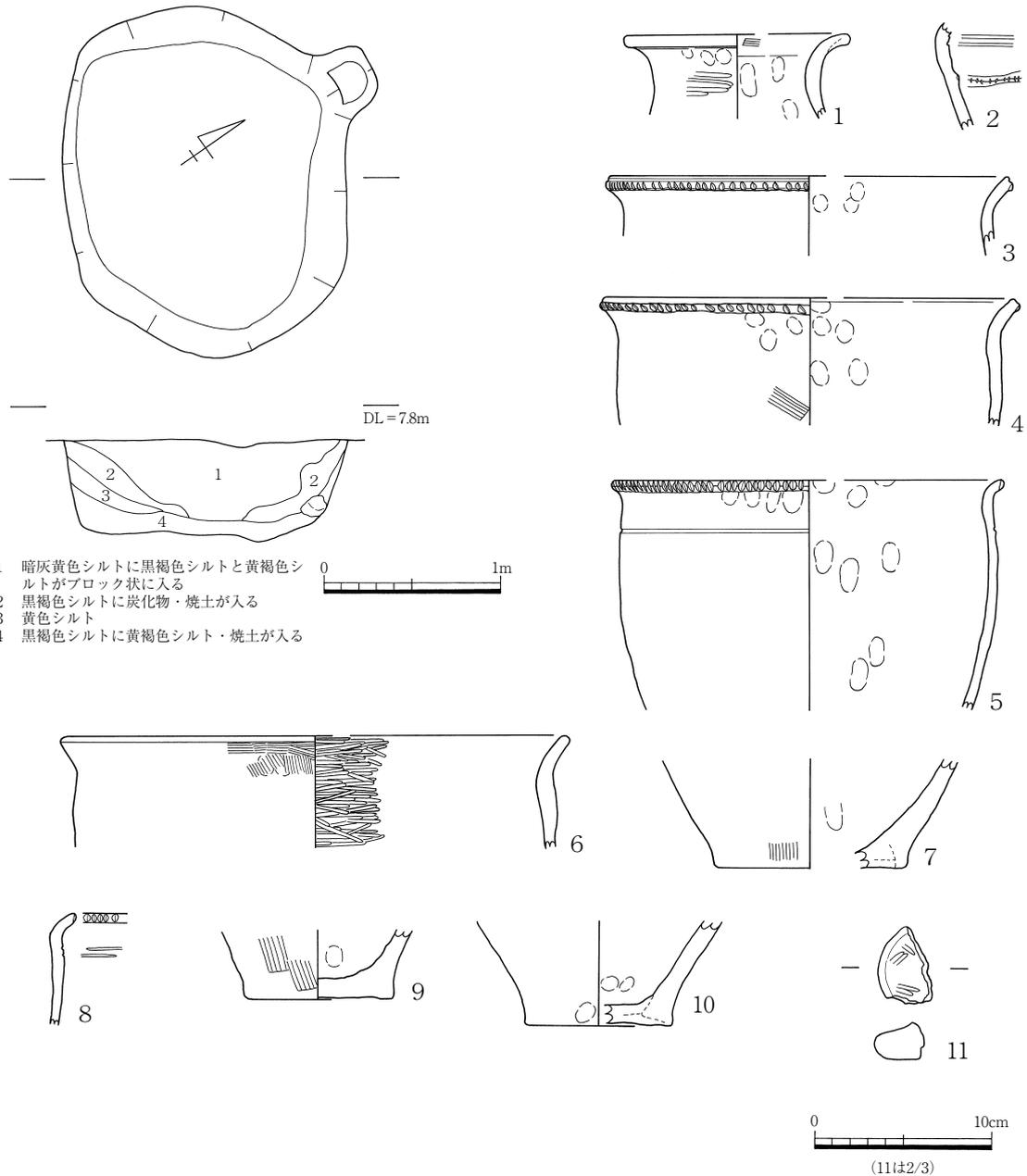


(16±2/3、17・18±1/1)

C4-64 ☒ C4SK4097



C4-65 図 C4SK4100



C4-66 図 C4SK4102

C4SK4106 (C4-67 図)

時期；弥生I-3 形状；不整形 主軸方向；N-66°-W

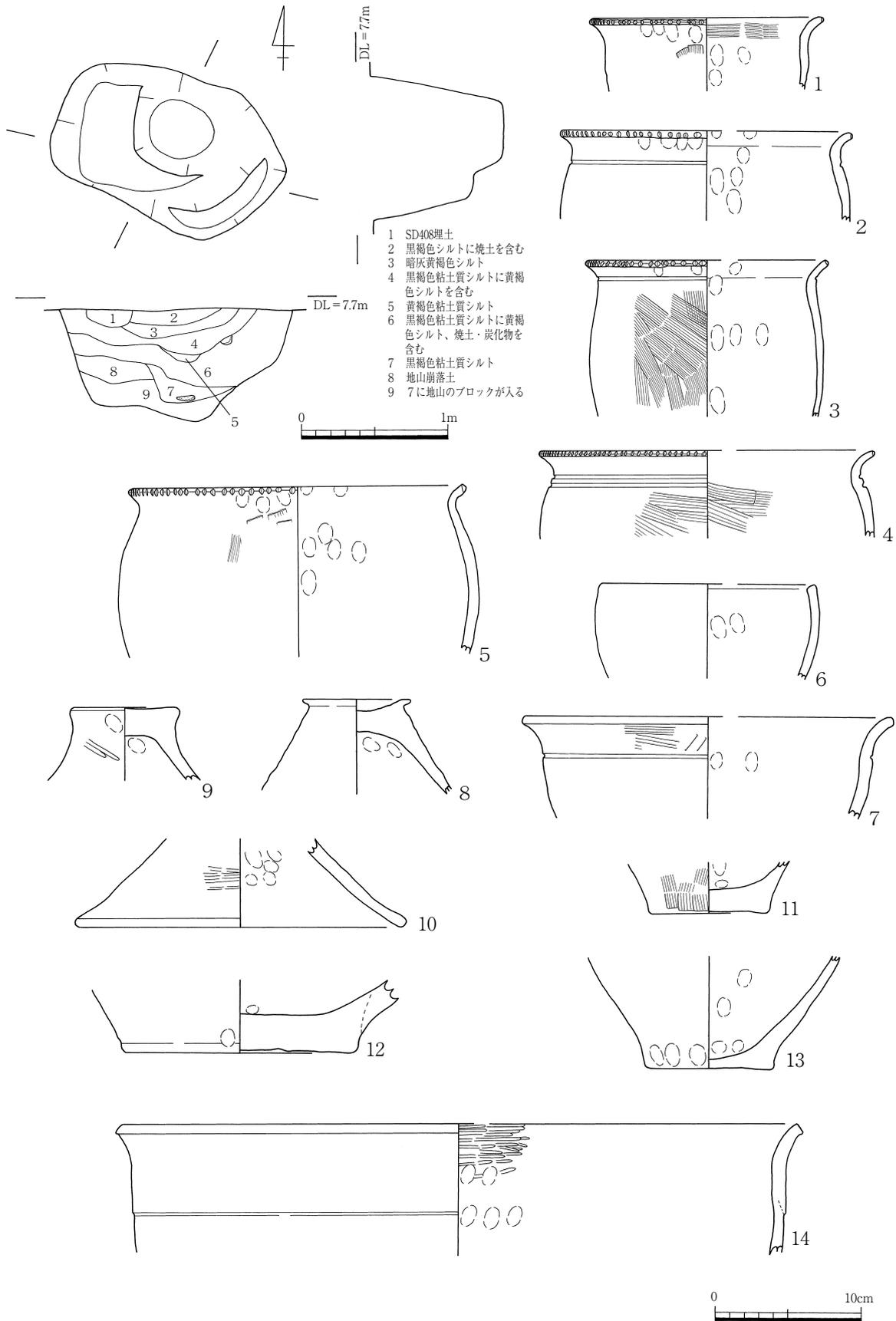
規模；1.55m×1.05m 深さ；70~80cm 断面形態；逆台形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

所見；調査区の南部に位置し、上面を溝に切られている。床面は段状を呈し中央部が窪んでいる。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする8層である。2層に焼土が、6層には焼土・炭化物が含まれ遺物も多い。出土遺物は壺底部(12・13)、甕(1~5・11)、鉢(6・7・14)、蓋(8~10)である。



C4-67 ☒ C4SK4106

C4SK4107(C4-68 図)

時期；弥生I-3 形状；不整形 主軸方向；N-38°-E

規模；2.0m×1.3m 深さ；20cm 断面形態；皿形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、打製石鏃

所見；調査区の南部に位置し、SK4113 を切っている。図示できた遺物は埋土中出土の打製石鏃1点(4)のみである。石材はサヌカイトである。

C4SK4111(C4-69 図)

時期；弥生I-3 形状；長楕円形 主軸方向；N-0°

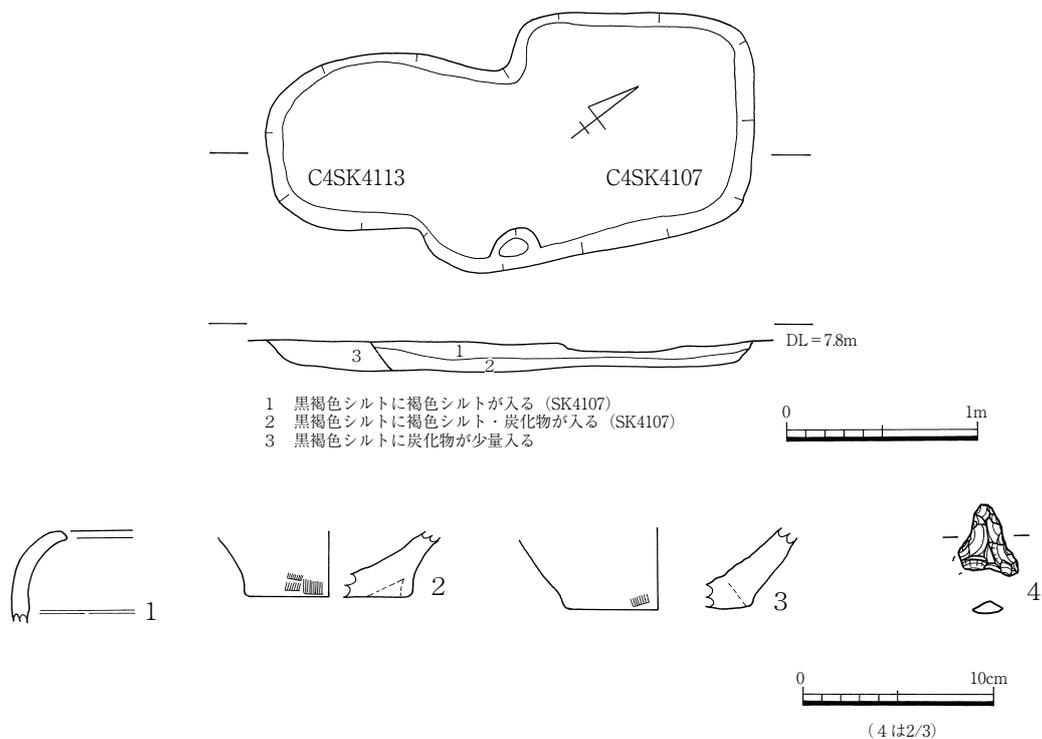
規模；1.72m×0.72m 深さ；20~25cm 断面形態；船底形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、磨製石斧、打製石鏃

所見；調査区の南部隅に位置する細長い土坑である。床面は南に向かって深さを増している。遺物は壺(1・3)、甕(2・4・5)、磨製石斧(10)、打製石鏃(6)である。石斧は未製品の欠損品と考えられる。石材は石斧が御荷鉾緑色岩類、石鏃はサヌカイトである。



C4-68 図 C4SK4107・4113(SK4107：4、SK4113：1～3)

C4SK4112(C4-69 図)

時期；弥生I **形状**；溝状 **主軸方向**；N-7°-W

規模；2.45m×0.65m **深さ**；20.9cm **断面形態**；皿形

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(甕、蓋)、穿孔具、叩石、粘土塊

所見；調査区の南西隅に位置する溝状の土坑である。埋土は暗褐色シルトに褐色シルトが含まれる。土器は細片が多く、図示できたものは甕(7)と蓋(8)である。細片の中には多条化したヘラ描沈線が多く見られることからI-4・5期に属する遺構としなければならない。また図化し得なかったが、粘土塊が10点程(350g)出ており、中には強い熱により黒く焦げ海綿状を呈しているものやスサ状の圧痕が見られるものもある。石器は穿孔具(9)と叩石(11)である。前者は全長6.8cm、重さ43gを量る。先端部が使用により丸味を帯びた凸状を呈する。砂岩製である。

C4SK4113(C4-68 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-26°-E

規模；1.1m×1m **深さ**；30cm **断面形態**；皿形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺)

所見；調査区の南部に位置し、SK4107に切られる。埋土は黒褐色シルトに炭化物が少量入り、上面は攪乱を受けている。出土遺物は細片が多く、段部を有する壺(1)と底部(2・3)が図示できたのみである。

C4SK4117(C4-70 図)

時期；弥生I-2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-65°-W

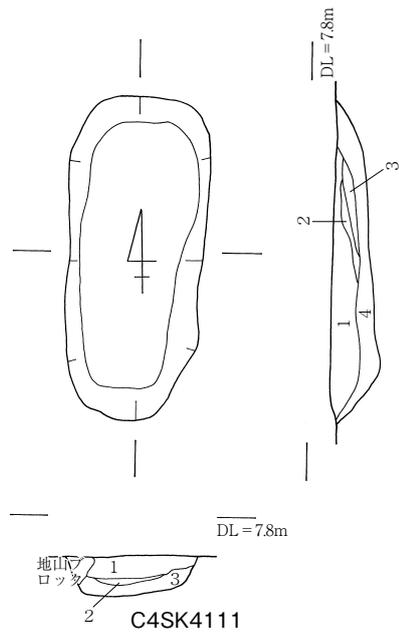
規模；1.2m×1.1m **深さ**；30cm **断面形態**；皿形

埋土；黒褐色シルト

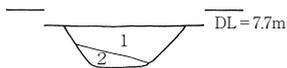
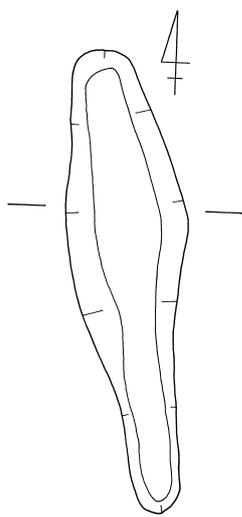
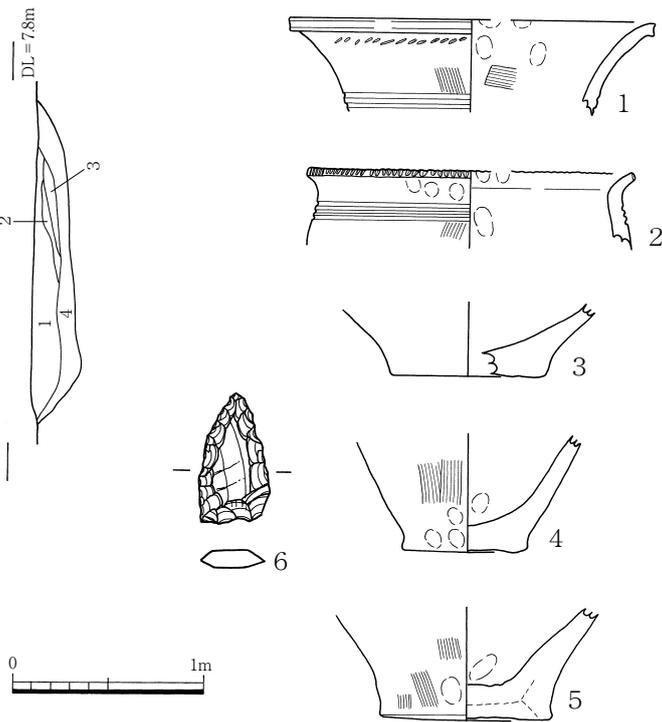
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋)、磨製石斧

所見；調査区の東部に位置し、SK4084とSK4085に切られている。遺物は細片が多く、壺底部(3・4)、甕(1・5)、蓋頂部(2)が図示し得たのみである。石斧(6)は基部の細片で丁寧に研磨している。石材は結晶片岩である。

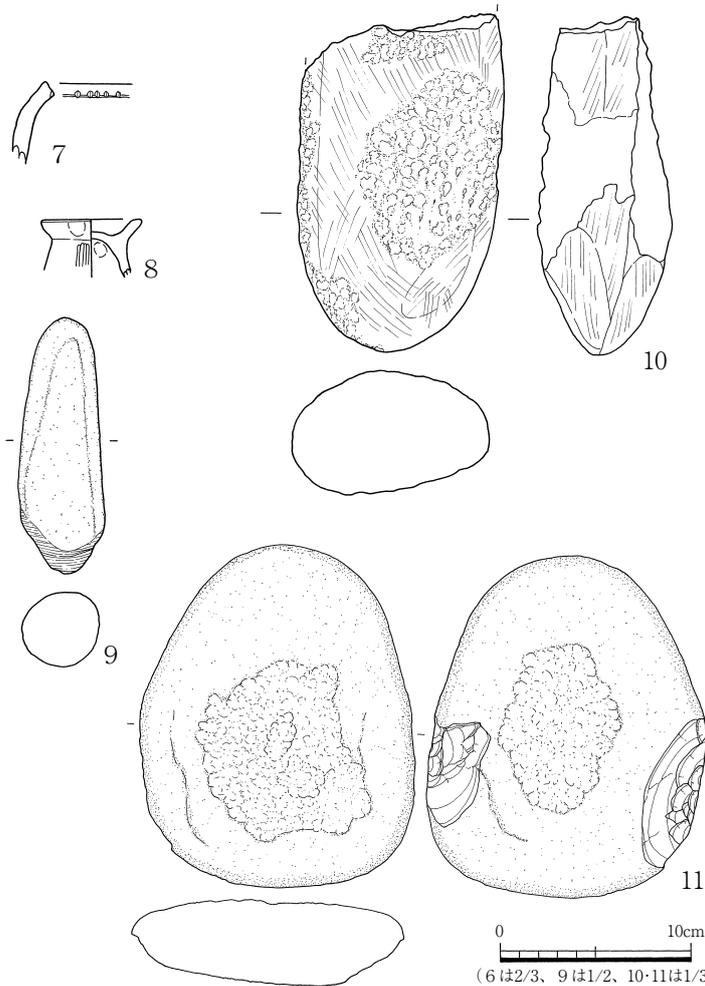


- 1 黒褐色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 黒褐色シルトに黄褐色シルトのブロックが入る
- 4 黒褐色粘土質シルト



- 1 黒褐色シルトに黄褐色シルトのブロックが入る、炭化物を含む
- 2 1と類似するも炭化物を多く含む

C4SK4112



C4-69 図 C4SK4111・4112(SK4111:1~6・10、SK4112:7・8・9・11)

C4SK4132(C4-70 図)

時期；弥生I **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；0.9m×0.94m **深さ**；25.2cm **断面形態**；皿形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；台石

所見；調査区の東部に位置し、SK4109 に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で1層に炭化物が入り、2層は黄褐色シルトを含んでいる。出土遺物は3個の台石のみで、床面に並べられた状態で出土している。2個(7・8)を図示した。長軸20cm前後の扁平な砂岩の河原石で敲打痕跡が顕著に見られ煤けている。埋土からI期に属するものと考えられる。

(3) 溝跡

SD101(C4-71 図)

時期；弥生I-3 **方向**；東→西

規模；検出長 24.77m **深さ**；西 44.5cm・東 18cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色シルト

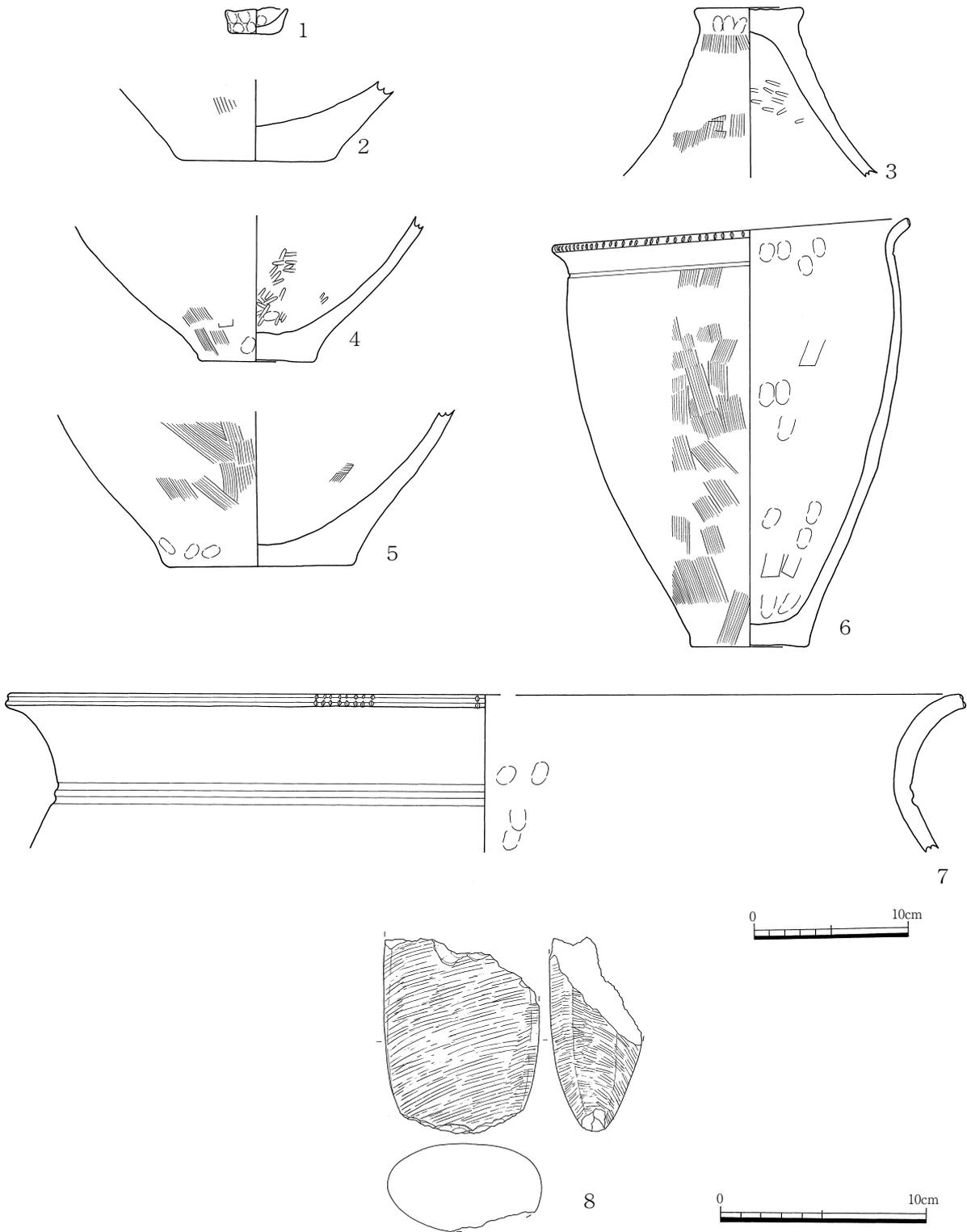
床面標高；7.42~7.23m

接続；C1・E5区

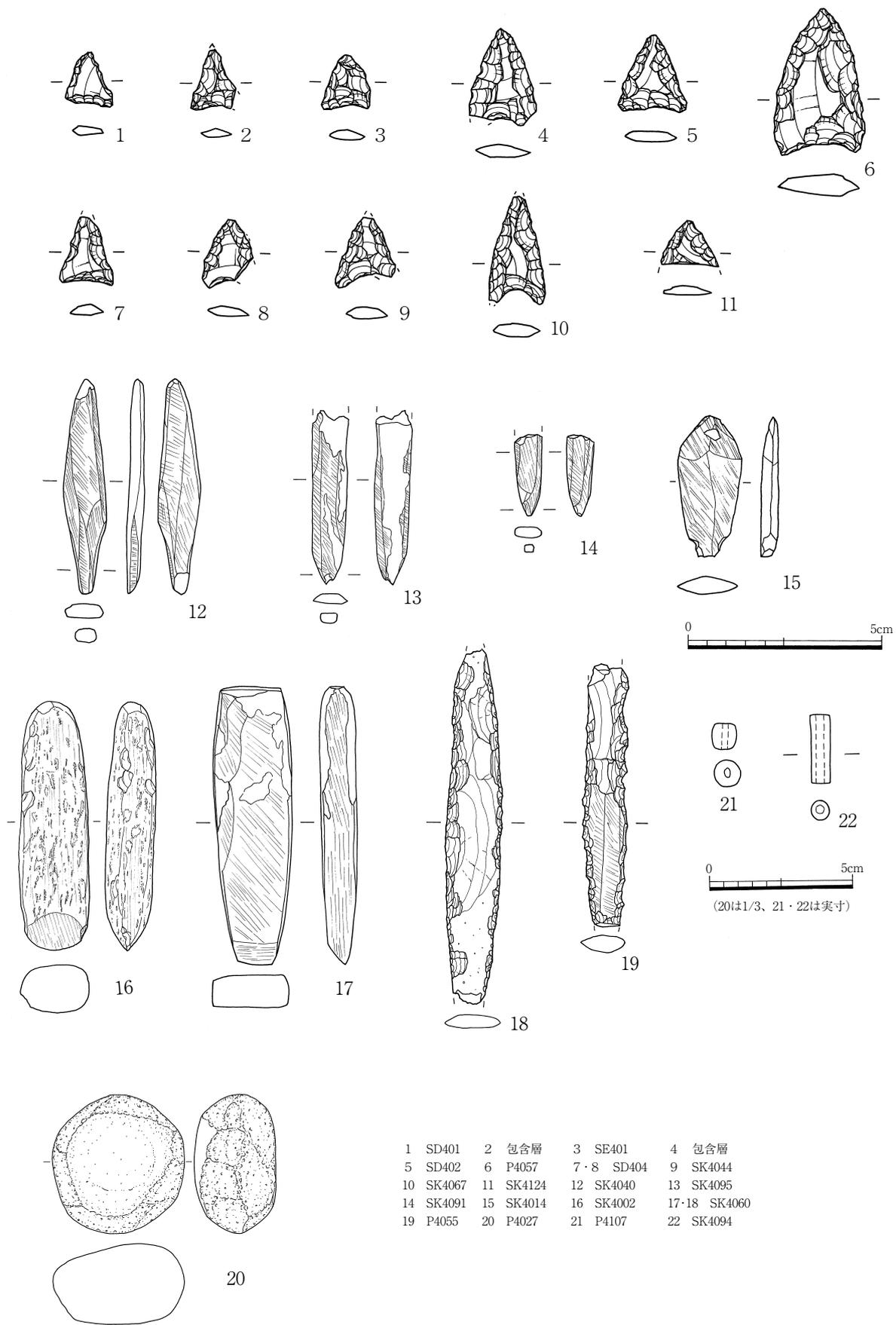
出土遺物；弥生土器(壺、甕、蓋、手捏土器)

所見；調査区の北方に位置し、環濠内を横切り、東方のC1区から西方のE5区へ走る溝である。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層から4層で褐色シルトが混ざる。上層には焼土・炭化物が入る。

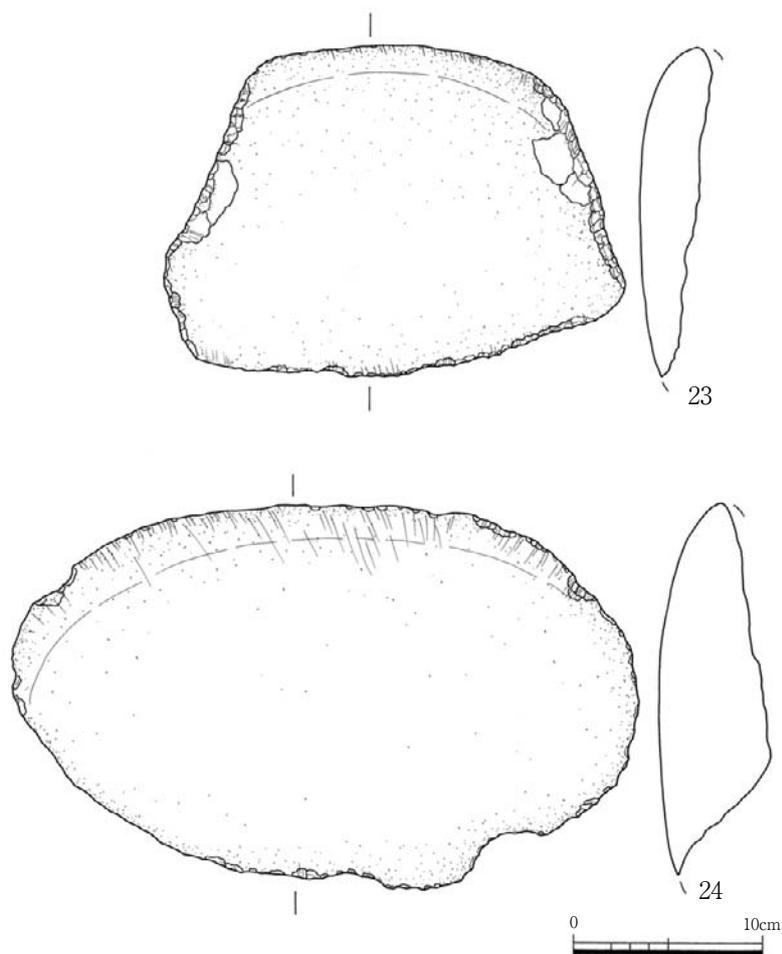
出土遺物は沈線を有する大壺(7)や口縁部に刻み目・上胴部に沈線を施す完形の甕(6)、蓋(3)、ミニチュア(1)が出土している。



C4-71 図 C4SD101



C4-72 図 C4 区その他の遺構出土遺物 (1)



C4-73 図 C4 区その他の遺構出土遺物(2)大型直縁刃石器 (P4155 : 23、P4136 : 24)

3. C4 区中世の遺構と遺物

(1) 井戸跡

本調査区では調査区北東部より井戸跡(SE401)1基と溝跡(SD401)1条を検出した。また北側に隣接するC4北区ではSD401に続く南北方向の溝(C4北SD401)を検出した。規模、形状からL字状を呈する区画溝と考えられ、井戸跡は溝の外側(屋敷地外)にあたる西隅に付随している。この井戸跡は河原石を使用した石組みのもので、環状を呈している。前回の調査では15~16世紀代、古くは14世紀代に成立したと考えられる溝で区画された屋敷跡群を31区画、屋敷内に伴う井戸跡を16区画で検出している。井戸跡はそのほとんどがC4SE401と同様に石組みによるもので、底部には木製の井筒が固定されていた。また大規模な屋敷地に不随した場合が多くみられ、大半が敷地内の南東部に構築されていた。

今回の調査区では掘立柱建物等の遺構はなく、溝跡と井戸跡のみの検出ではあったが、前回の調査の成果をふまえると何らかの建物跡があった可能性が考えられる。

C4SE401 (C4-74・75 図)

時期：中世 **形状**：円形 **主軸方向**：—

規模：掘方 1.98m×1.8m、石組み 1.5m×1.44m **深さ**：3.2m **断面形態**：長U字状

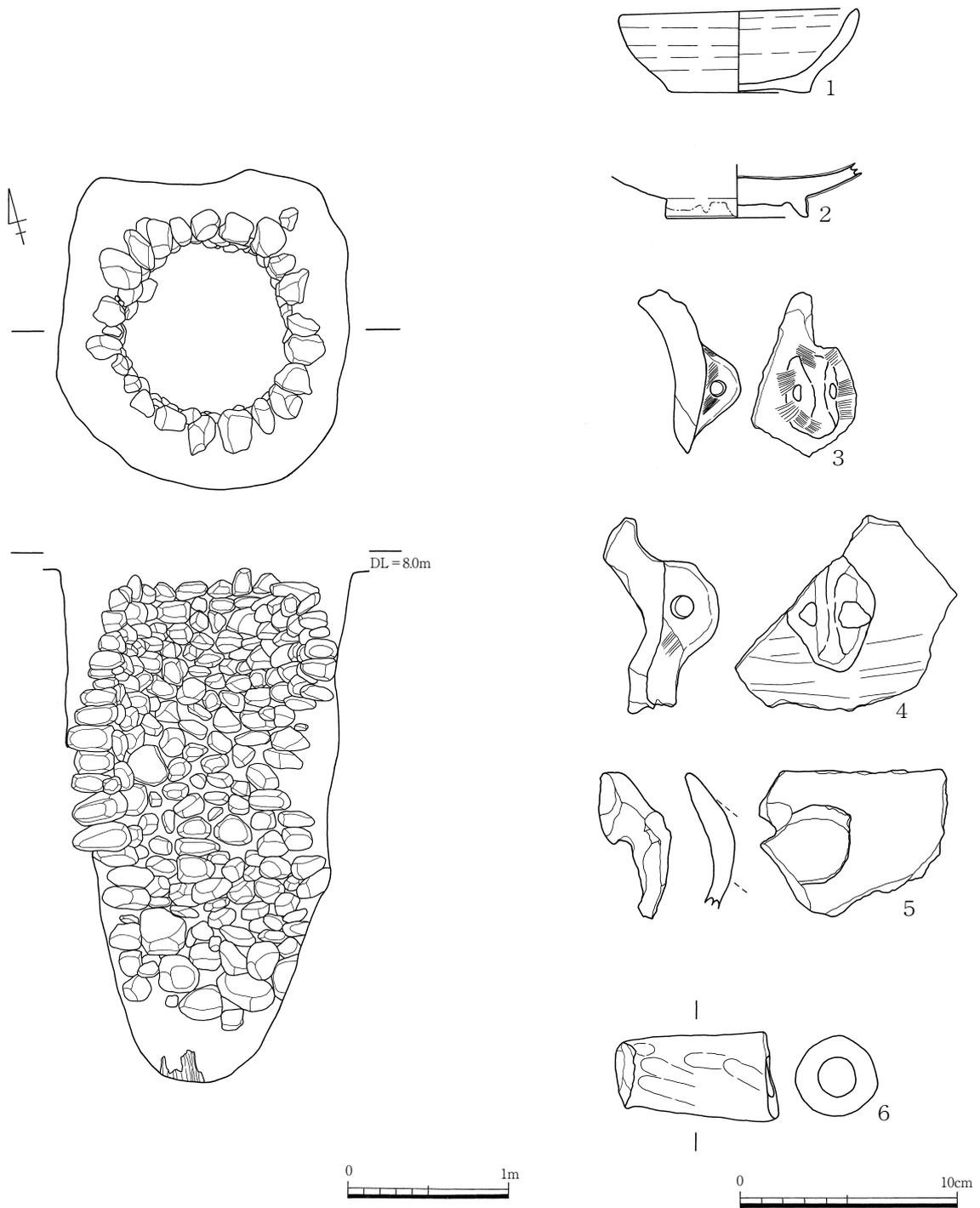
埋土：—

付属遺構：C4北SD401

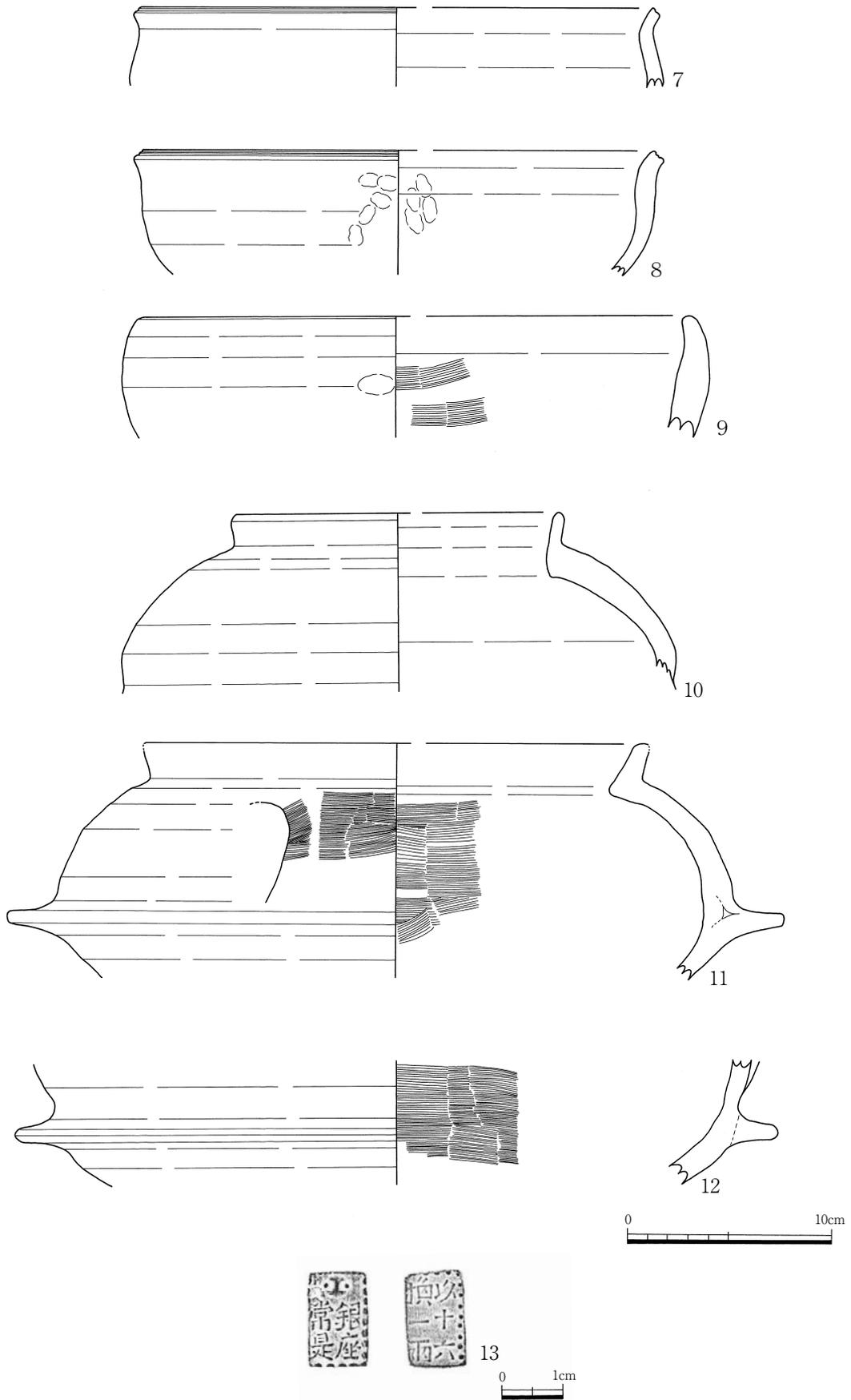
出土遺物：土師質土器(杯、焙烙、茶釜)、瓦質土器鍋、青磁碗

所見：調査区北東隅に位置する。ほぼ円形の掘方と環状に並ぶ井戸の石組みを検出した。石組みは直径20~40cm前後の河原石を使用しており、下層になるに従って石組みの内径は縮小し、下端部では約95cmを測る。さらに下(井戸底面)には木製の桶状井筒が設置されており、周辺には河原石が敷き詰められていた。井筒は1/2程度のみが残存であったが、幅約5cm、長さ15cm以上の板を円形に組み合わせたものであったと考えられる。

遺物は底部外面に糸切り痕が残存し、体部がやや内湾する土師質土器の坏(1)、高台畳付まで施釉された青磁碗の底部(2)、土師質土器の焙烙(9)、頸部で屈曲し口縁部が外反する瓦質土器の鍋(7・8)、土師質土器の茶釜(10~12)、茶釜の把手部分(3・4)等、15世紀から16世紀代の遺物が出土している。中でも茶釜や鍋類の破片が多く見られた。



C4-74 図 C4SE401



C4-75 図 C4SE401・表面採取遺物

4. C4 区表面採取遺物

(1) 古銭

文政南鐐一朱銀(C4-75-13 図)

C4 区SE401 の検出時に出土した。全長 1.5cm、全幅 0.95cm、全厚 0.15cm で重量は 2.61g を測る。両面には「以十六換一両」「銀座常是」とある。鑄造年代は文政 12 年から天保 8 年(1829 年~1837 年)である。

C4 北区の調査





C4 北-1 図 C4 北区遺構全体配置図 (S= 1/250)

1. C4 北区の概要

概要

本調査区は田村遺跡群の北部に位置し、弥生時代前期の環濠集落の中心部である。C4 区のさらに北側に当たり弥生時代前期の遺構群の最北端である。遺構は土坑 66 基・溝跡 2 条・ピット 260 個を検出している。当調査区は前期集落の中にあるが、竪穴住居は認められなかった。土坑群の空間として位置付けなければならない。

調査担当者 坂本憲昭、小島恵子

執筆担当者 小島恵子が主として執筆を行ない、出原恵三、筒井三菜が補助を行なった。

調査期間 平成 8 年 12 月 2 日~平成 9 年 3 月 21 日、平成 9 年 5 月 19 日~8 月 12 日

調査面積 418m²

時代 弥生時代前期、古代、中世

検出遺構 弥生時代土坑 66 基、溝 2 条、ピット 260 個、中世溝 1 条、ピット 1 個

2. C4 北区弥生時代の遺構と遺物

(1) 土坑

弥生時代の土坑 66 基の中で、24 基について具体的に説明する。これらの中にはC4 区と同様にI-2 期、I-3 期の良好な一括資料も多く含まれており弥生文化成立期の基準資料となるものである。

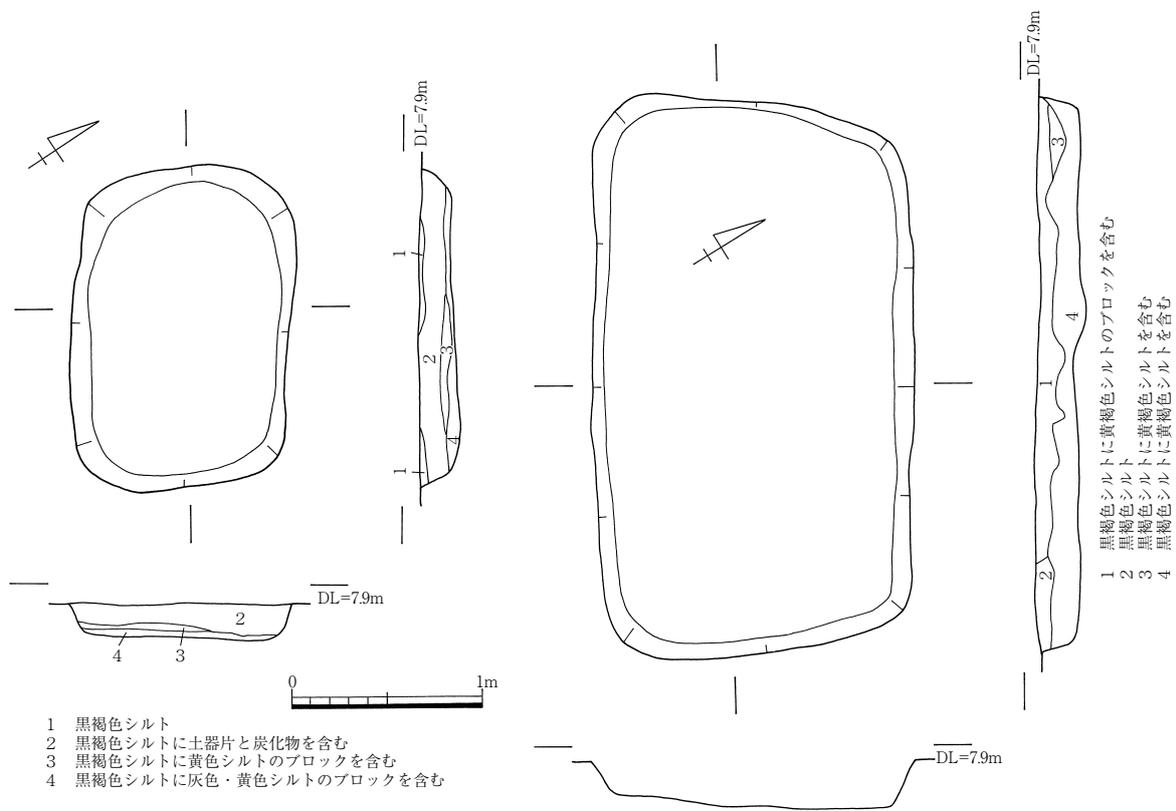
C4 北-1 表 C4 北区土坑一覧表

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C4 北SK4133	楕円形	逆台形	1.52	—	26	N-19°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4134	楕円形	逆台形	1.16	0.76	10	N-78°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4135	隅丸方形	皿形	1.70	1.16	20	N-57°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4136	隅丸方形	逆台形	2.92	1.70	20~28	N-54°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4137	楕円形	—	—	—	—	—				
C4 北SK4138	円形	—	—	—	—	—				
C4 北SK4139	隅丸方形	逆台形	—	1.40	24	N-22°-E	黒褐色シルト	SK4140	I-3	
C4 北SK4140	円形	—	0.77	0.54	24	N-44°-W	暗褐色シルト	SK4139		
C4 北SK4141	不整形	逆台形	1.58	1.10	14	N-82°-W	黒褐色シルト	SK4142	I-2	
C4 北SK4142	不整形	—	2.04	0.4	17	N-89°-E		SK4141		
C4 北SK4143	隅丸方形	逆台形	—	0.70	16	N-48°-W	黒褐色シルト	SK4142	I-3	
C4 北SK4144	楕円形	逆台形	3.18	1.66	9	N-86°-E		SK4145		
C4 北SK4145	楕円形	—	—	0.42	7	N-27°-E		SK4144		
C4 北SK4147	不整形	逆台形	2.70	1.08	30~40	N-27°-E	黒褐色シルト	SK4148	I-2	
C4 北SK4148	不整形	逆台形	1.80	9.6	18	N-26°-E	黒褐色シルト	SK4147		
C4 北SK4149	隅丸長方形	逆台形	3.18	1.63	50	N-30°-E	黒褐色シルト	SK4153	I-2	
C4 北SK4150	円形	皿形	0.58	0.64	9	N-26°-E				
C4 北SK4151	方形	逆台形	2.02	1.63	24	N-7°-E	黒褐色シルト	SK4169		
C4 北SK4152	楕円形	皿形	1.78	1.67	20	N-8°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4153	不整形	逆台形	1.60	0.94	36	N-3°-E	黒褐色シルト	SK4149		
C4 北SK4155	楕円形	皿形	1.80	0.84	4	N-86°-E				
C4 北SK4156	楕円形	皿形	1.70	1.38	16	N-17°-E	暗褐色シルト	SK4168	I-3	
C4 北SK4159	円形	逆台形	0.7	0.6	27	N-76°-W	にぶい黄褐色			
C4 北SK4160	不整形	皿形	2.04	1.4	14	N-74°-W	にぶい黄褐色	SK4161		
C4 北SK4161	隅丸方形	箱形	3.28	1.60	24	N-73°-W	黒褐色シルト	SK4160	I-3	
C4 北SK4163	楕円形	箱形	2.40	1.42	32	N-22°-E	黒褐色シルト	SK4164	I-3	
C4 北SK4164	楕円形	皿形	—	1.02	10	推N-22°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4165	円形	逆台形	1.22	1.2	22	N-48°-E				
C4 北SK4166	円形	皿形	1.0	1.02	15	N-48°-E				
C4 北SK4168	円形	皿形	0.68	0.64	13	N-17°-E				
C4 北SK4169	不整形	皿形	—	—	18	N-74°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4170	隅丸方形	皿形	3.02	1.62	26	N-84°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4171	不整形	皿形	1.38	推 1.00	10	N-18°-E	暗褐色シルト			
C4 北SK4172	不整形	逆台形	1.82	1.53	22	N-66°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4173	隅丸方形	逆台形	2.45	推 1.34	26	N-80°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4174	円形	皿形	0.84	0.72	8	N-77°-W	黄灰色シルト			
C4 北SK4175	楕円形	箱形	2.36	1.89	22	N-12°-E	黒褐色シルト		I	
C4 北SK4177	方形	逆台形	2.26	1.5	28	N-22°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4178	不整形	逆台形	1.64	1.62	60	N-28°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4179	不整形	すり鉢状	1.65	1.60	58	N-53°-W	黒褐色シルト	SD401	I-2	
C4 北SK4180	隅丸長方形	箱形	2.54	1.52	50	N-34°-E	黒褐色シルト	SK4190	I-3	
C4 北SK4181	楕円形	皿形	2.45	0.84	18	N-73°-W	黒褐色シルト	SK4192		
C4 北SK4183	不整形	皿形	1.08	1.0	12	N-74°-W				
C4 北SK4184	不整形	箱形	1.16	—	22	N-26°-E	暗褐色シルト	SK4178		
C4 北SK4185	楕円形	皿形	推 1.50	0.8	7	N-16°-W				
C4 北SK4186	不整形	皿形	2.0	1.0	13	N-61°-E				
C4 北SK4188	隅丸方形	不定形	1.60	1.2	16~26	N-56°-W	黒褐色シルト		I-2	
C4 北SK4190	不整形	逆台形	1.02	—	28	N-34°-E	黒褐色シルト	SK4180		
C4 北SK4192	長楕円形	逆台形	2.2	0.84	64	N-73°-W	黒褐色シルト	SK4181	I-3	
C4 北SK4193	楕円形	逆台形	1.6	1.5	38~44	N-51°-E	黒褐色シルト	SK4194	I-3	
C4 北SK4194	—	—	—	—	30	—	黒褐色シルト	SK4193		
C4 北SK4195	楕円形	不定形	1.29	1.26	58	N-71°-W	黒褐色シルト	SD401	I-3	
C4 北SK4197	楕円形	不定形	1.3	1.26	26	N-59°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4198	不整形	不定形	1.3	0.8	60	N-66°-W	黒褐色シルト			
C4 北SK4199	隅丸方形	箱形	2.50	推 1.6	60	N-54°-W	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4200	楕円形	すり鉢状	1.9	1.2	98	N-14°-E	黒褐色シルト	SK4202	I-3	
C4 北SK4201	楕円形	不定形	1.3	1.2	20	N-0°	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4202	不整形	不定形	推 1.60	推 1.00	35	N-6°-E	黒褐色シルト	SK4200		
C4 北SK4203	不整形	不定形	0.7	0.7	14	N-28°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4204	長楕円形	不定形	推 2.1	0.80	22	N-22°-E	黒褐色シルト		I-3	
C4 北SK4205	不整形	皿形	1.0	0.42	11	N-73°-E	黒褐色シルト			
C4 北SK4207	楕円形	U字状	1.22	1.1	44	N-51°-W	黒褐色シルト	SK4206	I-3	
C4 北SK4210	不整形	不定形	推 1.30	1.16	16	N-28°-E	黒褐色シルト			

C4 北SK4135(C4 北-2 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-57°-W**規模**；1.7m×1.16m **深さ**；20cm **断面形態**；皿形**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕)**所見**；調査区の西部に位置する土坑である。遺構の北部と南部に壁溝が巡り、基底面の西部に砂利層が残る。埋土は黒褐色シルトを基調とする5層である。3層に炭化物と土器片が入る。

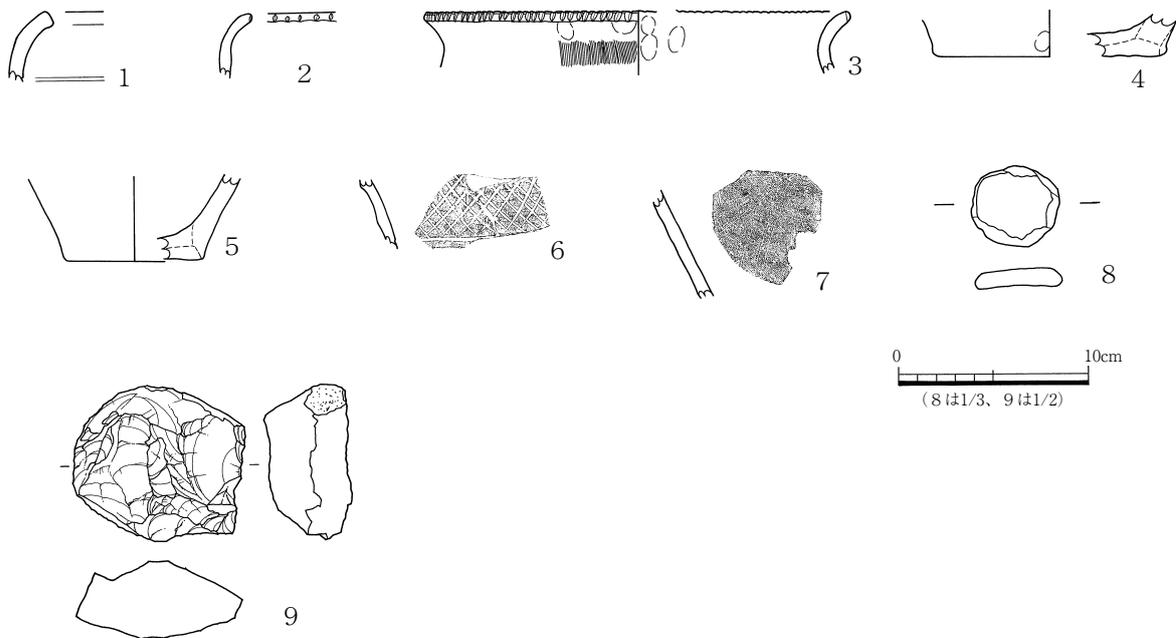
出土遺物は細片で、壺胴部片(7)、甕口縁部(3)、底部(4)を図示し得たのみである。

C4 北SK4136(C4 北-2 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-54°-W**規模**；2.92m×1.70m **深さ**；20~28cm **断面形態**；逆台形**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕)、土製円板、楔形石器**所見**；調査区の西方に位置する土坑である。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で各層に黄褐色シルトがブロック状に入る。出土遺物は壺(1)・甕(2)の口縁部の細片と甕底部(5)、格子目文を施した壺胴部(6)、土製円板(8)、楔形石器(9)である。**C4 北SK4139**(C4 北-3 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-22°-E**規模**；?×1.4m **深さ**；24cm **断面形態**；逆台形**埋土**；暗褐色・黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(甕)、紡錘車、碧玉製管玉**所見**；調査区の西部に位置し、南側をSK4140に切られており長軸は不明である。遺物は細片が多く土器は甕(2・7)、紡錘車(6)を図示し得たのみである。この他埋土中より碧玉製管玉(9)が出土している。



C4北SK1435

C4北SK4136



C4北-2 図 C4北SK4135・4136(SK4135:3・4・7、SK4136:1・2・5・6・8・9)

C4 北SK4141 (C4 北-3 図)

時期；弥生I-2 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-82°-W
規模；1.58m×1.10m **深さ**；14cm **断面形態**；逆台形
埋土；黒褐色シルト
付属遺構；— **機能**；—
出土遺物；弥生土器(甕、高杯)

所見；調査区の北西部隅に位置しSK4142と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は単純一層である。遺物は細片が多く甕(1・3・5・8)、高杯(4)を図示し得たのみである。4は脚部と杯部の接合部に断面三角形の突帯が貼付されている。

C4 北SK4143 (C4 北-4 図)

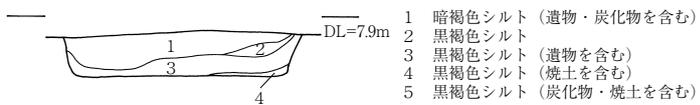
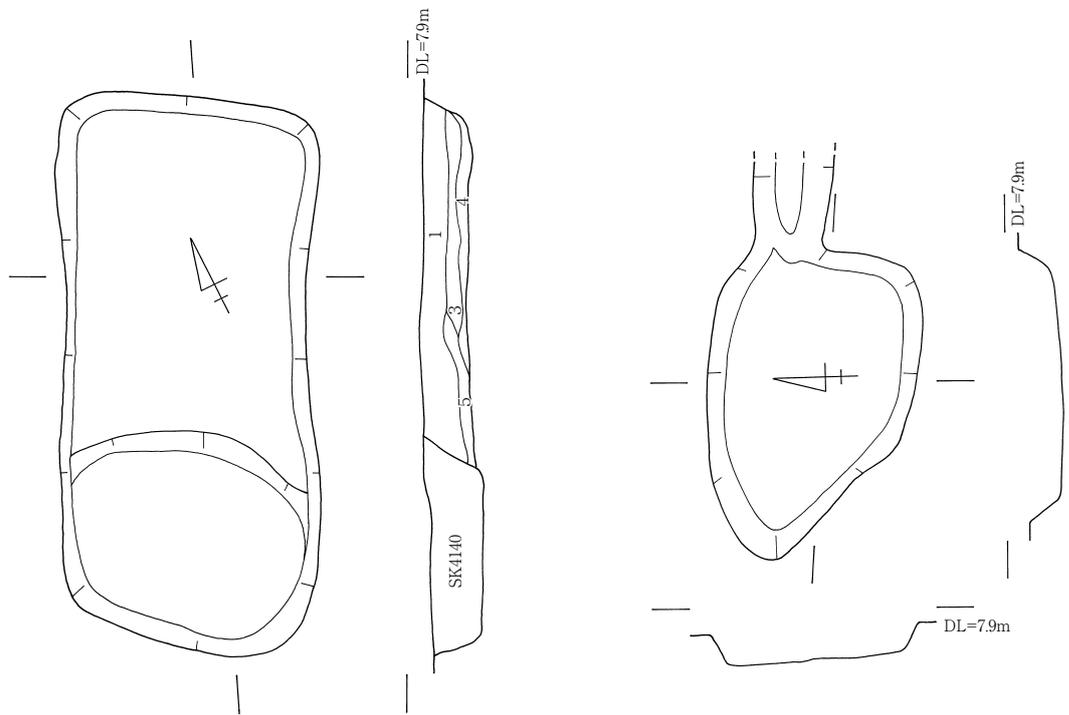
時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-48°-W
規模；?×0.70m **深さ**；16cm **断面形態**；逆台形
埋土；黒褐色シルト
付属遺構；— **機能**；—
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)

所見；調査区の北西部隅に位置しSK4142と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は単純一層である。遺物は細片が多く壺(1・4・6)、甕(2・3・5)、小型鉢(7)を図示し得たのみである。

C4 北SK4147 (C4 北-5・6 図)

時期；弥生I-2 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-27°-E
規模；2.7m×1.08m **深さ**；30~40cm **断面形態**；逆台形
埋土；黒褐色シルト
付属遺構；— **機能**；—
出土遺物；弥生土器(壺、甕)、石鎌

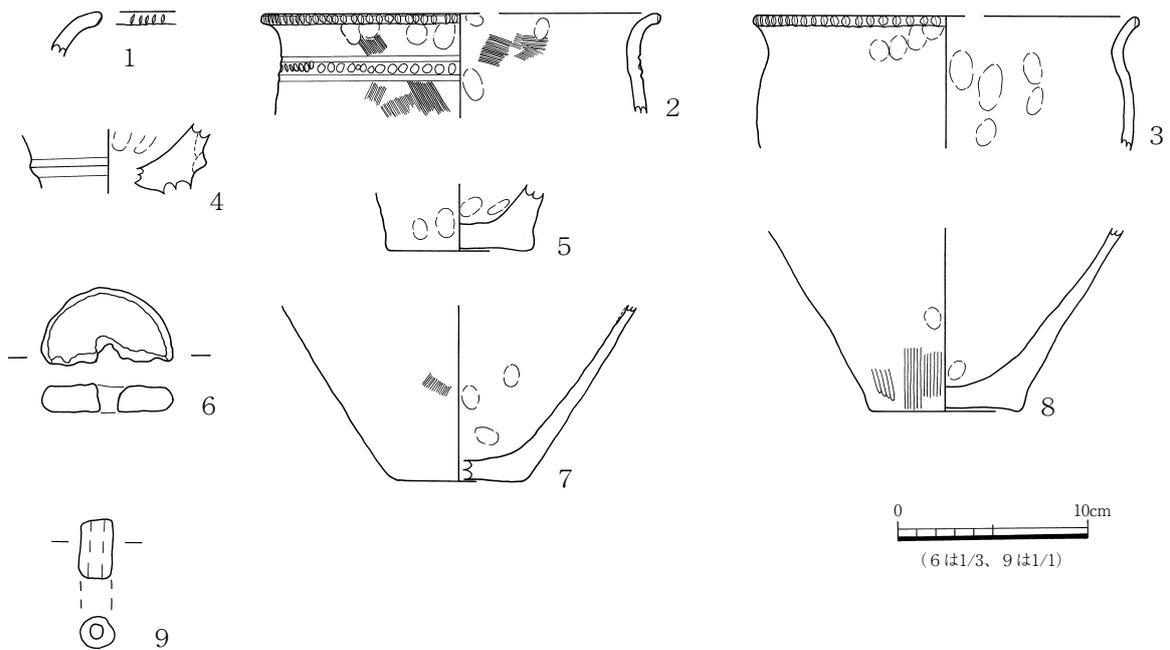
所見；調査区の西方に位置し、一部SK4148に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とする5層で、遺物が上面から流れ込むように多量に入り、2・3層に集中している。床面は両端部が大きく窪んでいる。出土遺物は壺(1~4)、甕(5~17)、石鎌(18)である。甕が圧倒的に多くを占めている。図示し得なかったものも含めて、口縁部で両者を比較すると壺4点に対して甕は40点を占めている。しかも壺の口縁部は細片のみで、甕が選ばれて廃棄された可能性がある。甕は如意状口縁をもつものがほとんどであるが、1点のみ突帯文系(5)が入っている。如意状口縁の甕は、段部を持つもの(6・8・10・12・14~16)が図示しえなかったものも含めて8点見られる。段部の位置もさまざままでバリエーションが見られる。ヘラ描沈線を有するものは認められない。石鎌は二次的に火を受けている。1-2期の良好な一括資料として位置付けることができる。



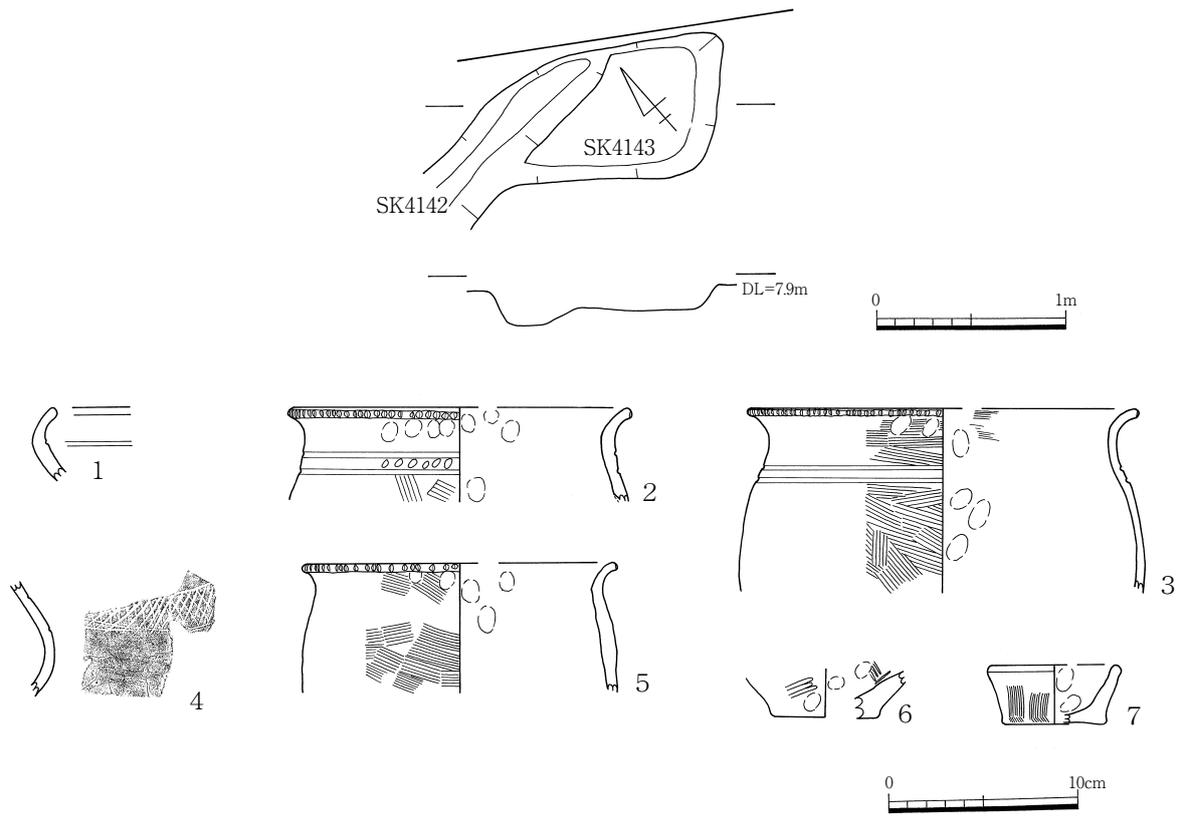
- 1 暗褐色シルト (遺物・炭化物を含む)
- 2 黒褐色シルト
- 3 黒褐色シルト (遺物を含む)
- 4 黒褐色シルト (焼土を含む)
- 5 黒褐色シルト (炭化物・焼土を含む)

C4北SK4141

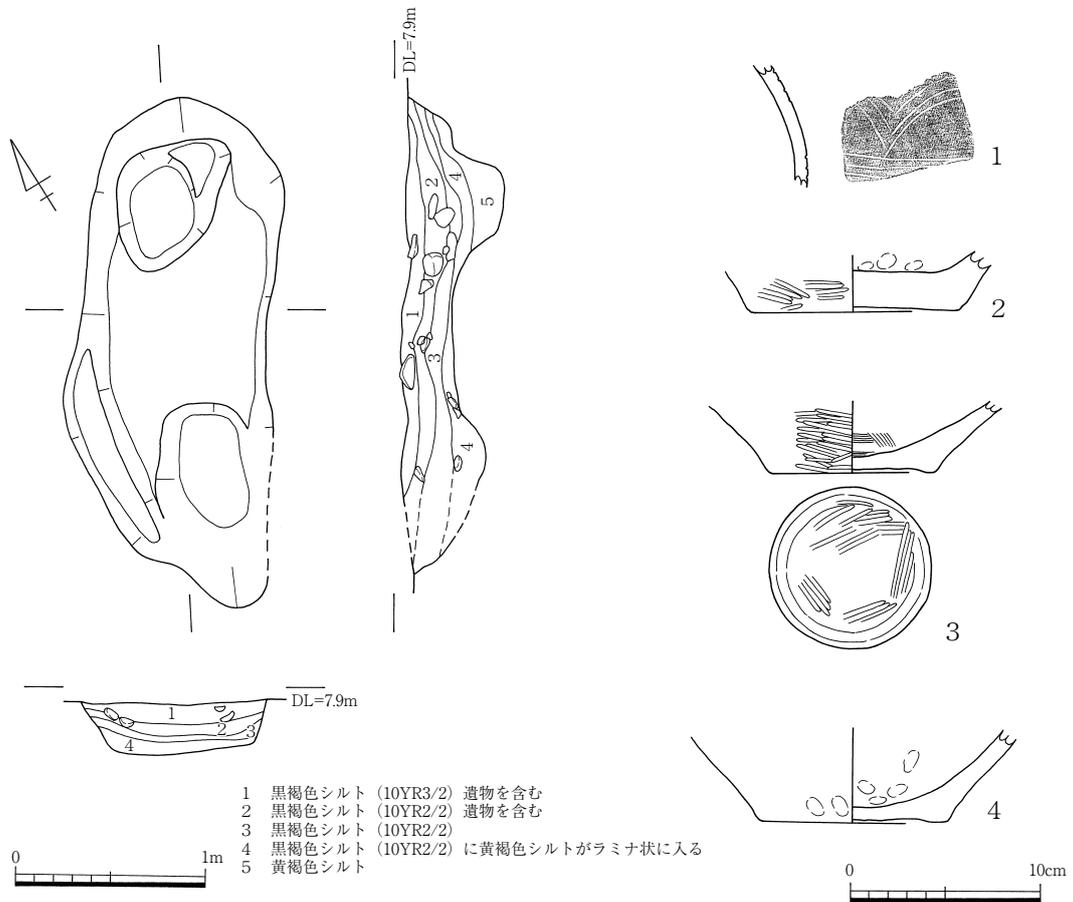
C4北SK4139



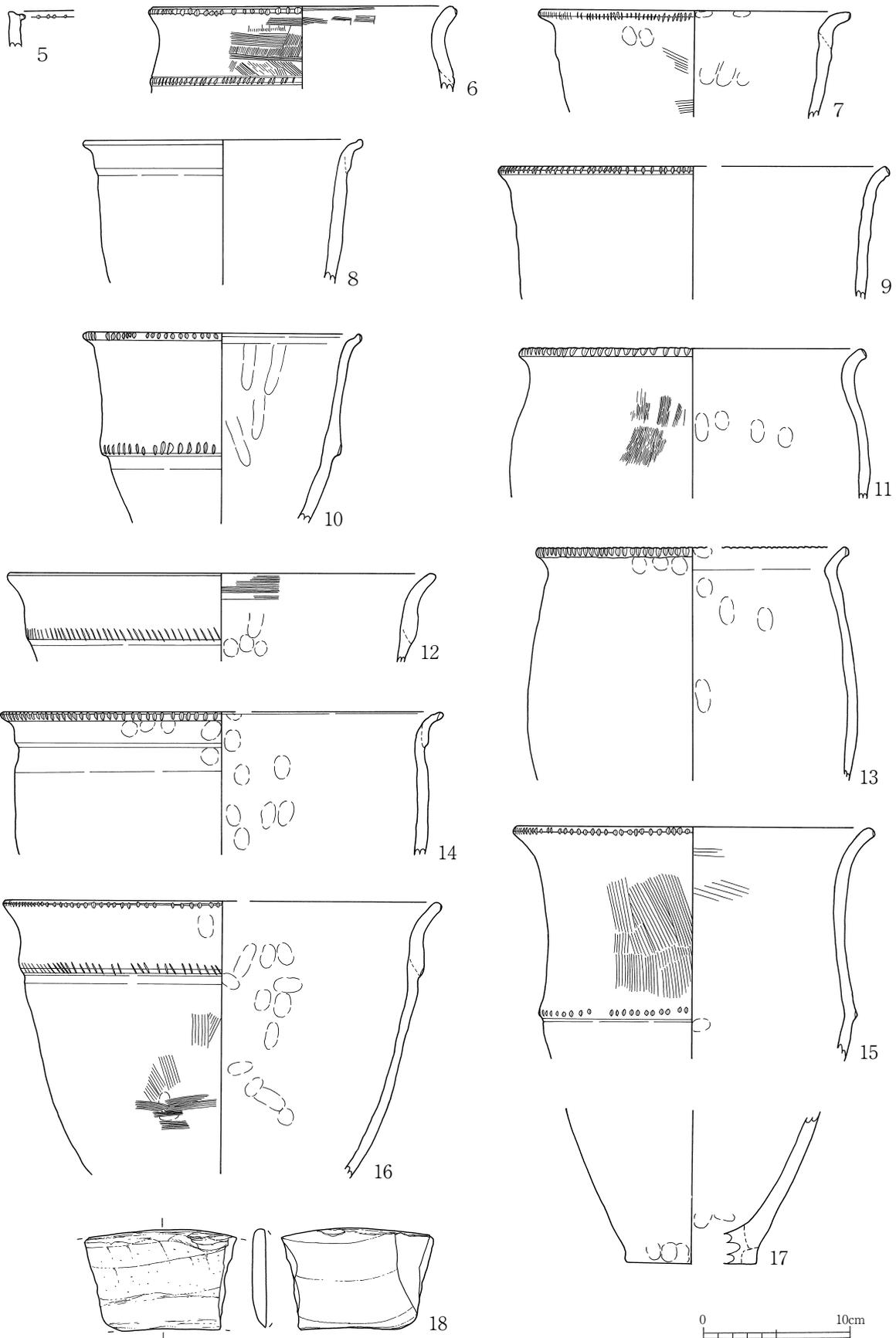
C4北-3 図 C4北SK4139・4141 (SK4139 : 2・6・7・9、SK4141 : 1・3~5・8)



C4 北-4 図 C4 北SK4143



C4 北-5 図 C4 北SK4147(1)



C4 北-6 图 C4 北SK4147(2)

C4 北SK4149(C4 北-7~11 図)

時期；弥生I-2 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-30°-E

規模；3.18m×1.63m **深さ**；50cm **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

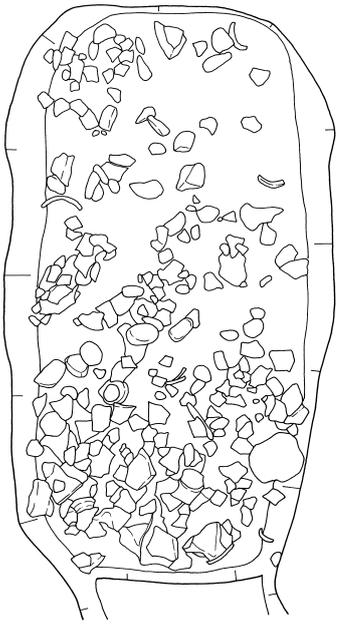
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、高杯、蓋)、磨製石鏃、石鎌、骨片

所見；調査区の西方に位置し、近世のSK4153に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする8層で、各層に大量の焼土・炭化物が入っており、床面にも火を受けた痕跡が見られる。大量の土器、石器、骨片が出土している。遺物は、埋土中(上層)と床面~床直上(下層)に大きく2回に分けて取り上げたが、両者の接合資料も多く一括性の高い状況を示している。

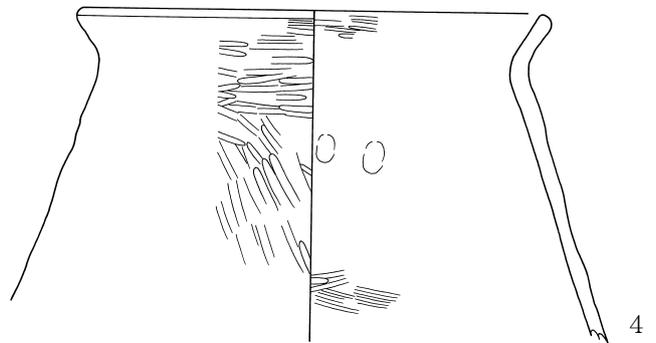
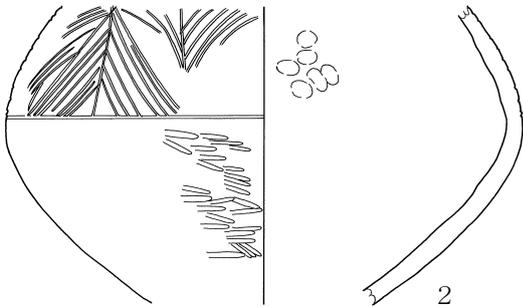
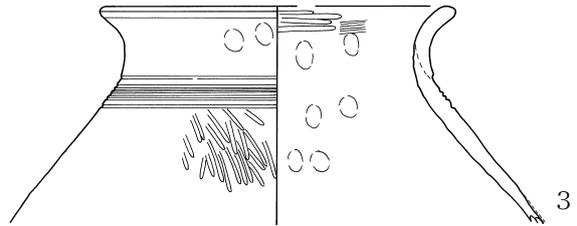
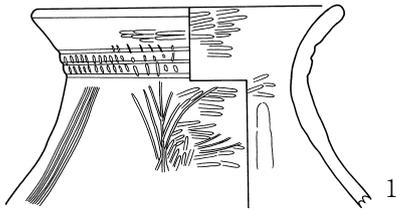
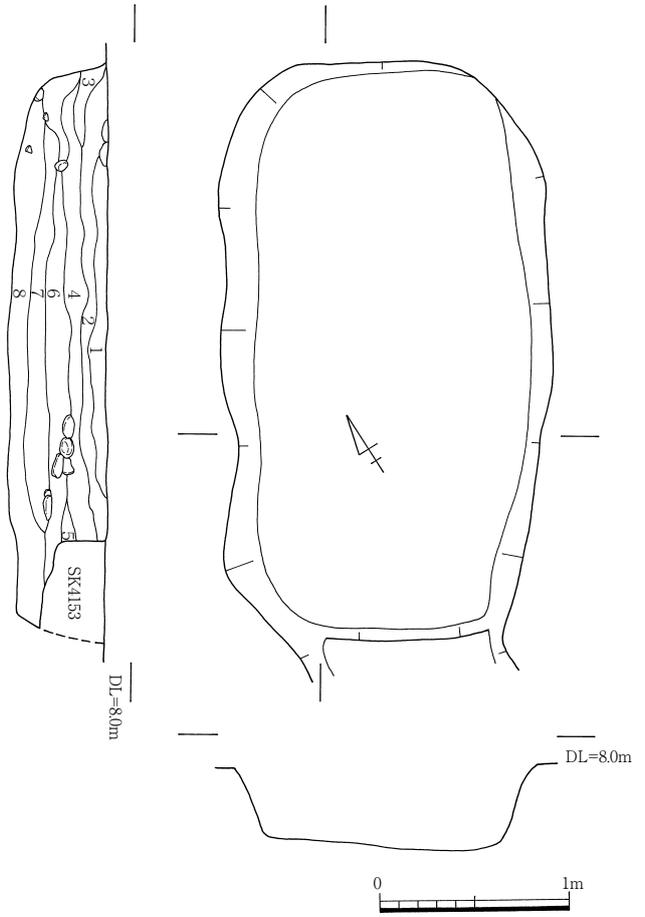
土器は壺(1~14・22・29)、甕(15~21・23)、鉢(24・25)、高杯(26・27)、蓋(28)である。壺は10・11・13・14が大型壺で口縁部に段部を有する。13の外面は赤彩が施されている。他は中型で、1・3・6・7・12は口縁部に段部を持ち、3は頸部に細いヘラ描沈線を6条巡らし1と2は頸胴部や口縁部に各種文様を配している。1と2は同一個体と考えられる。1・3・9・11は上層、2・6・12は下層出土で、4・8・10・13・14は上・下層の接合資料である。甕は15~17・19が段部を有する。20は大型で頸部、胴部にヘラ描沈線と列点文を施し、その間に山形文を配している。縄文晩期系の甕である。16~19・23は上層、15は下層、20は上・下層接合資料である。23底部は焼成後に2cm前後の孔を穿つ。高杯は杯部が漏斗状のもの(26)と口縁外反のタイプ(27)がある。SK4149出土の壺と甕の組成を口縁部で見ると、図示し得なかったものも含めて壺：甕が19点：17点となり壺が多い。壺の中でも大型壺が3個体分を占めている。

石器は磨製石鏃(31~33・35・36)、打製石鏃(30)、石鎌(37)、チャートの石塊(34)が見られる。31~33は柳葉形に属する。32・33は鏑が見られ断面菱形である。35・36は茎部を欠損しているが圭頭形に属する。35は刃部先端に再加工を加え、鏑は片側の主面に見られる。関は丸味を帯びる。刃部断面は扁平な六角形、茎部断面は六角形である。36は両面に鏑が走り、刃部断面は厚い菱形、茎部断面は六角形である。わずかに関を削り出している。石鎌は先端部を欠くがほぼ完形品である。刃部は両刃、背部は丸味を持ち、基部は直線的に切られている。石材は磨製石鏃と石鎌が粘板岩、打製石鏃はサヌカイトである。この他に白色化した骨片が多く出土している。哺乳類(イノシシの下顎骨が4点、ニホンザルの橈骨が1点など)、軟骨魚類(サメ類の遊離歯)などである。SK4149は、I-2期の良好な一括資料である。

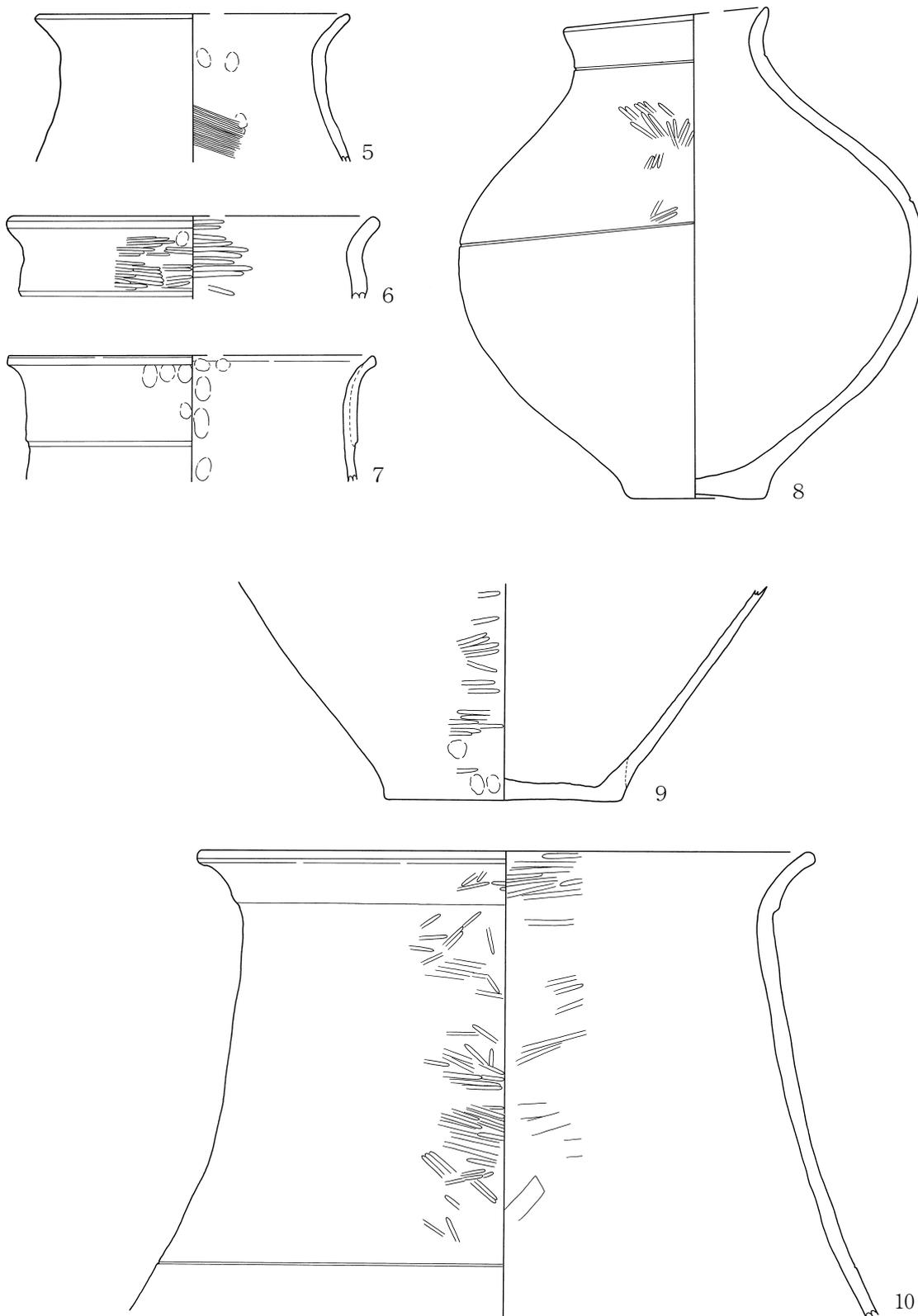
遺物出土状況



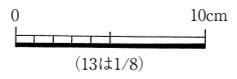
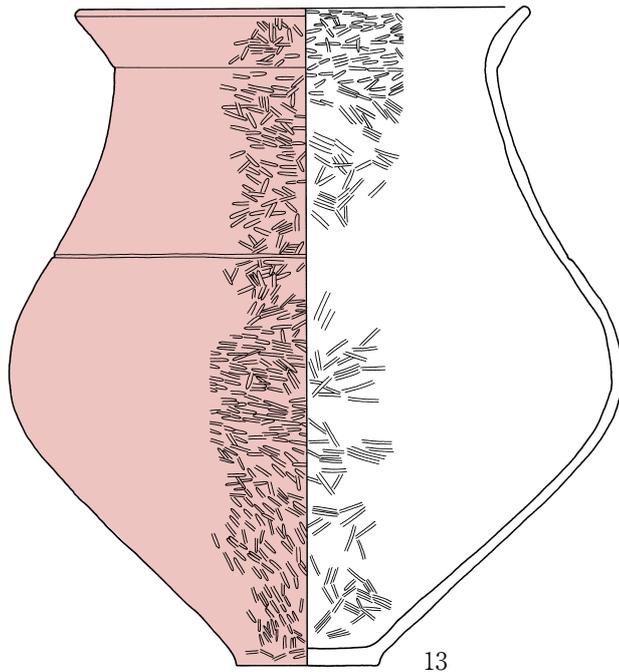
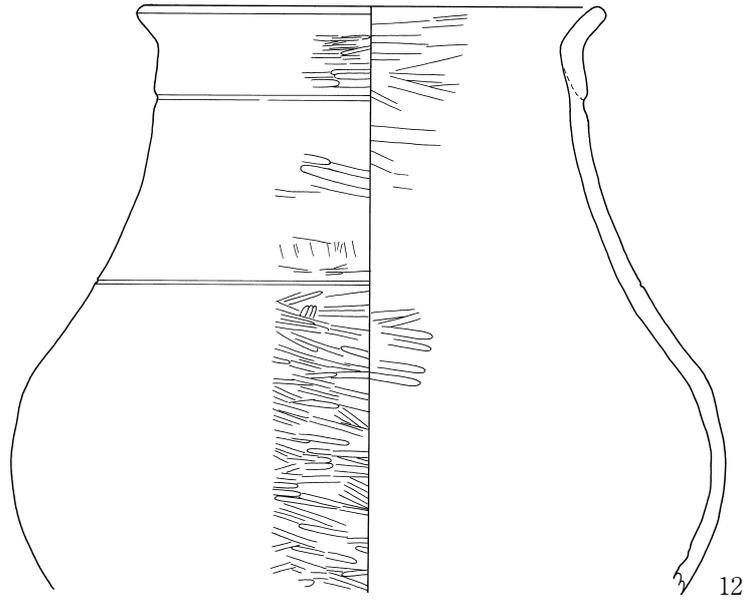
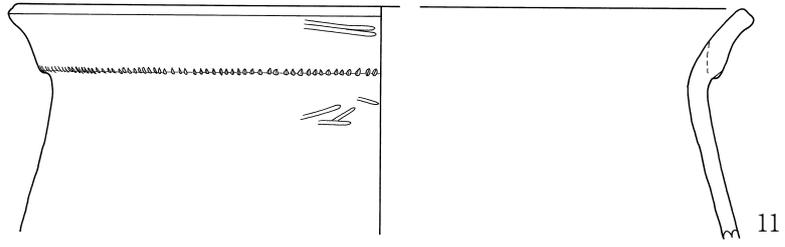
- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) (焼土・炭化物が少し入る)
- 2 黒褐色シルト (7.5YR3/2) (焼土・炭化物が入る)
- 3 黒褐色シルト (7.5YR2/2) (黄褐色シルトが入る)
- 4 黒褐色シルト (7.5YR2/2) (焼土・炭化物が少し入る)
- 5 黒褐色シルト (7.5YR2/2) (焼土が一面に広がる)
- 6 黒褐色シルト (7.5YR2/2) (焼土が多く入る)
- 7 黒褐色シルト (10YR3/3) (焼土・炭化物が入る)
- 8 黒褐色シルト (10YR3/3) (炭化物が入る)



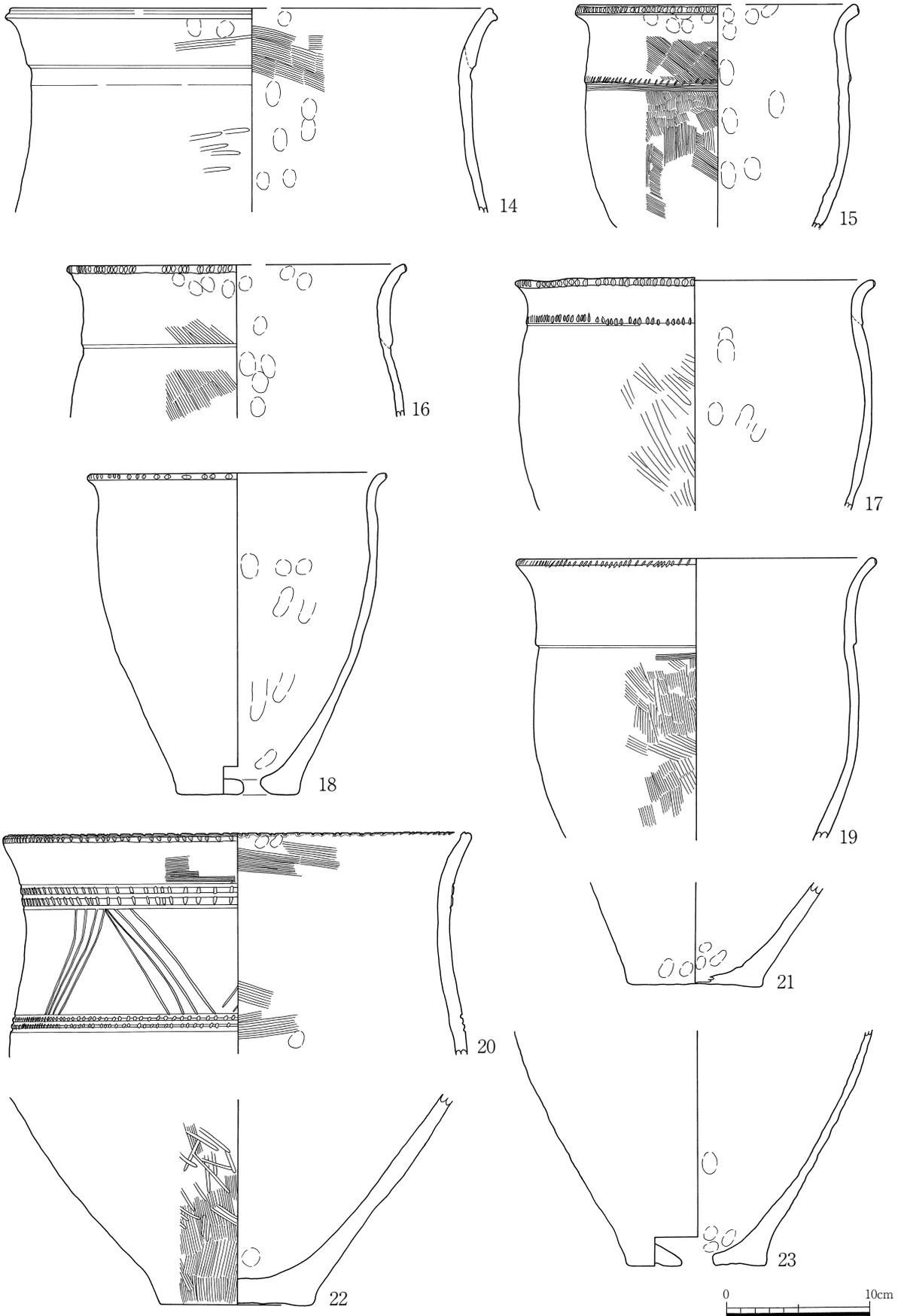
C4 北-7 図 C4 北SK4199 (1)



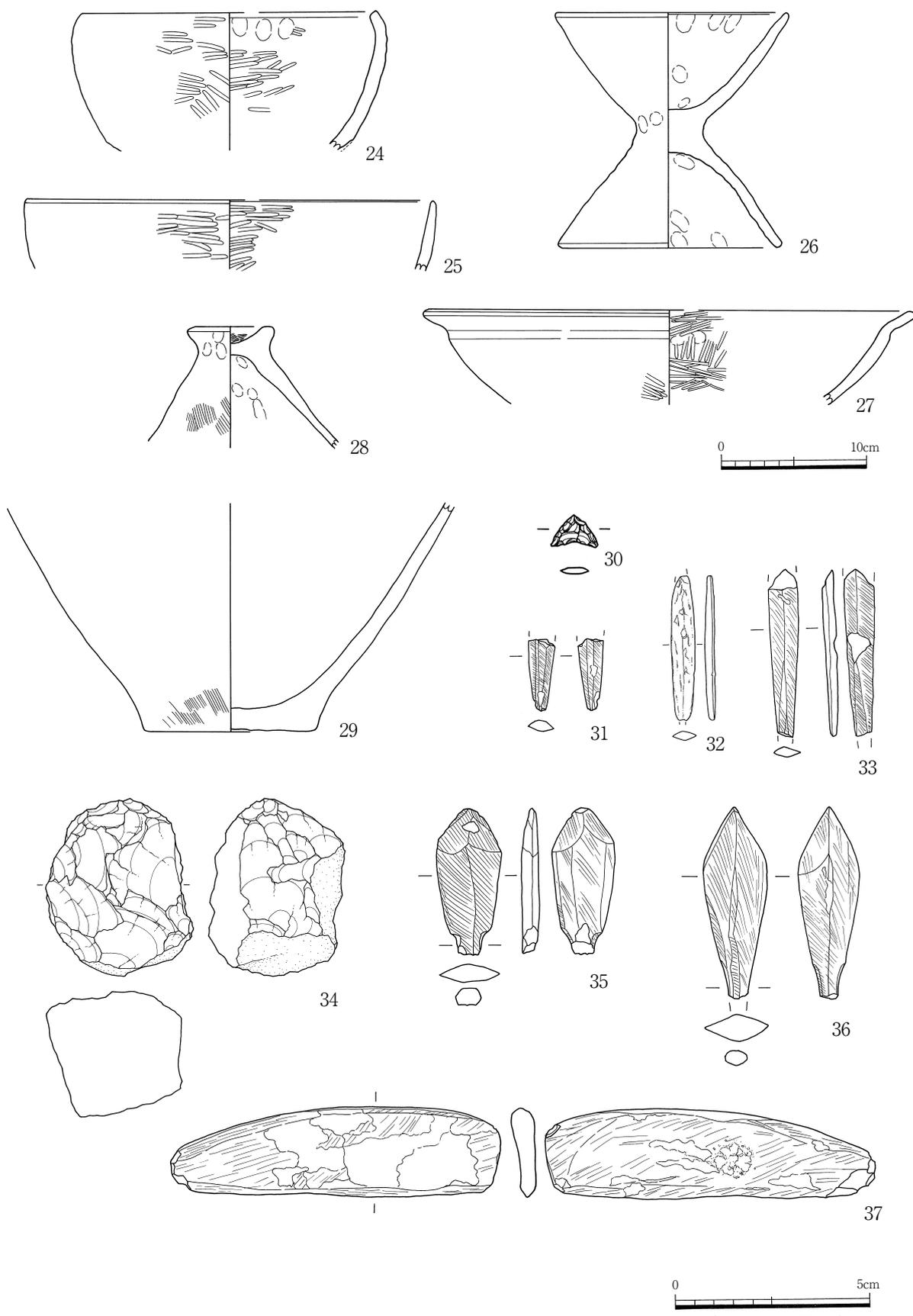
C4 北-8 図 C4 北SK4149(2)



C4 北-9 图 C4 北SK4149(3)



C4 北-10 図 C4 北SK4149(4)



C4北-11 图 C4北SK4149(5)

C4 北SK4152 (C4 北-12 図)

時期；弥生I-3 形状；楕円形 主軸方向；N-8°-W

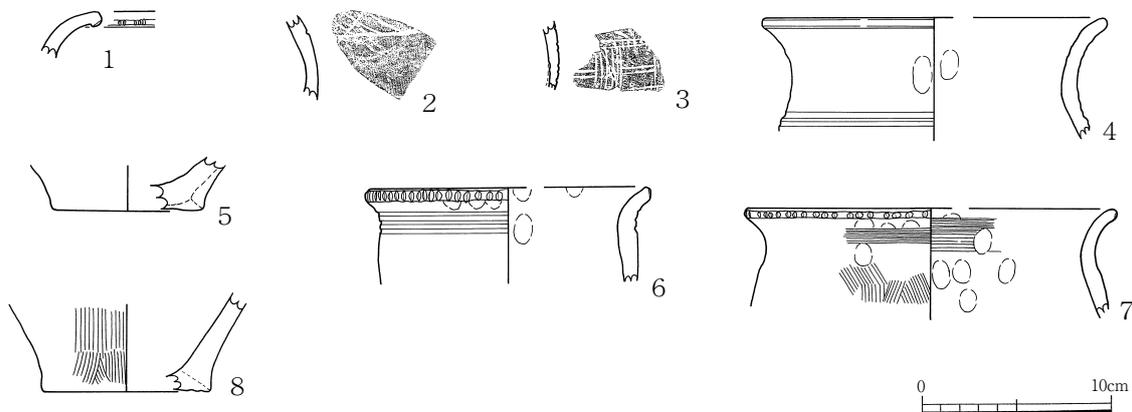
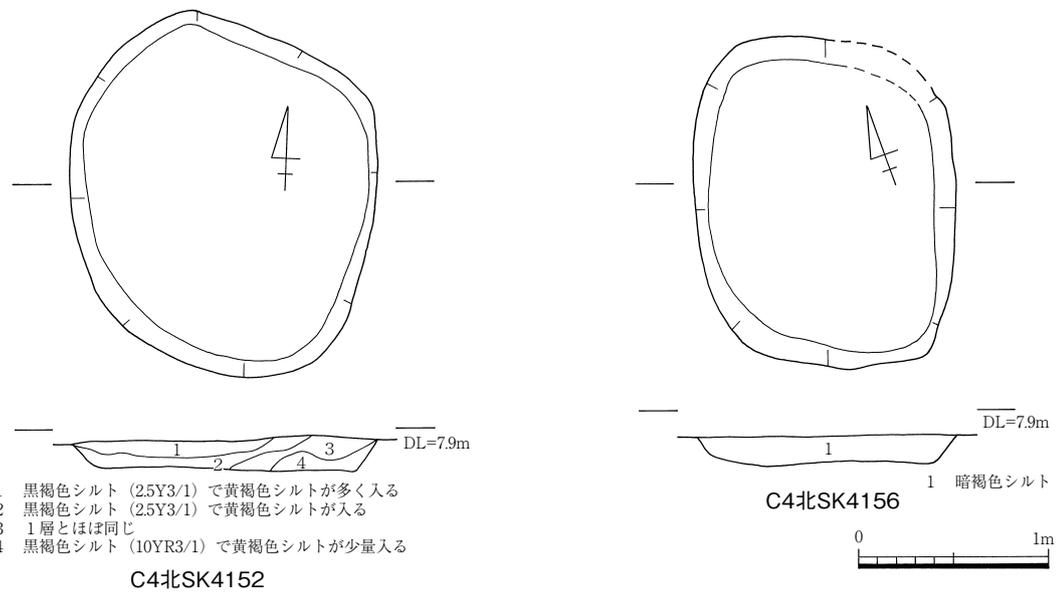
規模；1.78m×1.67m 深さ；20cm 断面形態；皿形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の西南部に位置する土坑である。黒褐色シルトを基調に黄褐色シルトがブロック状に入っている。遺物は細片が多く壺(3・4)、甕(6~8)を図示し得た。



C4 北-12 図 C4 北SK4152・4156 (SK4152：3・4・6~8、SK4156：1・2・5)

C4 北SK4156 (C4 北-12 図)

時期；弥生I-3 形状；楕円形 主軸方向；N-17°-E

規模；1.70m×1.38m 深さ；16cm 断面形態；皿形

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)

所見；調査区の西方に位置し、SK4168 に切られる。埋土は暗褐色シルトの単統一層である。出土遺物は少なく、甕の口縁部細片(1)、壺胴部細片(2)、底部(5)である。

C4 北SK4161 (C4 北-13~15 図)

時期；弥生I-3 形状；隅丸方形 主軸方向；N-73°-W

規模；3.28m×1.60m 深さ；24cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

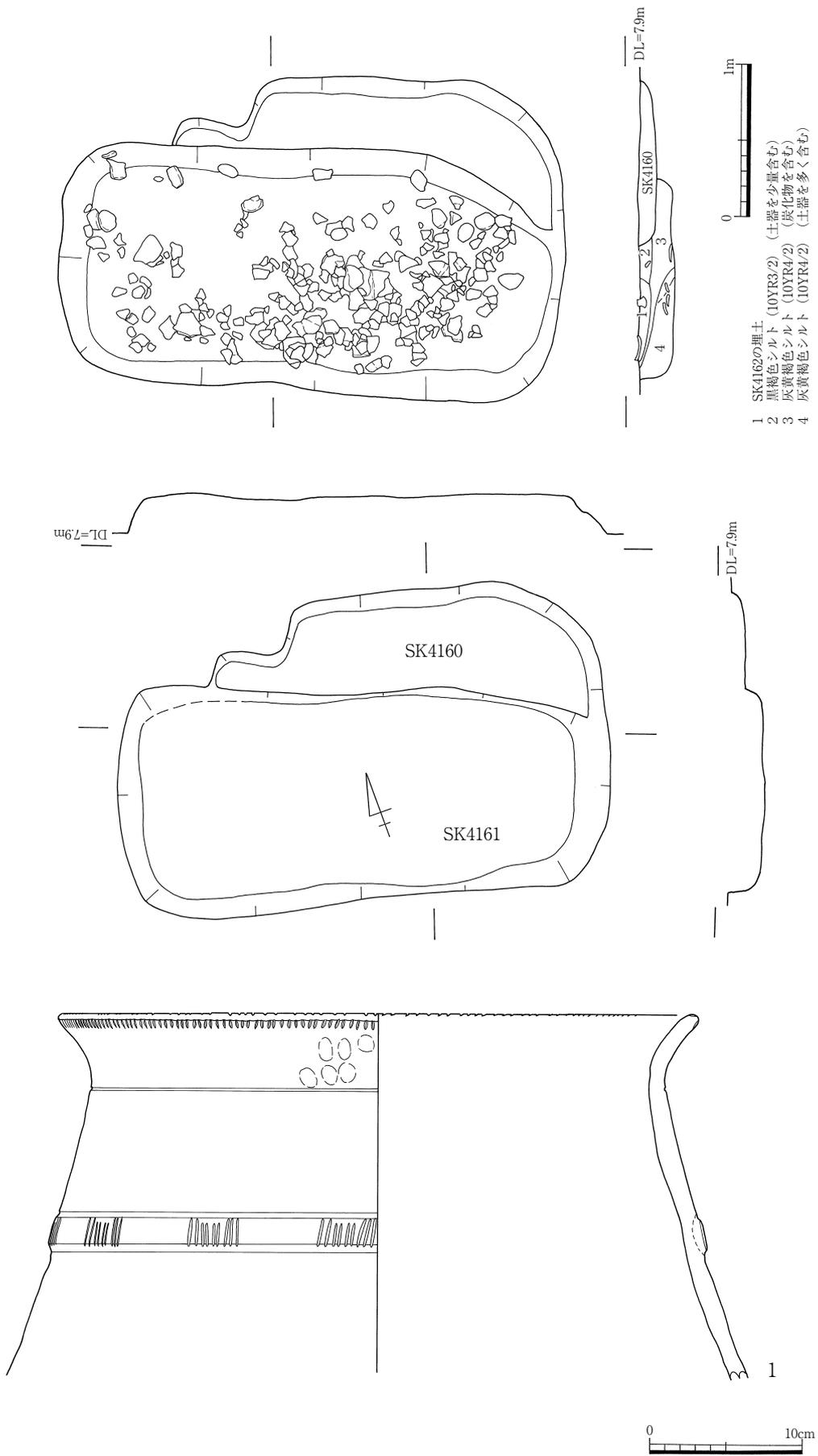
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、高杯)、石包丁

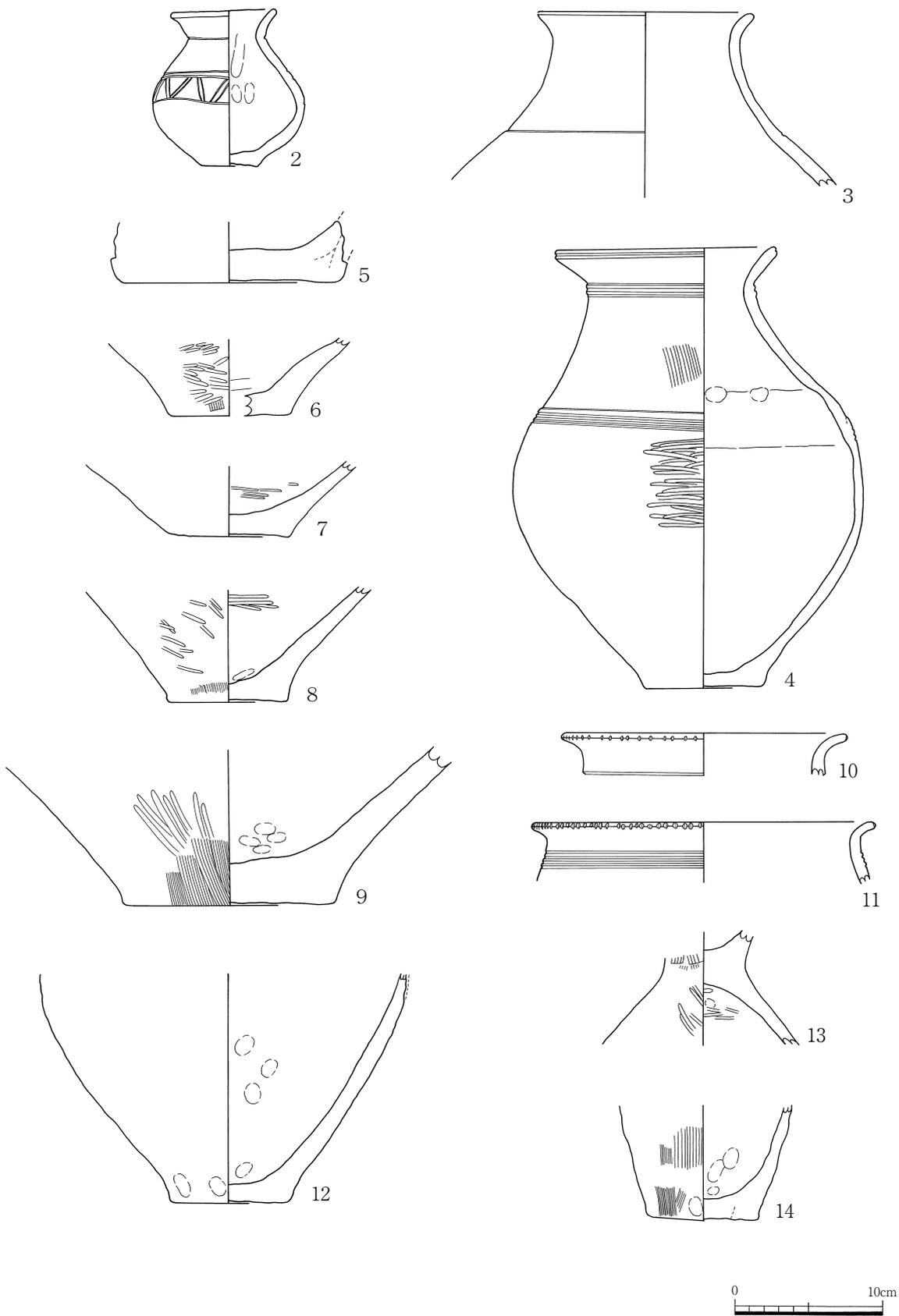
所見；調査区の中央部寄りに位置し、東側をSK4160 に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で、灰黄褐色シルトのブロック、炭化物が多く入っている。遺物は各層より多く出土しており、遺物の取り上げは、埋土中(上層)と床面及び床直上層(下層)に分けて取り上げた。

土器は壺(1・9・12・15~18)、甕(10・11・14)、高杯(13)、である。1・15~17は大型壺である。2は小型壺で口頸間にヘラ描沈線と上胴部の区画内に複線山形文を配している。1と4の頸部には削り出し突帯が見られる。段部を持つものは見られない。底部(17)外面には赤彩が施されている。2~4・7・8・12は上層出土、1・9・15は下層出土、16・17は上・下層の接合資料である。甕(10・11)は少条のヘラ描沈線が施されている。壺と甕の比率を口縁部から見ると、図示し得なかったものも含めて壺：甕=8点：4点となり壺が圧倒的に多い。しかも大型壺が目立つ。

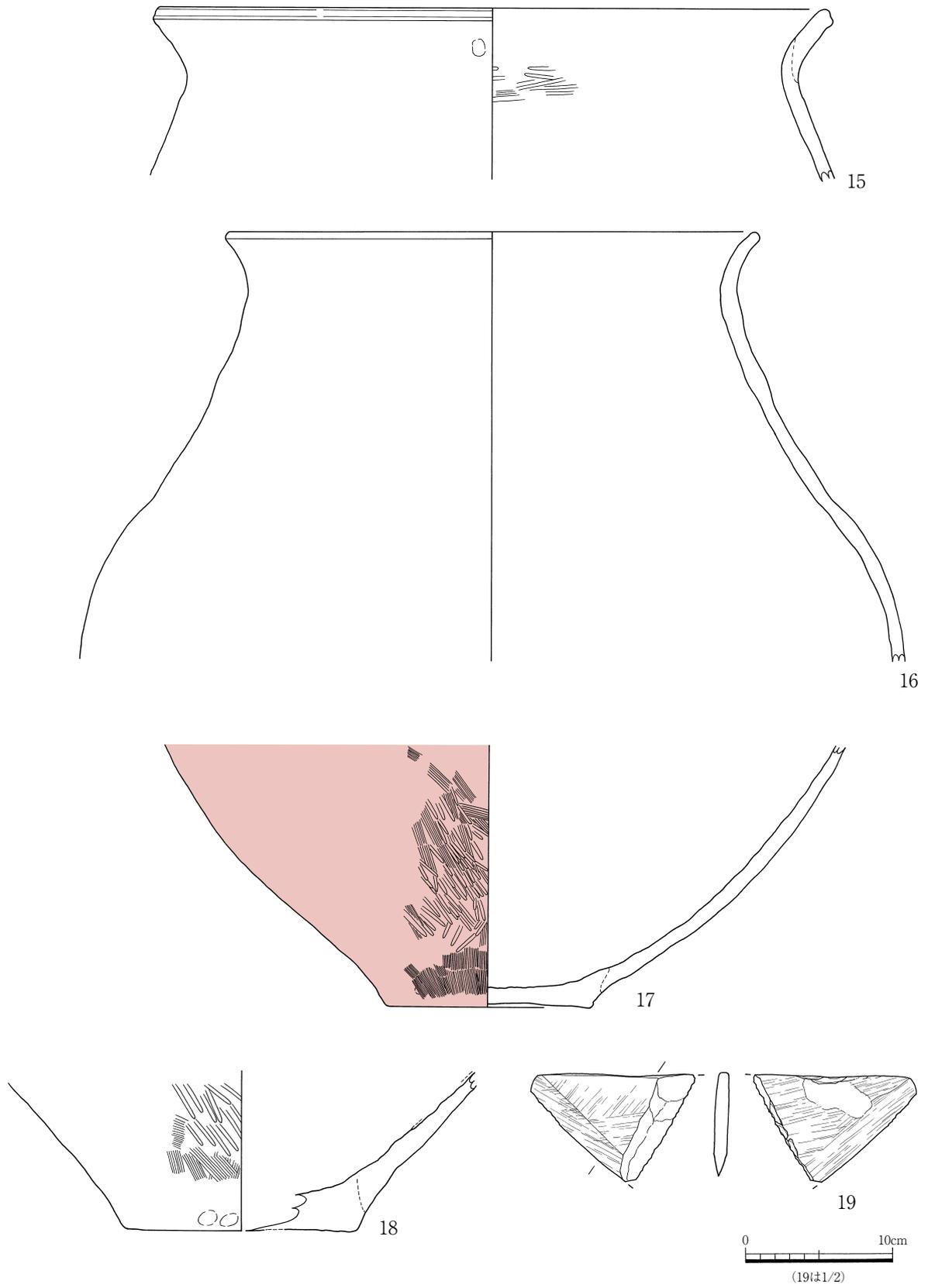
石器は磨製石包丁(19)が出土している。三角形外湾刃、両刃で鋭く研ぎ出されている。石材は粘板岩である。この他軟骨魚類の白色化した骨細片が出土している。これらの遺物は、I-3期の良好な一括遺物として捉えることができる。



C4 北-13 図 C4 北SK4161 (1)



C4 北-14 图 C4 北SK4161 (2)



C4 北-15 図 C4 北SK4161 (3)

C4 北SK4163 (C4 北-16 図)

時期；弥生I-3 形状；楕円形 主軸方向；N-22°-E

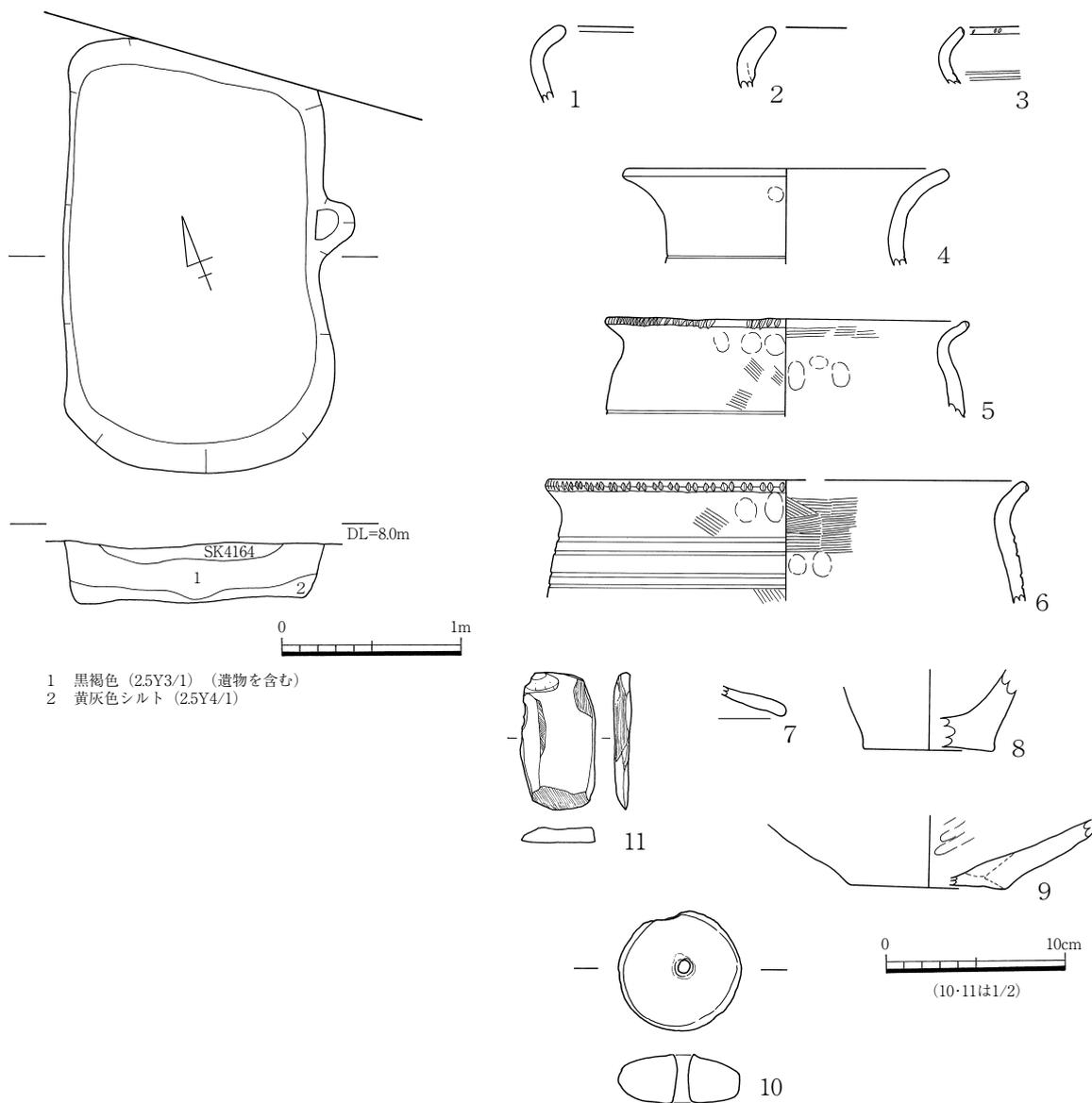
規模；2.40m×1.42m 深さ；32cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

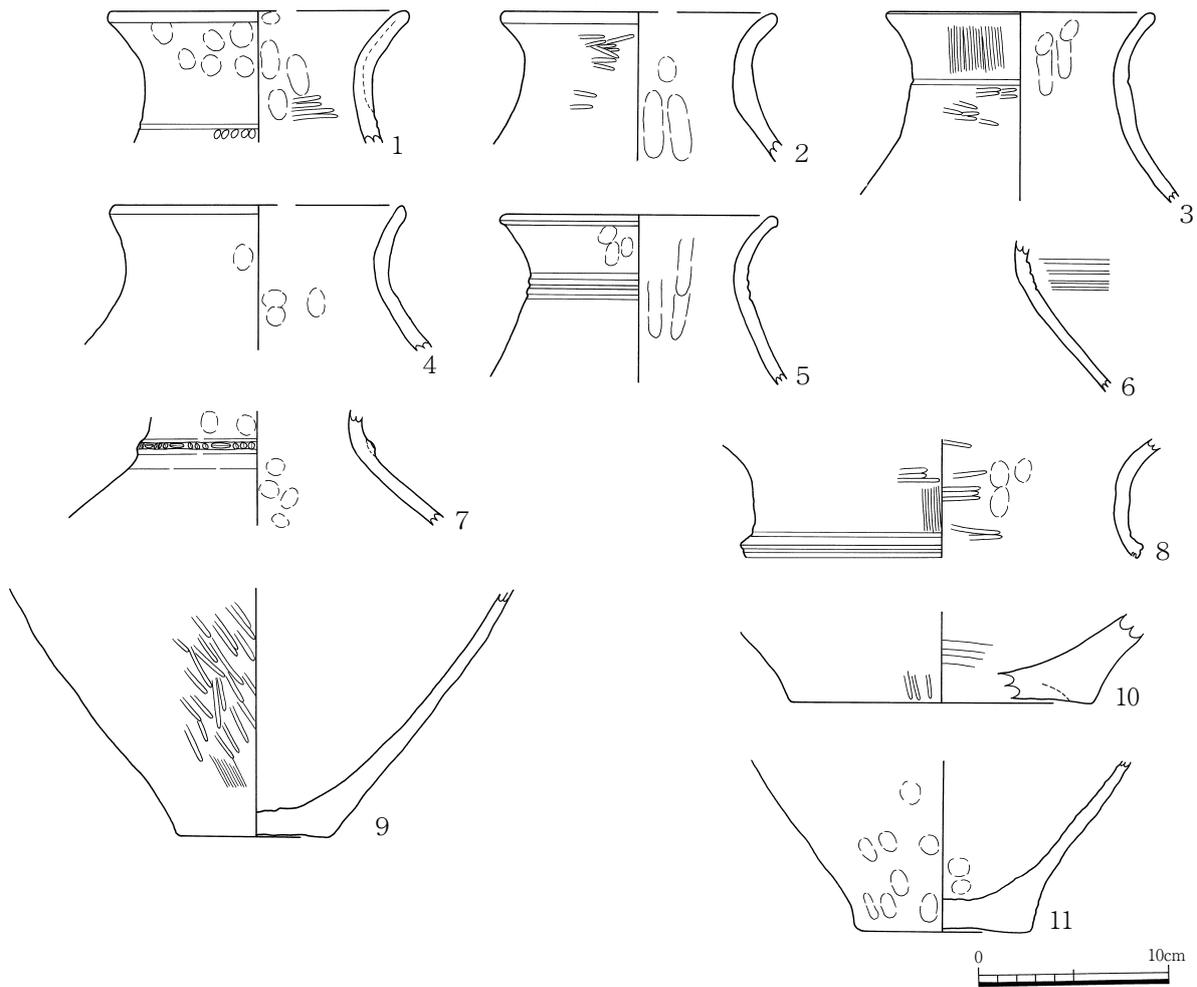
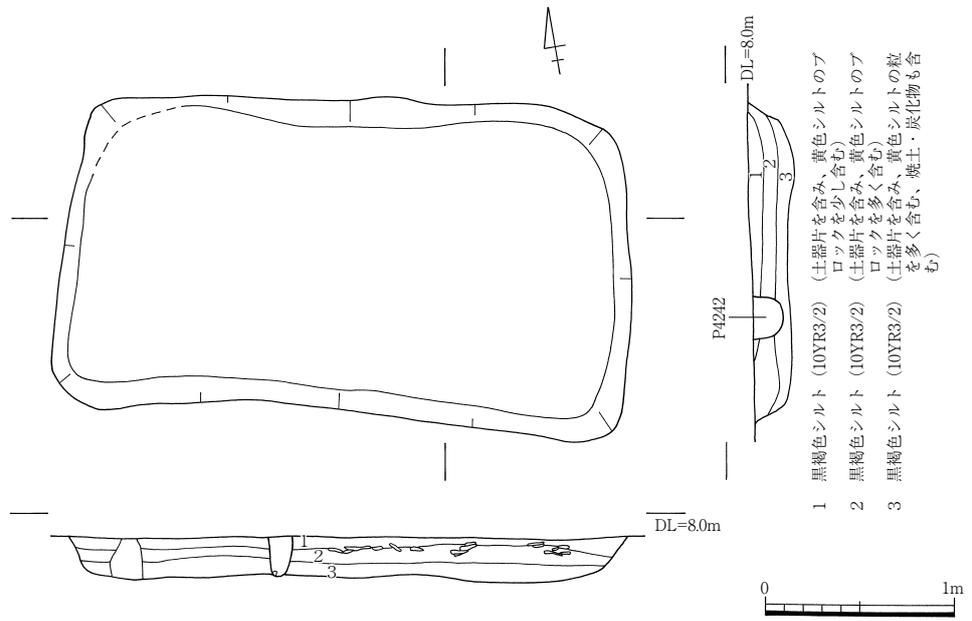
出土遺物；弥生土器(壺、底部)、紡錘車、石斧

所見；調査区のやや西部に位置し、上面をSK4164に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層で、黄ブロックが混じる。遺物は1層に集中している。土器は壺(1~4・9)、甕(5・6・8)、蓋(7)である。10は紡錘車、11はノミ状の加工斧で石材は結晶片岩である。



- 1 黒褐色 (25Y3/1) (遺物を含む)
- 2 黄灰色シルト (25Y4/1)

C4 北-16 図 C4 北SK4163



C4 北-17 図 C4 北SK4170(1)

C4 北SK4170 (C4 北-17・18 図)

時期；弥生I-3 形状；隅丸方形 主軸方向；N-84°-W

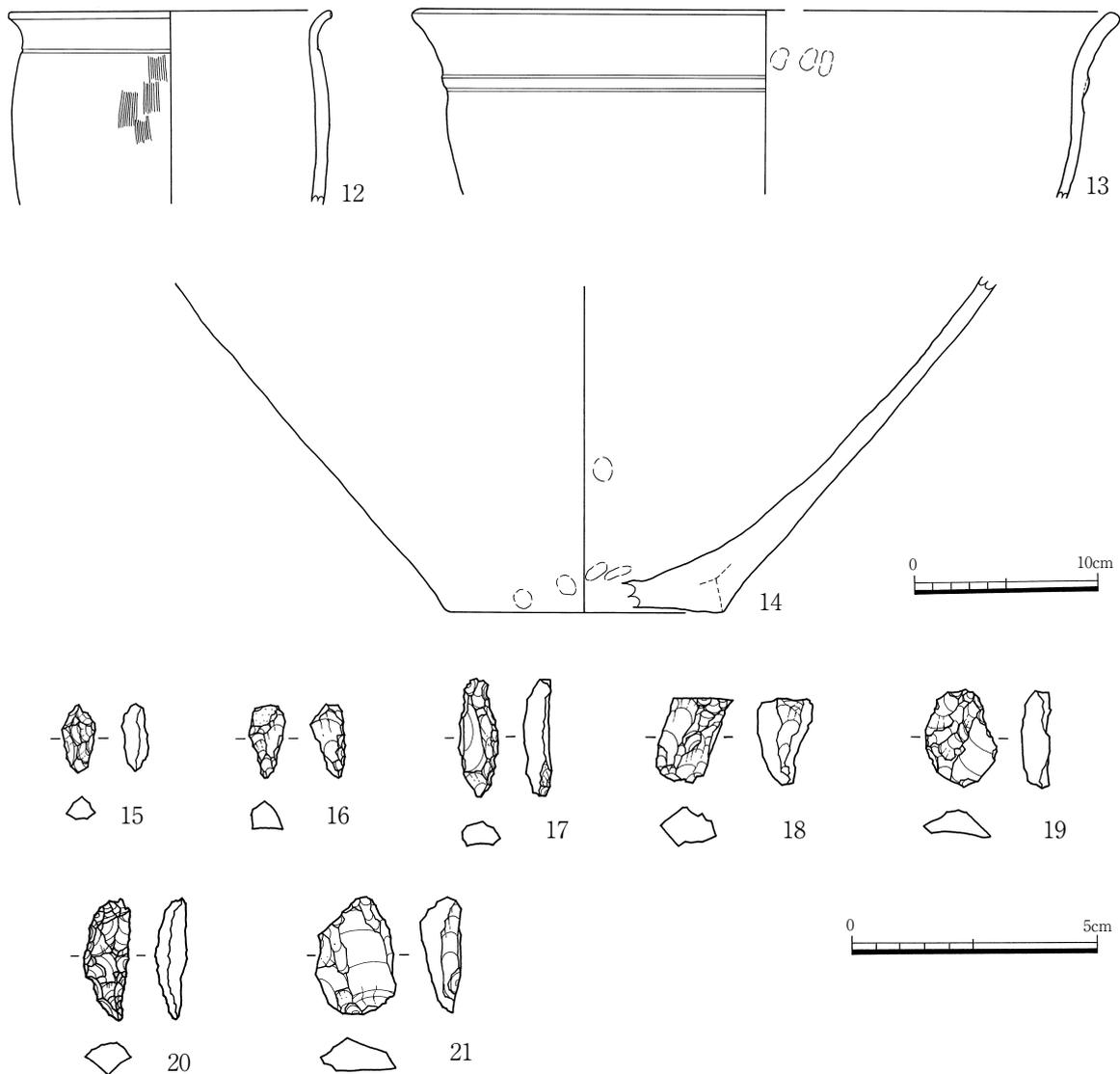
規模；3.02m×1.62m 深さ；26cm 断面形態；皿形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)、石錐、楔形石器

所見；調査区の中央部に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で、黄シルトがブロック状に入る。遺物は上面から入り、最下層の埋土に焼土・炭化物が混じる。土器は壺(1~11・14)、甕(12・13)が出土している。壺・甕ともに少条の沈線を持つもの(1・3・5・6・12・13)が目立つ。7・8の頸部には突帯を貼付している。石器は石錐(15~17、20)、楔形石器(18・19・21)が出土している。石材は共にチャートである。



C4 北-18 図 C4 北SK4170 (2)

C4 北SK4175 (C4 北-19 図)

時期；弥生I 形状；楕円形 主軸方向；N-12°-E

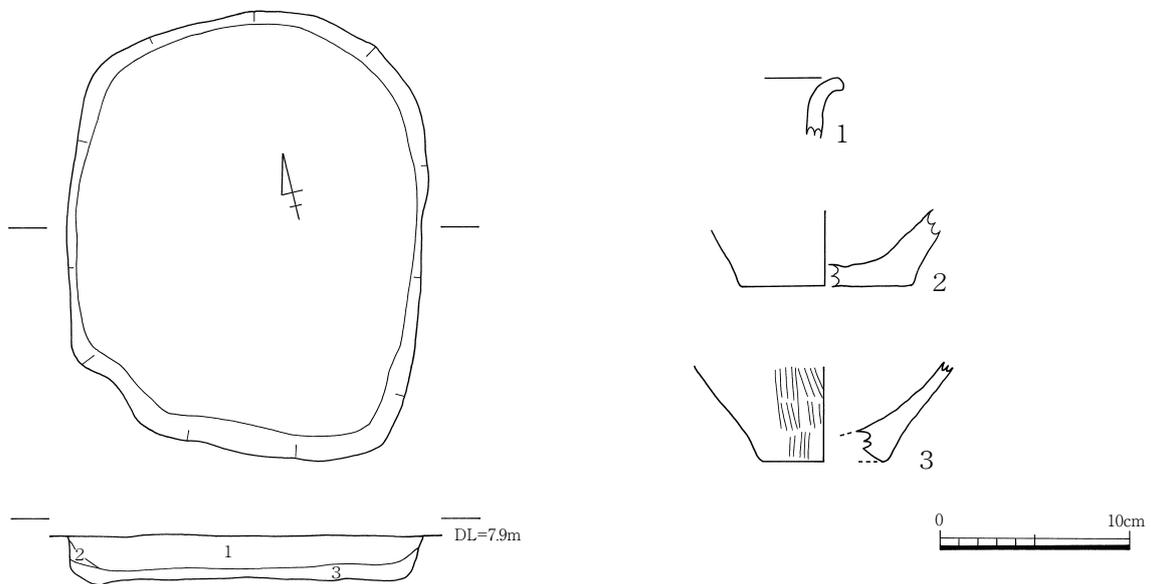
規模；2.36m×1.89m 深さ；22cm 断面形態；箱形

埋土；黒褐色シルト

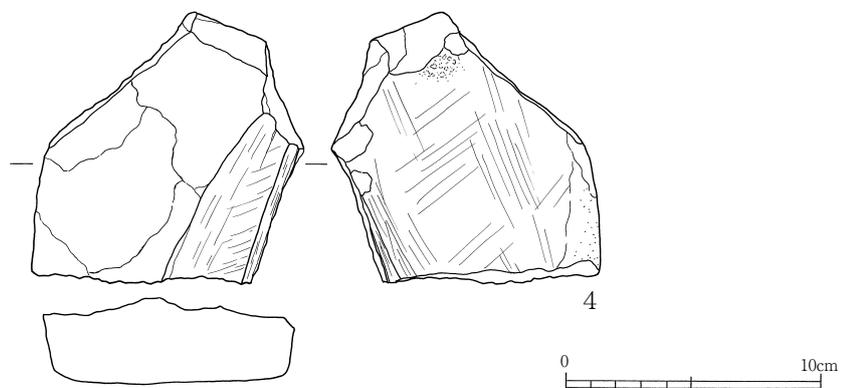
付属遺構；— 機能；—

出土遺物；弥生土器(甕)、砥石

所見；調査区の中央部に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする2層で、黄シルトのブロックが入り、わずかに炭化物が混じる。出土遺物は、甕の口縁部細片(1)と底部(2・3)、砥石(4)のみである。砥石の使用面は二面で、一面に玉砥石特有の条線が走っている。砂岩製で被熱赤変している。



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) (わずかに炭化物・焼土を含み、黄色シルトのブロックを多く含む)
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) (わずかに炭化物と黄色シルトのブロックを含む)
- 3 黒褐色 (10YR3/2) (黄色シルトのブロックをわずかに含む)



C4 北-19 図 C4 北SK4175

C4 北SK4179(C4 北-20~23 図)

時期；弥生I-2 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-53°-W

規模；1.65m×1.60m **深さ**；58cm **断面形態**；すり鉢状

埋土；黒褐色シルト

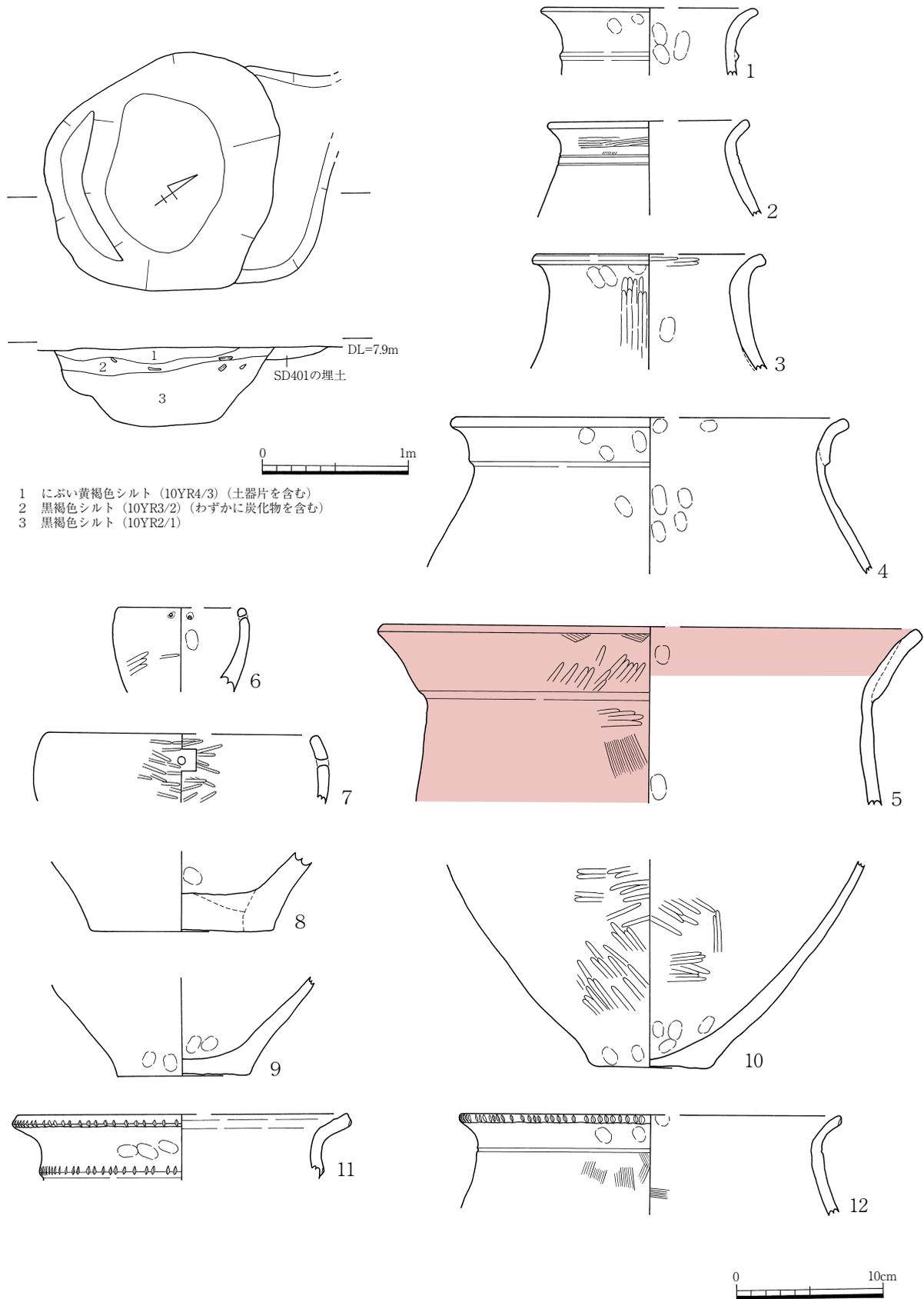
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋、土製円板)、柱状片刃石斧、磨製石鏃

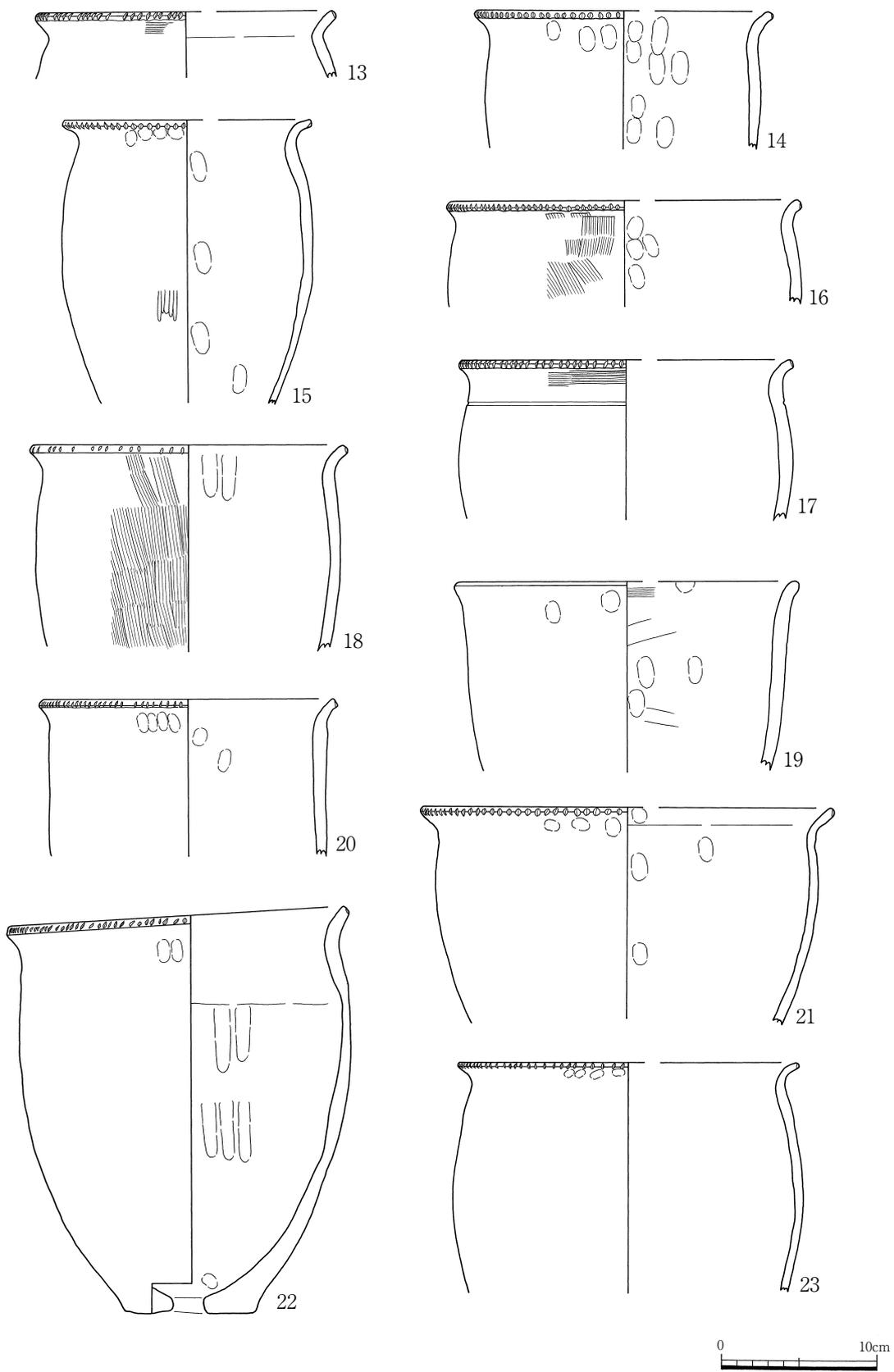
所見；調査区のやや東方に位置しSD401 を切っている。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で、2層にわずかに炭化物が混じる。遺物は遺構の南部から流れ込むように多量に入り各層から出土しており、埋土中(上層)と床面及び床直上層(下層)の大きく二つに分けて取り上げた。

土器は壺(1~10)、甕(11~37)、鉢(39)、蓋(38)、土製円板(40)である。4・5はしっかりした段部を有し5の外縁と口縁部内面には赤彩が施されている。1は断面三角形の小突帯、2は2条のヘラ描沈線が見られる。6・7は無頸壺である。1~8は上層、10は上層と下層の接合資料である。甕は、段部を持つもの(11・24・26・27)、1条のヘラ描沈線を持つもの(12・17)がある。22・37は焼成後底部に穿孔している。口唇部の刻目は下半に施すものが圧倒的に多い。15・17・18・21・23・24は上層、13・14・16・19・22は下層、20・25~27は上層と下層の接合資料である。鉢(39)は波状口縁をなしている。蓋(38)内面には赤彩が認められる。壺：甕の比率を図示し得なかったものも含めて口縁部から見ると30点：68点である。

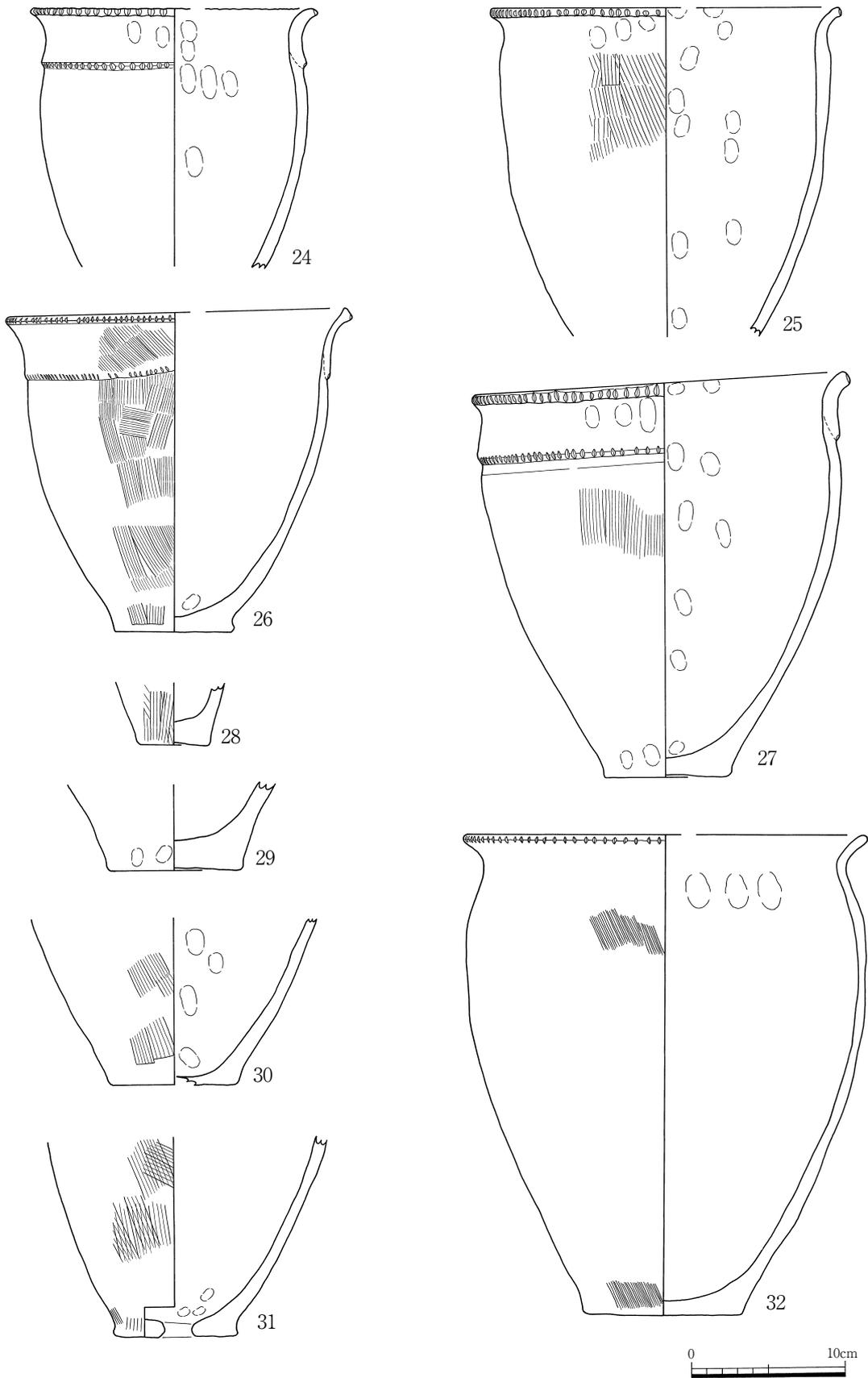
石器は柱状片刃石斧(41)、磨製石鏃(42)、ノミ状石斧(43・44)である。41は刃部片であるが、主面幅より側縁幅が広く刃部は鋭く研ぎ出されている。石材は白色の泥岩質で搬入石材である。42の刃部断面は扁平な六角形で関を僅かに作り出している。石材は粘板岩である。ノミ状石斧はともに両刃で44は刃部以外自然面を残す。SK4179は1-2期の良好な一括資料である。



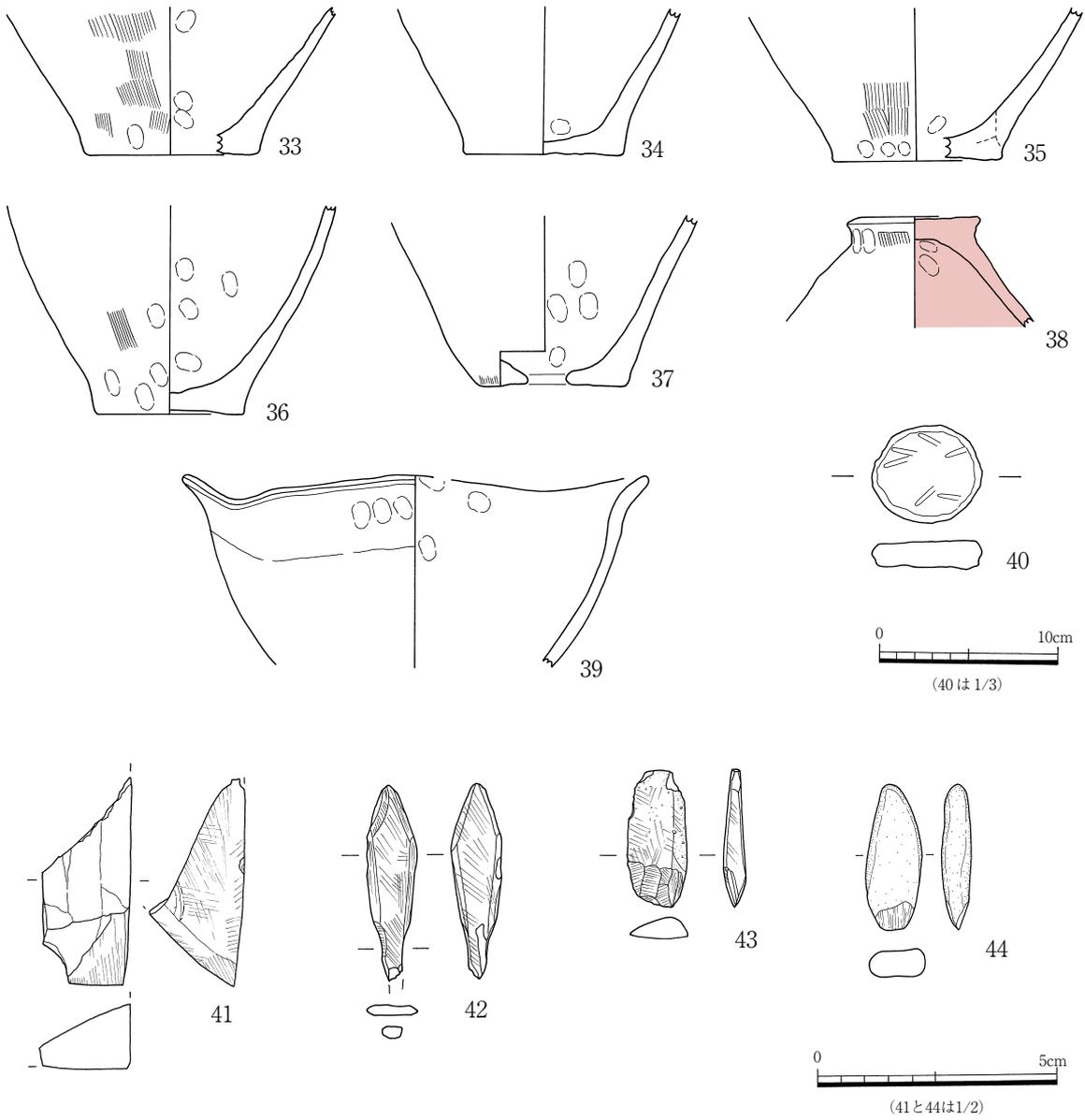
C4 北-20 図 C4 北SK4179(1)



C4 北-21 图 C4 北SK4179(2)



C4 北-22 図 C4 北SK4179(3)



C4北-23 図 C4北SK4179(4)

C4 北SK4180(C4 北-24~26 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；隅丸長方形 **主軸方向**；N-34°-E**規模**；2.54m×1.52m **深さ**；50cm **断面形態**；箱形**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

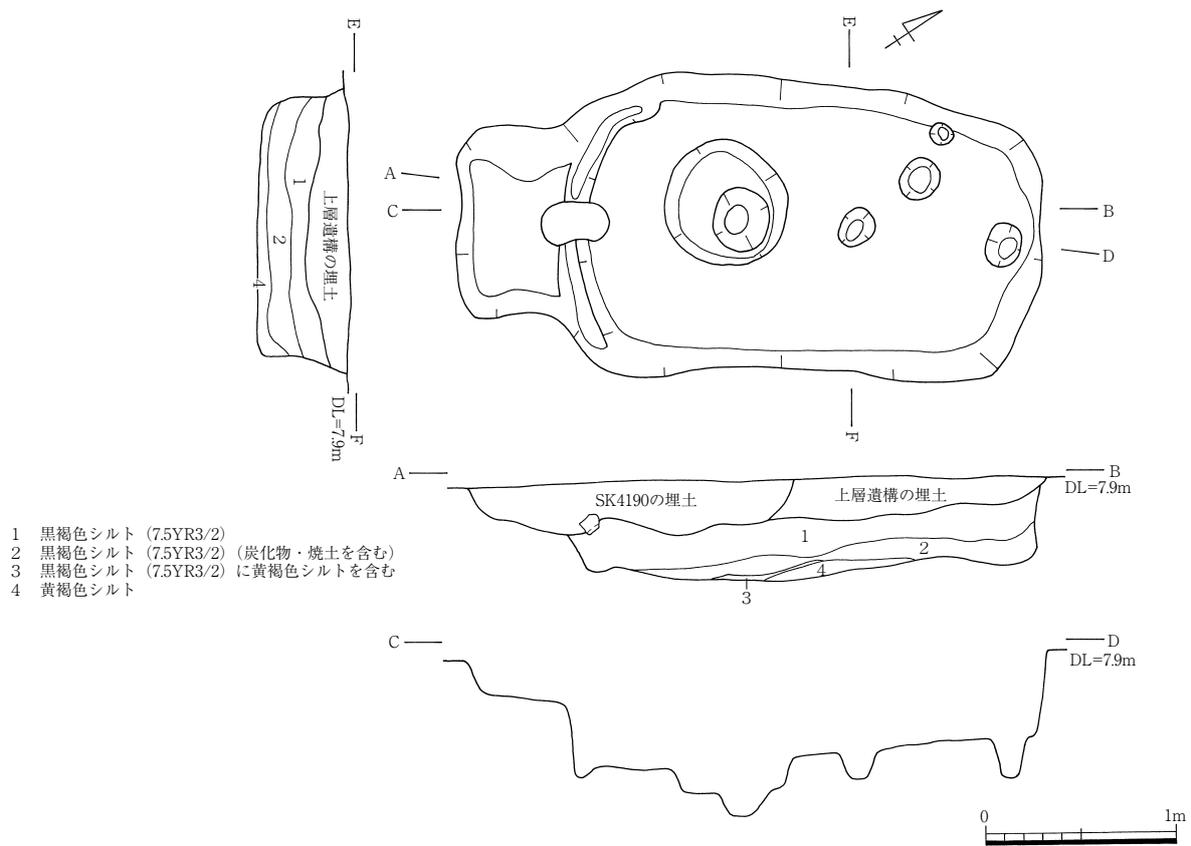
所見；調査区の東部に位置し、上層部をSK4190 他の遺構に切られている。床面には大小のピットが掘り込まれている。埋土は黒褐色シルトを基調とする4層で、黄褐色シルトが混ざり、2層には焼土・炭化物が入る。遺物は埋土中から多く出土し床面からの出土はほとんどない。

土器は壺(1~5・7~14)、甕(6・15~24)、鉢(25・26)、蓋(27)である。壺の胴部文様には木葉文(4)や重弧文(5)、重弧文を縦に配したもの(10)などが見られる。7は大型壺で口頸間に2条のヘラ描沈線を巡らしている。甕は少条の沈線や沈線間に列点文を配したもの(18・20・23)が見られる。6は微隆起帯を貼付した南四国型甕、15は上胴部に三角形の突帯を貼付している。胎土も異なり九州系の搬入土器である。21は深鉢状を呈し、しっかりした把手が付いている。23は焼成後底部穿孔である。SK4180は1-3期の良好な資料である。

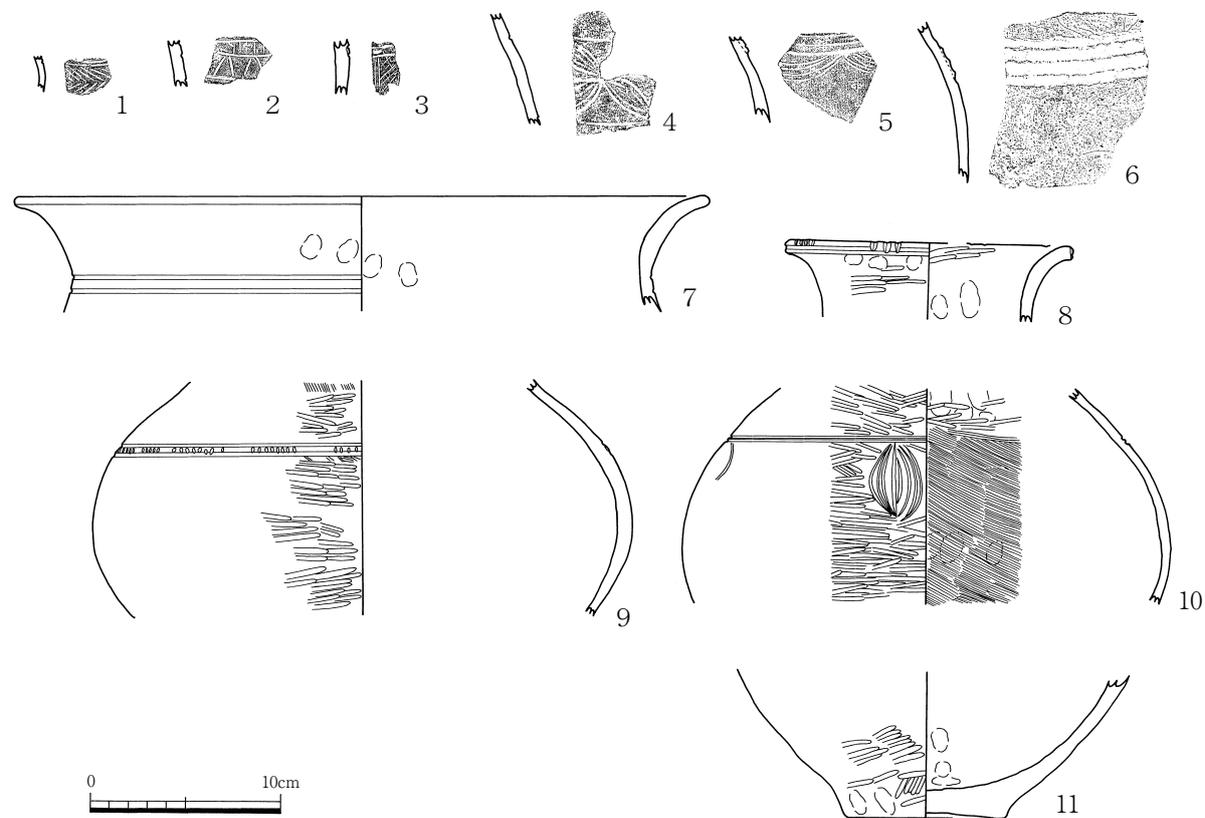
出土遺物は壺6に対し甕9で、他に鉢・蓋形土器が出土している。

C4 北SK4188(C4 北-27・28 図)**時期**；弥生I-2 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-56°-W**規模**；1.60m×1.2m **深さ**；16~26cm **断面形態**；不定形**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、蓋)

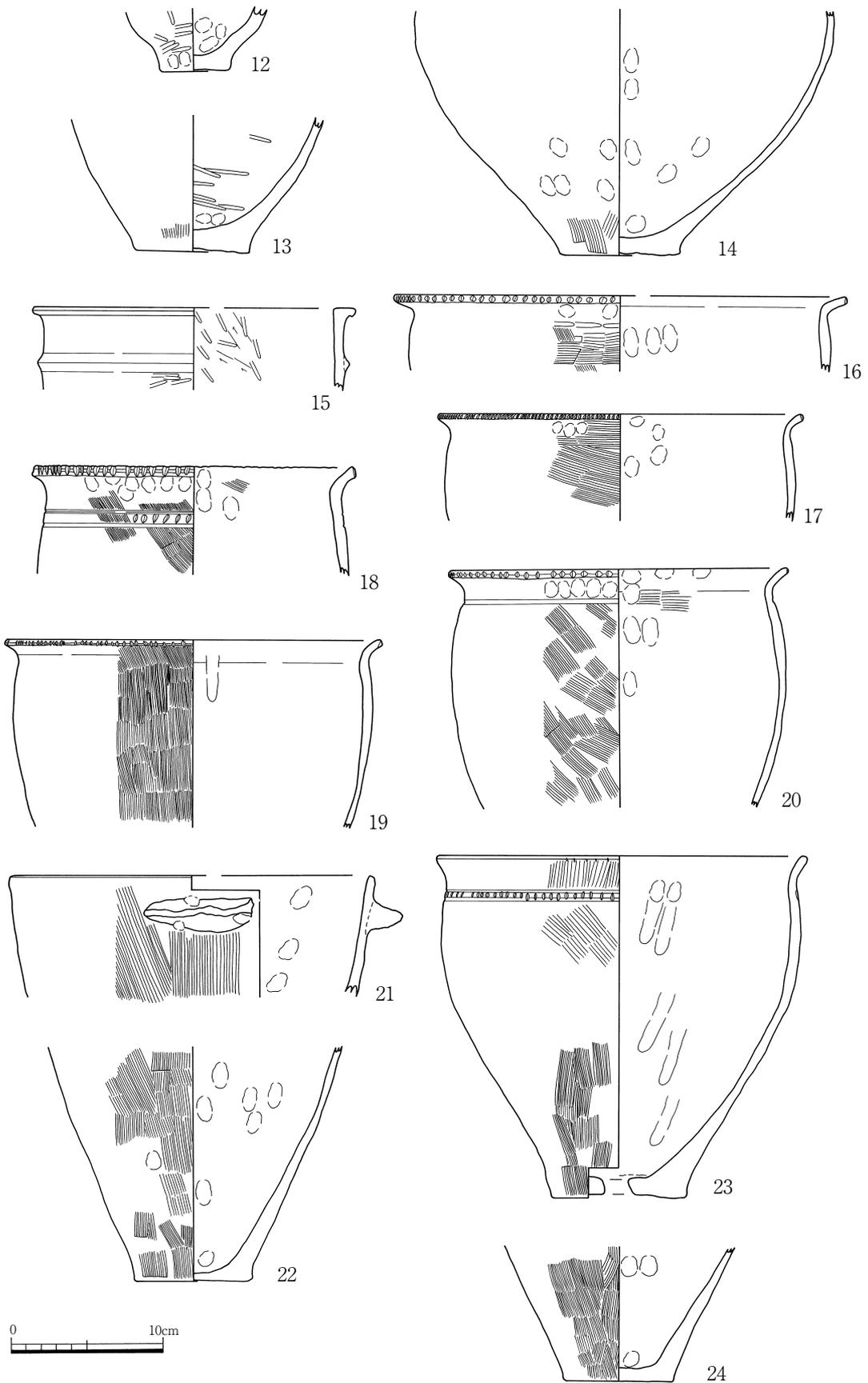
所見；調査区の東部に位置する土坑である。床面は一部段状に掘り込まれている。埋土は黒褐色シルトを基調とする3層で、2・3層には焼土・炭化物が入り、3層には黄褐色シルトがブロック状に入っている。遺物は3層いずれからも出土している。出土遺物は壺(1・2・4・12・13)、甕(3・5~7・10・11)、蓋(8・9)である。5は削り出し突帯に刻目を施し、6・7は弱い段部を有す。11は焼成後に底部穿孔している。



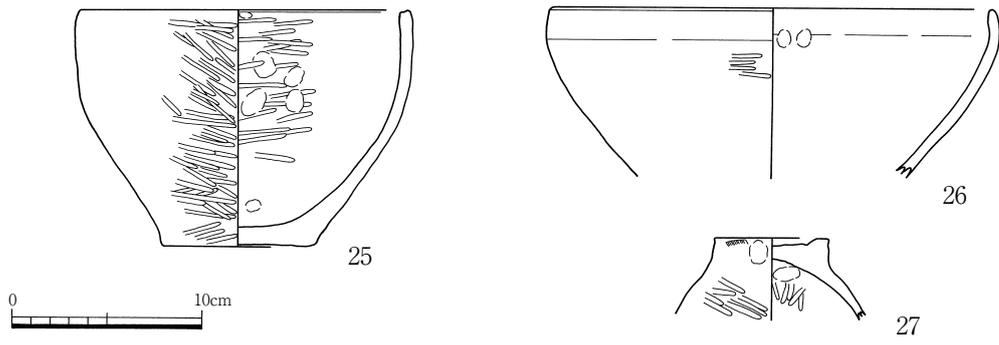
- 1 黒褐色シルト (7.5YR3/2)
- 2 黒褐色シルト (7.5YR3/2) (炭化物・焼土を含む)
- 3 黒褐色シルト (7.5YR3/2) に黄褐色シルトを含む
- 4 黄褐色シルト



C4北-24 図 C4北SK4180(1)

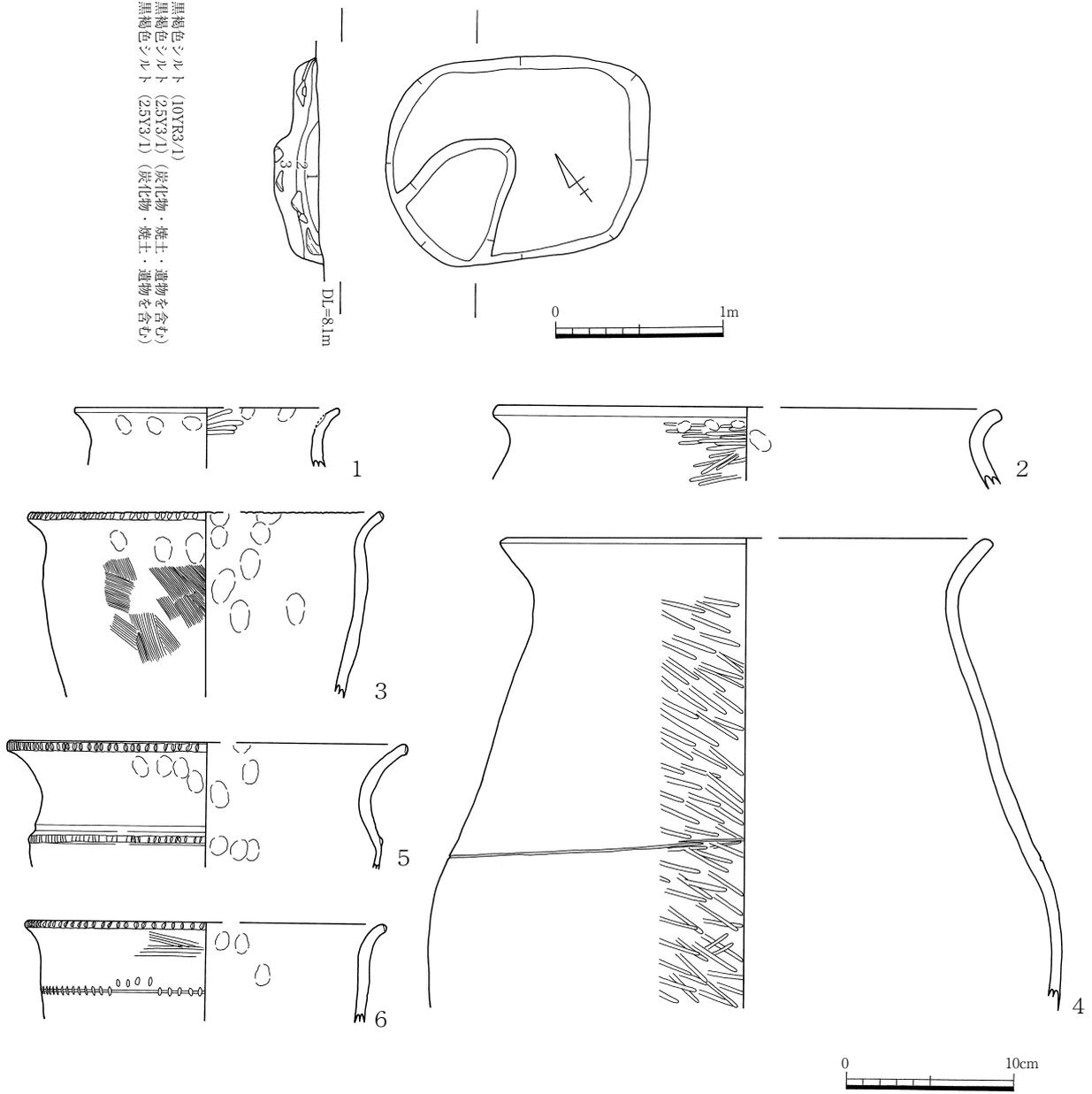


C4 北-25 図 C4 北SK4180 (2)

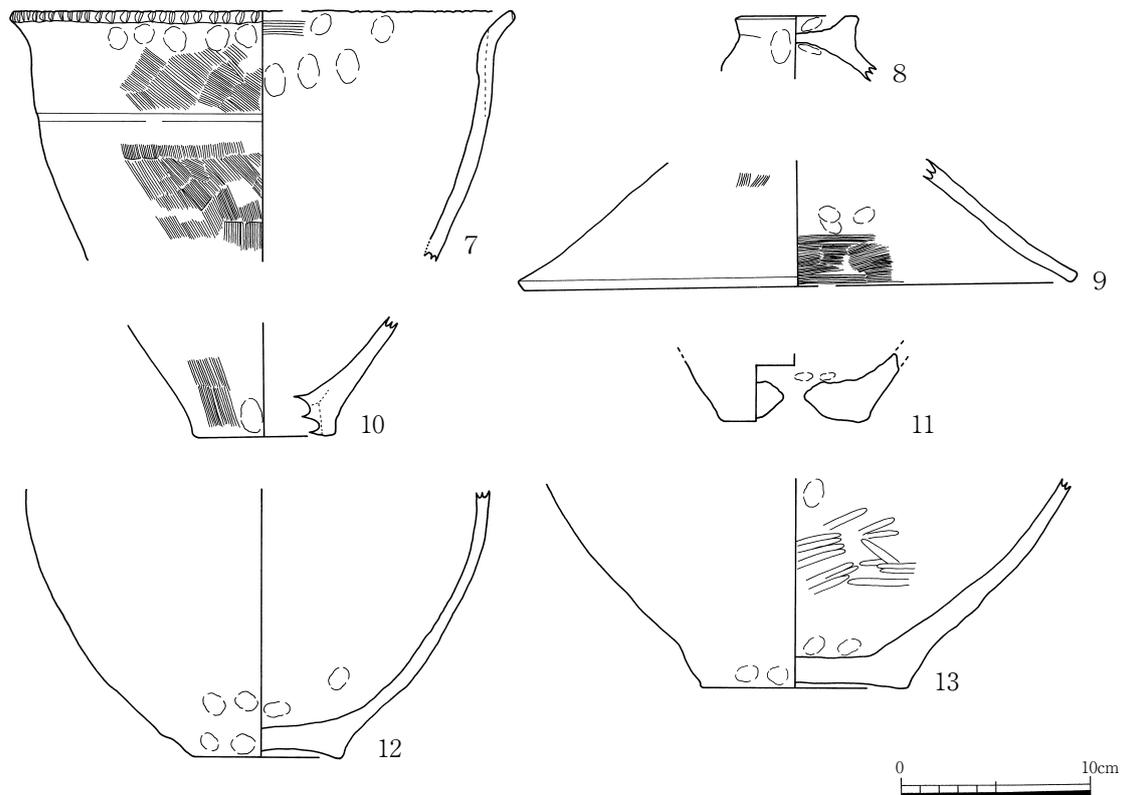


C4北-26 図 C4北SK4180(3)

- 1 黒褐色スリット (10YR3/1)
- 2 黒褐色スリット (2.5Y3/1) (炭化物・焼土・遺物を含む)
- 3 黒褐色スリット (2.5Y3/1) (炭化物・焼土・遺物を含む)



C4北-27 図 C4北SK4188(1)



C4 北-28 図 C4 北SK4188 (2)

C4 北SK4192 (C4 北-29・30 図)

時期：弥生I-3 形状：長楕円形 主軸方向：N-73°-W

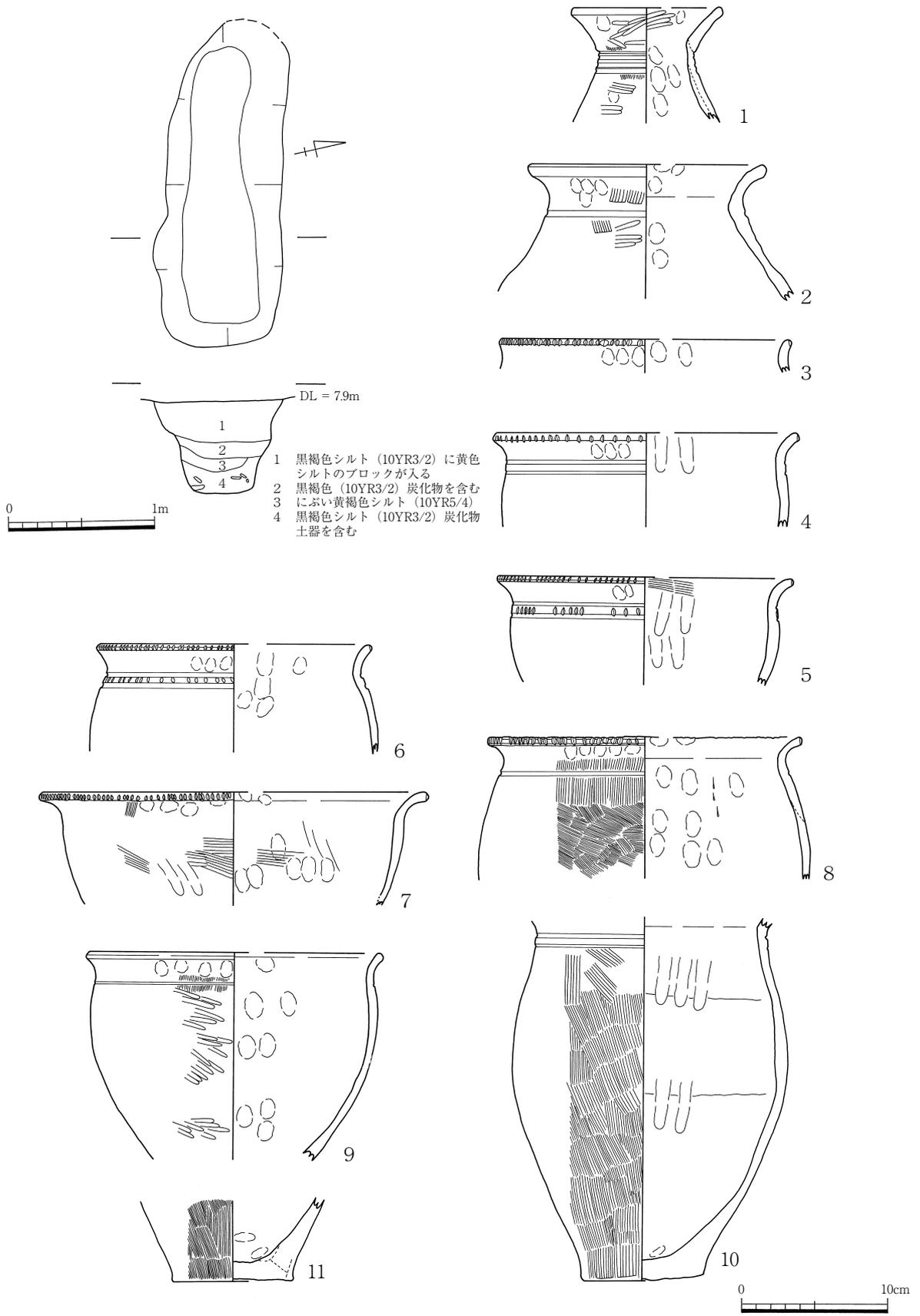
規模：2.2m×0.84m 深さ：64cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト

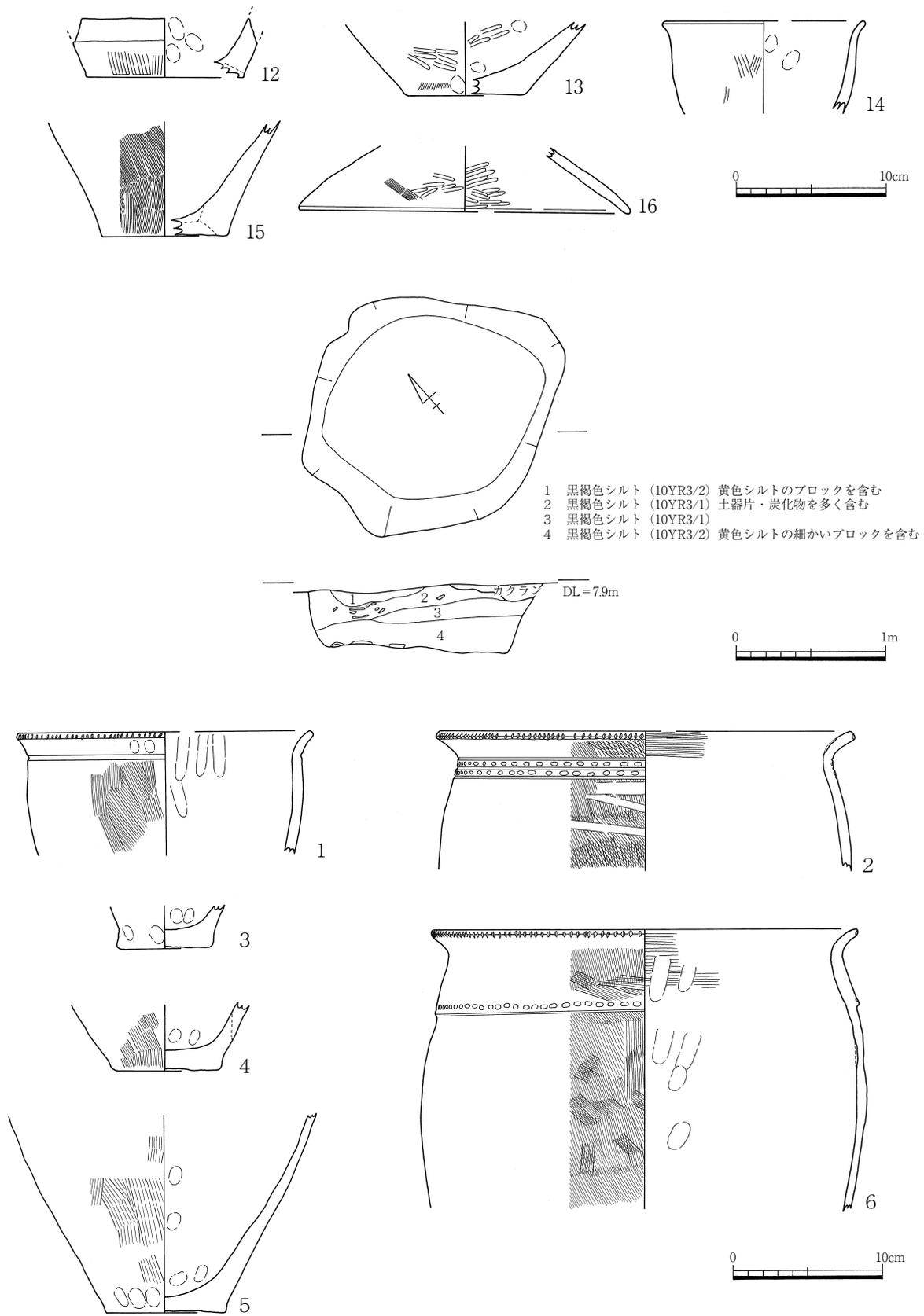
付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、蓋)

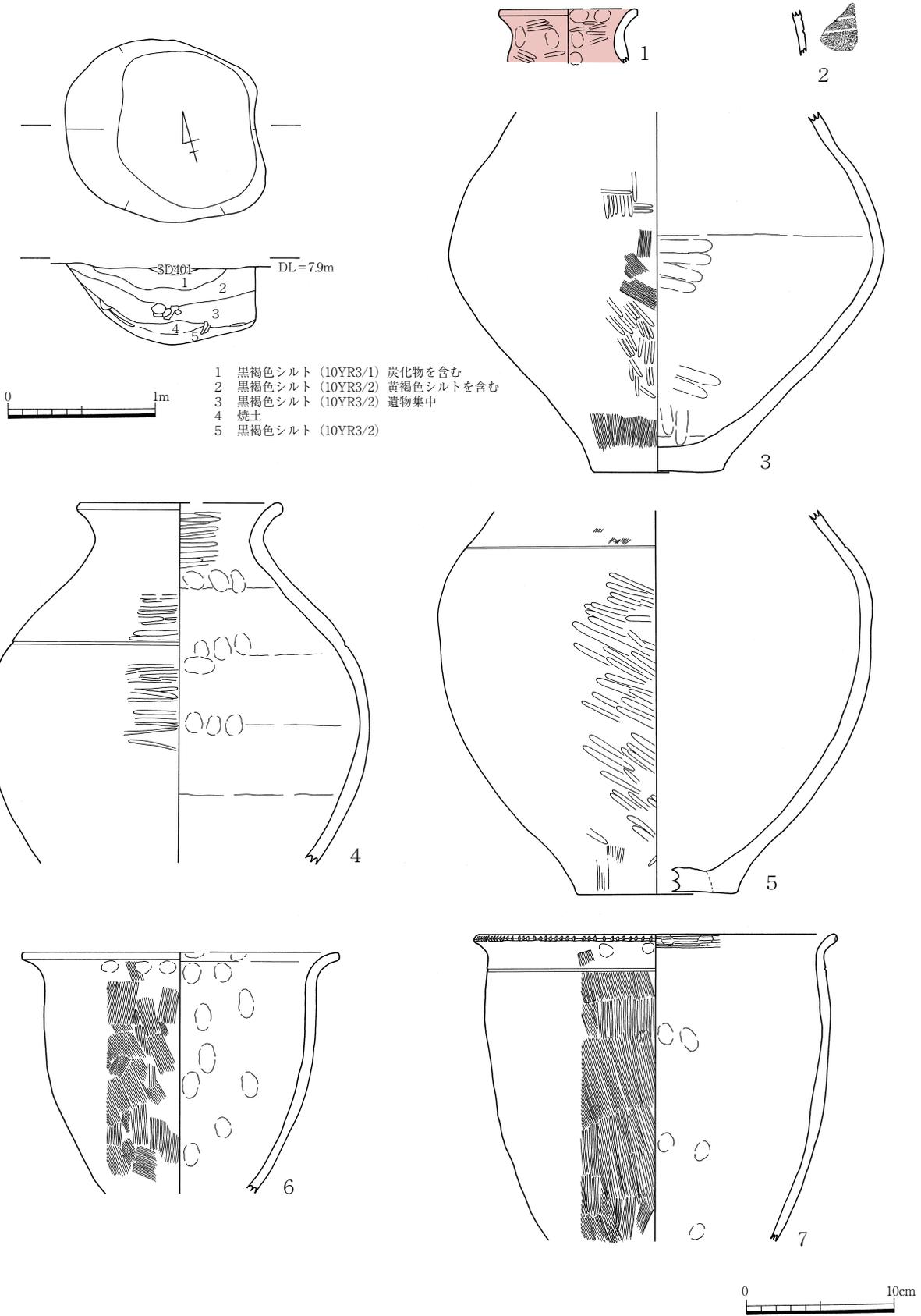
所見：調査区の中央部に位置し、SK4181 に上面を切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とする1~4層で、遺物は4層から多く出土している。遺物は壺(1・2・13)、甕(3~8・10~12・15)、鉢(9・14)、蓋(16)である。壺・甕ともに少条のヘラ描沈線を施したものが目立つ。甕の口唇部刻目は全面に施されるものが多い。壺と甕の比率を図示し得なかったものも含めて、口縁部で見ると壺：甕 = 4点：14点である。12は外傾接合痕跡を示す好例である。SK4192は1-3期の良好な一括資料である。



C4 北-29 図 C4 北SK4192 (1)



C4 北-30 図 C4 北SK4192(2)・4193(SK4192 : 12~16、SK4193 : 1~6)



C4 北-31 図 C4 北SK4195 (1)

C4 北SK4193 (C4 北-30 図)

時期：弥生I-3 形状：楕円形 主軸方向：N-51°-E

規模：1.6m×1.5m 深さ：38~44cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(甕)

所見：調査区の北部に位置する。上面は土坑(SK4194)が切る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は2層に集中し、床面には炭化物が層を成して残っている。1~6はすべて甕である。2は3条のヘラ描沈線と沈線間に列点文を配している。6は弱い段部を有する。

C4 北SK4195 (C4 北-31・32 図)

時期：弥生I-3 形状：楕円形 主軸方向：N-71°-W

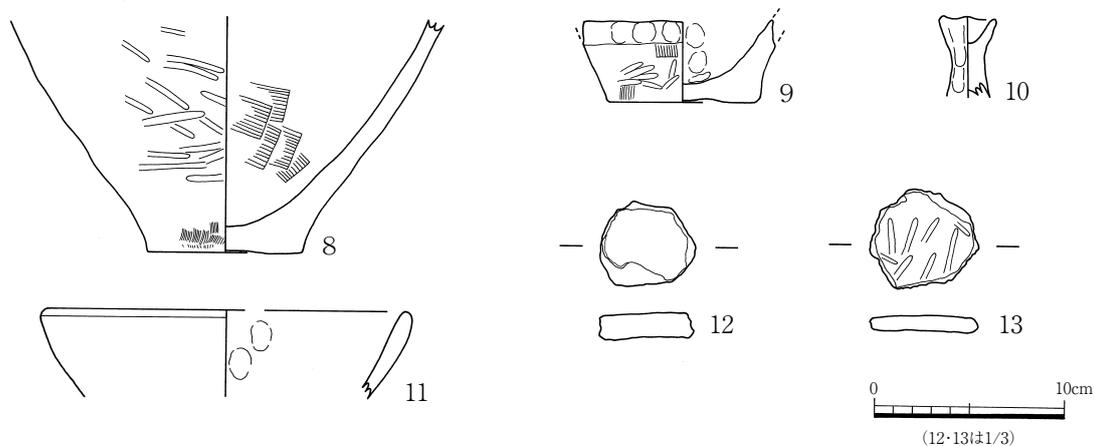
規模：1.29m×1.26m 深さ：58cm 断面形態：不定形

埋土：黒褐色シルト

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、ミニチュア)、土製円板

所見：調査区の中央部に位置する。埋土は黒褐色シルトを基調とする1~5層で、炭化物やシルトが入るが、特に4層は焼土層を形成している。遺物は3層に集中している。土器は壺(1~5・8)、甕(6・7・9)、鉢(11)、この他土製品としてミニチュア(10)、土製円板(12・13)が見られる。1の内外面には赤彩が施されている。壺と甕の比率を図示し得なかったものも含めて口縁部で見ると壺：甕=6点：11点である。9は外傾接合痕跡を示す好例で擬口縁に指頭圧痕が顕著に残る。土製円板は土器転用品である。



C4 北-32 図 C4 北SK4195 (2)

C4 北SK4199(C4 北-33~36 図)

時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-54°-W

規模；2.50m×推定 1.6m **深さ**；60cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色シルト

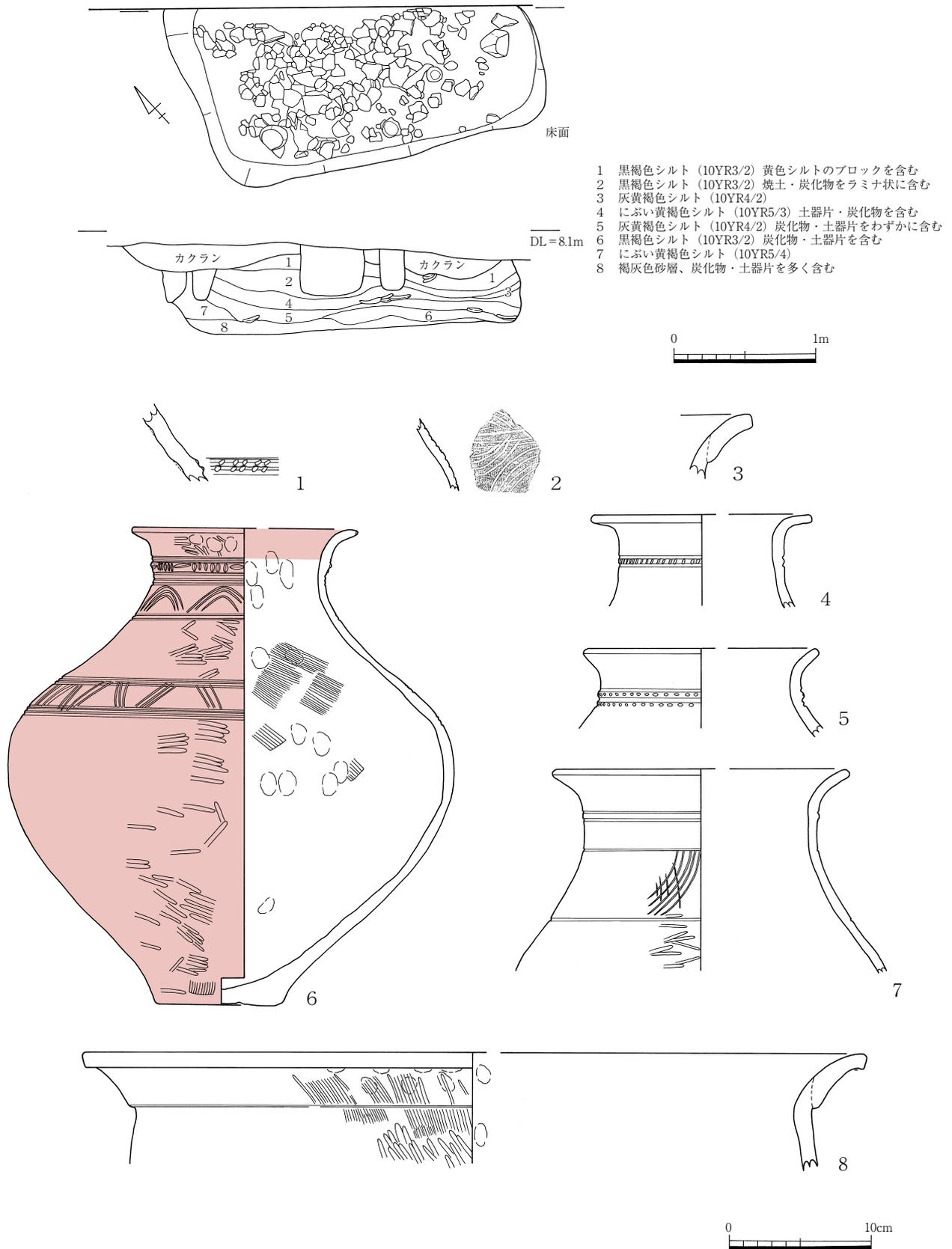
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、紡錘車、土製円板、打製石鏃、伐採斧、砥石

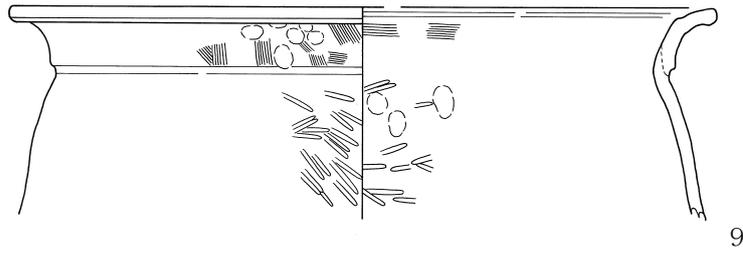
所見；調査区の北部に位置し一部が調査区外に出ている。上層部分はかなり攪乱を受けており、遺構埋土は1~8層である。埋土中には炭化物・焼土を多く含み、遺物は各層から出土しているが、特に床面及び床直上から集中して出土しており一括性の高い出土状況を示している。

土器は壺(1~10・20・21・24)、甕(11~19)、鉢(22・23・26)、蓋(25)、土製円板(27~29)、紡錘車(30)である。壺は段部を持つものも見られるが少条の沈線文を施すものが多い。6は外面と口縁部内面に赤彩が施されている。8~10は大型壺である。この他図示し得なかったものの中にも大型壺の口縁部がかなり含まれている。甕はヘラ描沈線や列点文を持つもの(11・12・15)が見られるが、有文の例は僅少である。口唇部の刻目は全面に施されるものが、下半のそれに較べて圧倒的に多い。6~8・12~14・16~21・26は床及びその直上層出土である。図示し得なかったものも含めて口縁部から器種組成比を見ると壺：甕：鉢：蓋 = 33点：40点：5点：2点である。土製円板はすべて土器転用品である。

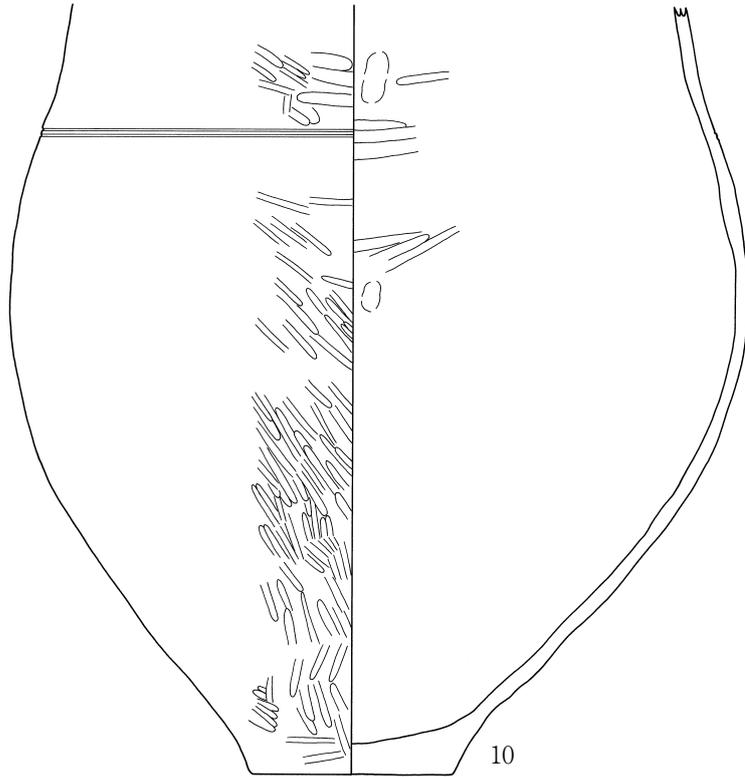
石器は打製石鏃(32・33)、伐採斧(34)、砥石(31・35)が出土している。32はサヌカイト、33はチャートである。34は基部が大きく欠損しており、激しく被熱し一部が赤変している。石材は御荷鉾緑色岩類である。31は石英粗面岩、35は砂岩である。SK4199出土遺物は、1-3期の良好な一括資料として位置付けることができる。



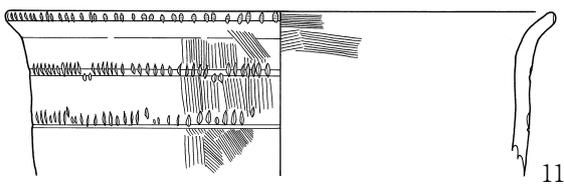
C4 北-33 図 C4 北SK4199 (1)



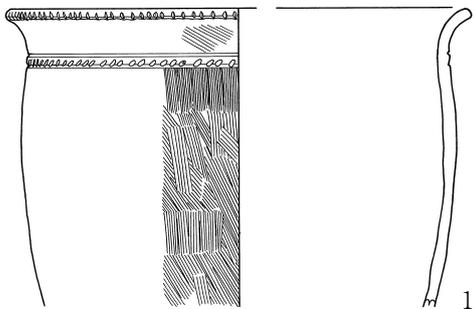
9



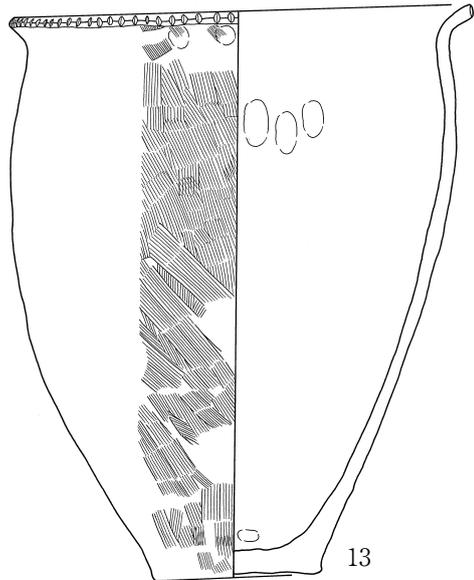
10



11



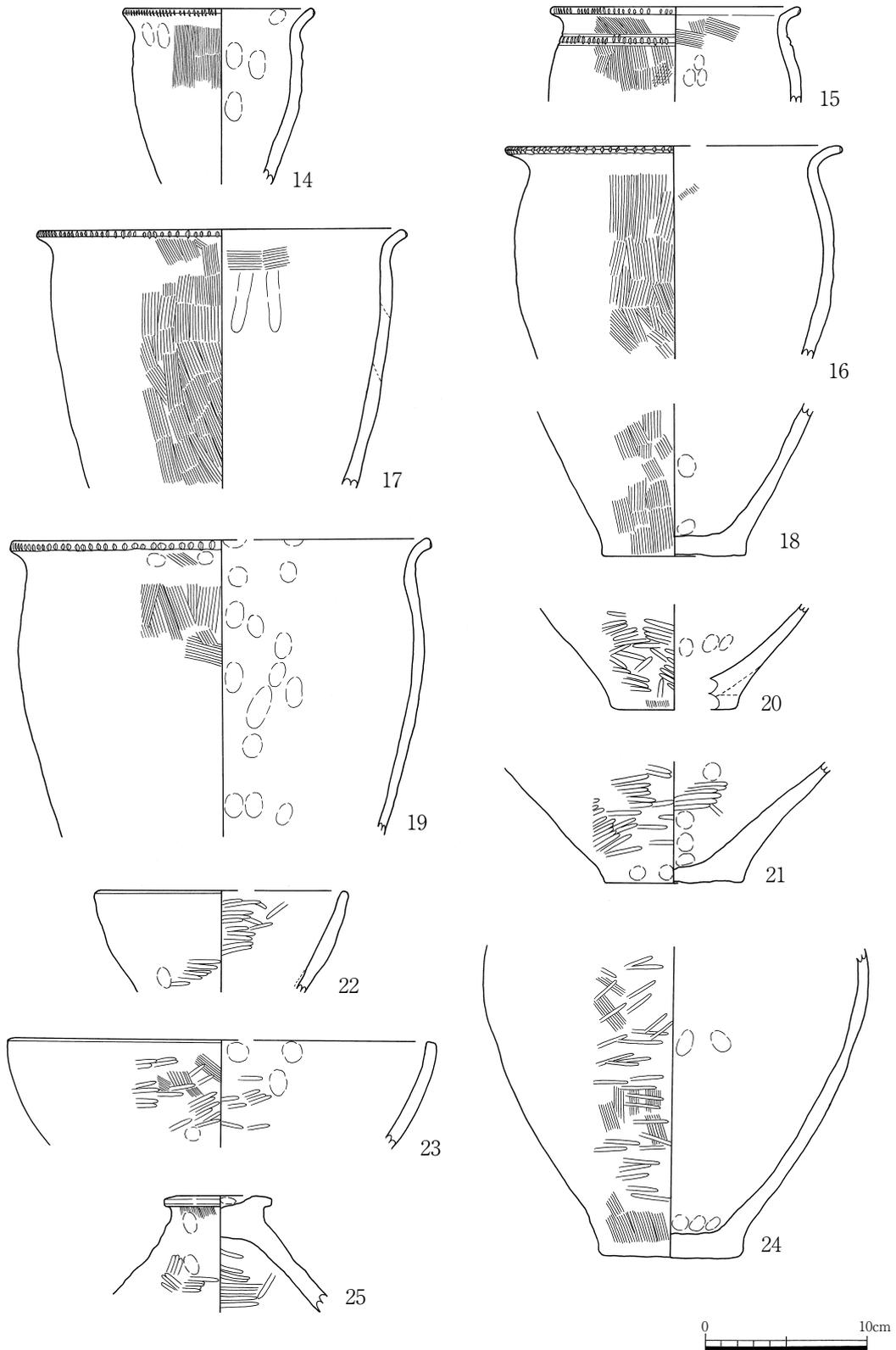
12



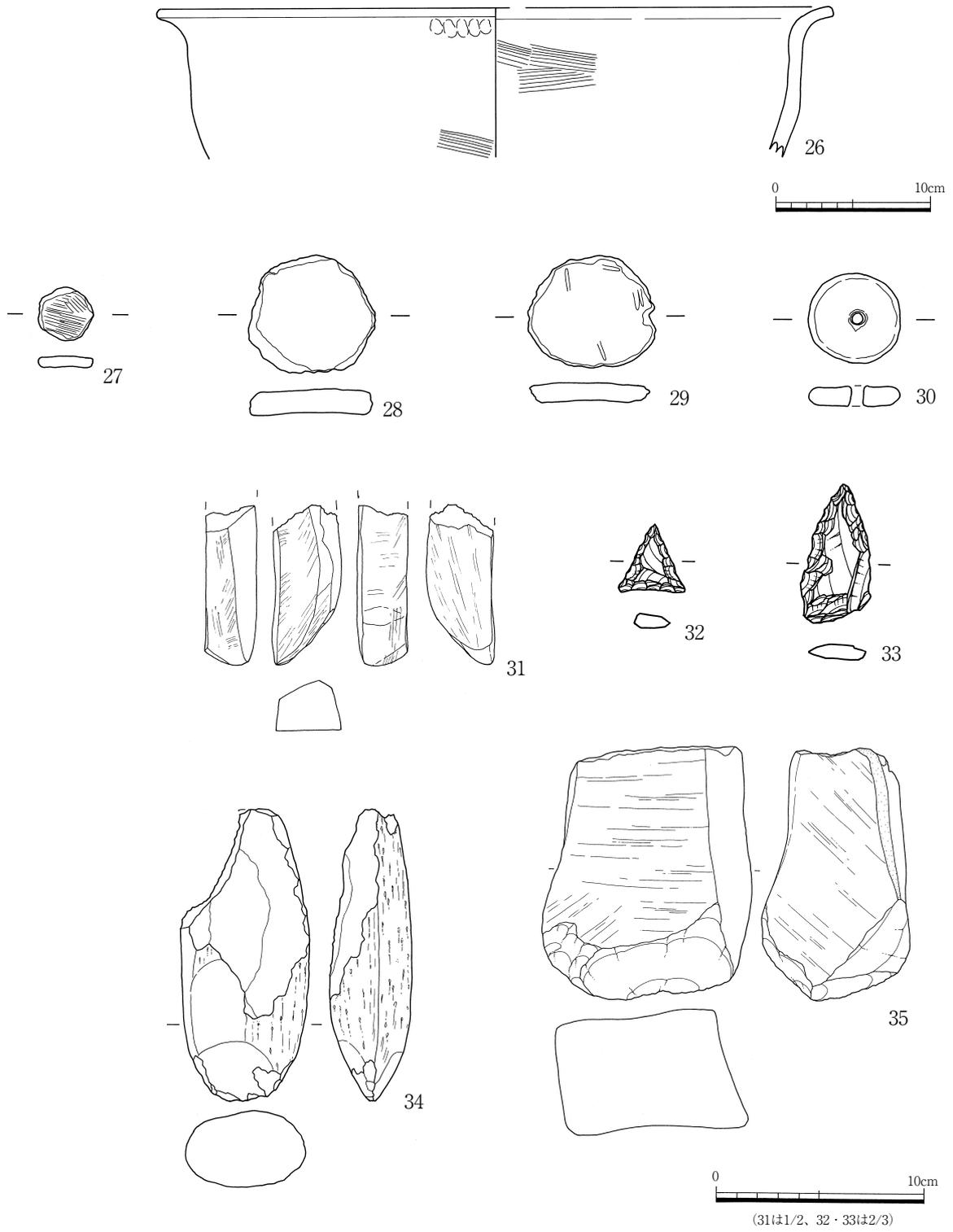
13



C4 北-34 图 C4 北SK4199(2)



C4 北-35 図 C4 北SK4199(3)



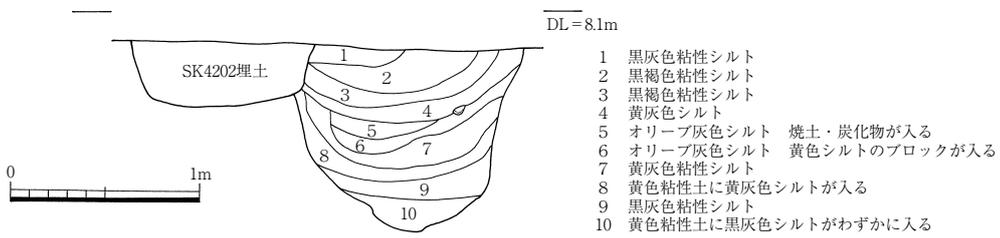
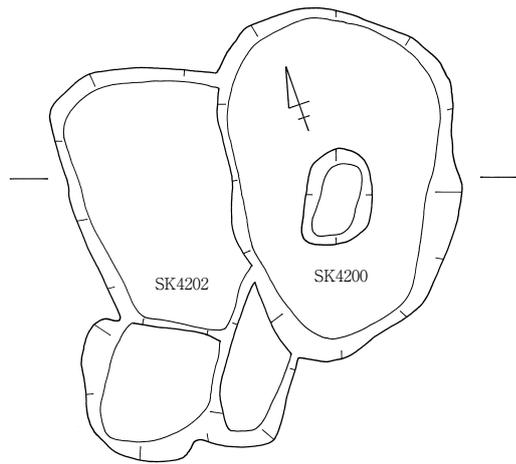
C4 北-36 图 C4 北SK4199(4)

C4 北SK4200 (C4 北-37~39 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-14°-E**規模**；1.9m×1.2m **深さ**；98cm **断面形態**；すり鉢状**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、蓋)、土製円板、磨製石鏃、ノミ状石斧

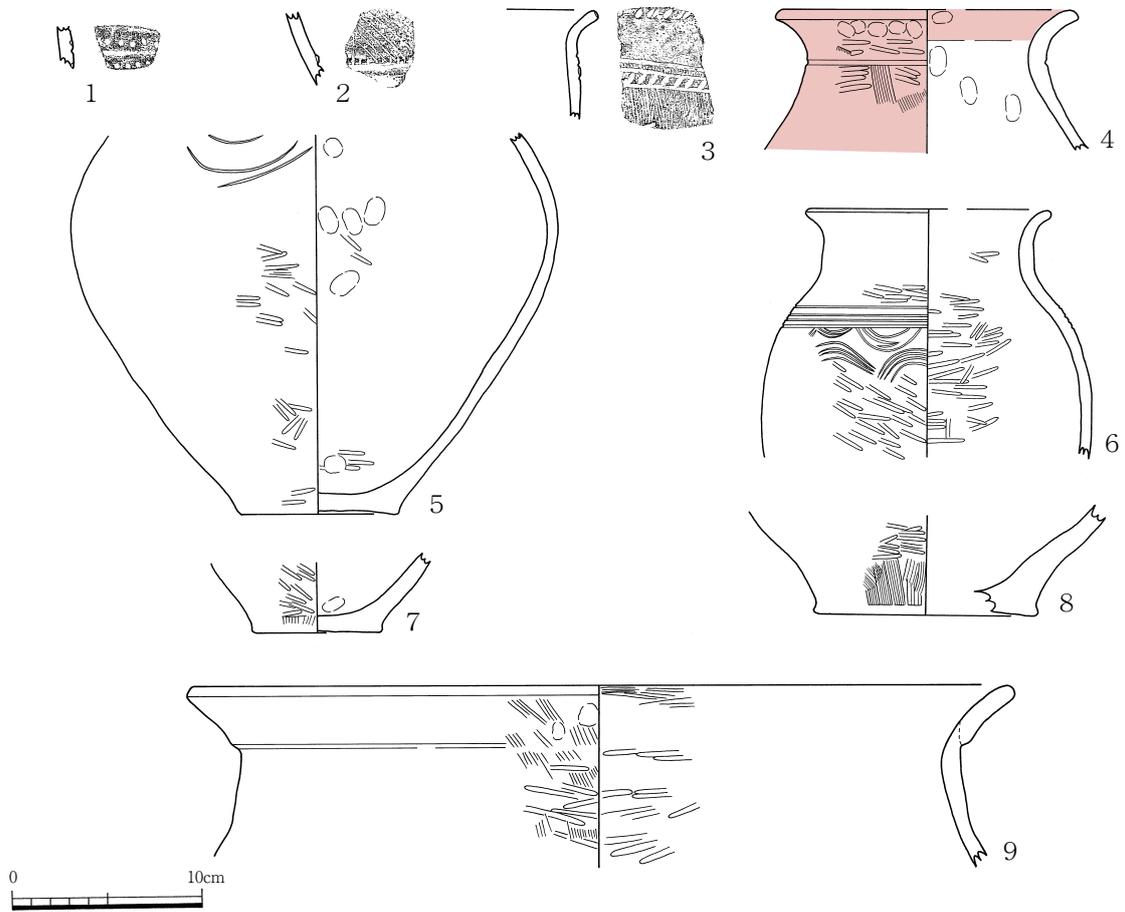
所見；調査区の東部に位置し、SK4202 に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とする1~10層である。土器は壺(1・2・4~10)、甕(3・11~20)、鉢(23)、蓋(21)、土製円板(22)が出土している。壺(9・10)は段部を有する大型壺、4は外面および口縁部内面に赤彩が施されている。甕は段部を持つもの(11・14)も見られるが、少条の沈線を有するもの(13・16・17)も見られる。23は小型鉢、土製円板は土器転用である。石器は磨製石鏃(24)とノミ状石斧(25)である。前者は茎端部を欠損している。鏃の稜線は明瞭でなく刃部断面は扁平な六角形、関は斜めに造り出されている。粘板岩製である。後者は両刃で刃部のみ研磨されている。本遺構は、遺物の詳細な出土状況が不明であるが、1-3期の一括資料として捉えることができよう。

C4 北SK4201 (C4 北-40~42 図)**時期**；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-0°**規模**；1.3m×1.2m **深さ**；20cm **断面形態**；不定形**埋土**；黒褐色シルト**付属遺構**；— **機能**；—**出土遺物**；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

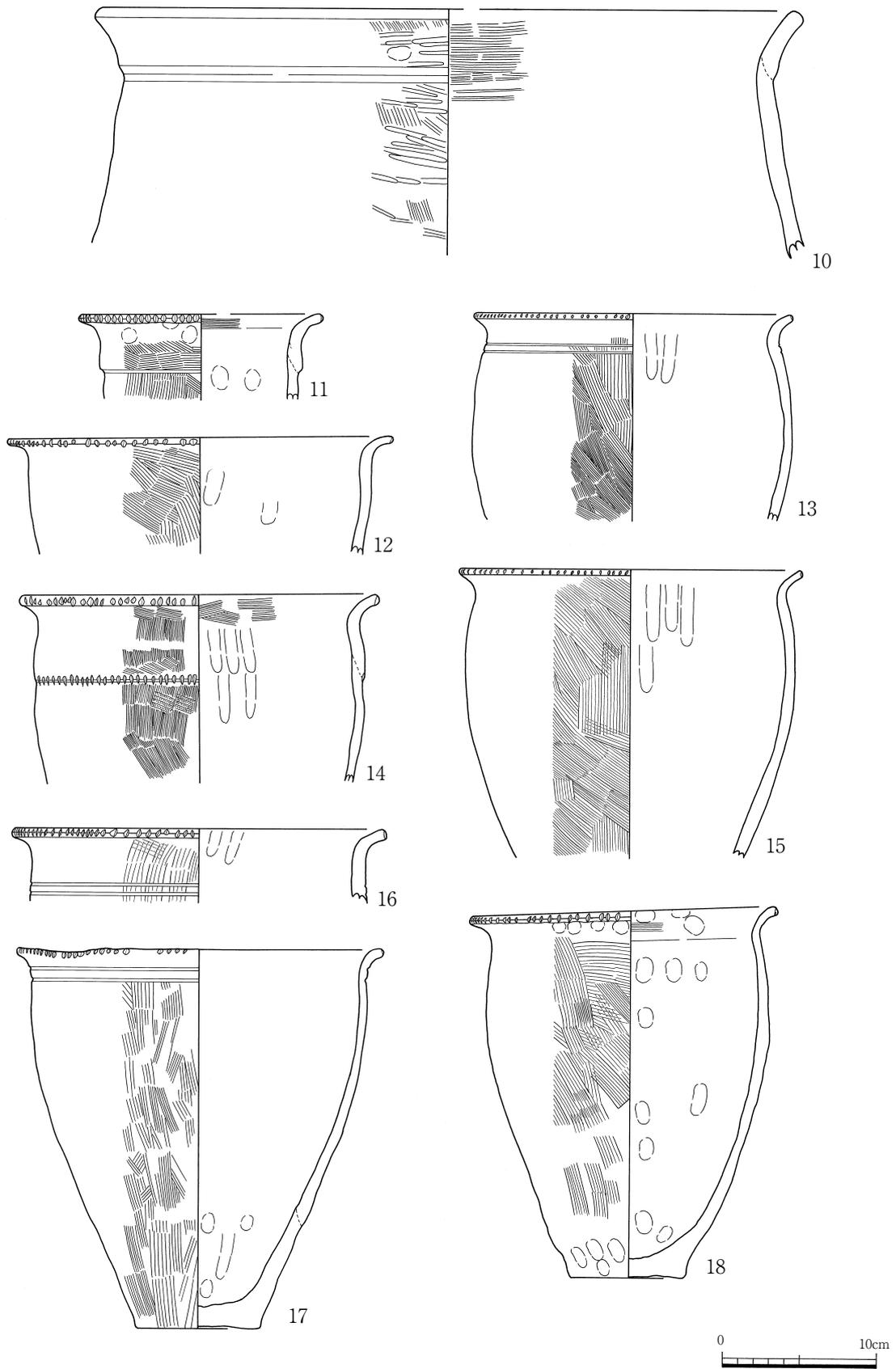
所見；調査区の東端部に位置し、上部をSD412に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とする1~5層で、遺物は2・3層から出土している。壺(1~5・10・11・13)、甕(6~9・14・17)、鉢(12・15・16・18)、蓋(20)、土製円板(19)が出土している。1は口縁部に弱い段を有し段部に列点文を配する。10は頸部に断面三角形の突帯を貼付し外面に赤彩が施されている。6・7は頸部にヘラ描沈線と列点文を有している。8は外傾接合痕が観察できる好例で、擬口縁には指頭圧痕が認められる。17は深鉢状の器形で口縁部に小さな把手を持つ。15は強く内湾する鉢である。



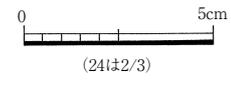
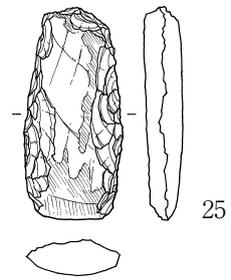
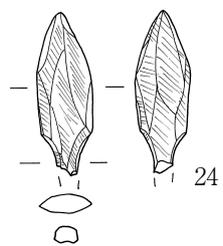
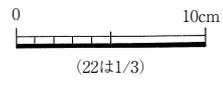
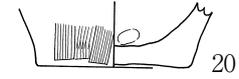
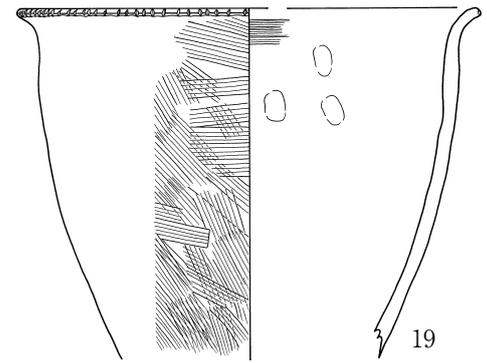
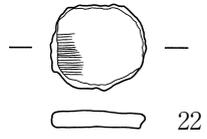
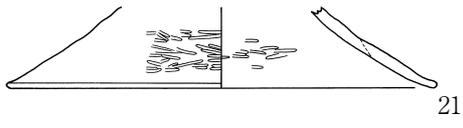
- 1 黒灰色粘性シルト
- 2 黒褐色粘性シルト
- 3 黒褐色粘性シルト
- 4 黄灰色シルト
- 5 オリーブ灰色シルト 焼土・炭化物が入る
- 6 オリーブ灰色シルト 黄色シルトのブロックが入る
- 7 黄灰色粘性シルト
- 8 黄色粘性土に黄灰色シルトが入る
- 9 黒灰色粘性シルト
- 10 黄色粘性土に黒灰色シルトがわずかに入る



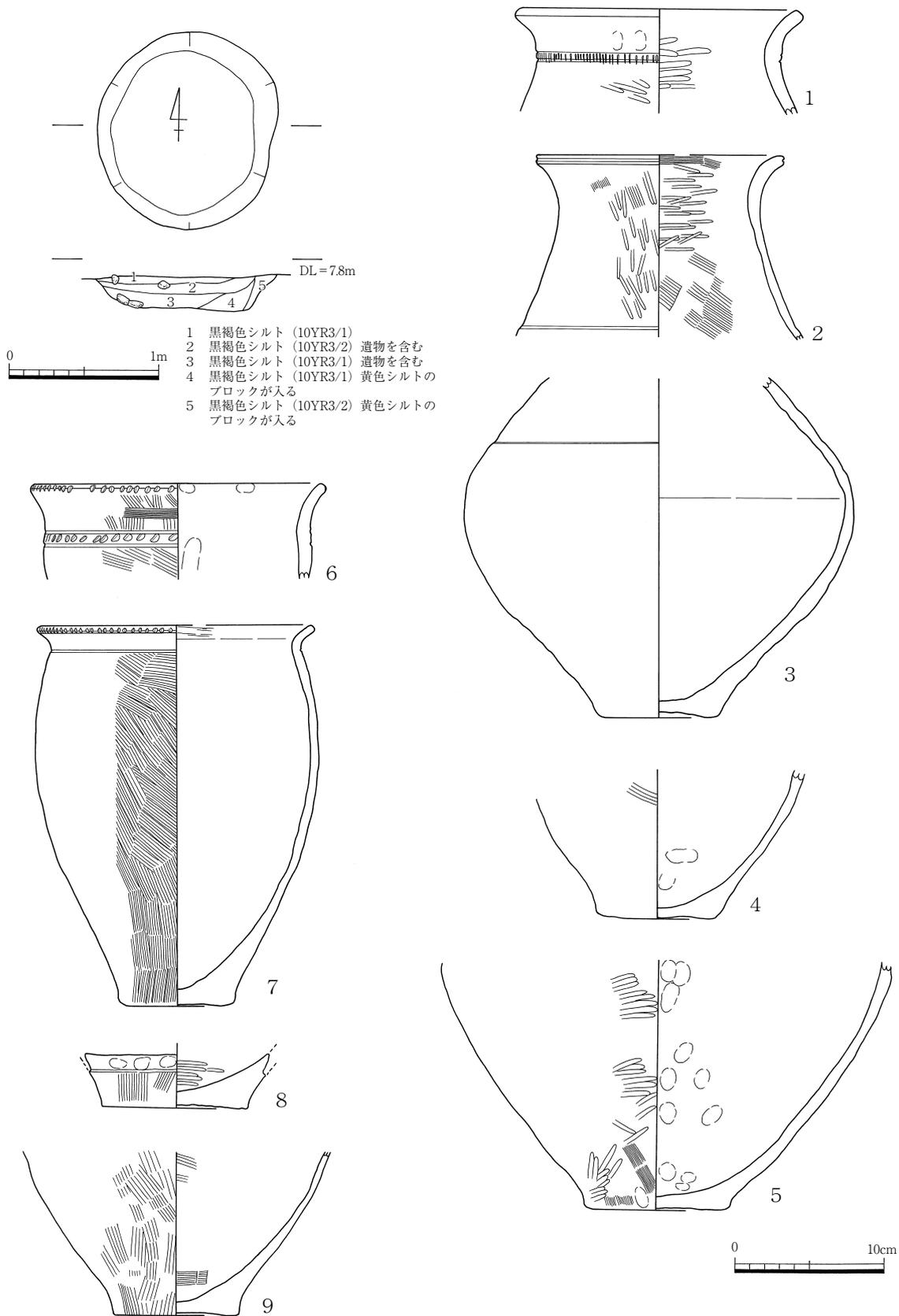
C4 北-37 図 C4 北SK4200 (1)



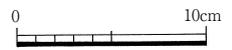
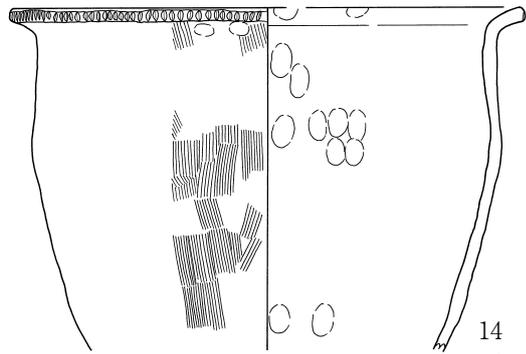
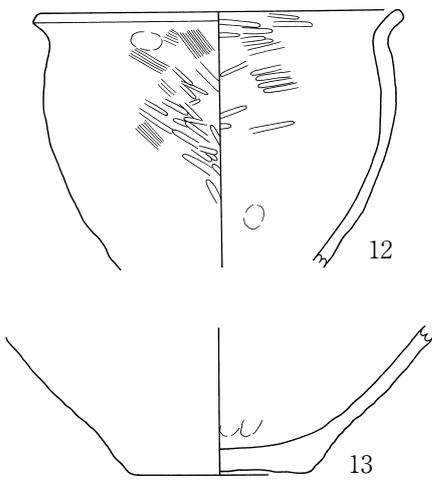
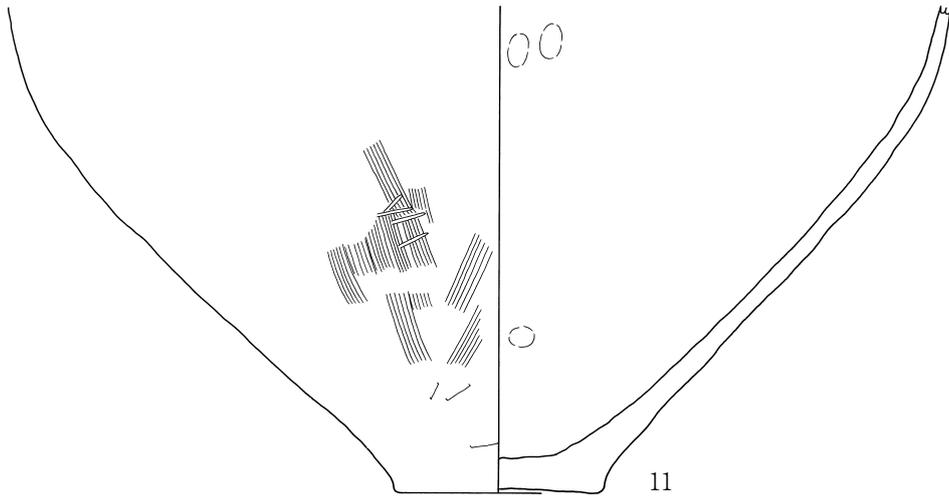
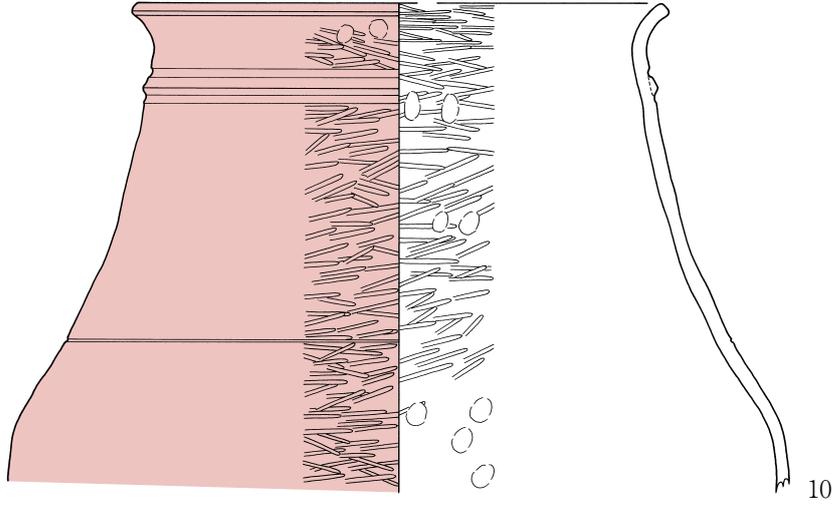
C4 北-38 図 C4 北SK4200 (2)



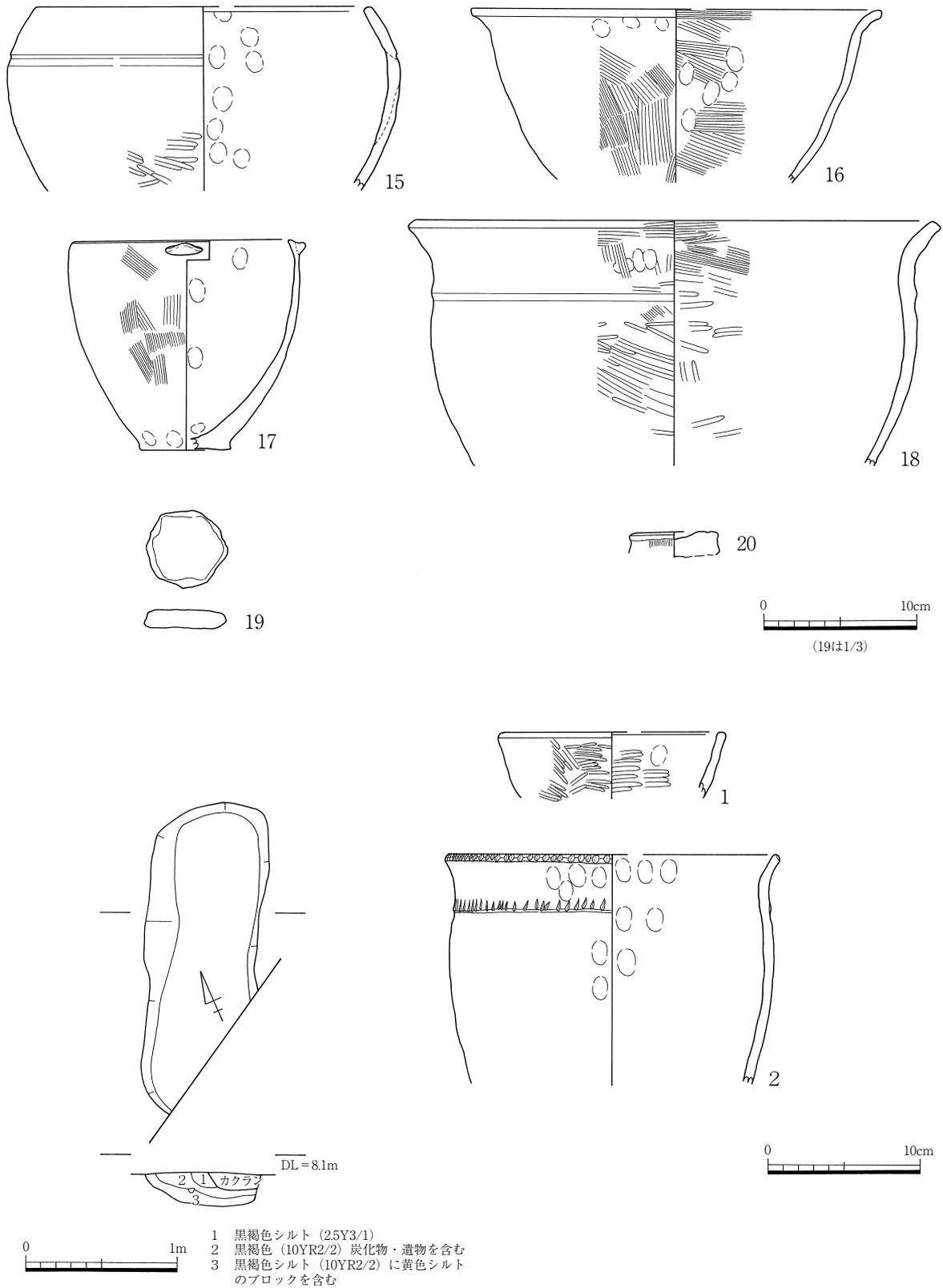
C4 北-39 図 C4 北SK4200 (3)



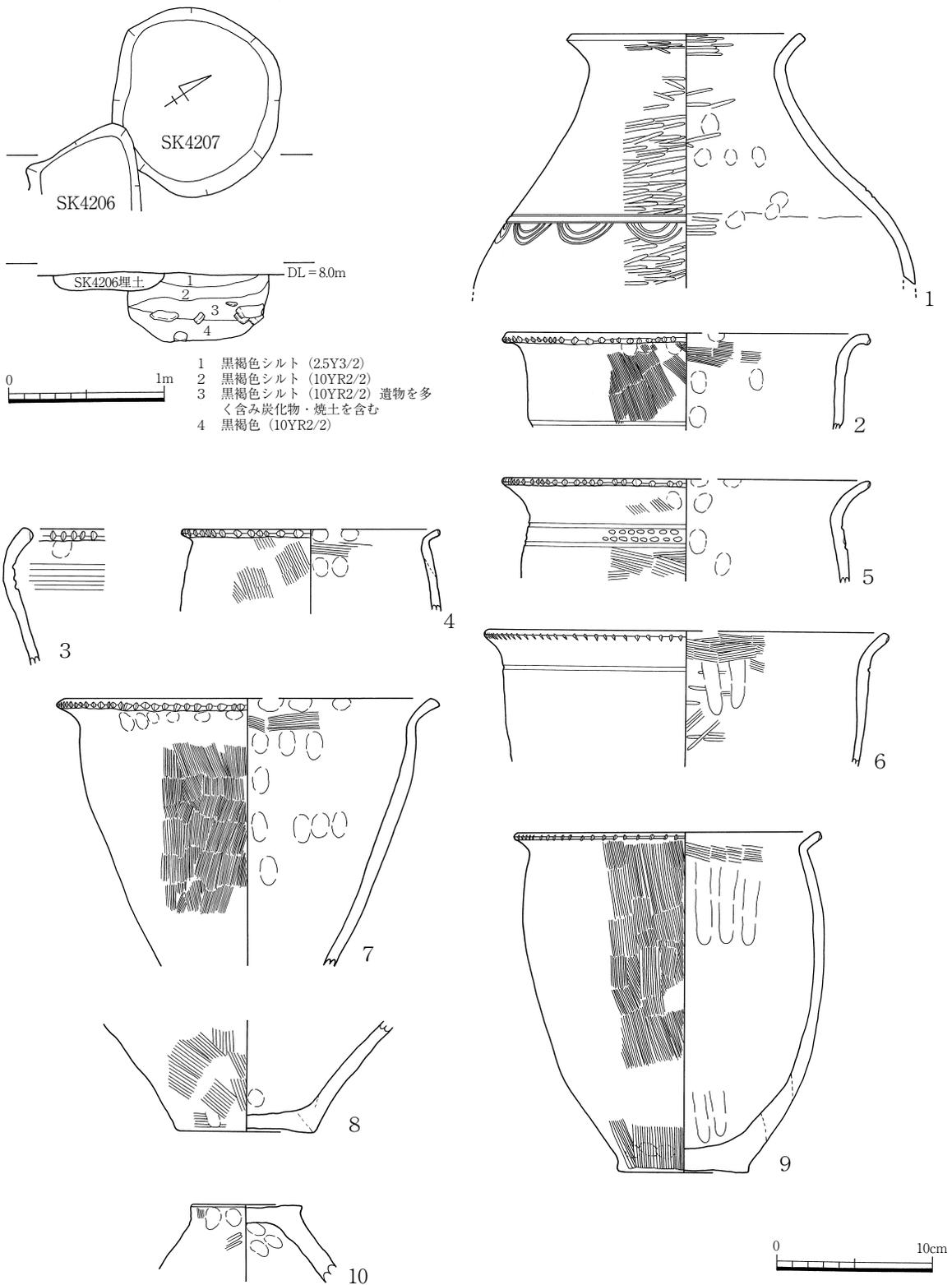
C4 北-40 図 C4 北SK4201 (1)



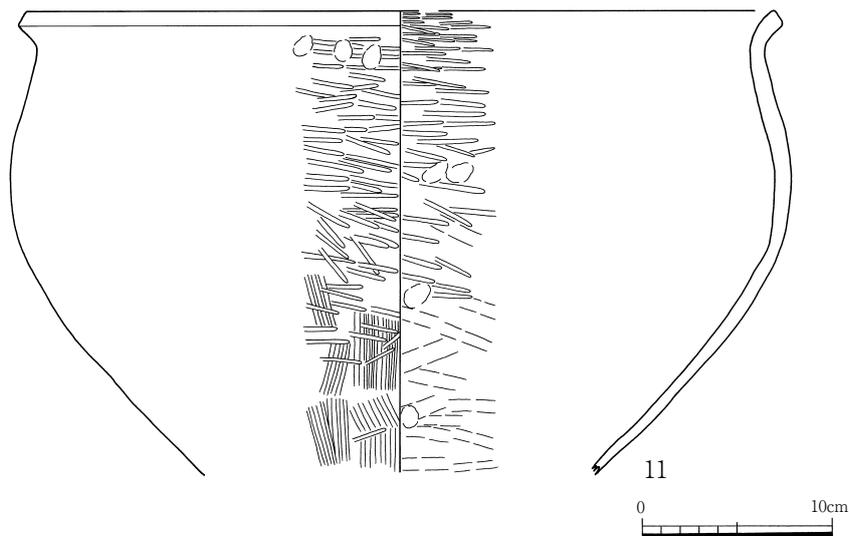
C4 北-41 图 C4 北SK4201 (2)



C4 北-42 図 C4 北SK4201 (3)・4204 (SK4201 : 15 ~ 20, SK4204 : 1・2)



C4 北-43 図 C4 北SK4207 (1)



C4 北-44 図 C4 北SK4207(2)

C4 北SK4204(C4 北-42 図)

時期；弥生I-3 **形状**；長楕円形 **主軸方向**；N-22°-E

規模；推定 2.1m×0.80m **深さ**；22cm **断面形態**；不定形

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(甕、鉢)

所見；調査区の東部に位置し、上面を礫が多量に入る時期不明の溝やピットに切られる。埋土は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトに若干の砂質が混ざっている。2層に炭化物と遺物が含まれる。遺物は細片が多く図示し得たのは甕(2)と鉢(1)のみである。2は弱い段部を有し段部に列点文を配している。

C4 北SK4207(C4 北-43・44 図)

時期；弥生I-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-51°-W

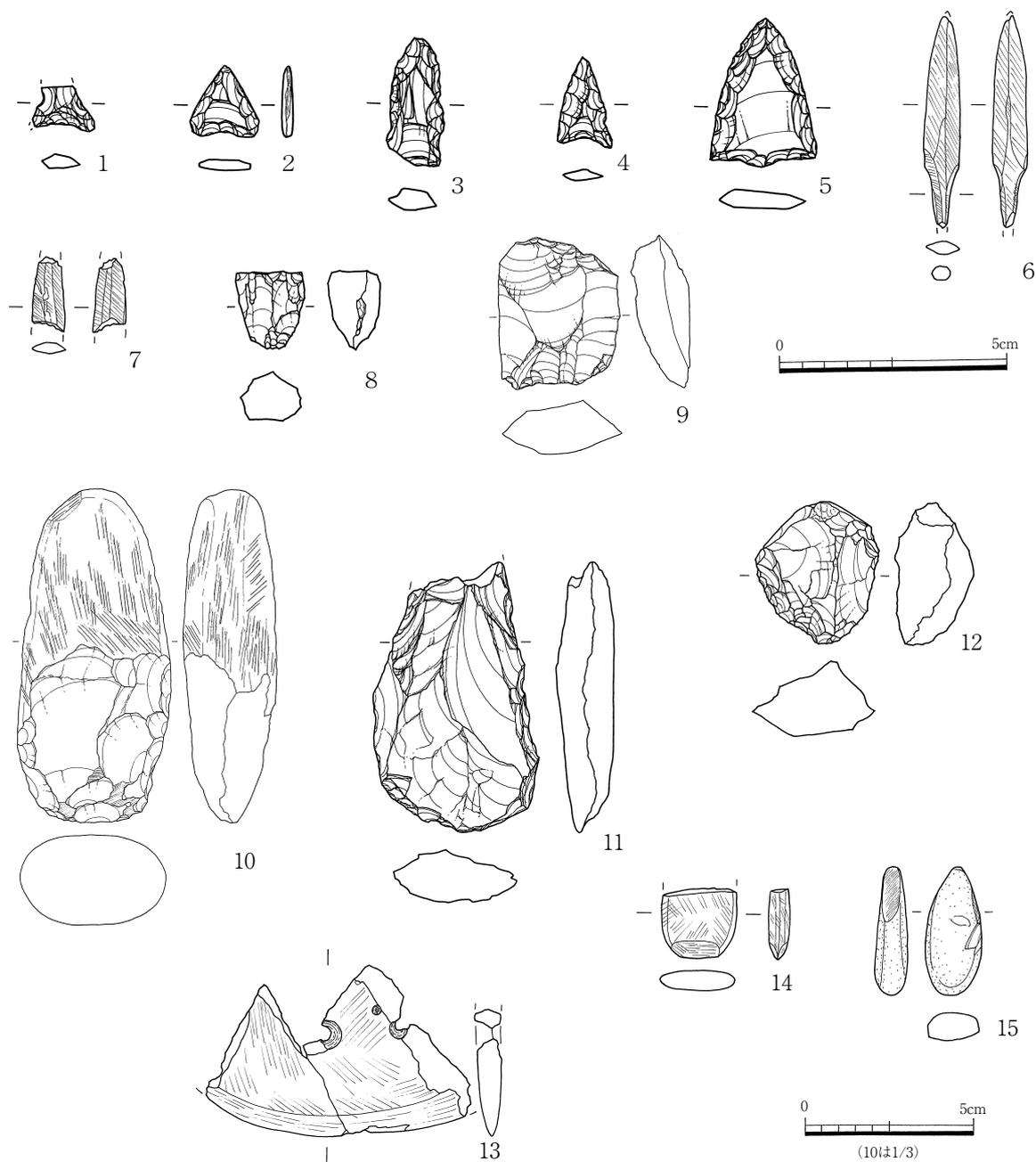
規模；1.22m×1.1m **深さ**；44cm **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)

所見；調査区の東部に位置し、一部SK4206に切られている。埋土は黒褐色シルトを基調とし3層に焼土や炭化物が多く入っている。遺物も主として3層から出土している。土器は壺(1・8)、甕(2~7・9)、鉢(11)、蓋(10)である。少条のヘラ描沈線が一般化した段階のもので1-3期の良好な一括資料である。



C4 北-45 図 C4 北区その他の遺構・包含層出土遺物

(SK4160 : 1、SK4158 : 11、SK4168 : 5、SK4177 : 7・8・12・15、SK4183 : 10、SK4197 : 3・9、SK4202 : 14、SK4207 : 4、P4241 : 13、P4307 : 2、包含層 : 6)

3. C4 北区中世の遺構と遺物

(1) 溝跡

本調査区では調査区の中央部より南北方向の溝跡を1条検出した。溝跡は南側に隣接するC4区(C4SD402)に続いており、形状はL字状を呈する。溝跡の西隅外には石組の井戸跡(C4SE401)が付随している。前回の田村遺跡群の調査では15~16世紀代、古くは14世紀代に成立したと考えられる溝で区画された屋敷跡群(31区画)と屋敷内に伴う井戸跡(16区画)を確認している。

今回の調査区では掘立柱建物等はなく溝のみの検出ではあったが、前回の調査の成果をふまえると何らかの建物跡に付随する区画溝と考えられる。

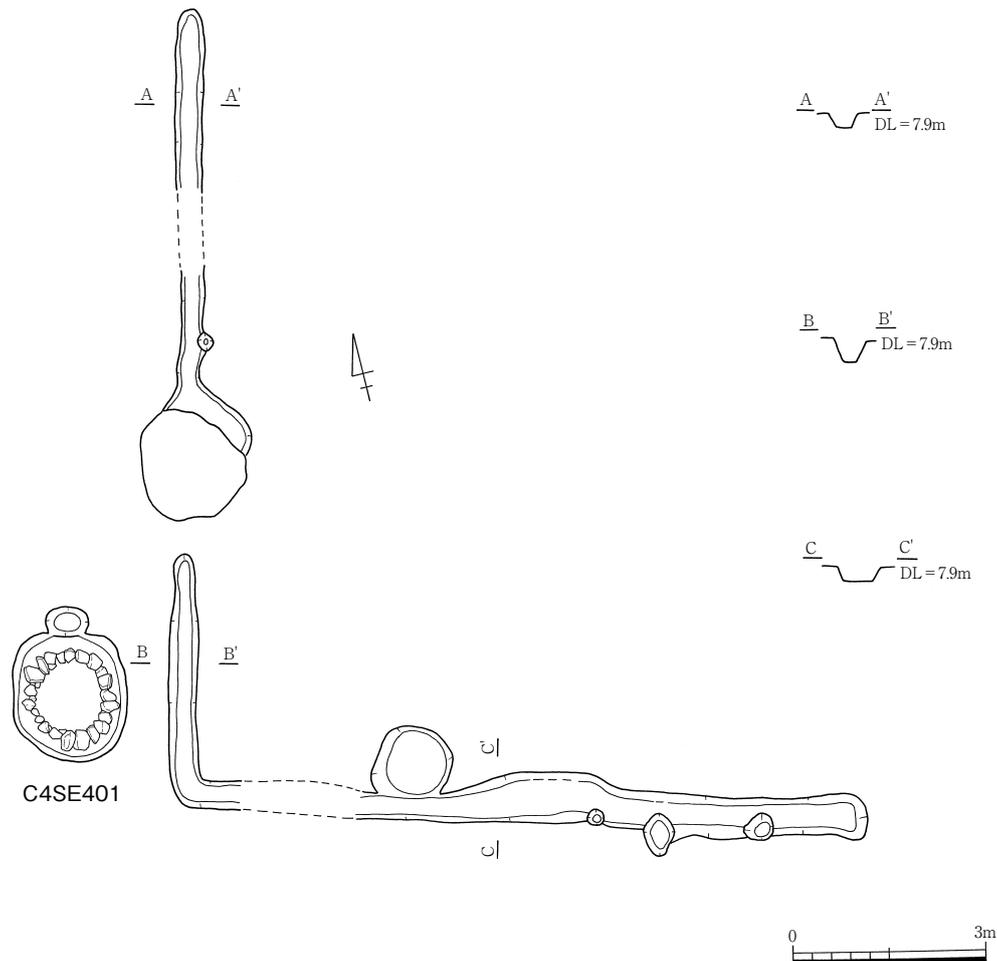
C4 北SD401 (C4 北-46 図)

時期；中世 方向；東西、南北

規模；検出長 東西 10.5m、南北 12m 深さ；南北 24~36cm、東西 24cm

断面形態；逆台形

埋土；灰褐色土 床面標高；7,789m



C4 北-46 図 C4 北SD401 (C4SD402)

接続：C4SD402・403

出土遺物；土師質土器片

所見；調査区東側に位置する。南北方向と東西方向に伸びるL字状を呈する溝跡である。南北方向はC4区に延びているが、ここではC4区の溝も一括してC4北SD401として詳細を述べる。規模、形状や石組の井戸SE401(C4区)が西隅外に付随していることから、屋敷地を区画する区画溝の可能性が考えられる。前回の調査では溝で区画された屋敷跡群と屋敷内に伴う井戸跡を確認している。井戸跡については区画溝の中(屋敷地内)に位置しているものが多かったが、今回の調査区では溝の外側に付随している。

出土遺物は弥生土器片、土師質土器片が出土しているが細片であるため図示できなかった。

(2) ピット出土遺物

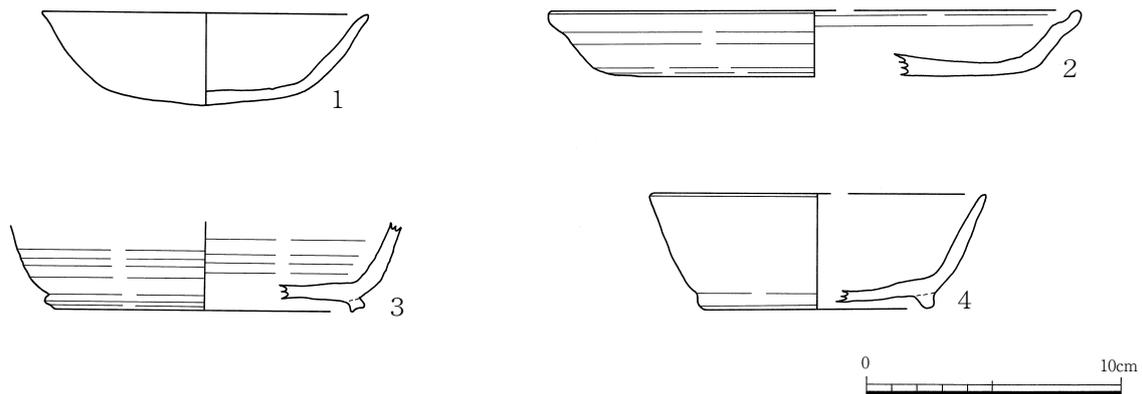
P4328(C4北-47図)

調査中央部において検出した。30×20cmを測る楕円形状のピットで、埋土は灰褐色土である。埋土からは1の土師器杯が出土している。内外面丁寧なナデを施す。

4. C4北区包含層遺物

(1) 古代(C4北-47図)

調査区では上層から2~4の土師器杯、須恵器の皿と杯が出土している。ともに古代に位置付けられるものである。土器の詳細については別添の観察表を参照されたい。



C4北-47図 C4北P4328・包含層出土遺物(P4328：1、包含層：2～4)

C5 区の調査



1. C5 区の概要

概要

C5 区は今次調査対象区の北東部に位置し、東をC1 区、南をC4 区と接する調査区である。前期環濠集落の西南部、内濠と外濠の間の部分に当たる。そのため主体となる遺構は弥生時代前期であるが、弥生時代後期、近世のものもみられる。遺構密度は隣接する調査区と比較すると疎である。

C5 区では2 条の弥生前期の環濠と多数の土坑、ピットが検出されている。前期溝2(C5SD501)は調査区北端部で検出され、平面プランはやや弧状を描き北西から南東へと延びる。またC5SD501の約35m南の調査区南端部では、直線的に延びる前期溝3(C5SD504)を検出している。前期溝2・3の間は掘立柱建物跡、土坑群が配される。土坑は調査区北部の内濠周辺に多く集中し、南に行くに従い少なくなる。

また掘立柱建物跡は10 棟検出した。重複して建てられたものが多く、C5SD501の南、C5SD504の北に集中する。

調査担当者 坂本裕一、名木郁、小野由香

執筆担当者 小野由香

調査期間 平成11年7月1日~平成11年8月16日

調査面積 440㎡

時代 弥生時代前期、中期、後期、近世

検出遺構 弥生時代掘立柱建物跡10 棟、土坑38 基、溝2 条、ピット177 個、近世墓2 基

2. C5 区弥生時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

C5 区では 10 棟の掘立柱建物跡が、調査区の北部と南部、前期溝 2・3 の周辺部で集中して検出した。なかには 4 棟重複して建つものもみられる。出土遺物はいずれも弥生土器の細片のみで、復元図示できるものはなかった。出土遺物の胎土及び、埋土の色調から弥生時代の掘立柱建物跡とみられる。掘立柱建物跡の規模は 1 間×2 から 3 間と比較的小規模のものである。柱穴の直径は概ね 20 から 30cm、深度は 10 から 20cm を測る。これらの建物の機能は不明瞭だが作業小屋、あるいは倉庫のようなものであった可能性が高い。特に C5SB503・504 のように 1 間×1 間の建物が 2 棟並立する例もみられ、倉庫として使用されたと考えられる。これらの建物の主軸方向は北から 10 度前後、東西に振るものが多い。

C5-1 表 C5 区掘立柱建物跡一覧表

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	備考
C5SB501	1×2	1.12×2.30	1.12×1.12~1.18	N-7°-W	
C5SB502	1×2	1.85×2.85	1.85×1.25~1.60	N-9°-W	
C5SB503	1×1	1.85×3.84	1.85×3.62~3.84	N-12°-E	
C5SB504	1×1	1.90×3.78	1.90×3.65~3.78	N-13°-E	
C5SB505	1×3	3.53×3.33	3.53×1.04~1.16	N-42°-W	
C5SB506	1×1	1.45×1.98	1.45×1.98	N-80°-W	
C5SB507	1×2	1.49×2.08	1.49×0.94~1.14	N-5°-W	
C5SB508	1×2	2.11×3.28	2.11×1.50~1.78	N-3°-E	
C5SB509	1×2	1.19×2.39	1.19×1.03~1.36	N-1°-E	
C5SB510	1×2	1.36×2.31	1.36×0.98~1.33	N-53°-W	

C5SB501 (C5-2 図)

時期；弥生 **棟方向**；N-7°-W

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 1.12m×桁行 2.30m **面積**；2.58㎡

柱間寸法；梁間 1.12m 桁行 1.12~1.18m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北部、C5SD501 の南で検出した。C5SB502 と切り合う。柱穴同士の切り合いはなく、先後関係は不明である。1 間×2 間の比較的小型の掘立柱建物跡である。棟方向が後述の C5SB502・507~509 と類似しており、切り合っているが、あまり時期差のない建物群であった可能性もある。柱穴は直径 19~24cm、深さは 7~14cm を測る。P2~5 の柱穴で弥生土器が出土したが、いずれも胴部細片のため時期の特定は難しい。出土遺物のうち復元図示できるものはなかった。

C5SB502 (C5-2 図)

時期；弥生IV~V **棟方向**；N-9°-W

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 1.85m×桁行 2.85m **面積**；5.27㎡

柱間寸法；梁間 1.85m 桁行 1.25~1.60m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器(甕)、チャートチップ片 1 点

所見；調査区北部、C5SB501 と重複して検出した。先後関係は不明である。柱穴は直径 19~36cm、深さは 7~37cm を測る。出土遺物のうち、時期の特定できるものは弥生前期甕 2 点、凹線文甕 1 点である。その他は胴部細片である。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SB 503(C5-2 図)

時期；弥生中期 **棟方向**；N-12°-E

規模；梁間 1 間×桁行 1 間 梁間 1.85m×桁行 3.84m **面積**；7.10㎡

柱間寸法；梁間 1.85m 桁行 3.62~3.84m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

性格；倉庫 **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器(壺)、チャートチップ 2 点

所見；調査区北部、C5SB502 と重複して検出した。また C5SK511 を切ることから、前期 I-3 以降の掘立柱建物跡とみられる。柱穴の直径は 30~38cm、深さは 16~29cm を測る。出土遺物から弥生時代中期の掘立柱建物跡の可能性が高い。また約 1m の間隔を置いた東には、同規模の掘立柱建物跡が並立する。これら 1 間×1 間の掘立柱建物は、大型の倉庫であった可能性が考えられる。出土遺物は胴部細片が大半で、復元図示できるものはなかった。

C5SB504(C5-2 図)

時期；弥生中期? **棟方向**；N-13°-E

規模；梁間 1 間×桁行 1 間 梁間 1.90m×桁行 3.78m **面積**；7.18㎡

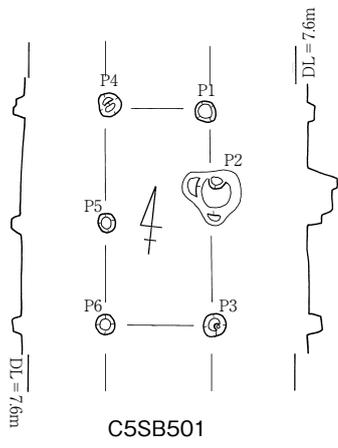
柱間寸法；梁間 1.90m 桁行 3.65~3.78m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

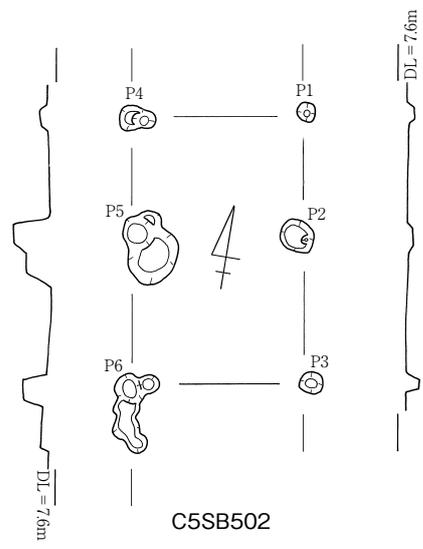
性格；倉庫 **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器(壺)

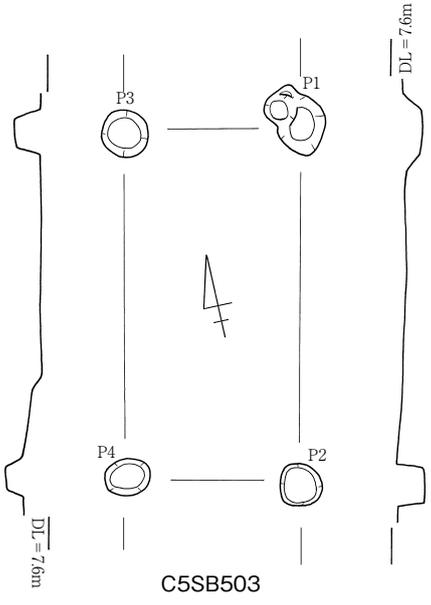
所見；調査区北部、C5SB503 の東で検出した。1 間×1 間の掘立柱建物跡である。柱穴の直径は 42~52cm、深さは 11~30cm を測る。建物の規模、軸方向は C5SB503 と近似しており、同時期に並立していたか、C5SB503 と同様の機能を持っていた可能性がある。機能としては、倉庫的な使用が考えられる。P2 からは土師質土器片 1 点が出土しているが、埋土の色調、その他の出土遺物から混入と考えられる。出土遺物の中で復元図示できるものはなかった。



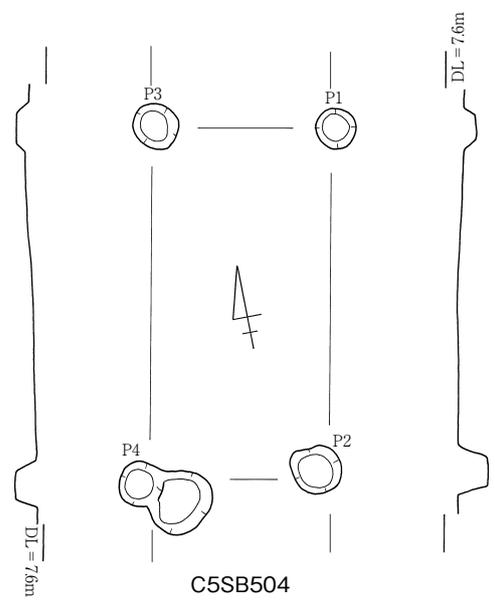
C5SB501



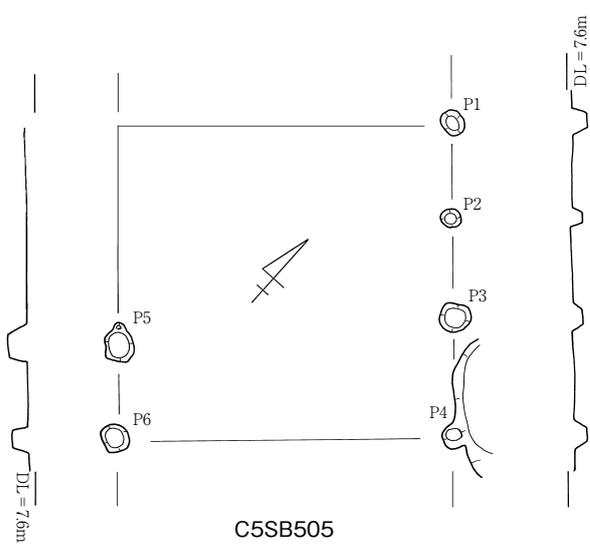
C5SB502



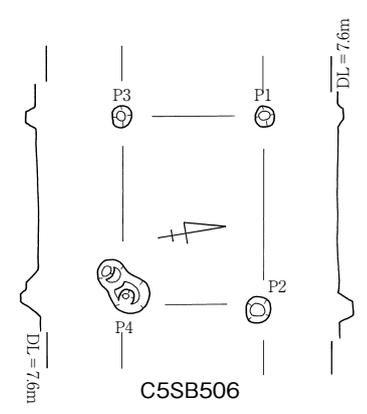
C5SB503



C5SB504



C5SB505



C5SB506



C5-2 ☒ C5SB501 ~ 506

C5SB505(C5-2 図)**時期**；弥生 **棟方向**；N-42°-W**規模**；梁間 1 間×桁行 3 間 梁間 3.53m×桁行 3.33m **面積**；11.75㎡**柱間寸法**；梁間 3.53m 桁行 1.04~1.16m**柱穴数**；6 **柱穴形**；円形**性格**；— **付属施設**；—**出土遺物**；弥生土器(壺)

所見；調査区北西部で検出した。掘立柱建物跡の一部は調査区外に延びているため、確認できた規模は 1 間×3 間である。柱穴は直径 19~33cm、深さ 13~23cm を測る。棟持柱は認められなかった。倉庫とするには規模が大きく総柱でもないため、機能は不明である。P2・3・5 からは弥生土器が出土しているが、いずれも細片で時期を特定するのは難しい。前期の土坑と接するので、I-3 様式以降に建てられたものとみられる。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SB506(C5-2 図)**時期**；弥生 **棟方向**；N-80°-W**規模**；梁間 1 間×桁行 1 間 梁間 1.45m×桁行 1.98m **面積**；2.87㎡**柱間寸法**；梁間 1.45m 桁行 1.98m**柱穴数**；4 **柱穴形**；円形**性格**；倉庫 **付属施設**；—**出土遺物**；弥生土器

所見；調査区南部、C5SD504 の北で検出した。C5SB507・509・510 と重複する。柱穴の切り合いがないため、先後関係は不明である。柱穴は直径 17~29cm、深さは 6~20cm を測る。1 間×1 間の小規模な SB で、倉庫的な利用がなされたと考えられる。また棟方向が他の掘立柱建物跡とは異なる。遺物は P4 で出土したが、弥生土器の胴部細片のみのため時期の特定は難しい。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SB507(C5-3 図)**時期**；弥生中~後期 **棟方向**；N-5°-W**規模**；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 1.49m×桁行 2.08m **面積**；3.84㎡**柱間寸法**；梁間 1.49m 桁行 0.94~1.14m**柱穴数**；5 **柱穴形**；円形**性格**；— **付属施設**；—**出土遺物**；弥生土器(甕)

所見；調査区南部で検出し、SB506・508・509 と切り合う。柱穴同士の切り合いがないため、先後関係は不明である。柱穴は直径 17~38cm、深さは 7~19cm を測る。P1・2・4 で弥生土器が出土しているが、いずれも細片のため時期の特定は困難である。土器胎土から中期以降ものとみられる。

出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SB508 (C5-3 図)

時期：弥生 棟方向：N-3°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.11m×桁行3.28m 面積：6.92㎡

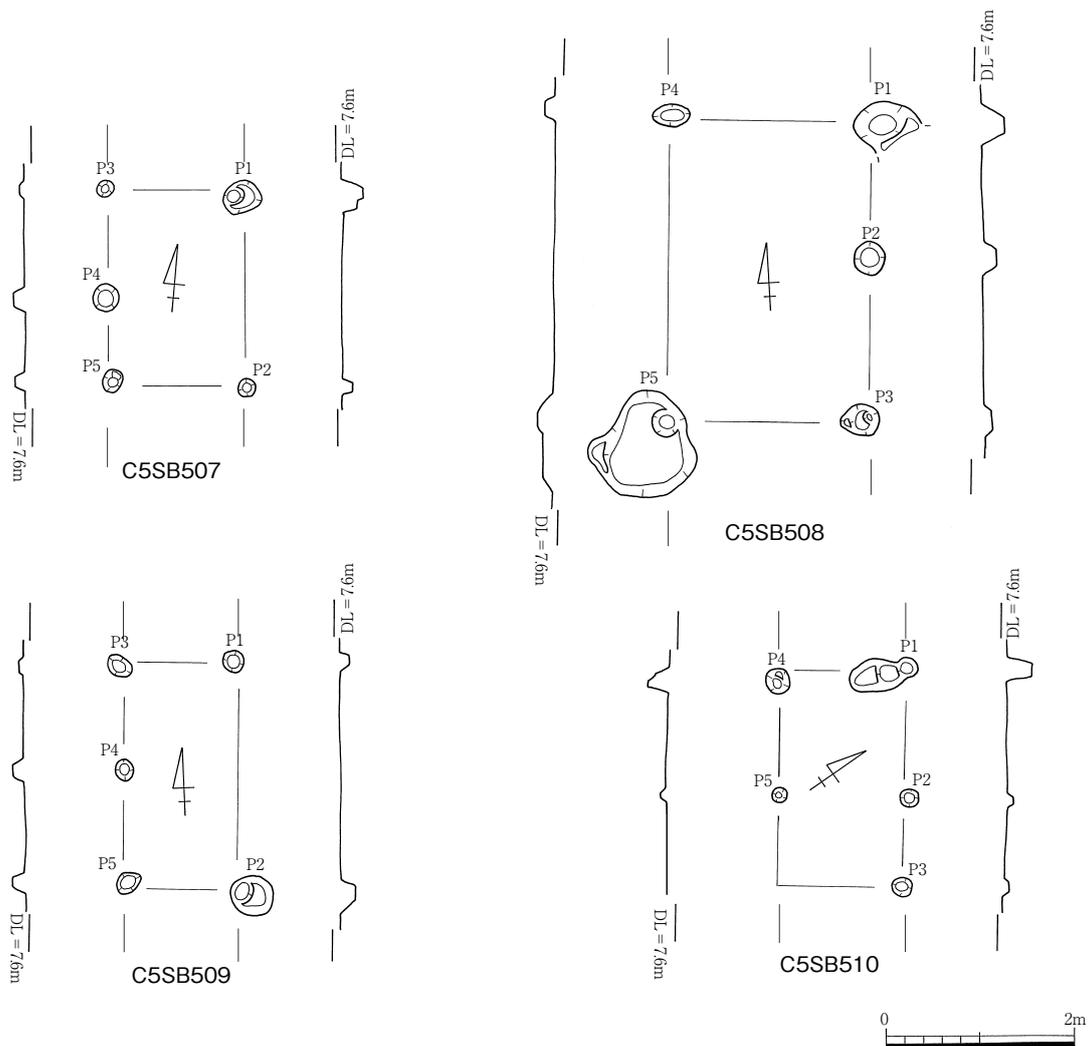
柱間寸法：梁間2.11m 桁行1.50~1.78m

柱穴数：5 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：弥生土器(甕)、軽石1点

所見：調査区南部で検出し、C5SB506・507・509、C5SK529と切り合う。先後関係は不明である。柱穴は直径22~58cm、深さ9~23cmを測る。P1~3で弥生土器が出土しているが、詳しい時期の特定は困難である。SB507、509とほぼ同じ軸方向を持つことから、建て替えの可能性も考えられる。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。



C5-3 図 C5SB507~510

C5SB509(C5-3 図)

時期；弥生 **棟方向**；N-1°-E

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 1.19m×桁行 2.39m **面積**；2.84㎡

柱間寸法；梁間 1.19m 桁行 1.03~1.36m

柱穴数；5 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器、焼土塊

所見；調査区南部で検出し、C5SB506~508 と切り合う。先後関係は不明である。柱穴は直径 20~24cm、深さは 8~16cm を測る。比較的小規模な掘立柱建物跡である。P2・4・5 から遺物が出土したが、いずれも弥生土器細片のため時期特定には至らなかった。出土遺物のうち、復元図示できるものはない。

C5SB510(C5-3 図)

時期；弥生 **棟方向**；N-53°-W

規模；梁間 1 間×桁行 2 間 梁間 1.36m×桁行 2.31m **面積**；2.86㎡

柱間寸法；梁間 1.36m 桁行 0.89~1.33m

柱穴数；5 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南部で検出し、C5SB506 と切り合う。先後関係は不明である。柱穴は直径 15~22cm、深さ 7~28cm を測る。C5SD504 にほぼ沿った棟方向である。P3・4 から僅少であるが弥生時代の土器細片が出土した。時期は不明である。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

(2) 土坑

C5区で検出した土坑は38基である。そのうち弥生時代の土坑とみられるのは20基である。弥生時代の土坑は前期溝2(C5SD501)、前期溝3(C5SD504)周辺部で多く検出した。特に前期環濠集落の中心部に近い前期溝2付近に集中する傾向がある。土坑の切り合いは少なく、全体的に残存状態は悪い。土坑の主軸方向に規則性はみられないようである。

出土遺物はC5SK511のように多量に出土する例もみられるが、ほとんどは少量の出土にとどまる。前期土坑を中心にチャート製品及び剥片、チップなども検出された。

またC5区で検出した近世及び時期不明の土坑については、新たに別章を設けず、弥生時代の土坑一覧表内での報告に留めた。

C5SK509(C5-4 図)

時期；弥生Ⅱ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-53°-W

規模；1.56m×1.14m **深さ**；19cm **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト主体

付属遺構；ピット5個 **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕)、チャート剥片類

所見；調査区北部で検出した土坑で、隅丸方形を呈する。深度は19cmを測り、本調査区の中では比較的残りが良い。基底面からは5個のピットを検出した。これが切り合いによるものか、C5SK509に付属するものかは不明である。遺物の出土量は少なく、細片が多い。チャートの剥片が少量出土している。

出土遺物には弥生時代前期の甕もみられるが、貼付口縁や、頸部に扁平刻目突帯をめぐらす壺細片が出土していることから、Ⅱ様式には廃絶された土坑とみられる。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SK510(C5-5 図)

時期；弥生Ⅴ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-88°-W

規模；1.37m×1.08m **深さ**；12cm **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト、炭化物若干入る

付属遺構；— **機能**；—

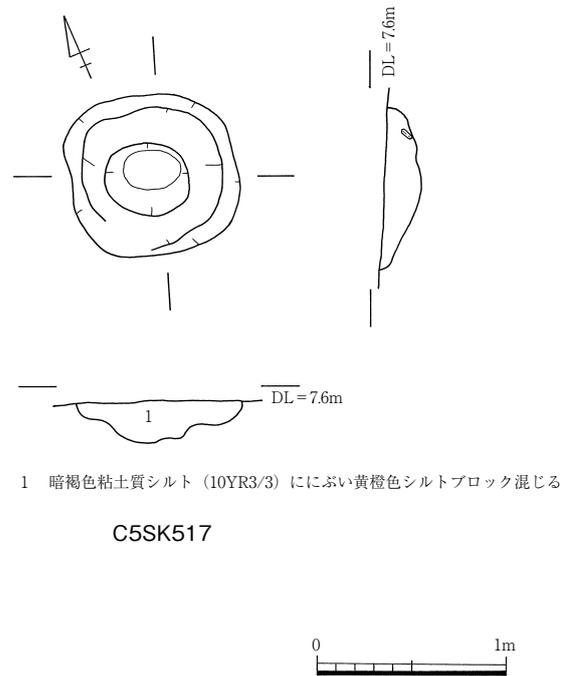
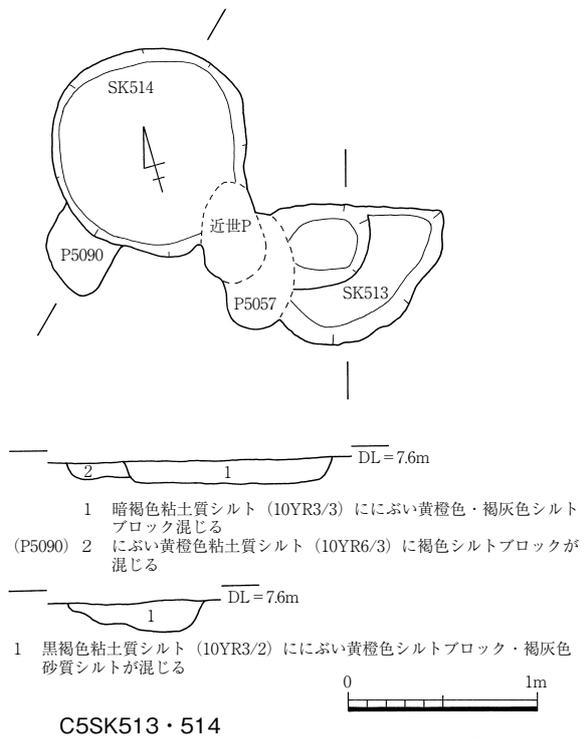
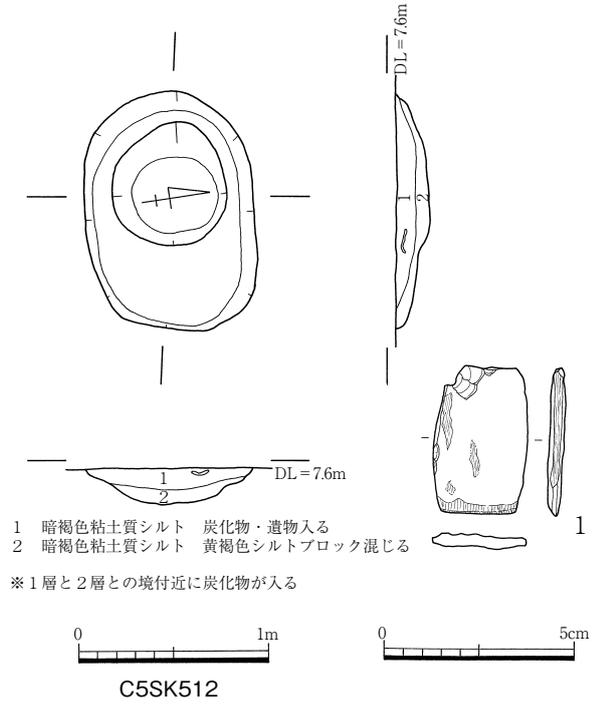
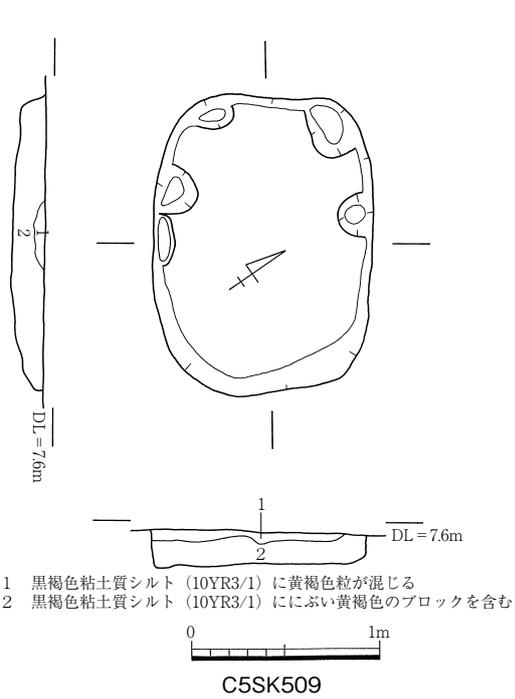
出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢)

所見；調査区北部で検出した土坑で、C5SK511を切る。遺物の出土は少量にとどまり、細片である。

出土遺物のうち復元図示できたのは1点にとどまる。10は後期の鉢の底部である。SK510出土土器の主体は弥生前期であるため、混入の可能性も考えられるが、遺物が僅少のため正確な遺構廃棄の時期は不明である。

C5-2表 C5区土坑一覧表

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
C5SK507	楕円形	皿状	1.14	0.82	7	N-36°-E	黒褐色シルト主体。褐色シルト混じる。		弥生	
C5SK508	方形	皿状	1.19	1.13	6	N-27°-E	暗褐色粘土質シルト主体	P5001に切られる	弥生?	
C5SK509	隅丸方形	箱型	1.56	1.14	19	N-53°-W	黒褐色粘土質シルト主体。にぶい黄褐色シルトブロック混じる。		弥生前期末-中期	
C5SK510	隅丸方形	皿状	1.37	1.08	12	N-88°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	SK511を切る P5002に切られる	弥生V	
C5SK511	隅丸方形	U字状	1.53	1.03	24	N-55°-W	黒褐色シルト主体。炭化物混じる。	SK510・P5002に切られる	弥生I-2	
C5SK512	隅丸方形	U字状	1.25	0.88	18	N-85°-W	暗褐色粘土質シルト主体。炭化物・黄褐色シルトブロックが混じる。	ピット1個に切られる	弥生前期?	
C5SK513	不整形	逆台形	0.86	0.72	17	N-86°-E	黒褐色粘土質シルト主体。にぶい黄褐色・褐色シルトが混じる。	P5057に切られる	弥生	
C5SK514	円形	皿状	1.1	1.02	13	N-2°-E	暗褐色粘土質シルト主体。にぶい黄褐色・褐色シルトブロック混じる。	P5090を切る	弥生	
C5SK517	円形	U字状	0.88	0.85	22	—	暗褐色粘土質シルト主体。にぶい黄褐色シルトブロック混じる。		弥生	
C5SK518	楕円形	皿状	1.1	0.82	14	N-35°-W	暗褐色シルト主体。黄褐色シルト混じる。		弥生I-2~3	
C5SK522	円形	皿状	1.0	0.96	10	—	黒褐色シルト。炭化物を少量含む。	ピット1個	弥生前期末-中期	
C5SK523	隅丸方形	U字状	1.56	0.86	32	N-40°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色シルト混じる。	P5031・5147に切られる	弥生I-2~3	
C5SK524	隅丸方形	U字状	1.63	1.10	35	N-65°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	P5025を切る	弥生III	
C5SK525	隅丸方形	U字状	1.6	0.9	13	N-17°-E	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトをブロック・炭化物混じる。		弥生I-2~3	東部分は調査区外
C5SK526	楕円形	U字状	1.27	0.87	21	N-1°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	P5123に切られる	弥生V	
C5SK527	楕円形	皿状	1.91	1.11	14	N-60°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色ブロック・多量の焼土混じる	P5082に切られる	弥生	
C5SK528	不明	不明	(0.76)	(0.36)	18.7	—	黒褐色シルト主体。黄褐色ブロックが混じる。	SD502に切られる	弥生?	
C5SK529	楕円形	皿状	1.1	0.92	11	N-0°	黒褐色(10YR3/1)シルトに黄褐色と褐色が混じる。	P5071に切られる	弥生I-2~3?	
C5SK530	不明	皿状	(0.85)	0.92	9.5	N-69°-W	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	SK519・537に切られる	弥生I-2~3?	
C5SK532	不明	皿状	1.21	(0.62)	3~8	—	黒褐色シルト		弥生?	西半部は攪乱
C5SK534	円形	逆台形	0.66	0.62	14	—	黒褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	SD504を切る	弥生?	
C5SK538	方形	逆台形	1.86	1.3	53	N-65°-W	暗褐色粘土質シルト主体。にぶい黄褐色シルトブロック多量に含む。	SD501を切る	弥生	
C5SK501	楕円形	U字状	1.1	0.54	10	N-25°-E	黄褐色シルト主体。灰黄褐色シルトブロック・マンガン粒グラム混じる。		近世	
C5SK502	隅丸方形	逆台形	1.27	0.95	33	N-20°-E	褐色シルト主体。黄褐色シルト混じる。	SK503に切られる	近世	近世墓
C5SK503	不明	皿状	(0.86)	(0.50)	8	—	褐色シルト主体。黄褐色シルト混じる。	SK502を切る SK504に切られる	近世	
C5SK504	方形	皿状	1.41	1.10	19	N-76°-W	褐色シルト主体。マンガン粒混じる。	SK503・SD501を切る	近世	
C5SK505	円形	逆台形	1.45	1.44	75	N-65°-W	にぶい黄褐色粘土質シルト主体。暗褐色シルトブロック混じる。	SD501を切る	近世	
C5SK506	円形	逆台形	1.16	1.12	38	—	にぶい黄褐色粘土質シルト主体。暗褐色シルトブロック混じる。	P5156を切る	近世	
C5SK515	隅丸方形	皿状	1.57	0.98	9	N-14°-E	灰黄色シルト主体	SK516を切る	近世	
C5SK516	楕円形	U字状	2.31	0.77	28	N-73°-W	黄褐色シルト主体。褐色・暗褐色シルトブロック混じる。	SK515に切られる	近世?	
C5SK519	隅丸方形	皿状	4.24	1.36	17	N-13°-E	褐色シルト主体。黄褐色シルトブロック混じる。	SK530・521を切る	近世	
C5SK520	隅丸方形	U字状	2.28	1.12	36	N-78°-W	黒褐色砂質シルト主体。褐色シルトブロック混じる。	P5063に切られる	近世	近世墓
C5SK521	不整形	皿状	(5.92)	2.8	12	N-77°-W	褐色シルト主体。暗褐色シルトブロック混じる。	SK519に切られる	近世	
C5SK531	方形	箱形	4.2	2.03	35	N-12°-E	明黄褐色粘土質シルト主体。褐色シルト・少量のにぶい黄褐色ブロック混じる。	SD501・P5139を切る	近世	
C5SK533	不明	箱型	(2.7)	2.4	29	N-19°-E	攪乱土	SD501を切る	近世	
C5SK535	不明	箱形	(1.7)	0.63	46	—	灰黄褐色粘土質シルト主体。黄褐色・黒褐色粘土質シルトブロック混じる。	P5050と切り合う SK537を切る	近世	攪乱のため東端部のみ残る
C5SK536	不明	不明	1.3	(0.64)	51	—	黄灰色シルト主体		近世	攪乱のため東端部のみ残る
C5SK537	不明	不明	1.64	不明	47	—	黄灰色シルト主体。褐色シルト混じる。	SK530を切る SK535に切られる	近世	



C5-4 図 C5SK509・512~514・517

C5SK511 (C5-5 図)

時期；弥生I-2~3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-55°-W

規模；1.53m×1.03m **深さ**；24cm **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色シルト主体、埋土1~2に炭化物入る

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺、甕、鉢、蓋)、有孔円盤1、磨製石鏃1、石斧1、叩石3、台石1、楔形石器1点、チャート剥片類

所見；調査区北部で検出した土坑で、C5SK510、SB503に切られる。遺構の残存状態は比較的良好で、埋土1を中心に遺物が出土した。出土した壺の中には、大型壺の口縁部が3点みられる。埋土3からも遺物は出土したが、細片が多く少量であった。埋土2は炭化物を多く含む層である。また砂岩の台石、叩石、チャート製の楔形石器及び剥片も出土している。

出土遺物のうち復元図示できたのは9点である。1は有段壺で口縁端部に沈線風に1条めぐらす。2は壺の胴部に上弦の重弧文を施す。3~6は甕である。上胴部に沈線をめぐらすもの、沈線の間列点文をめぐらすもの、無文のものがみられる。いずれも口縁端部は全面を刻む。7は有孔円盤である。8は頁岩製の磨製石鏃で、鏃身の断面は平坦で鏃は認められない。基部は欠損している。9は小型石斧で、両面に刃部を作り出す。頁岩製とみられる。

C5SK512 (C5-4 図)

時期；弥生前期？ **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-85°-W

規模；1.25m×0.88m **深さ**；18cm **断面形態**；U字状

埋土；暗褐色粘土質シルト主体、埋土1に炭化物入る

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器(壺)、石斧1、叩石1点

所見；調査区北西部で検出され、C5SK511の南に隣接する。断面形は浅いU字状を呈し、後世にかなりの削平を受けたことが窺える。埋土1と2の境には炭化物が多く入る。遺物は埋土1で若干出土したにとどまる。出土土器の胎土からみて、弥生時代前期に廃絶された土坑の可能性が高い。遺物は土器の他に叩石も出土している。

出土遺物のうち復元図示できたのは1点のみである。1は緑色片岩製の小型石斧である。基部は薄い剥片状で、両側面と刃部に加工が認められる。

C5SK513 (C5-4 図)

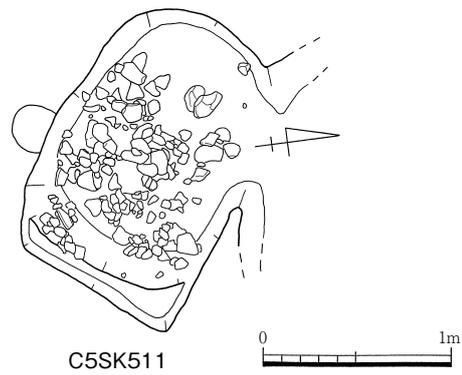
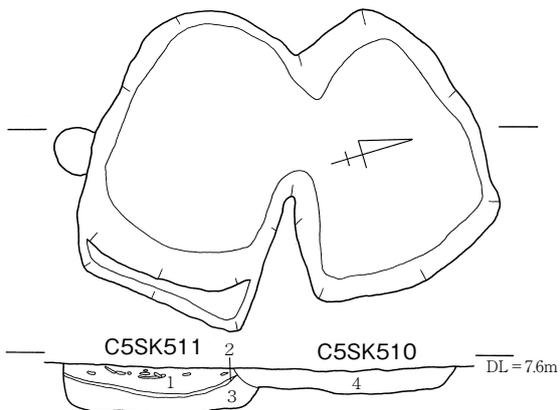
時期；弥生 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-86°-E

規模；0.86m×0.72m **深さ**；17cm **断面形態**；逆台形

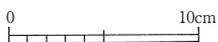
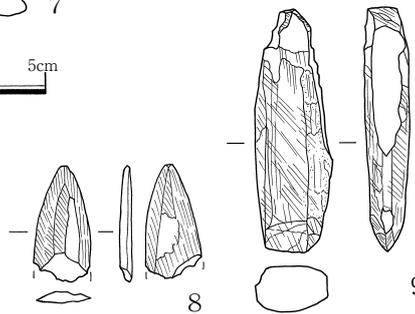
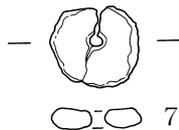
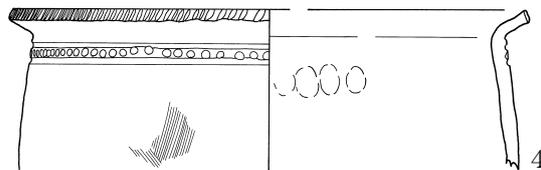
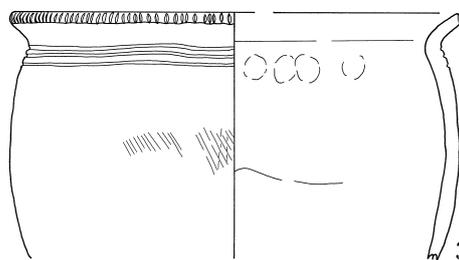
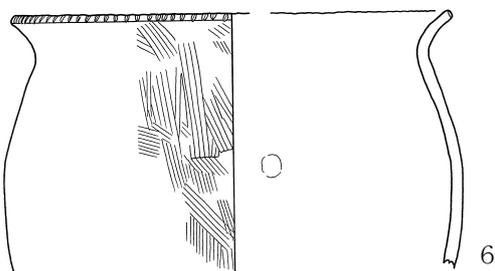
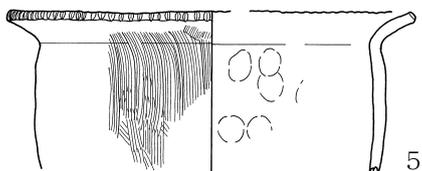
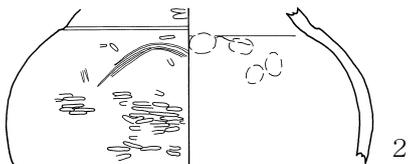
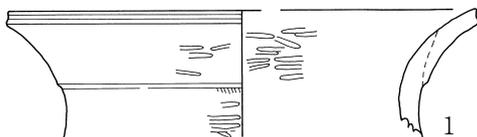
埋土；黒褐色粘土質シルト主体

付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；弥生土器



- SK511 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物・遺物入る
 2 黒色シルト (10YR2/1) 炭化物を含む
 3 黒褐色シルト (10YR2/2) わずかに炭化物・黄色シルトブロック・遺物混じる
 SK510 4 黒褐色シルト (10YR3/2) わずかに炭化物・遺物入る・黄色シルトブロック多量に入る



C5-5 ☒ C5SK510・511

所見：調査区北西部で検出した土坑で、C5SK512、514 と隣接する。P5057 に切られる。出土遺物は 6 点と僅少で、時期の特定は難しい。復元図示できるものはなかった。

C5SK514(C5-4 図)

時期：弥生 **形状**：— **主軸方向**：N-2°-E

規模：1.10m×1.02m **深さ**：13cm **断面形態**：逆台形

埋土：暗褐色粘土質シルト主体

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)

所見：調査区北西部で検出した土坑で、C5SK513 の西に位置する。P5090 を切る。遺構の残存状態は悪く、後世に著しい削平を受けたものとみられる。出土遺物は少量にとどまり、復元図示できるものはなかった。

C5SK517(C5-4 図)

時期：弥生 **形状**：— **主軸方向**：—

規模：0.88m×0.85m **深さ**：22cm **断面形態**：U字状

埋土：暗褐色粘土質シルト主体

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区北東部で検出した土坑である。土坑はテラスを持ち、中央部が一段下がる。他の遺構との切り合いはない。比較的残存状態は悪く、深さは 22cm を測る。出土遺物は弥生土器の細片が出土するにとどまり、詳しい時期の特定は困難である。遺物は復元図示できるものはなかった。

C5SK523(C5-6 図)

時期：弥生I-2 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-40°-W

規模：1.56m×0.86m **深さ**：32cm **断面形態**：U字状

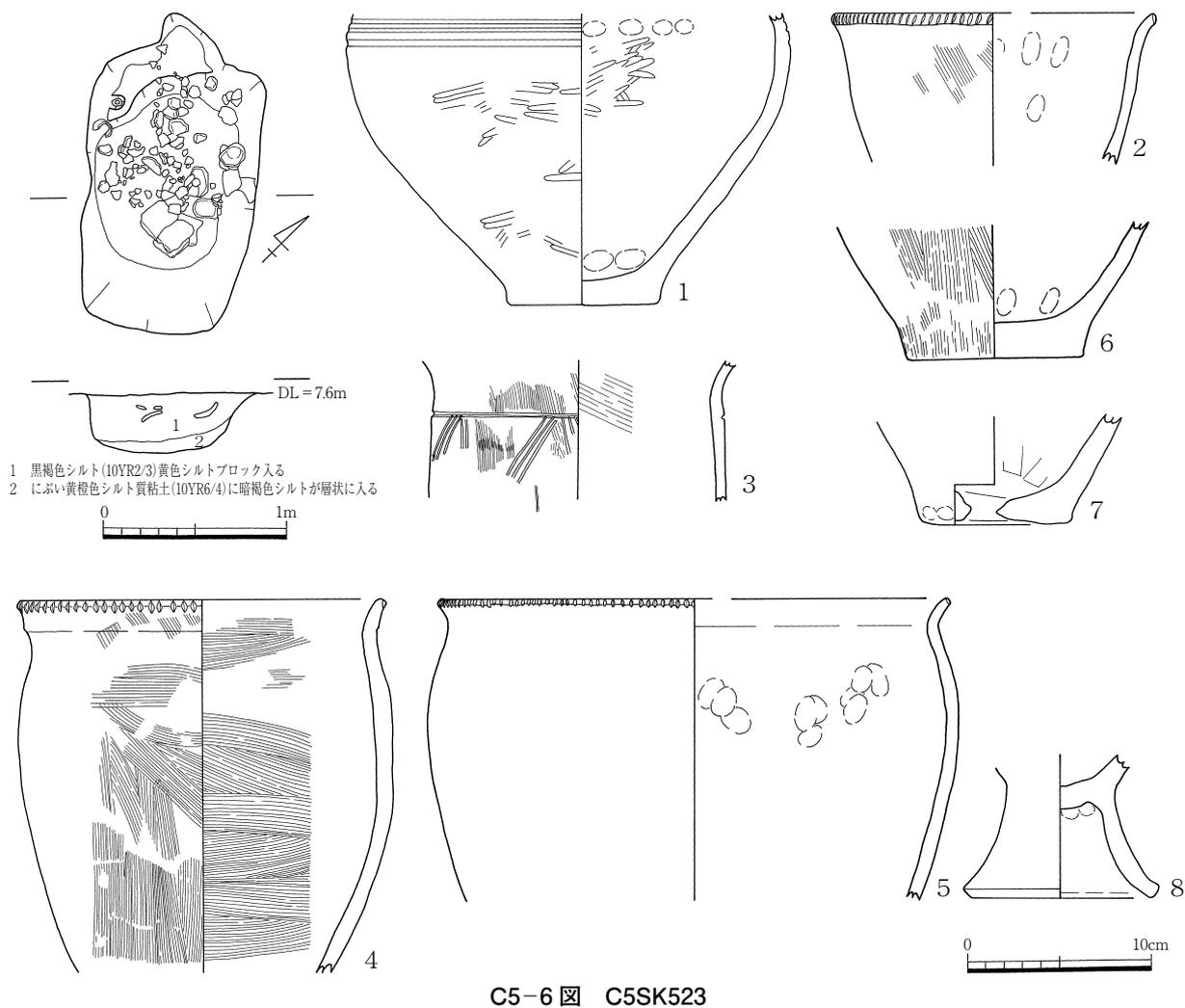
埋土：黒褐色シルト主体

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、甗、高杯)、叩石 1 点

所見：調査区中央部で検出した土坑で、P5031、P5147 に切られる。比較的遺構の残存状態は良好である。土坑の北東部はテラス状を呈する。遺物は埋土 1 上層で多く出土しており、土坑廃棄後に投棄されたものとみられる。出土した壺の中には大型壺の口縁部 1 点も含まれる。石器は叩石 1 点が出土した。

出土遺物のうち、復元図示できたのは 8 点である。1 は壺で胴部中位に篋描沈線が 3 条めぐり、2~6 は甕である。口縁端部は全面を刻む。胴部は無文のものと、3 のように胴部に複線山形文風に施文する。7 は甗、8 は高杯とみられる。



C5-6 図 C5SK523

C5SK524(C5-7 図)

時期：弥生Ⅲ **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-65°-W

規模：1.63m×1.10m **深さ**：35cm **断面形態**：逆台形

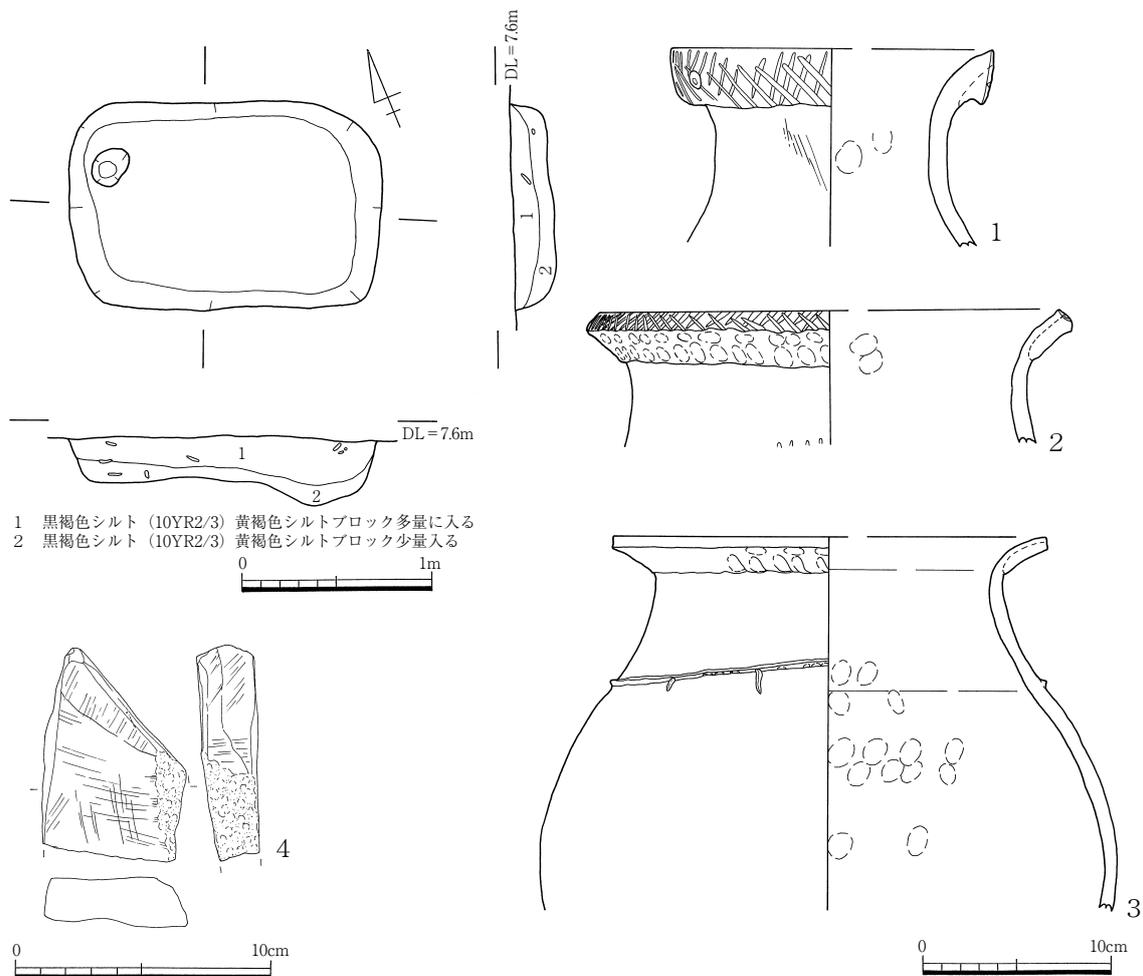
埋土：黒褐色シルト主体

付属遺構：ピット1個 **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、鉢、高杯)、叩石3、砥石1、太型蛤刃石斧未製品1、サヌカイト剥片

所見：調査区中央部で検出した土坑で、P5025を切る。遺物は主に埋土1から出土した。出土遺物には前期土器もみられるが、中期の壺の口縁部、胴部片などが一定量あることから、C5SK524はⅢ様式の可能性が高い。遺物は土器の他、太型蛤刃石斧の未製品、叩石、サヌカイト剥片、チャートチップが出土した。

出土遺物のうち、復元図示できたのは3点である。いずれも貼付口縁の壺で1、2は口縁端部に斜格子文を施す。3は上胴部に断面△形の小突帯を貼付する。



C5-7 図 C5SK524

C5SK526 (C5-8 図)

時期：弥生V 形状：楕円形 主軸方向：N-1°-W

規模：1.27m×0.87m 深さ：21cm 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト主体、埋土1に炭化物、焼土若干入る

付属遺構：— 機能：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、高杯)、叩石1点

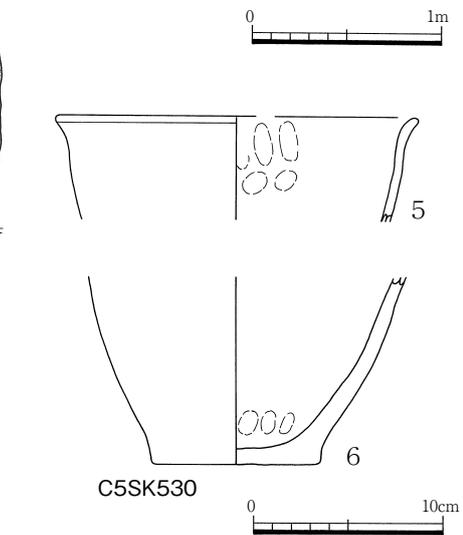
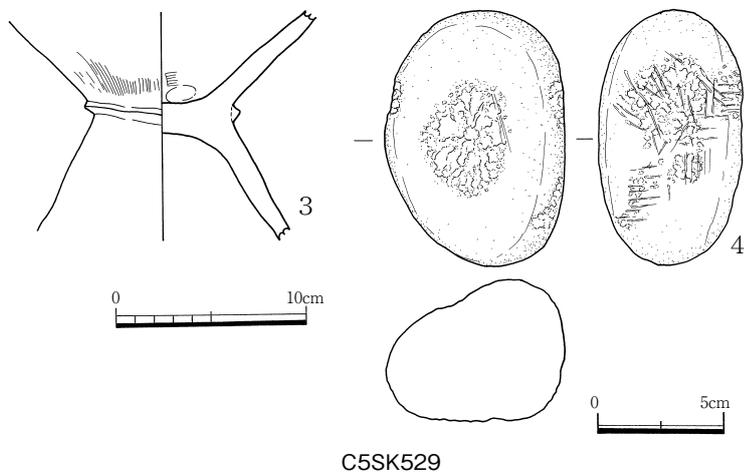
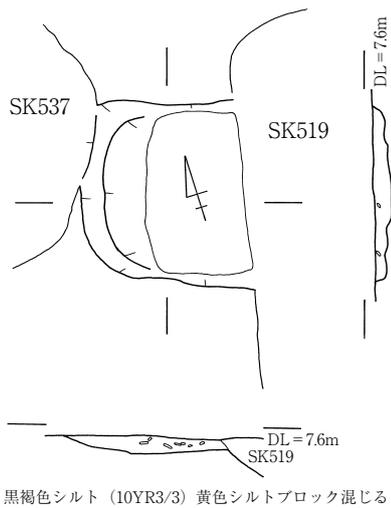
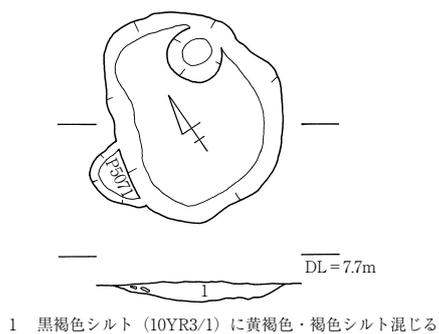
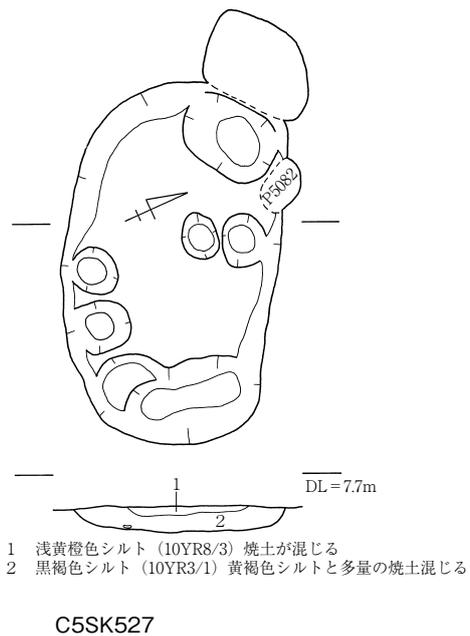
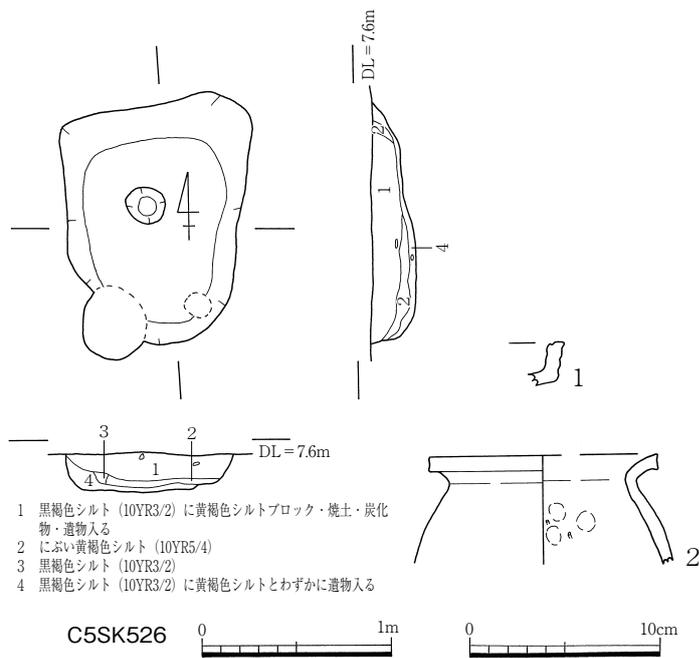
所見：調査区南部で検出した土坑で、P5123を切る。基底面でピット1個を検出したが、SK526の付属遺構であるのかは不明である。出土遺物は少量で細片のみであった。胴部片にΣ文、ハケ原体による綾杉文を施文するものが認められる。これらは後期の遺物とみられる。また叩石も1点出土した。

出土遺物のうち、2点が復元図示できた。1は凹線文の高杯、2は甕である。

C5SK527 (C5-8 図)

時期：弥生 形状：楕円形 主軸方向：N-60°-W

規模：1.91m×1.11m 深さ：14cm 断面形態：皿状



C5-8 図 C5SK526・527・529・530

埋土：黒褐色シルト主体、埋土 2 に焼土が多量に入る

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部で検出した土坑である。基底面でピット 1 個を検出したが、SK527 に付属するものかは不明である。土坑埋土には焼土が多量に入り、焼土塊も認められた。遺物は少量で、胴部片のみの出土であることから、時期の特定は困難である。出土遺物のうち、復元図示できるものはなかった。

C5SK529 (C5-8 図)

時期：弥生I-2~3? **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-0°

規模：1.10m×0.92m **深さ**：11cm **断面形態**：皿状

埋土：黒褐色シルト主体

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕、蓋)、チャート剥片類

所見：調査区南部、C5SD504 に隣接して検出した。SB508 に切られる。基底面でピット 1 個を検出したが、土坑に付属するものであるかは不明である。遺物の出土量は少なく、細片が多いため、時期の特定は困難である。またチャート剥片も少量だが検出された。

出土遺物のうち、復元図示できたのは 1 点である。3 は高杯である。杯部と脚部の間に、断面△形の突帯 1 条を貼付する。

C5SK530 (C5-8 図)

時期：弥生I-2~3? **形状**：隅丸方形? **主軸方向**：N-69°-W

規模：(0.85)m×0.92m **深さ**：10cm **断面形態**：皿状

埋土：黒褐色シルト主体

付属遺構：— **機能**：—

出土遺物：弥生土器(壺、甕)、叩石 1 点

所見：調査区中央部で検出した土坑で、土坑の西端、東半部を近世土坑(C5SK519、537)によって切られている。残存状態も非常に悪い。出土遺物は僅少で、壺・甕の胴~底部が出土している。また、砂岩の側縁部を打ち欠いた叩石も 1 点出土している。

出土遺物のうち、2 点が復元図示できた。5 は甕又は鉢で口縁端部を刻まない。

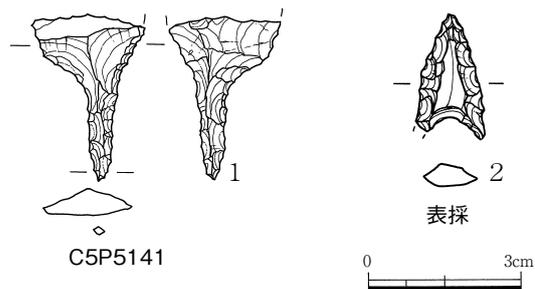
(3) 溝跡

調査区の北端と南端で、弥生時代前期の環濠2条を検出した。調査区北部で検出した前期溝2(C5SD501)はE2SD201、C1SD101と繋がる。また調査区南部で検出された前期溝3(C5SD504)はE2SD206と繋がる。これらの前期溝については、別分冊で詳しく述べることとする。

(4) ピット及び表採遺物(C5-9図)

C5区で検出されたピットのうち、弥生時代のものは約140個を数える。そのうち重要とみられる遺物が出土したピット、及び表採遺物について取り上げる。

C5P5141は調査区南端部、C5SD504の南で検出したピットである。直径約40cm、深さ21cmを測り、遺物平面形は円形である。埋土は黒褐色シルト主体で、サヌカイト製の打製石錐が1点(1)検出された。埋土の色調から弥生時代とみられるが、土器は全く出土していないため時期の特定は困難である。



C5-9図 C5P5141・表採遺物

2は表面採集されたサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式で左脚部が若干欠損しているものの、ほぼ完形である。

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん							
書名	田村遺跡群Ⅱ							
副書名	高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第2分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	前田光雄							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 たむら 田村 あざにしけんとう 字西見当 カリヤ他	39204	040234	33° 33' 8"	133° 39' 48"	平成8年8月 ～ 平成13年12月 C区調査期間 平成9年5月 ～ 平成13年12月	154,167㎡ C区総面積 12,395㎡ C区平面積 8,617㎡	高知空港 再拡張整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田村遺跡群 C区	集落跡	弥生時代 前期 中期～ 後期	竪穴住居跡12棟 土坑476基 溝4条	弥生土器 石器 鉄器		弥生時代前期環濠と 土坑群の拡がりを確認した。		
		中世 近世	土坑85基 ピット			中世～近世の集落の 拡がりを確認。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

第2分冊

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原 1437-1

電話 088-864-0671

発行日 2004年3月31日

印 刷 有限会社 西村謄写堂